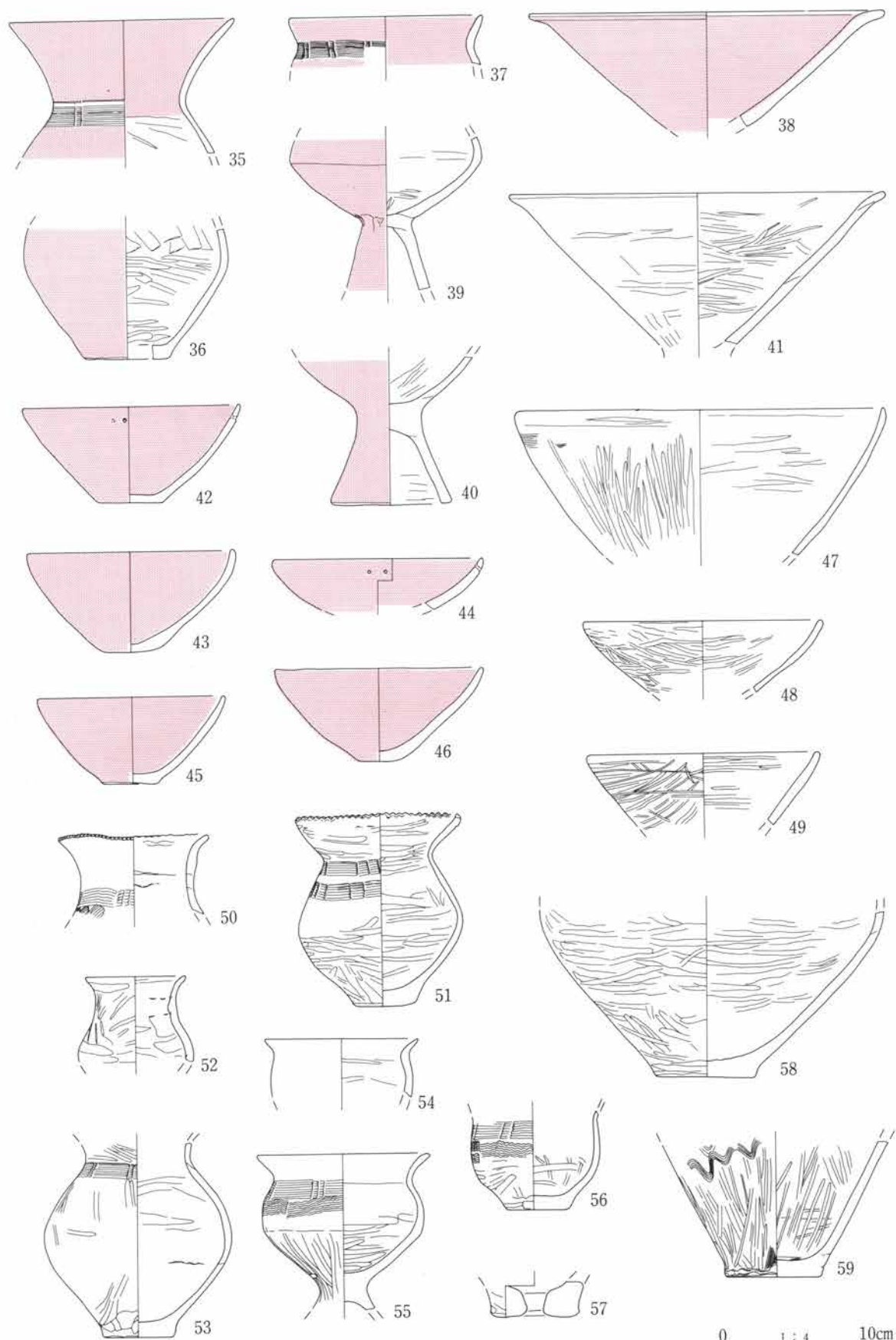
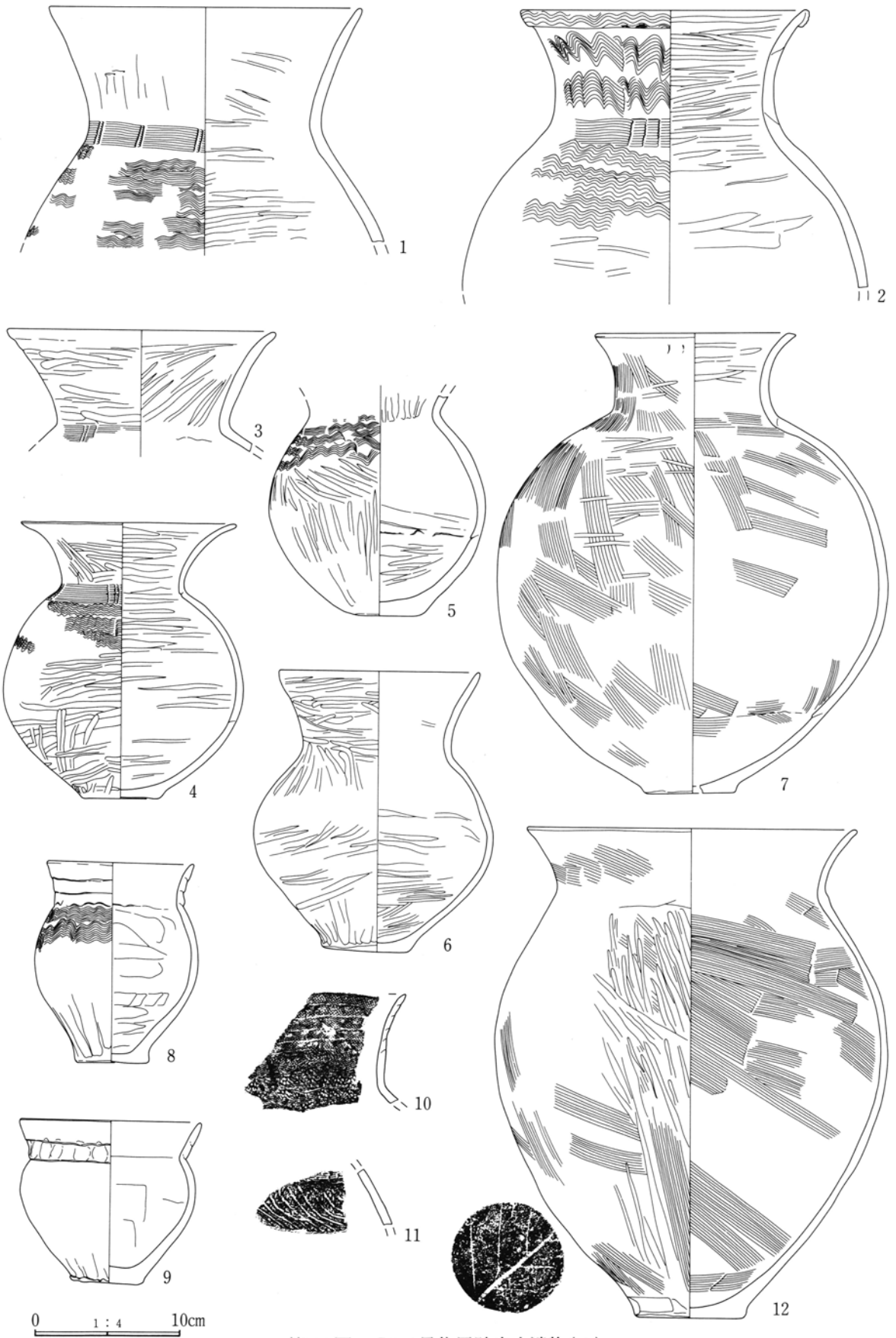


第498图 C104号住居跡出土遺物(3)

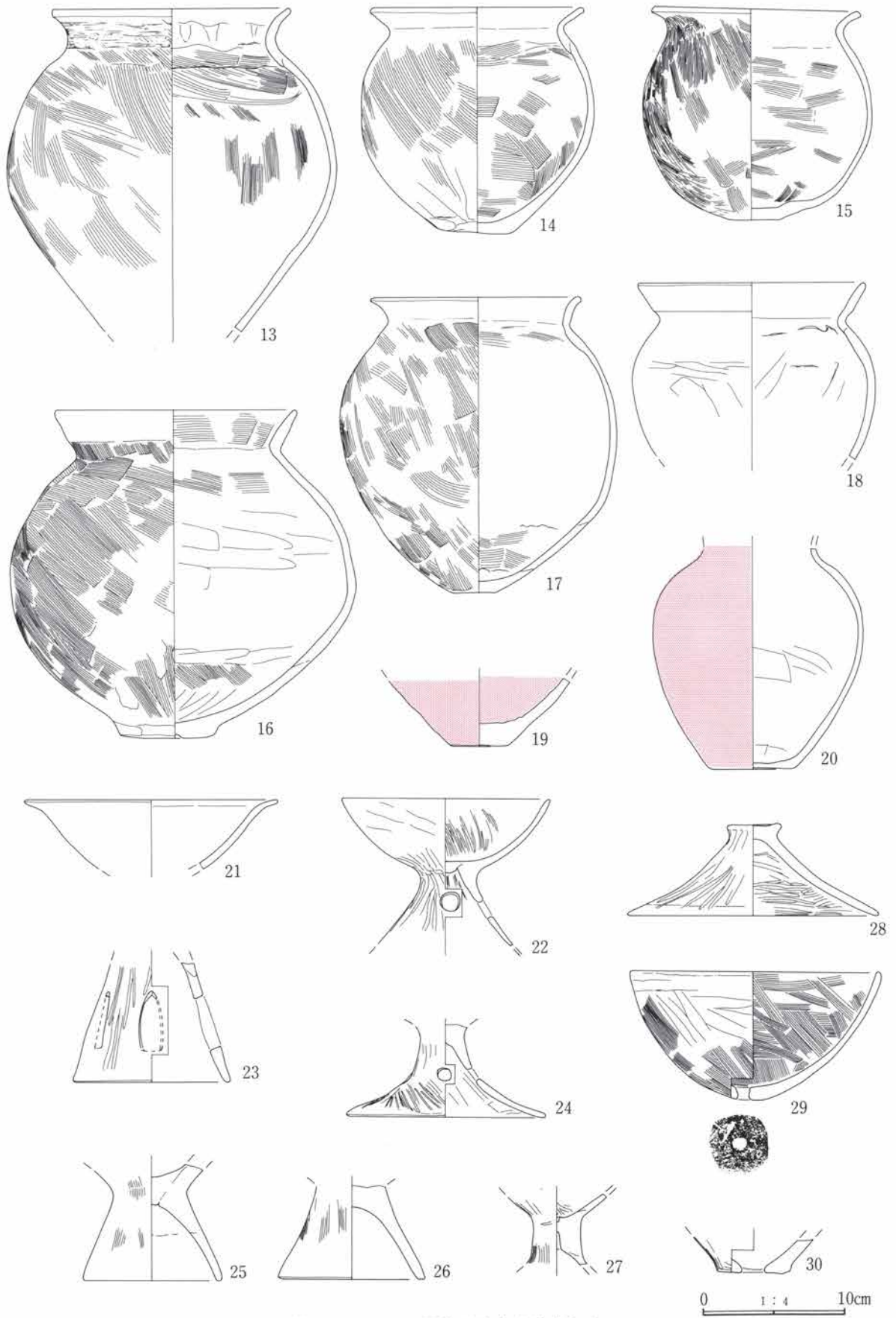
第4章 出土遺物



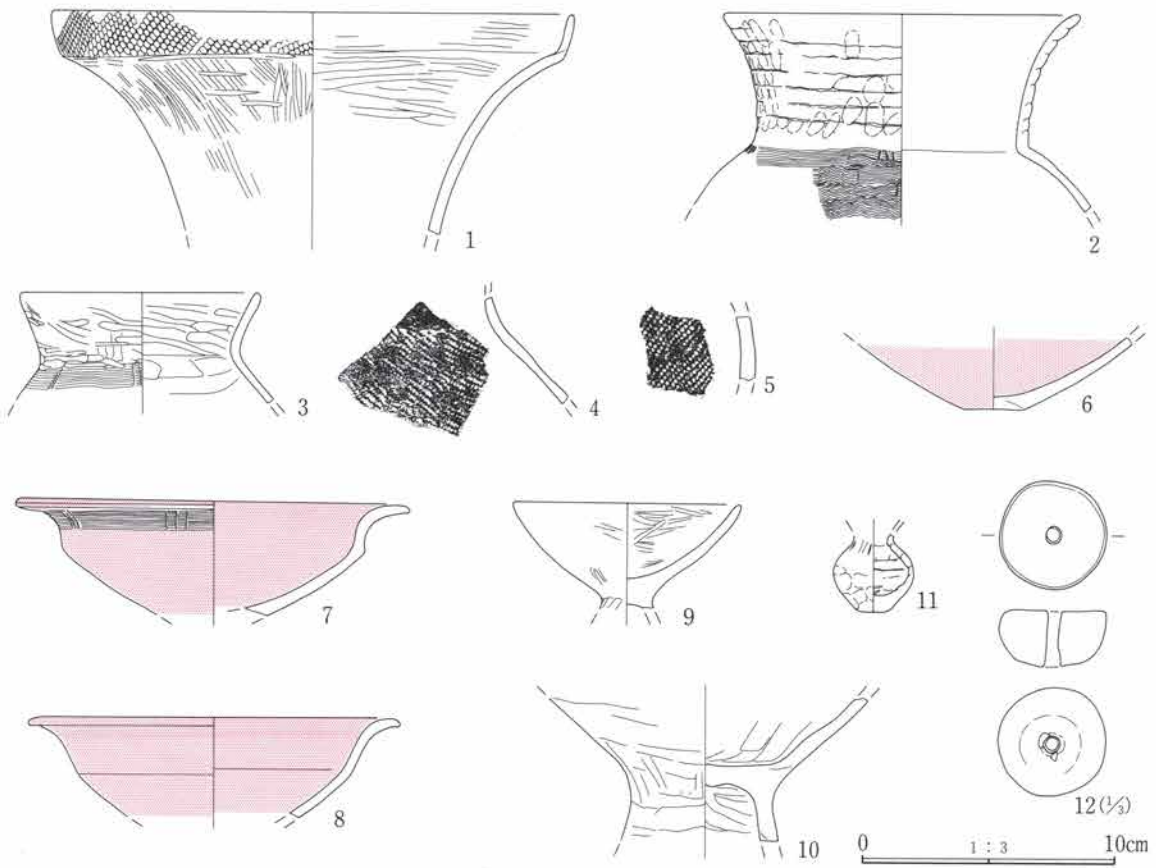
第499圖 C104号住居跡出土遺物(4)



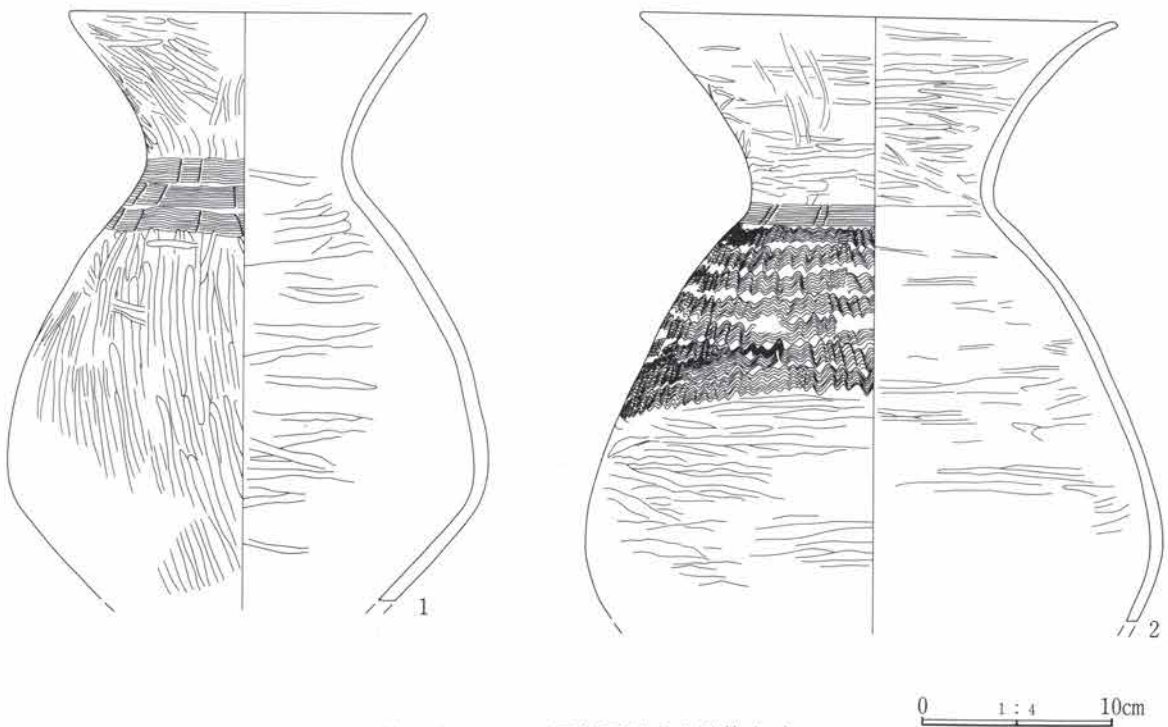
第500図 C108号住居跡出土遺物(1)



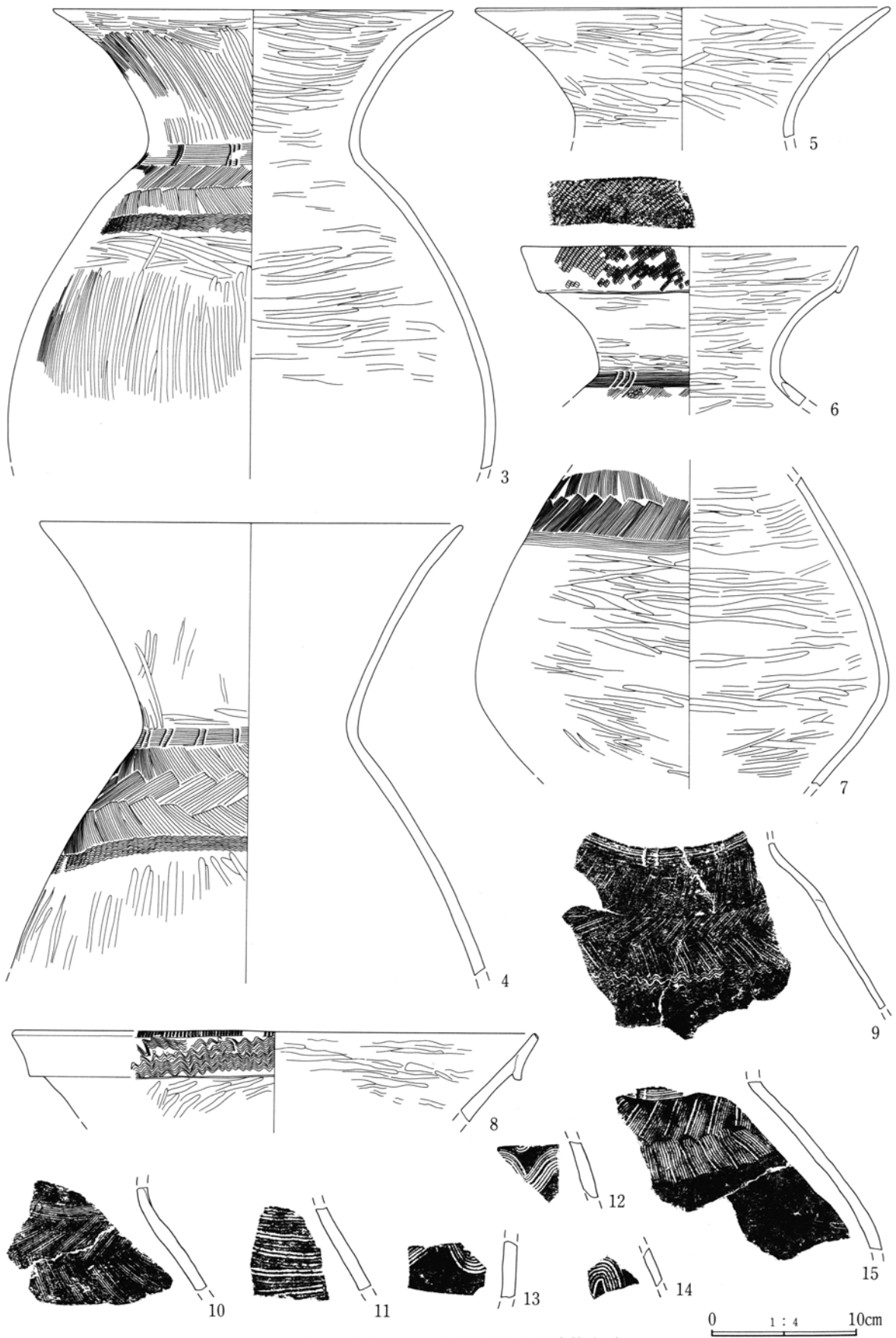
第501図 C108号住居跡出土遺物(2)



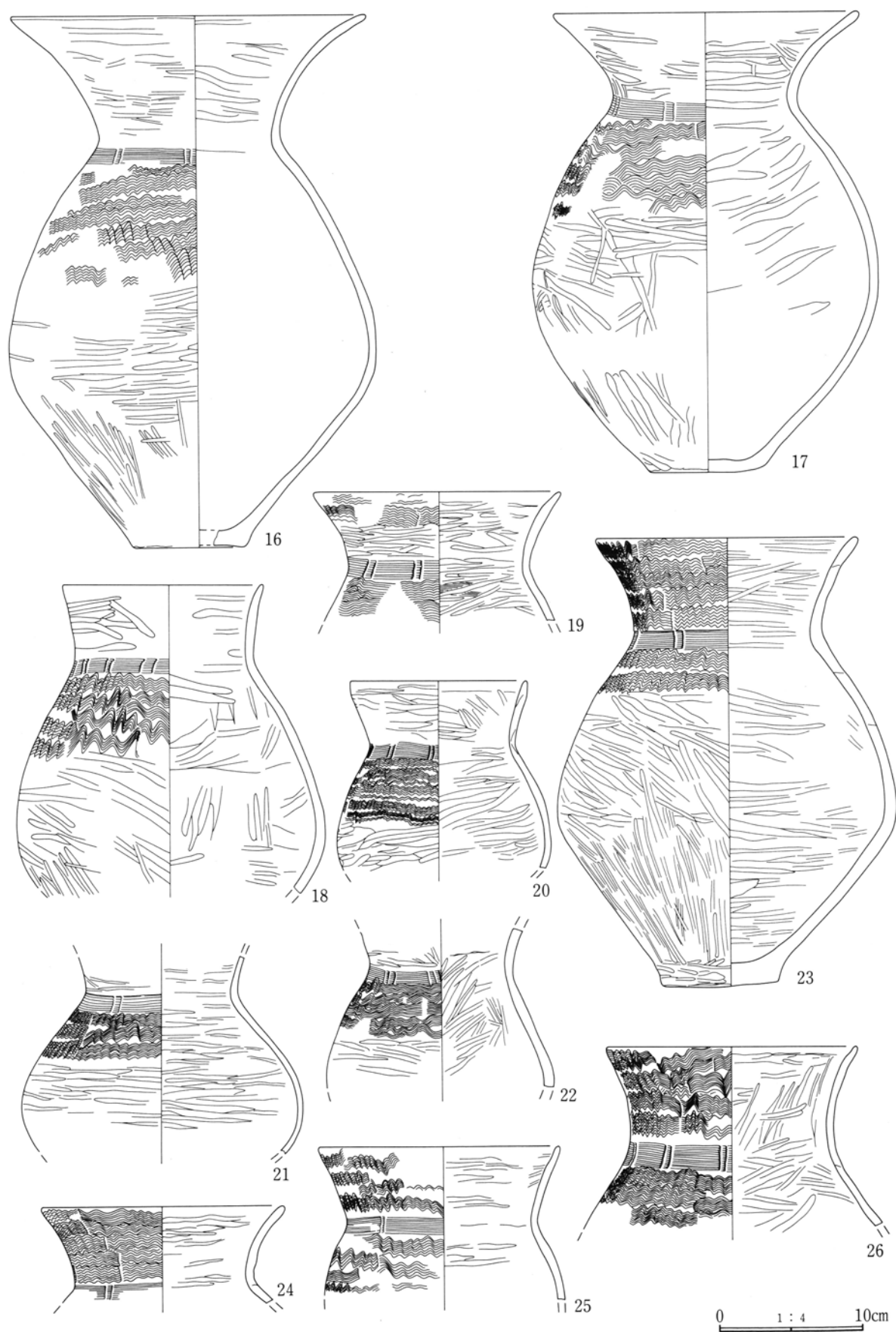
第502図 C114号住居跡出土遺物



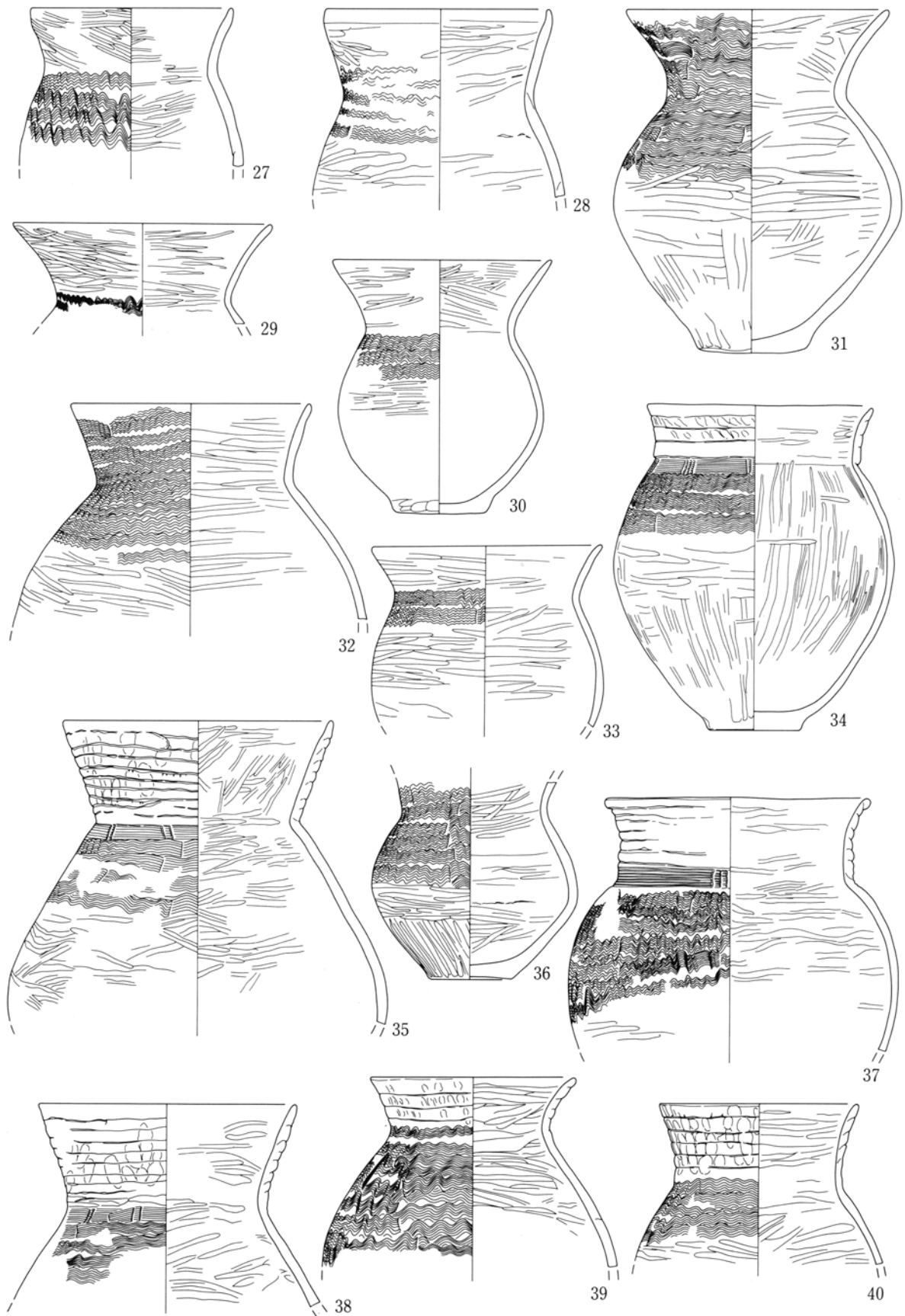
第503図 C116号住居跡出土遺物(1)



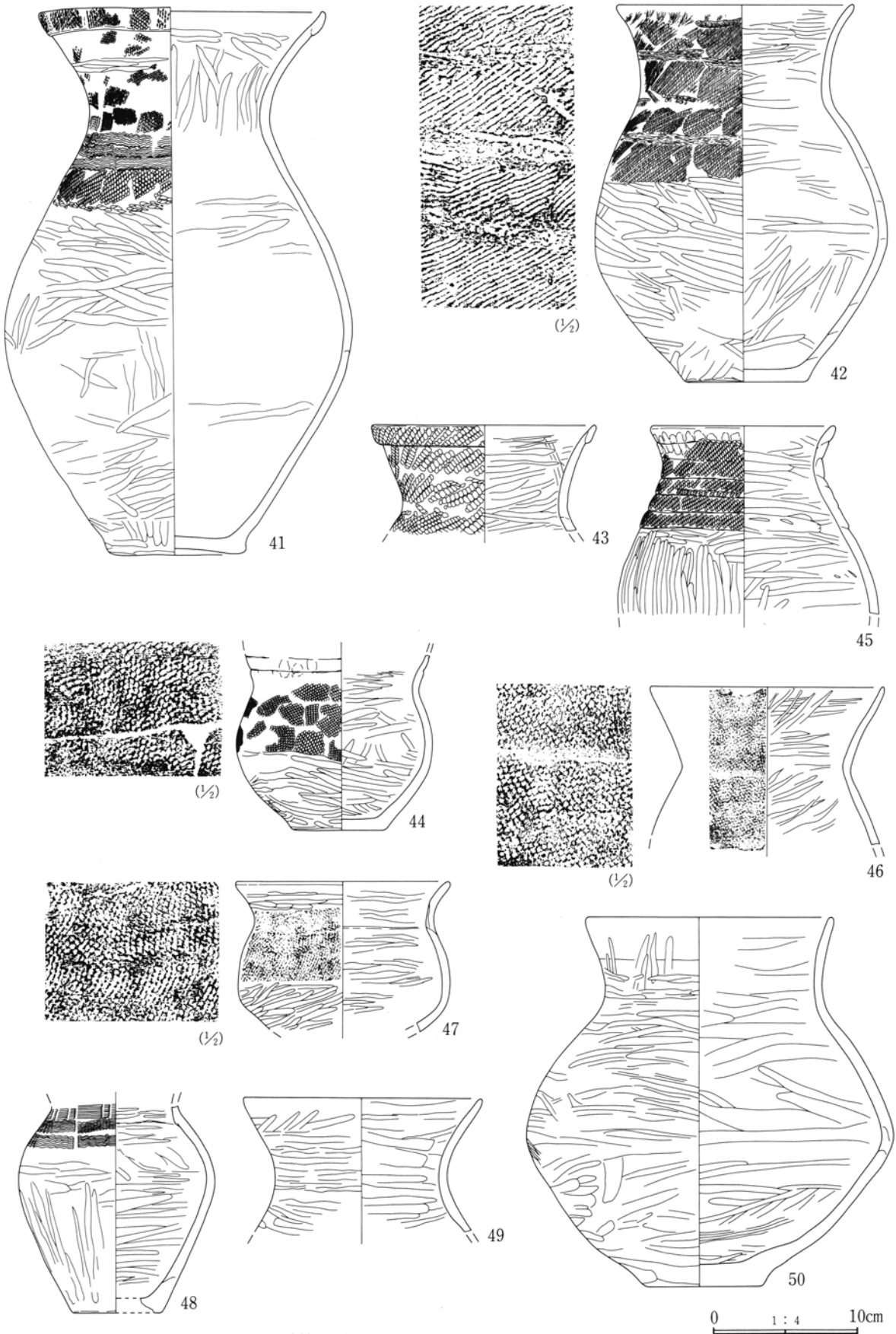
第504図 C116号住居跡出土遺物(2)



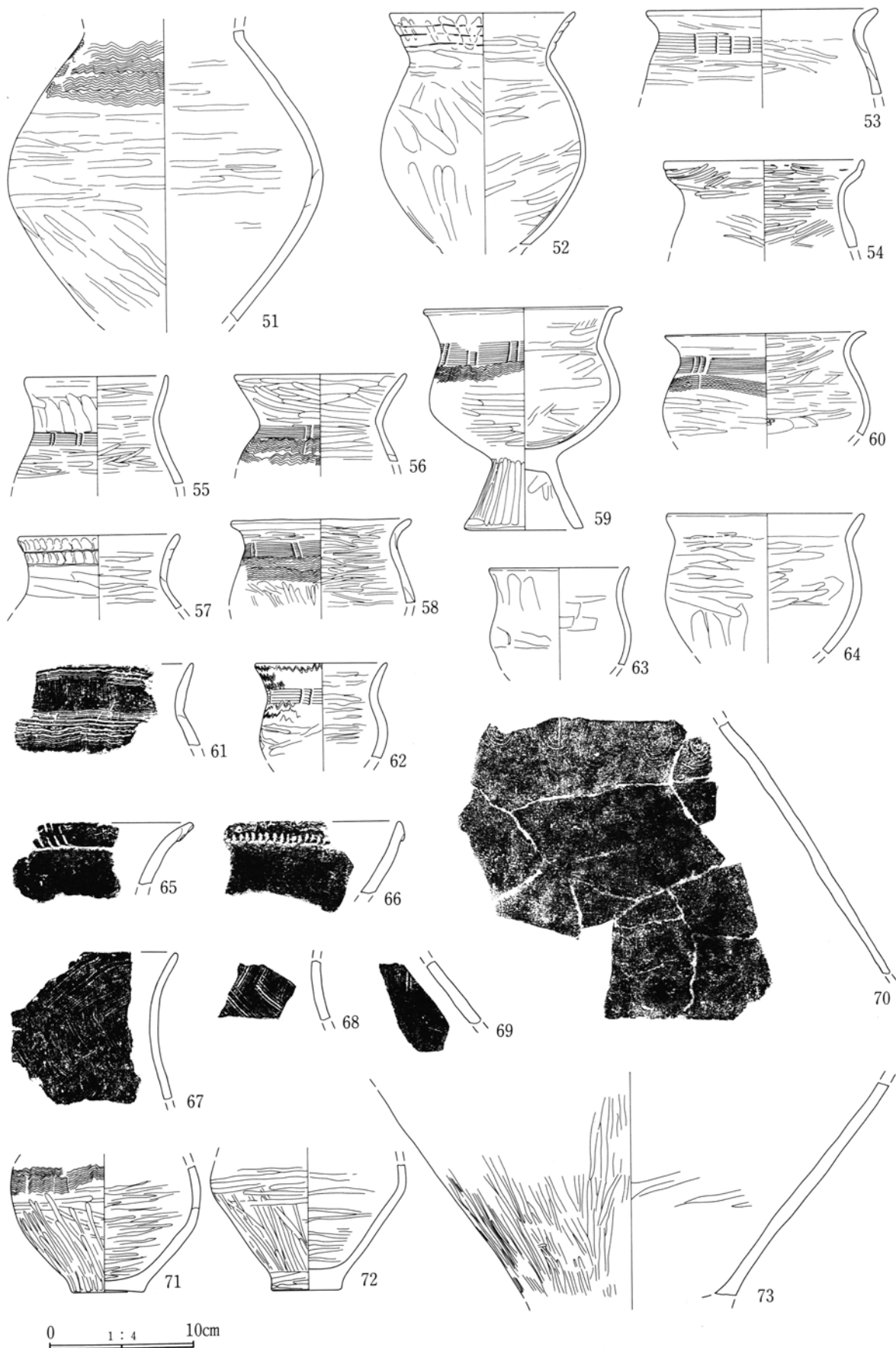
第505図 C116号住居跡出土遺物(3)



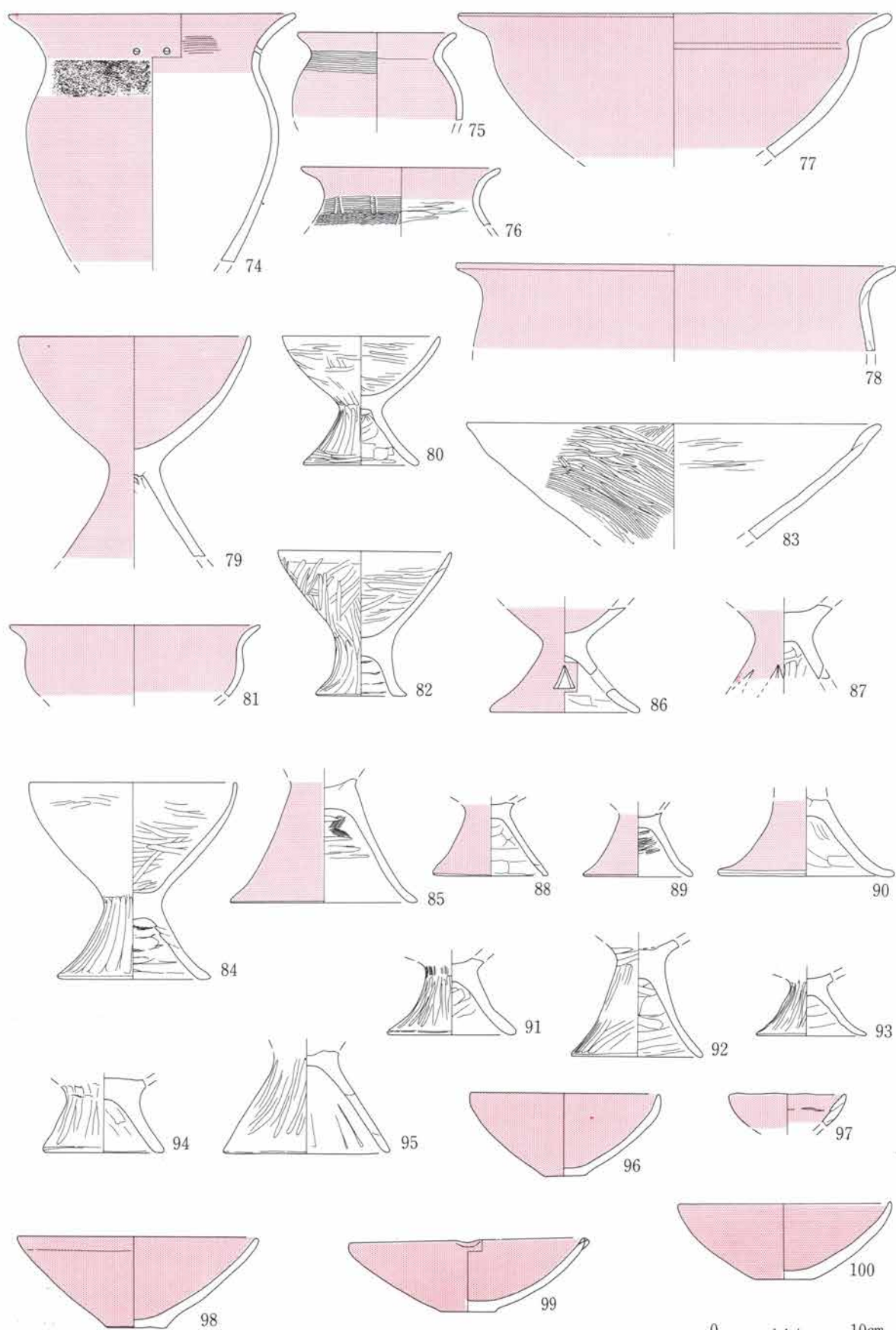
第506図 C116号住居跡出土遺物(4)



第507図 C116号住居跡出土遺物(5)

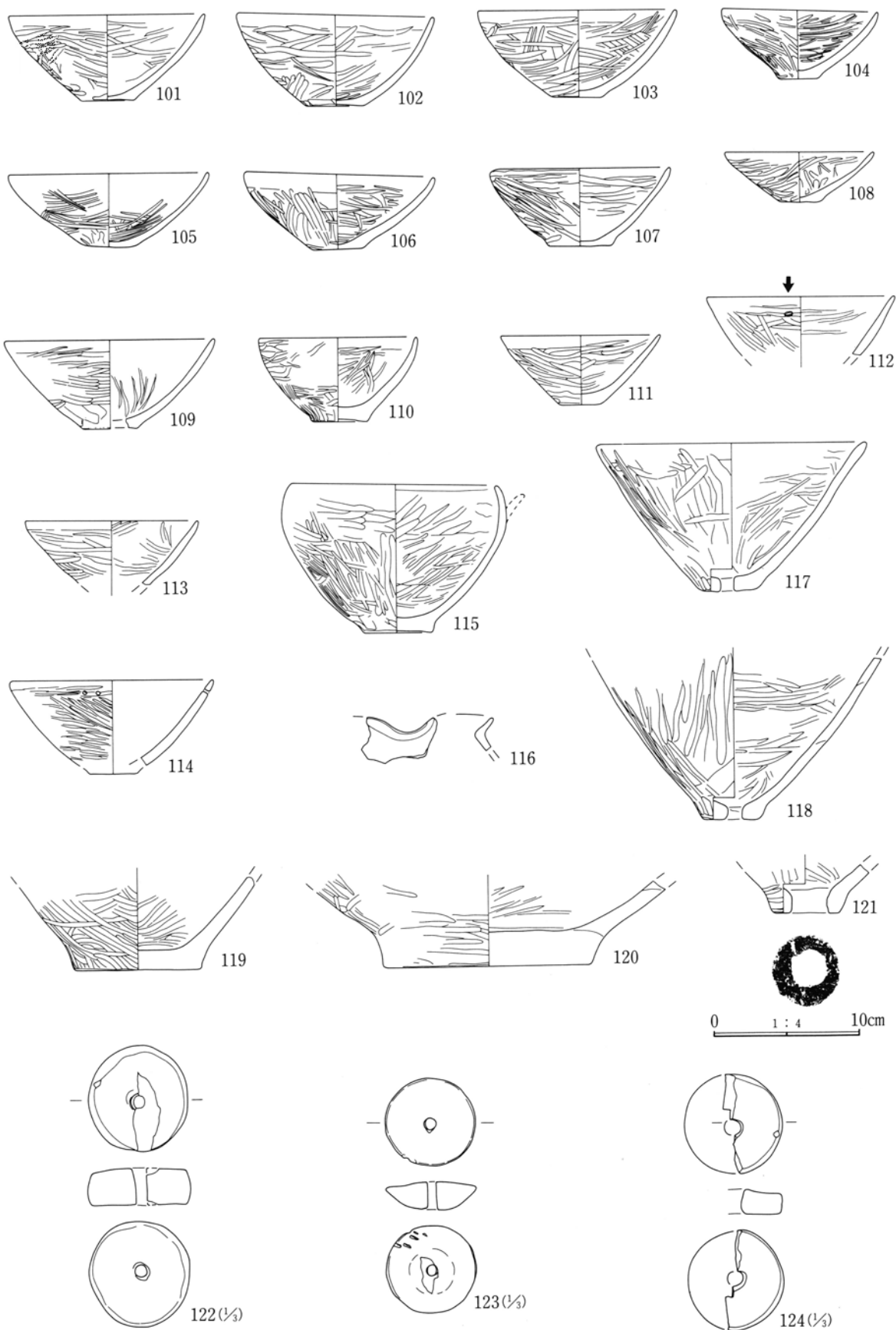


第508图 C116号住居跡出土遺物(6)

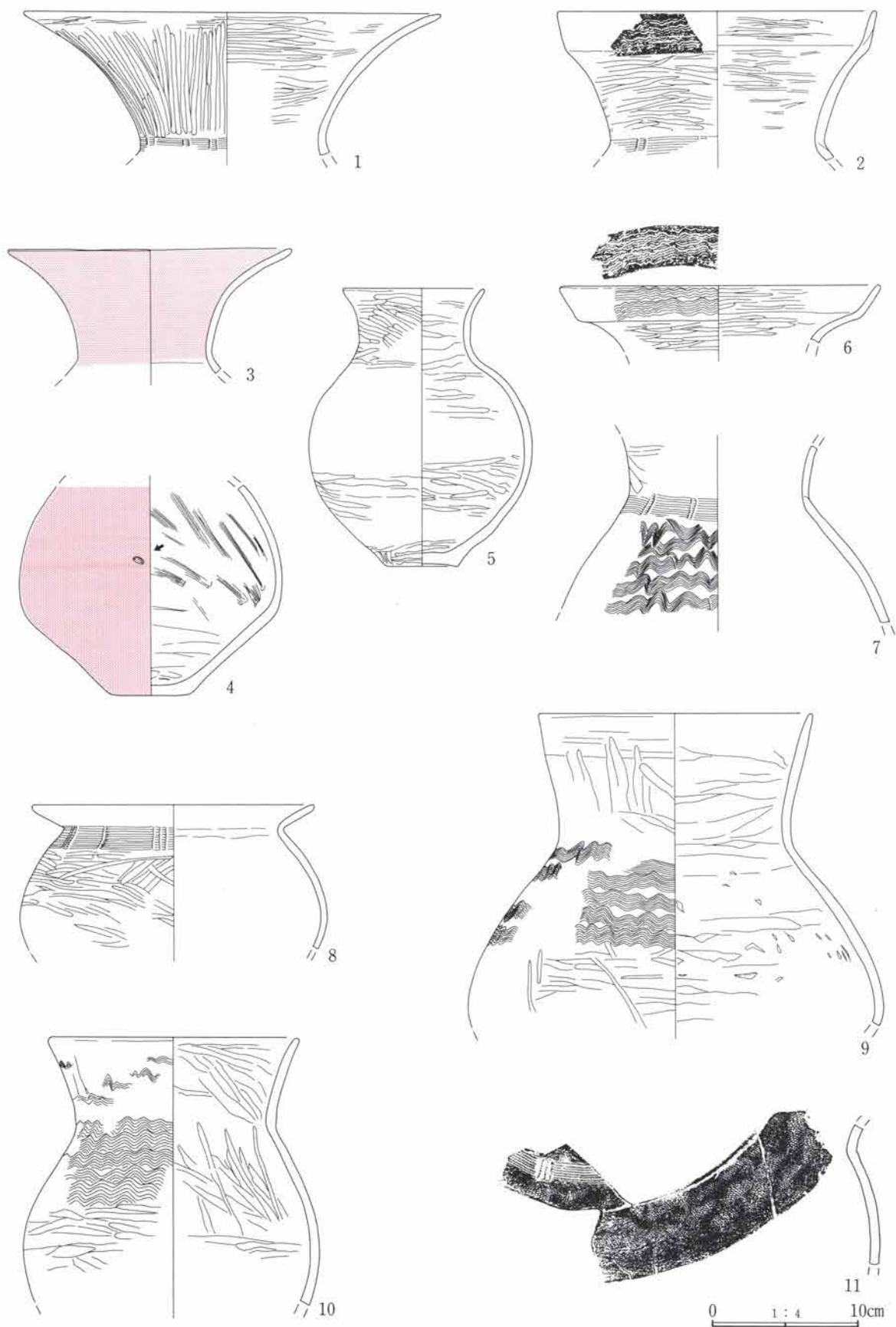


第509図 C116号住居跡出土遺物(7)

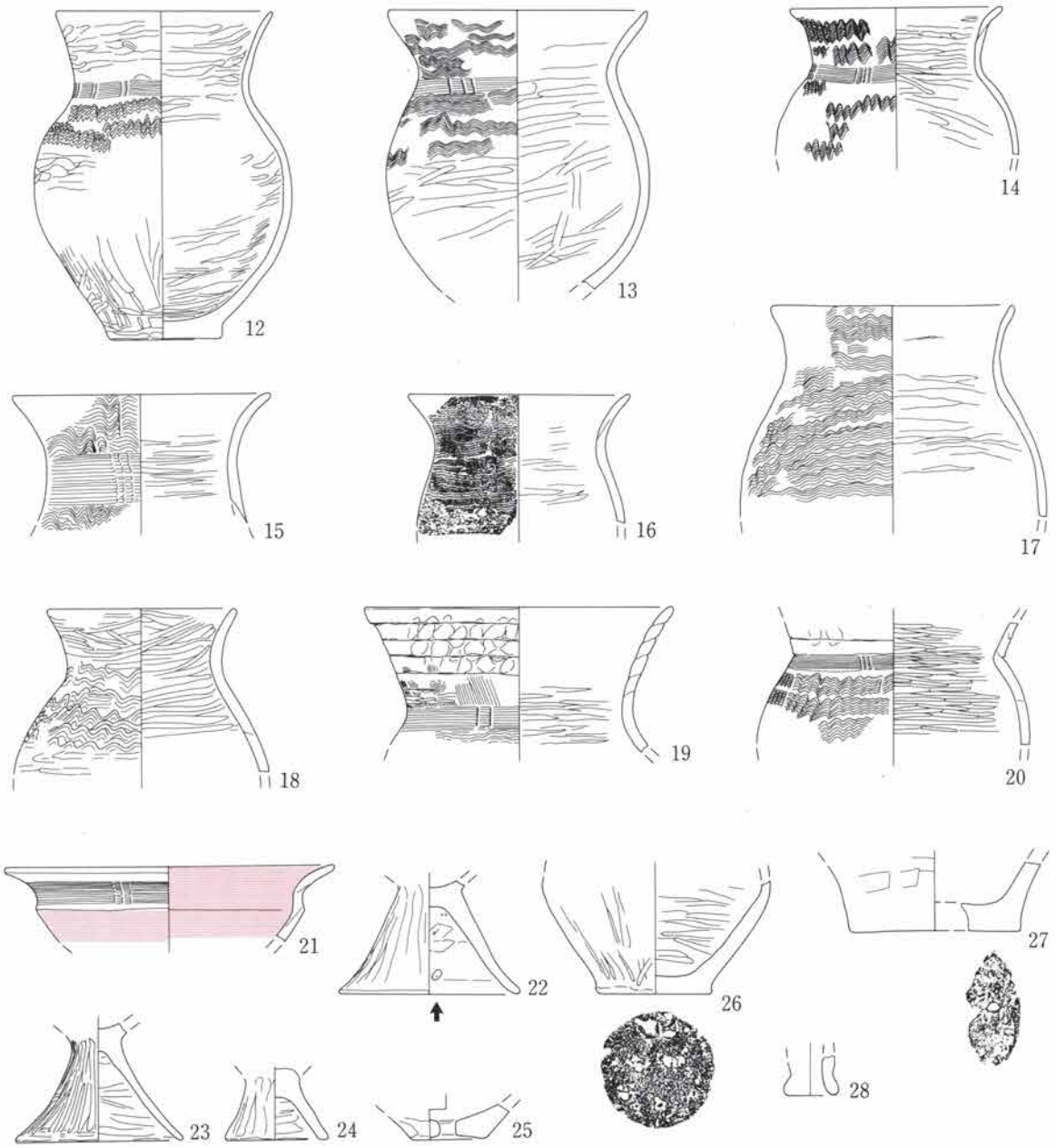
第4章 出土遺物



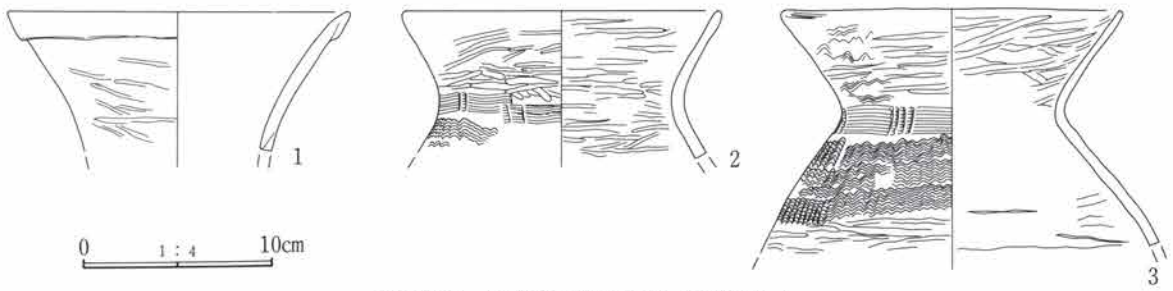
第510图 C116号住居跡出土遺物(8)



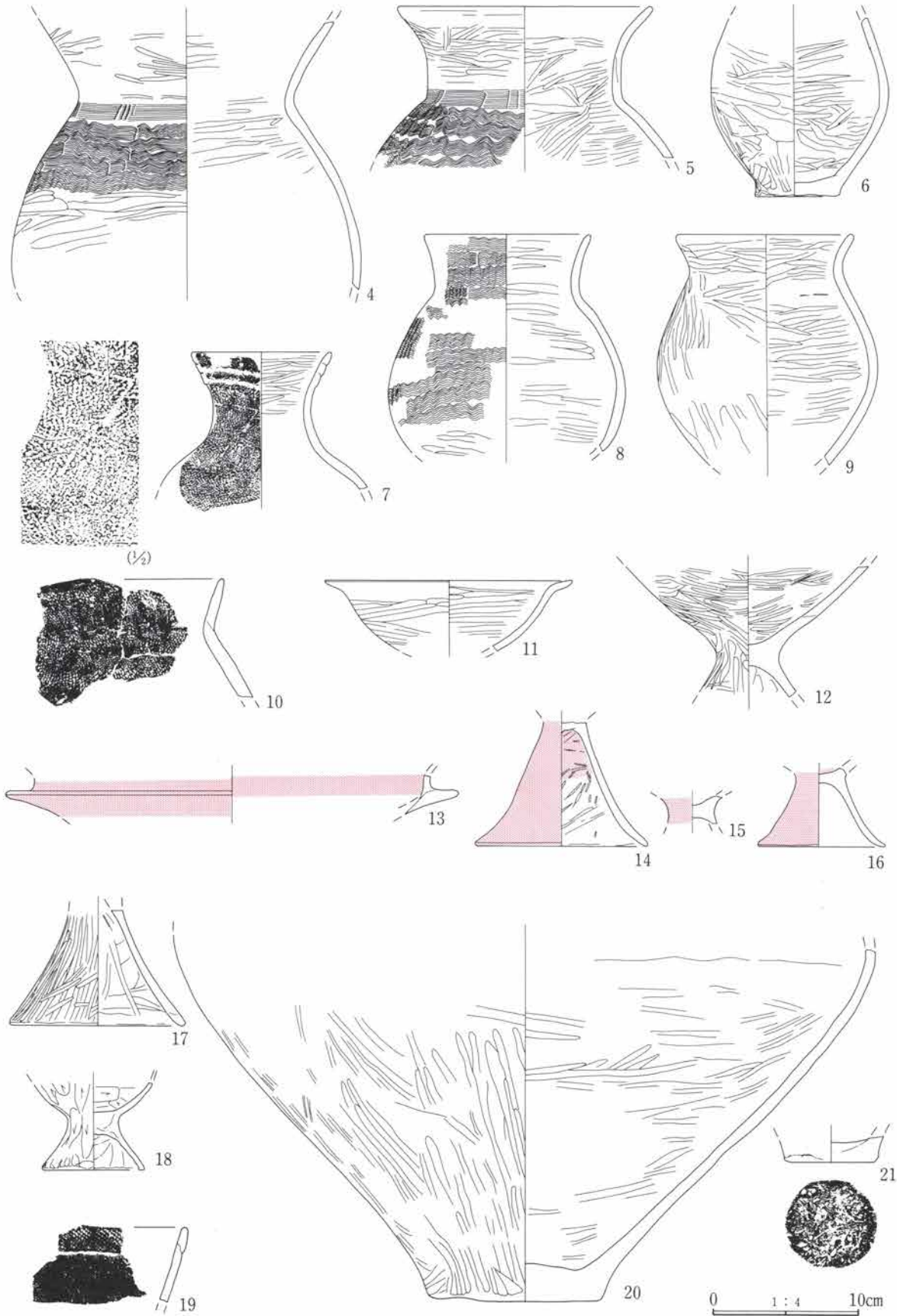
第511図 C148号住居跡出土遺物(1)



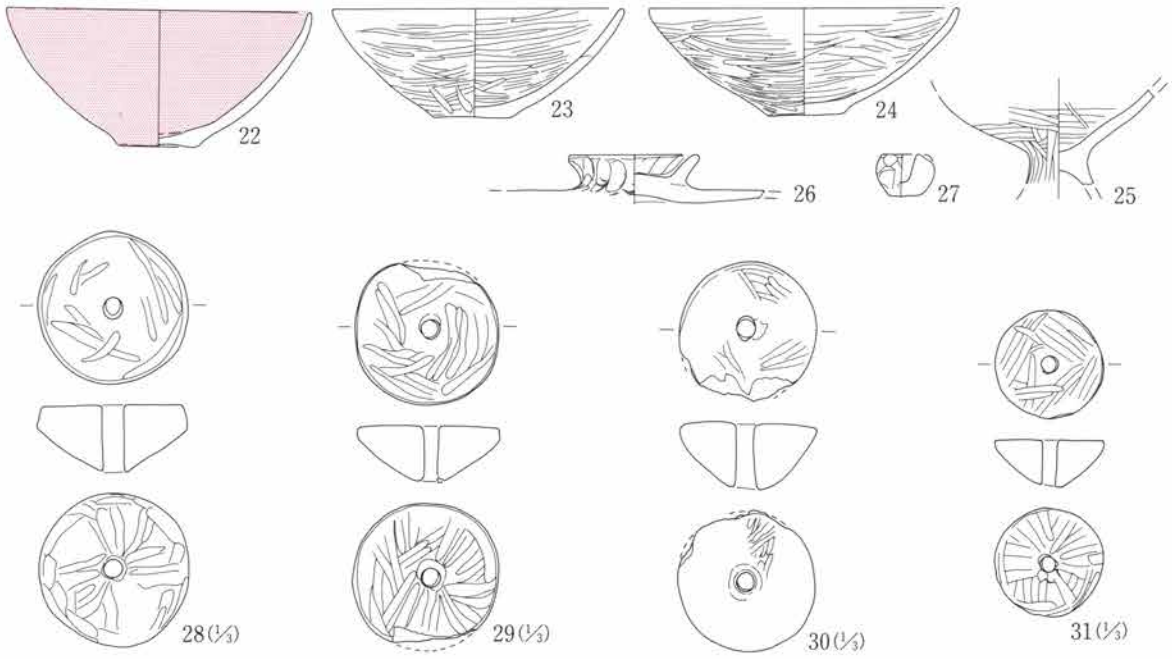
第512図 C148号住居跡出土遺物(2)



第513図 C149号住居跡出土遺物(1)

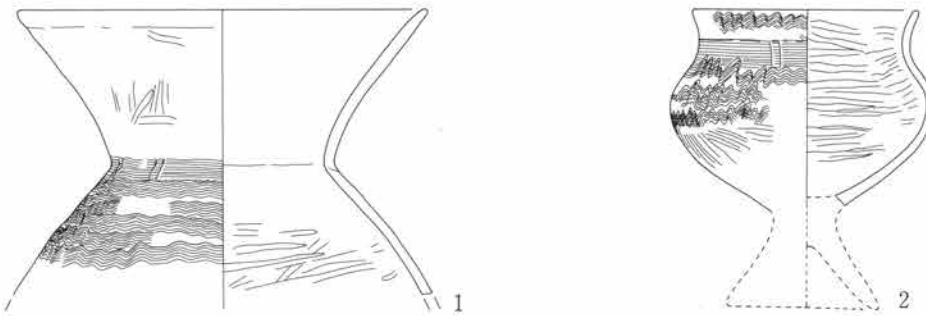


第514図 C149号住居跡出土遺物(2)

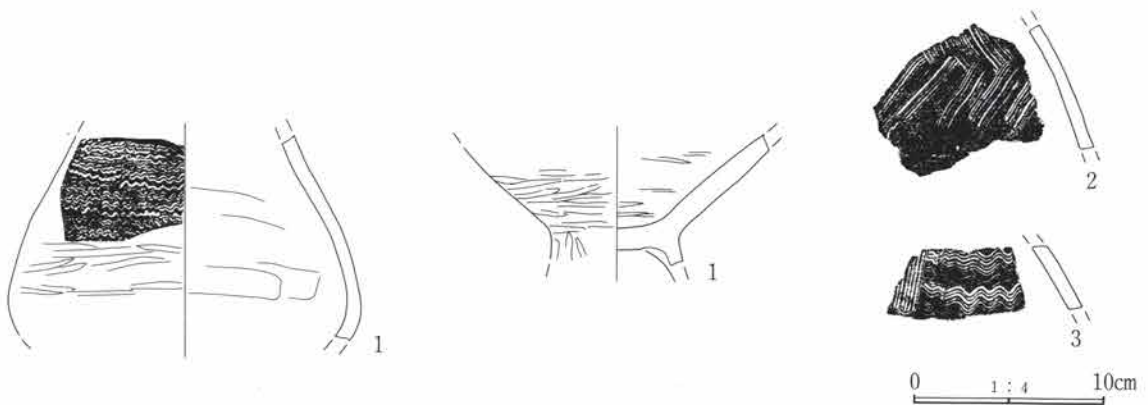


第515図 C149号住居跡出土遺物(3)

0 1:3 10cm

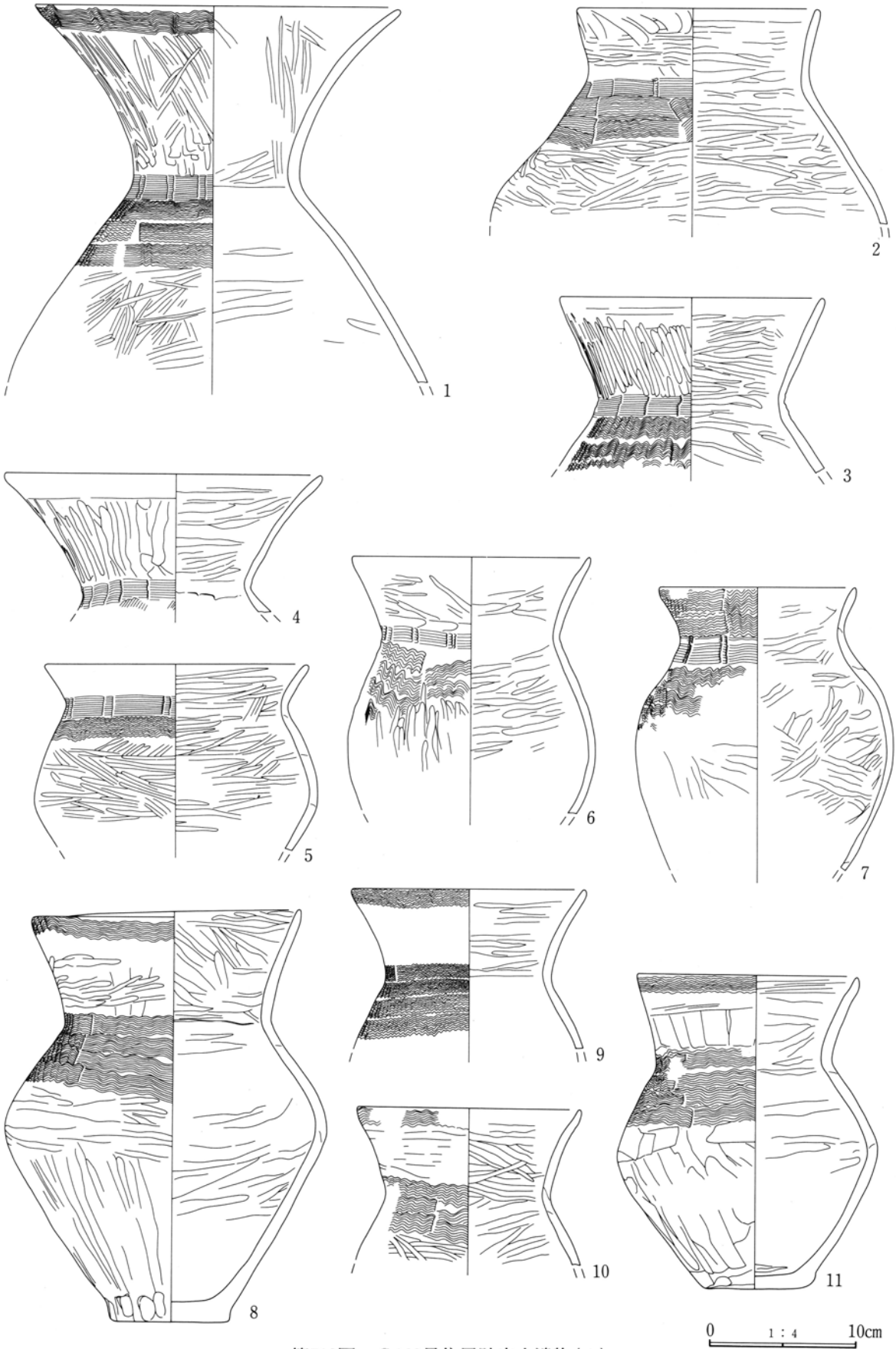


第516図 C150号住居跡出土遺物

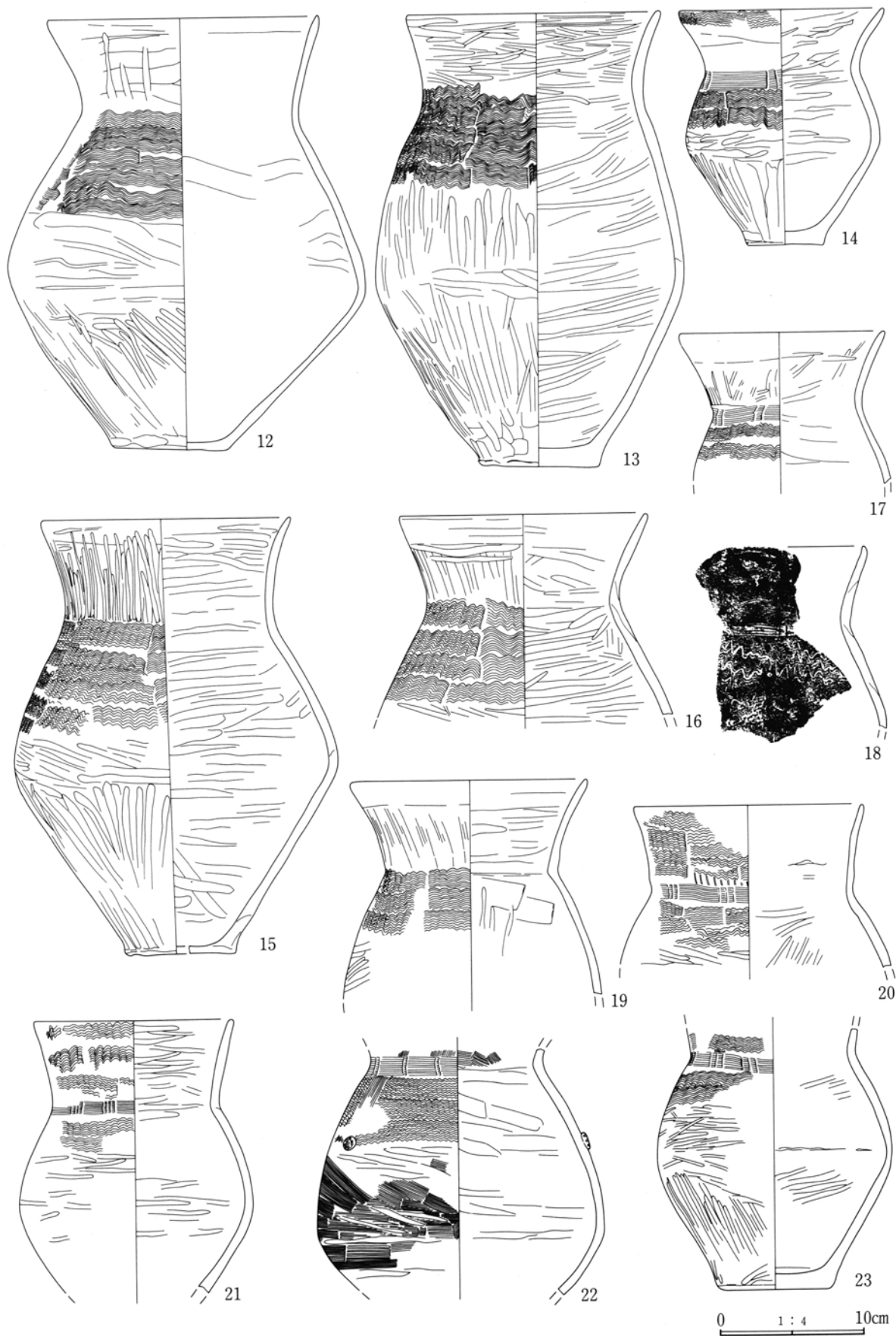


第517図 C164号住居跡出土遺物

第518図 C173号住居跡出土遺物

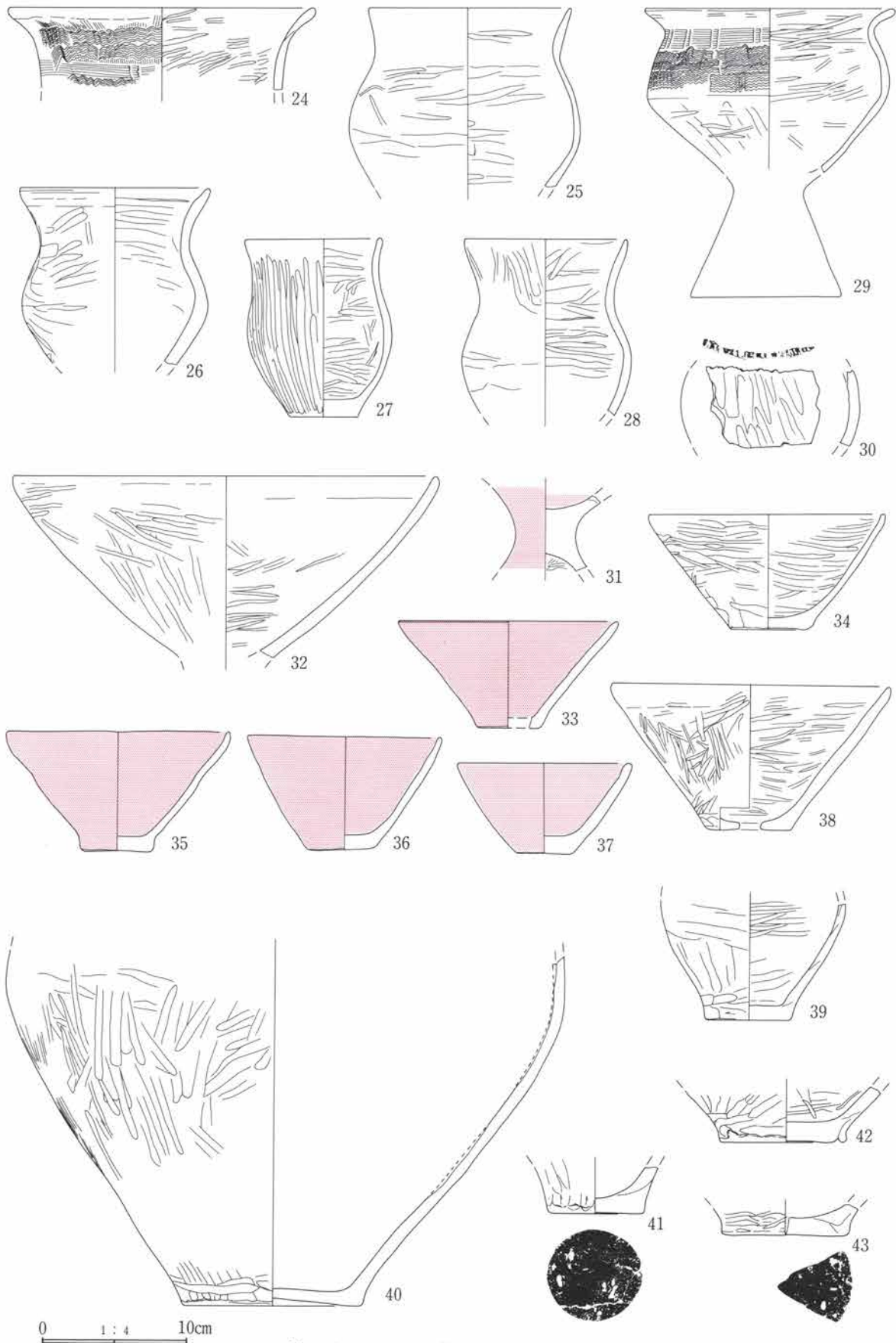


第519図 C163号住居跡出土遺物(1)

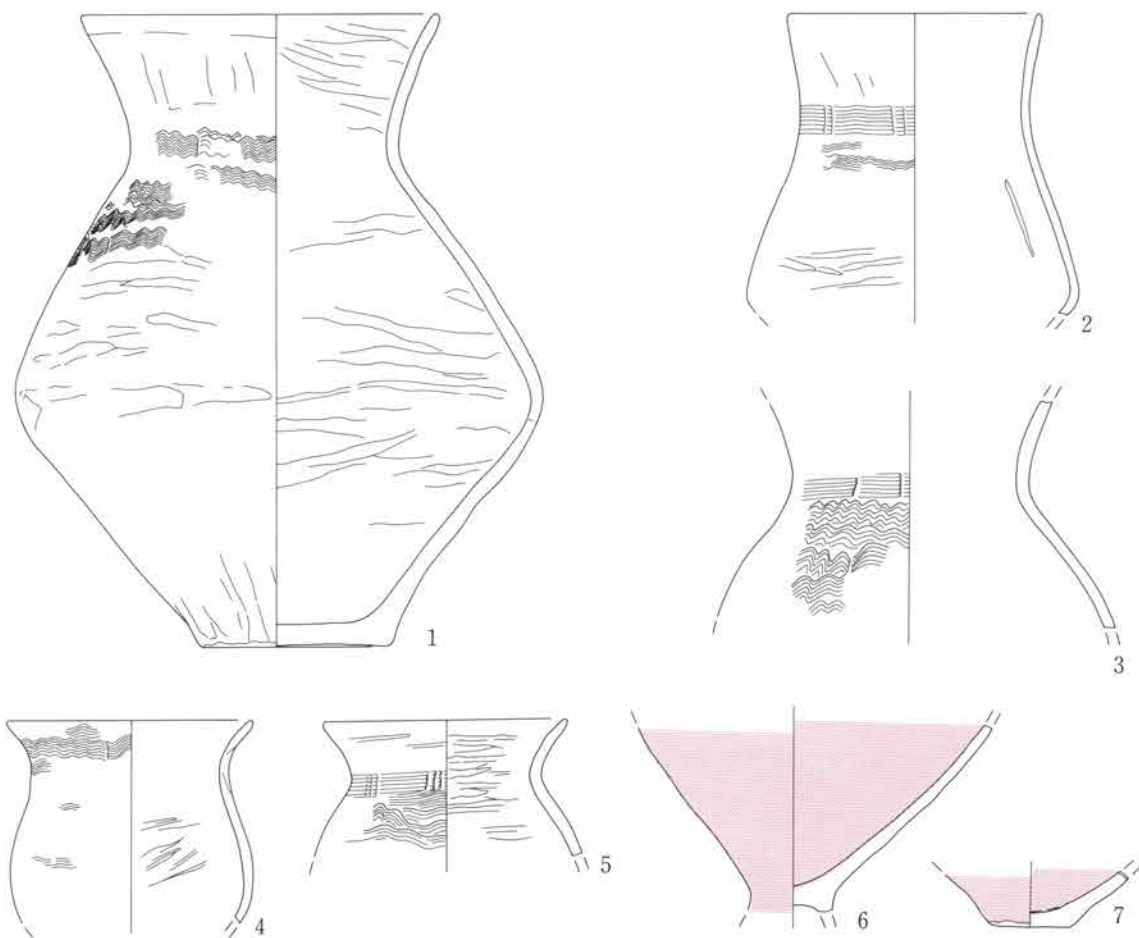


第520図 C163号住居跡出土遺物(2)

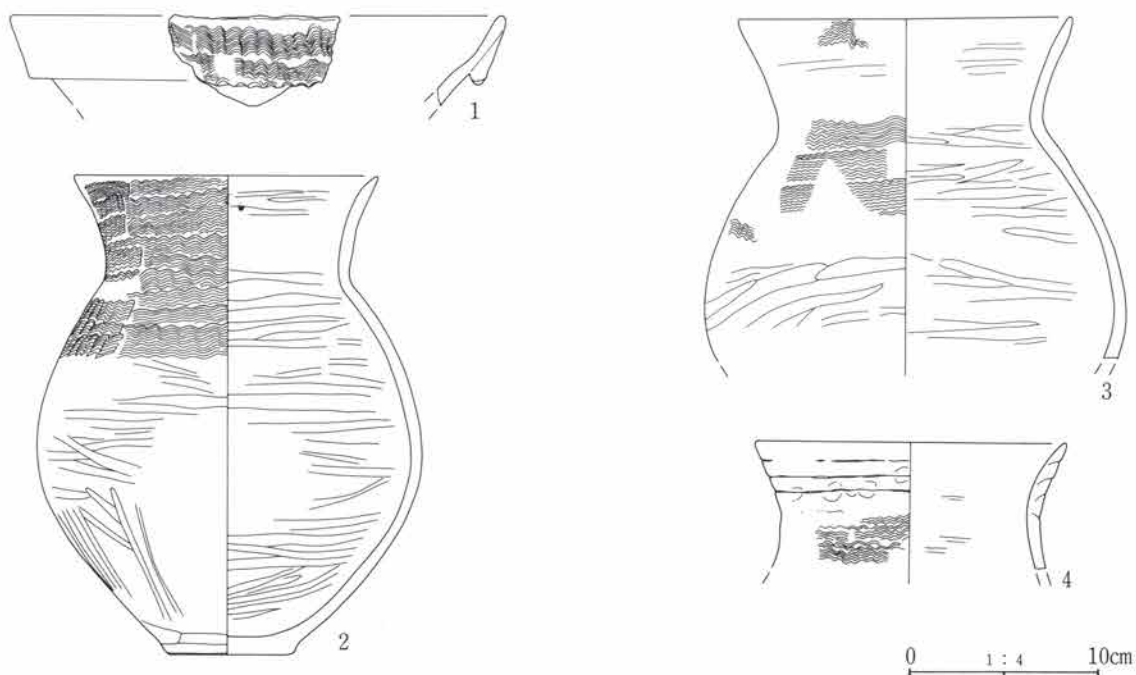
第2節 弥生土器



第521図 C163号住居跡出土遺物(3)

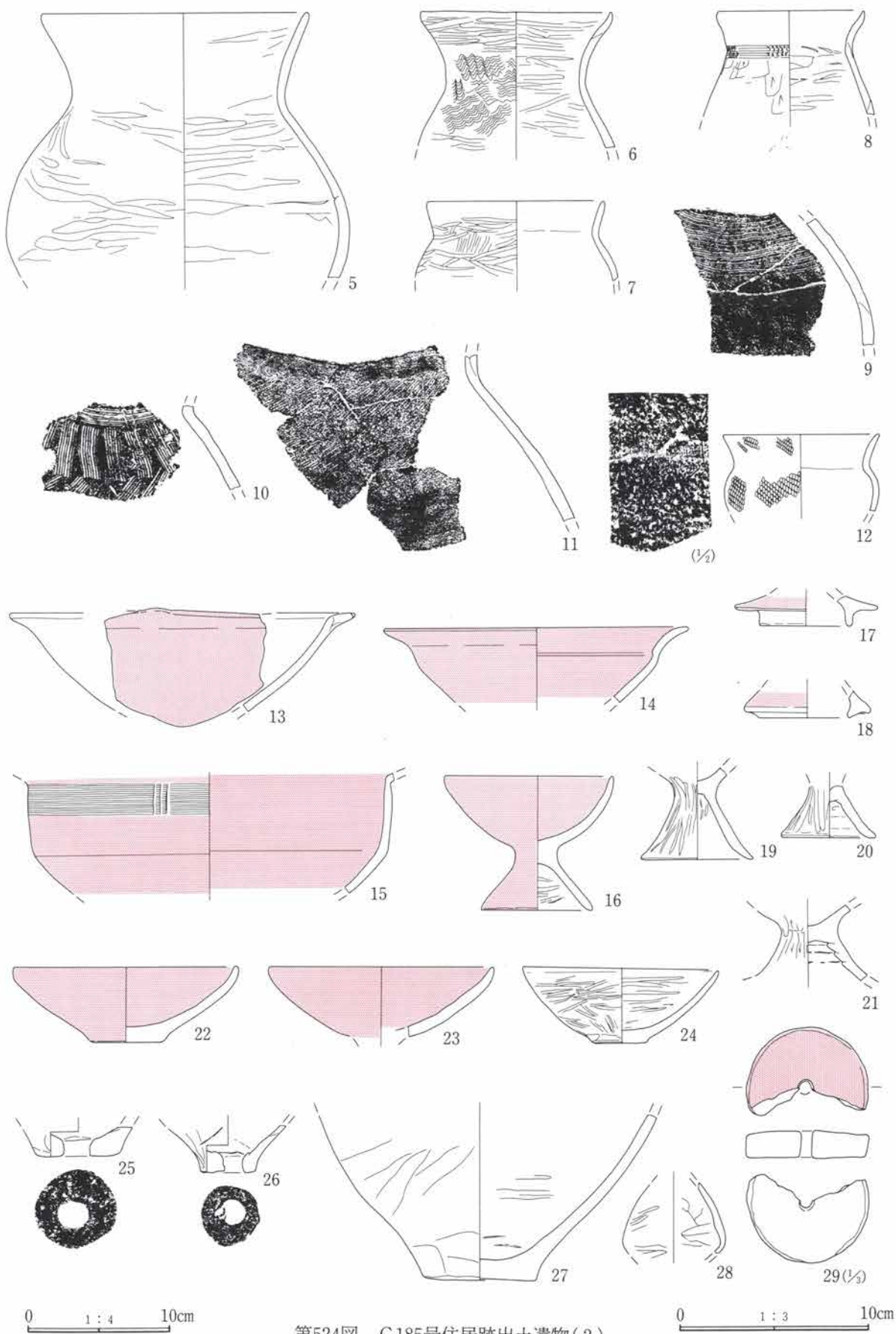


第522図 C180号住居跡出土遺物

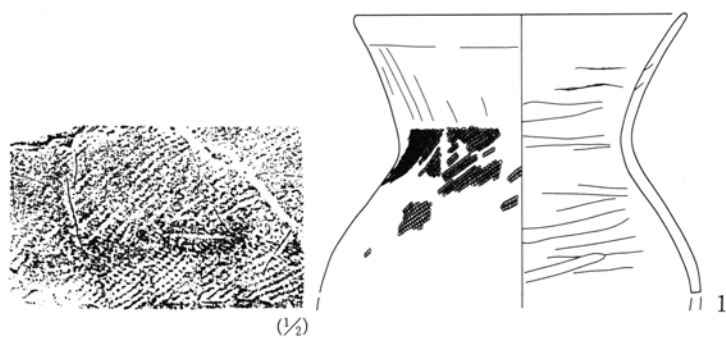


第523図 C185号住居跡出土遺物(1)

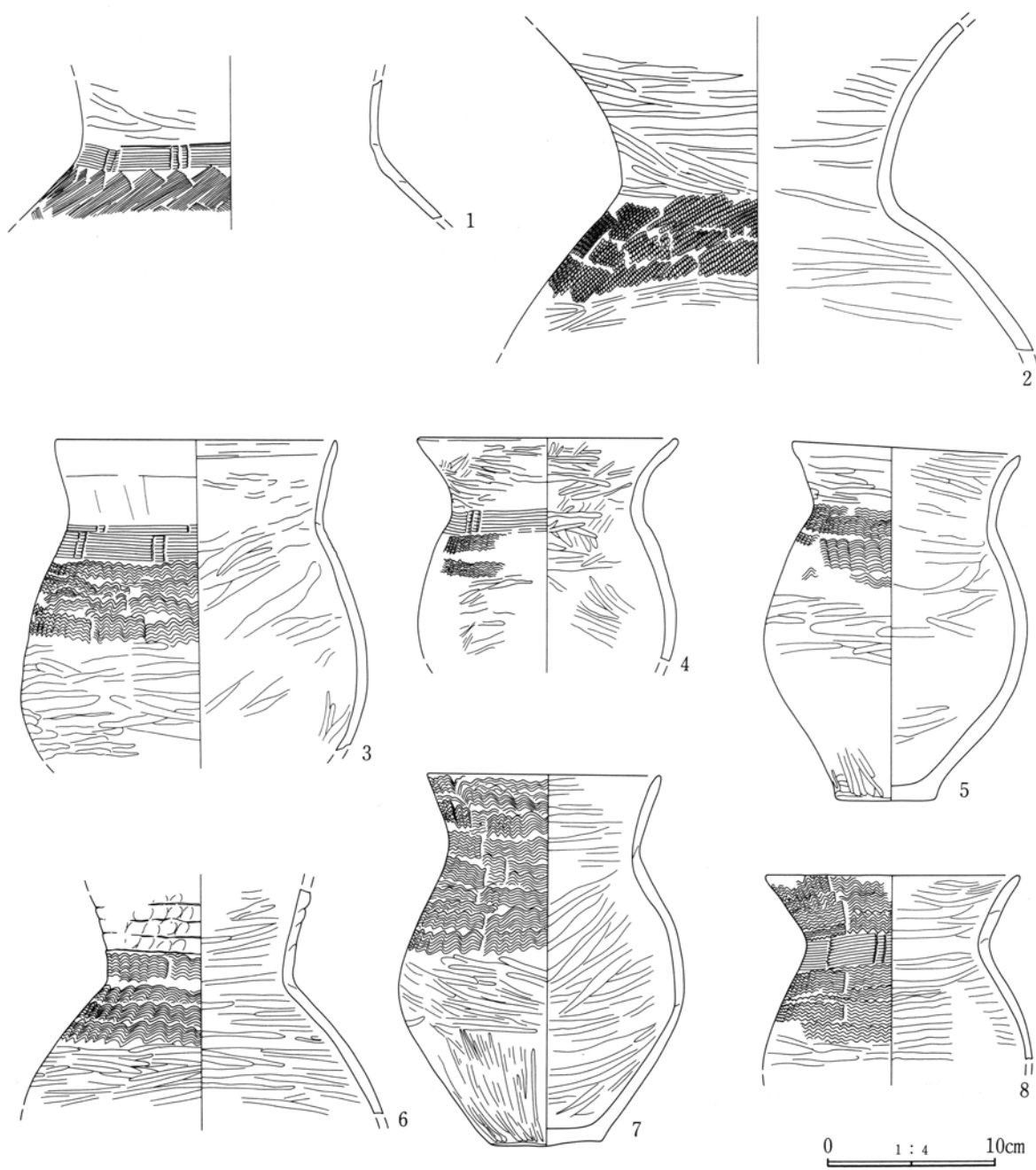
第2節 弥生土器



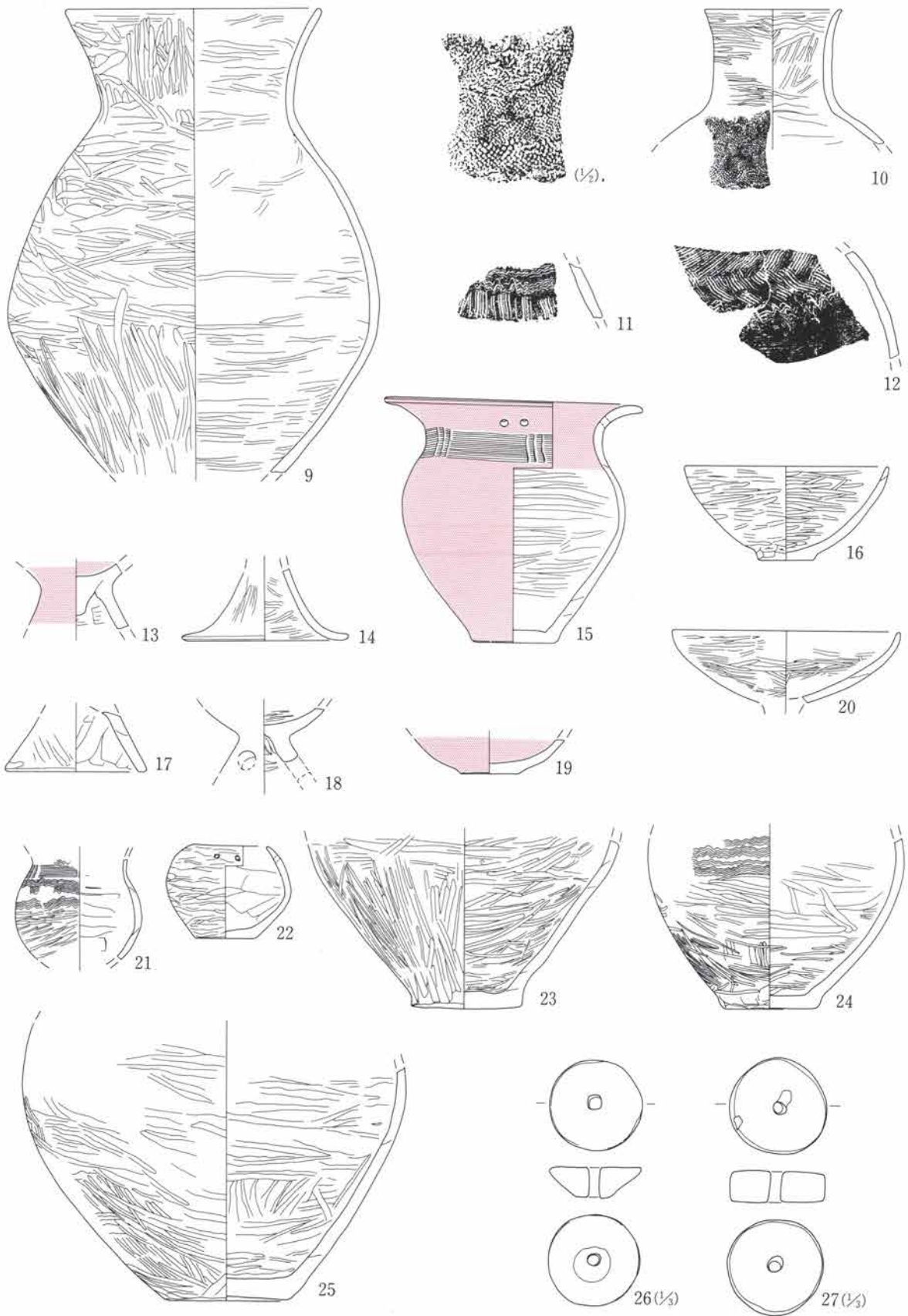
第524図 C185号住居跡出土遺物(2)



第525図 C186号住居跡出土遺物



第526図 C192号住居跡出土遺物(1)

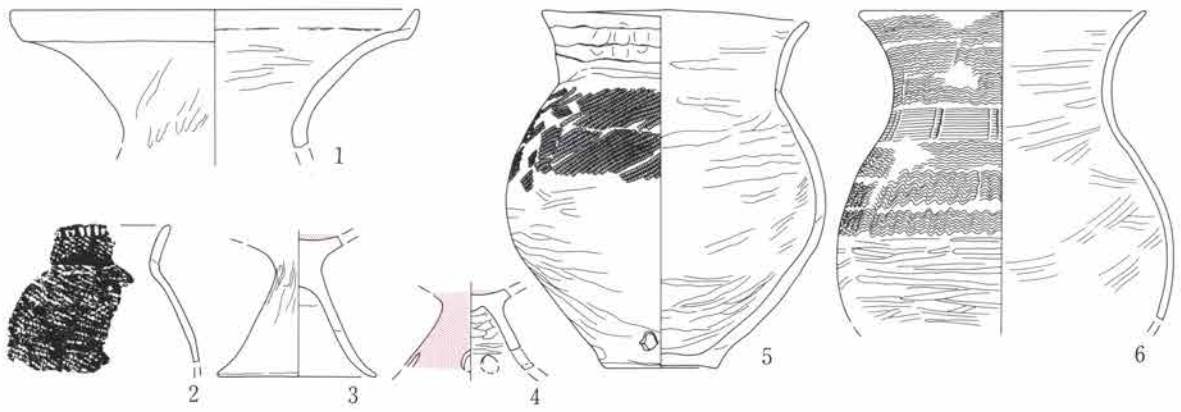


0 1:4 10cm

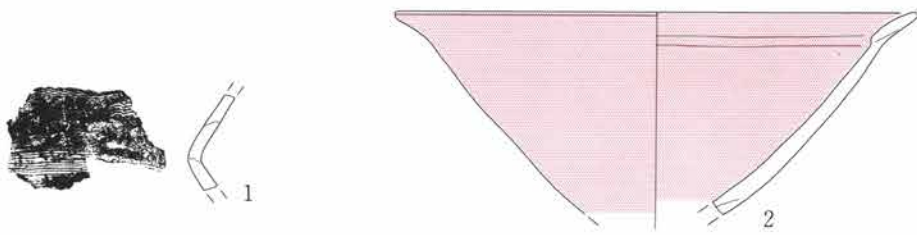
第527図 C192号住居跡出土遺物(2)

0 1:3 10cm

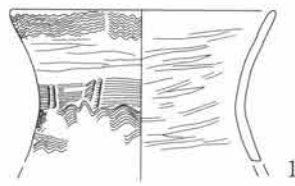
第4章 出土遺物



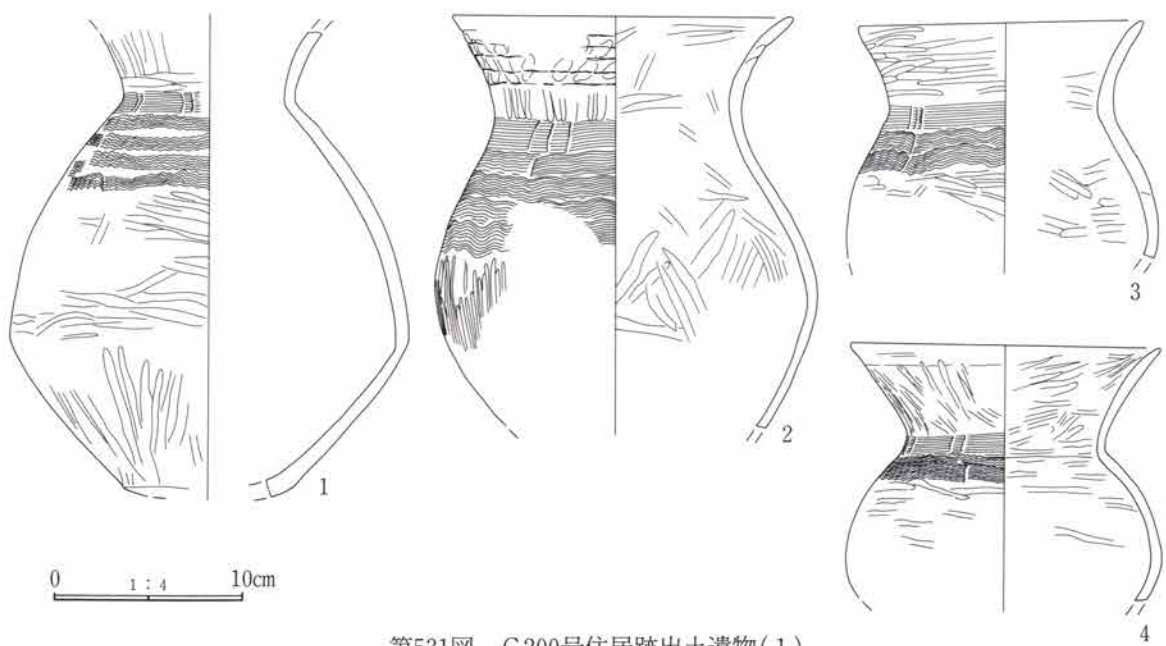
第528図 C194号住居跡出土遺物



第529図 C197号住居跡出土遺物

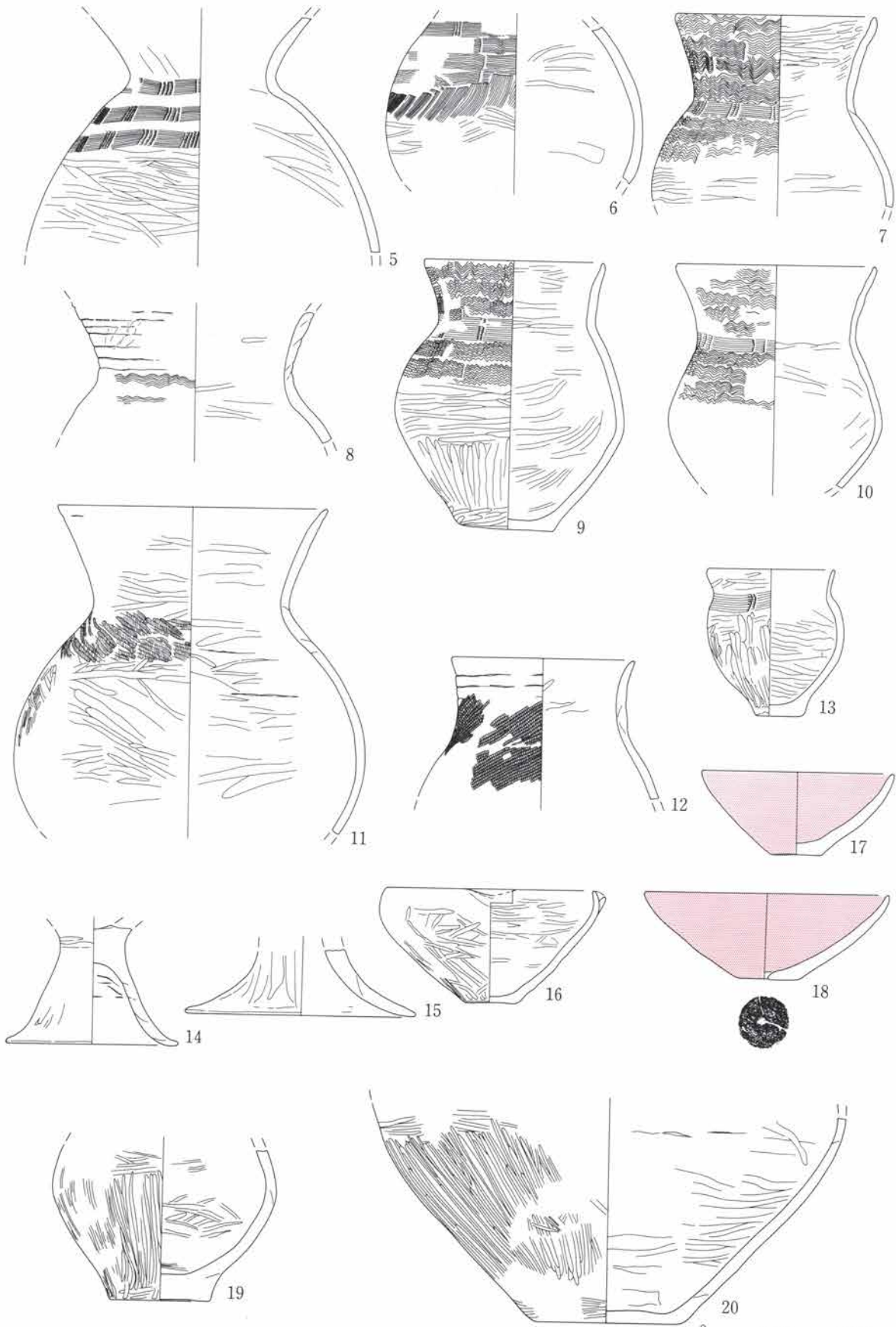


第530図 C199号住居跡出土遺物



第531図 C200号住居跡出土遺物(1)

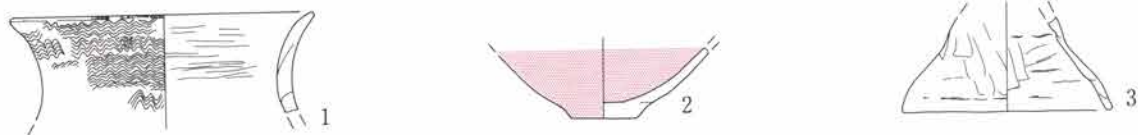
第2節 弥生土器



第532図 C200号住居跡出土遺物(2)

0 1:4 10cm

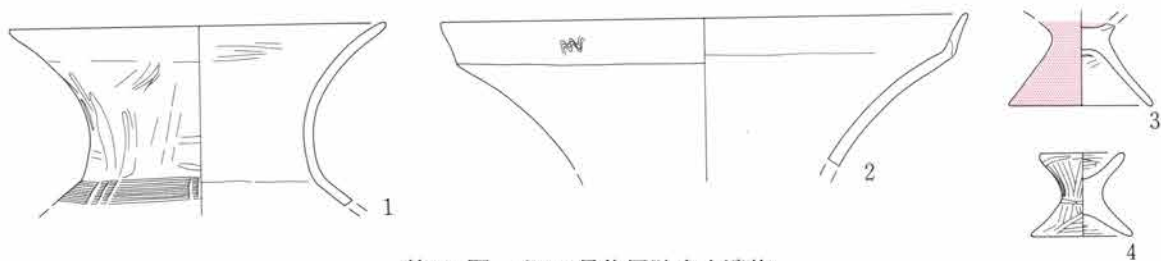
第4章 出土遺物



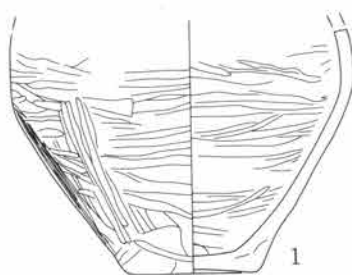
第533図 C201号住居跡出土遺物



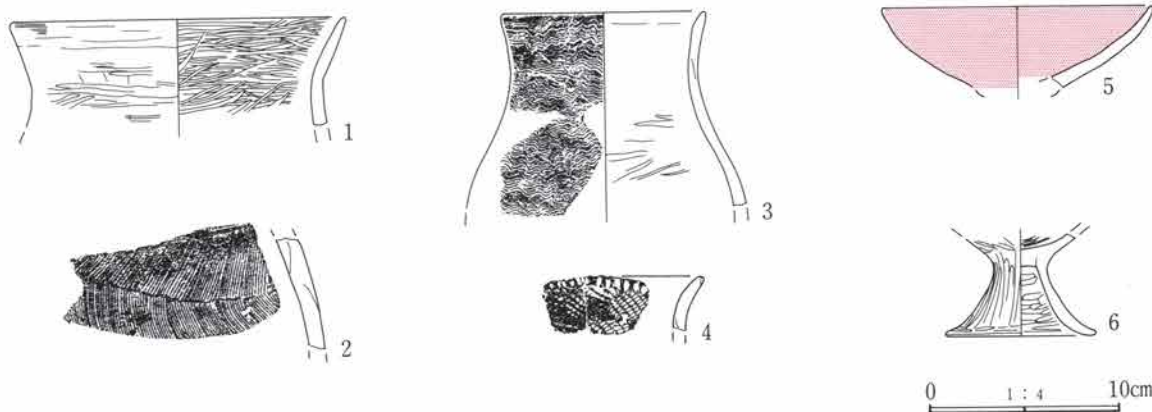
第534図 C204号住居跡出土遺物



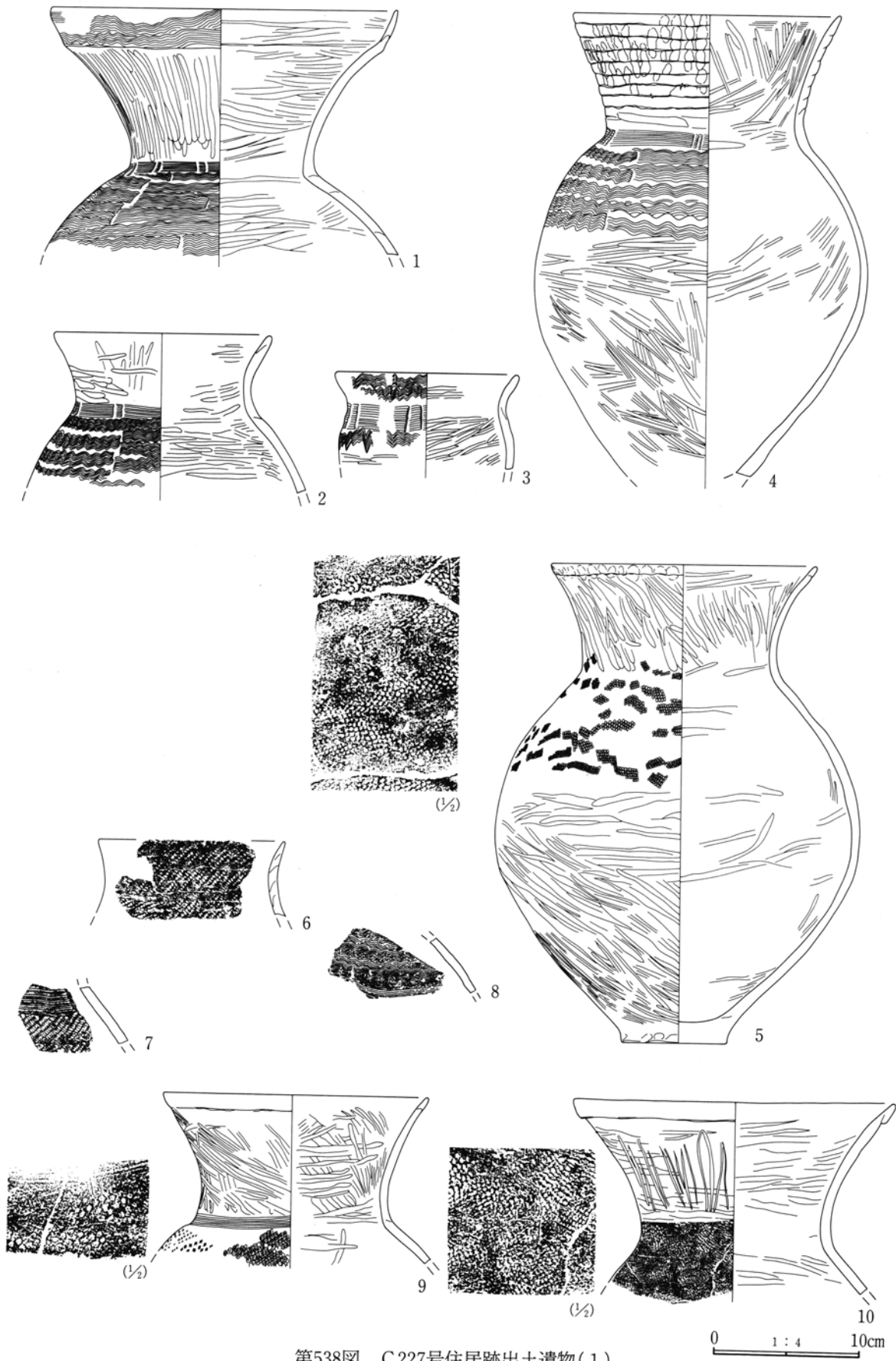
第535図 C207号住居跡出土遺物



第536図 C208号住居跡出土遺物

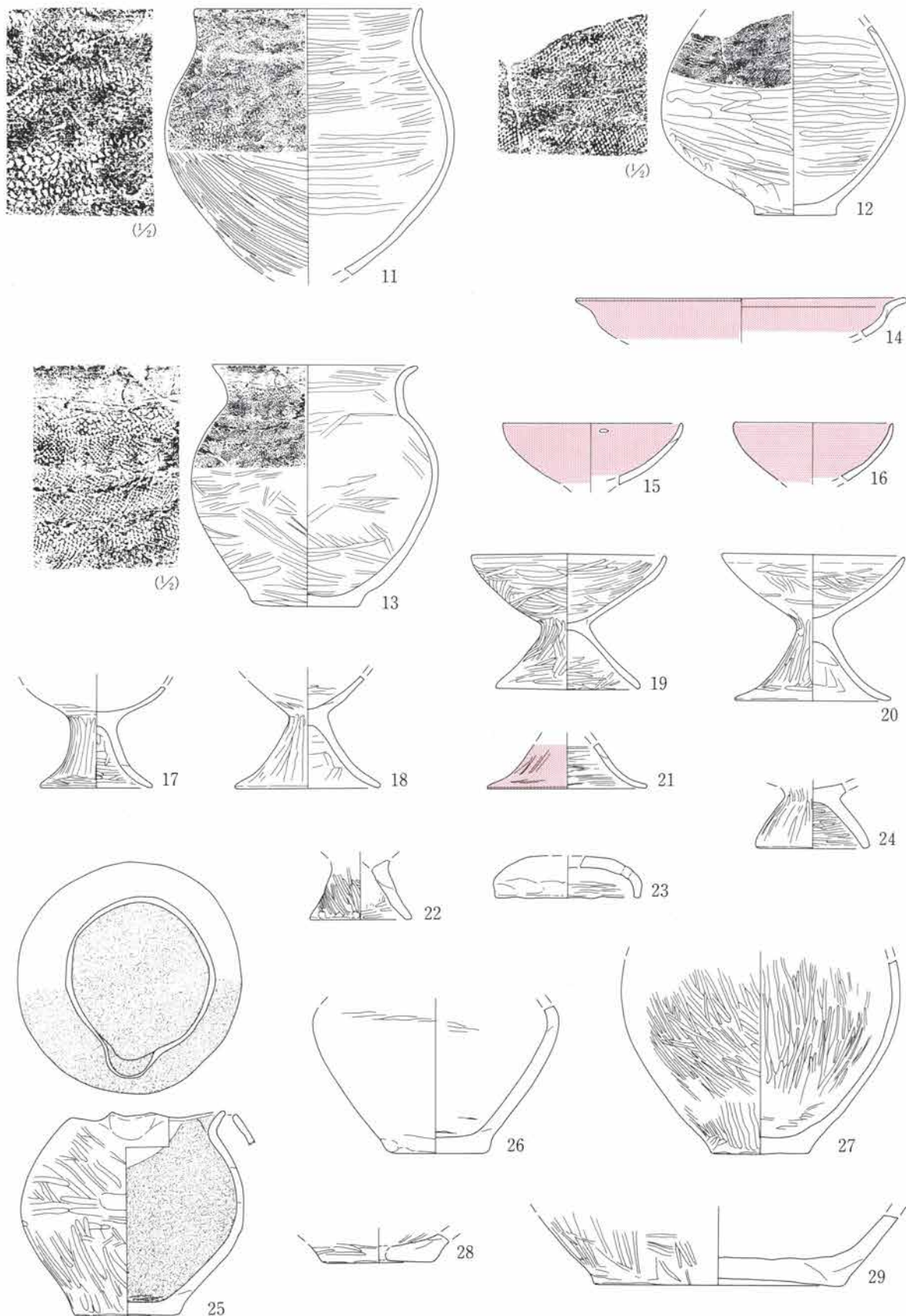


第537図 C225号住居跡出土遺物



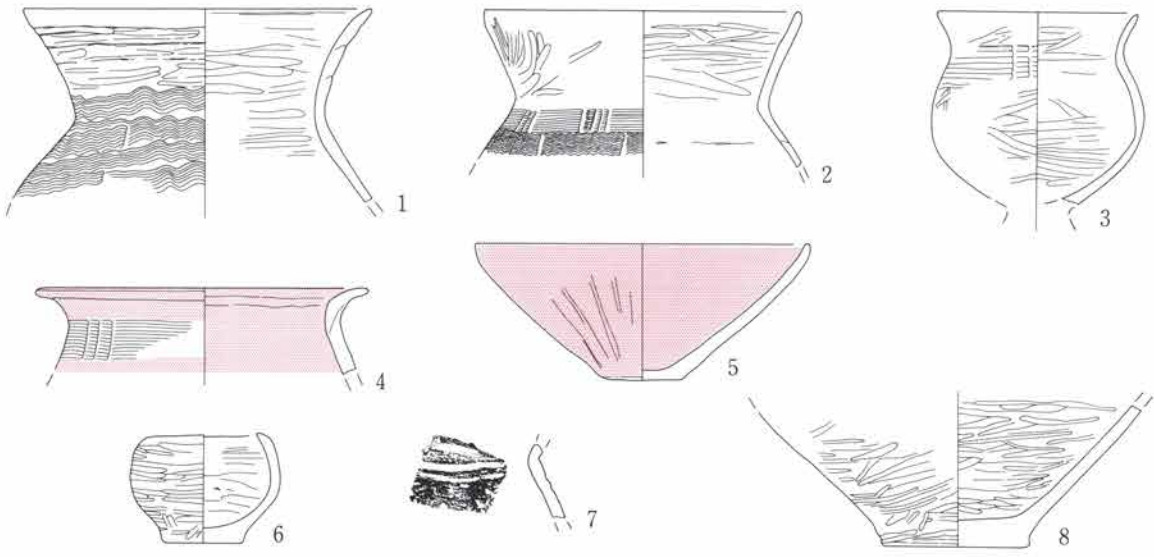
第538図 C227号住居跡出土遺物(1)

第4章 出土遺物

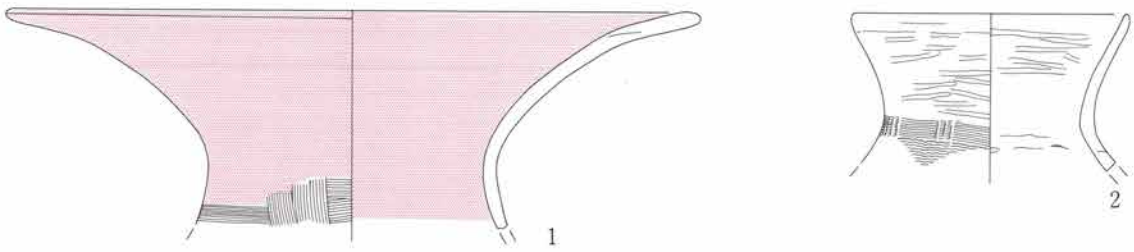


第539図 C227号住居跡出土遺物(2)

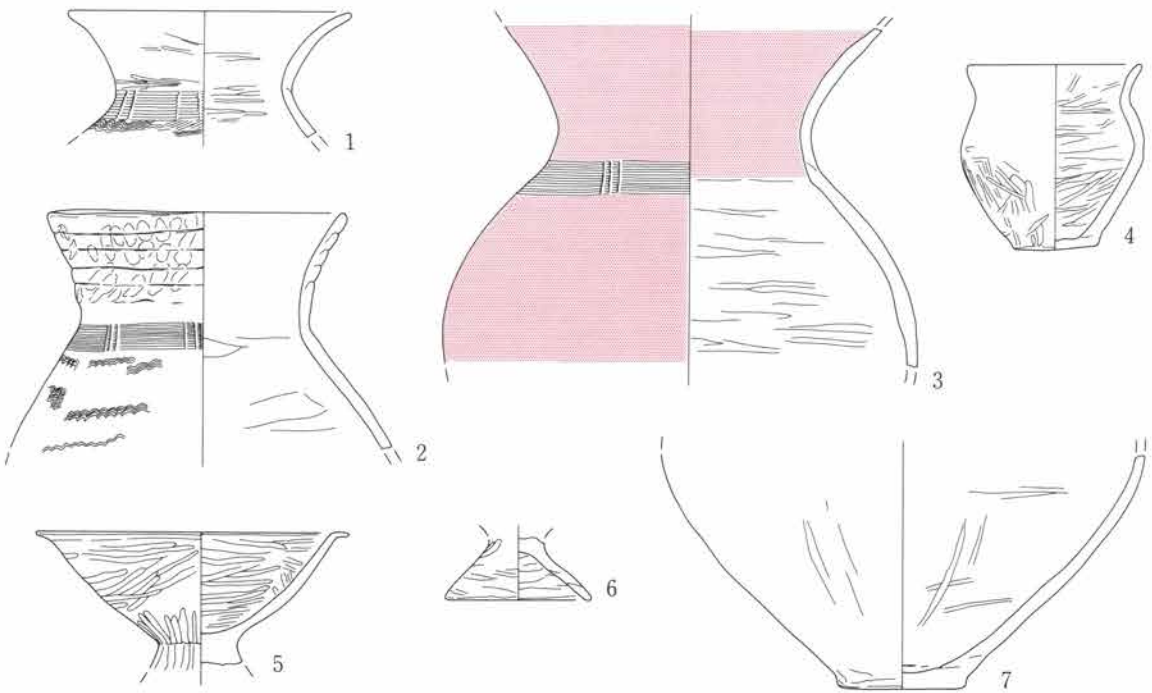
第2節 弥生土器



第540図 C231号住居跡出土遺物



第541図 C232号住居跡出土遺物

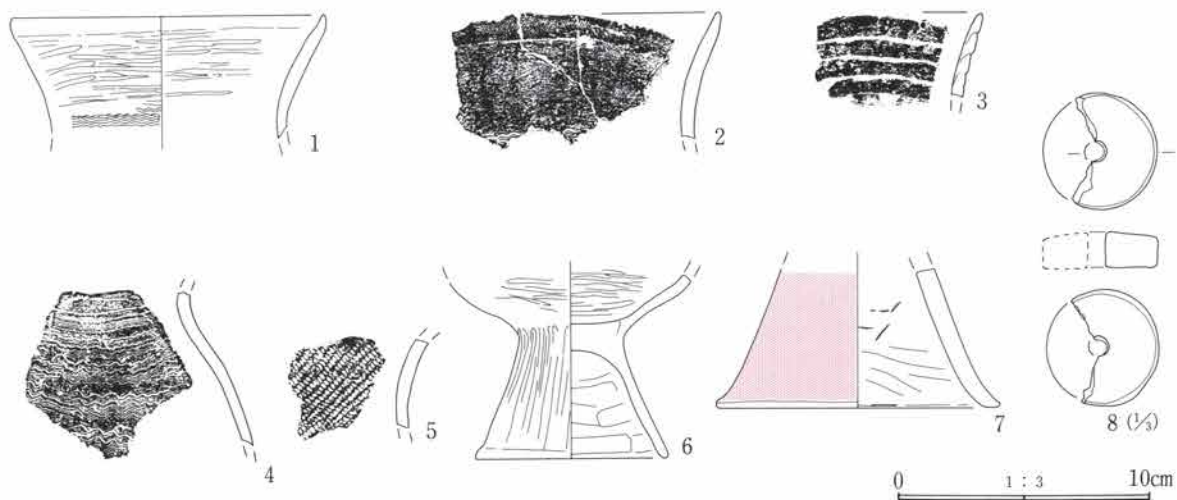


第542図 C234号住居跡出土遺物

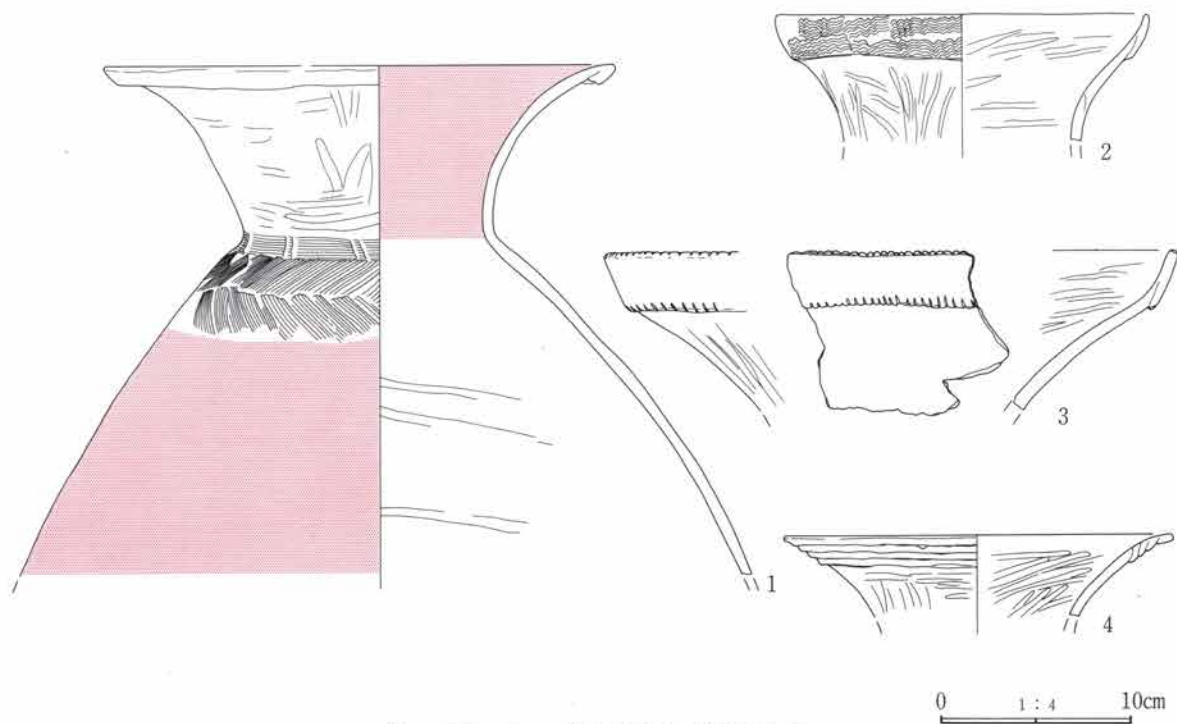
0 1:4 10cm



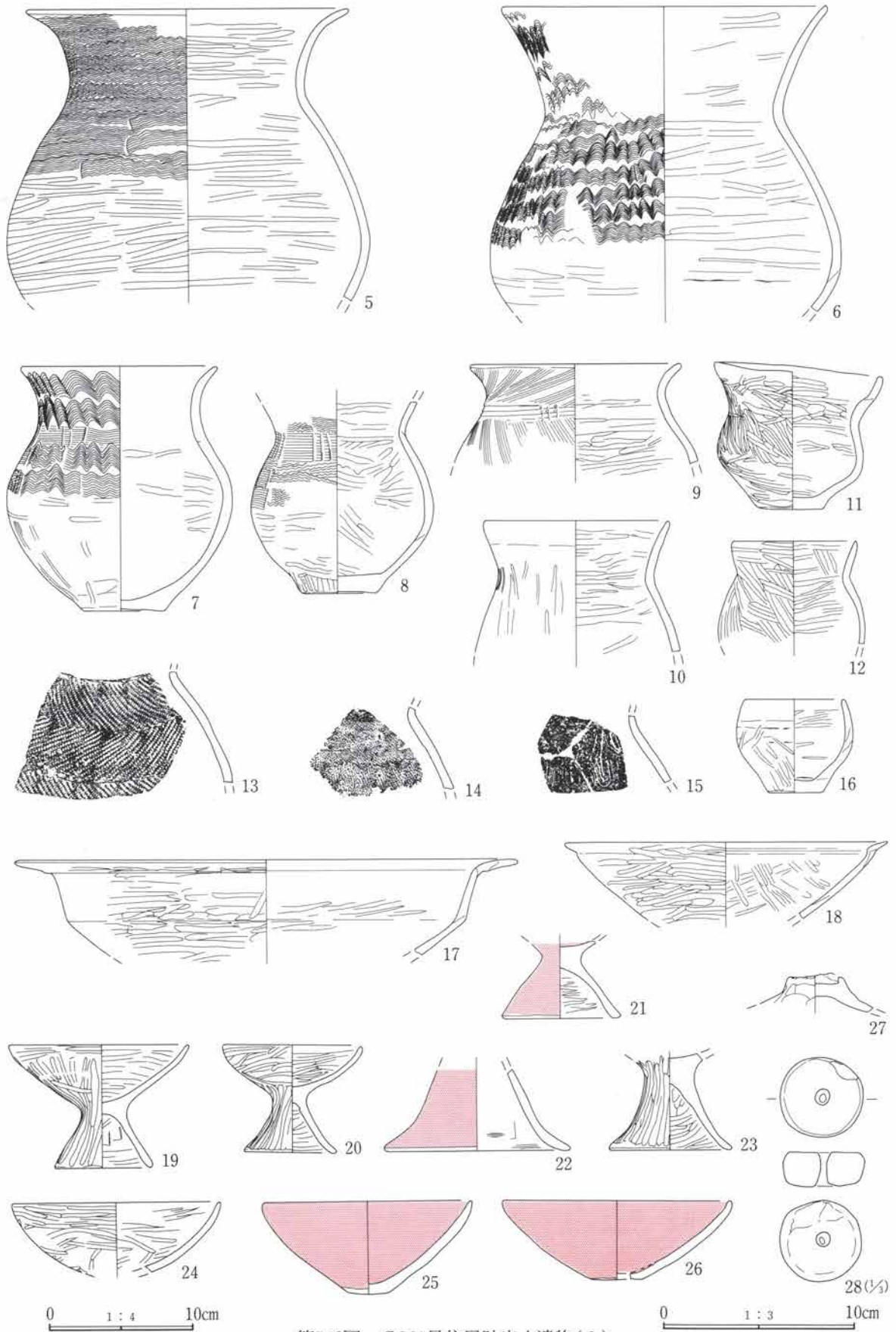
第543図 C240号住居跡出土遺物



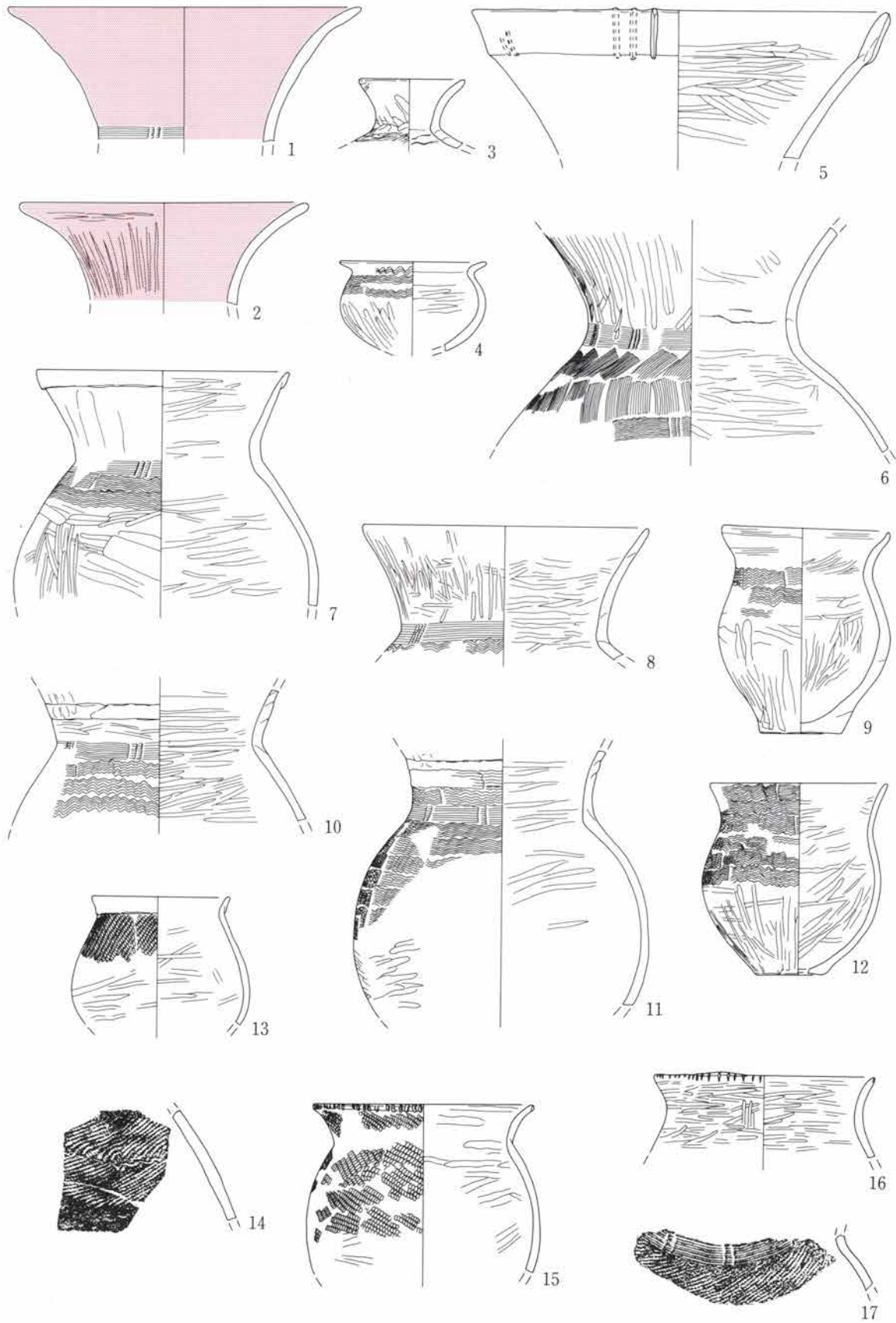
第544図 C246号住居跡出土遺物



第545図 C261号住居跡出土遺物(1)

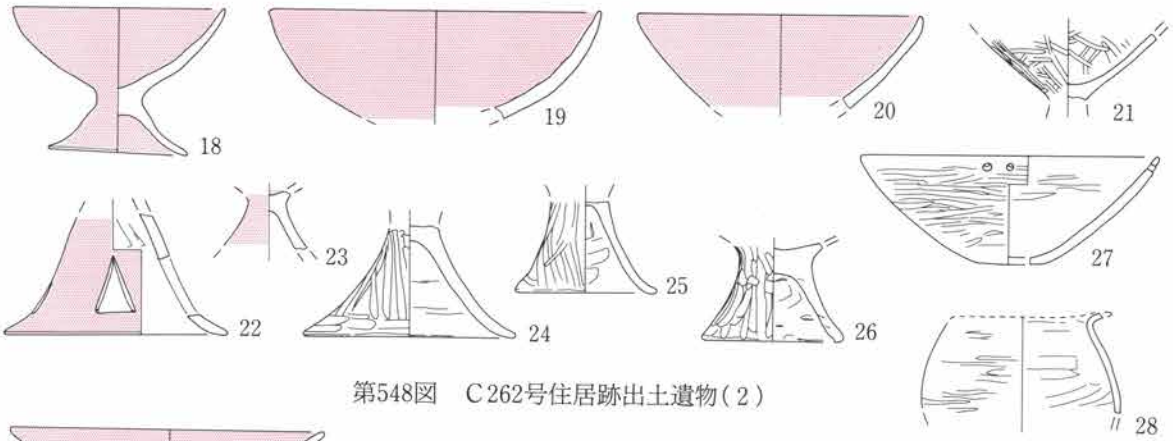


第546図 C261号住居跡出土遺物(2)

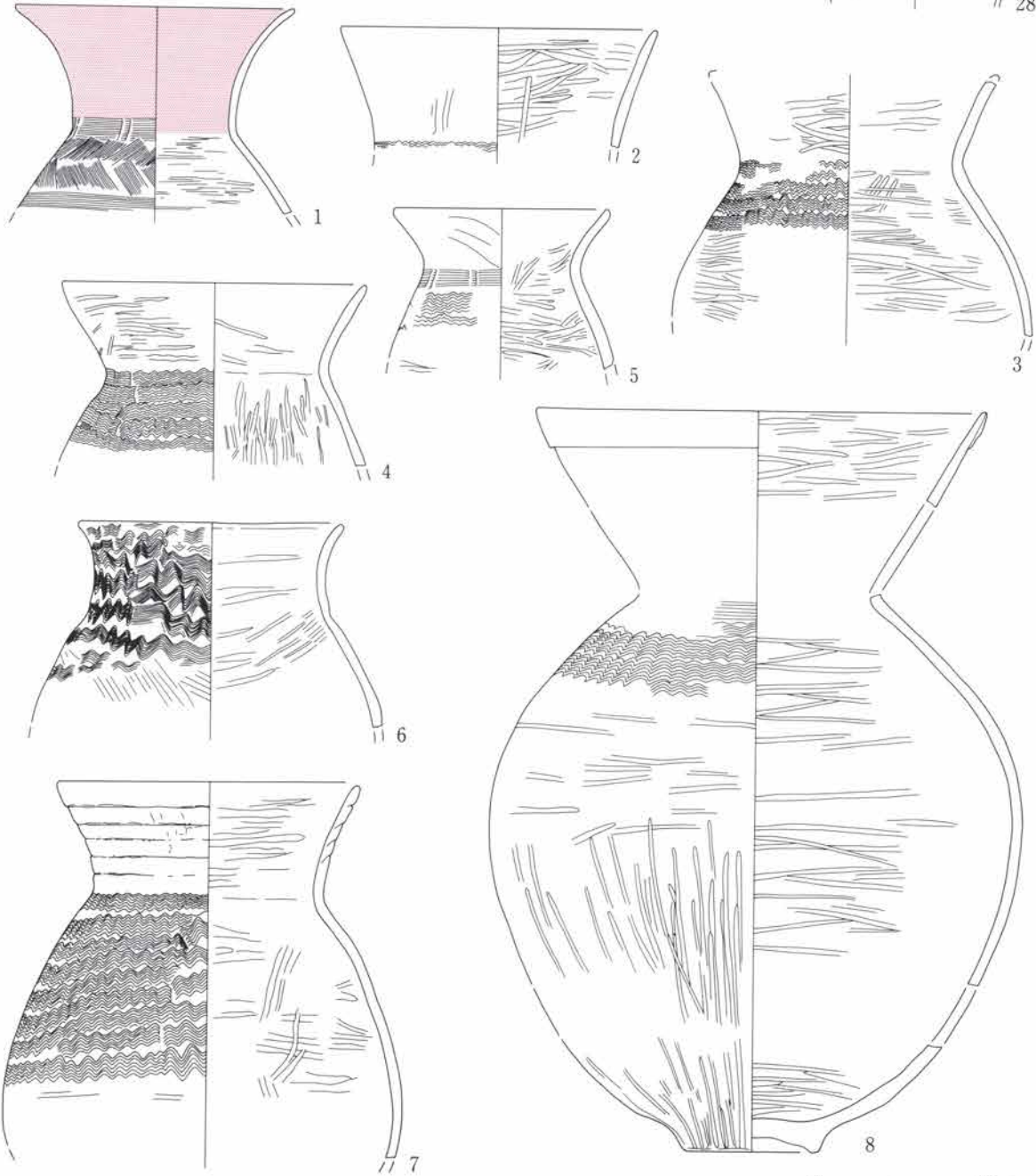


第547図 C262号住居跡出土遺物(1)

0 1:4 10cm

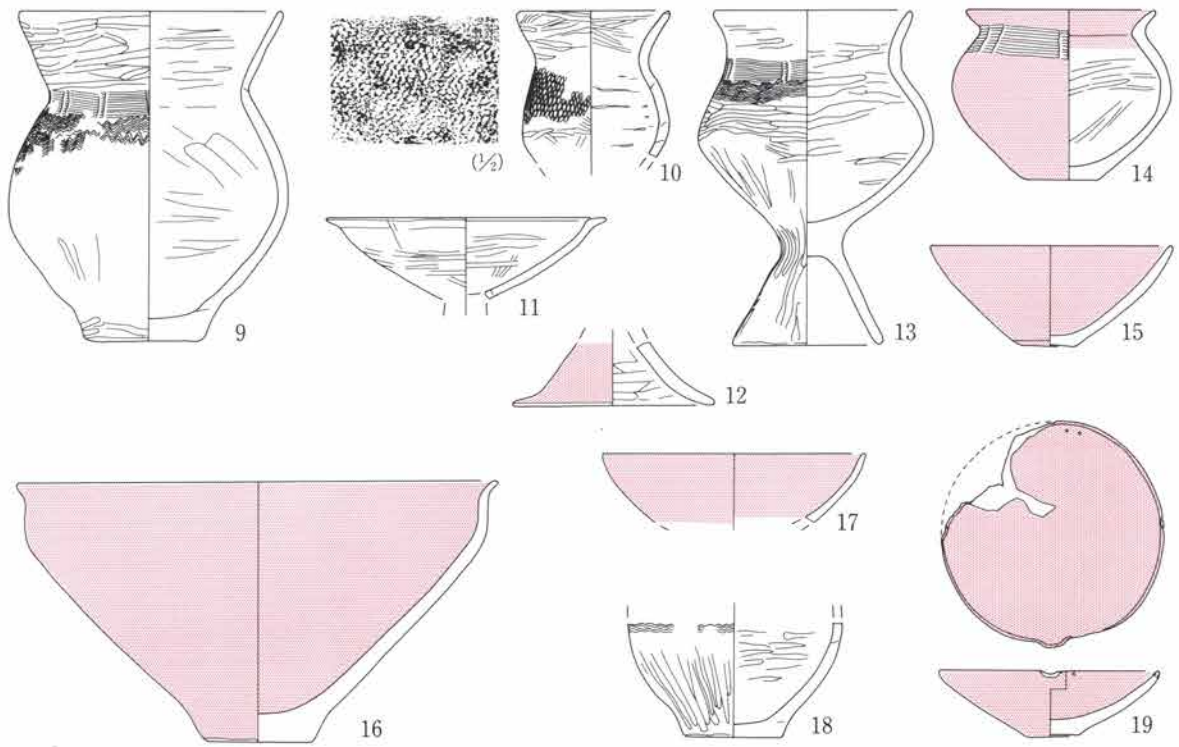


第548図 C262号住居跡出土遺物(2)

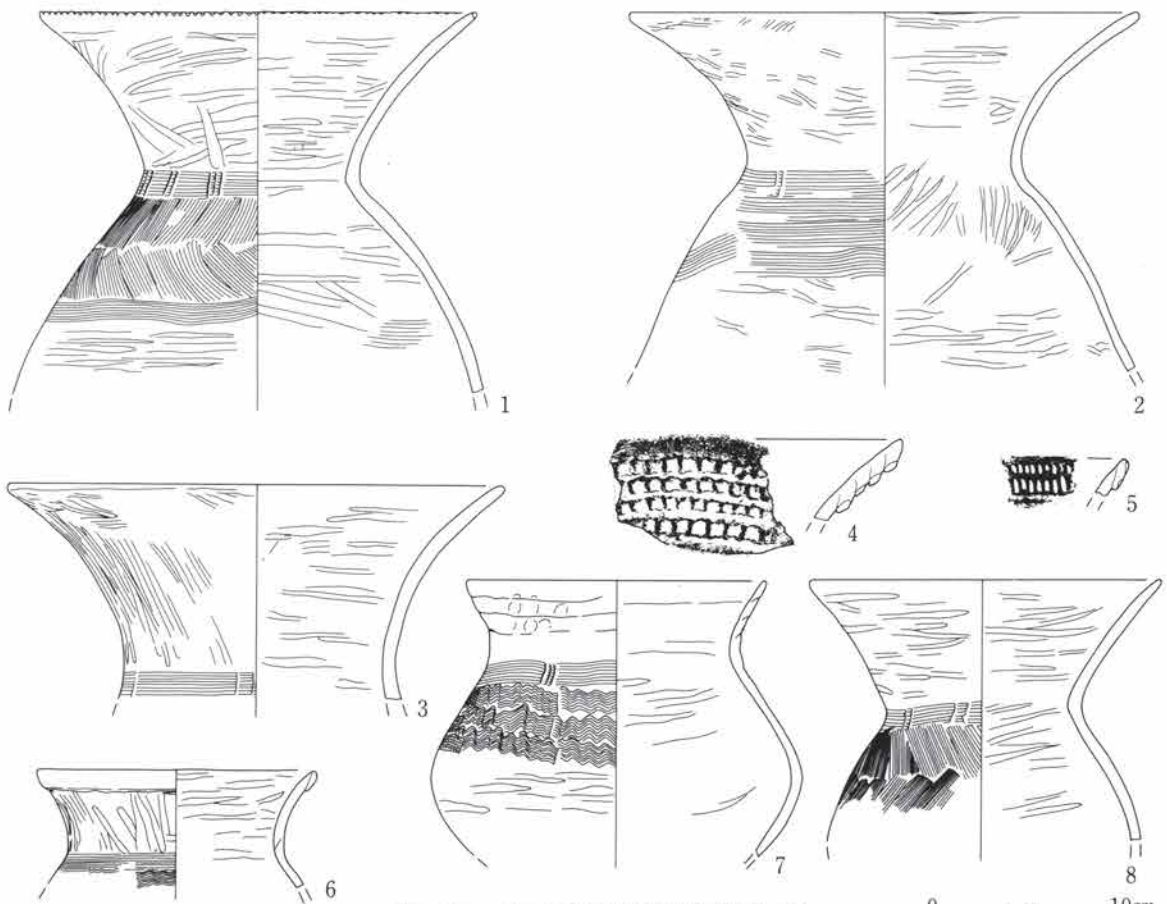


第549図 C267号住居跡出土遺物(1)

0 1:4 10cm

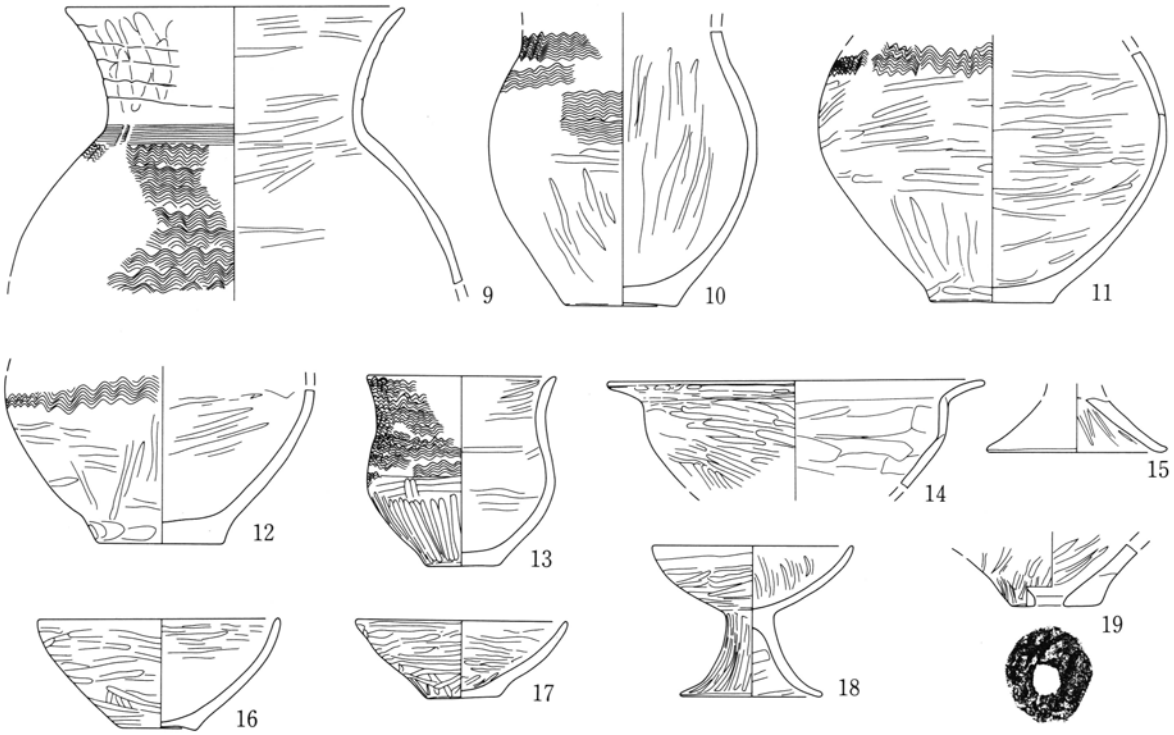


第550图 C267号住居跡出土遺物(2)

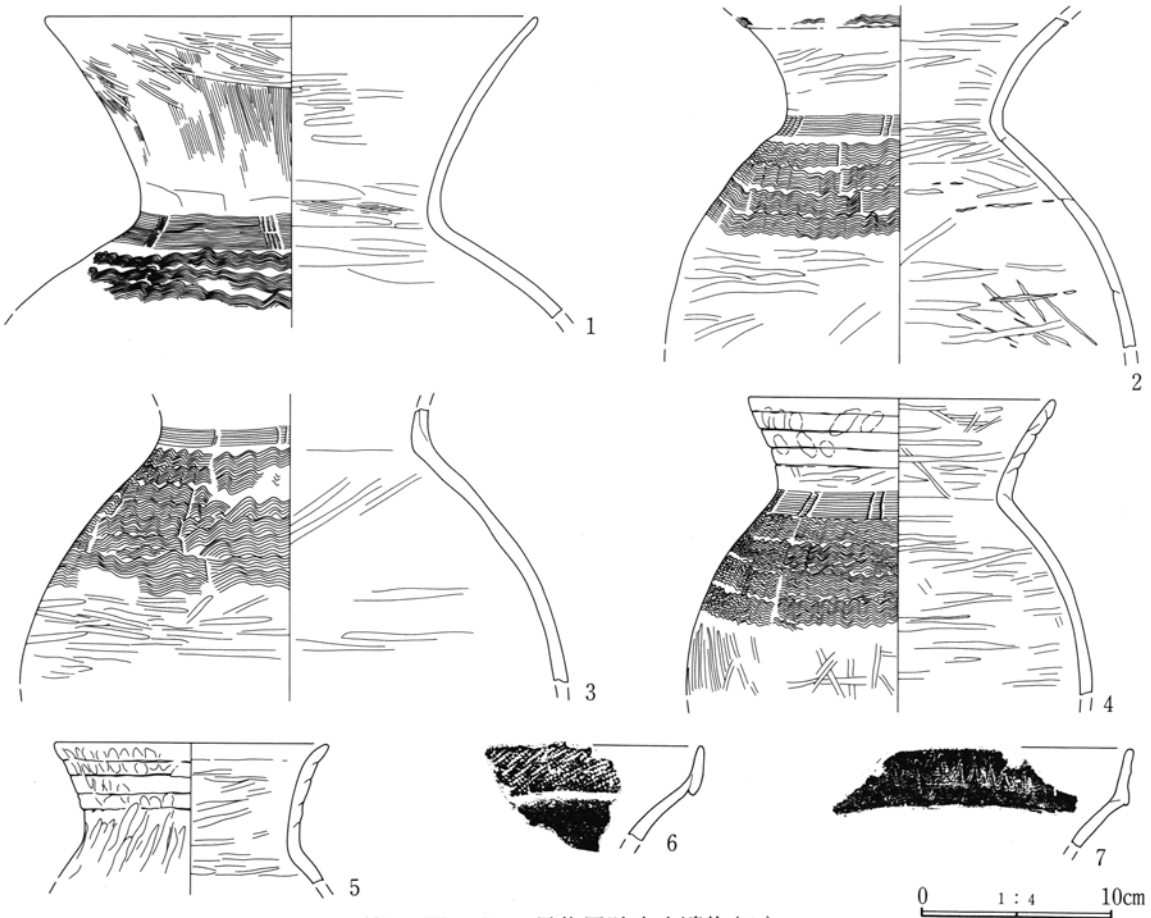


第551图 C270号住居跡出土遺物(1)

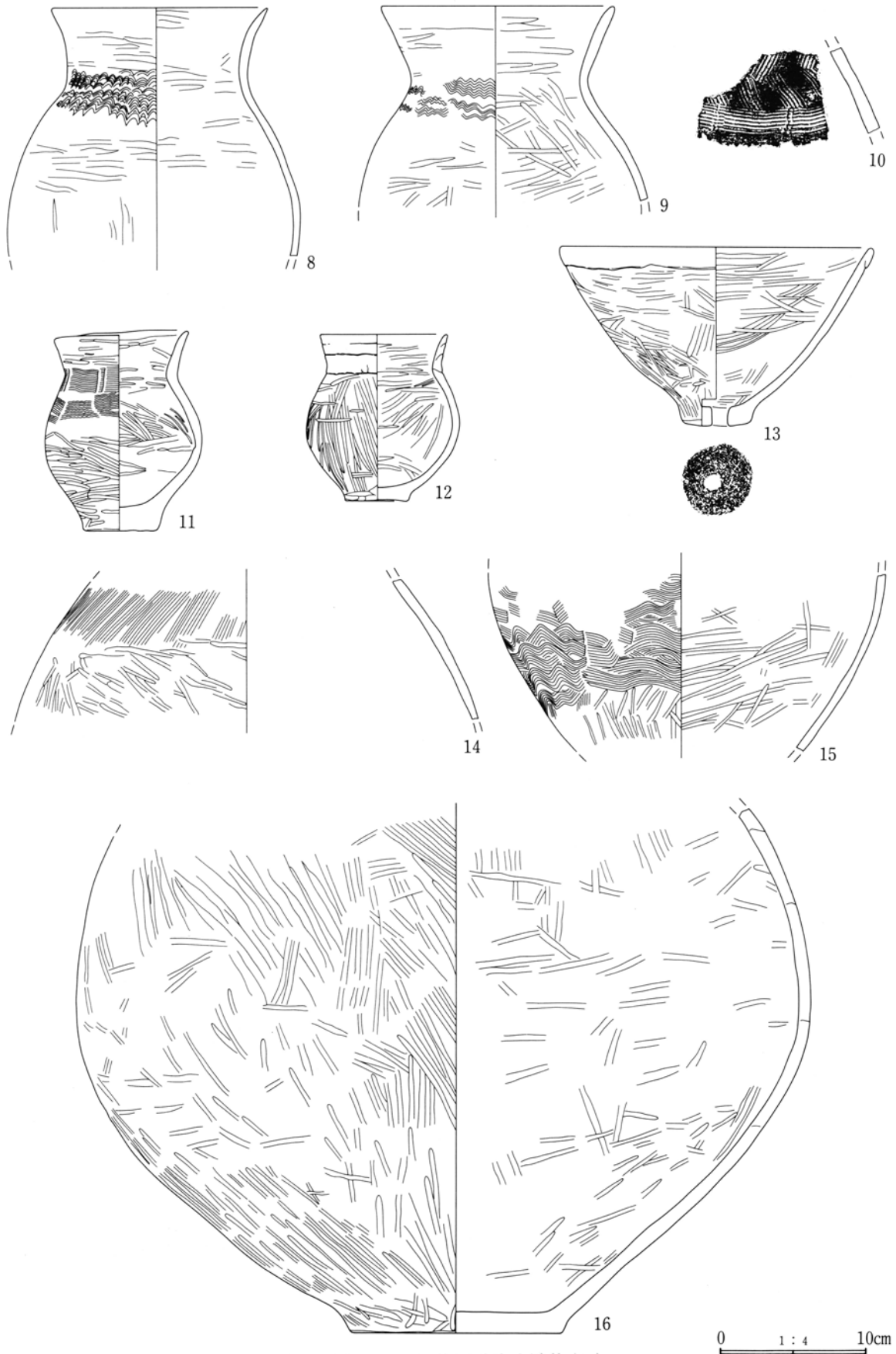
0 1:4 10cm



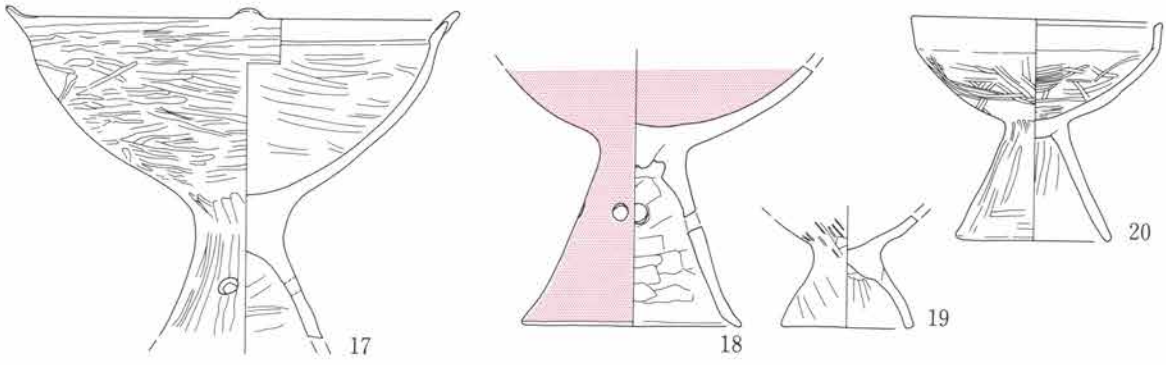
第552図 C270号住居跡出土遺物(2)



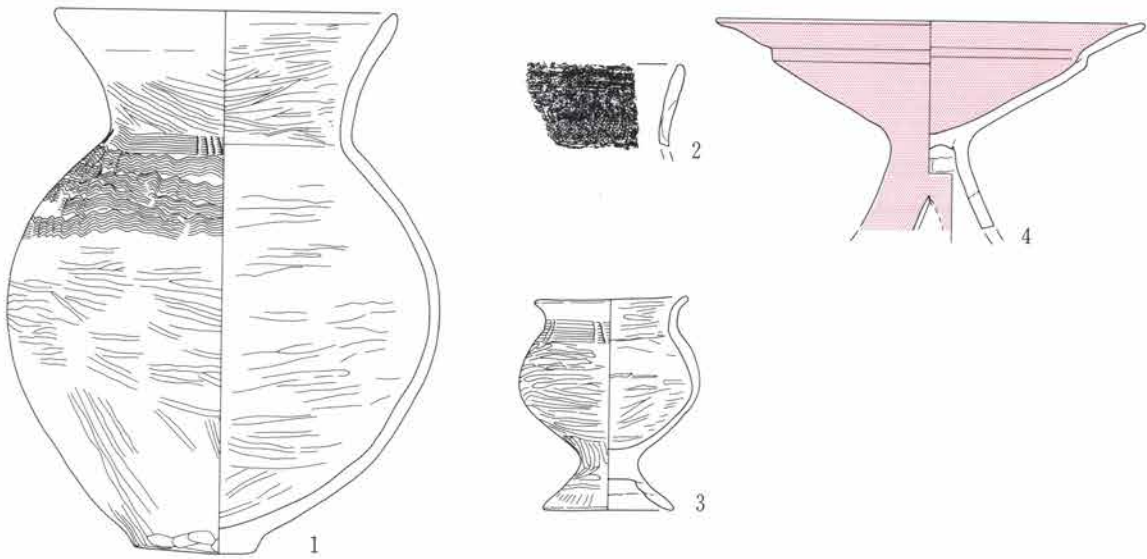
第553図 C275号住居跡出土遺物(1)



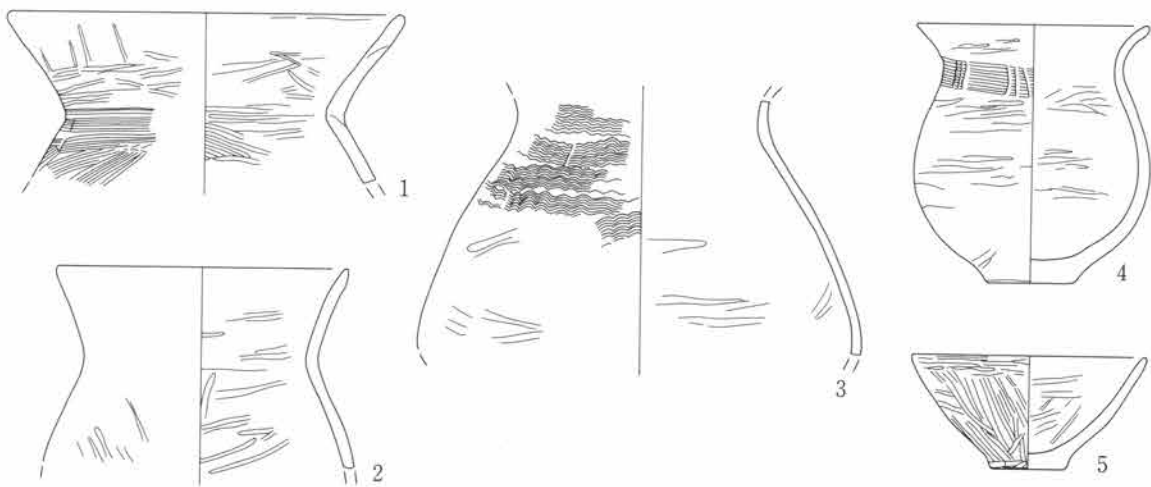
第554図 C275号住居跡出土遺物(2)



第555図 C275号住居跡出土遺物(3)

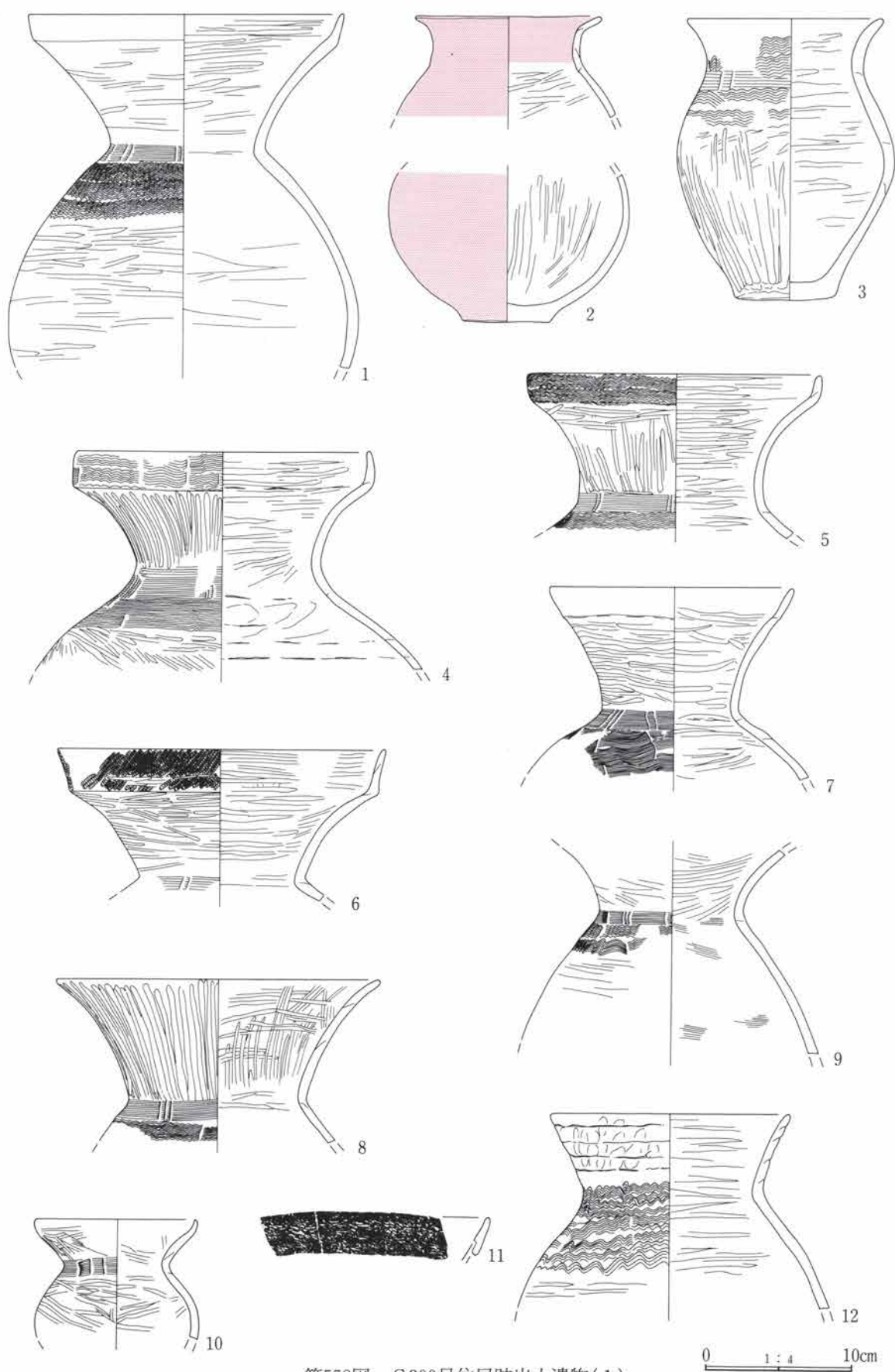


第556図 C277号住居跡出土遺物

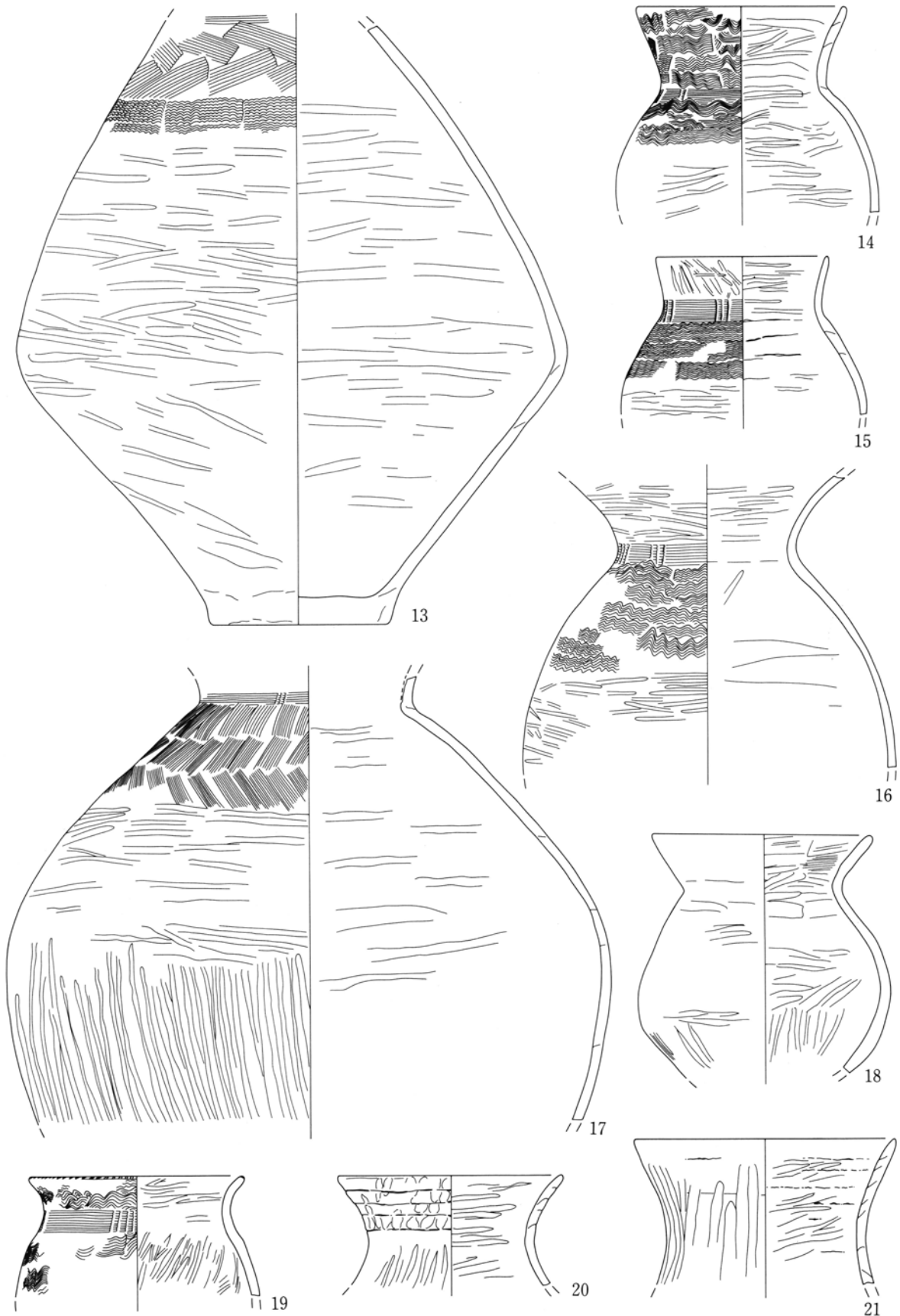


第557図 C297号住居跡出土遺物

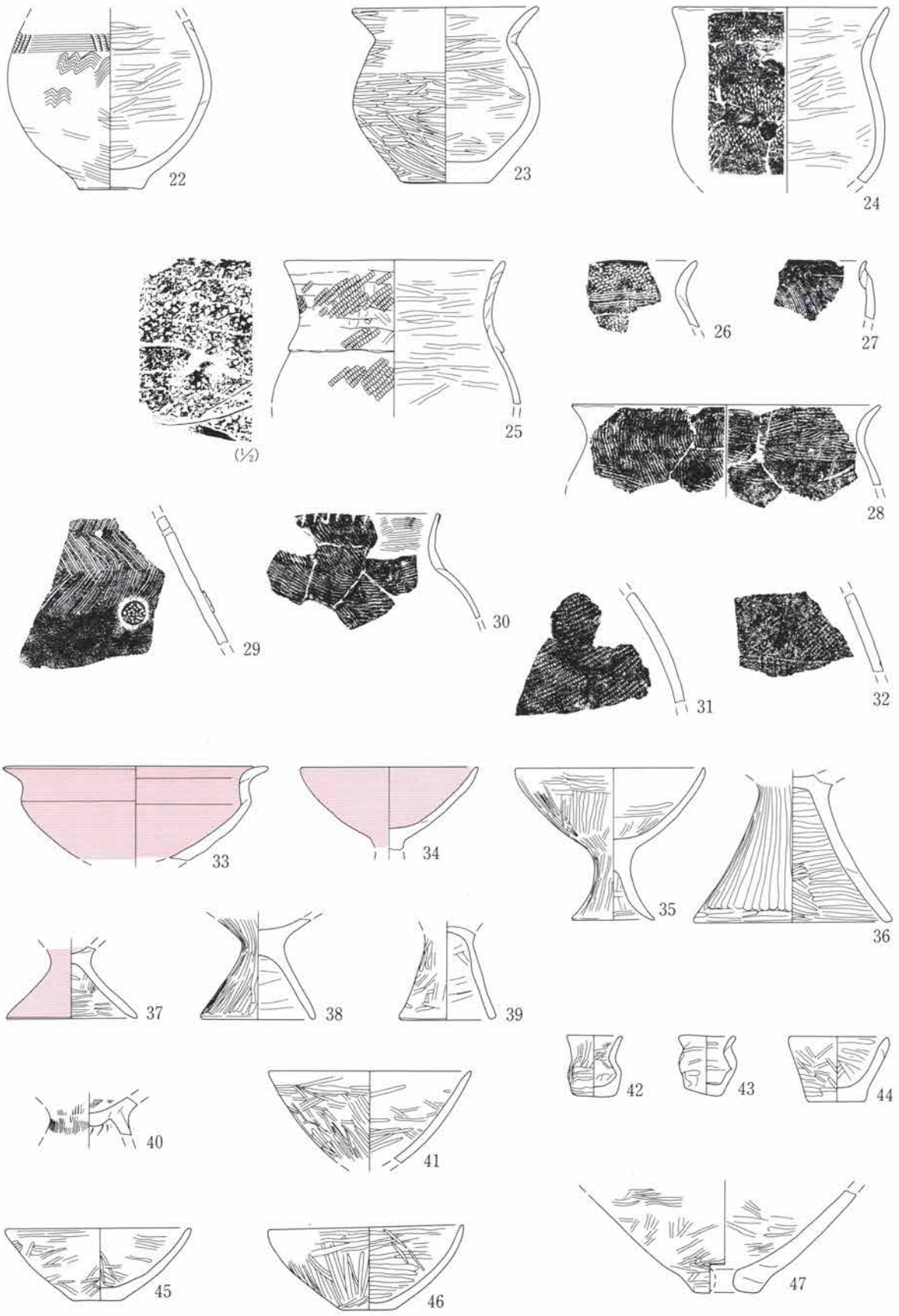
0 1:4 10cm



第558图 C300号住居跡出土遺物(1)

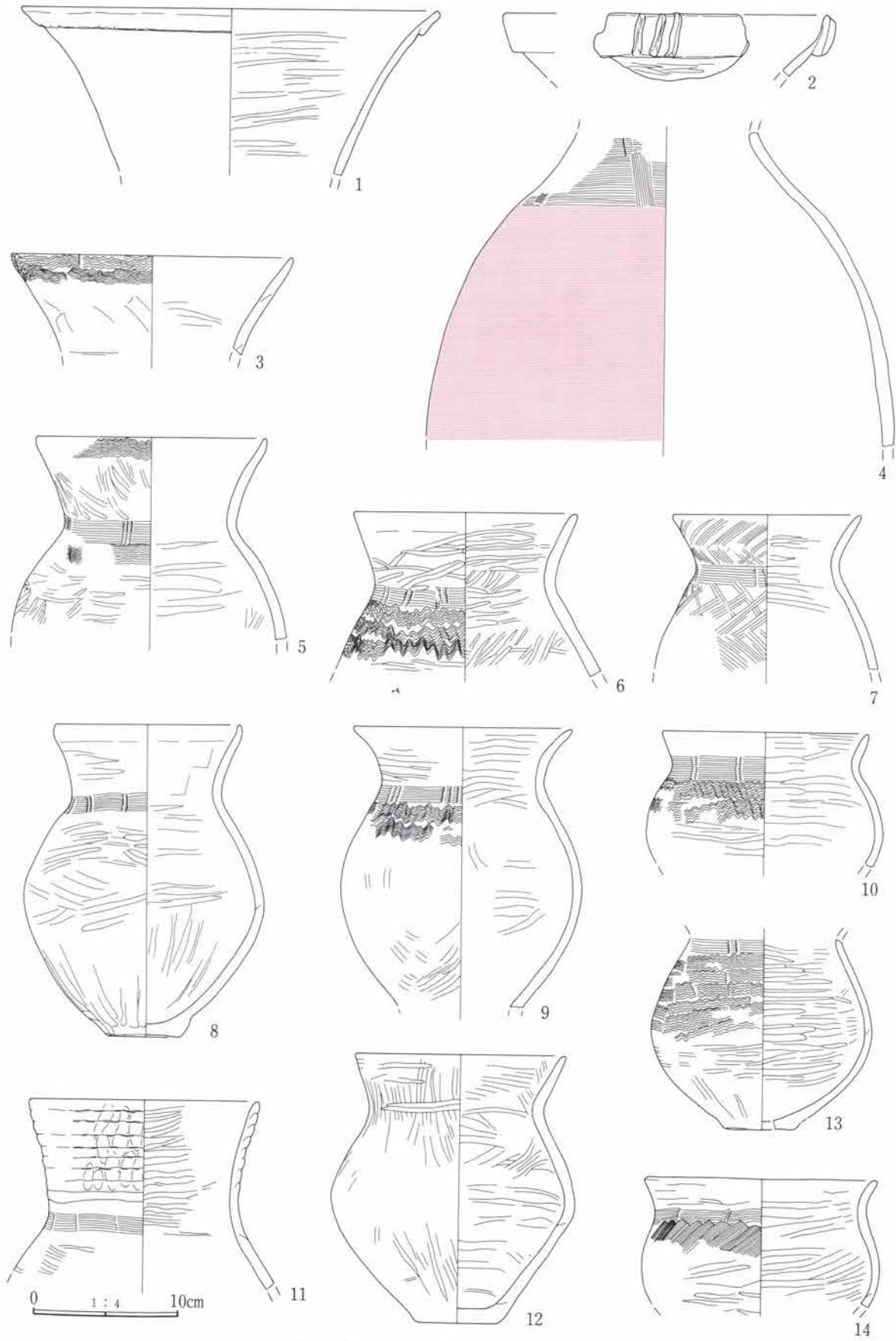


第559図 C300号住居跡出土遺物(2)



第560図 C300号住居跡出土遺物(3)

0 1:4 10cm



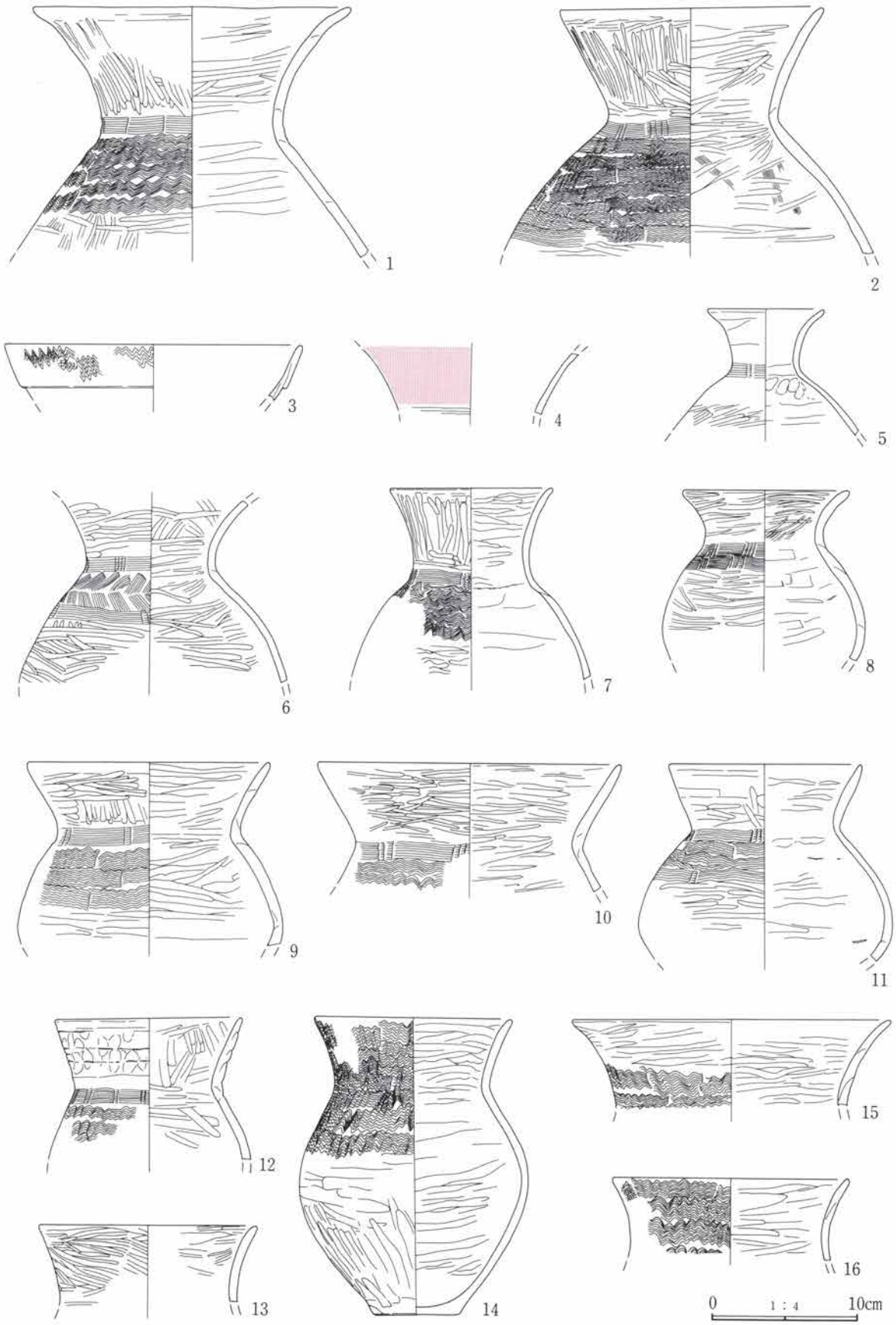
第561図 C303号住居跡出土遺物(1)

第4章 出土遺物



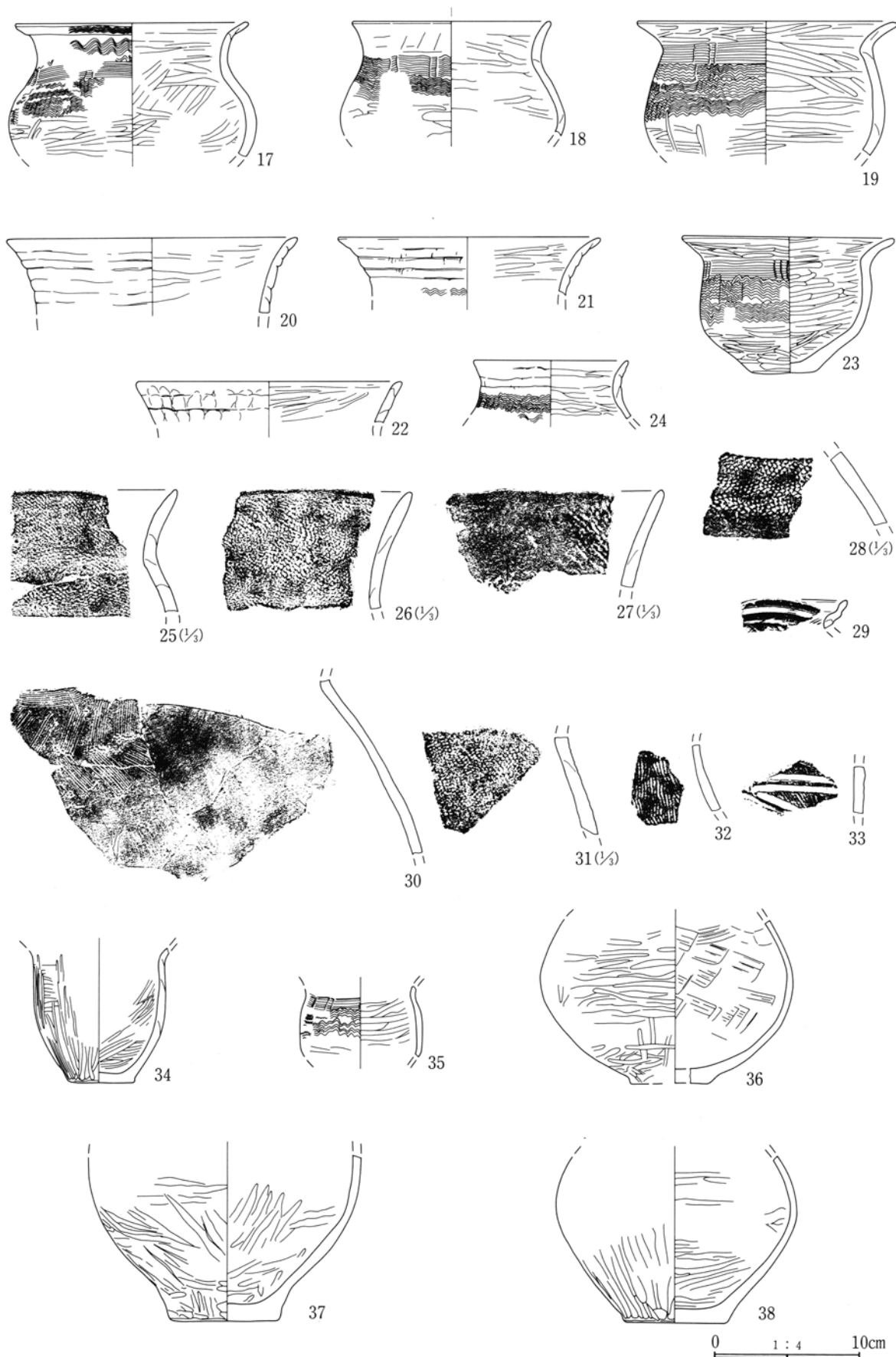
第562図 C303号住居跡出土遺物(2)

0 1:4 10cm

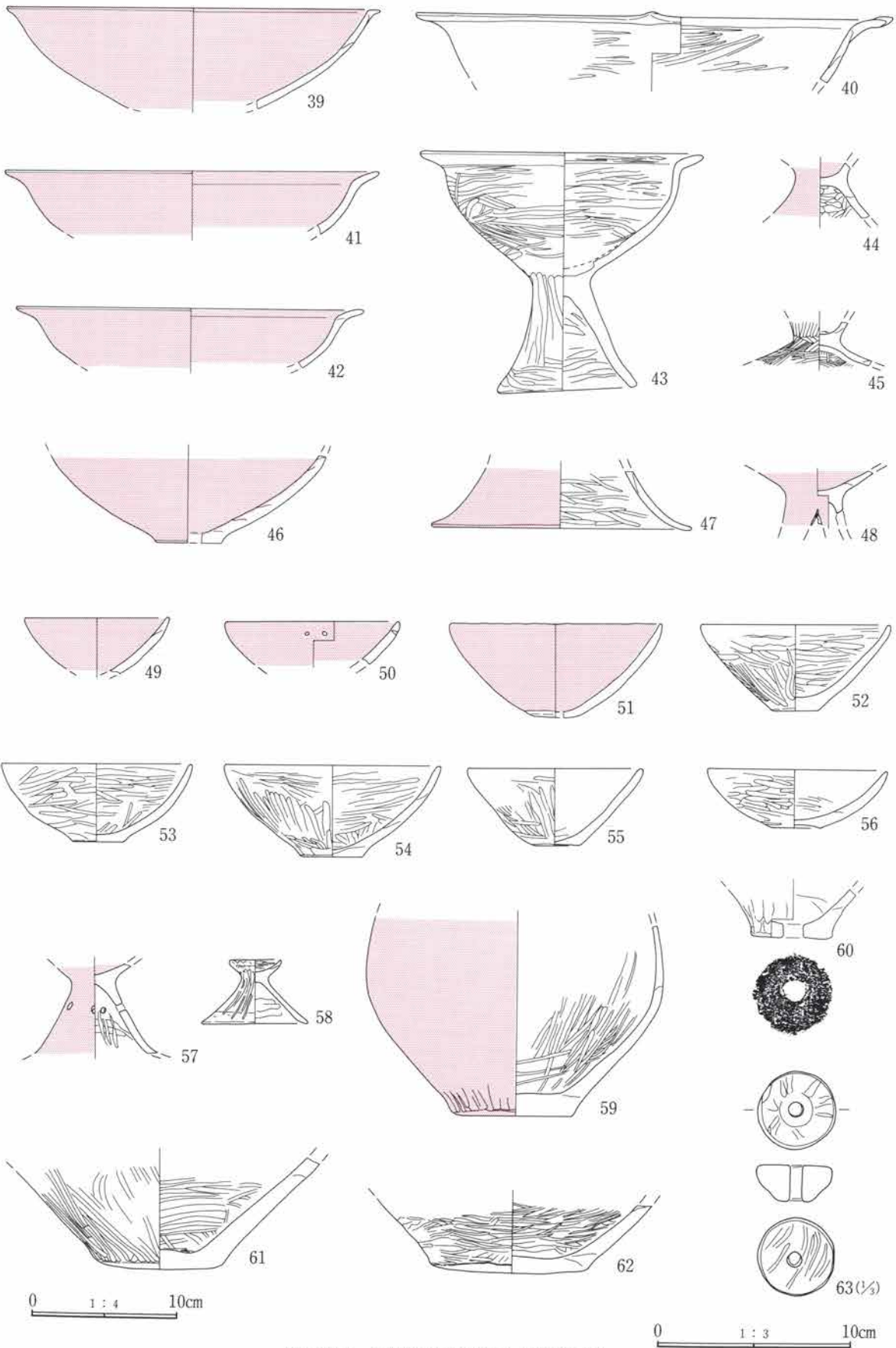


第563図 C324号住居跡出土遺物(1)

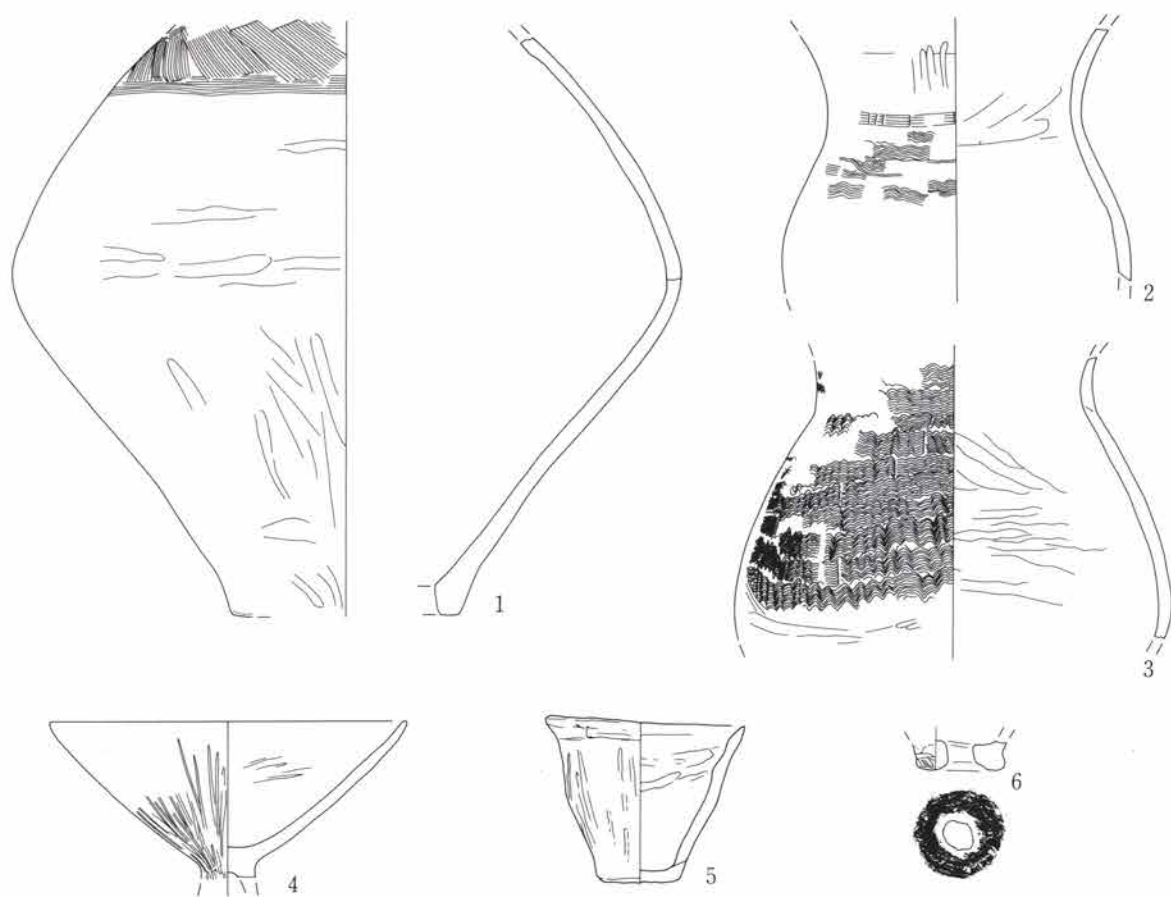
第4章 出土遺物



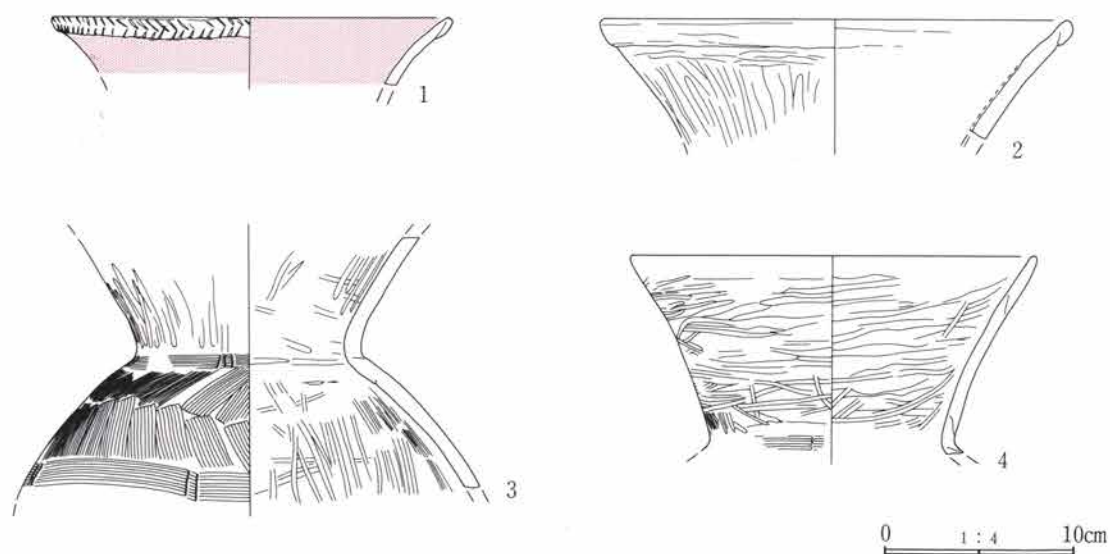
第564図 C324号住居跡出土遺物(2)



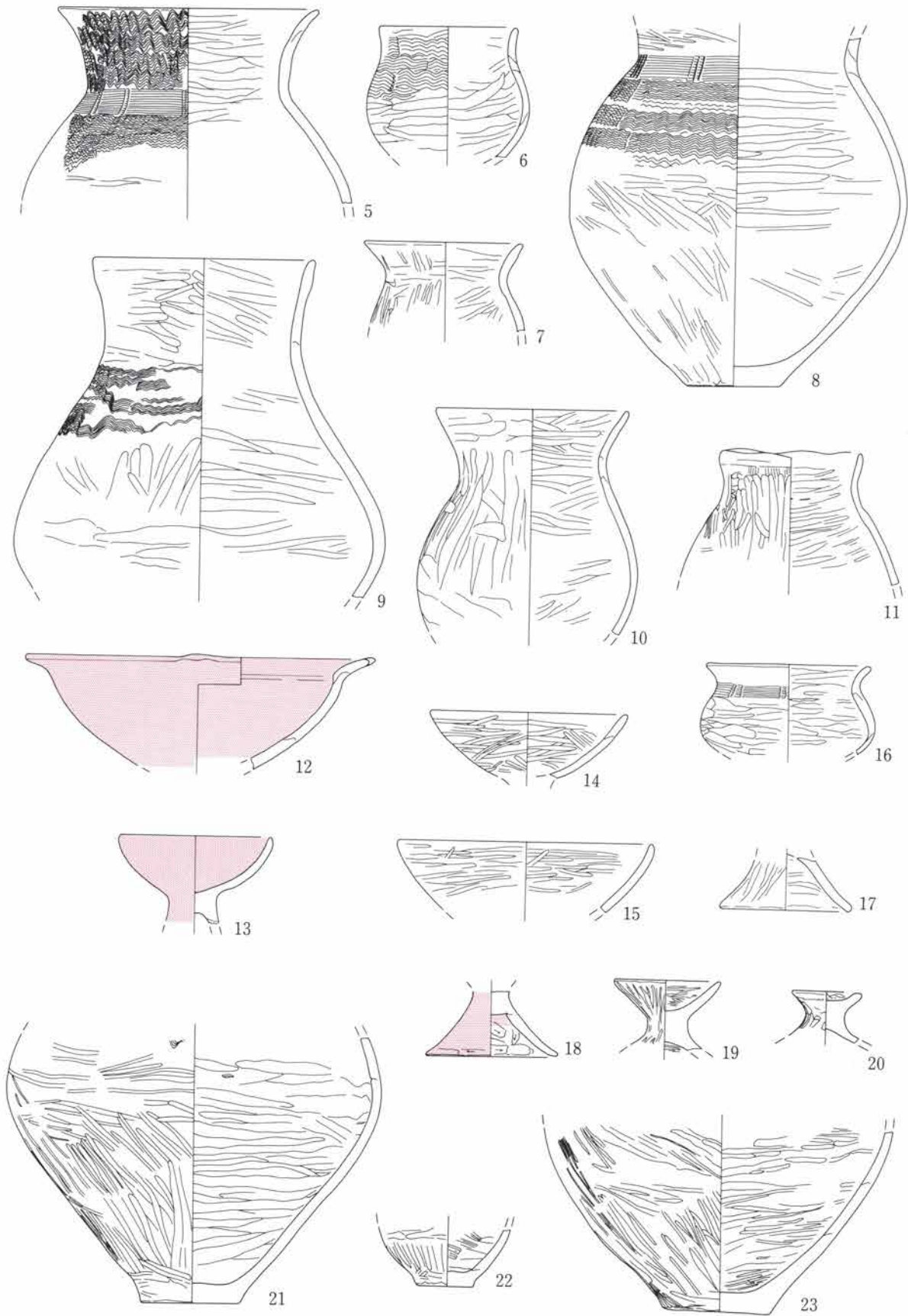
第565図 C324号住居跡出土遺物(3)



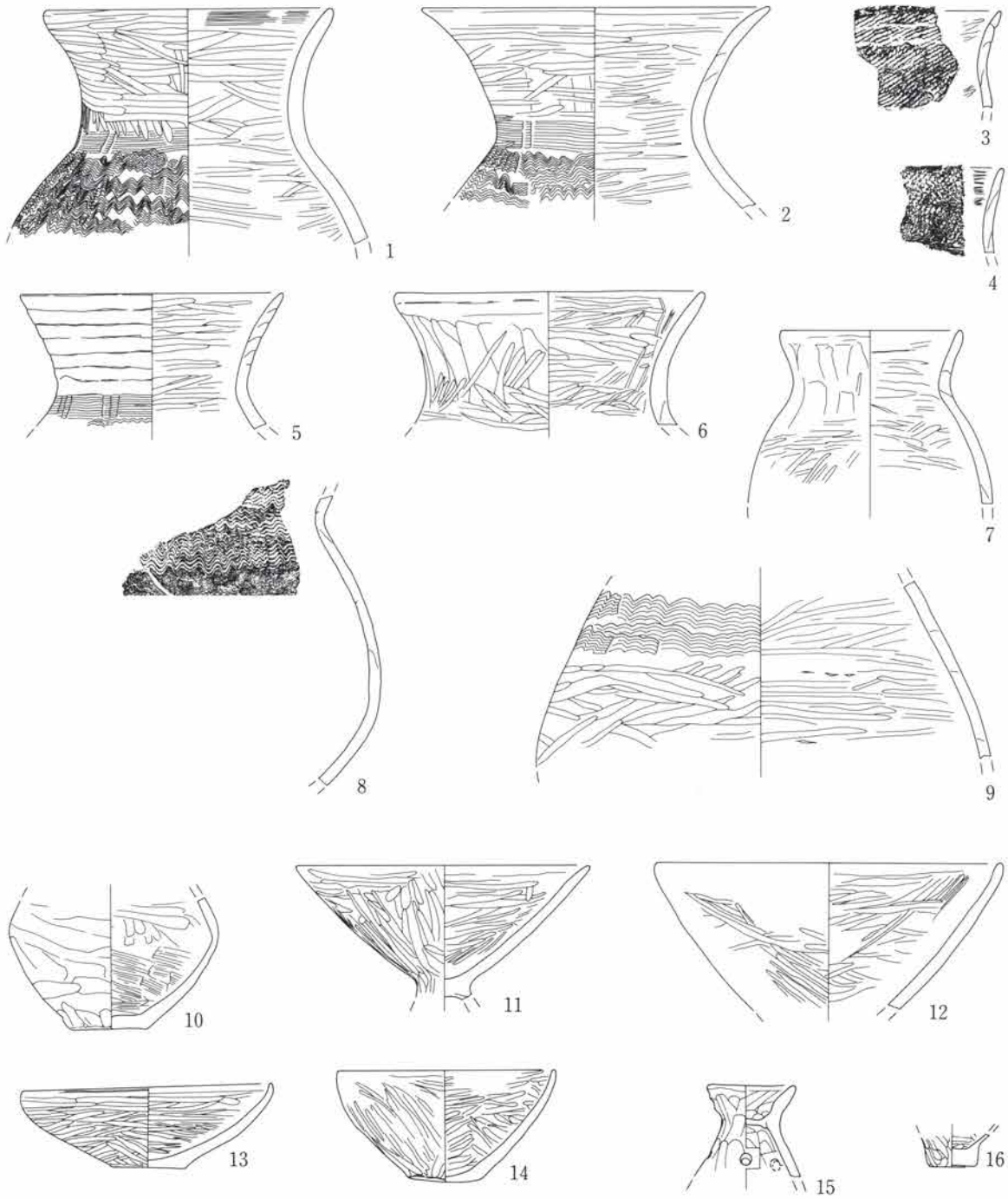
第566图 C332号住居跡出土遺物



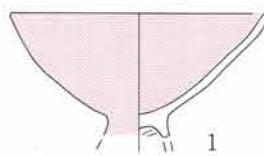
第567图 C336号住居跡出土遺物(1)



第568図 C336号住居跡出土遺物(2)

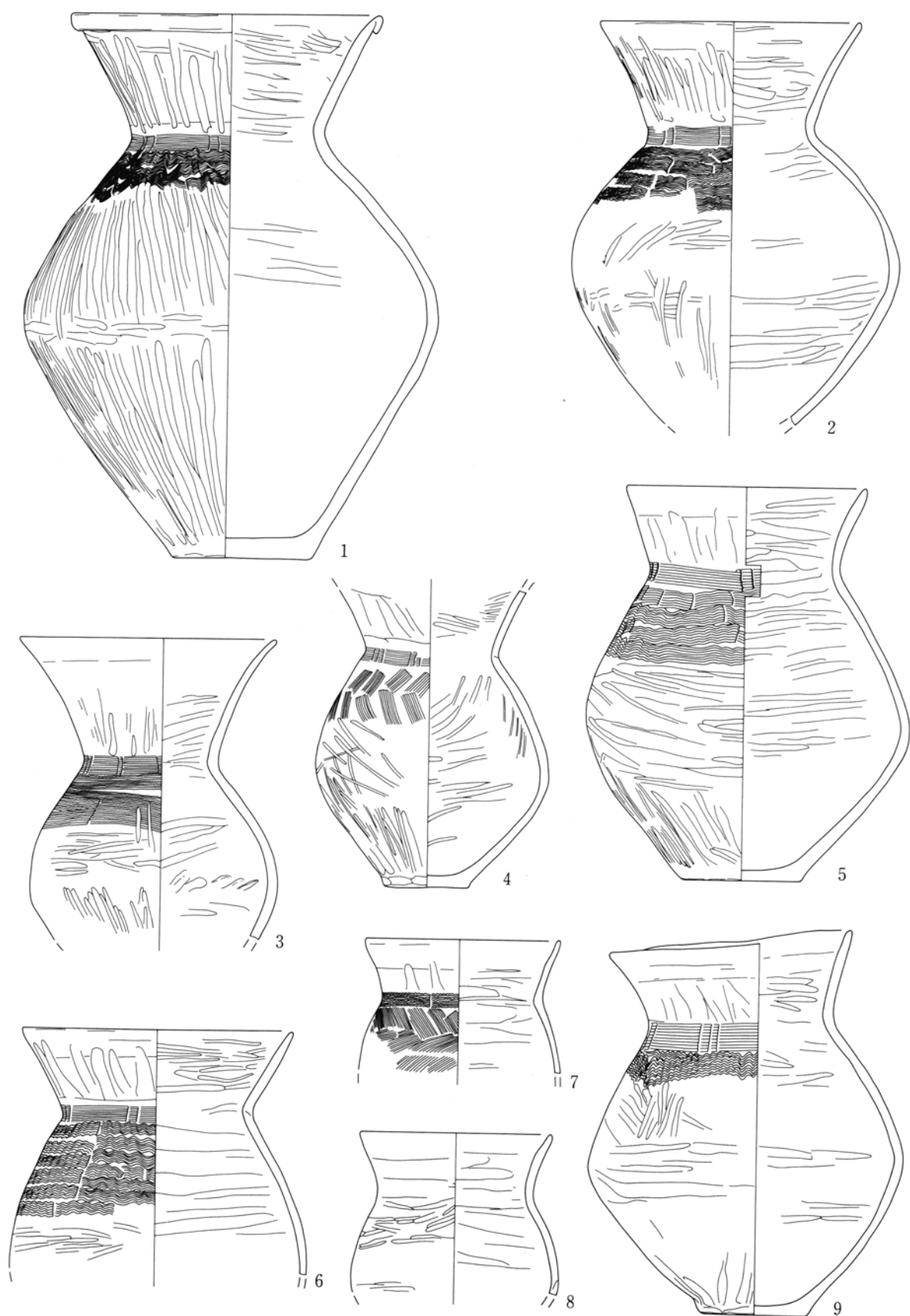


第569図 C338号住居跡出土遺物



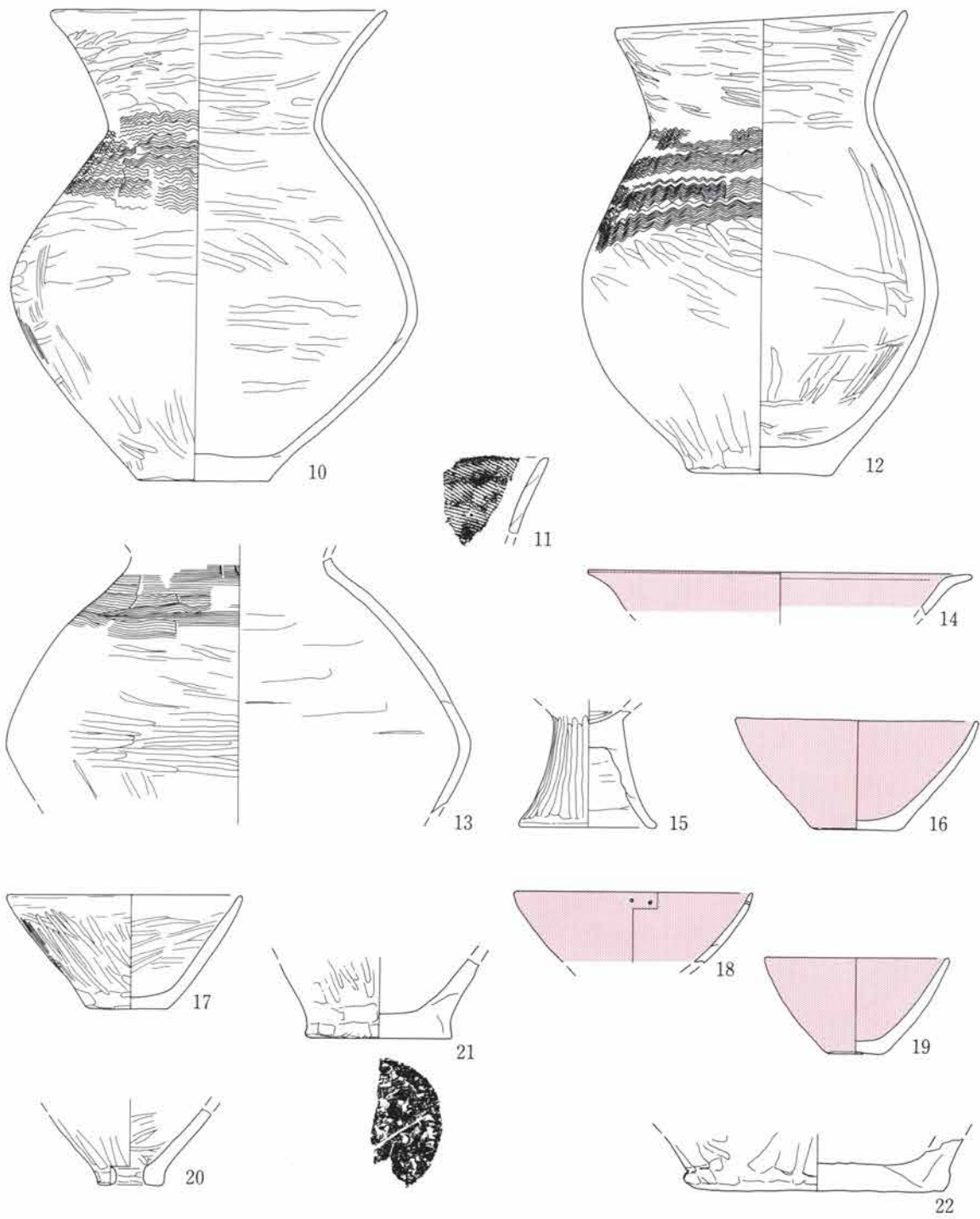
第570図 C339号住居跡出土遺物

0 1 : 4 10cm



第571図 C344号住居跡出土遺物(1)

0 1:4 10cm



第572図 C344号住居跡出土遺物(2)

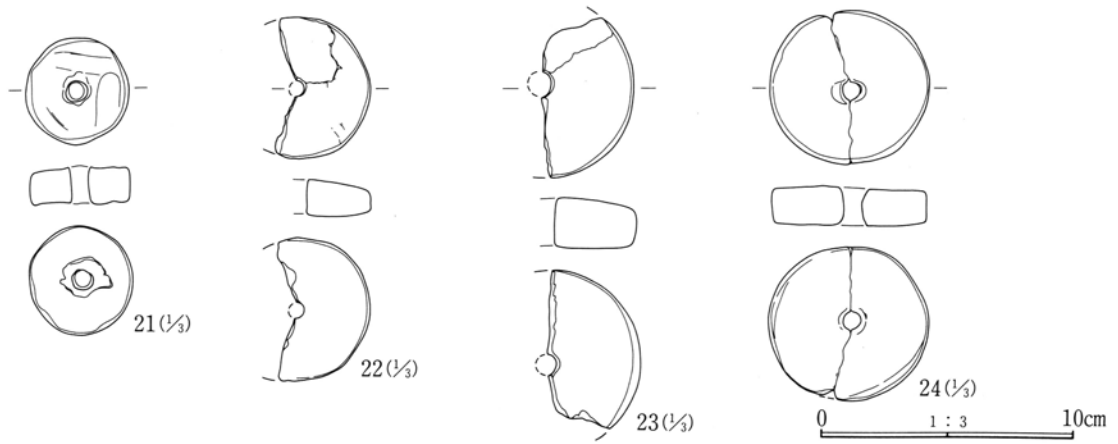
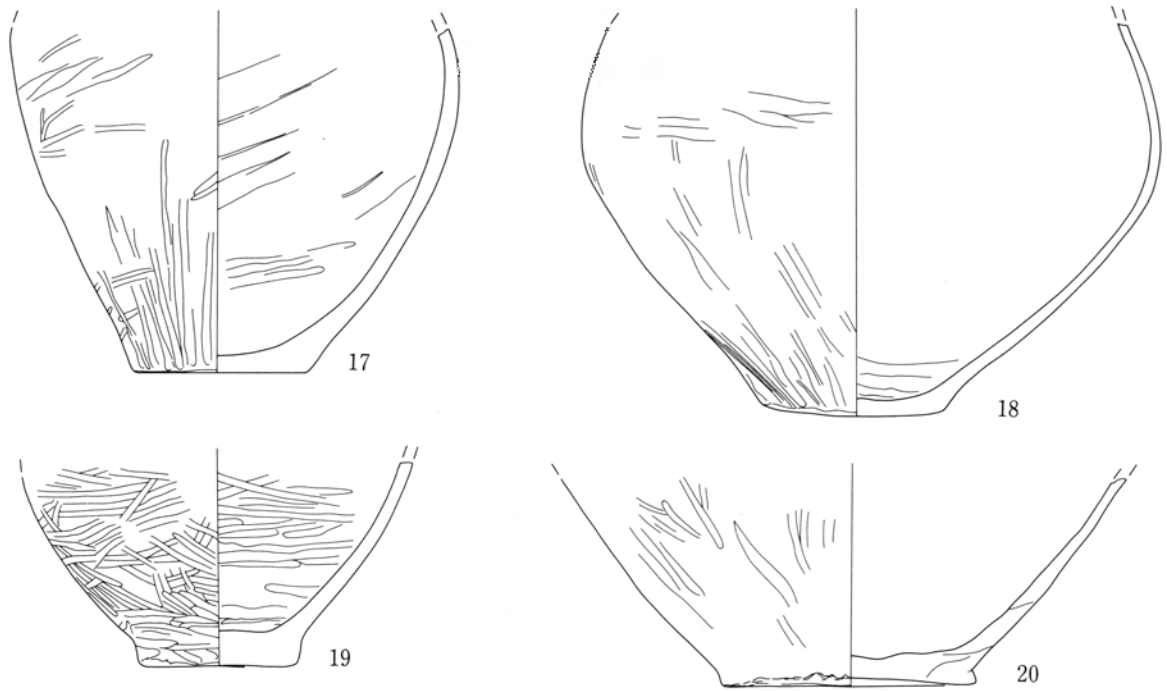


第573図 C345号住居跡出土遺物

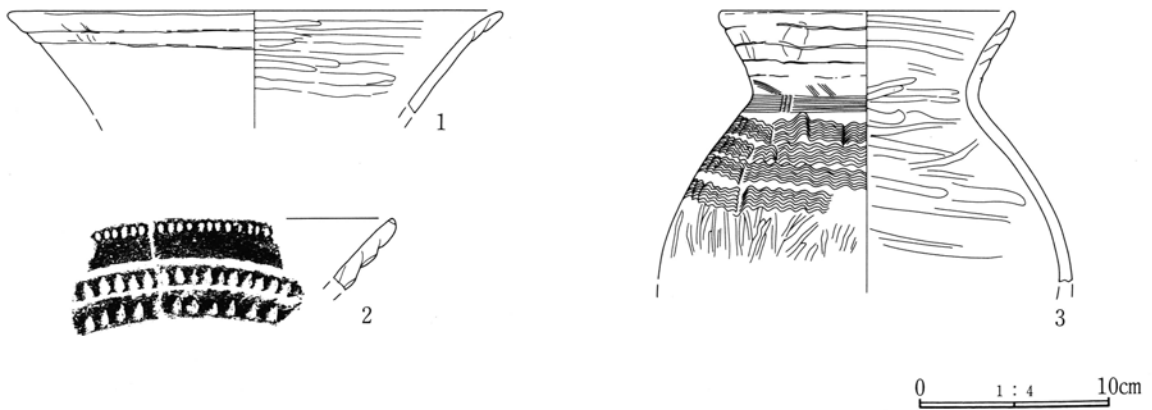
0 1 : 4 10cm



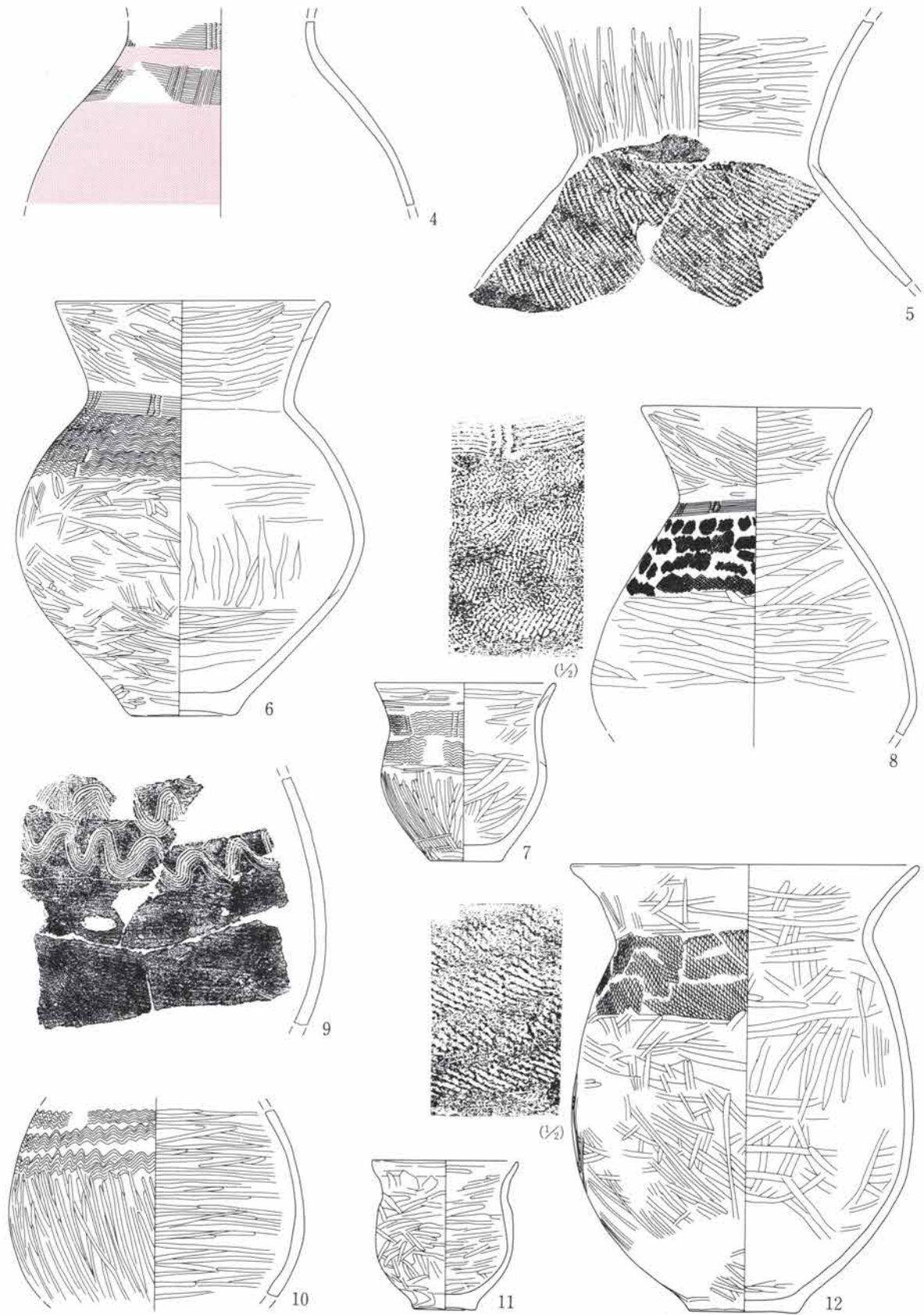
第574図 C347号住居跡出土遺物(1)



第575図 C347号住居跡出土遺物(2)

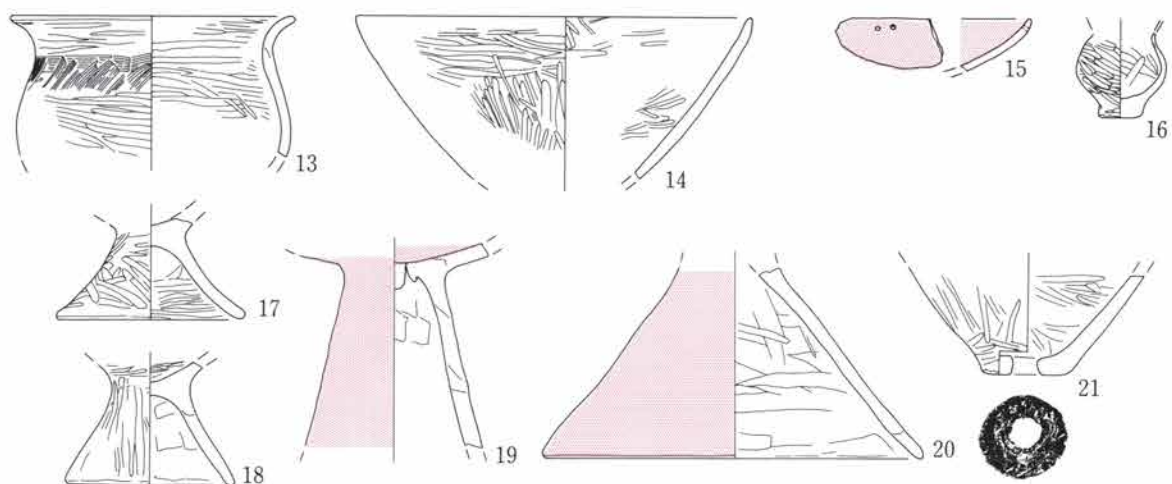


第576図 C353号住居跡出土遺物(1)

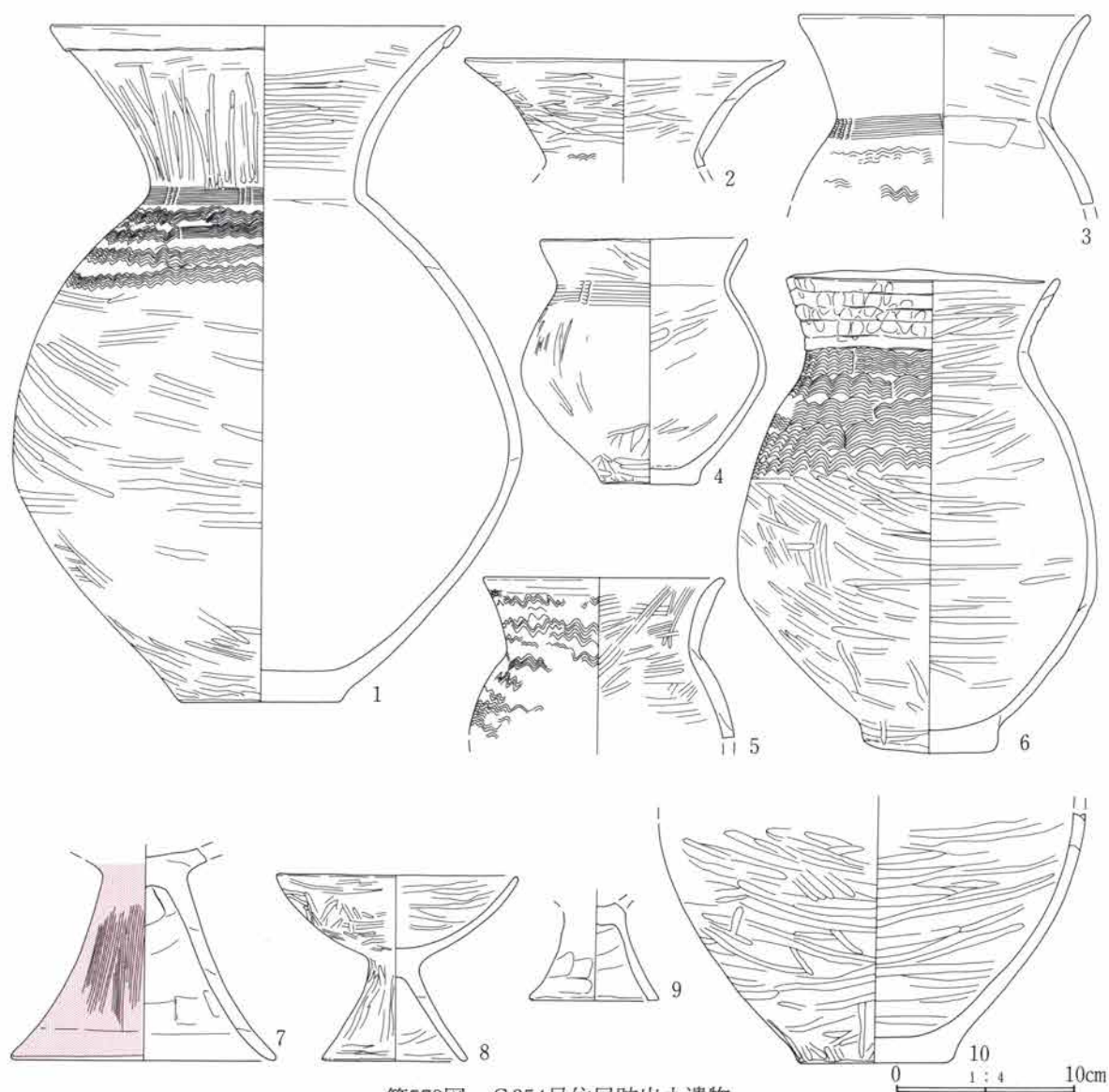


第577図 C353号住居跡出土遺物(2)

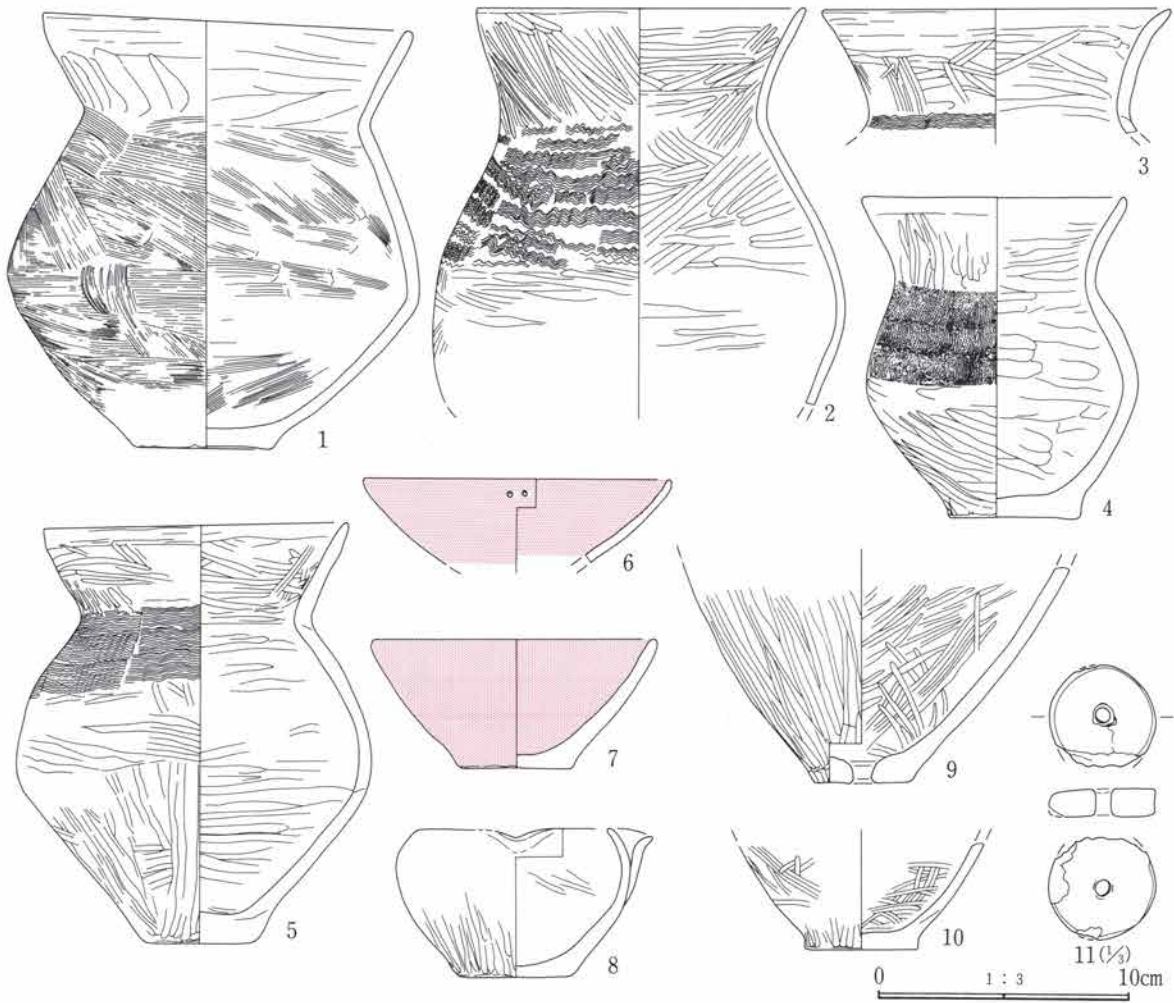
0 1:4 10cm



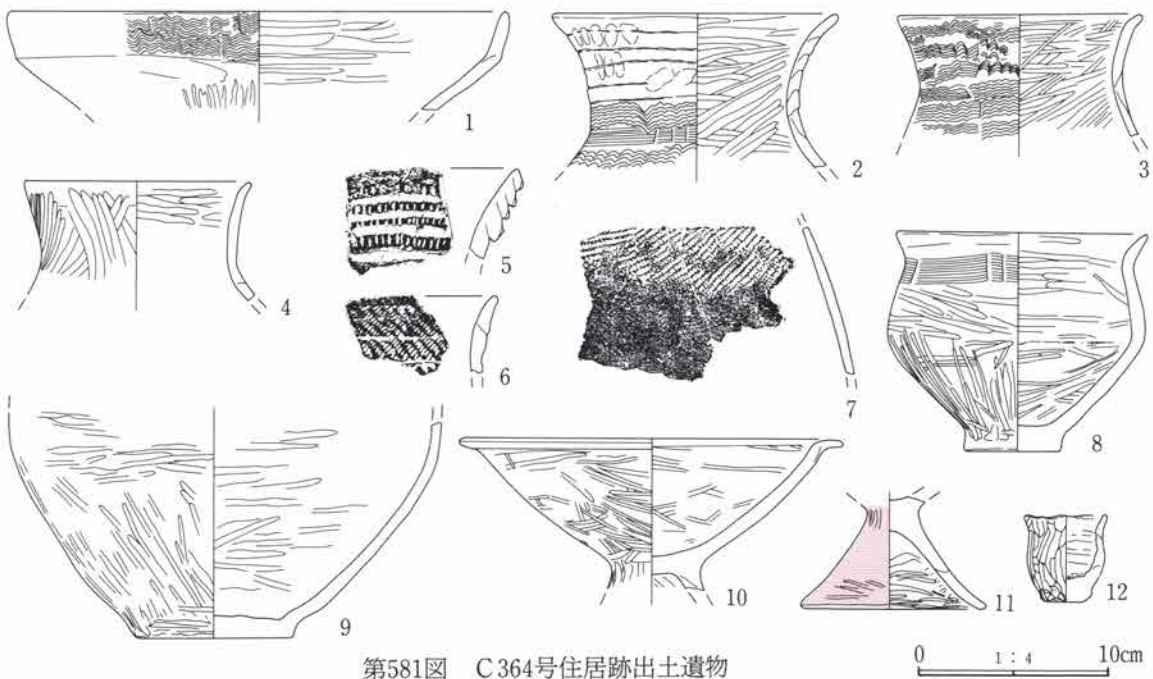
第578図 C353号住居跡出土遺物(3)



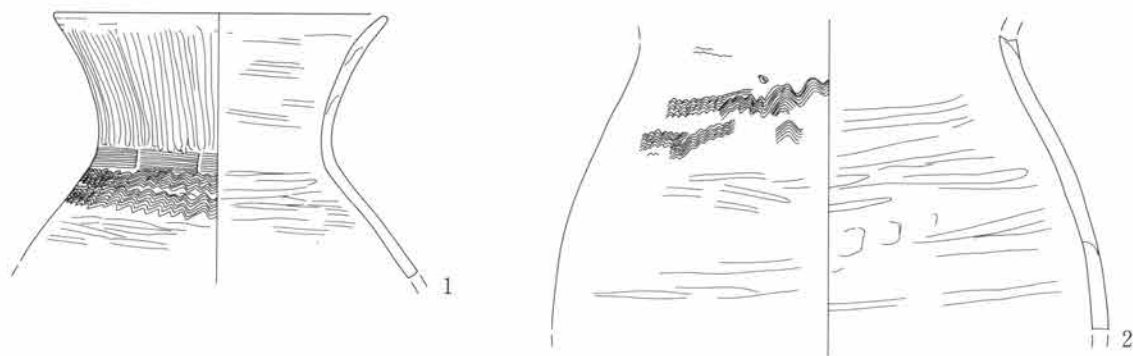
第579図 C354号住居跡出土遺物



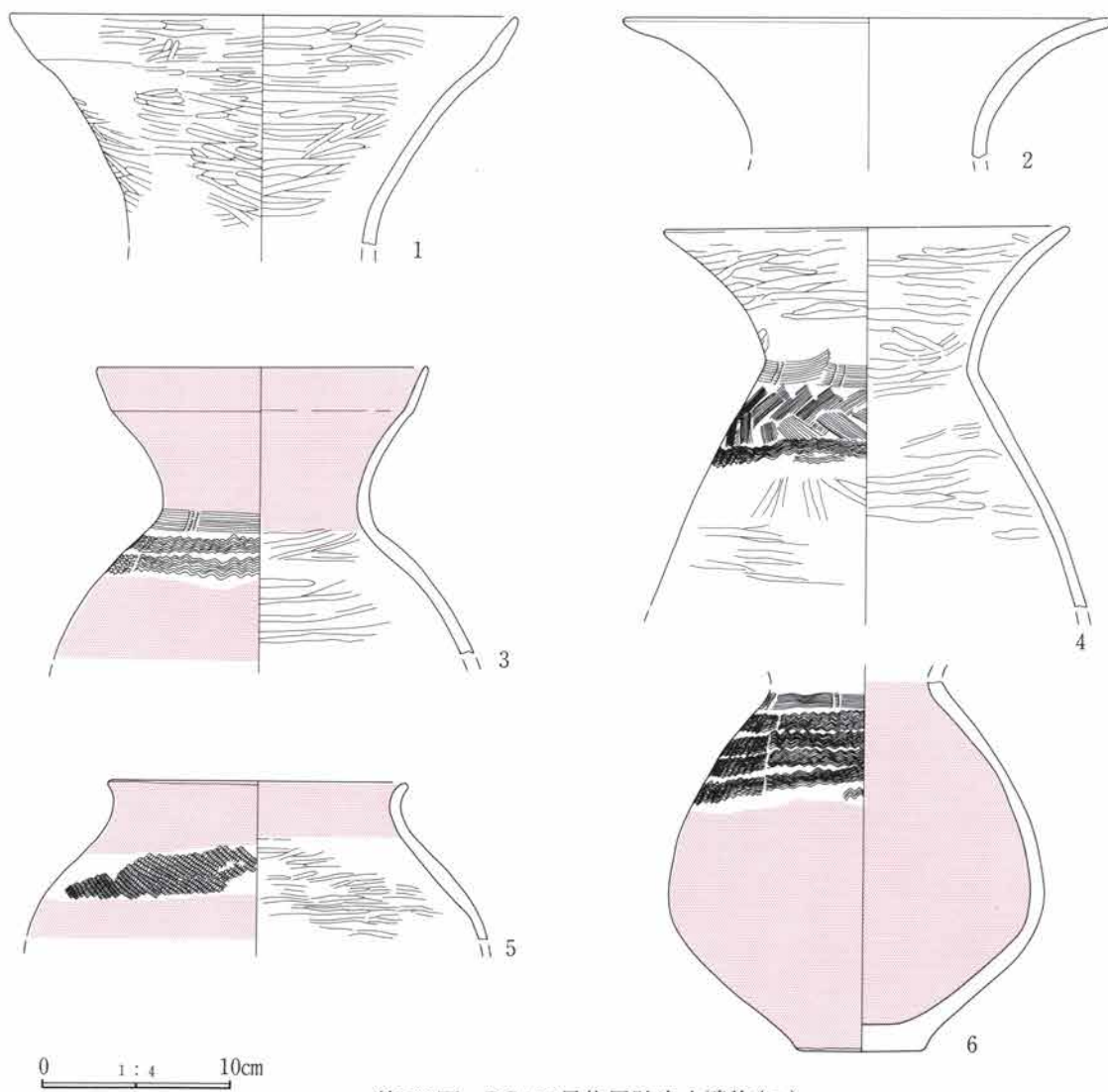
第580図 C361号住居跡出土遺物



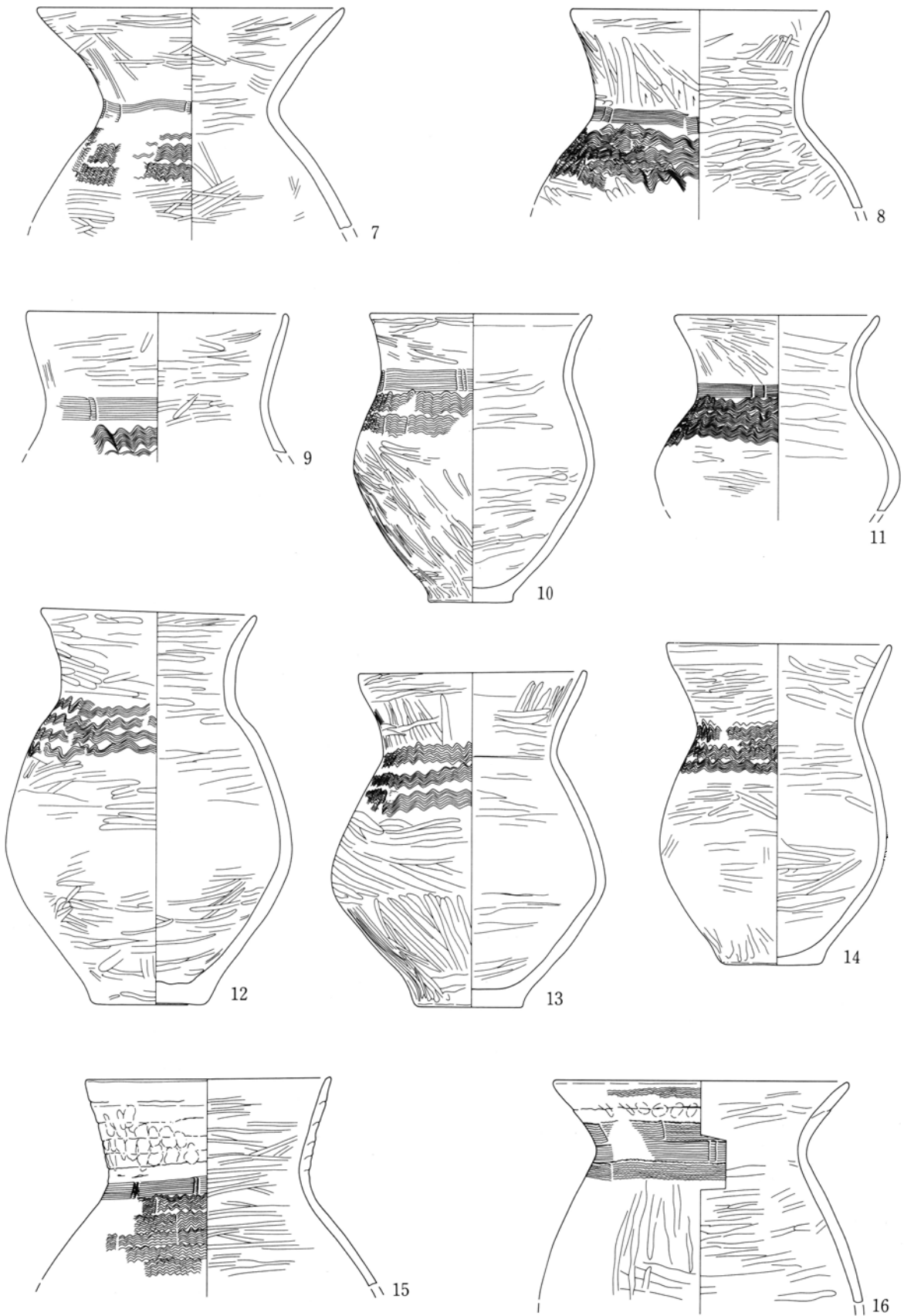
第581図 C364号住居跡出土遺物



第582図 C366号住居跡出土遺物

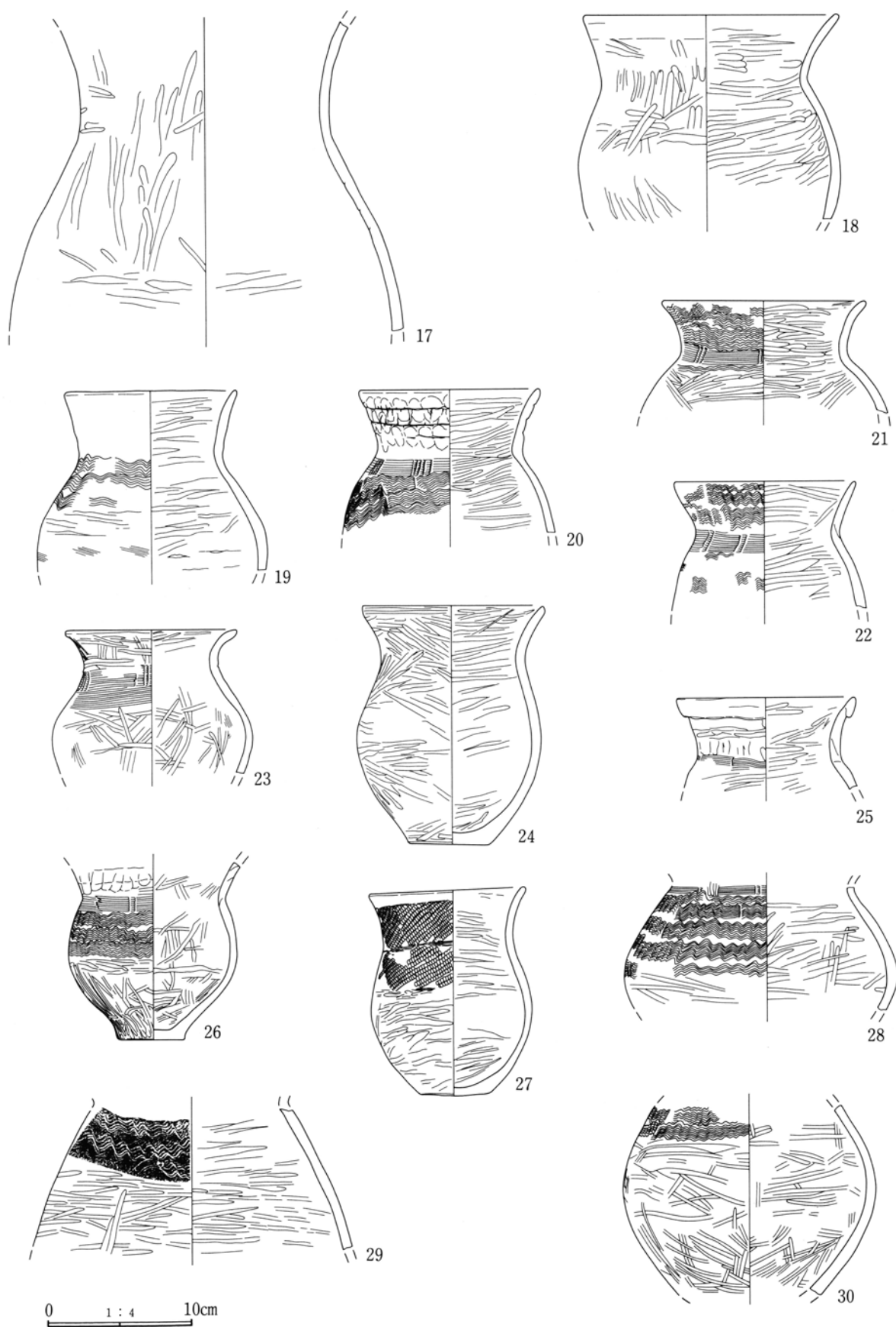


第583図 DS103号住居跡出土遺物(1)



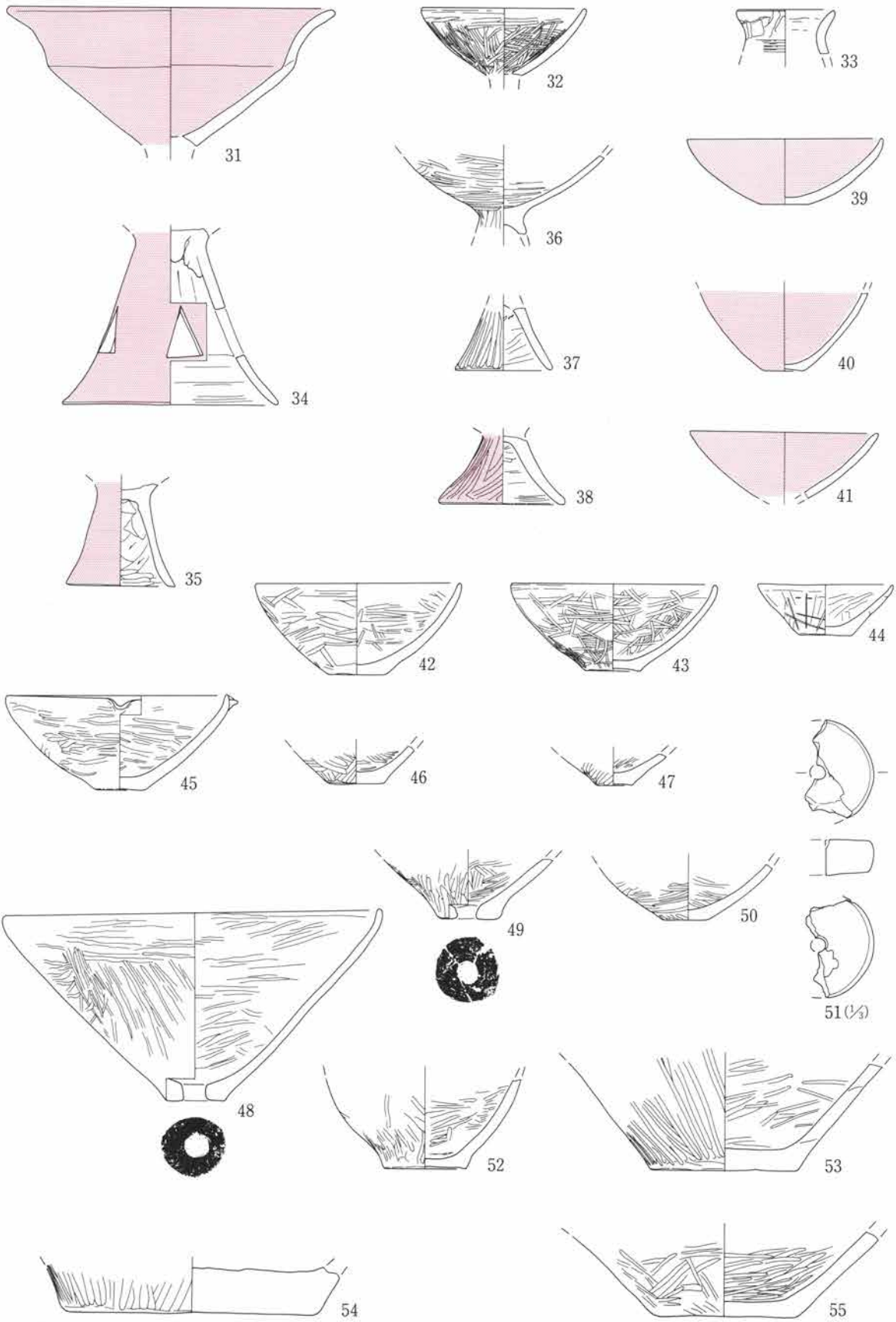
第584図 DS 103号住居跡出土遺物(2)

0 1:4 10cm



第585図 DS 103号住居跡出土遺物(3)

第2節 弥生土器

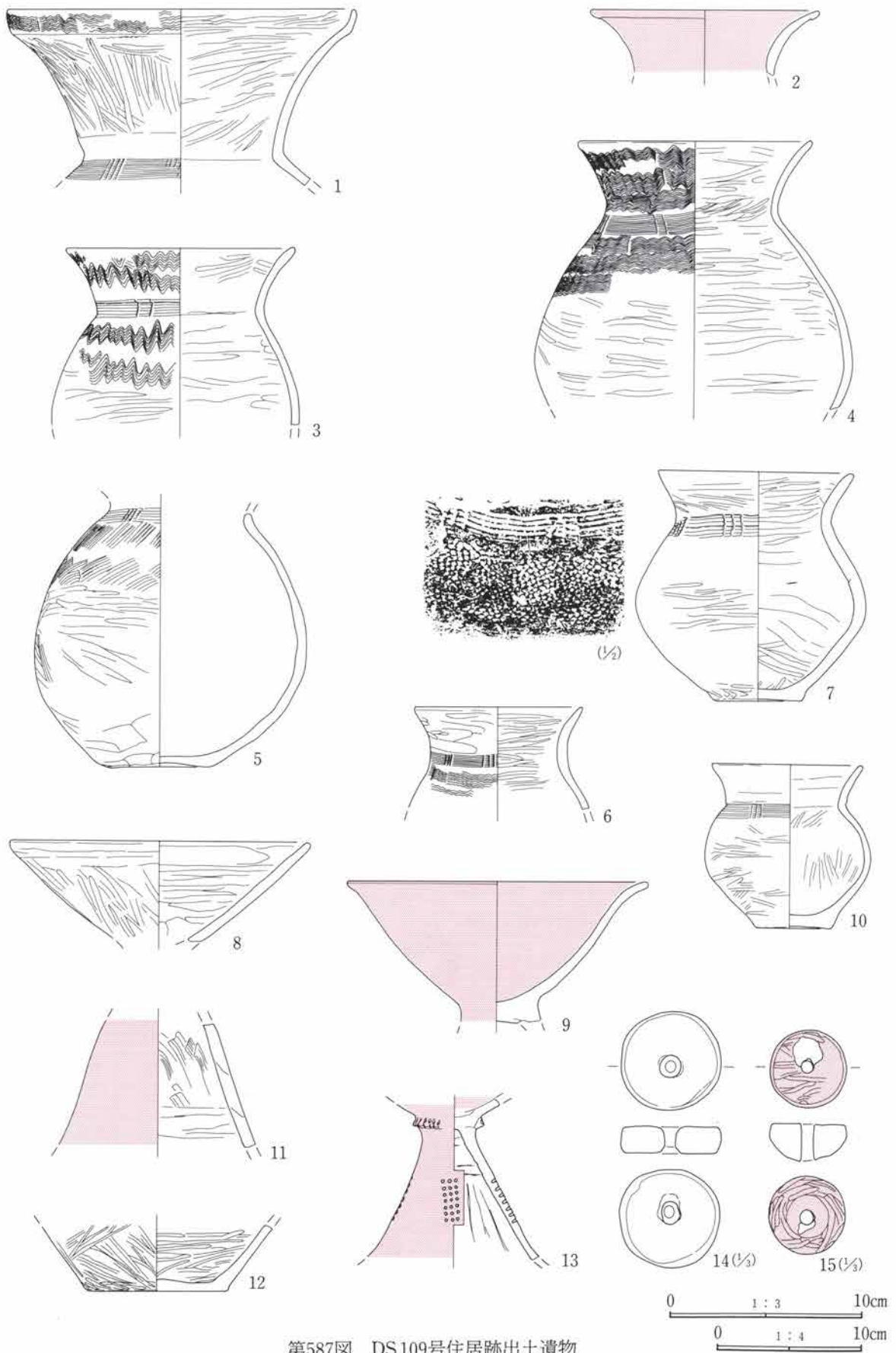


0 1:4 10cm

第586図 DS103号住居跡出土遺物(4)

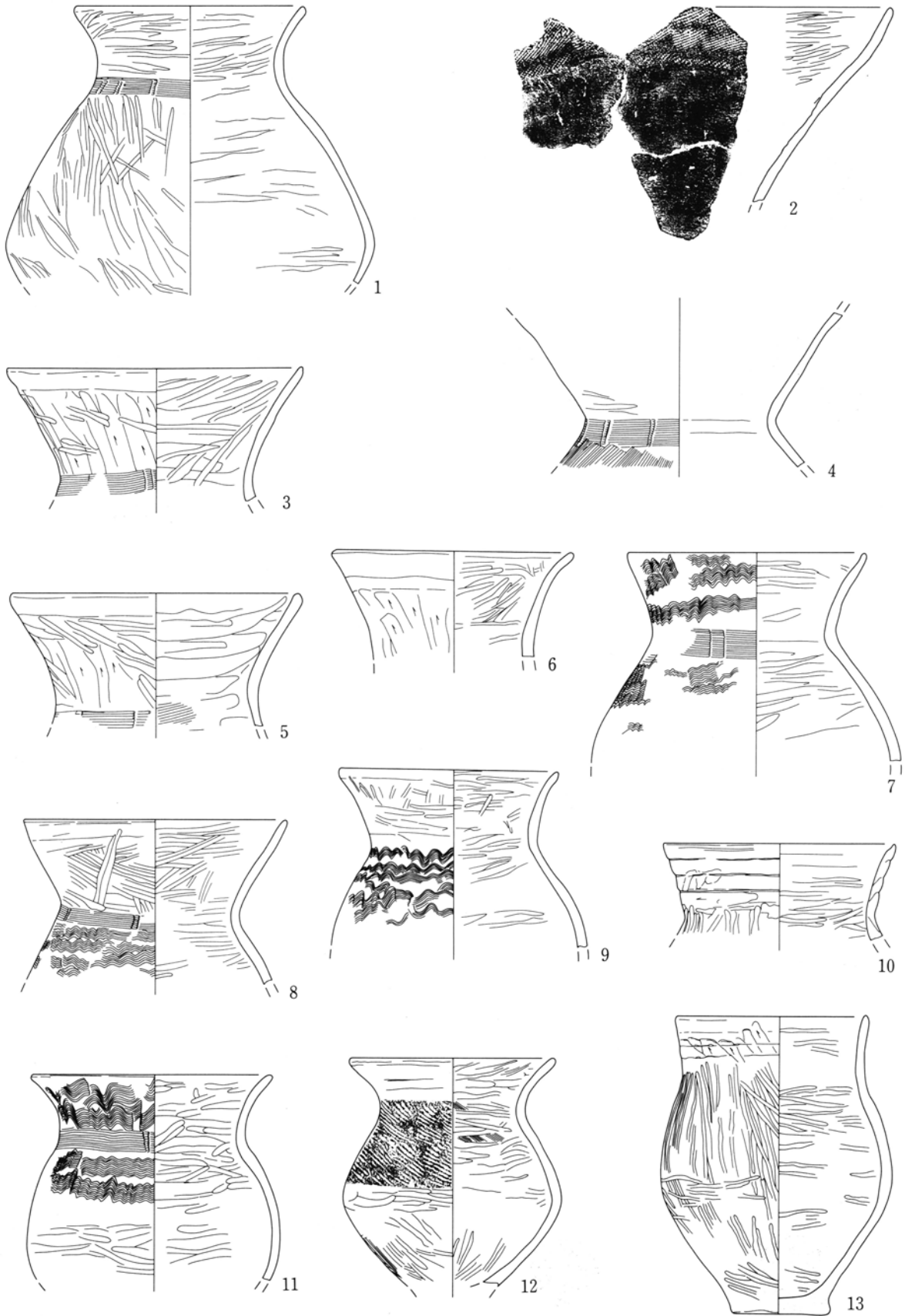
0 1:3 10cm

第4章 出土遺物



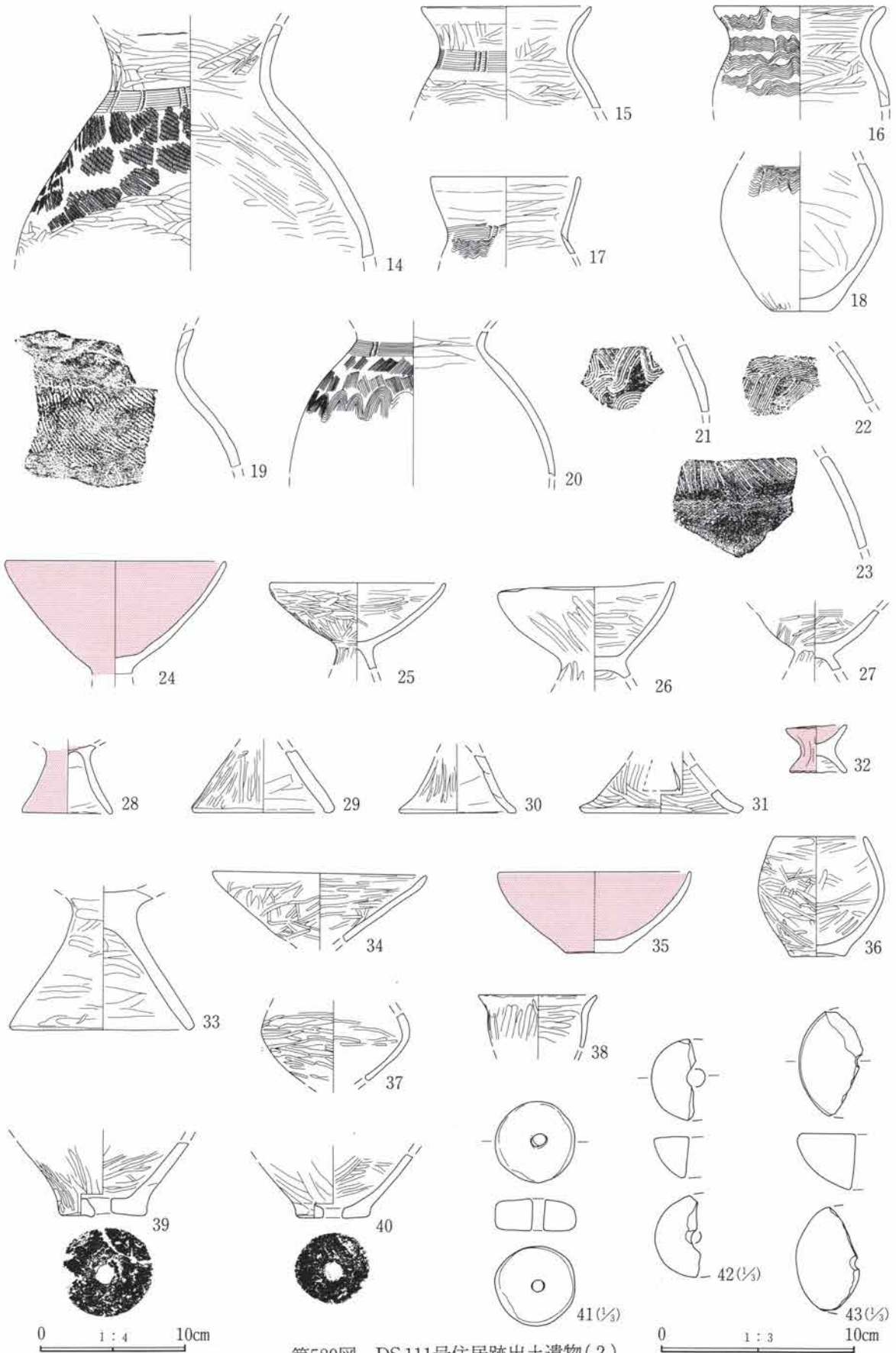
第587図 DS109号住居跡出土遺物

第2節 弥生土器



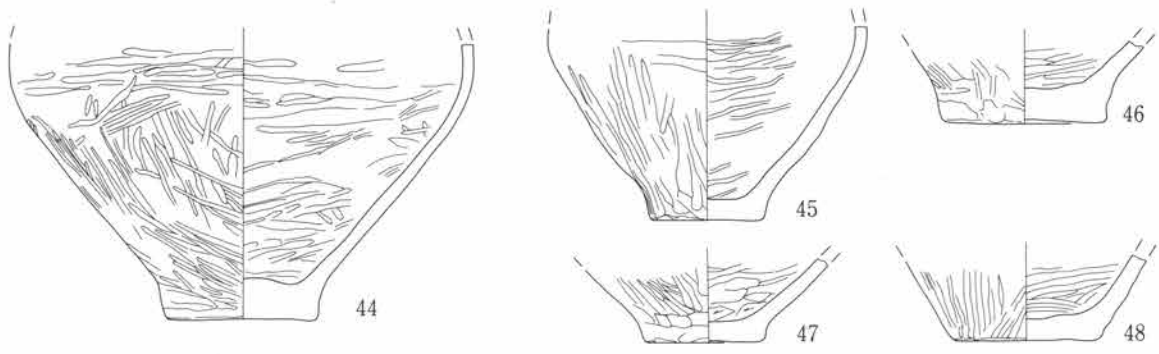
第588図 DS111号住居跡出土遺物(1)

0 1:4 10cm

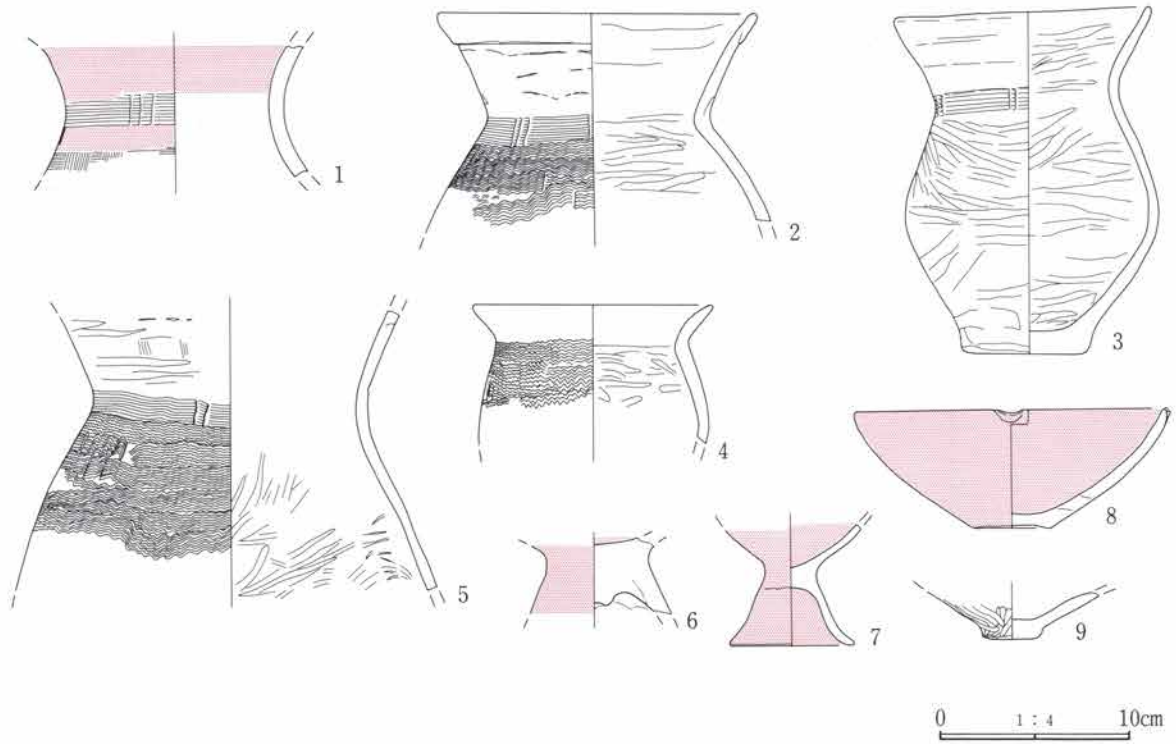


第589図 DS111号住居跡出土遺物(2)

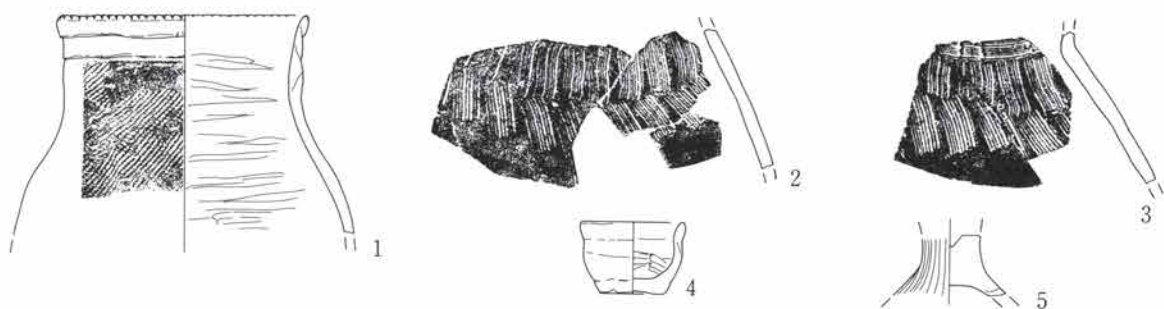
第2節 弥生土器



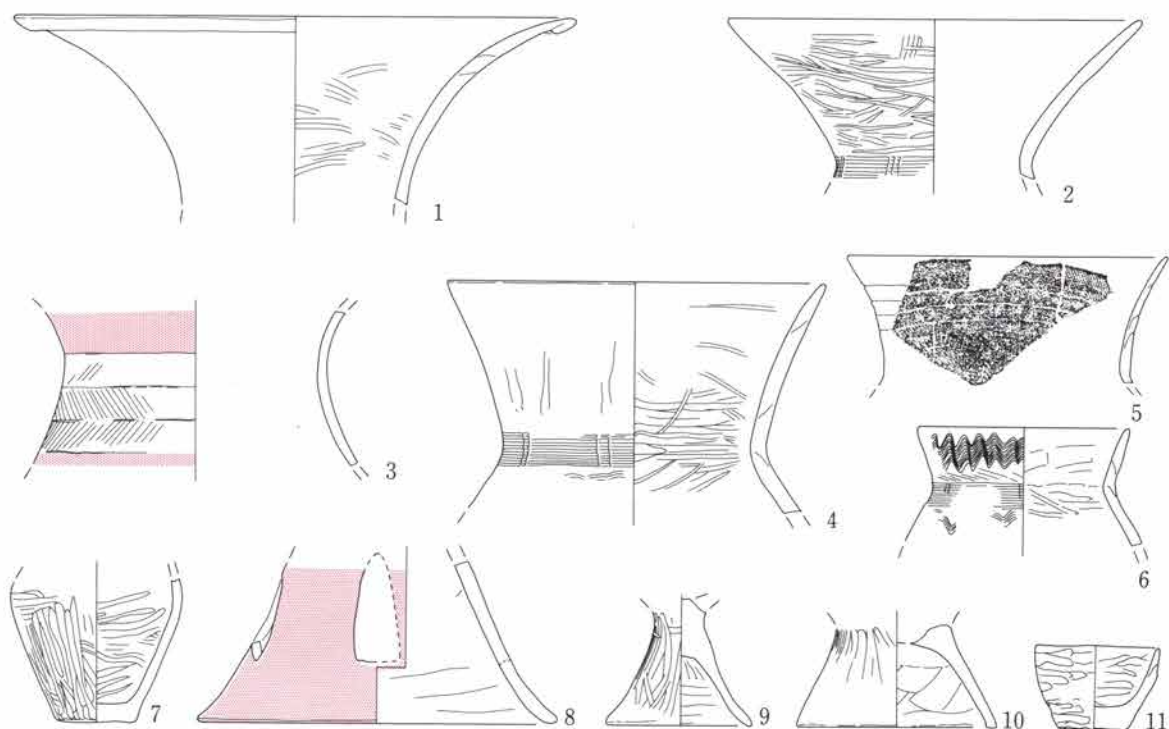
第590図 DS111号住居跡出土遺物(3)



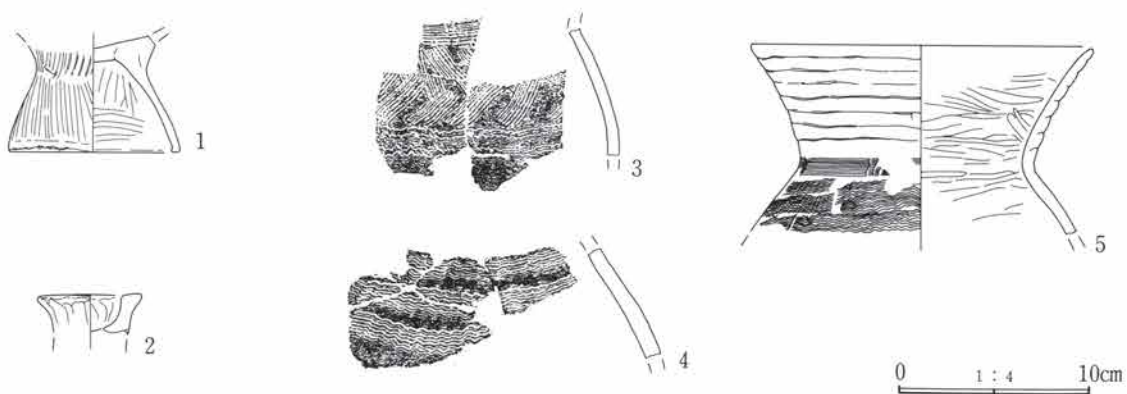
第591図 DS112号住居跡出土遺物



第592図 C 1号方形周溝墓出土遺物

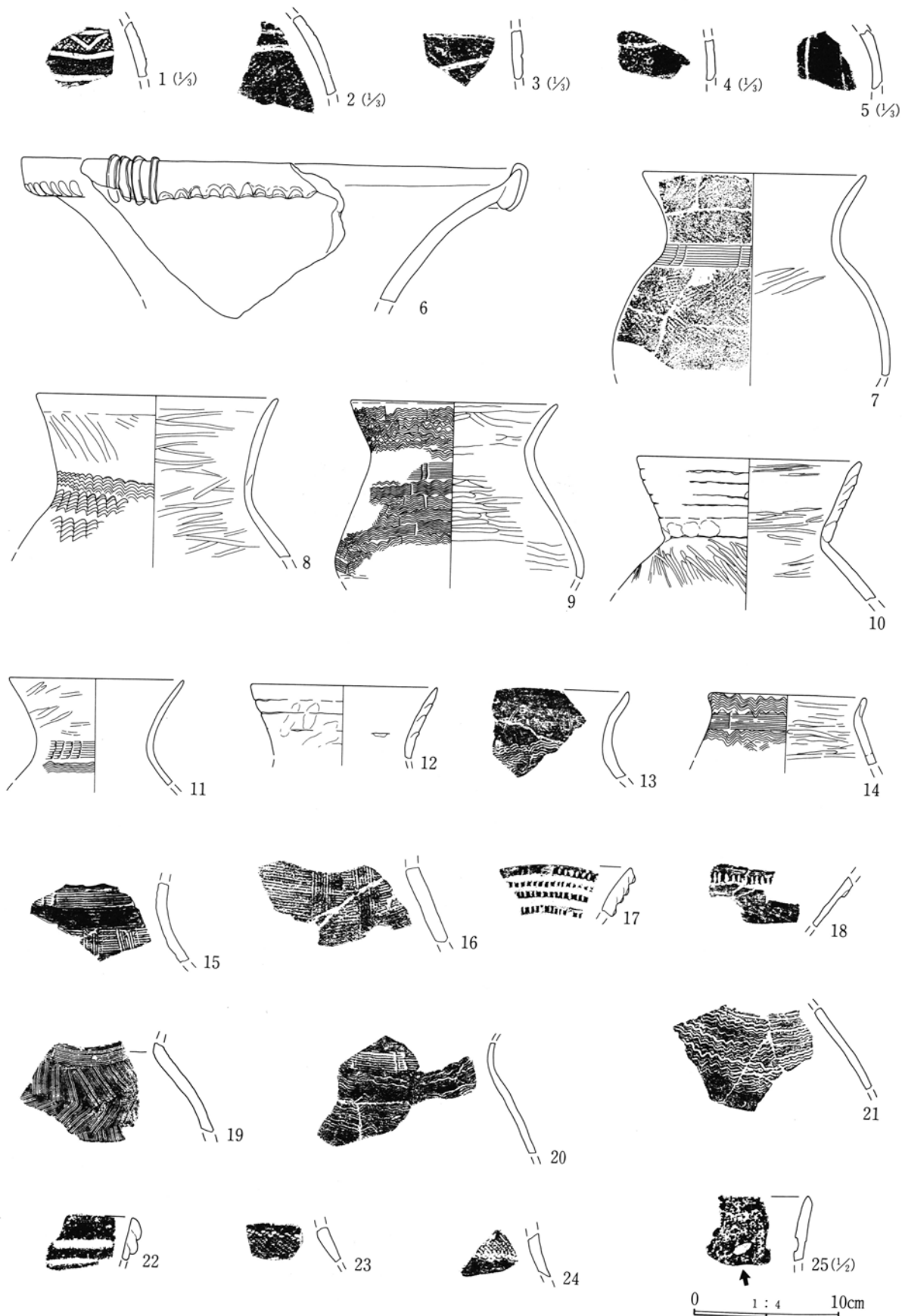


第593図 C 2号方形周溝墓出土遺物

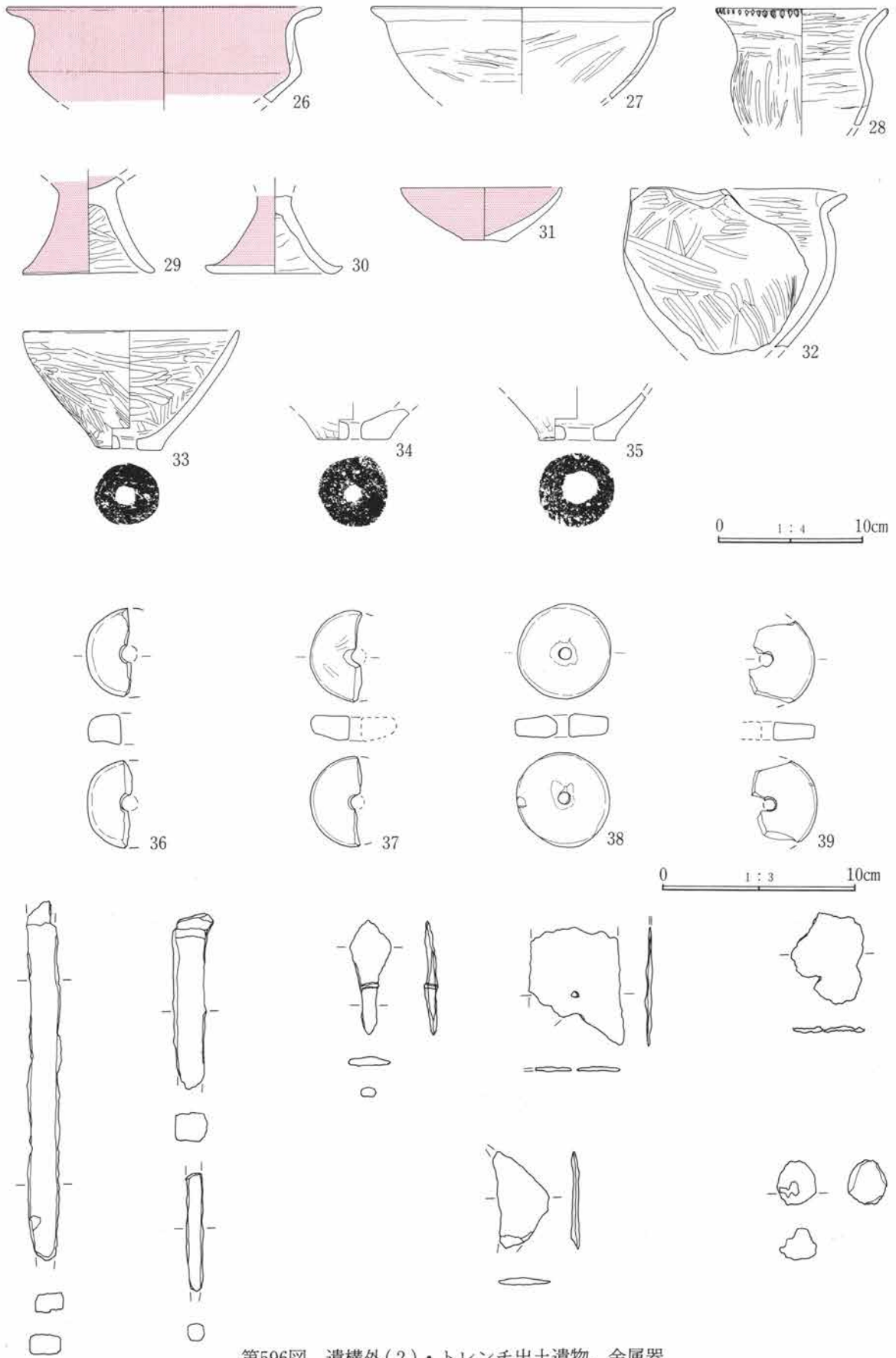


第594図 土坑出土遺物(C38・79・87号土坑)

第2節 弥生土器

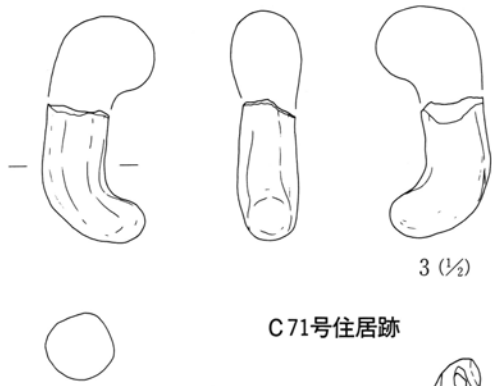


第595図 遺構外出土遺物(1)

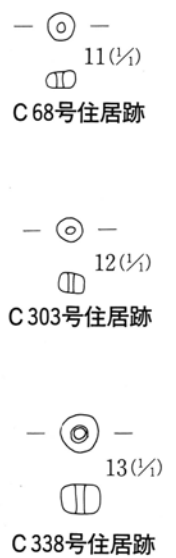
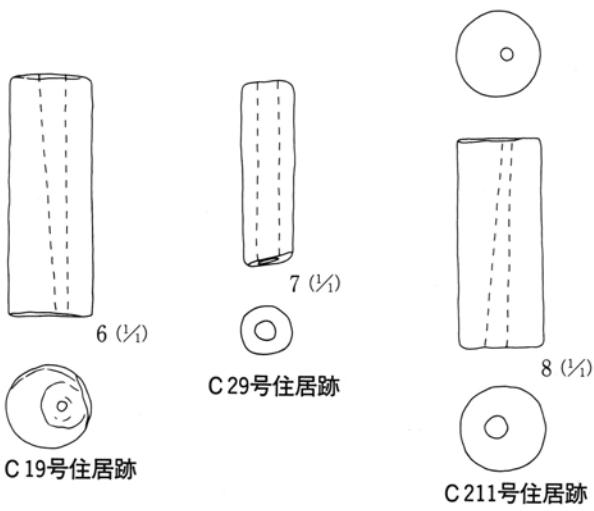


第596図 遺構外(2)・トレンチ出土遺物、金属器

第3節 装身具



0 1:2 5cm



第597図 装身具

第4節 石器

1. 縄文時代遺構出土の石器

縄文時代の遺構から出土した石器は、総数で876点、総重量では220kgを越える。主な器種としては、石鏃、石錐、楔形石器、石匙、スクレイパー、エンドスクレイパー、打製石斧、磨製石斧、剥片類、石核、凹石、磨石、敲石、石皿、多孔石、砥石、台石があげられる。凹石・磨石・敲石の分類は、第1に凹みの有無、次いで研磨の有無を優先している。この基準は、他時期の遺構出土のものについても同じである。以下、各器種ごとに特徴を記す。

石鏃 総数で7点出土している。破損等により形状がわからないもの以外は、全て凹基無茎鏃である。ほとんどが長幅比1.5程度の縦に長い形状のものであるが、1点のみ縦横がほぼ等しい幅広のものがある（C188土-1：PL. 241）。石材は全て黒曜石である。

石錐 C97土坑より1点のみ出土している（C97土-1：PL. 239）。石材は黒曜石。

楔形石器 2点出土。小型の剥片素材で両端に使用時の剝離痕がある。一部に細かい調整も見られる。石材はいずれも黒曜石である。

石匙 9点出土。いずれも前期前半の住居からの出土であるが、中でもC79号住居からは5点も見つまっている。大きく横形と縦形に分けられ、横形が6点、縦形が3点である。石材は、チャートや珪質頁岩など、非常に細粒・均質なものを利用している。

スクレイパー 総数で35点出土している。ほとんどが剥片を素材とし、一側もしくは相対する2辺に調整を加えて刃部を作り出している。素材の形状を大きく変えることはない。刃部の形状は直線状もしくは緩い弧状であり、まれに鋸歯状を呈するものがある。大きく横長のものと縦長のものに分けられるが、いずれも素材剥片の形状からの分類であり、製作技法や機能の差を示すものではない。石材は、硬質泥岩や珪質頁岩などの細粒の砂・泥岩類が大多数を占め、細粒・均質な石材が多用されている。

エンドスクレイパー C79住より1点出土（C79住-16：605図）。刃部が撥形に広がる。石材は黒色頁岩。

打製石斧 総数で48点出土。形状から、以下の4類型に分類できる。

I類：いわゆる分銅形。器体の両側ほぼ中央にえぐりがはいる。

II類：いわゆる撥形。基部に比べて刃部が広がる。側辺の状況から以下に二分。

II a：両側が内側にえぐれる。 II b：両側が直線的に広がる。

III類：いわゆる短冊形。基部から刃部にかけて幅がほとんど変わらないもの。

破損により形状がわからないものを除くと、各類型の内訳はI類1点、II a類5点、II b類15点、III類13点である。時期別に類型を見てみると、前期前半は合計8点中II a類4点、II b類1点、III類1点、不明2点、前期後半は合計6点中II b類1点、III類1点、不明4点、中期前半は11点中II b類4点、III類2点、不明5点、中期後半が7点中I類1点、II b類1点、III類4点、不明1点、後期が16点中II a類1点、II b類8点、III類5点、不明2点となっている。点数が少ないため確実ではないが、II a類が前期前半に多く、II b・III類は中期以降に多い。完形品の計測値平均は、長さ9.8cm、幅4.9cm、厚さ2.3cm、重量110.1gである。類型による差は特には認められない。概ね重量にして50～160g程度の範囲にはいるが、破損品の中に重量が400gを越えるものがあり、かなり大型のものも含んでいる。また全体の3分の1に使用による摩耗がみられた。大半は刃部の摩耗であるが、一部基部にもみられた。摩耗した部分に再度調整を加えて刃部再生をしているものもある。石材は、硬質泥岩が8割近くを占める。概して細粒の石材が利用されており、時期や類型によ

る差はみられない。

磨製石斧 総数で14点出土している。この中には未製品が4点含まれている。完成品でも研磨が刃部に限られていたり、表裏に敲打痕や自然面を大きく残すものが多い。完形のものについて計測値の平均を見てみると、長さが14.8cm、幅6.0cm、厚さ3.9cm、重量562.0gで比較的ばらつきは少ない。石材は、粗粒輝石安山岩が1点ある他は、全て変玄武岩である。粗粒輝石安山岩製のものは、棒状の円礫を素材とし、刃部だけを研磨して他は未加工のまま残すという特異な形態である（79住—18：605図）。

礫器 1点出土（C362住—12：PL. 232）。礫の一端に粗い調整を加え刃部を作出し、表面に敲打痕が見られる。
石核 総数で94点出土。形状から、盤状で両面もしくは片面で球心状に剥片を剝離するもの、打面と作業面を転移しながら剥片を剝離する賽子状のもの、剥片もしくは礫の一端で両面または片面で剥片剝離を行うもの、その他剥片または礫の一部で少数の剥片を剝離するものに分けられる。形態における時期差は認められない。石材は、硬質泥岩が60点、黒曜石21点とこの2種の石材が目立つが、重量にすると硬質泥岩が23.9kgなのに対し、黒曜石は131.5gと硬質泥岩の1%にも満たない。この他にチャート、珪質頁岩、細粒輝石安山岩などが利用されており、概して細粒・均質の石材が使われているが、粗粒輝石安山岩・変玄武岩などの粗粒の石材もわずかにみられる。

原石 5点出土。全て前期前半の遺構より出土。石材は石英、硬質泥岩、赤色珪質岩である。

剥片類 合計481点が出土している。このうち二次加工のあるものが160点、微細剝離痕のあるものが135点ある。石材は硬質泥岩が数量・重量ともに圧倒的に多い。黒曜石も点数では硬質泥岩に次ぐが、重量では遠くおよばない。他は珪質頁岩、チャート、黒色安山岩などの細粒・均質の石材が使用され、粗粒輝石安山岩などの粗粒の石材はわずかである。

石棒 後期の住居より1点出土（C363住—55：626図）。端部破片で全体の形状は不明。石材は緑色片岩である。

凹石 32点出土。これらは凹みを両面に持つものと片面のみのものに大きく分けられる。いずれも表裏や両側・両端に敲打痕や研磨痕の見られるものが多いが、凹みを両面に持つものにその傾向が強い。片面のみのものは凹みが1個のものが多いのに対し、両面に持つものは、1面につき2個以上持つものが半数以上を占める。また、器体の一側もしくは両側を、敲打と研磨によって長軸方向に面取りしたものが3点あった。完形の17点について計測値の平均を見てみると、長さ11.9cm、幅7.5cm、厚さ4.2cm、重量501.4gである。素材の形状はほとんどが円礫であり、やや細長い楕円形のものも利用されている。石材は、粗粒の安山岩類が16個と全体の半数近くを占め、以下流紋岩等7個、砂岩4個、変玄武岩2個と続く。全体に粗粒の石材である。

磨石 69点出土。形状から、A：小型で器体のほぼ全面に研磨痕がみられるもの、B：器体の両面もしくは片面に研磨面がみられるもの、C：B類の内、器体の両側もしくは一側を面取りしているもの、D：器体の側面に研磨面がみられるものに分類できる。A類は他に比べて小型で、棒状もしくは球状の円礫を素材とする。上下両端に敲打痕のみみられるものがある。B類は円～楕円形の円礫を素材とする。表裏や左右上下の側面に敲打痕がみられるものが多い。研磨の程度は様々で、ごく弱いものから非常になめらかなものまで個体による差が大きい。横方向の線状痕がみられるものもある。C類は、両側もしくは一側が敲打と研磨によって長軸方向に面取りされている他は、B類と同様の特徴を示す。ただし、全体にC類の方が研磨の程度が強い。D類は盤状の円礫を素材とし、側面にほぼ全周にわたって研磨痕が見られる。各類型の内訳は、A類が8点、B類54点、C類5点、D類2点で、B類が圧倒的に多い。時期別では、A類が前期前半に多くD類は前期にのみ含まれるが、いずれも個体数が少ないため断定できない。完形のものについて重量の平均値を見てみると、A類が99.3g、B類478.7g、C類798.6g、D類121.4gとなり、A・D類が小型で、C類が大きいこと

第4章 出土遺物

がわかる。B類は最小のものが39.0g、最大2080.0gとばらつきが大きい。石材は、粗粒の安山岩が39点、流紋岩等が18点で、この両者で全体の2/3を占める。概して粗粒の円礫を素材として利用している。

敲石 合計47点出土。形状から、A：器体の両端もしくは一端に敲打痕がみられるもの、B：器体の両面もしくは片面に敲打痕がみられるもの、C：B類のうち器体の両側もしくは一側を面取りしてあるものに分類できる。A類は、盤状もしくは棒状の円礫を素材とする。一部側面に敲打痕を持つものもある。B類は、ほとんどが端部または側面にも敲打痕を持つ。C類は、面取り部以外はB類と同様の特徴を示す。各類型の内訳は、A類17点、B類27点、C類3点である。B類は前期前半に多く、C類は前期後半に属するもののみである。完形のものについて平均重量を見てみると、A類が412.9g、B類512.0g、C類824.1gとなり、A類がやや小さい。ただし、A類の最小のものが54.2g、最大が1188.0gとばらつきが大きい。石材は、粗粒の安山岩が22点、流紋岩等が7点で、この両者で約6割を占める。概して粗粒の円礫が素材として利用されている。

砥石 5点出土している。偏平な礫を素材とし、表面に使用面がみられる。一部浅い溝状に凹んでいるものもある。石材は砂岩が4点と多く、他は粗粒輝石安山岩である。

石皿 全部で3点出土。C79住-85 (PL. 223) とC174住-7 (620図) は、ともに素材となった盤状の礫の形状を大きく変化させない。使用頻度は異なり、前者が表面が使用によりわずかにくぼむ程度であるのに対し、後者は表裏の皿部分の底面が中央で貫通している。C165住-12 (616図) は、敲打により成形しているようであるが、破損のため全体の形状は不明である。石材は砂岩、粗粒輝石安山岩、緑色片岩である。

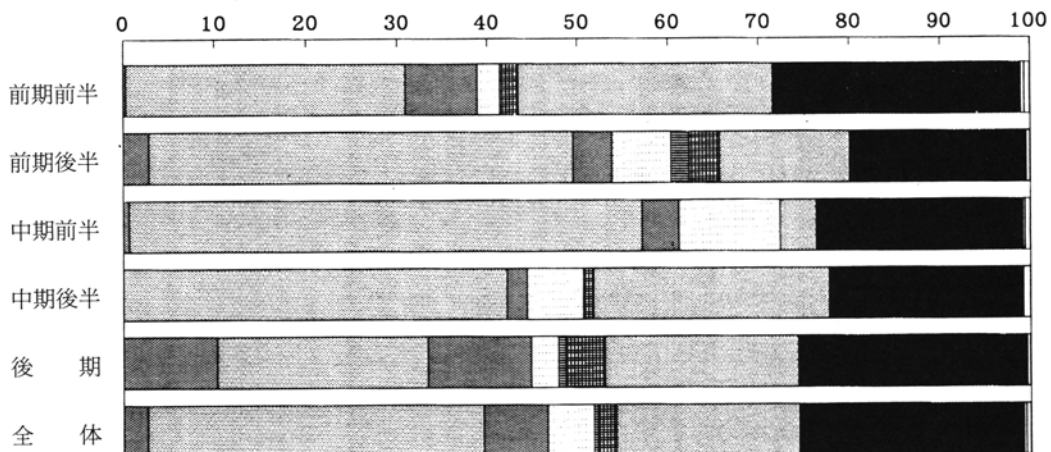
多孔石 7点出土。非常に大型で重量にして2~13kg、平均重量で約7.4kgである。石材は粗粒の安山岩類が5点、他は砂岩とデイサイトである。円礫素材のものが多いが、盤状の角礫素材のものも2点ある。

台石 12点出土。偏平な礫を素材とし、表面に敲打痕や研磨、使用による摩耗などがみられる。石材は粗粒の安山岩類や砂岩結晶片岩類が利用されている。

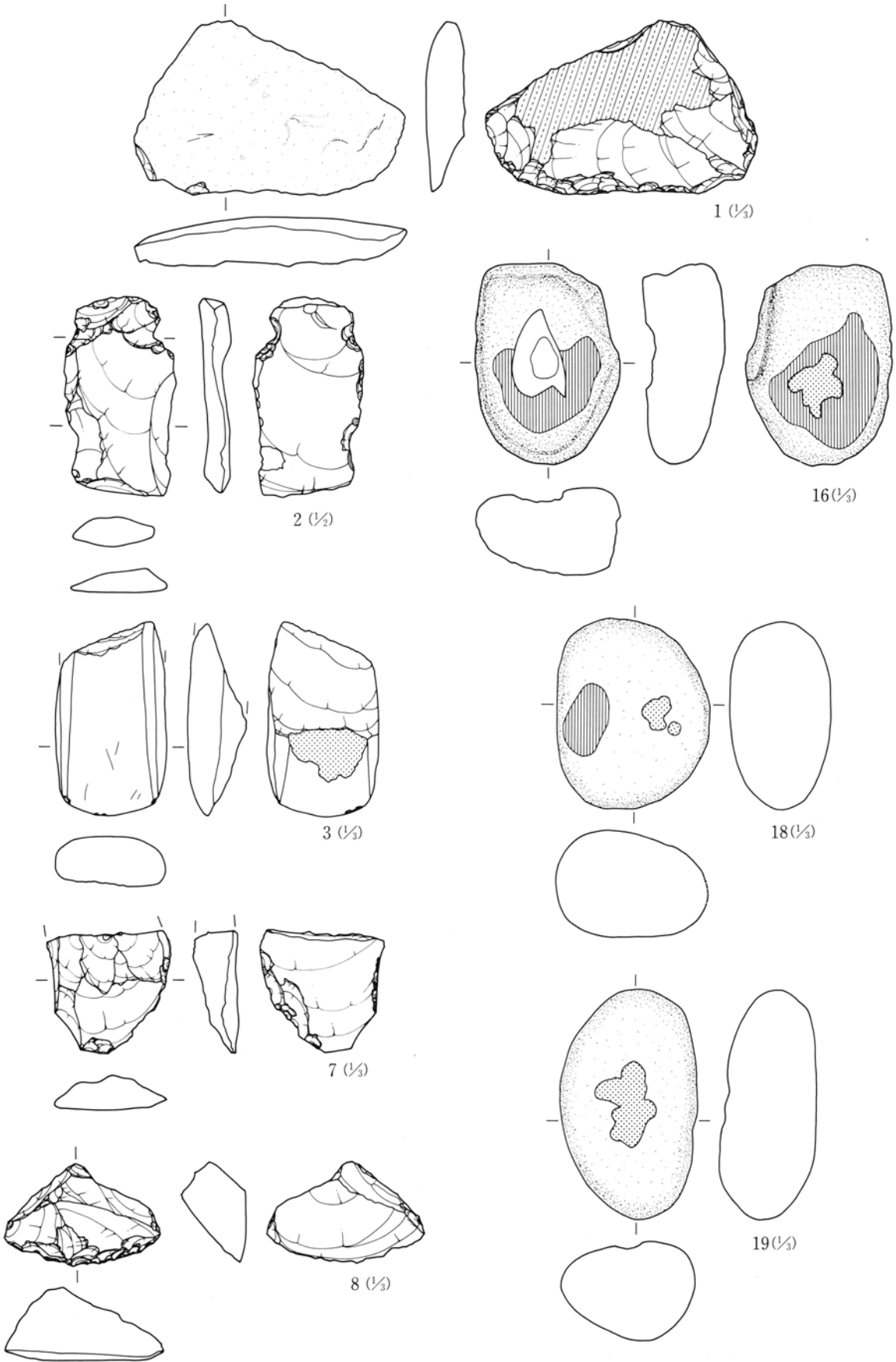
この他に、石剣 (C190土-1:632図) と不明石製品 (C30住-15:PL. 218) が各1点出土している。

表2 縄文時代遺構出土石器器種組成表

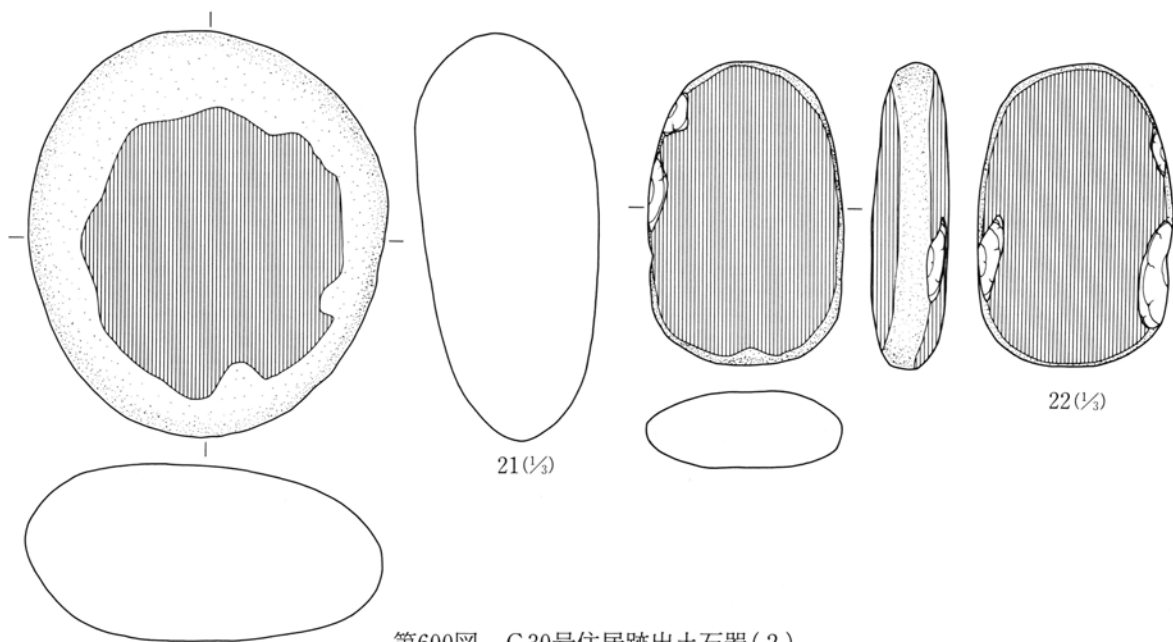
器種	石鏃	石錐	楔	石匙	SS	打斧	磨斧	剝片	石核	原石	磨石	凹石	敲石	石皿	多孔	砥石	台石	
前期前半	2		1	9	21	8	6		28	5	41	19	16	3		1	7	ES
前期後半	3				4	6			14		10	6	9			1	1	礫器
中期前半	2	1	1		7	11			16		3	1	5		4		3	
中期後半					1	7	5		12		6	2	4				1	
後期					2	16	2		23		8	4	13		2	3		石棒
不明								2	1		1				1			石剣
合計	7	1	2	9	35	48	15	481	94	5	69	32	47	3	7	5	12	



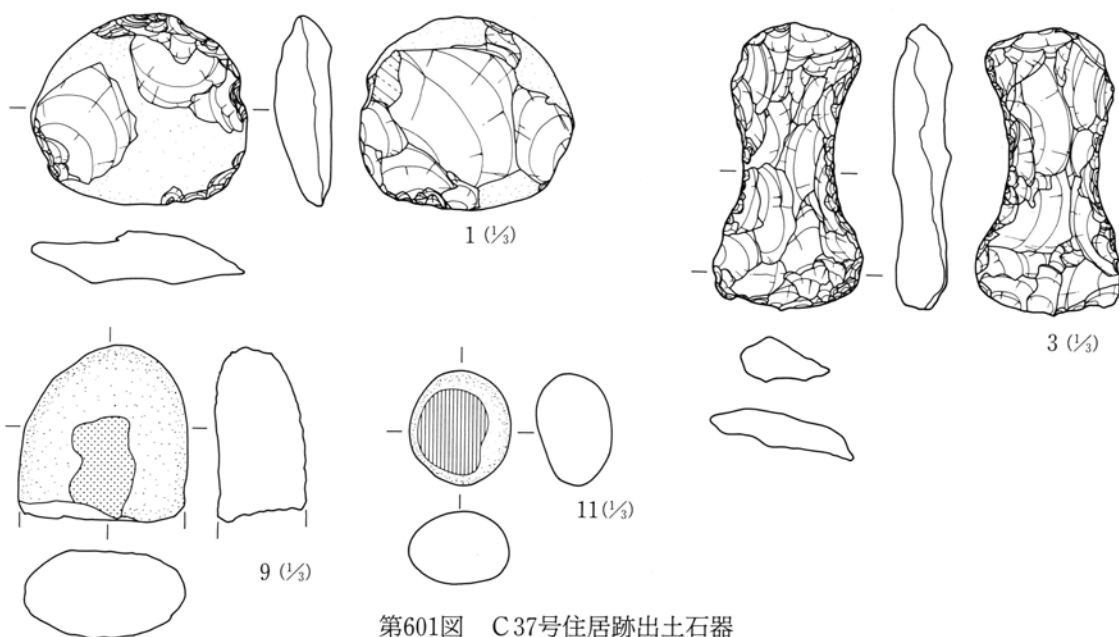
第598図 縄文時代遺構出土石器石材組成



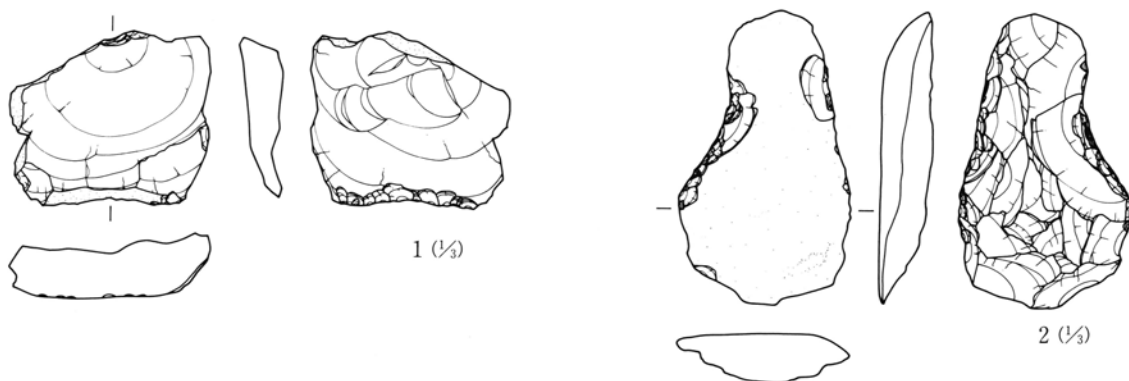
第599図 C30号住居跡出土石器(1)



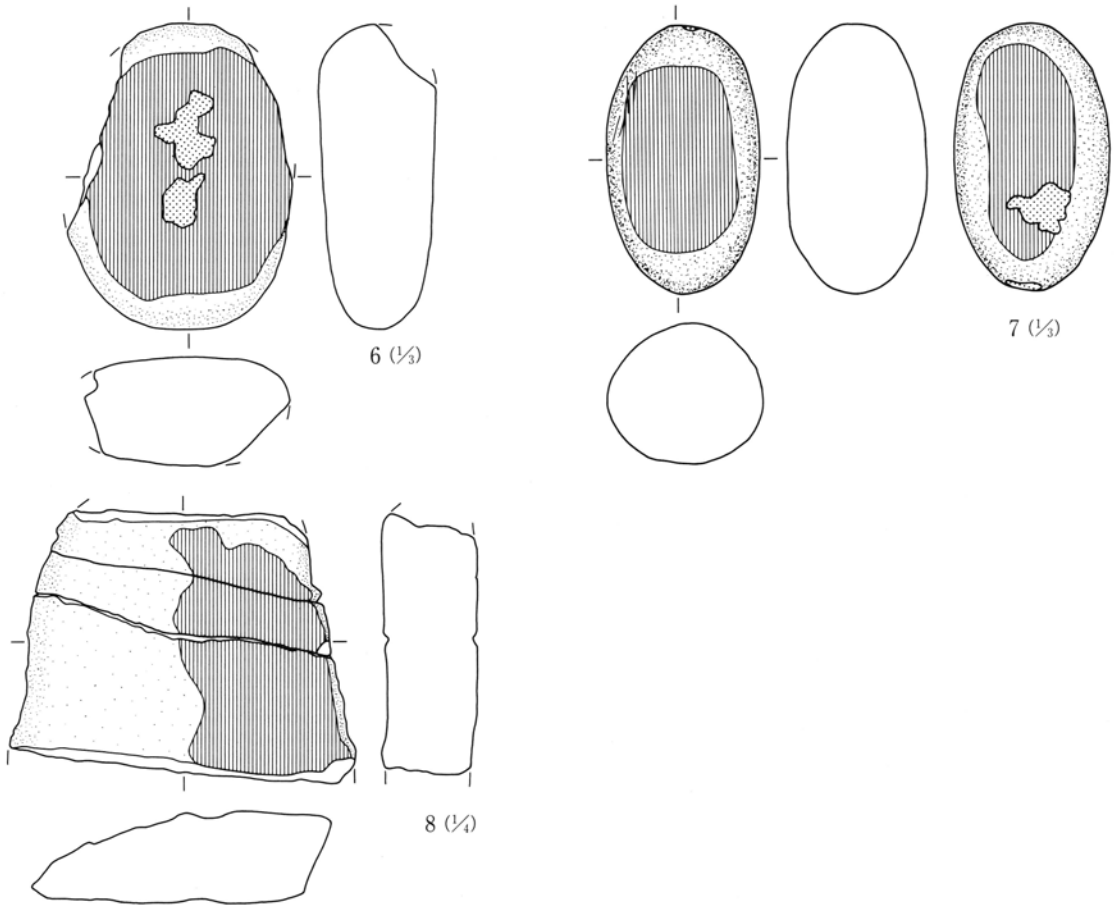
第600図 C30号住居跡出土石器(2)



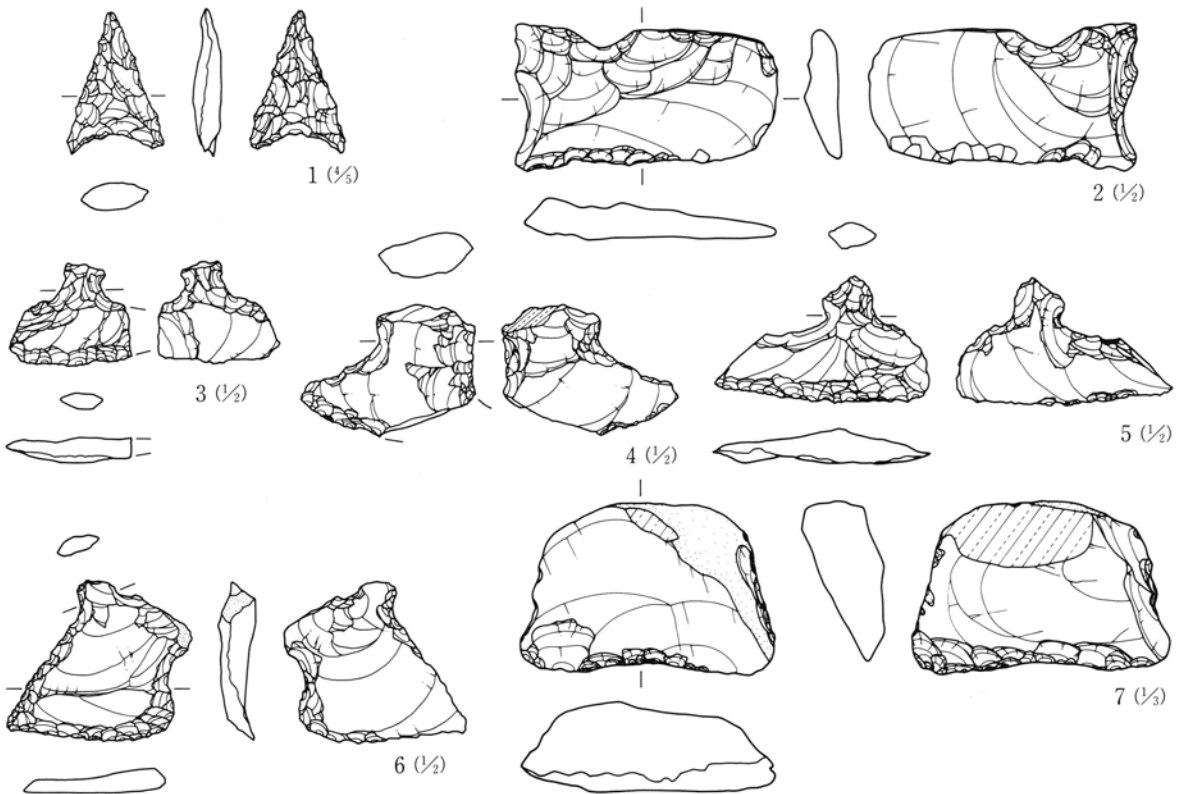
第601図 C37号住居跡出土石器



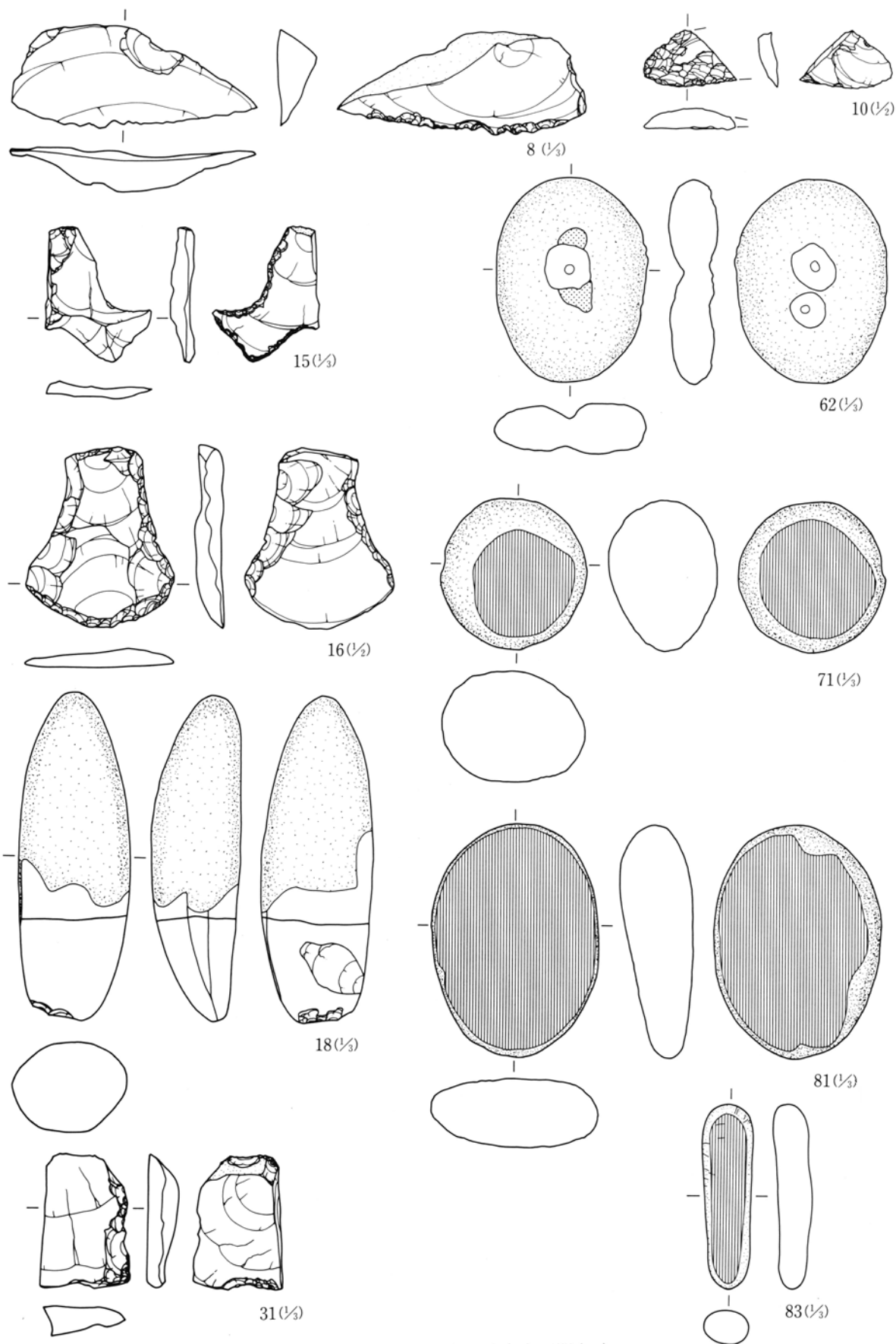
第602図 C77号住居跡出土石器(1)



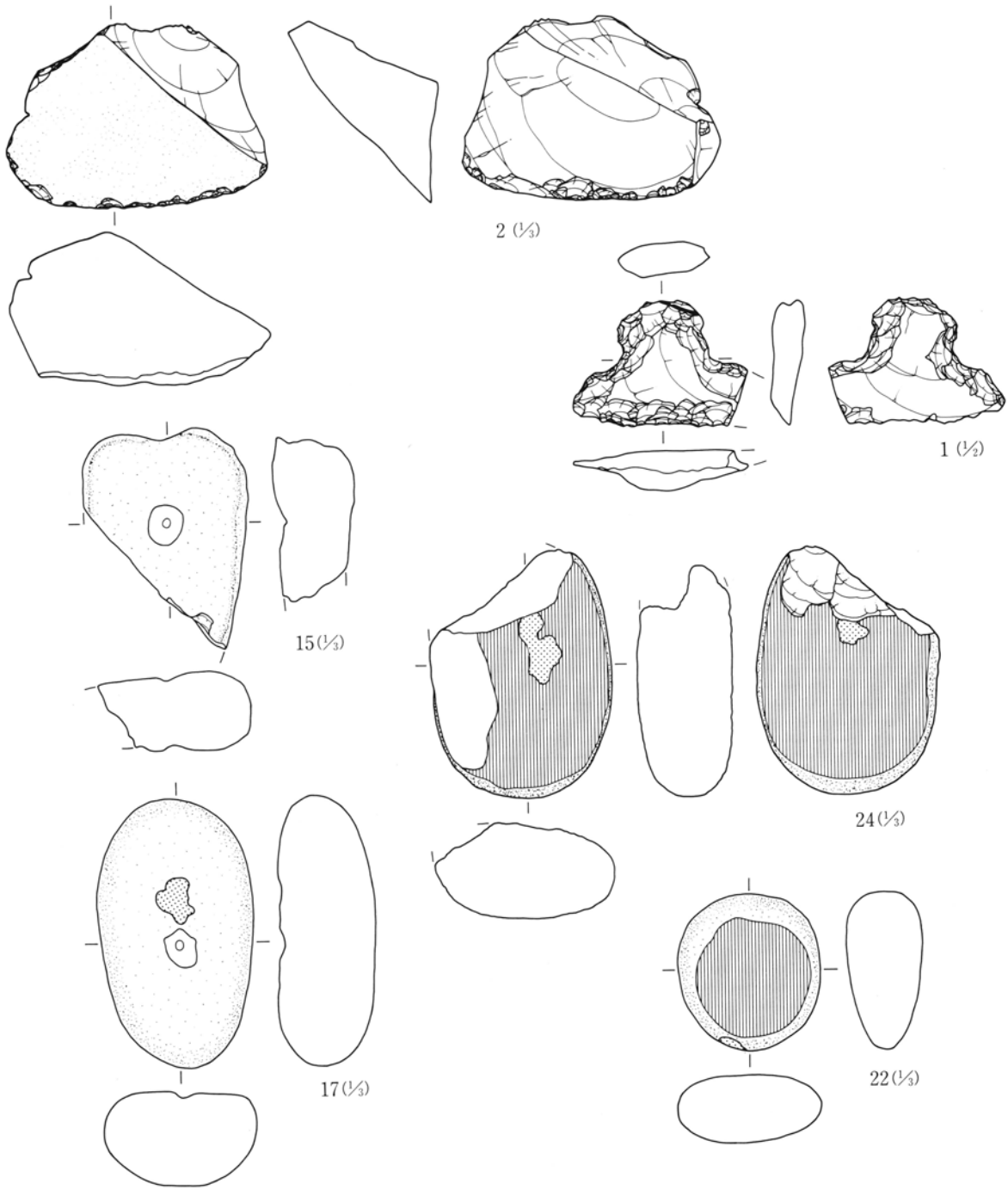
第603図 C77号住居跡出土石器(2)



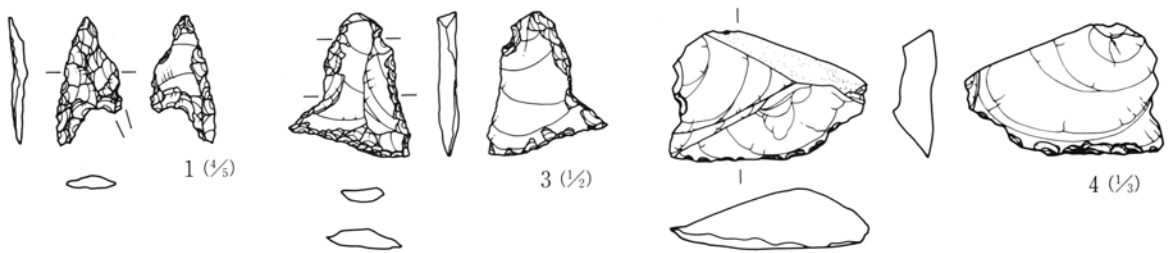
第604図 C79号住居跡出土石器(1)



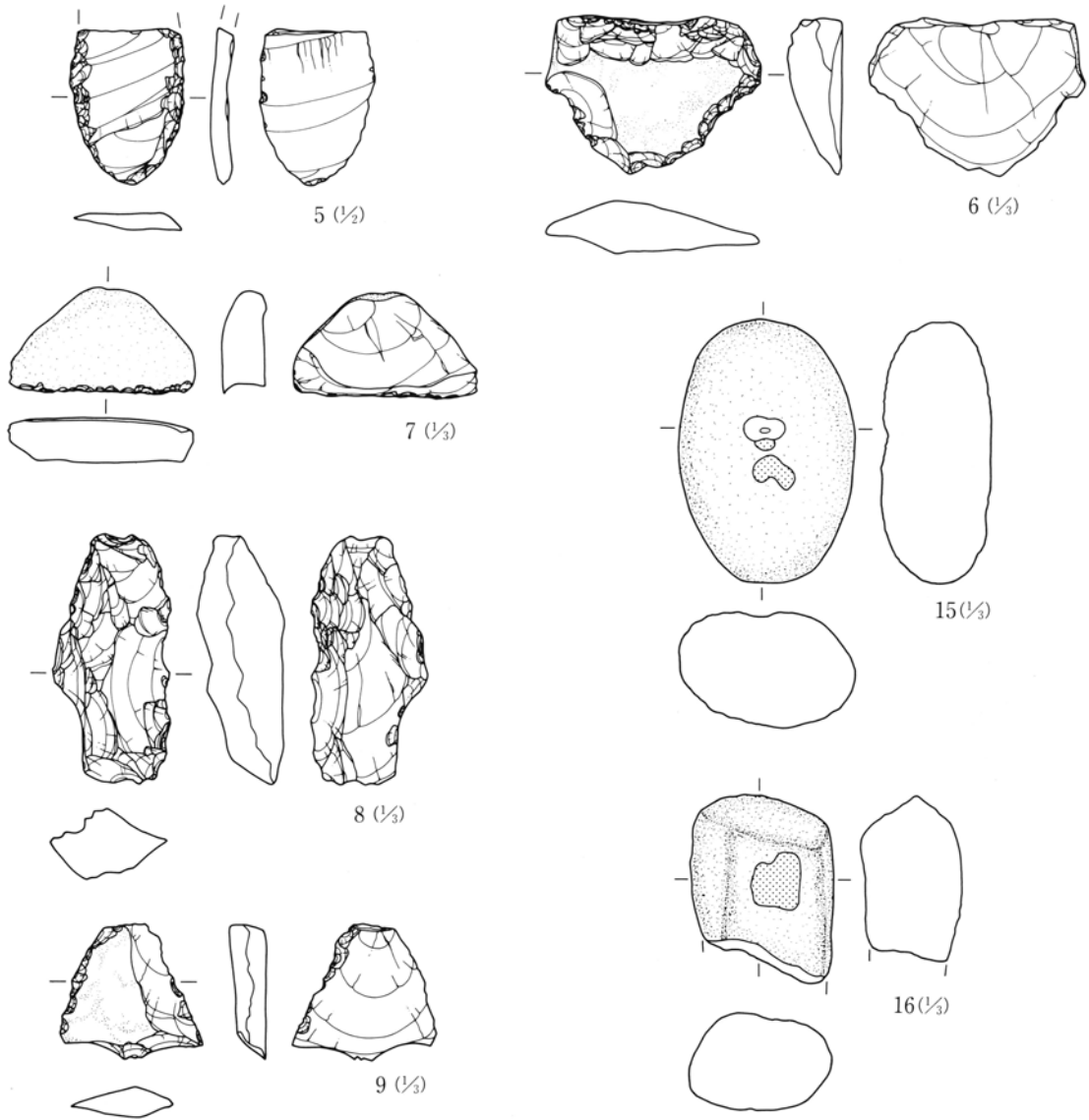
第605图 C79号住居跡出土石器(2)



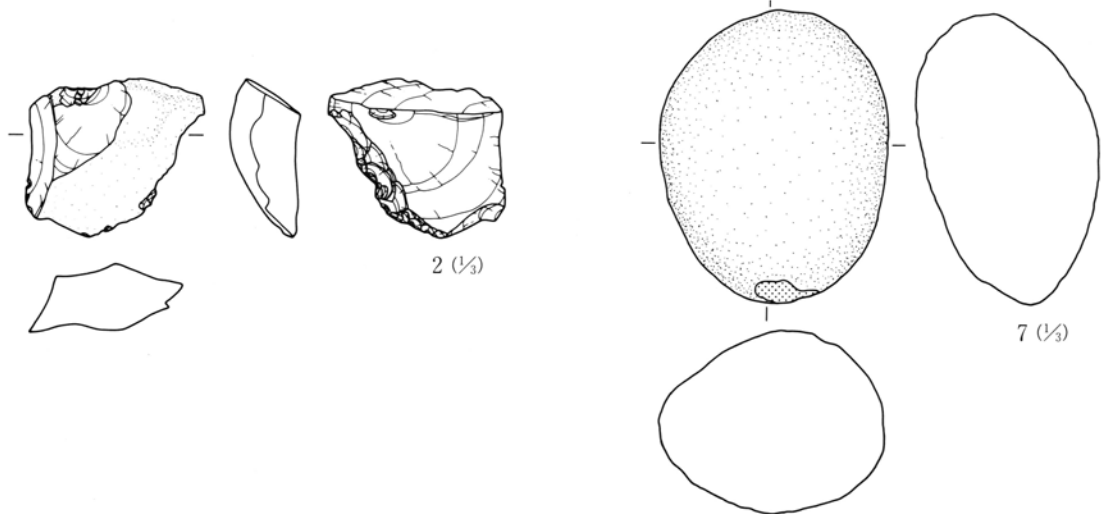
第606图 C88号住居跡出土石器



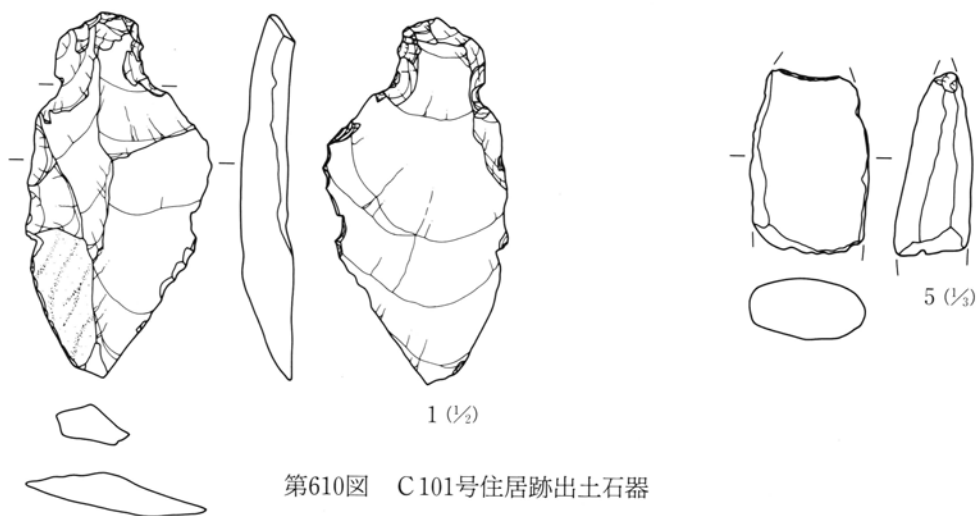
第607图 C96号住居跡出土石器(1)



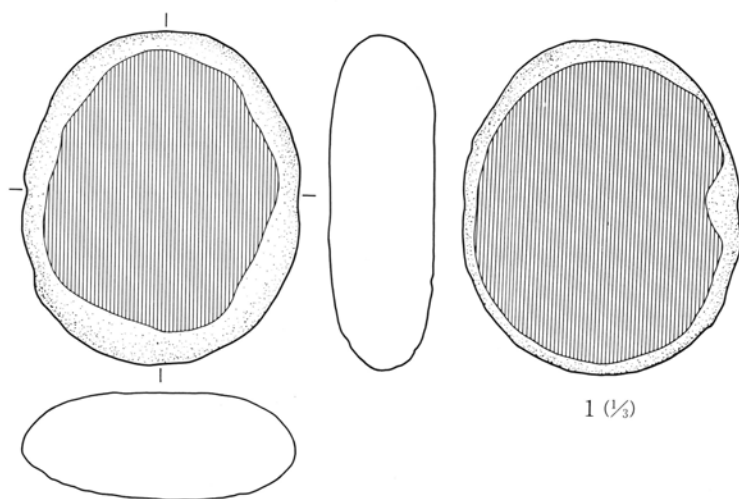
第608图 C96号住居跡出土石器(2)



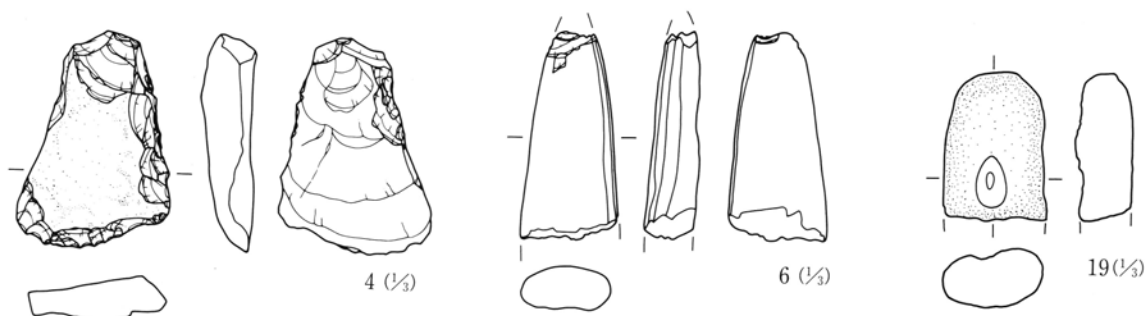
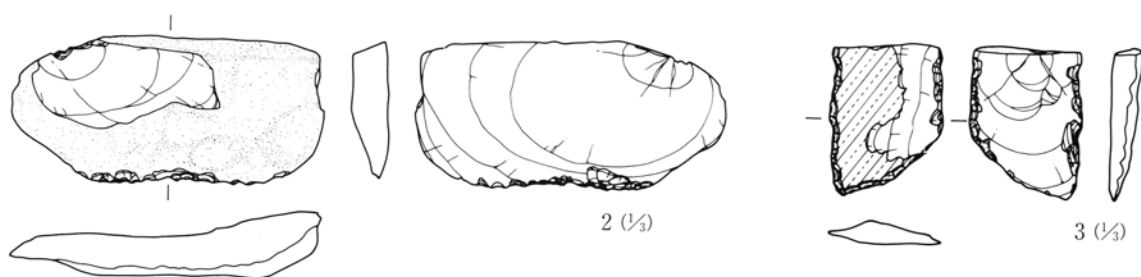
第609图 C100号住居跡出土石器



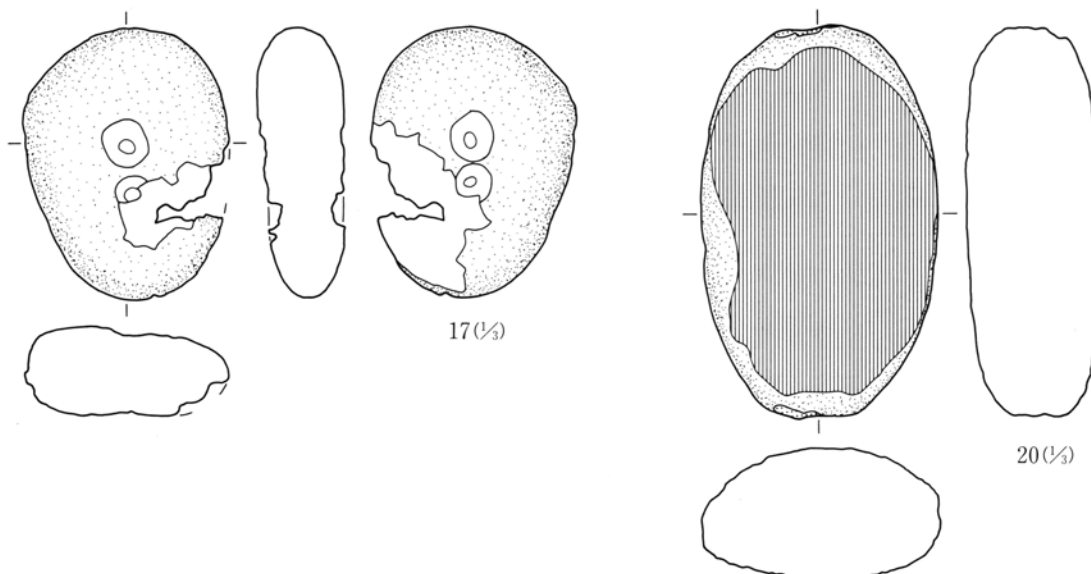
第610图 C101号住居跡出土石器



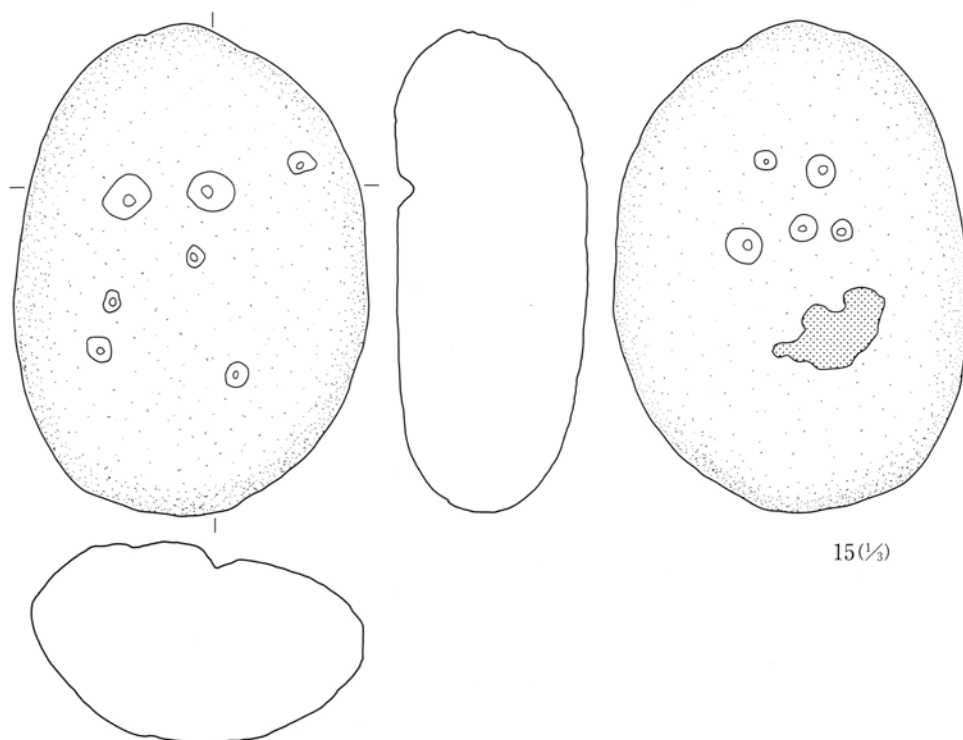
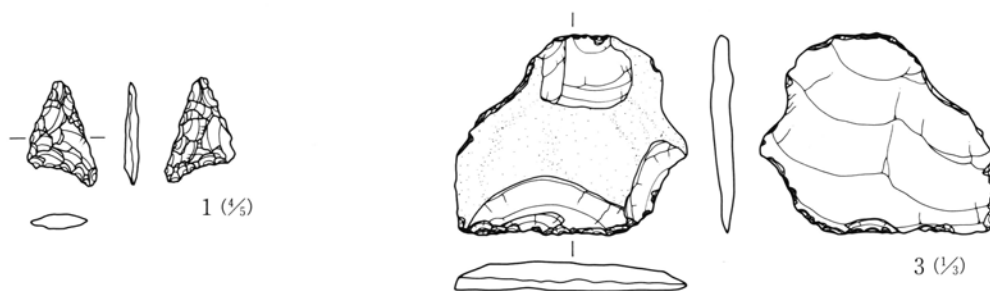
第611图 C115号住居跡出土石器



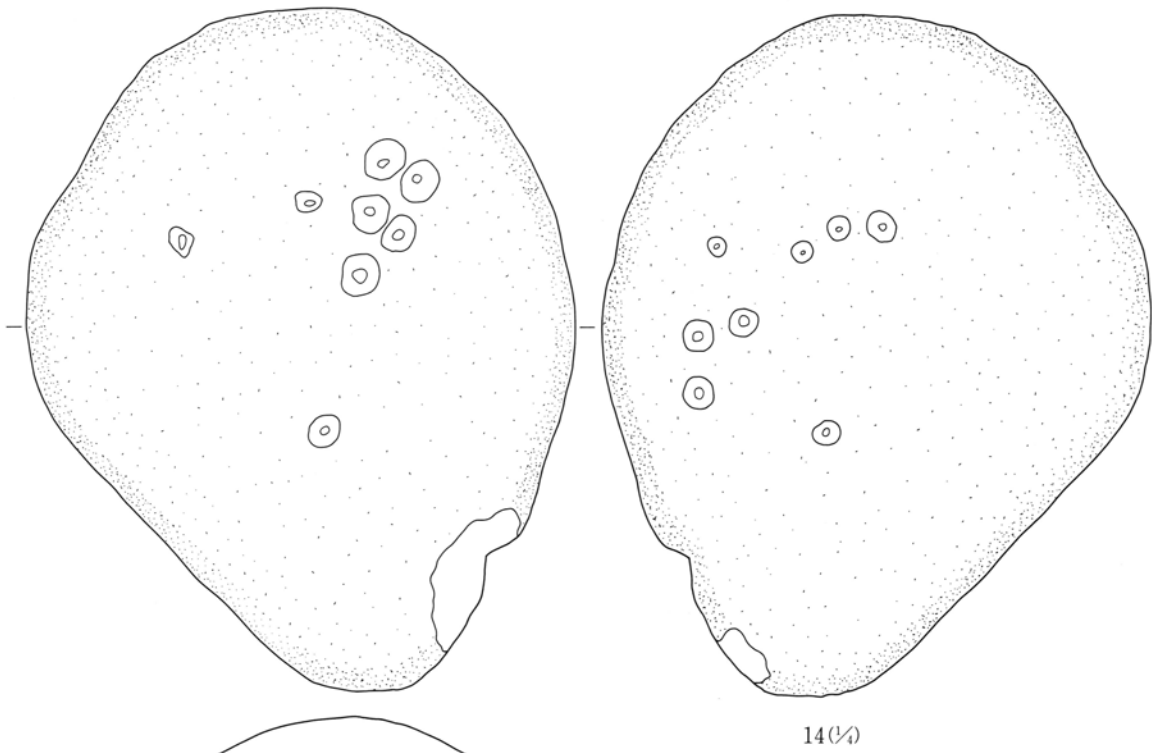
第612图 C118号住居跡出土石器(1)



第613図 C118号住居跡出土石器(2)

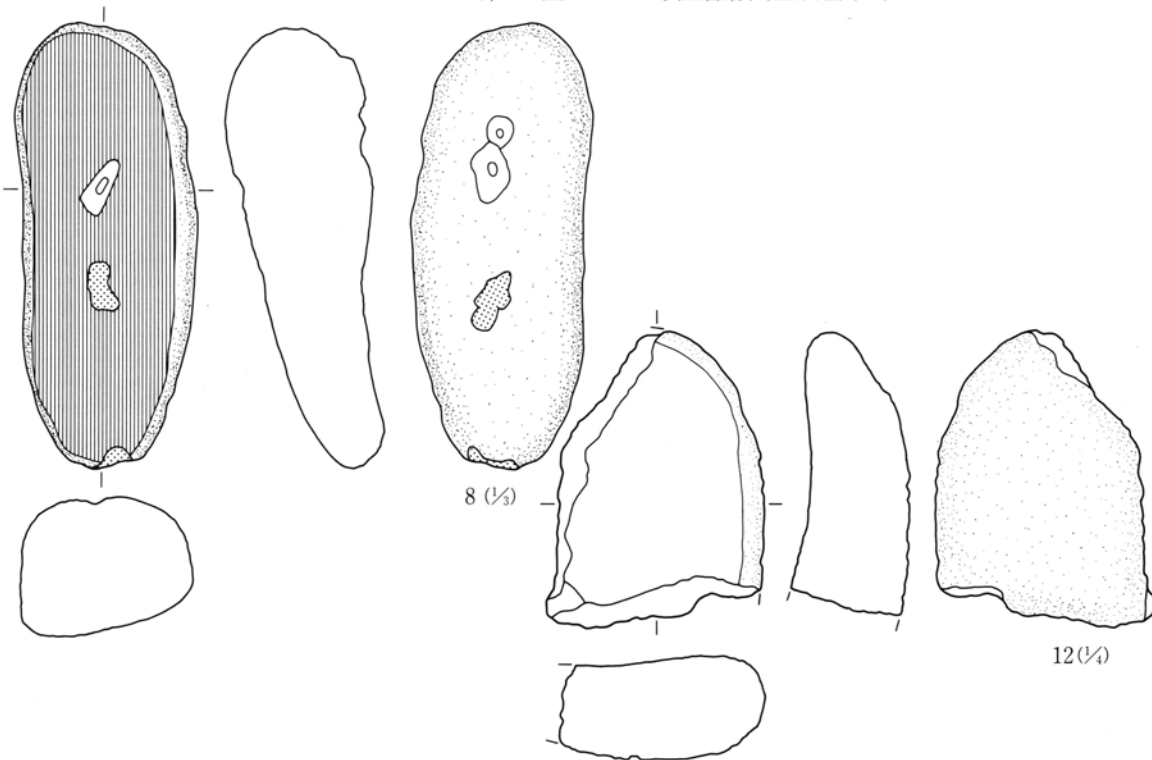


第614図 C152号住居跡出土石器(1)



14(1/4)

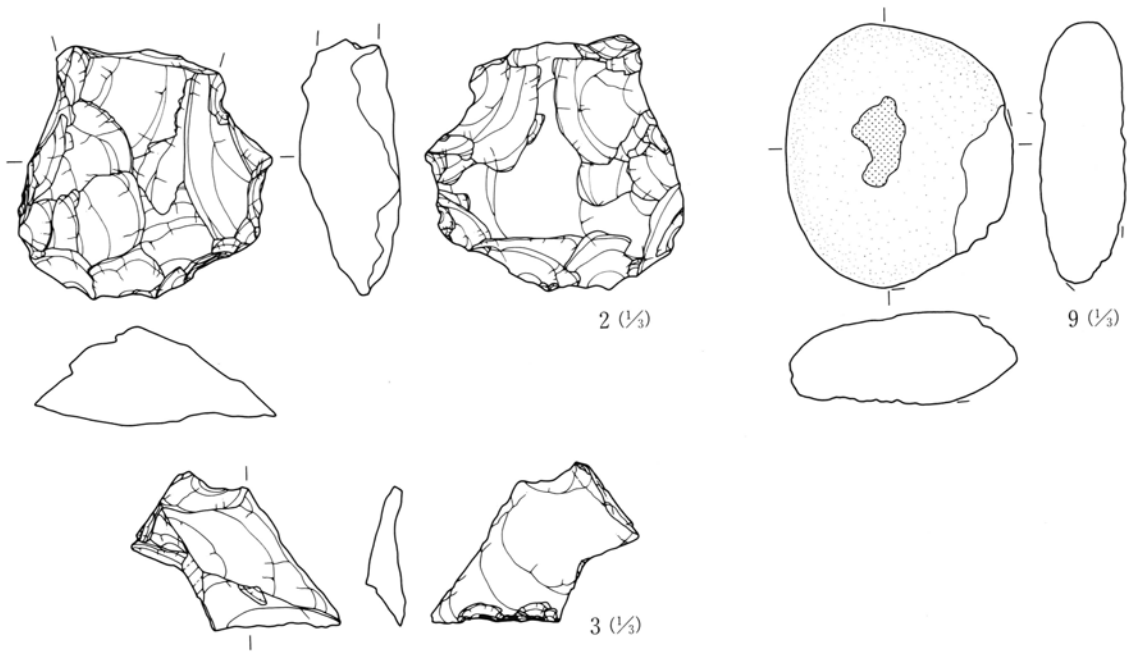
第615図 C152号住居跡出土石器(2)



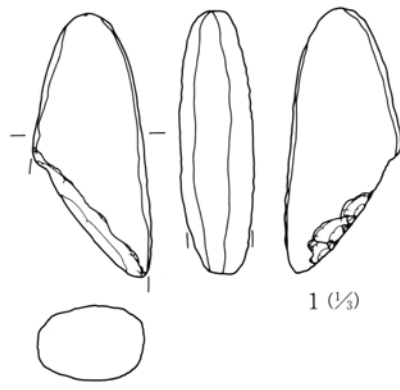
8(1/2)

12(1/4)

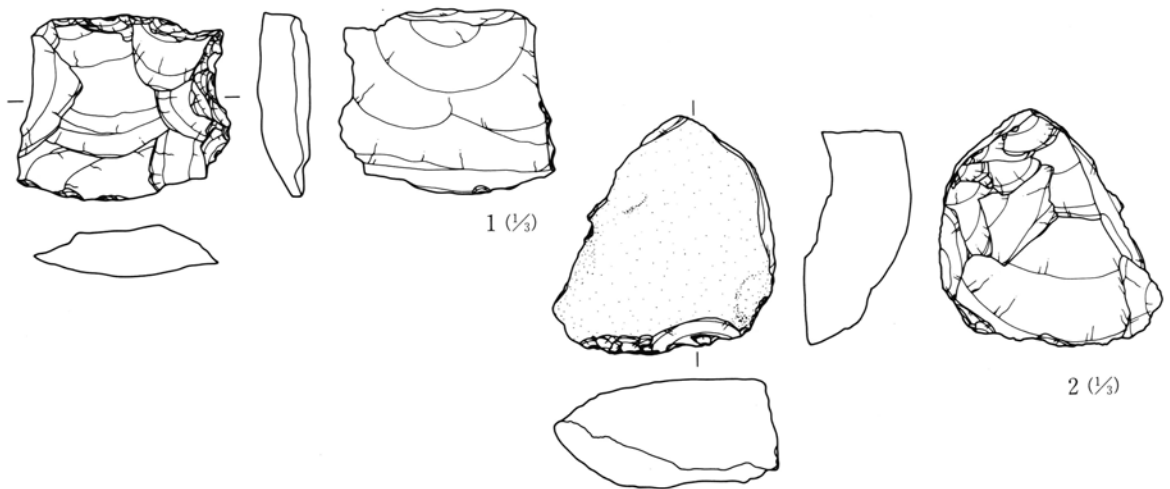
第616図 C165号住居跡出土石器



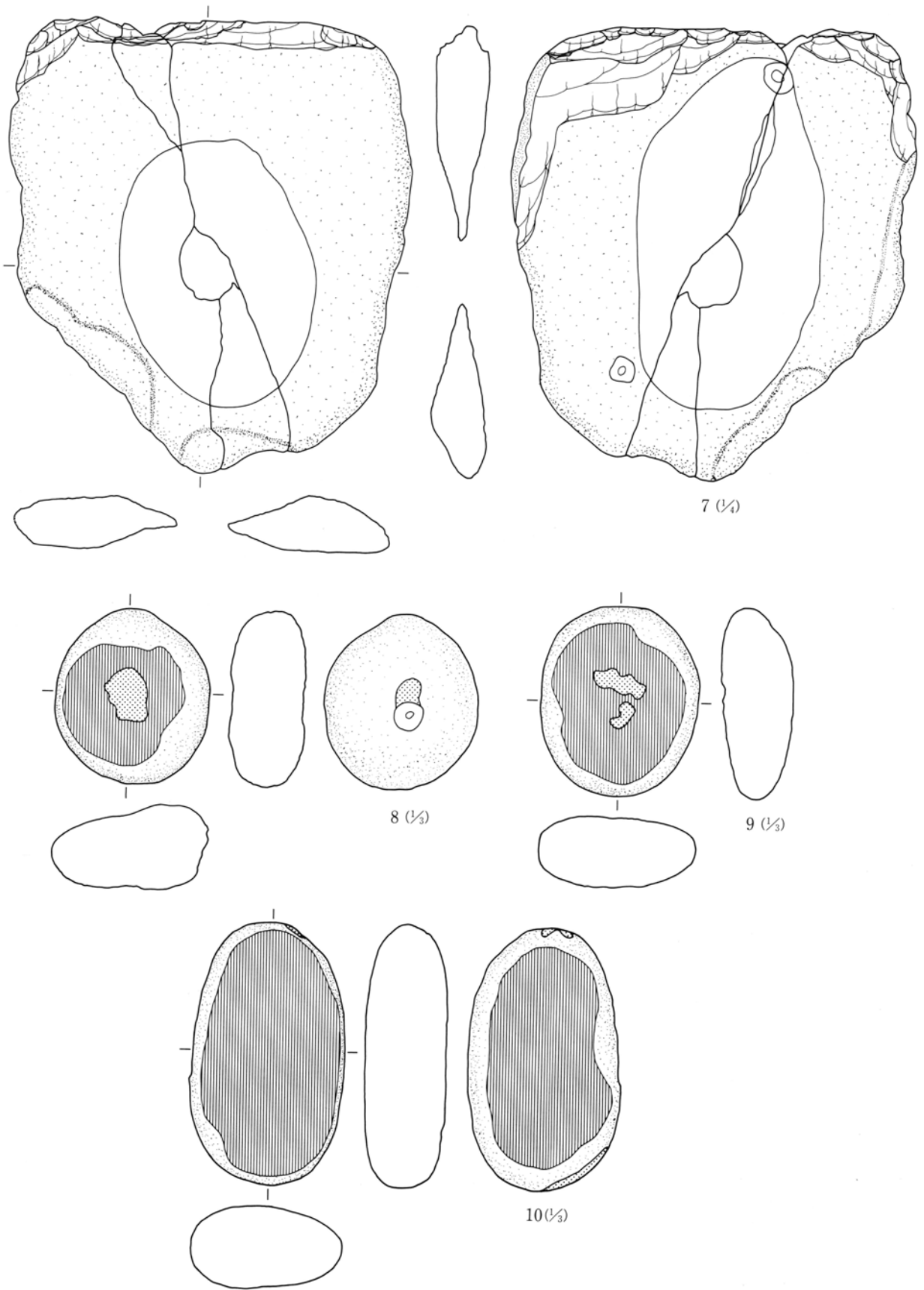
第617图 C169号住居跡出土石器



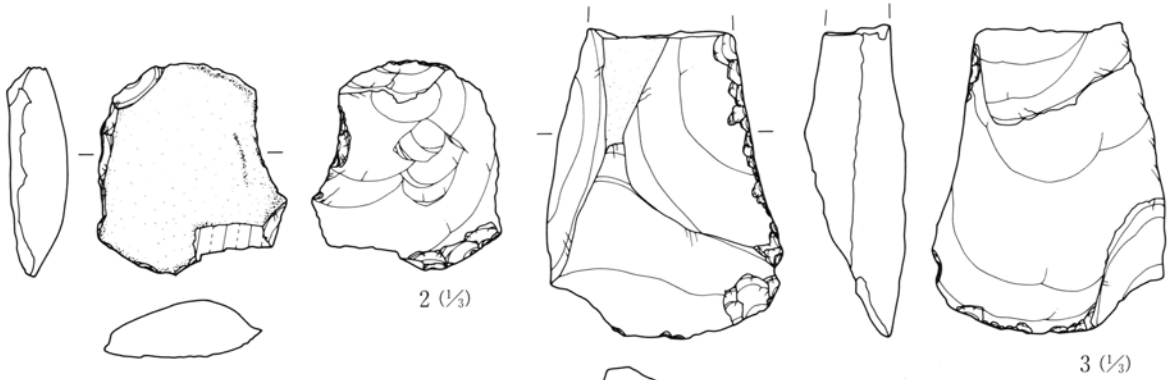
第618图 C170号住居跡出土石器



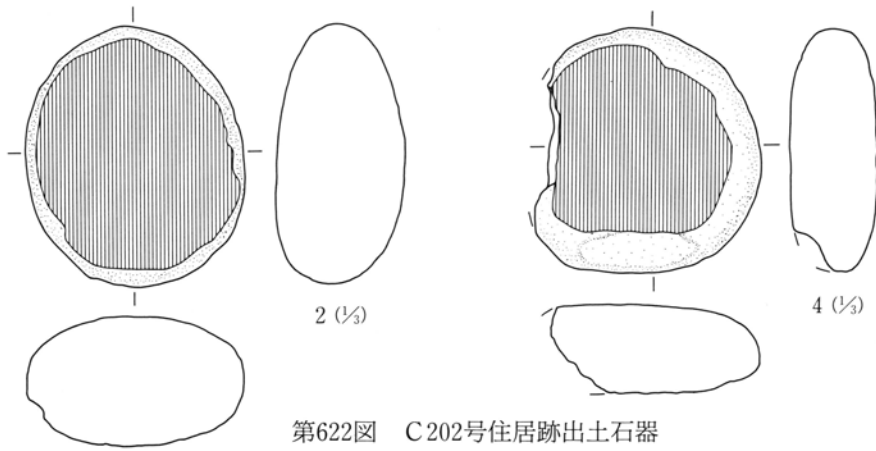
第619图 C174号住居跡出土石器(1)



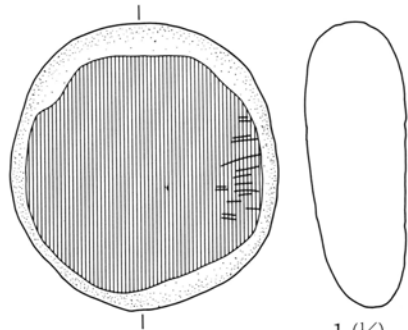
第620図 C174号住居跡出土石器(2)



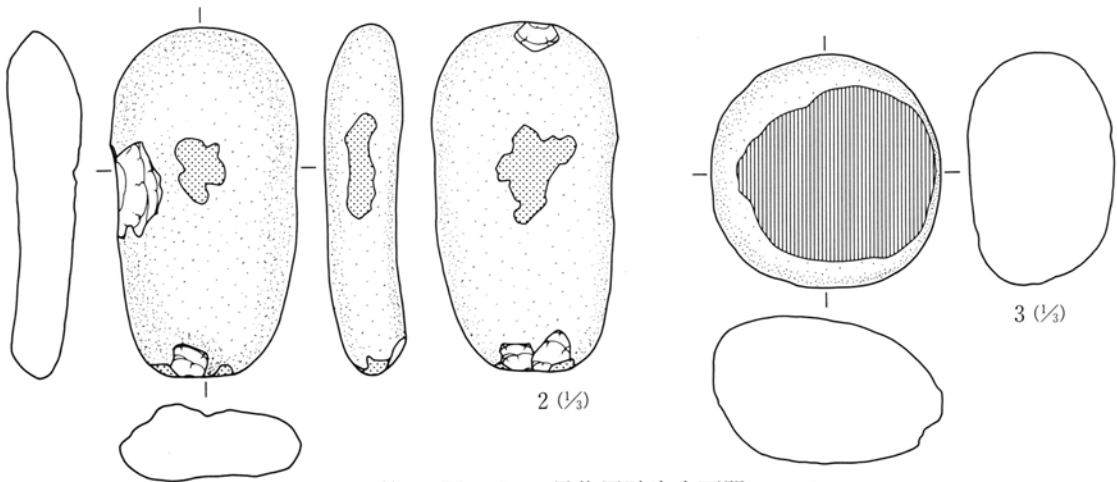
第621図 C176号住居跡出土石器



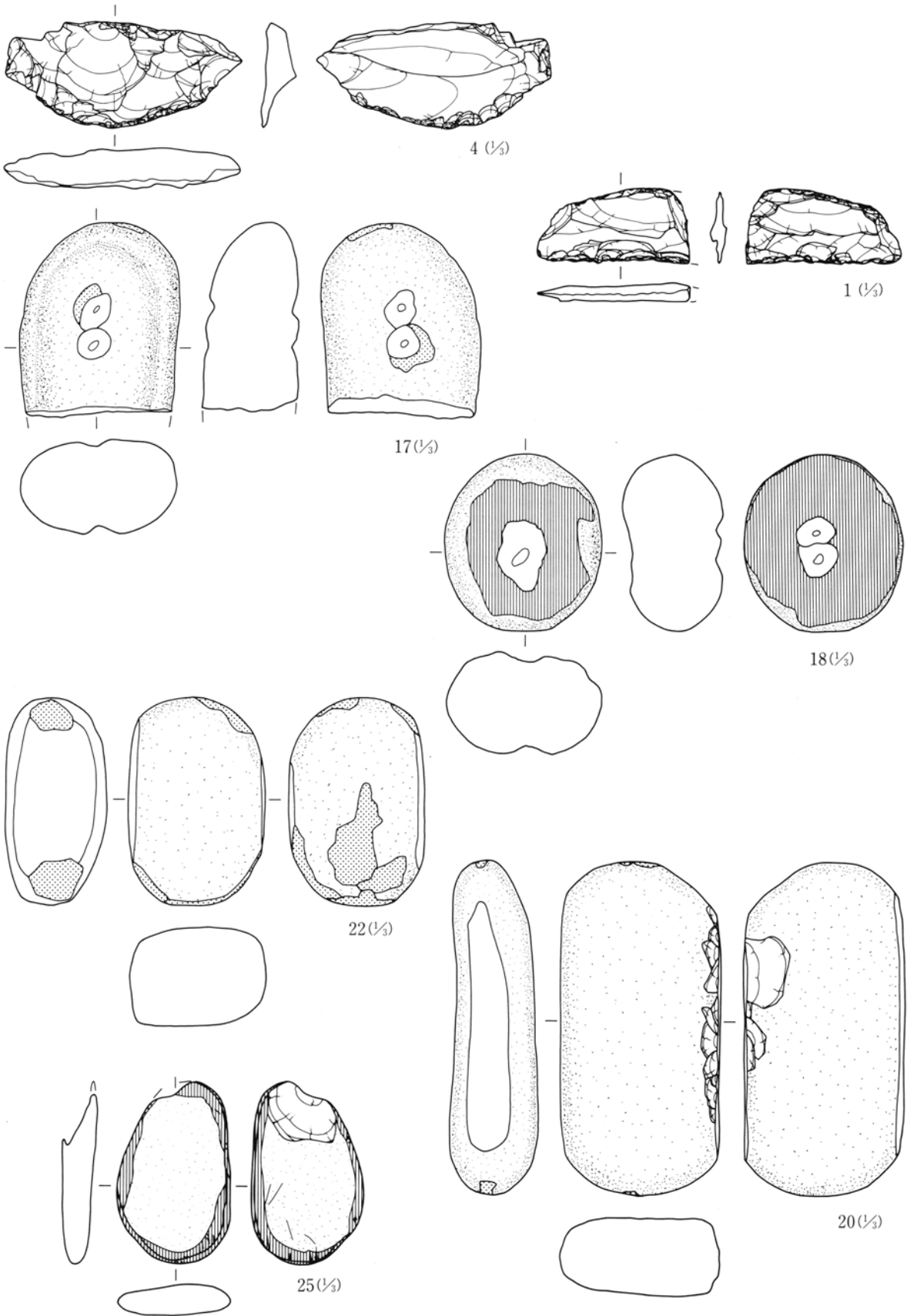
第622図 C202号住居跡出土石器



第623図 C203号住居跡出土石器

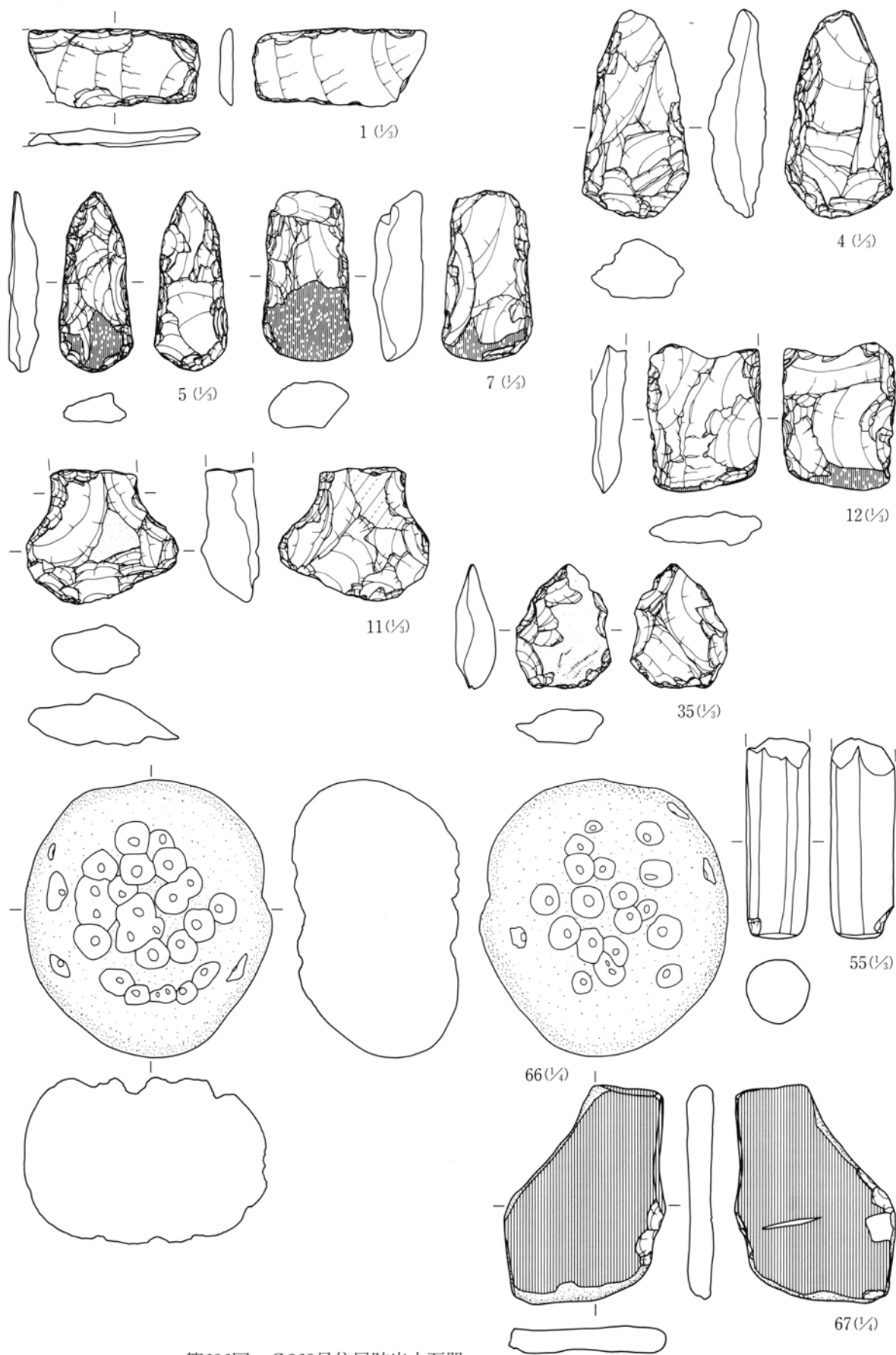


第624図 C206号住居跡出土石器

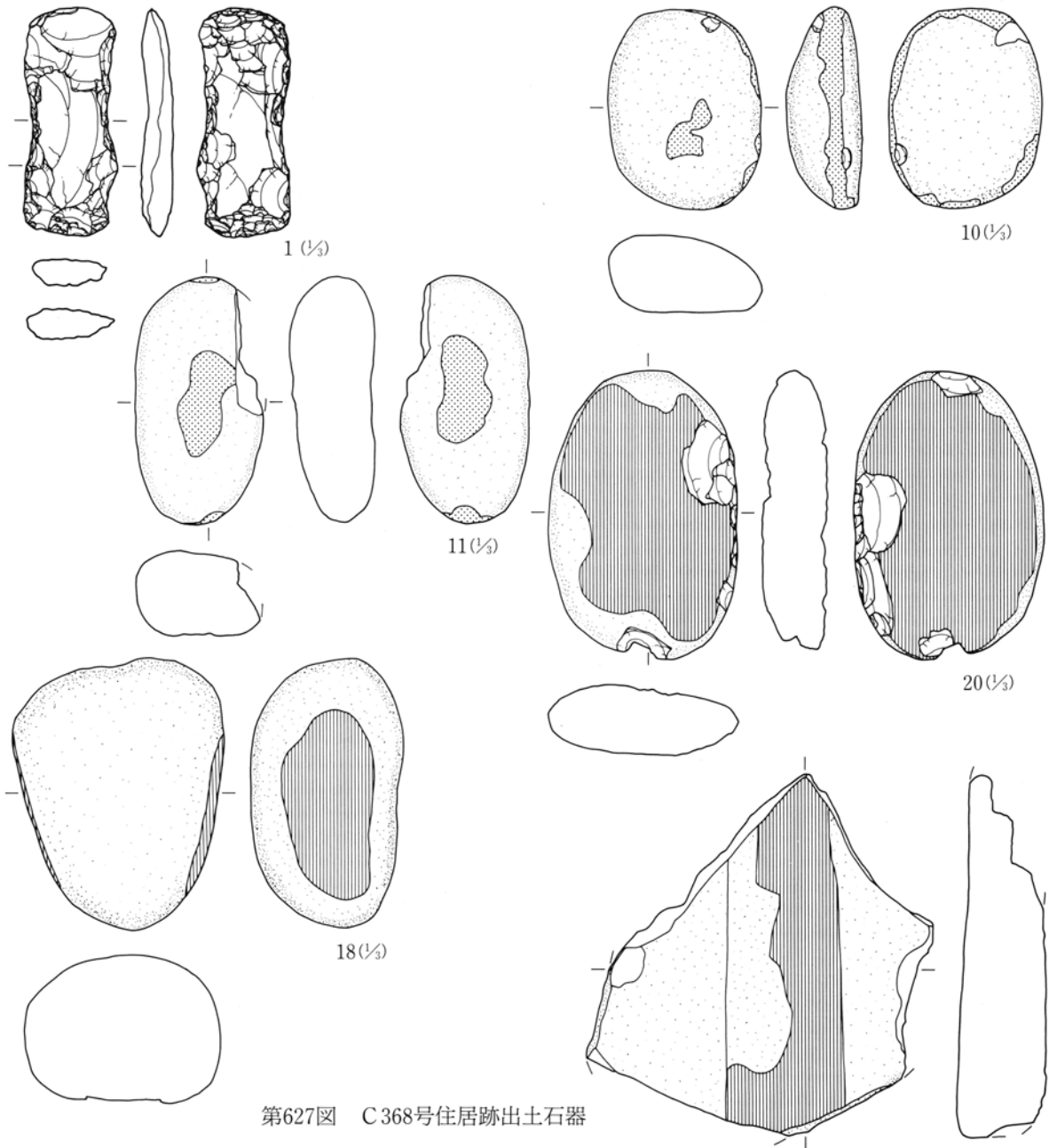


第625図 C362号住居跡出土石器

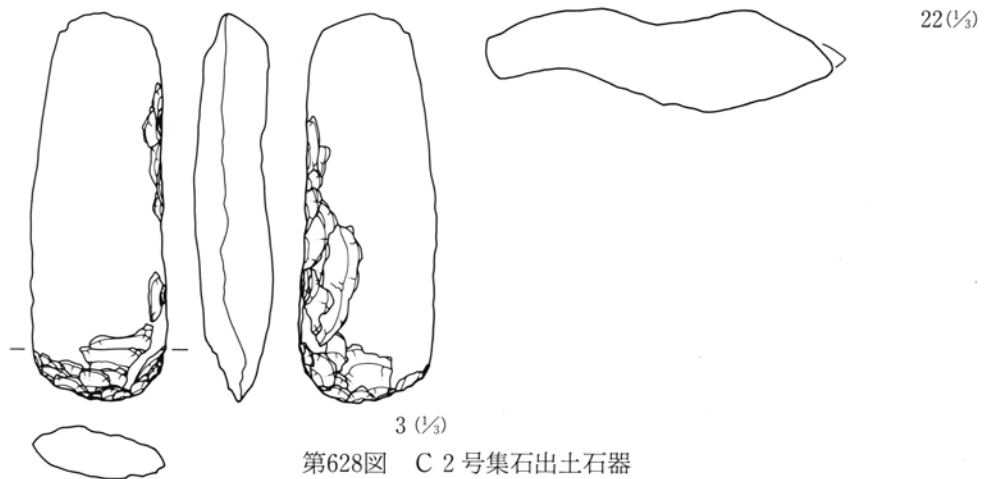
第4章 出土遺物



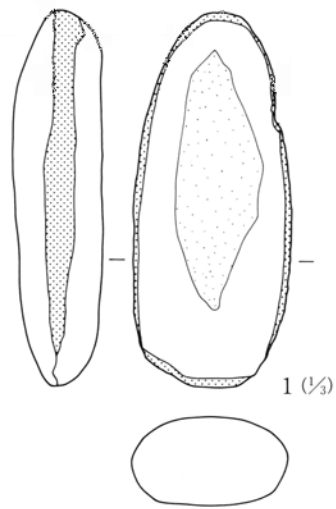
第626図 C363号住居跡出土石器



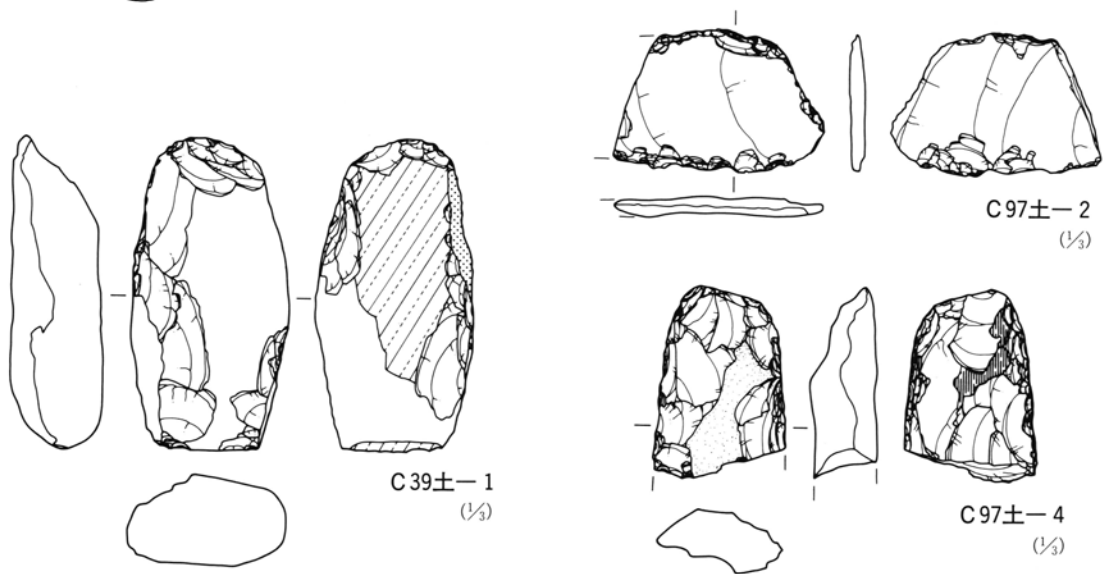
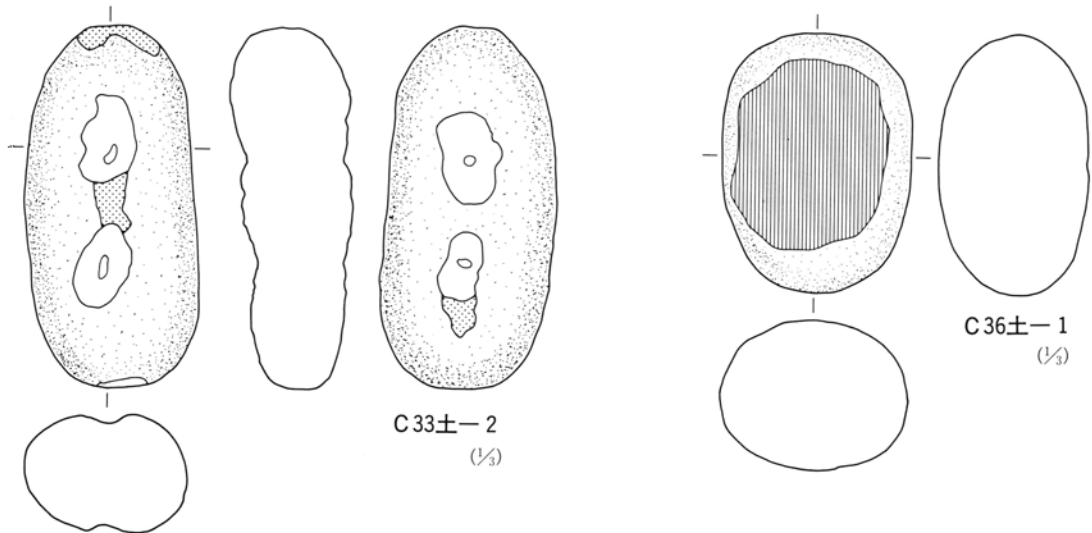
第627図 C368号住居跡出土石器



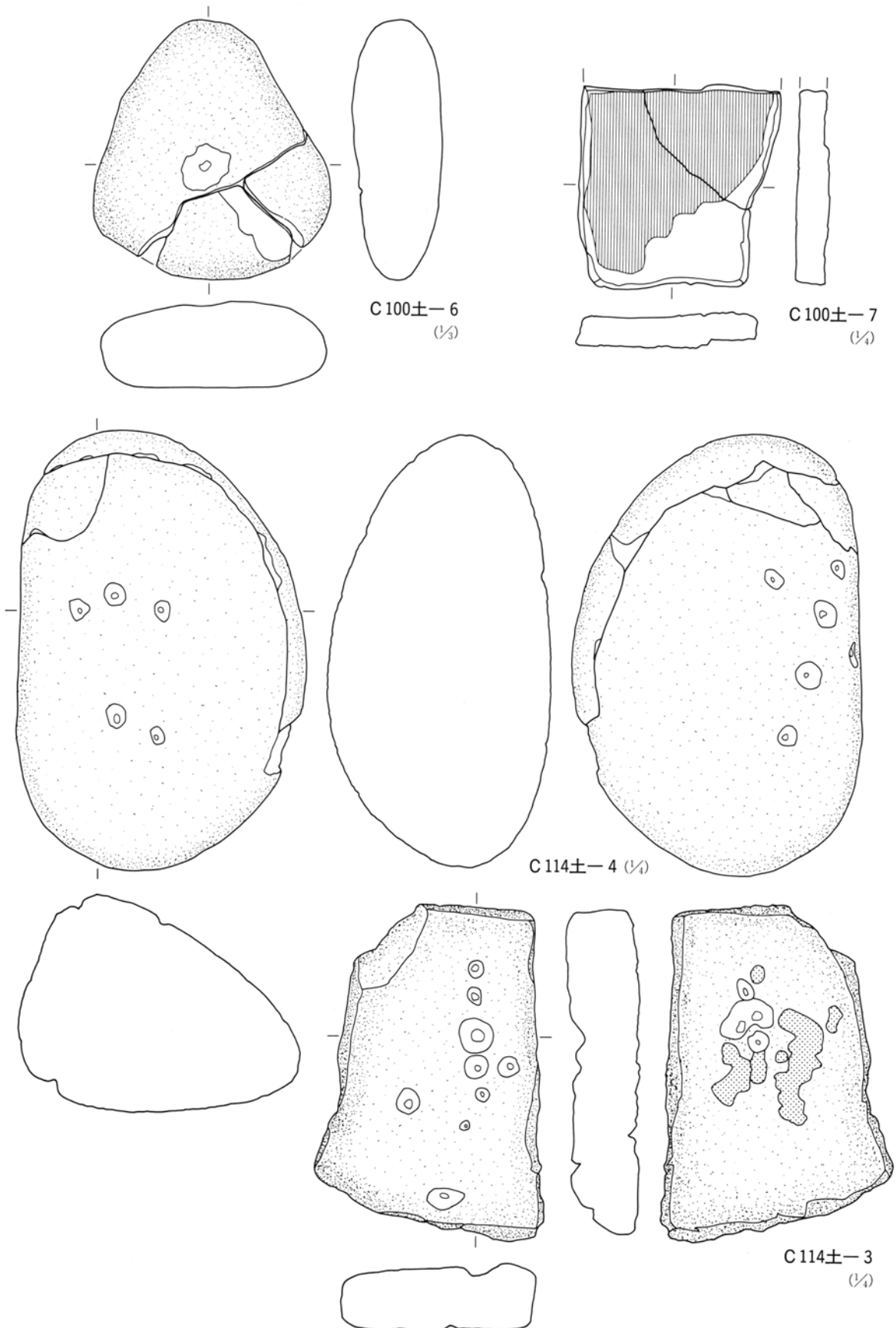
第628図 C2号集石出土石器



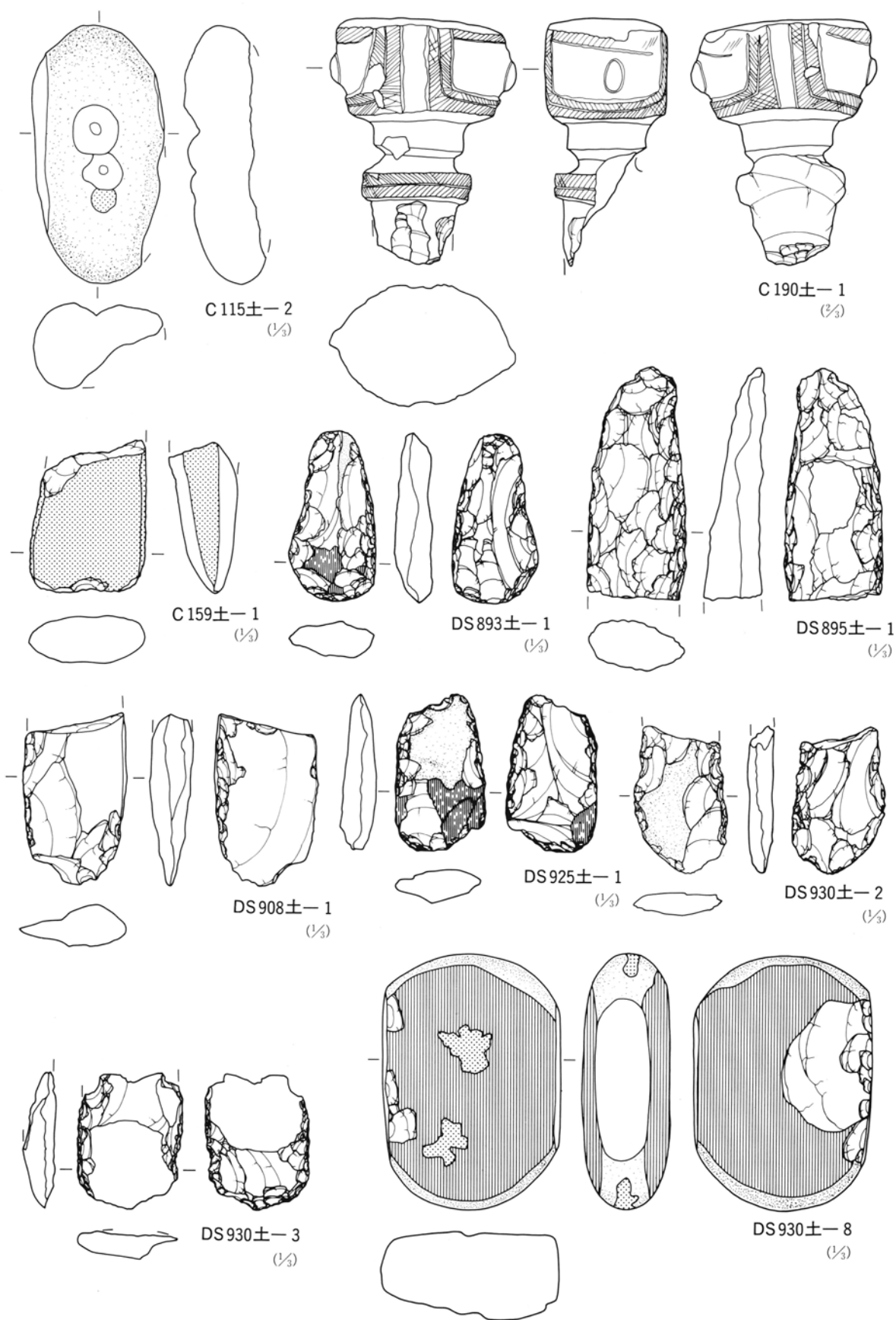
第629図 C 1 配石出土石器



第630図 土坑出土石器(1)



第631図 土坑出土石器(2)



第632図 土坑出土石器(3)

2. 弥生時代遺構出土の石器

弥生時代の遺構からも多量の石器が出土している。総点数2,053点、総重量で500kgを越えるが、そのうちかなりの部分が縄文時代の遺構からの混入と思われる。ただし出土状況などから両者を確実に分離することは不可能であり、弥生時代の遺構出土として一括して記述する。主な器種は縄文時代遺構出土石器と同じであるが、石鍬がこれに加わる。以下各類型ごとに特徴を記す。

石鏃 総点数25点。破損のため形状がわからないものを除くと、凹基無茎鏃が19点、平基無茎鏃2点、未製品1点となっている。このうち平基無茎鏃は他に比べて大きく、調整もやや粗いため未製品の可能性が高い。凹基無茎鏃には、両側に屈曲部を持つものが1点含まれている(C344住-1:728図)。石材は黒曜石が9割近くを占める。他はチャート、赤色珪質岩、珪質頁岩などで、非常に細粒・均質な石材が利用されている。

尖頭器 大型の黒色頁岩製のもの、黒曜石製の薄手のものの2点が出土している。

石錐 黒曜石製と赤色珪質岩製の2点が出土している。調整は刃部に集中する。

石匙 4点出土。横形が1点、他は縦形。石材は横形のもがチャートである他は、全て硬質泥岩である。

楔形石器 14点出土している。縄文時代の遺物と同じ小型のもの他に、重量にして10～60g程のやや大型のものがみられる。小型のものが黒曜石製なのに対し、やや大型のものは珪質頁岩や硬質泥岩などである。

スクレイパー 総数で59点出土。大半は剥片の周辺に調整を加え直線または弧状の刃部を作出。素材の形状を大きく変えることは少なく、形態は素材の形状に規制される。調整の頻度もばらつきがあり、刃部のみに調整を加えるものから、ほぼ全周を調整するものまで様々である。特徴的な形態としては、剥片の長軸方向の両辺に調整加え、楕円形～長方形に整形したものがみられる。この形態のものは、刃部側を薄く、反対側を厚手に整形してある。石材は硬質泥岩が8割近くを占め、概ね細粒の石材が利用されている。

打製石斧 総数で251点出土している。形状からは、縄文時代のものと区分できない。同様の型式分類に従うと、I類18点、II a類17点、II b類96点、III類65点である。完形のものについて計測値の平均を見てみると、長さ10.4cm、幅5.4cm、厚さ2.1cm、重量144.0gである。類型による大きな差はないが、I類が他に比べて大型でやや幅広の傾向がある。94点には使用による摩耗が刃部を中心に観察できた。I類は、刃部の他に基部と柄り部分にも摩耗のみられるものがあつた。石材は、硬質泥岩をはじめとする細粒の砂・泥岩類が6割以上を占め、以下細粒の安山岩類が続く。石材も縄文時代のものに似た傾向を示している。

石鍬 総数で30点出土。破損により形状がわからないものを除くと、全て基部に比して刃部が広がる形状を呈するが、側辺の状況から以下の二つに分類できる。

I：側辺が直線状のもの II：側辺が内湾するもの

類型別の内訳は、I類が10点、II類が7点、形状不明が13点である。甘楽町の白倉下原・天引向原遺跡に見られた両側に柄りを持つ分銅形の形態のものは見られない。打製石斧に比べて大きいと予想されるが、完形のもの未製品を含めて2点のみであるため、定量的な属性からの区分は困難である。比較的大型、厚手のものをこの器種とした。石材は、硬質泥岩等の細粒の砂・泥岩類が14点と最も多いが、打製石斧に比べ安山岩をはじめとする粗粒の石材が占める比率が高くなっている。

磨製石斧 63点出土。このうち未製品が33点と、半数以上を占めている。完成品でも研磨が刃部に限られていたり、表裏に敲打痕や剥離面を残しているものが大半である。刃部の形態は両刃である。1点のみ礫の一端を調整して刃部を作出したのみで、他は未加工のまま残しているものがあつた(C93住-1:PL. 269)。石材は9割以上が変玄武岩で、残りは緑色片岩、硬質泥岩、変はんれい岩、変輝緑岩である。

石棒 総数で5点出土。全て胴部の破片である。大型のものと小型のものがあり、大型のもの4点は全てデ

第4章 出土遺物

イサイト製である。緑色片岩製の小型のものが1点ある。

石核 224点出土。形状および石材の特徴は縄文時代のものに同じ。

原石 14点出土。石材は小形の赤色珪質岩や玉髓が多い。

剥片類 合計959点が出土している。このうち二次加工のあるものが373点、微細剥離痕のあるものが247点ある。石材は硬質泥岩が圧倒的多数を占める。

凹石 79点出土。このうち凹みを両面に持つものが31点、片面のみのものが48点である。大半は表裏や側面、端部に研磨や敲打痕がみられる。また、両側を敲打と研磨によって面取りしたものが2点と、両側・両端を面取りして直方体状に仕上げたものが1点含まれている。完形のものについて計測値の平均をみると、長さ12.3cm、幅7.7cm、厚さ4.1cm、重量530.1gとなっている。素材の形状や使用石材の傾向は、縄文時代遺構出土の凹石と同様である。

磨石 95点出土。形状・石材ともに縄文時代の磨石と同様の傾向を示すが、D類がなく、E：細長い礫の下面に平坦な研磨面のあるものが加わる。E類の下面の研磨は非常に顕著である。また、側面や上面に研磨面や敲打痕、使用による摩耗などがみられる。また、C類の中には、両端もしくは一端を面取りしているものが2点含まれている。内訳は、A類6点、B類73点、C類11点、E類5点、不明1点である。

敲石 131点出土。形状・石材の傾向は縄文時代のものと同様。内訳はA類59点、B類65点、C類6点である。

砥石 54点出土。円礫もしくは角礫の表裏に使用面がある。多くは線状痕や浅い溝を伴う。円礫を素材とするものでは、表裏や側面、端部に敲打痕がみられる例もある。使用頻度にはかなりばらつきがあるが、頻度の高いものは、使用面が内湾しているものもあった(C10住-2:638図)。完形品の平均重量は1758.0gで、大半のものが数十g～2kg程度の間に入るが、4kgを超える大型のものも4点あった。石材は、砂岩が半数以上を占め、以下粗粒の安山岩、硬質泥岩、流紋岩等と続く。古墳時代以降砥石の主要な石材となる砥沢石製のものはずかに1点であるが、小型の角柱状に整形された特殊な形態のものである(C354住-9:733図)。

多孔石 9点出土。石材は粗粒の安山岩や砂岩、流紋岩等である。素材は円礫が多いが、砂岩製のものは盤状の角礫が利用されている。また、大型石棒の胴部破片を転用したものも1点あった(C39住-13:655図)。

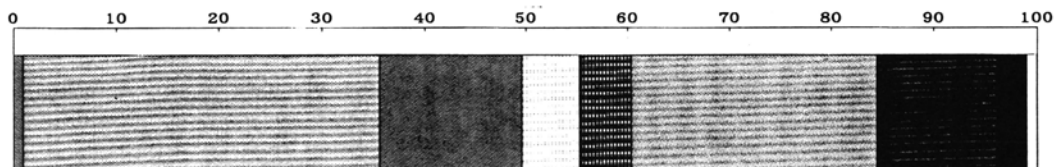
台石 31点出土。住居の床面上に据え付けられたような形で出土しているものが多い。大半は盤状の円礫を素材とし、9割近くのもので、表面に敲打痕や研磨面、使用による摩耗などがみられた。多くは重量にして1～3kg程度の大きさであるが、中には10～20kgのものもあった。石材は粗粒の安山岩、流紋岩等、砂岩などが多い。

この他に、円形や薄い板状の用途不明の石製品が出土している(C57住-2:664図、C275住-2:713図)。

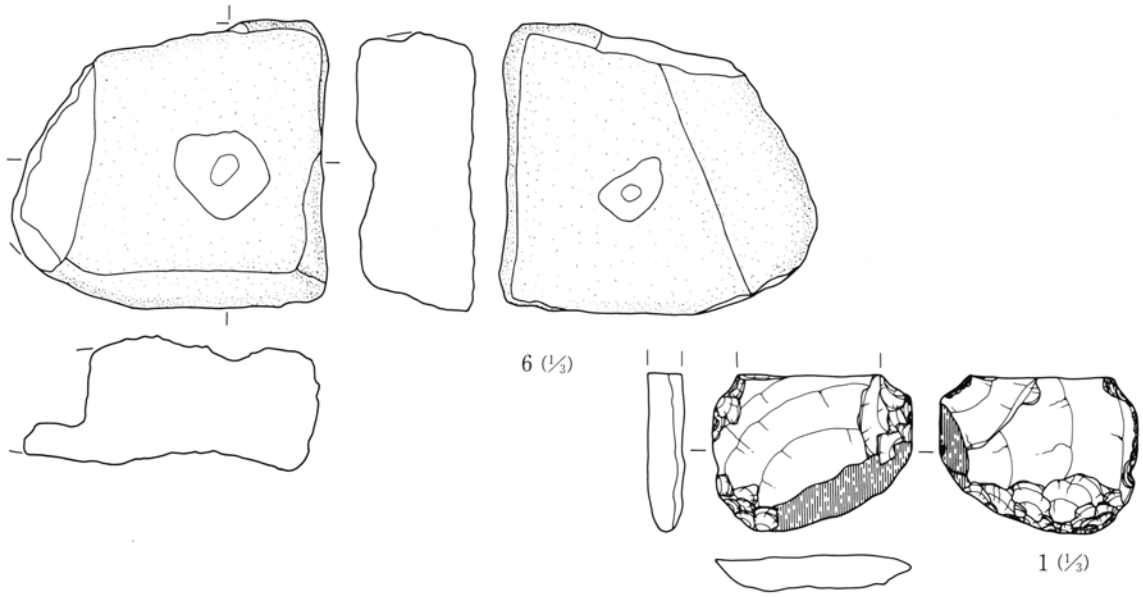
表3 弥生時代遺構出土石器器種組成表

器種	石鏃	尖頭	石錐	楔	石匙	SS	打斧	磨斧	石鏃	剥片	石核	原石	石棒	磨石	凹石	敲石	多孔	砥石	台石
個数	25	2	2	14	4	59	251	63	30	959	224	14	5	96	78	130	9	54	31

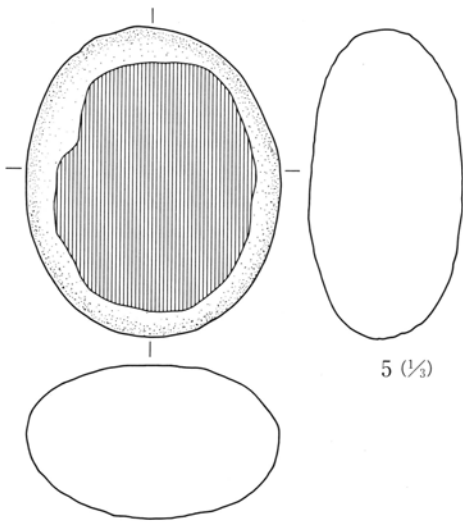
*この他に石皿3点、用途不明の石製品が5点出土している。



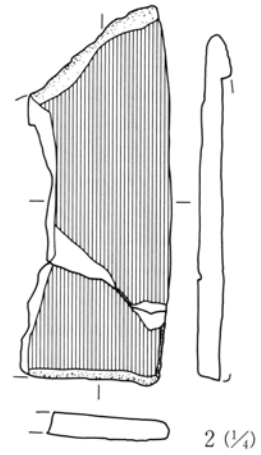
第633図 弥生時代遺構出土石器石材組成



第634图 C 2号住居跡出土石器



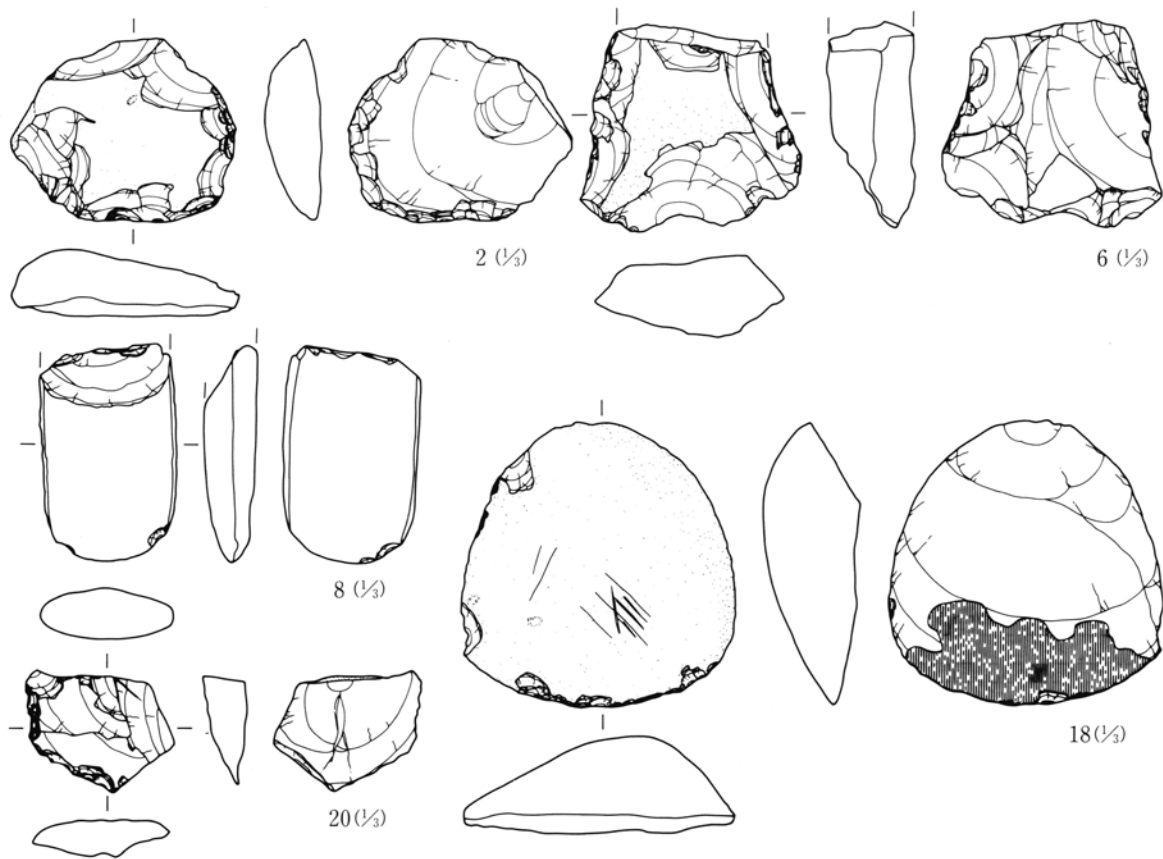
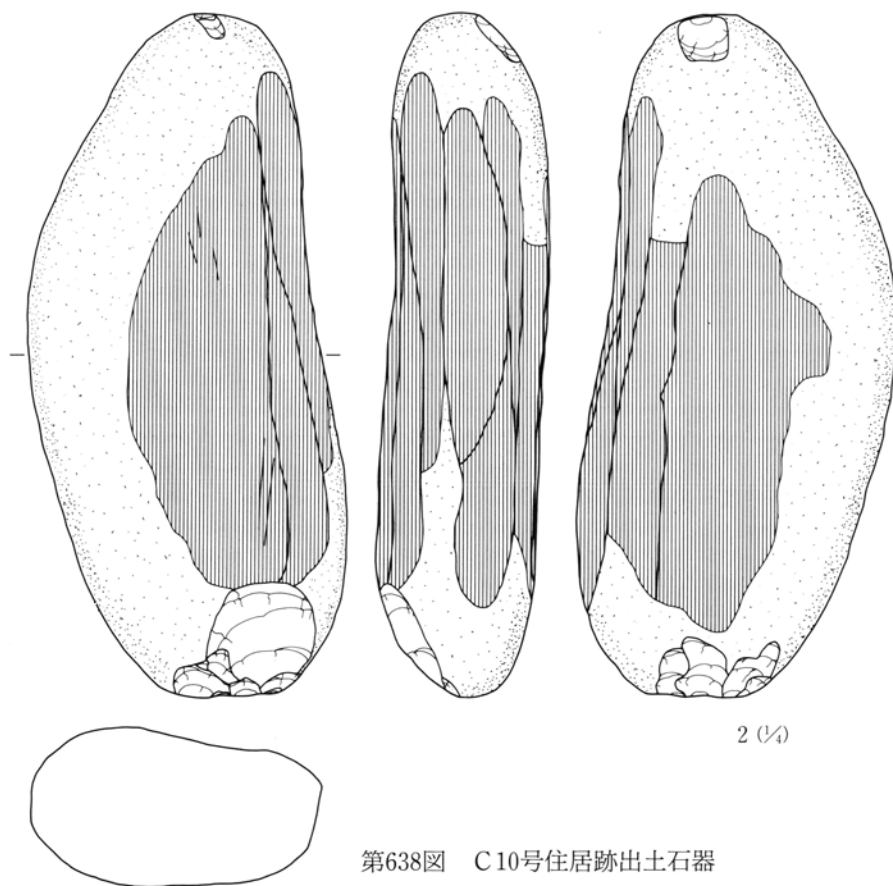
第635图 C 6号住居跡出土石器

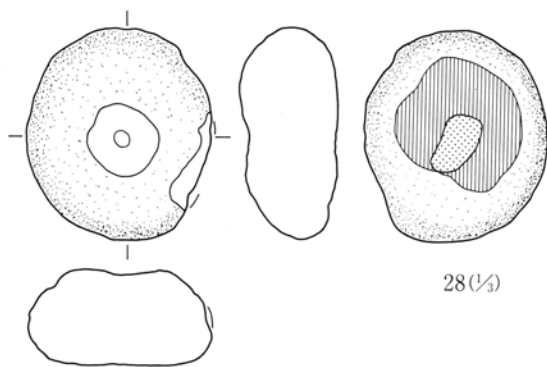


第636图 C 8号住居跡出土石器



第637图 C 13号住居跡出土石器

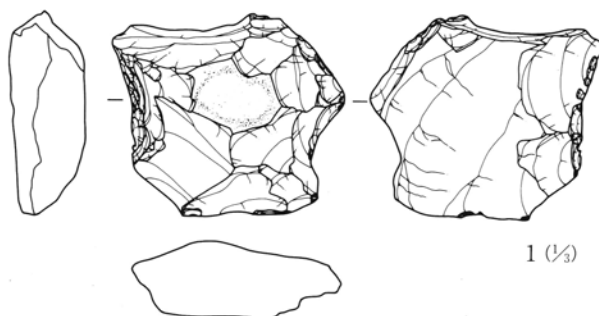




28 (1/3)

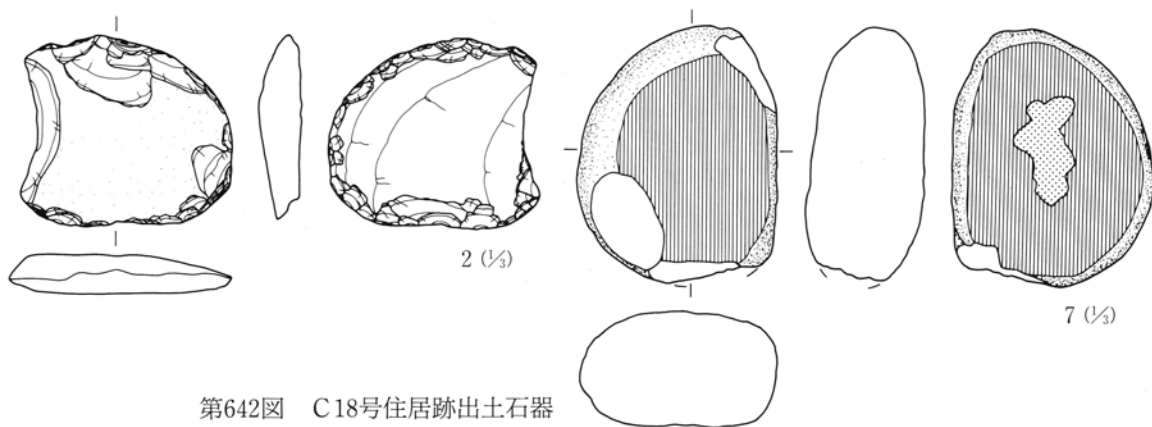
29 (1/3)

第640図 C14号住居跡出土石器(2)



1 (1/3)

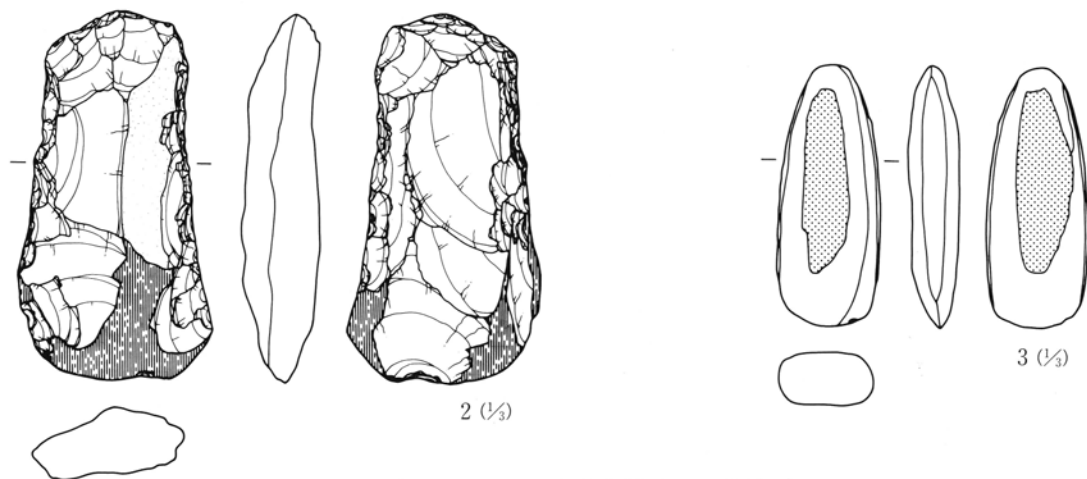
第641図 C15号住居跡出土石器



2 (1/3)

7 (1/3)

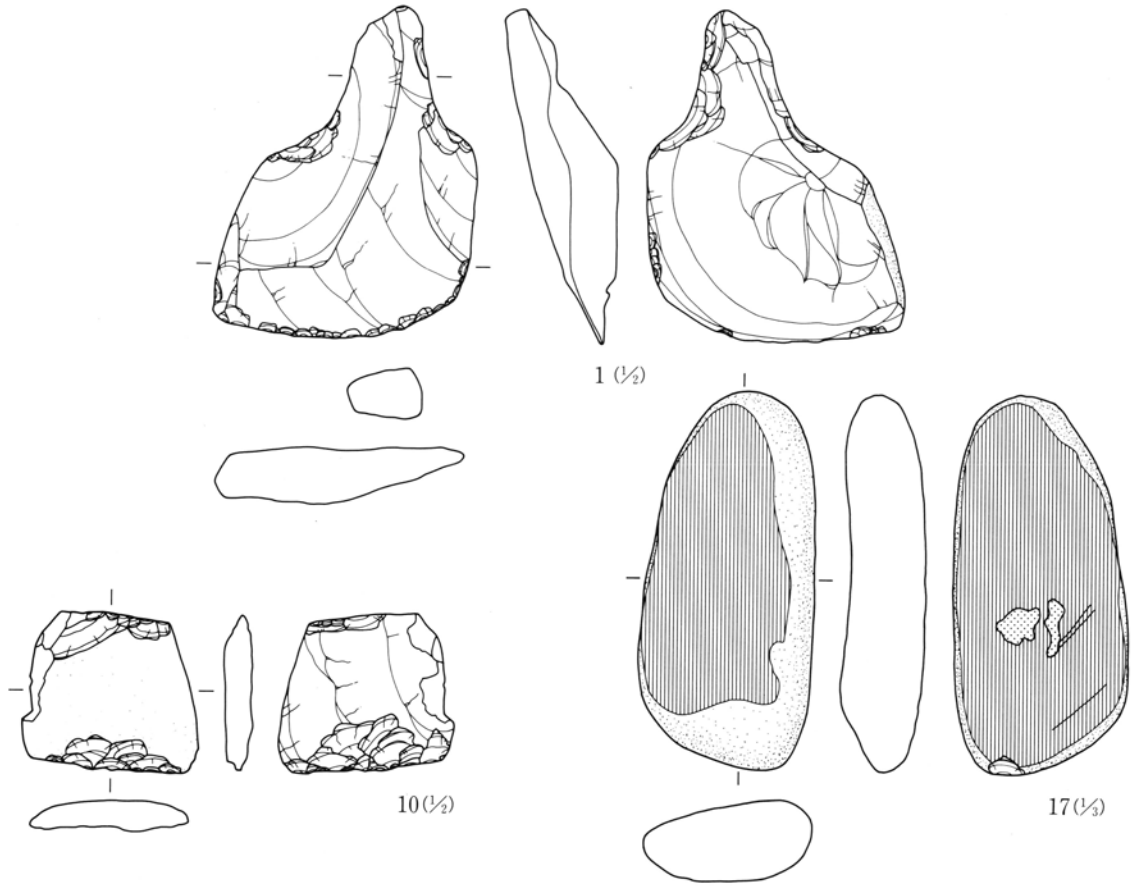
第642図 C18号住居跡出土石器



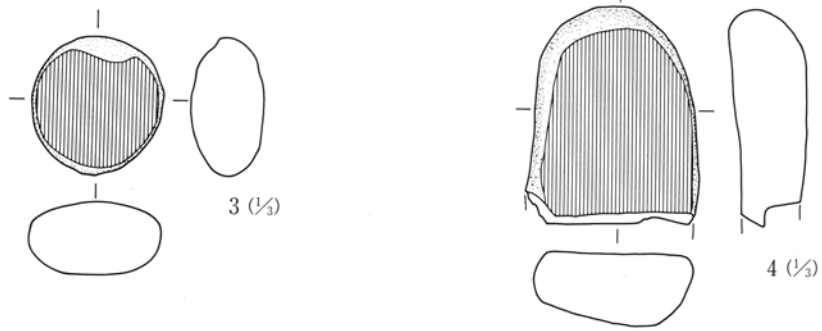
2 (1/3)

3 (1/3)

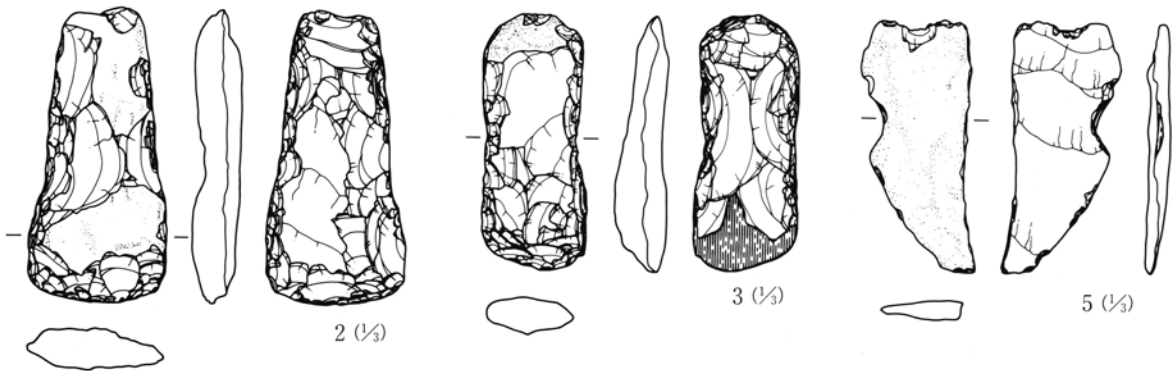
第643図 C20号住居跡出土石器(1)



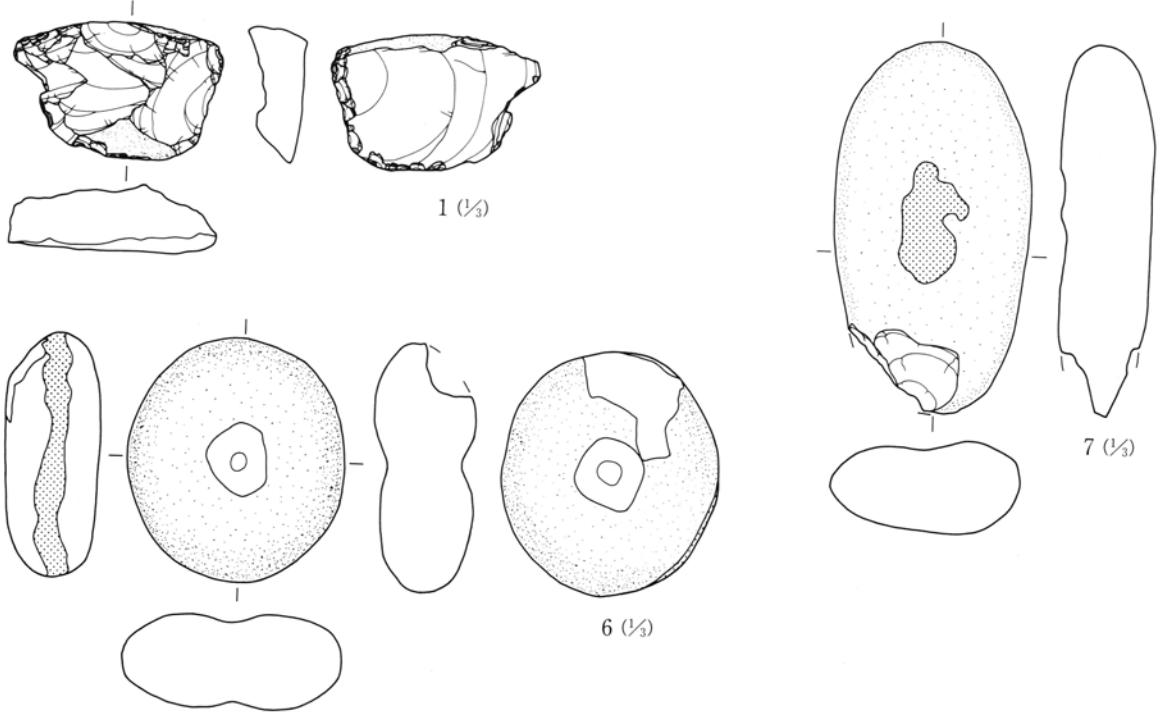
第644図 C20号住居跡出土石器(2)



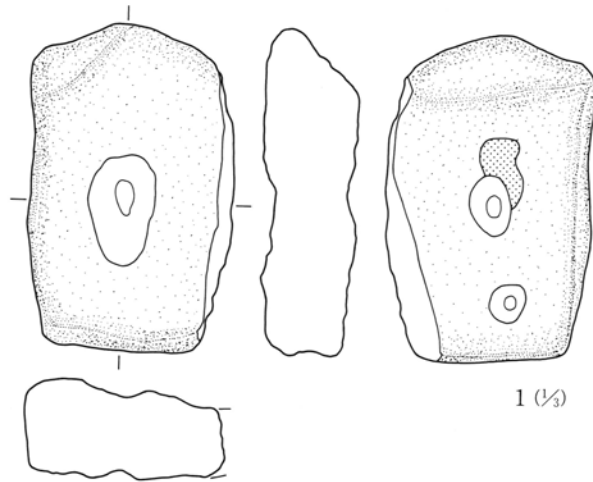
第645図 C21号住居跡出土石器



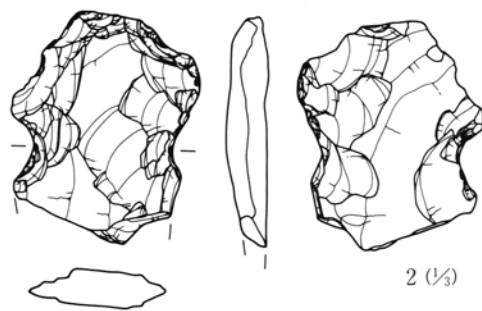
第646図 C22号住居跡出土石器



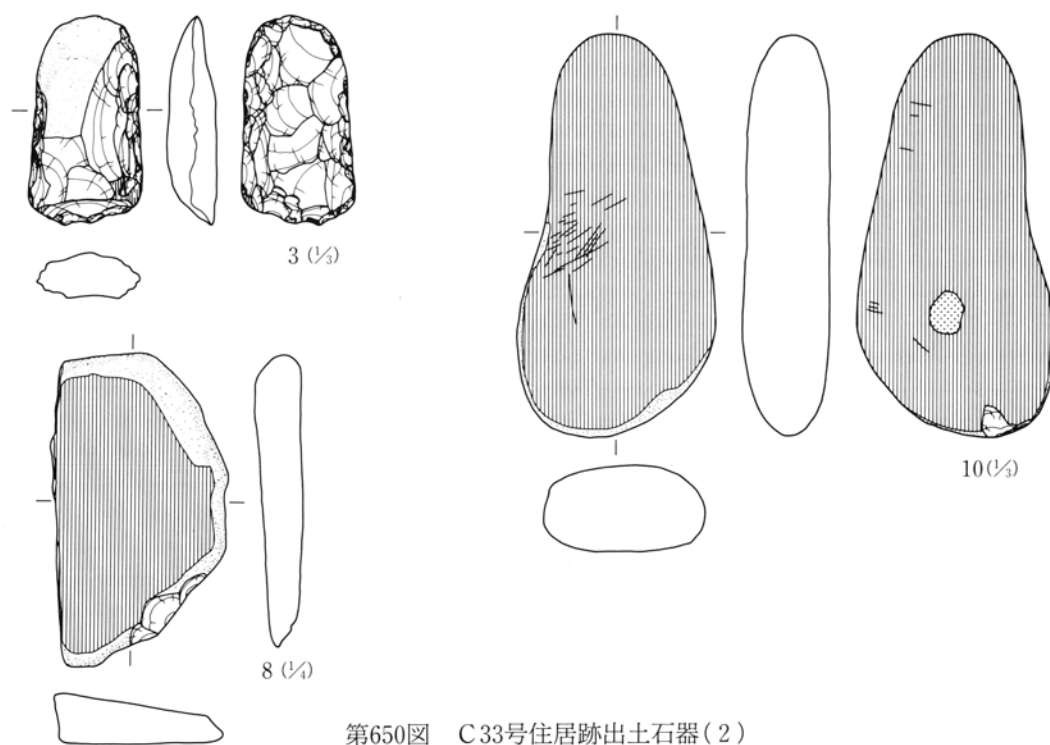
第647图 C28号住居跡出土石器



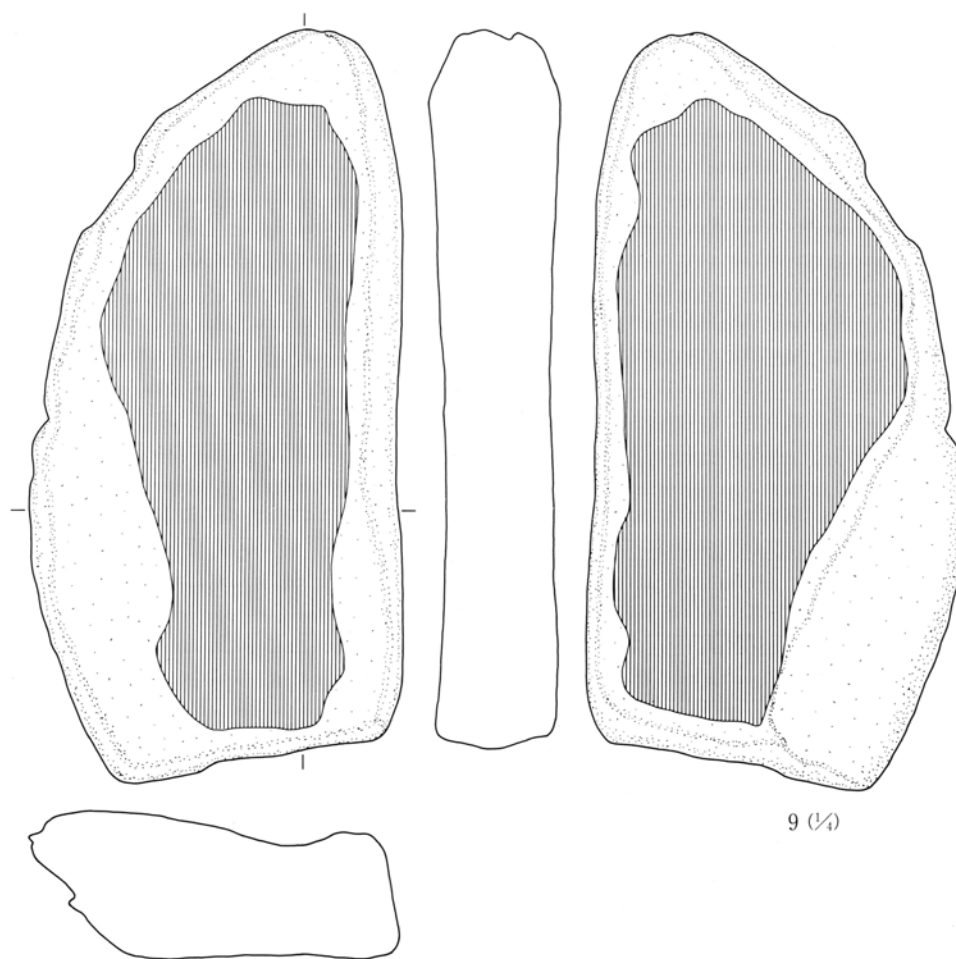
第648图 C31号住居跡出土石器



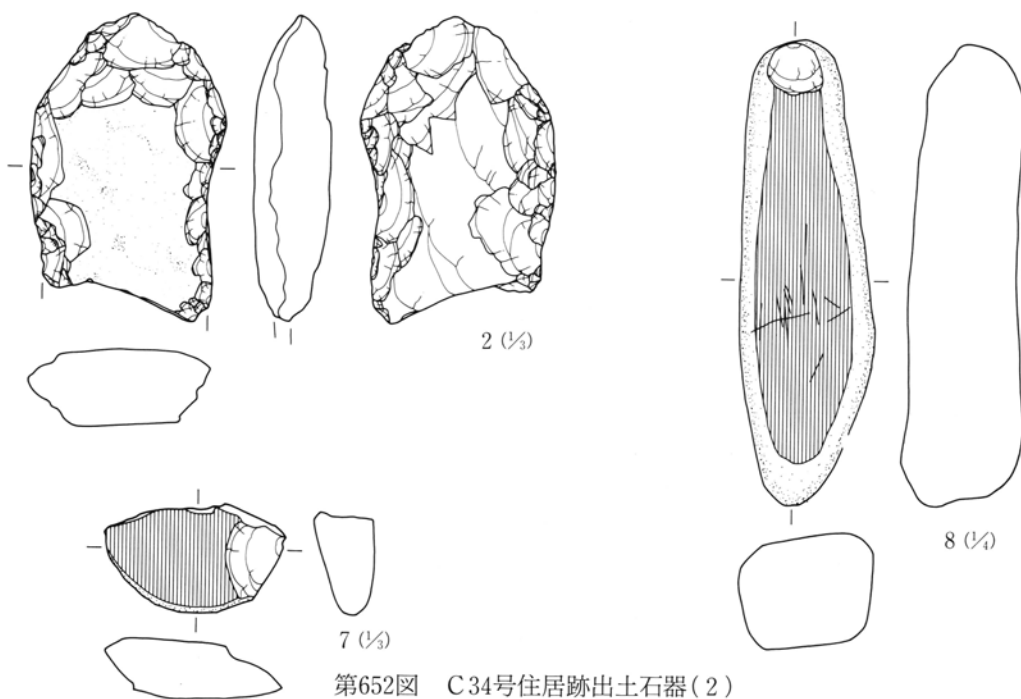
第649图 C33号住居跡出土石器(1)



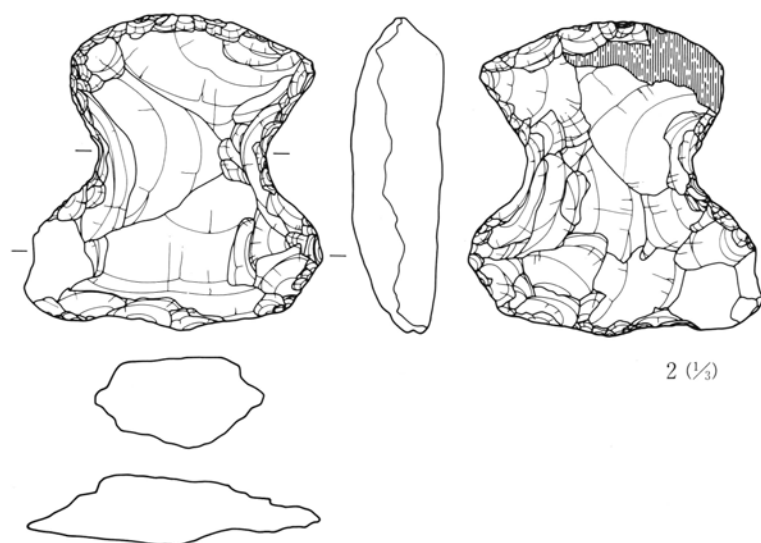
第650図 C33号住居跡出土石器(2)



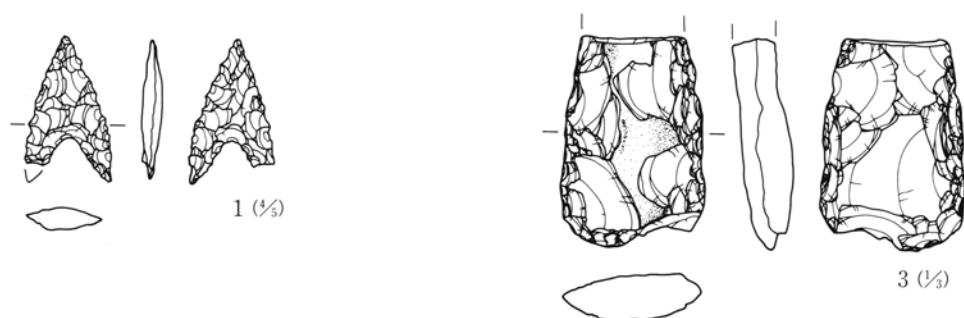
第651図 C34号住居跡出土石器(1)



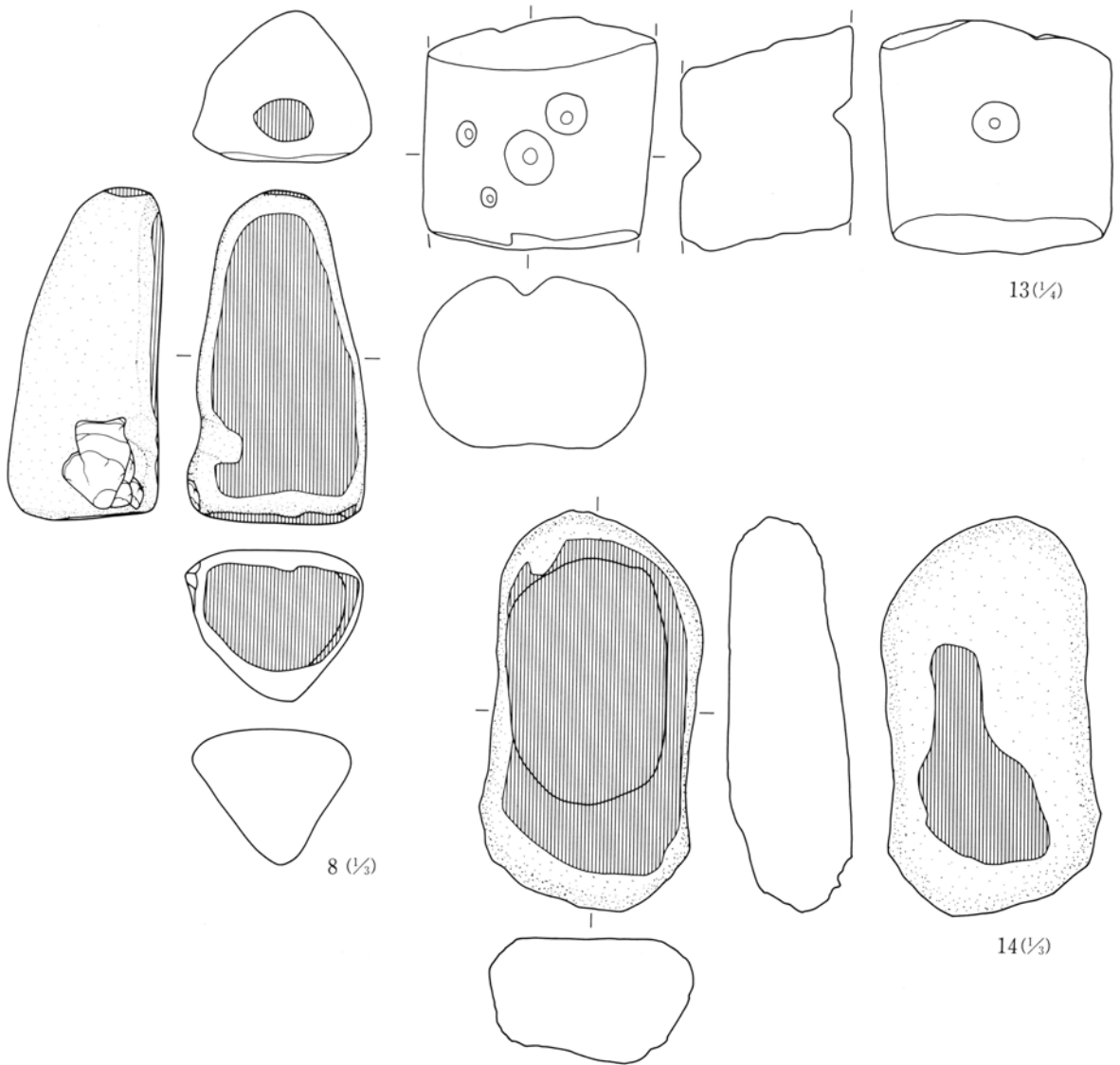
第652图 C34号住居跡出土石器(2)



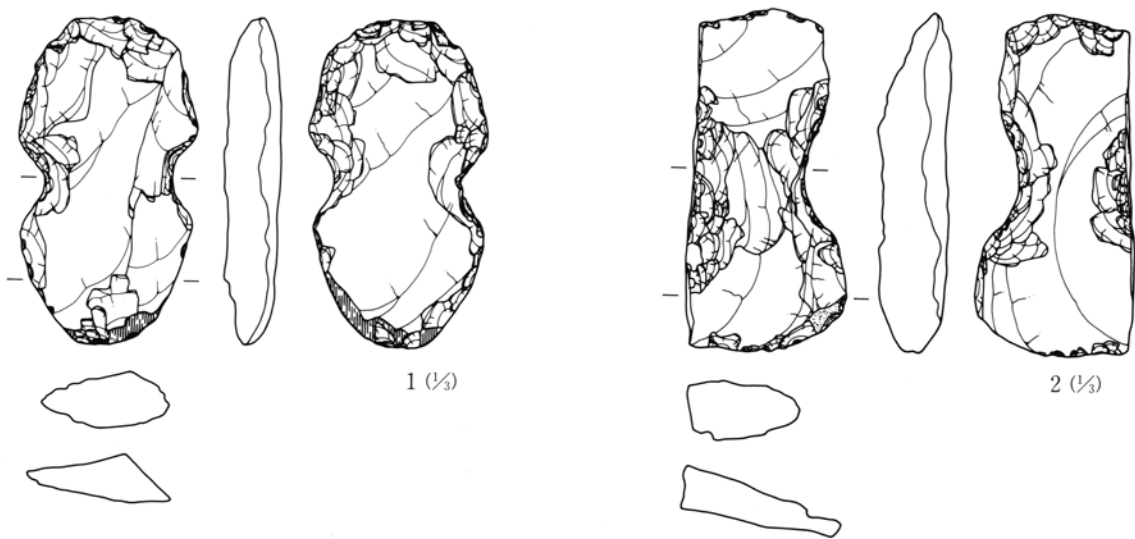
第653图 C38号住居跡出土石器



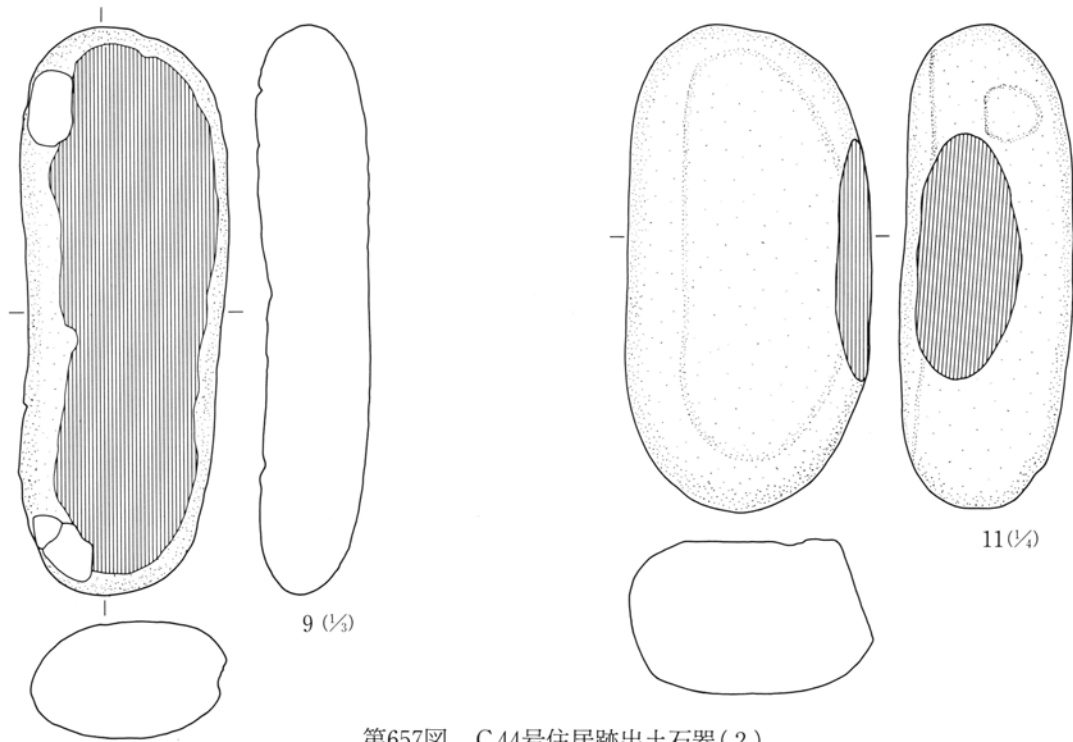
第654图 C39号住居跡出土石器(1)



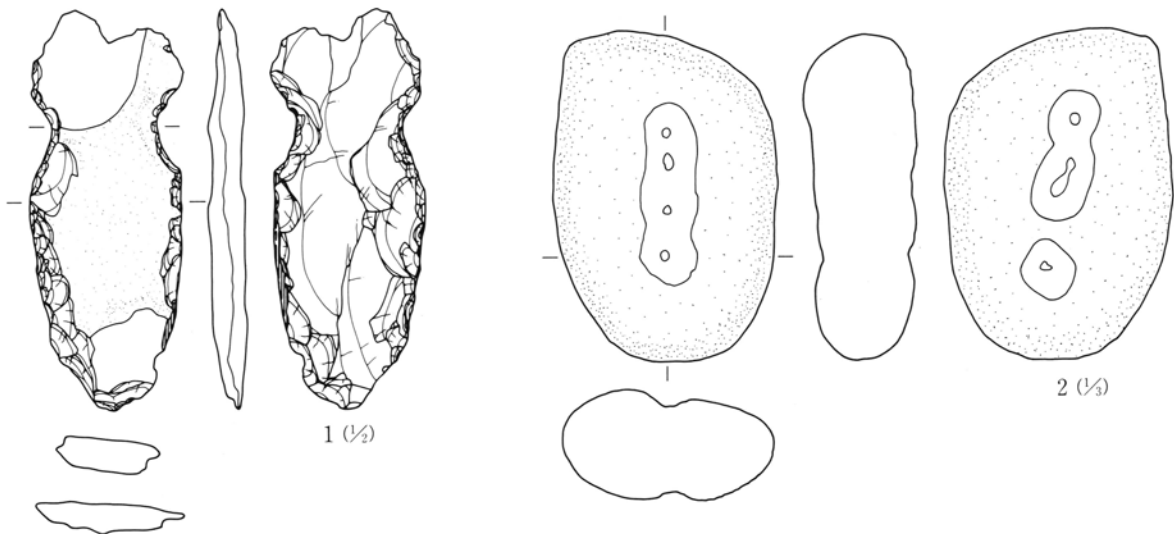
第655图 C39号住居跡出土石器(2)



第656图 C44号住居跡出土石器(1)

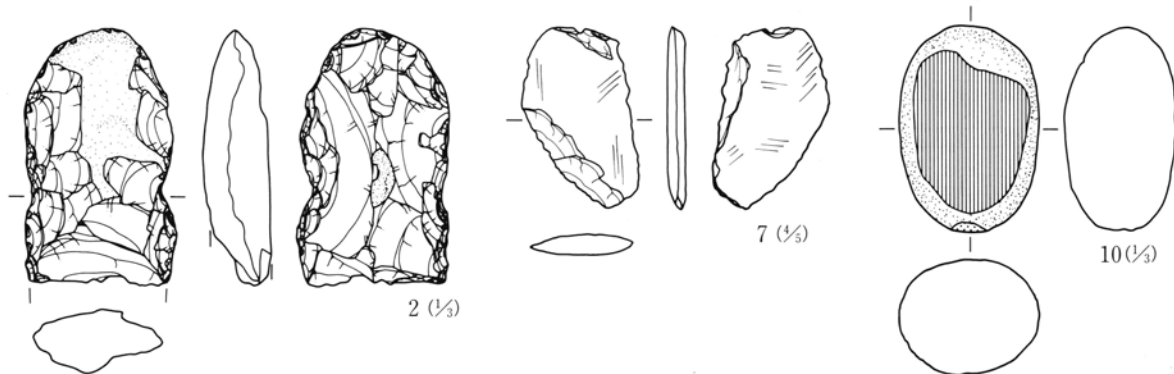


第657图 C44号住居跡出土石器(2)



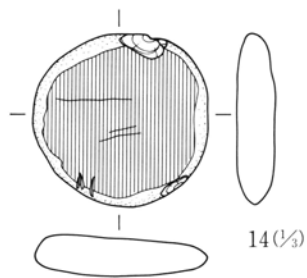
第658图 C46号住居跡出土石器

第659图 C47号住居跡出土石器

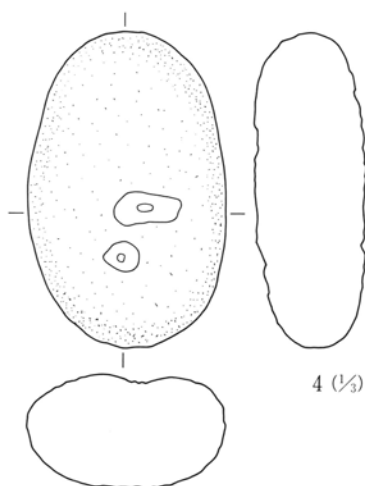


第660图 C50号住居跡出土石器(1)

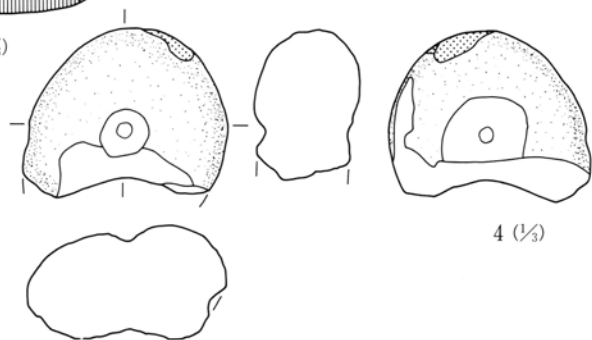
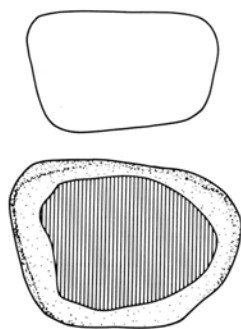
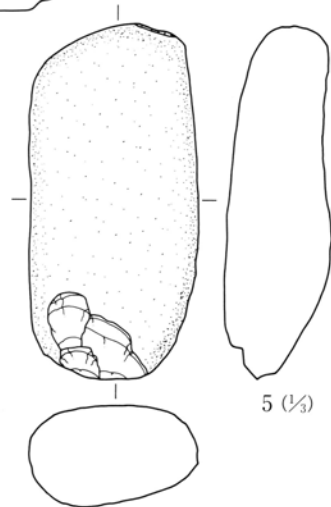
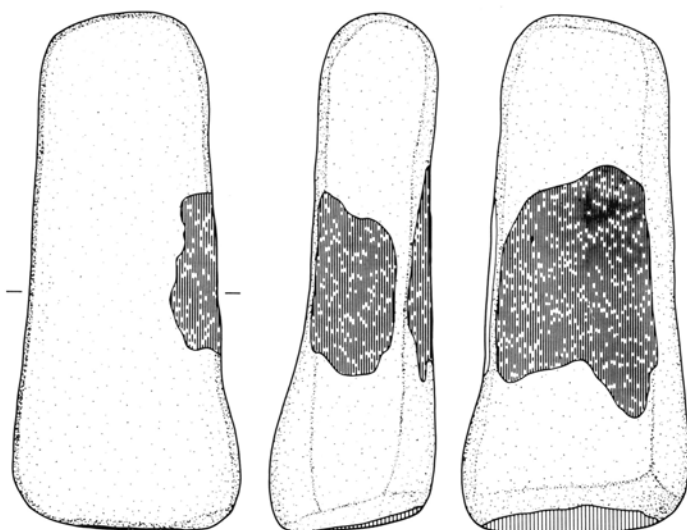
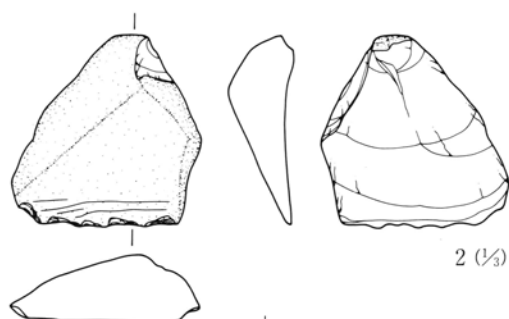
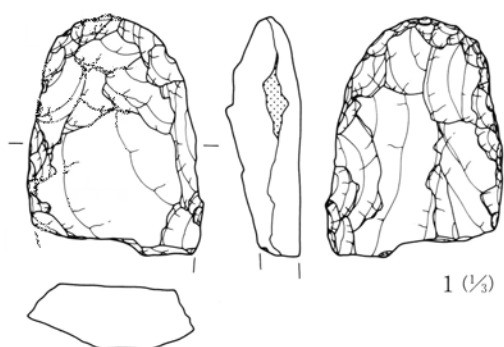
第4章 出土遺物



第661図 C50号住居跡出土石器(2)

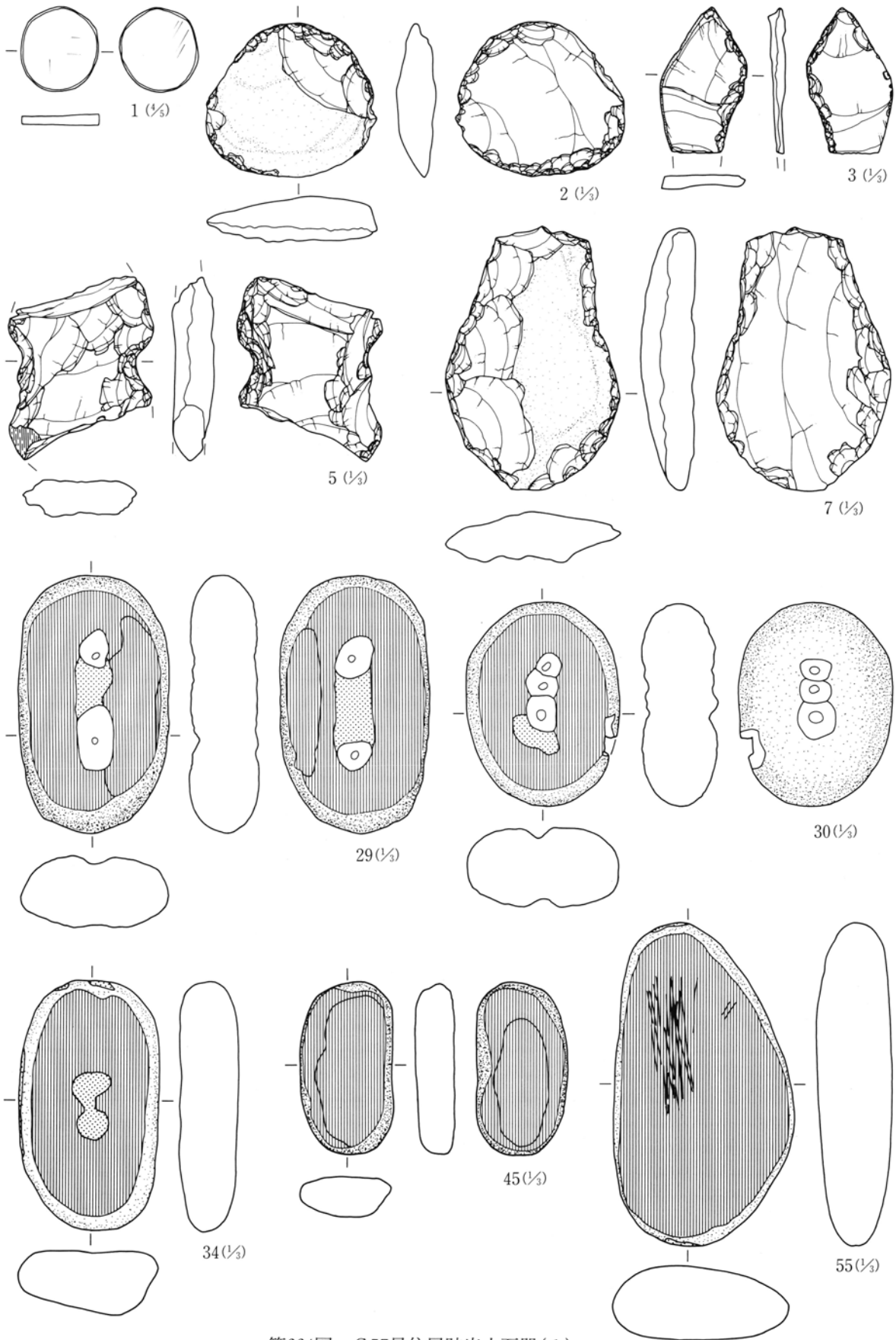


第662図 C56号住居跡出土石器

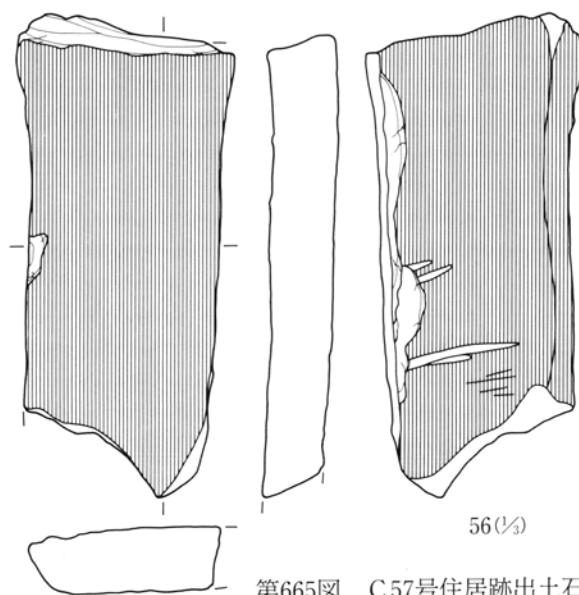


第663図 C52号住居跡出土石器

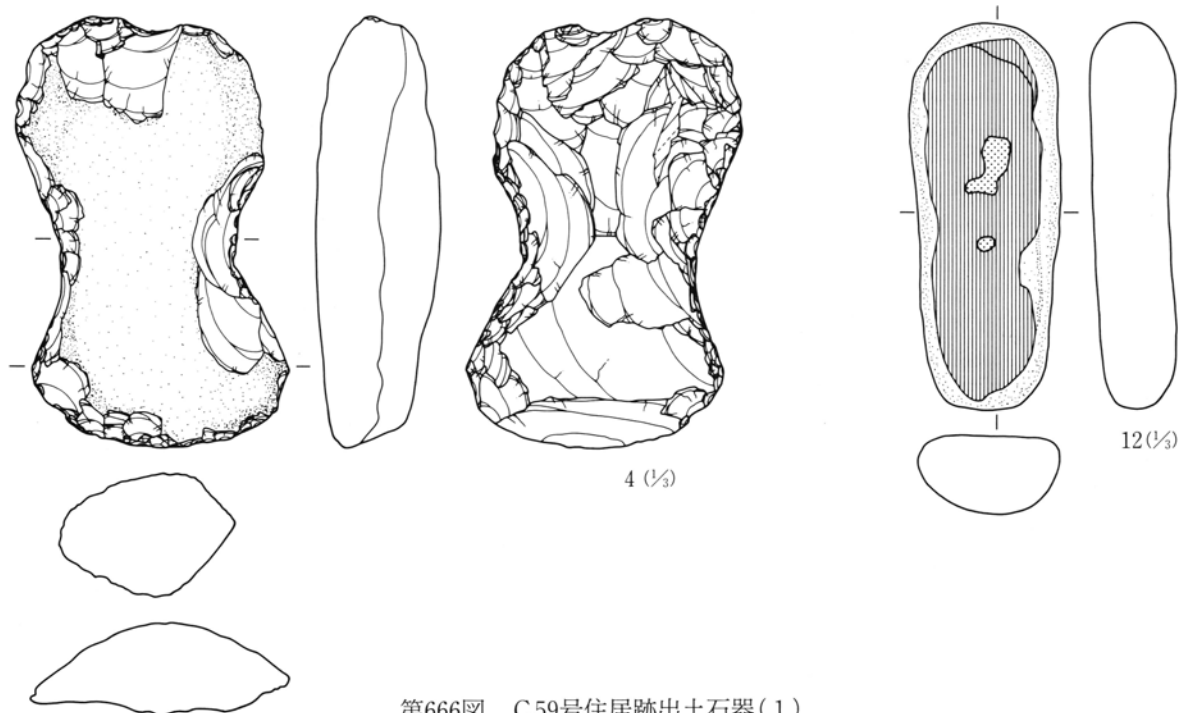
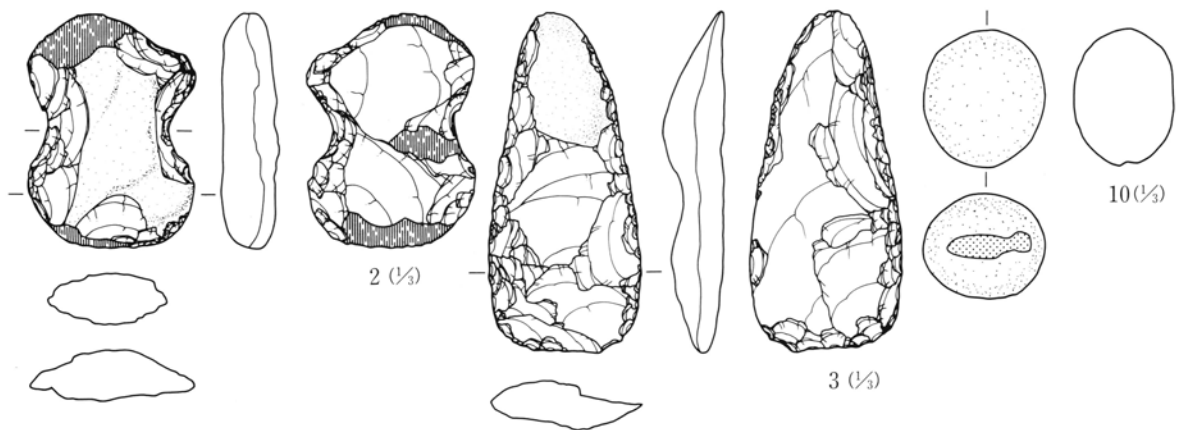
第4節 石 器



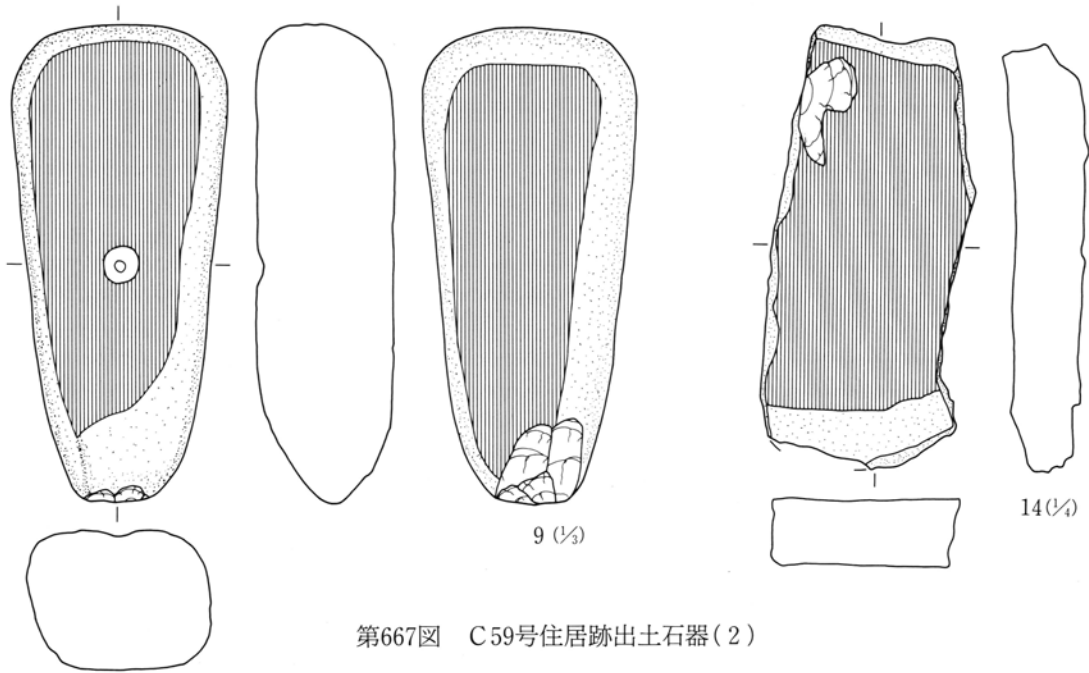
第664図 C57号住居跡出土石器(1)



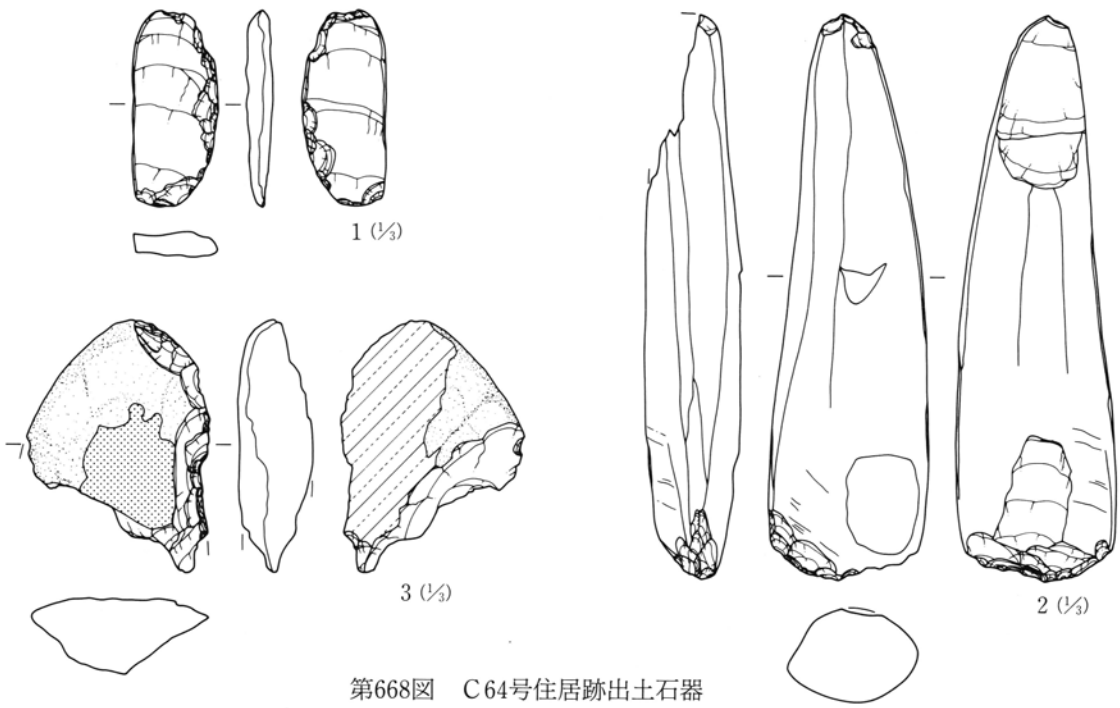
第665图 C57号住居跡出土石器(2)



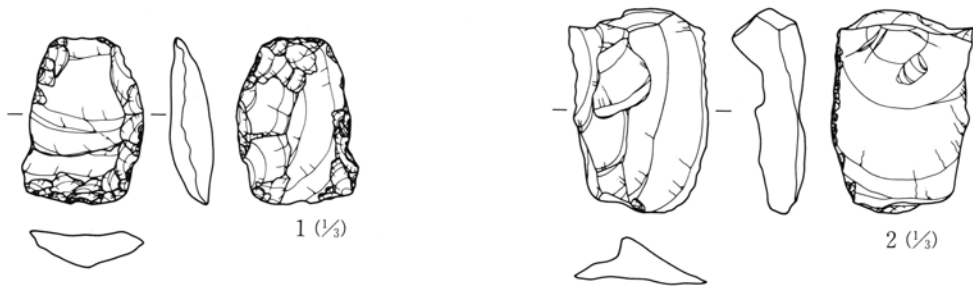
第666图 C59号住居跡出土石器(1)



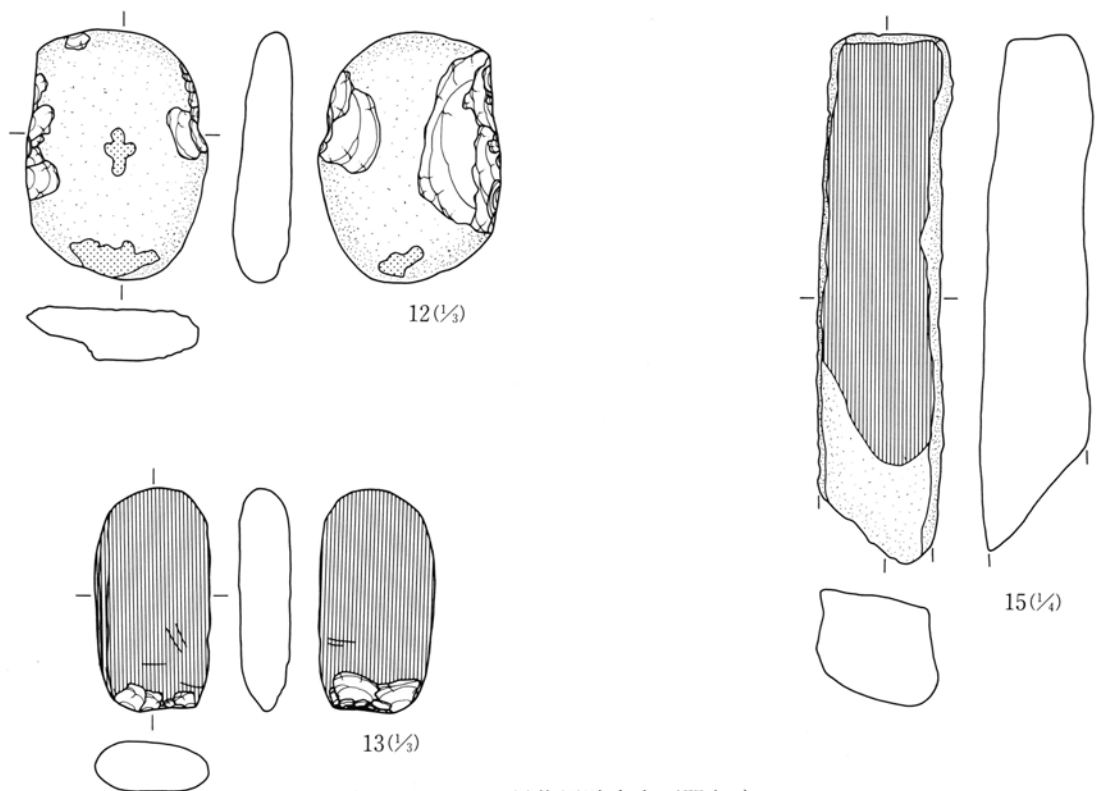
第667图 C59号住居跡出土石器(2)



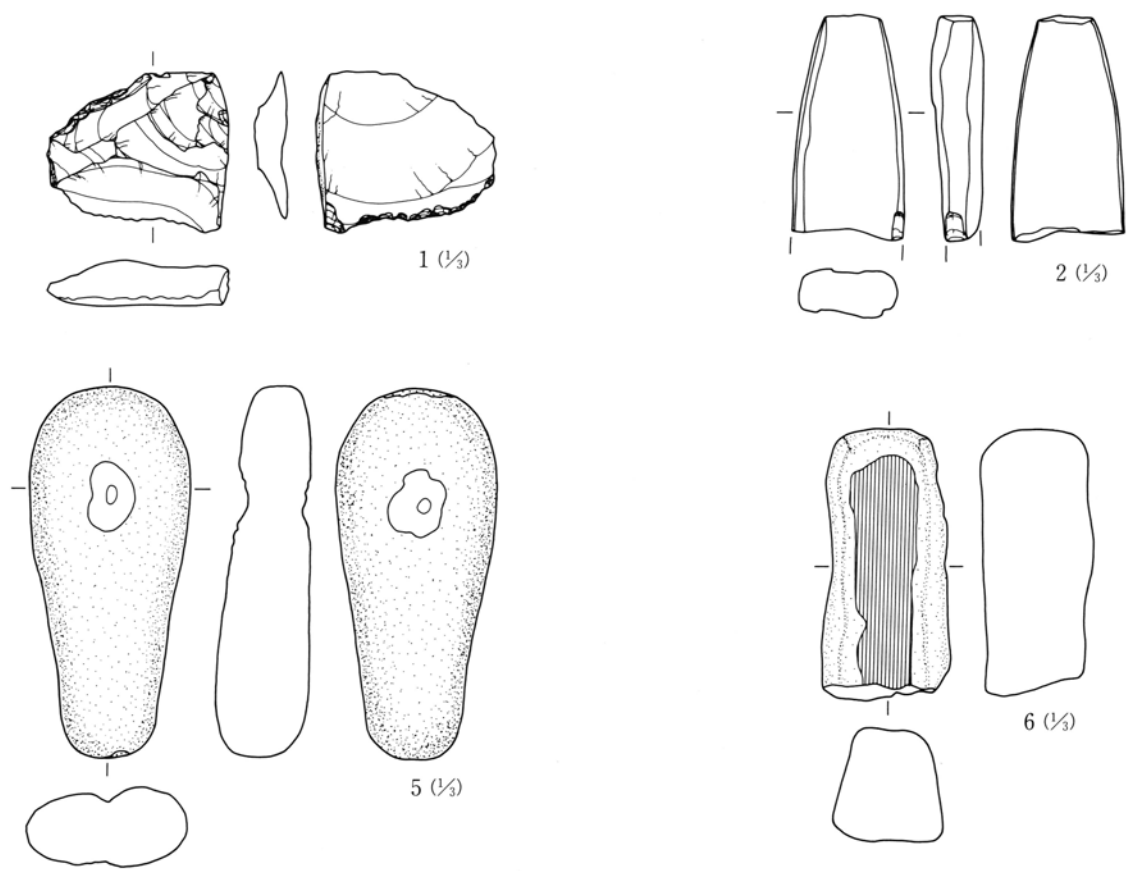
第668图 C64号住居跡出土石器



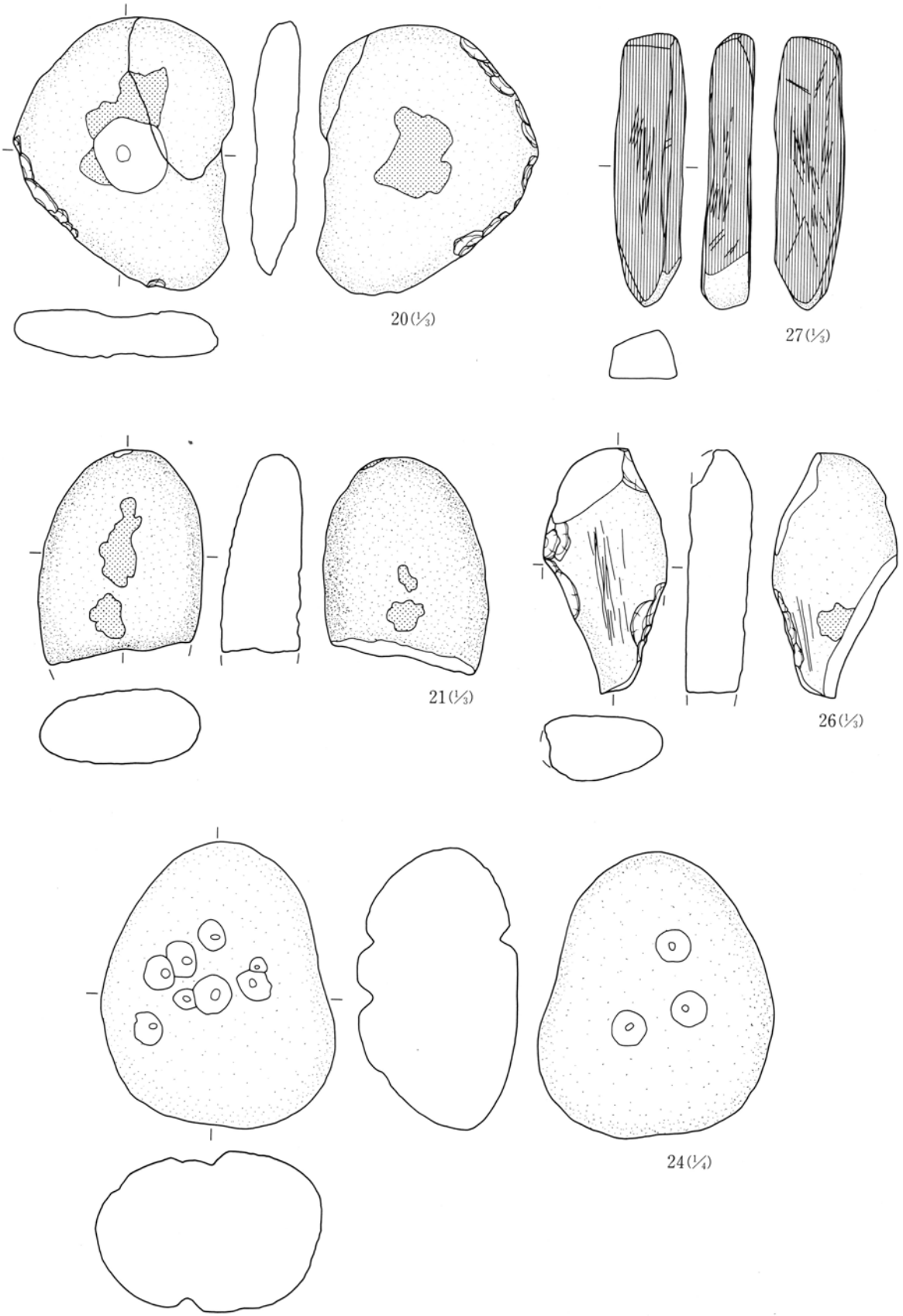
第669图 C65号住居跡出土石器(1)



第670図 C65号住居跡出土石器(2)

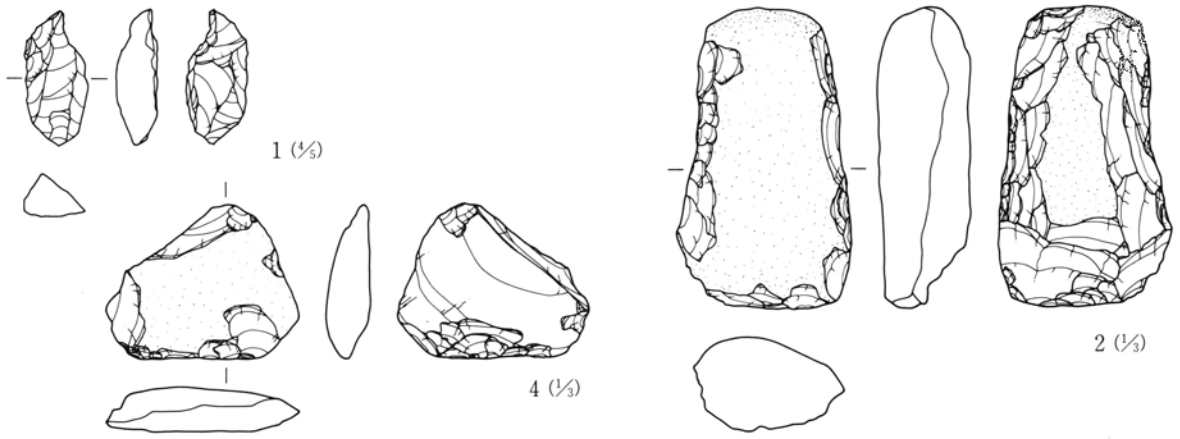


第671図 C68号住居跡出土石器

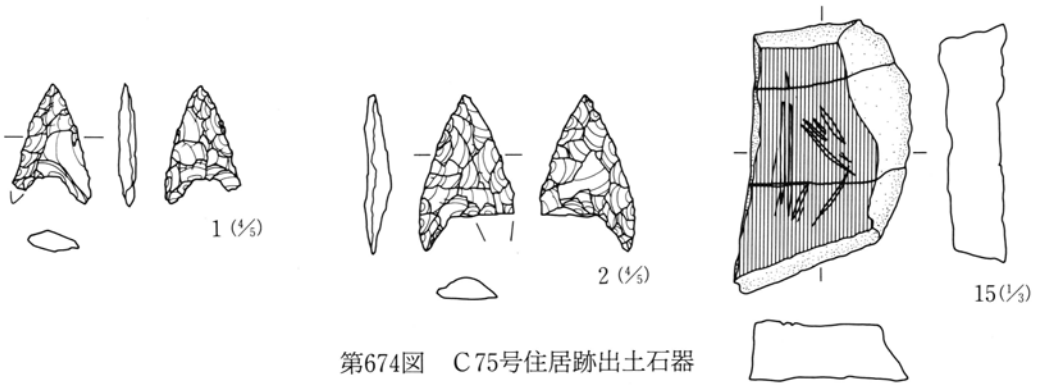


第672図 C71号住居跡出土石器

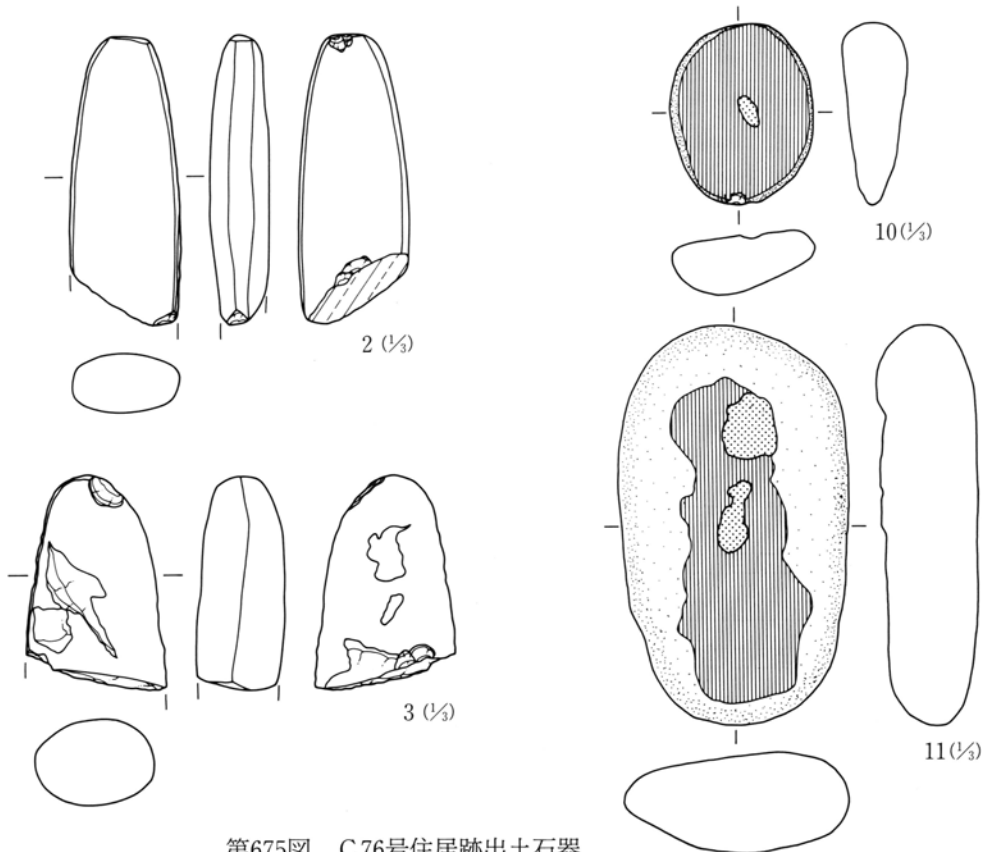
第4章 出土遺物



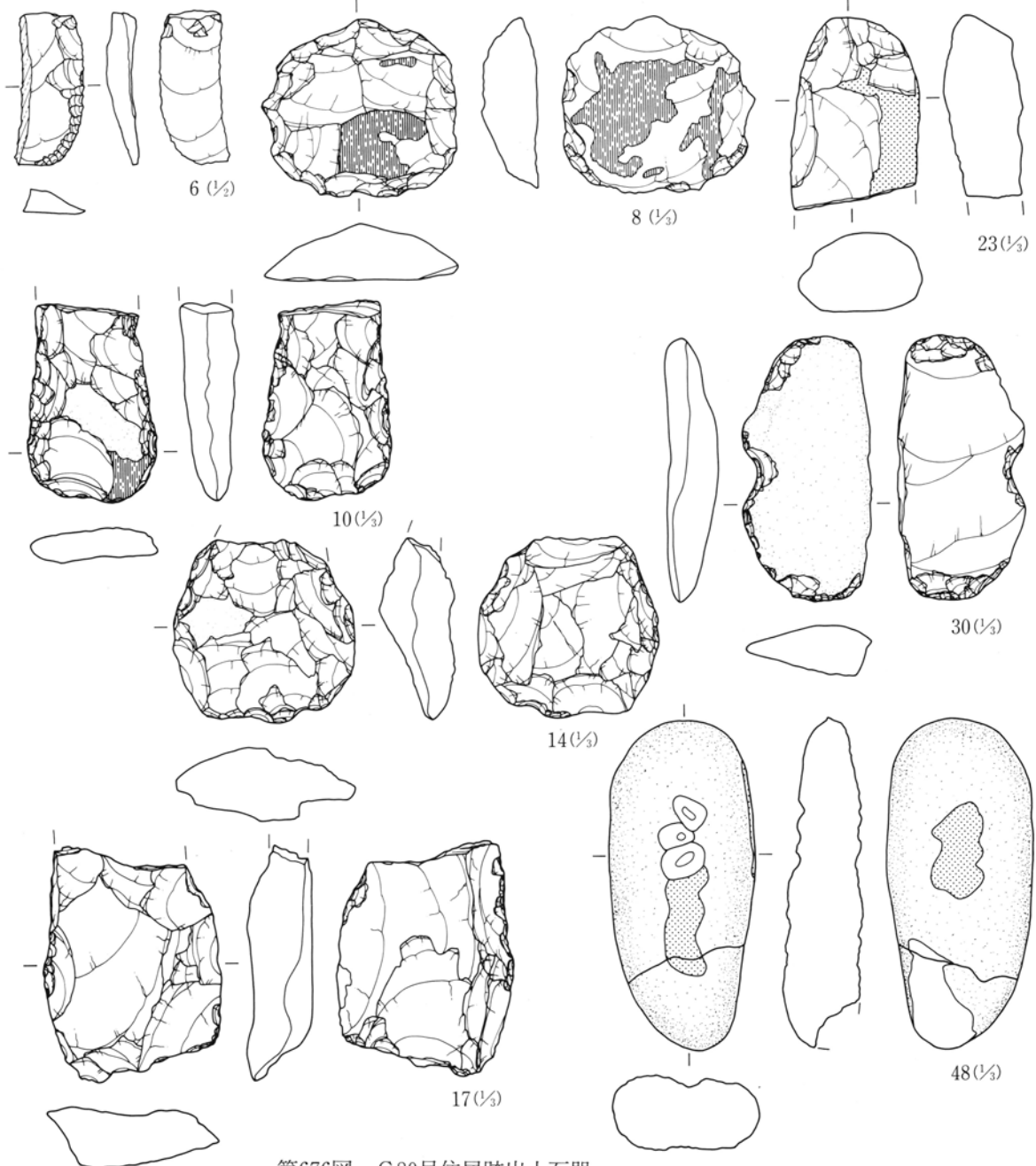
第673図 C73号住居跡出土石器



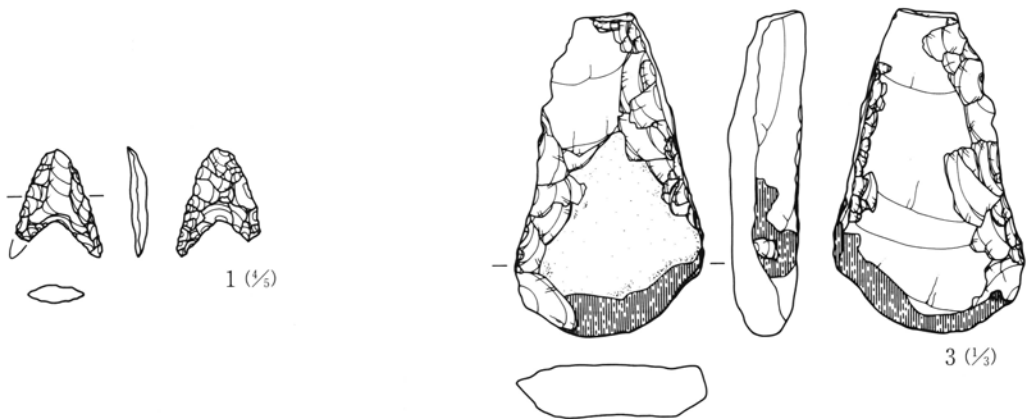
第674図 C75号住居跡出土石器



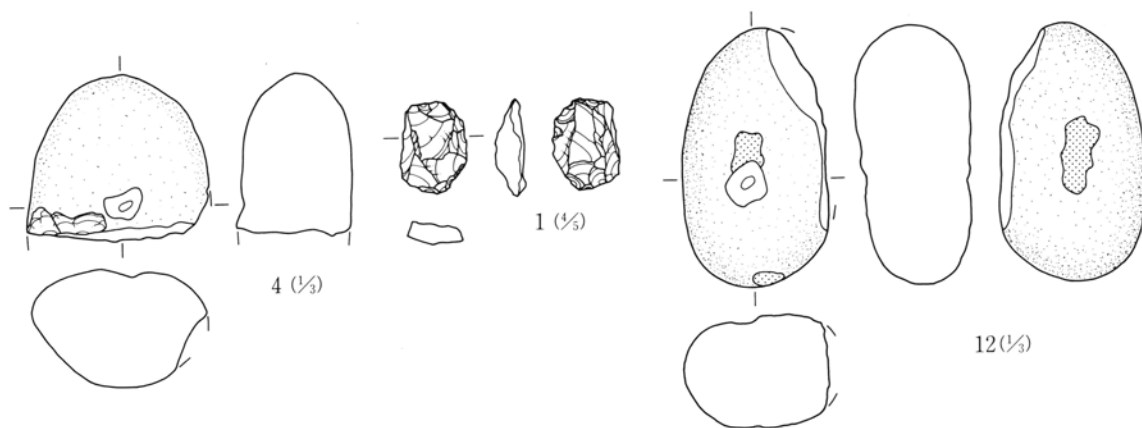
第675図 C76号住居跡出土石器



第676图 C80号住居跡出土石器

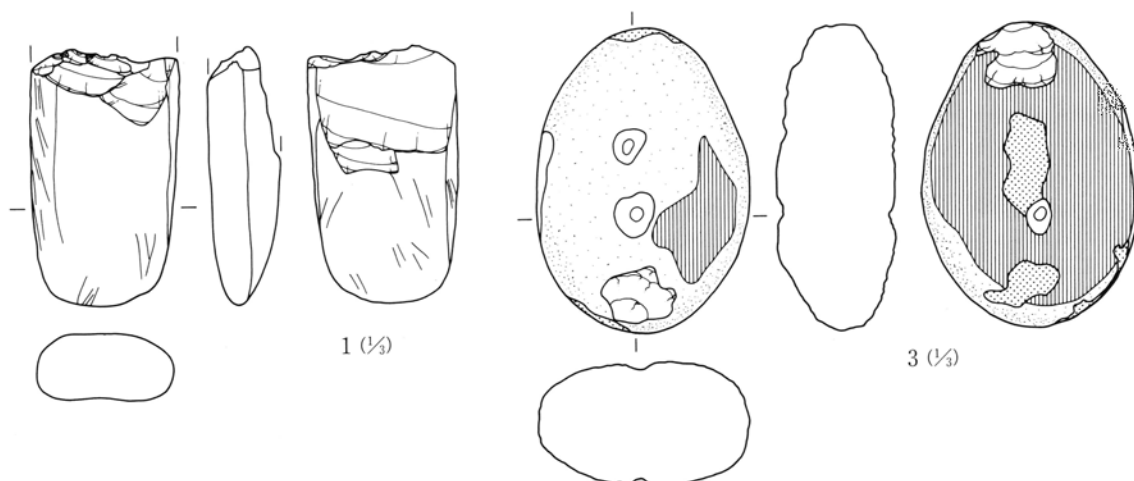


第677图 C81号住居跡出土石器

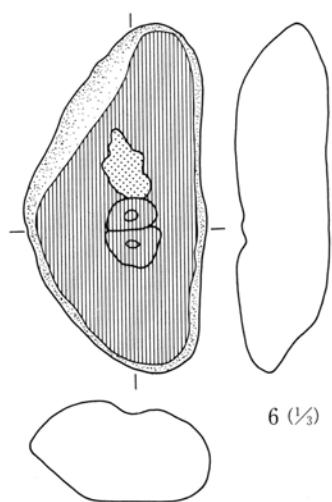


第678図 C83号住居跡出土石器

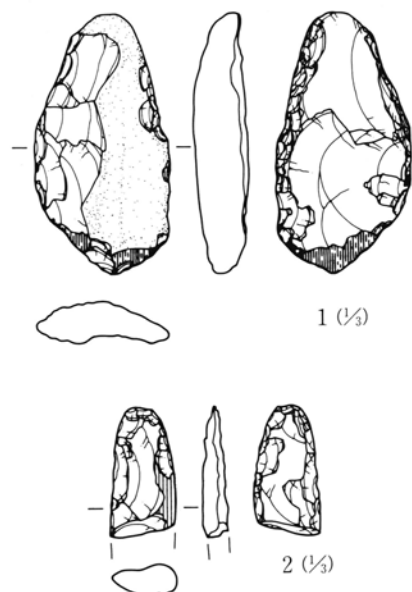
第679図 C86号住居跡出土石器



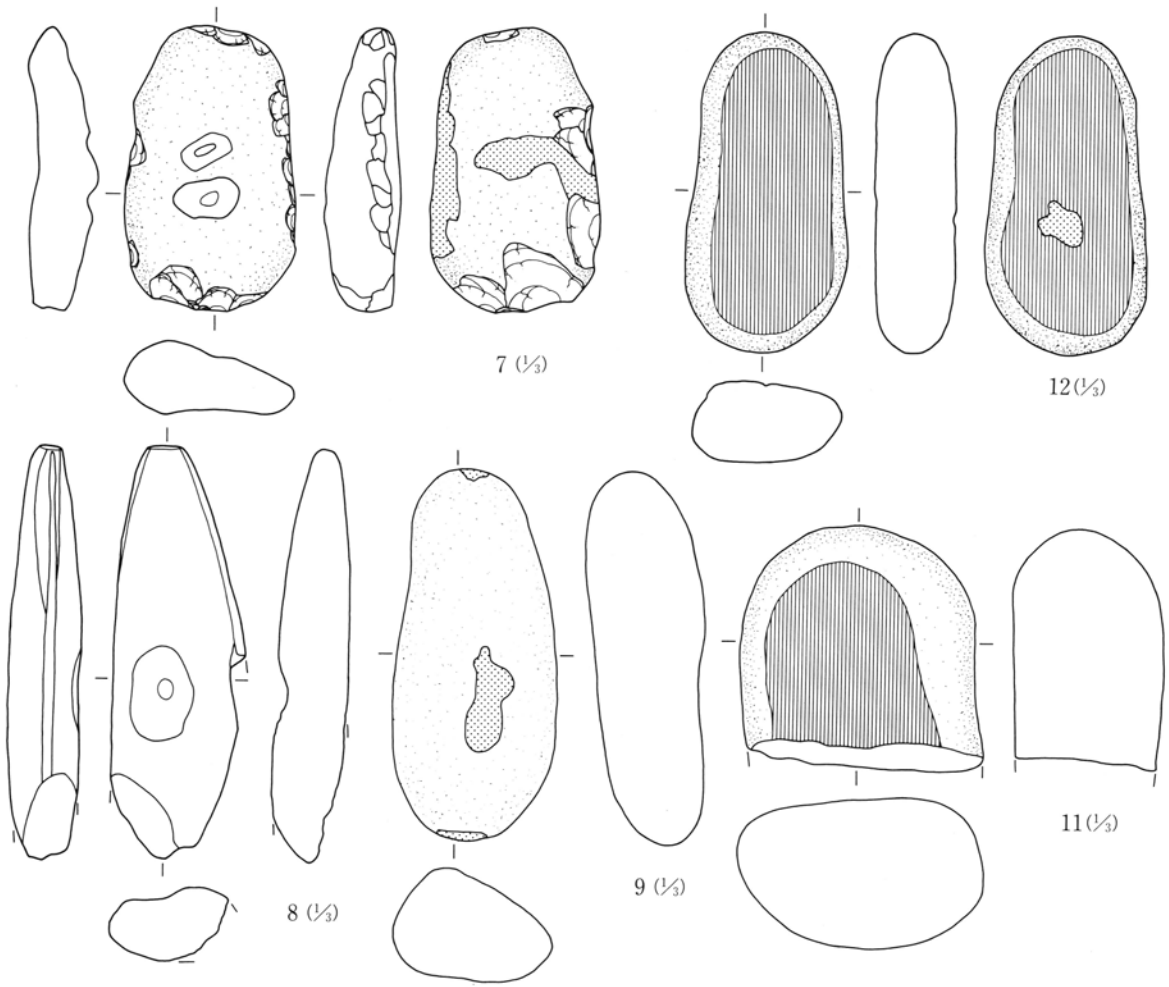
第680図 C91号住居跡出土石器



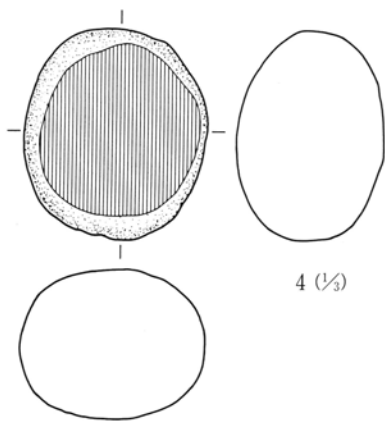
第681図 C93号住居跡出土石器



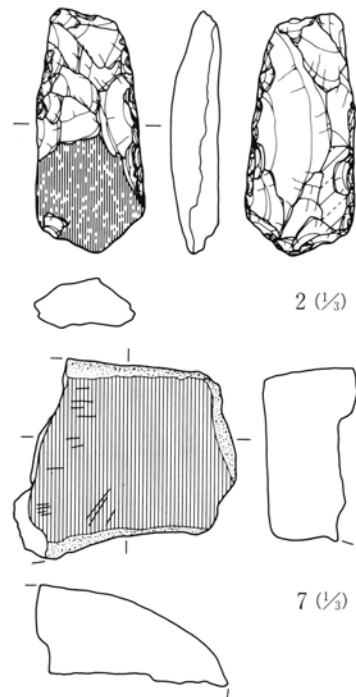
第682図 C94号住居跡出土石器(1)



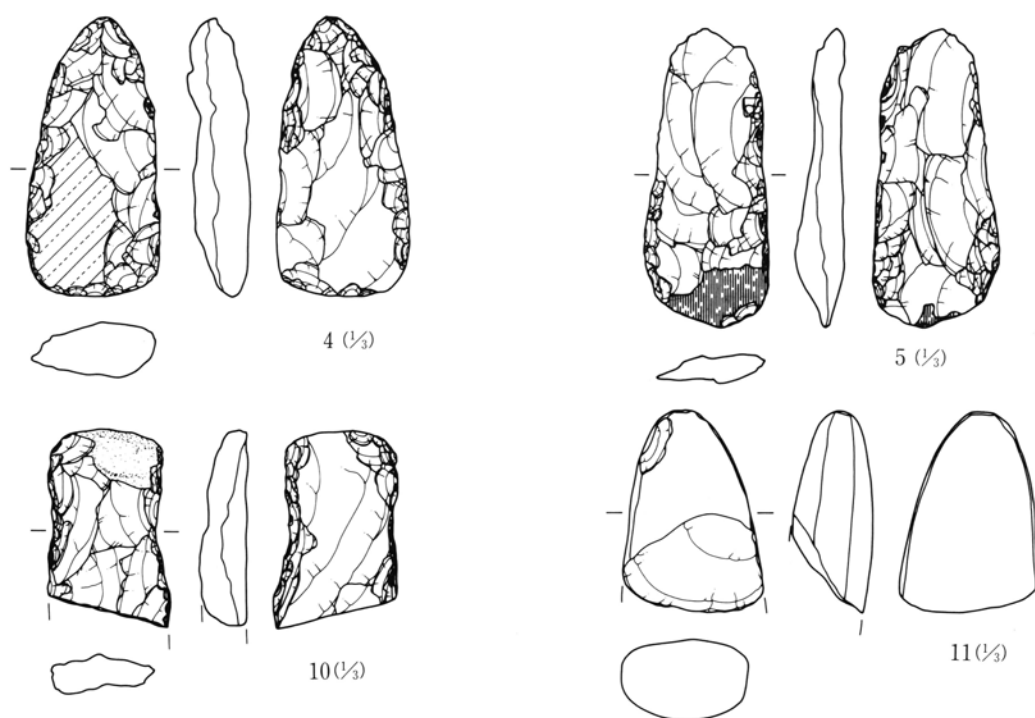
第683图 C94号住居跡出土石器(2)



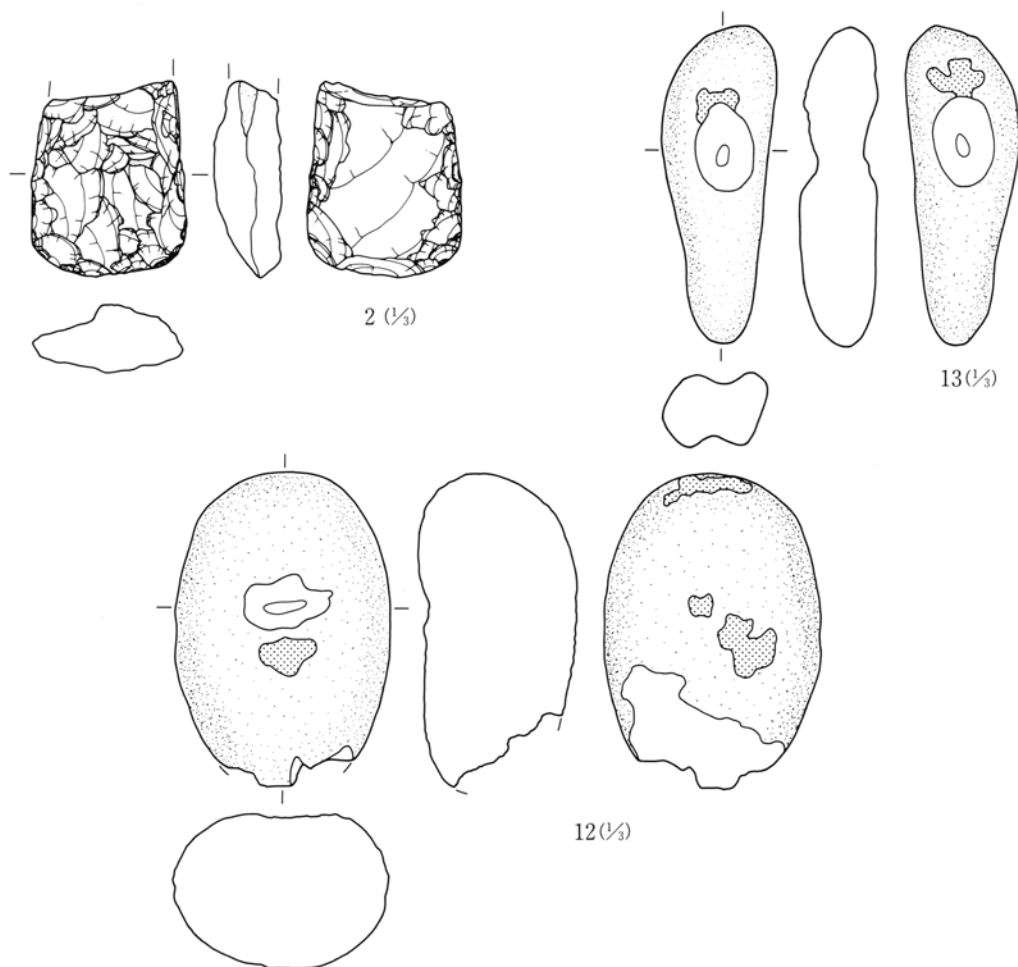
第684图 C95号住居跡出土石器



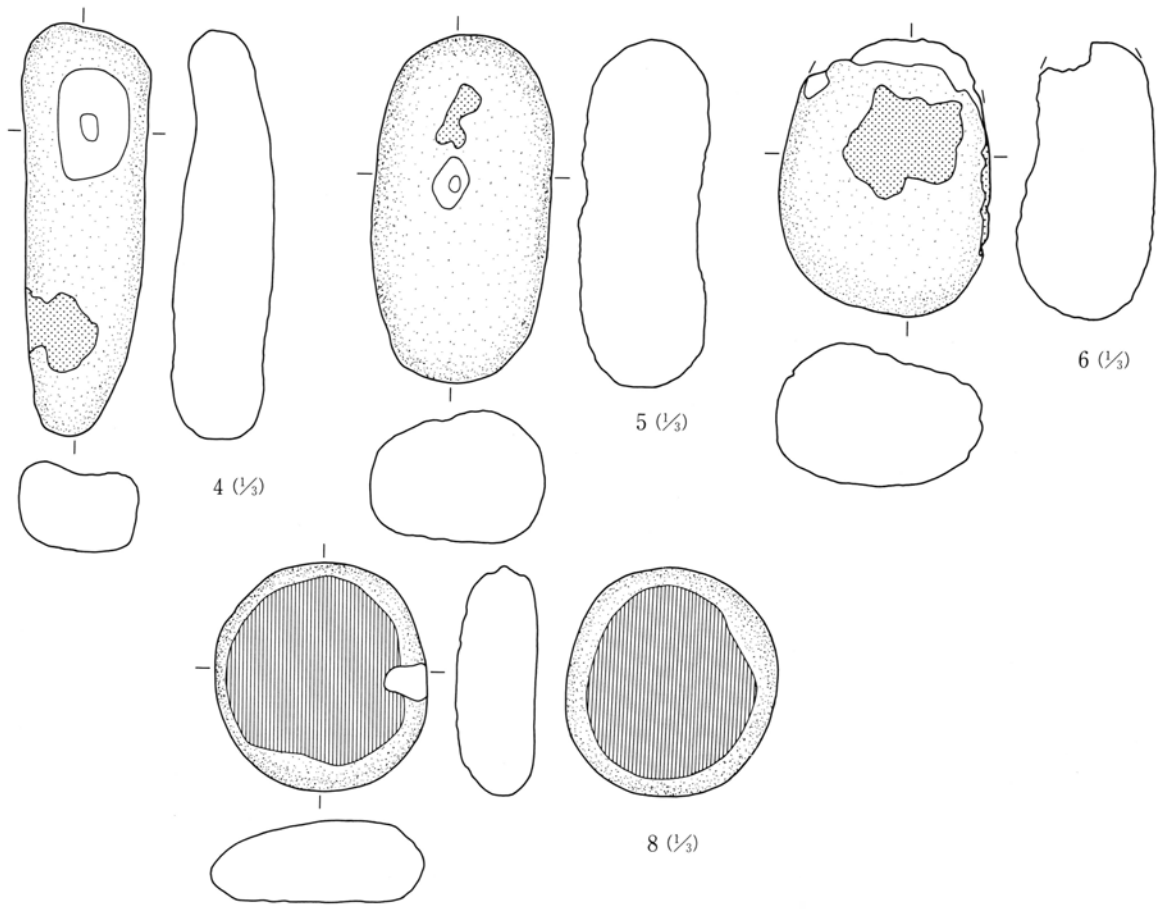
第685图 C97号住居跡出土石器



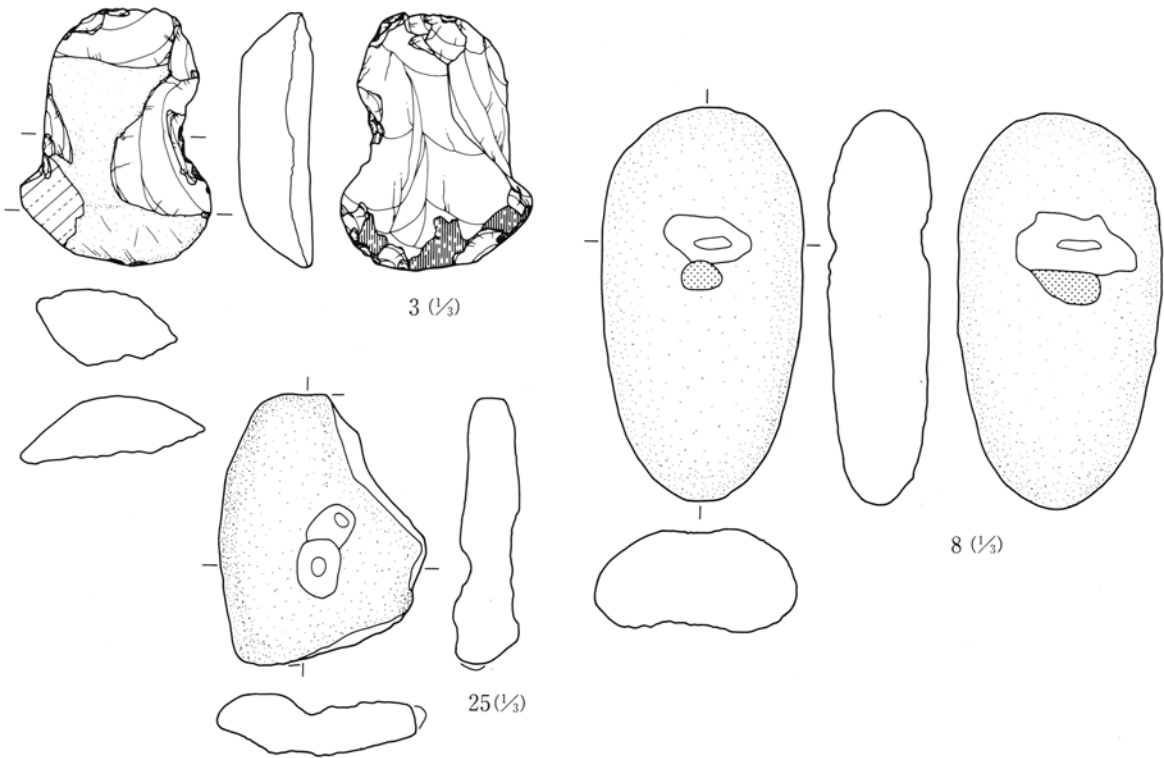
第686图 C104号住居跡出土石器



第687图 C108号住居跡出土石器

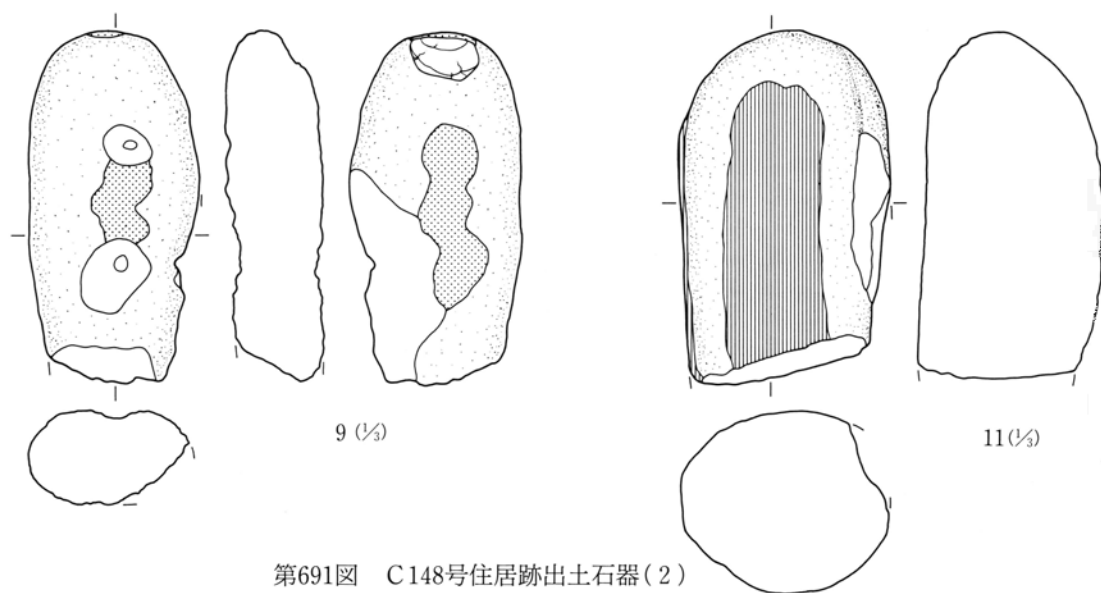


第688図 C114号住居跡出土石器

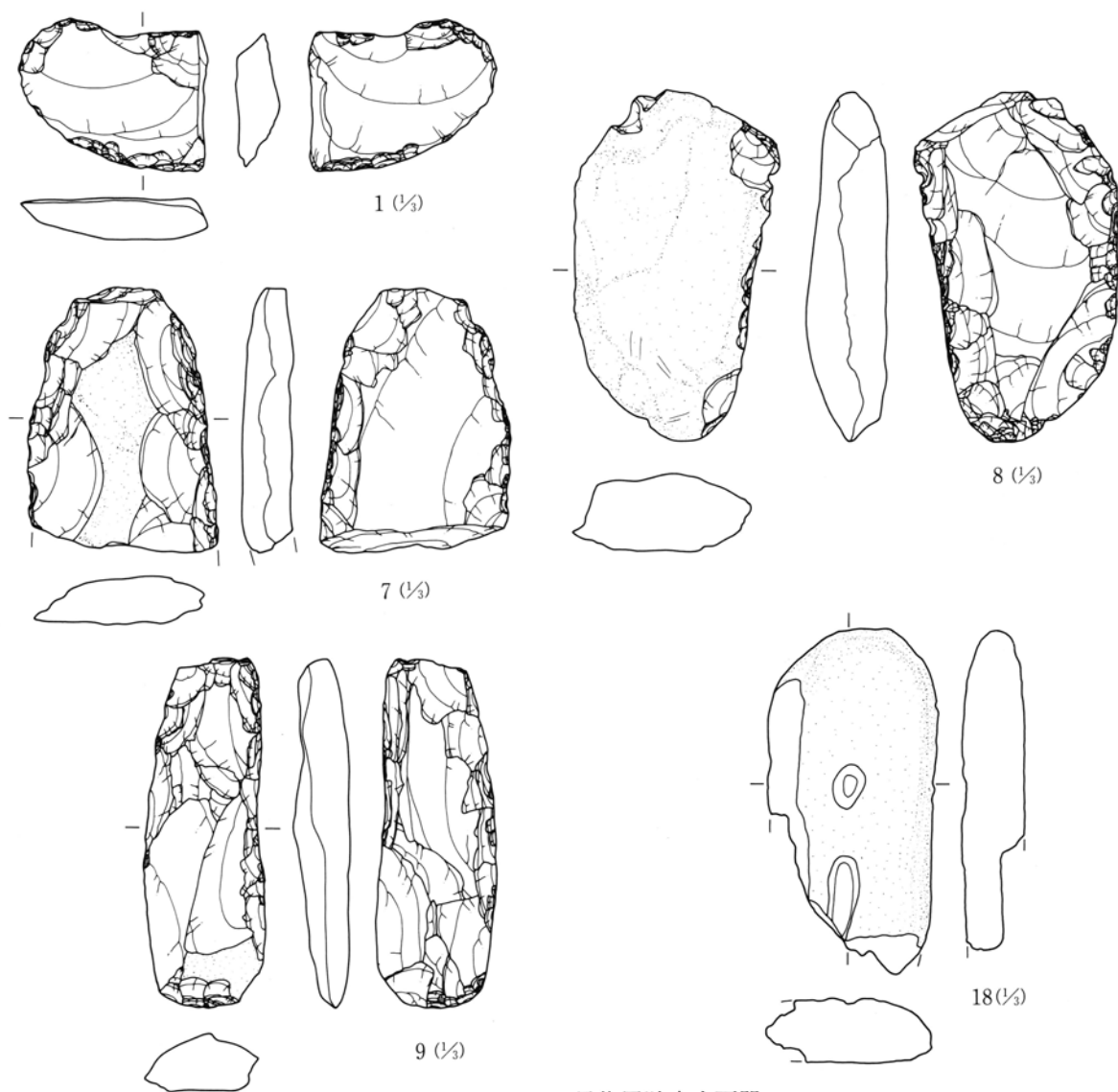


第689図 C116号住居跡出土石器

第690図 C148号住居跡出土石器(1)

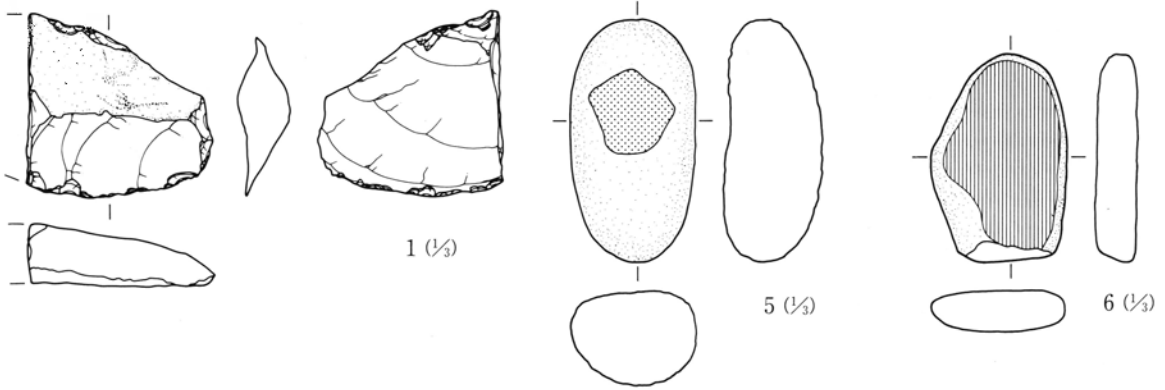


第691図 C148号住居跡出土石器(2)

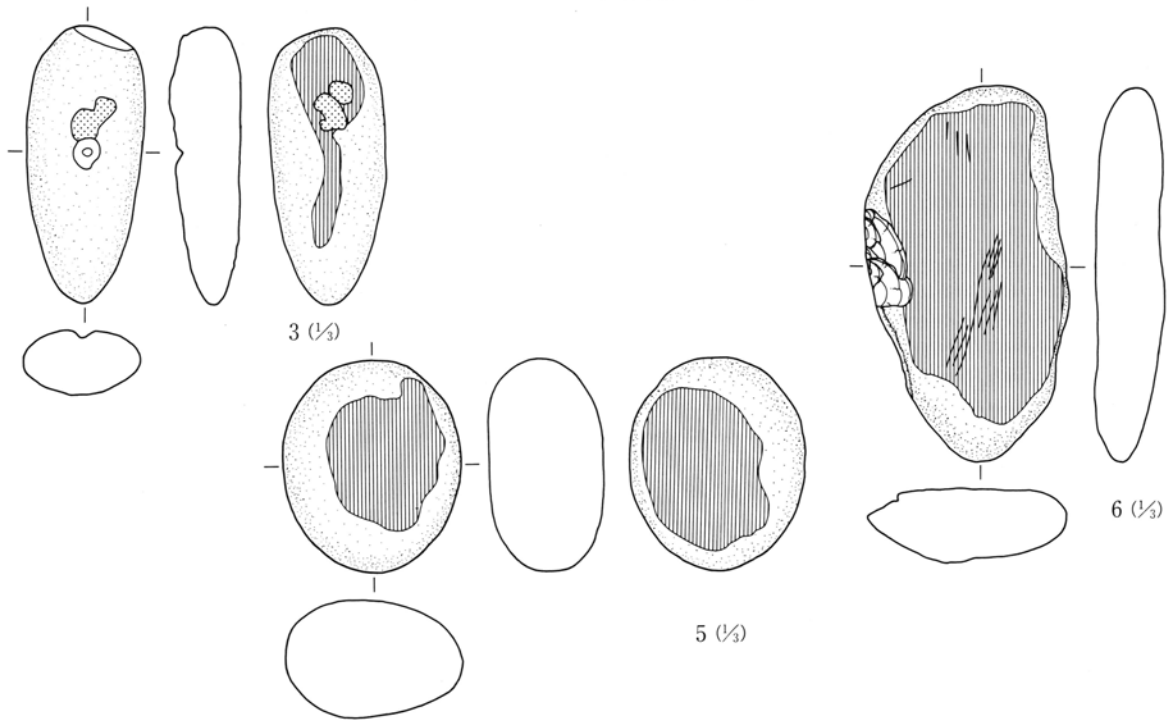


第692図 C149号住居跡出土石器

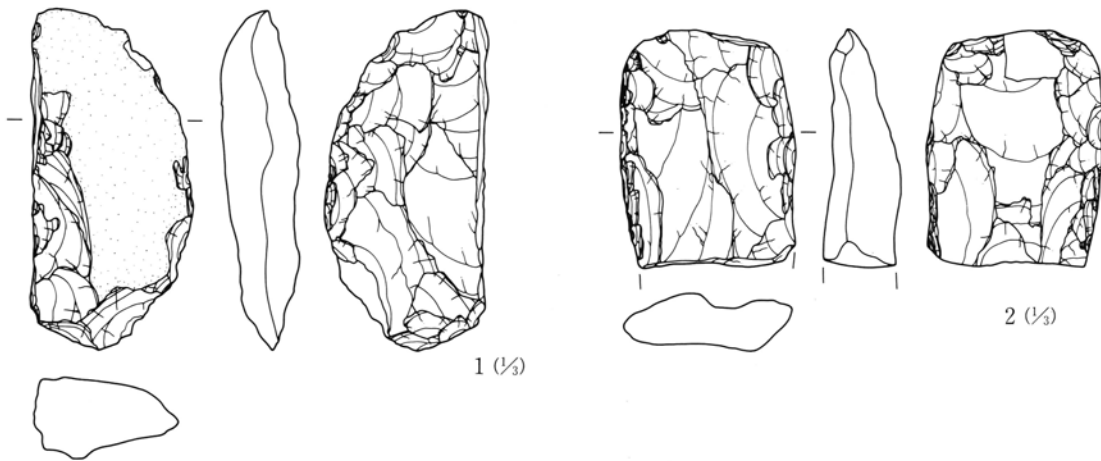
第4節 石器



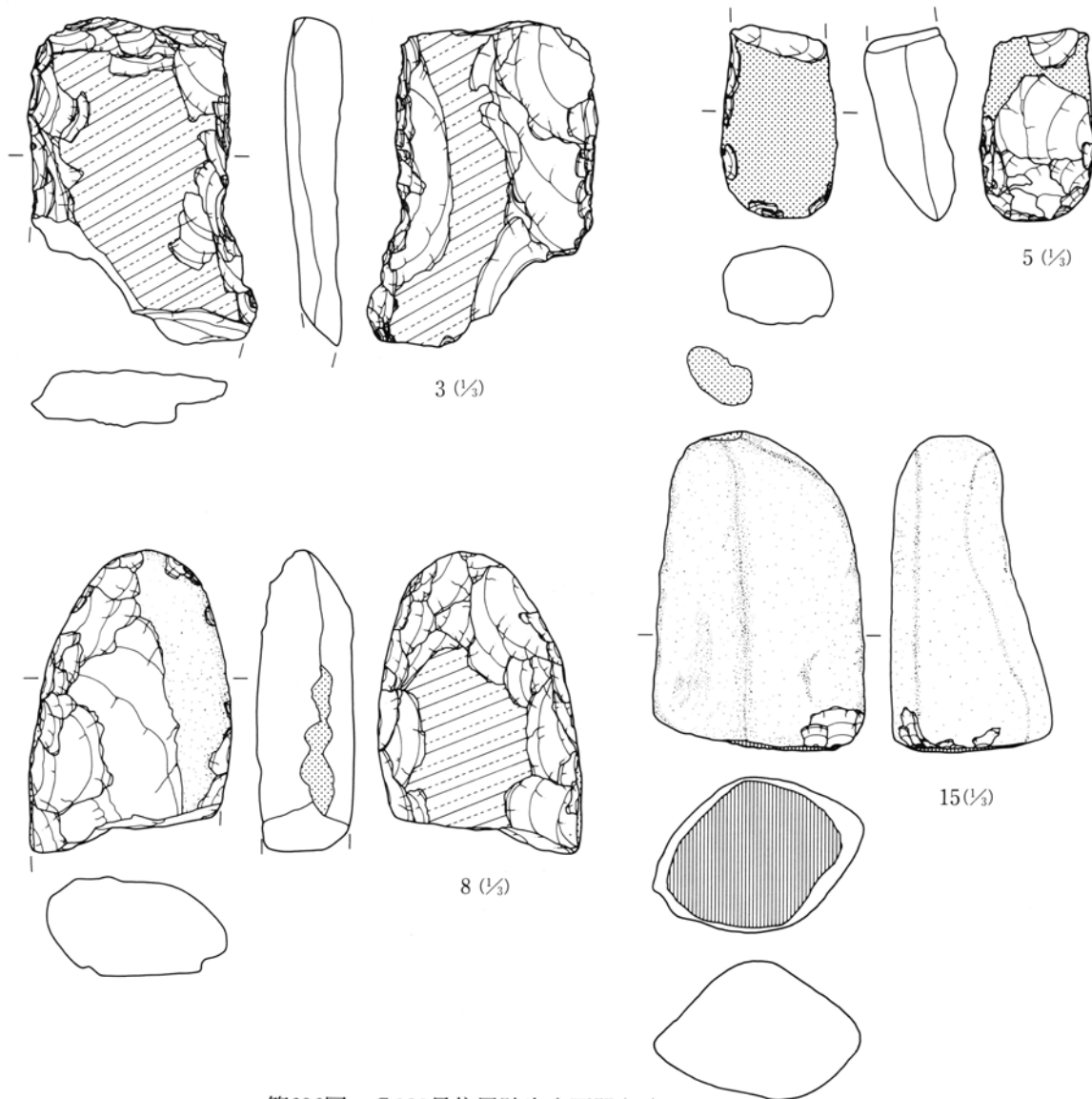
第693图 C163号住居跡出土石器



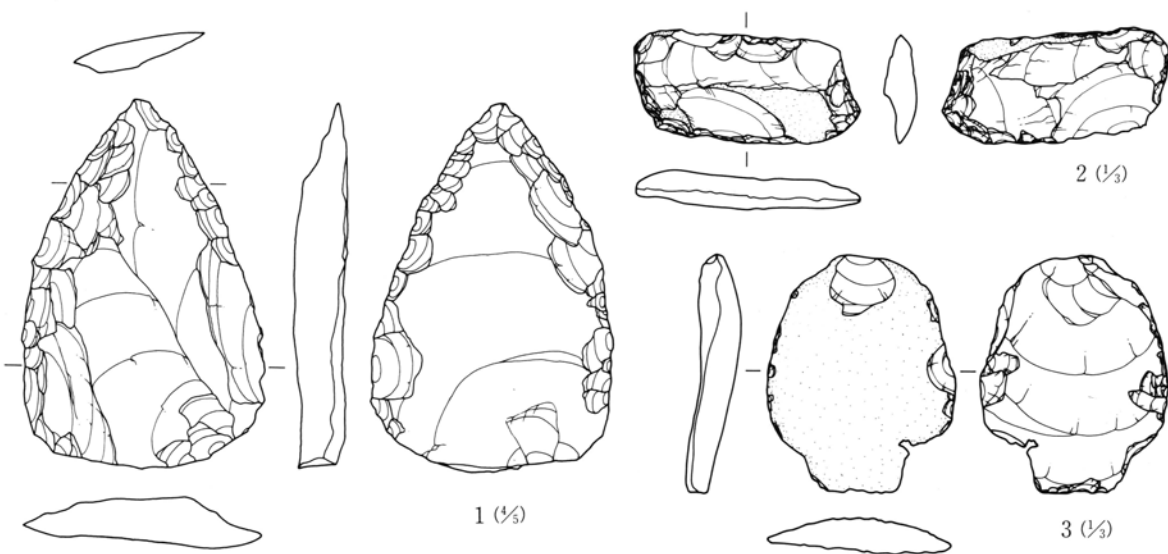
第694图 C166号住居跡出土石器



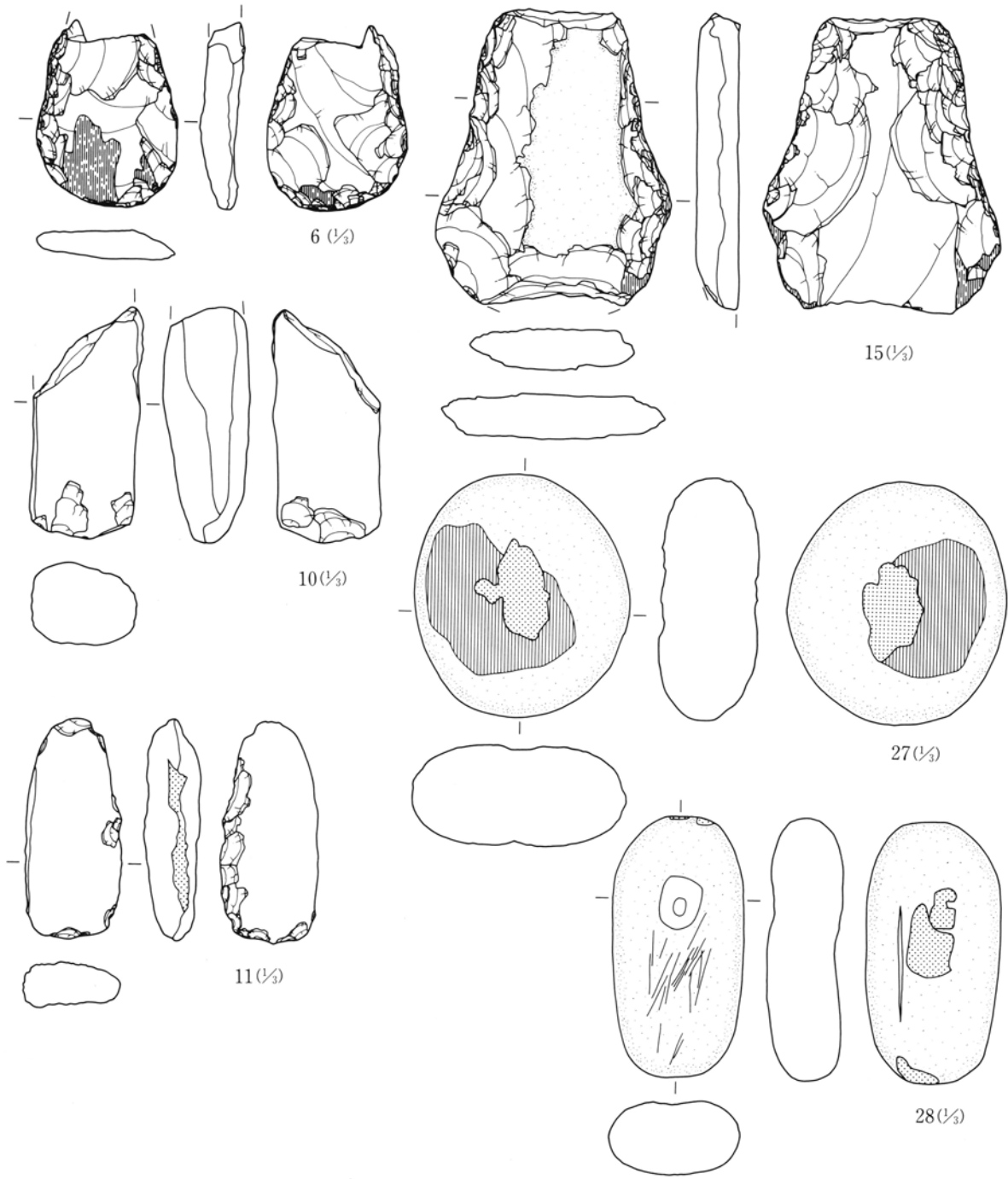
第695图 C180号住居跡出土石器(1)



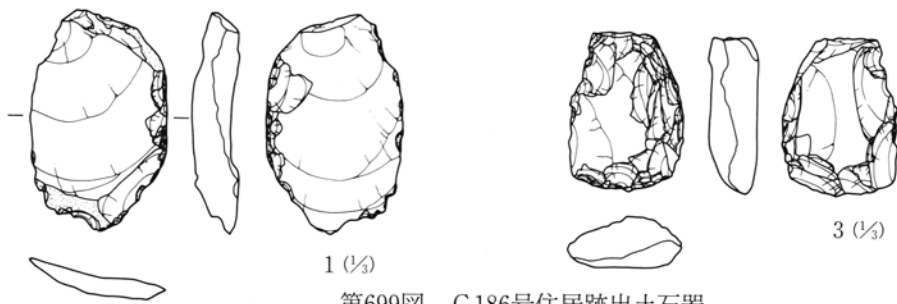
第696図 C180号住居跡出土石器(2)



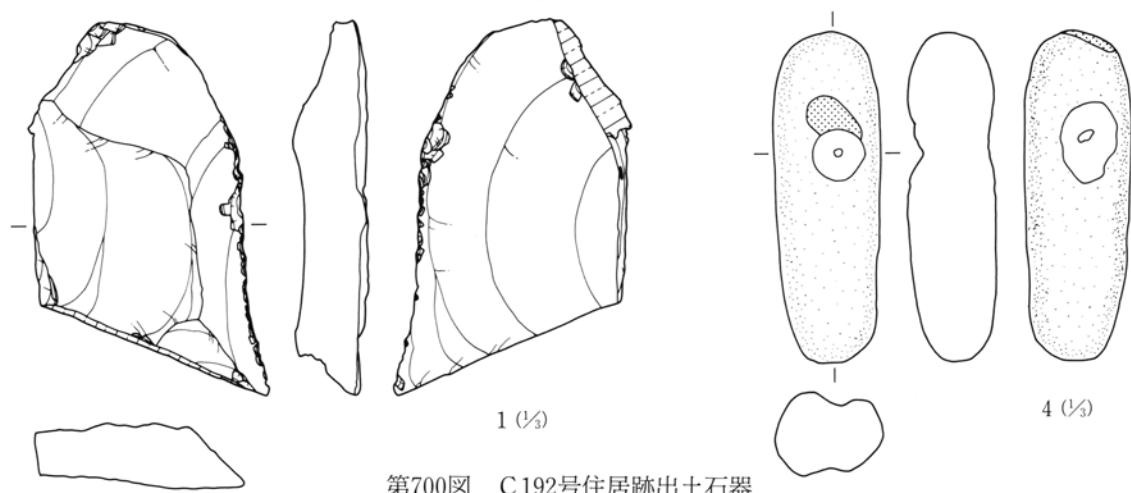
第697図 C185号住居跡出土石器(1)



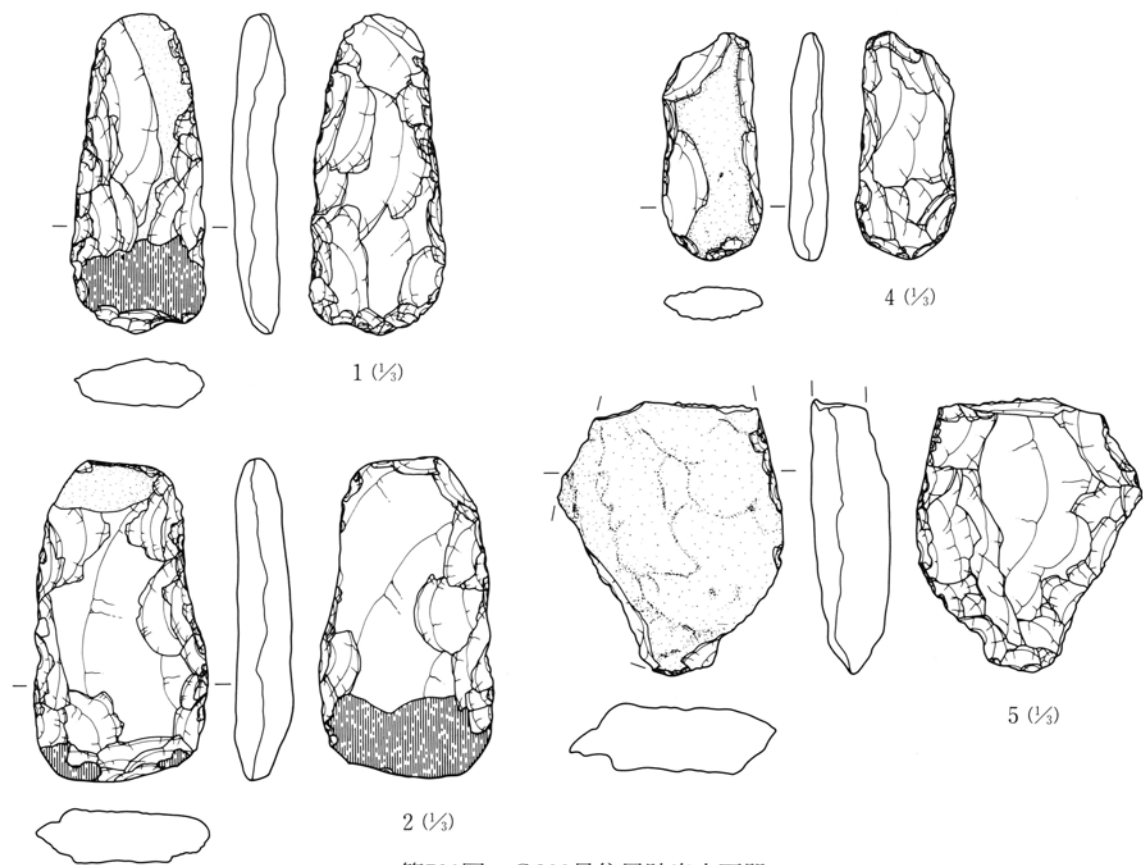
第698図 C185号住居跡出土石器(2)



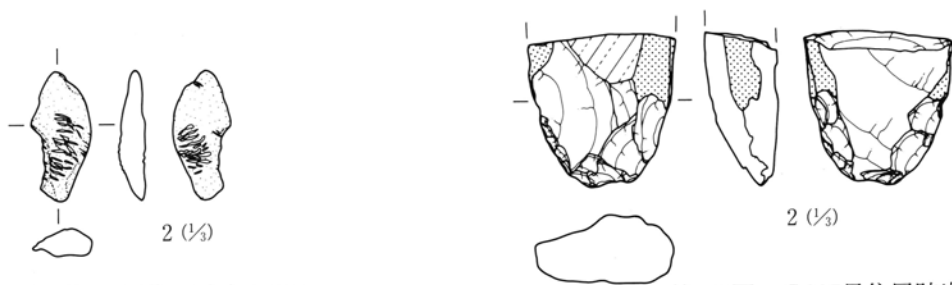
第699図 C186号住居跡出土石器



第700図 C192号住居跡出土石器

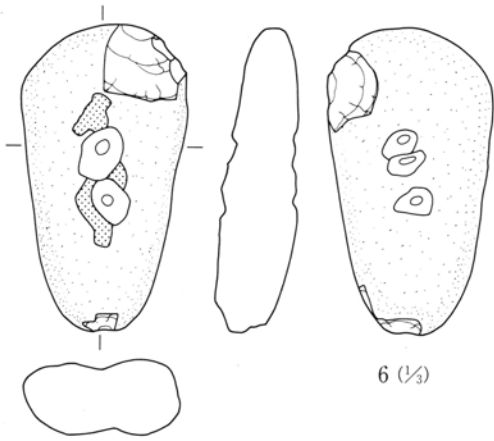


第701図 C200号住居跡出土石器

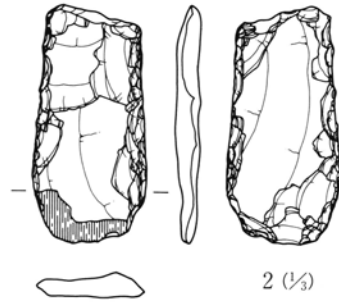


第702図 C201号住居跡出土石器

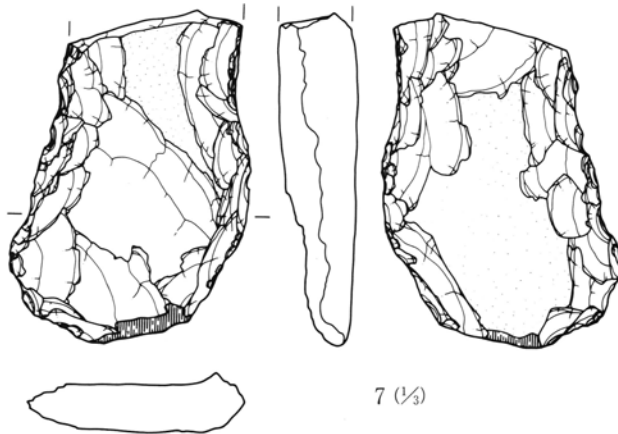
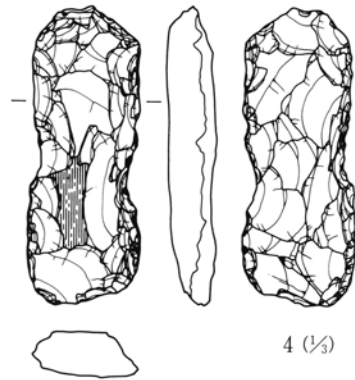
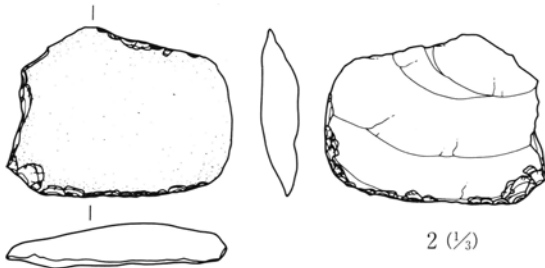
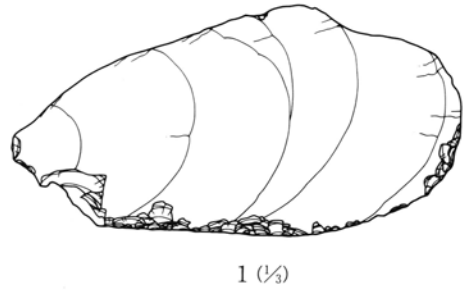
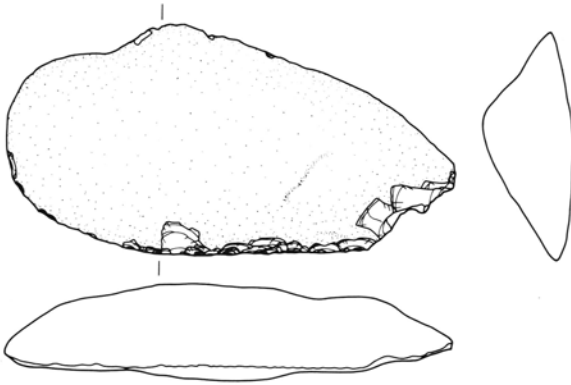
第703図 C207号住居跡出土石器



第704図 C205号住居跡出土石器

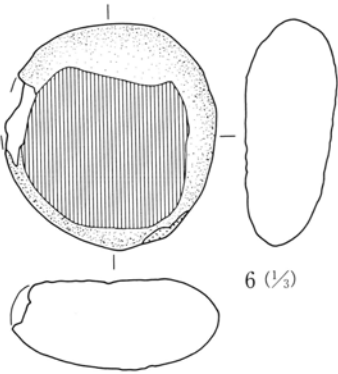
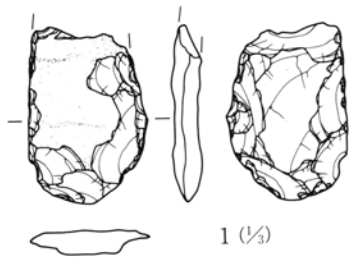


第705図 C213号住居跡出土石器

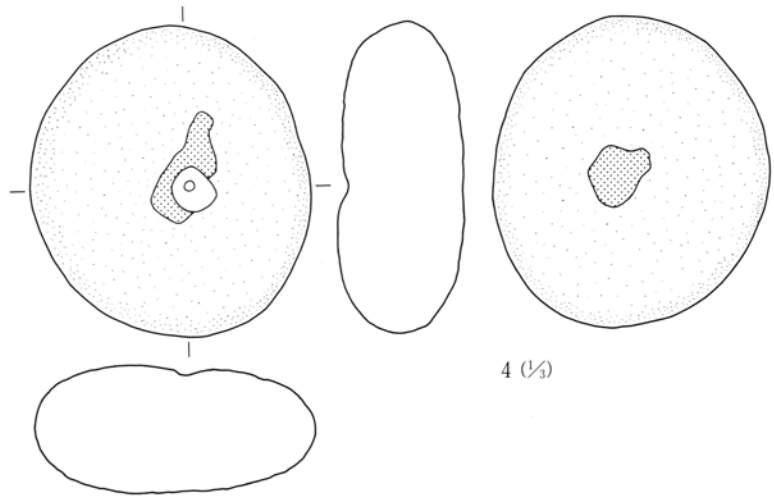
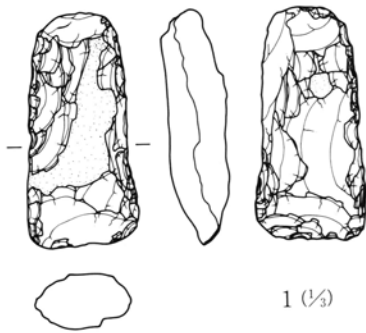


第706図 C227号住居跡出土石器

第4章 出土遺物

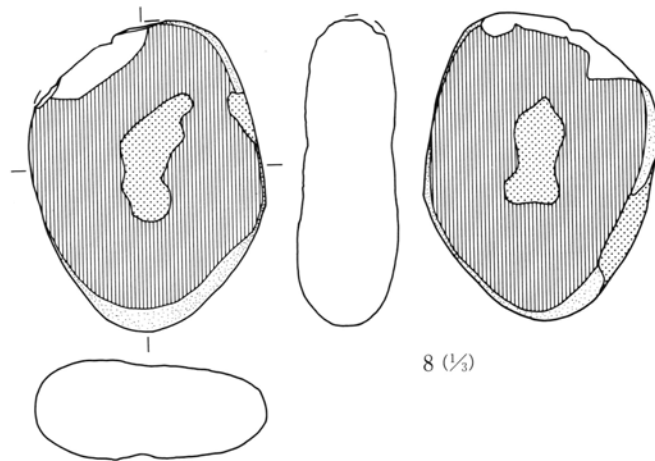


第707图 C231号住居跡出土石器

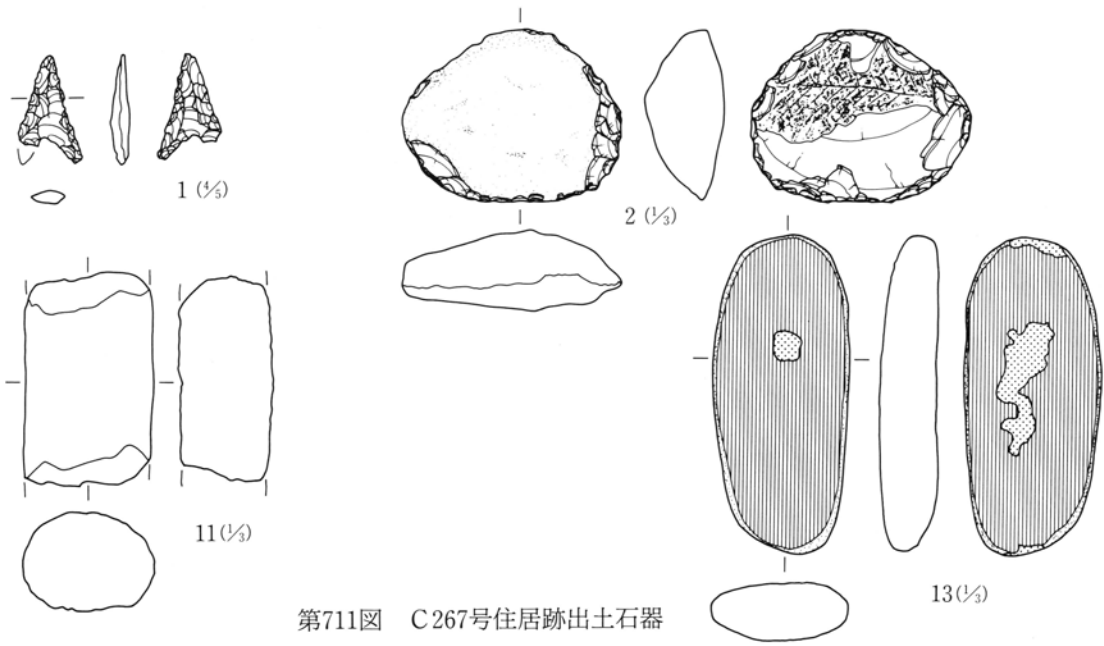


第708图 C246号住居跡出土石器

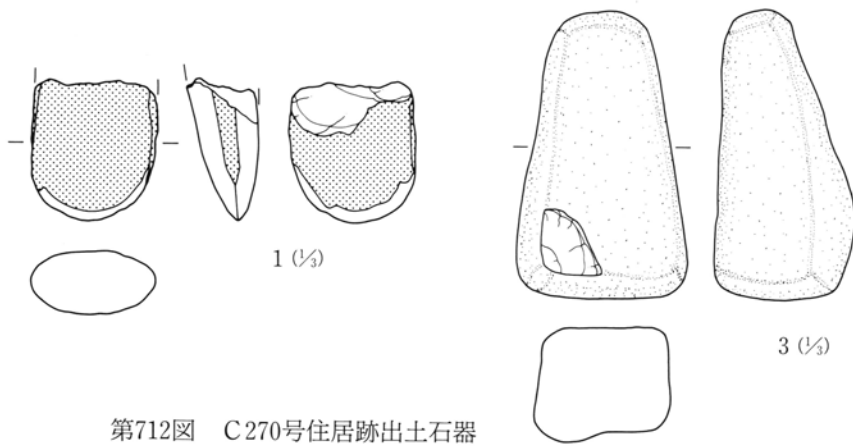
第709图 C261号住居跡出土石器



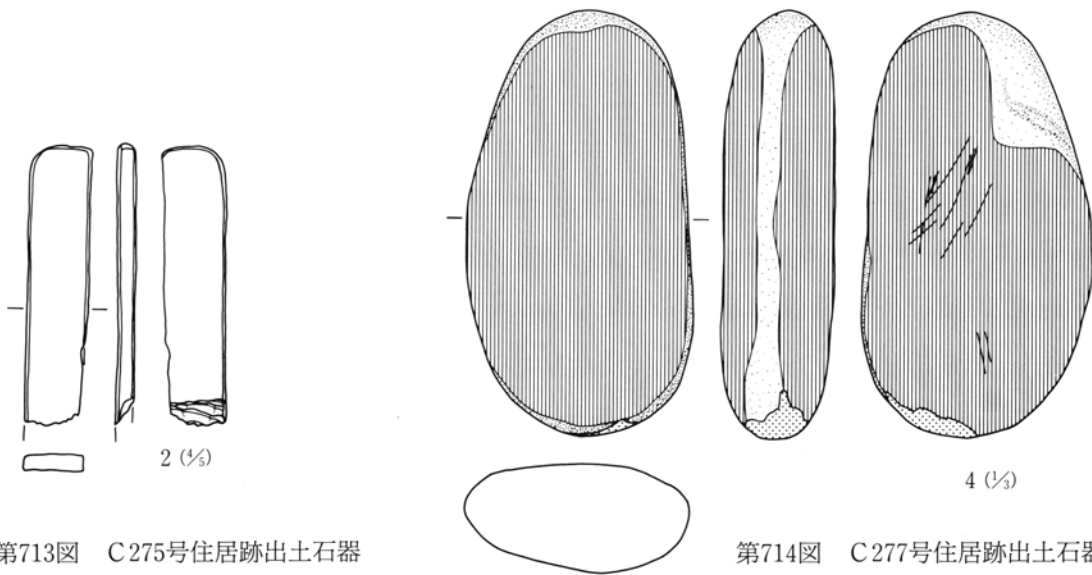
第710图 C262号住居跡出土石器



第711図 C267号住居跡出土石器

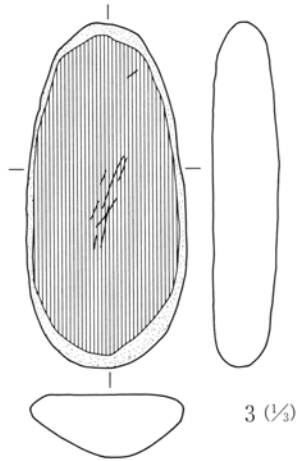


第712図 C270号住居跡出土石器

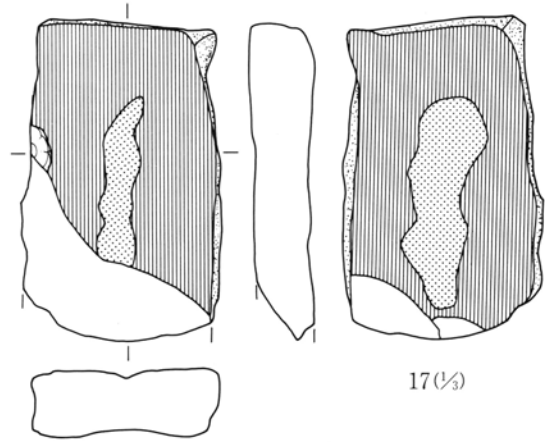
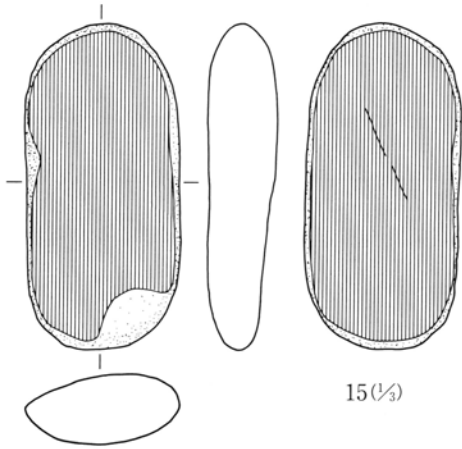
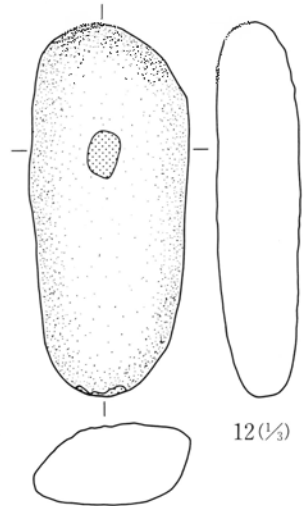
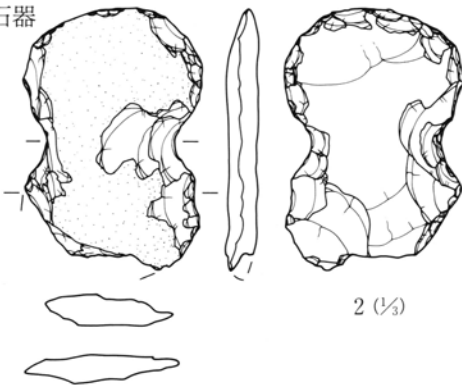
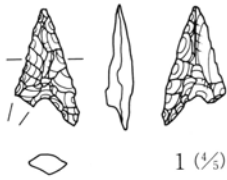


第713図 C275号住居跡出土石器

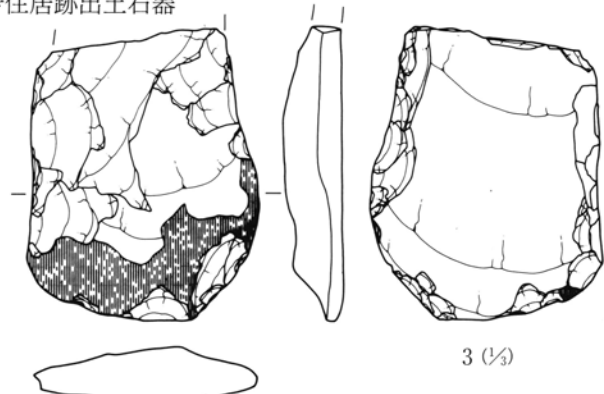
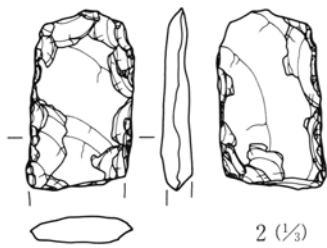
第714図 C277号住居跡出土石器



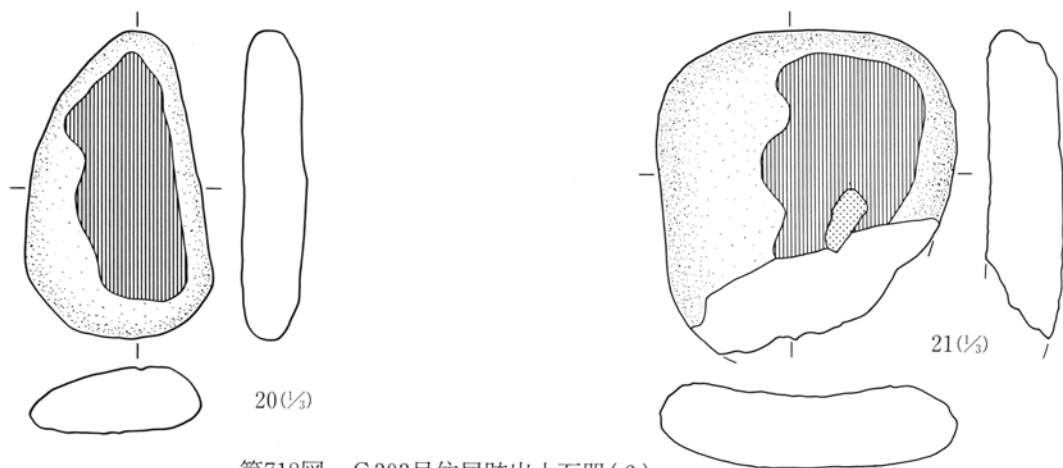
第715图 C297号住居跡出土石器



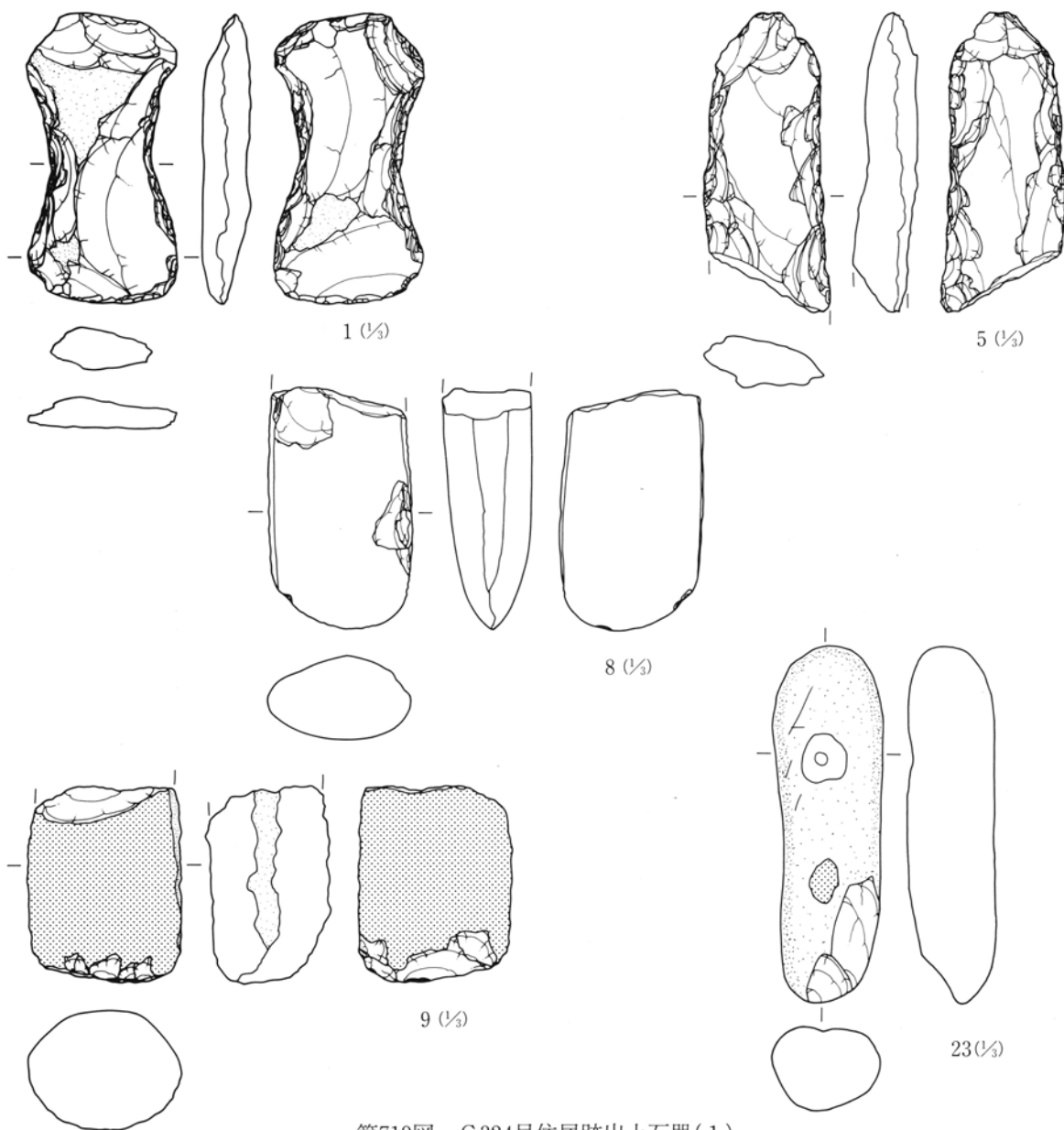
第716图 C300号住居跡出土石器



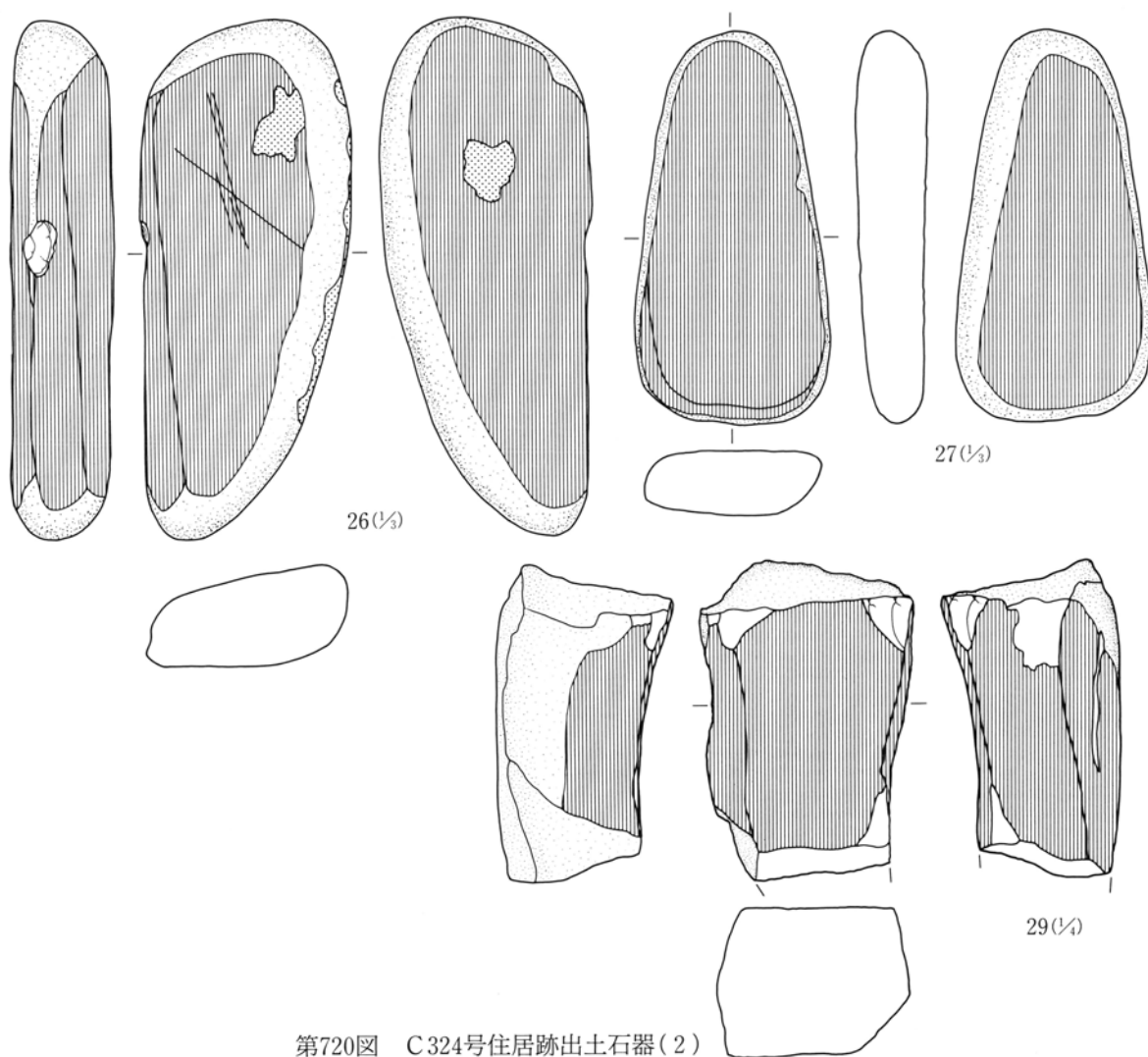
第717图 C303号住居跡出土石器(1)



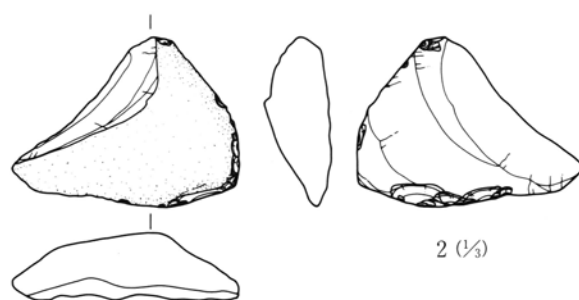
第718图 C303号住居跡出土石器(2)



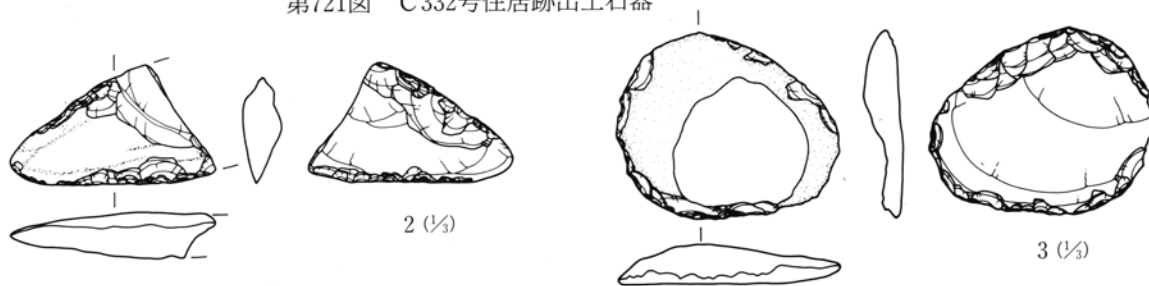
第719图 C324号住居跡出土石器(1)



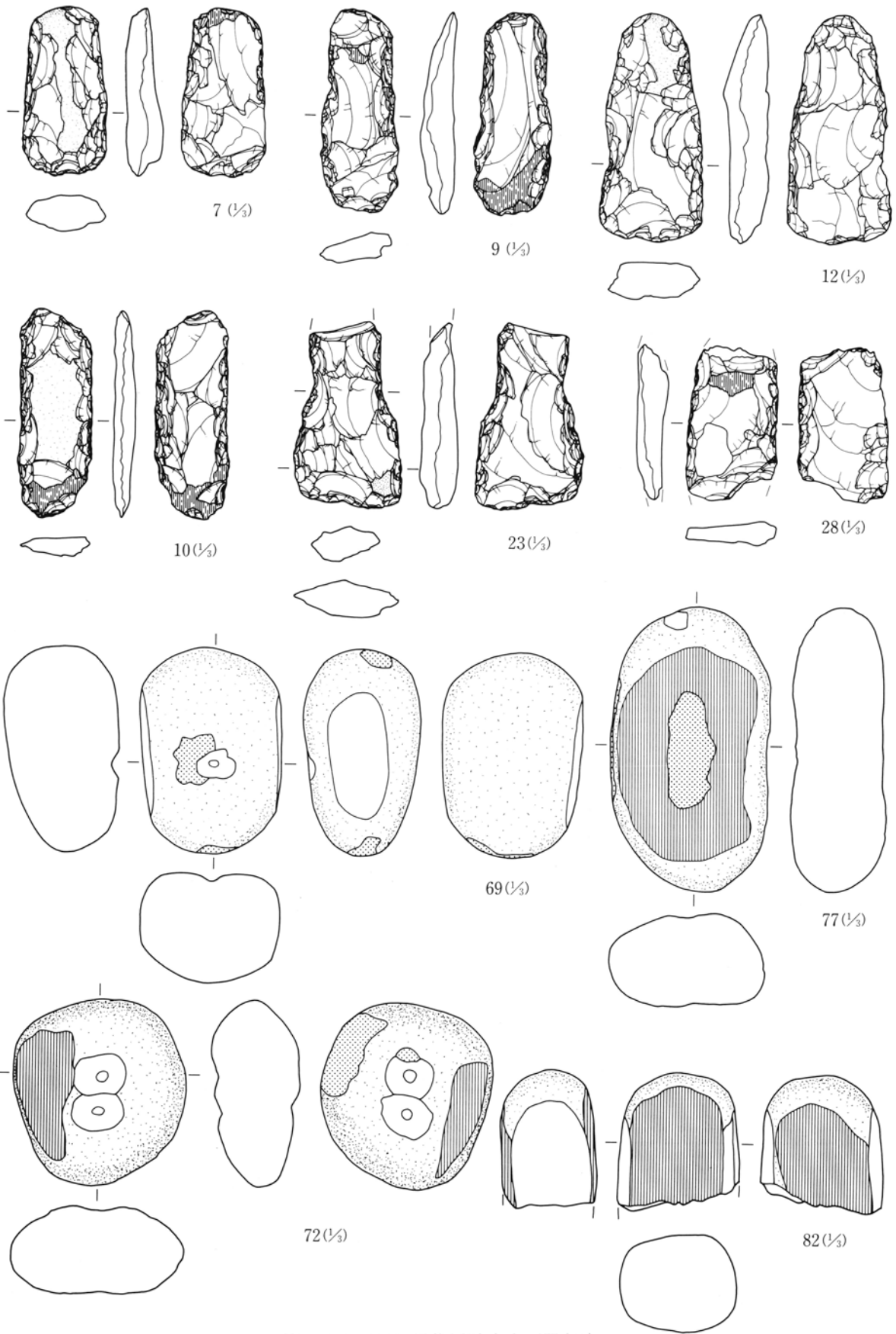
第720図 C324号住居跡出土石器(2)



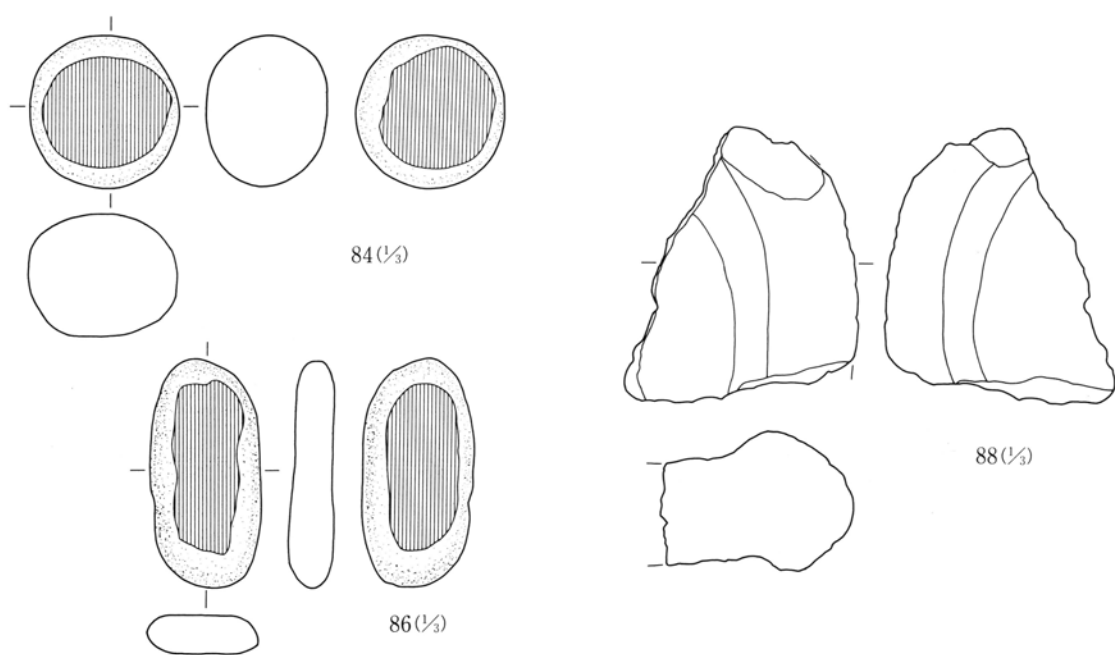
第721図 C332号住居跡出土石器



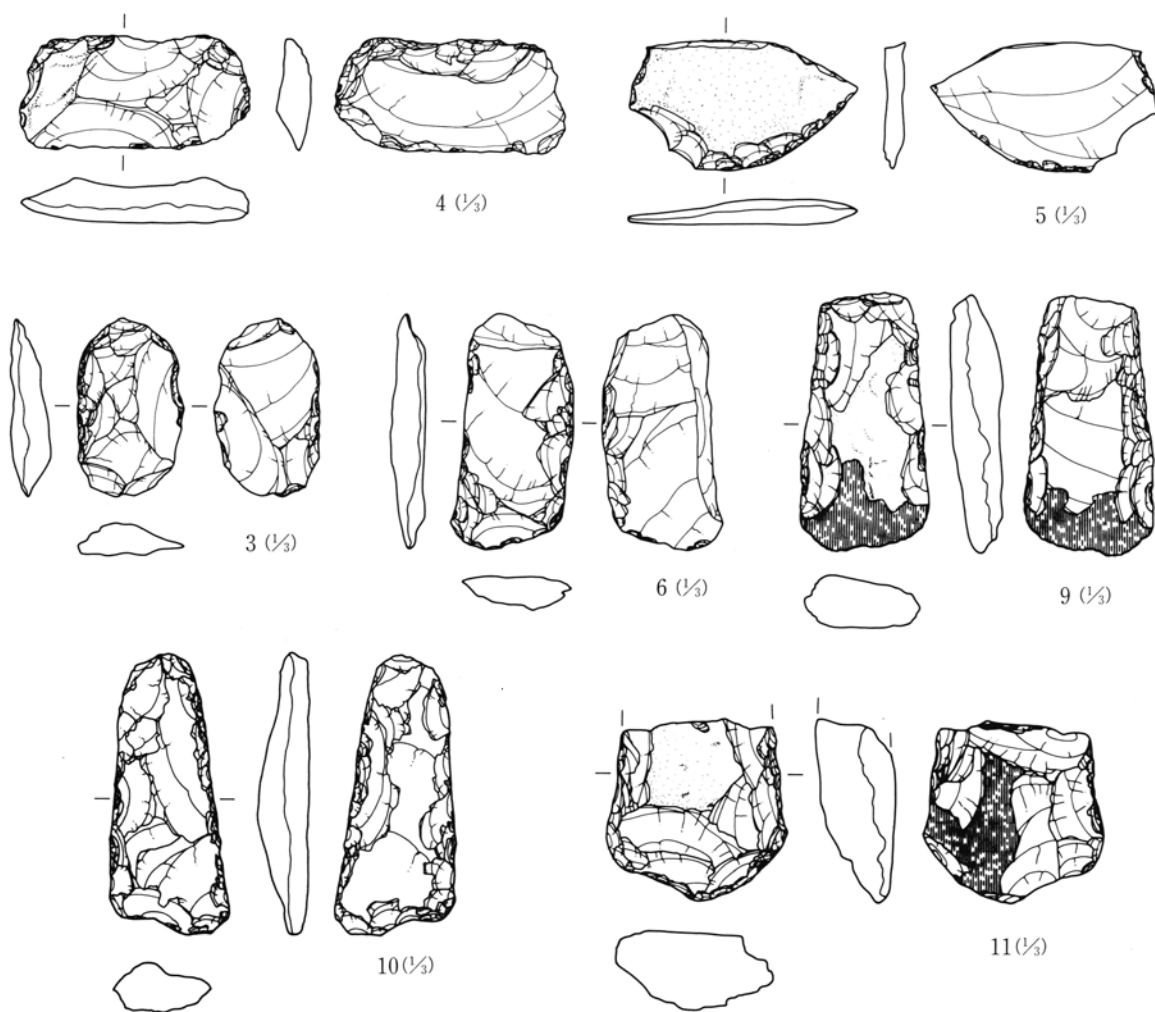
第722図 C336号住居跡出土石器(1)



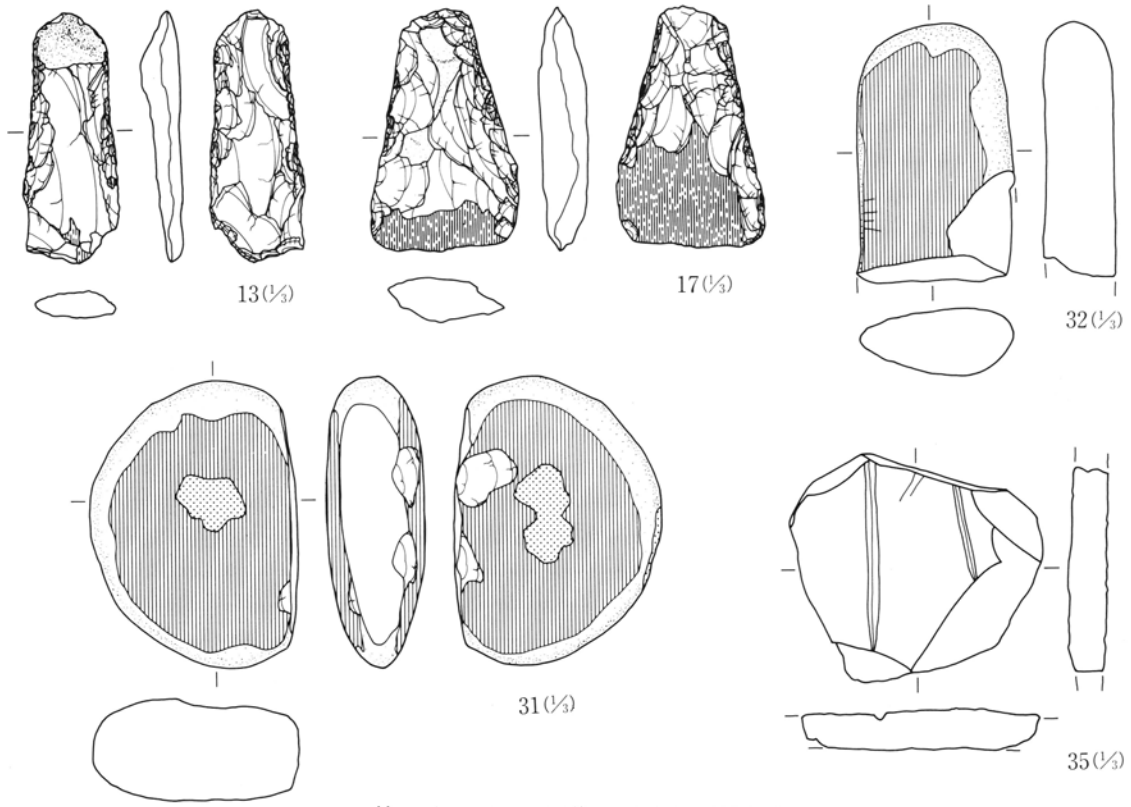
第723図 C336号住居跡出土石器(2)



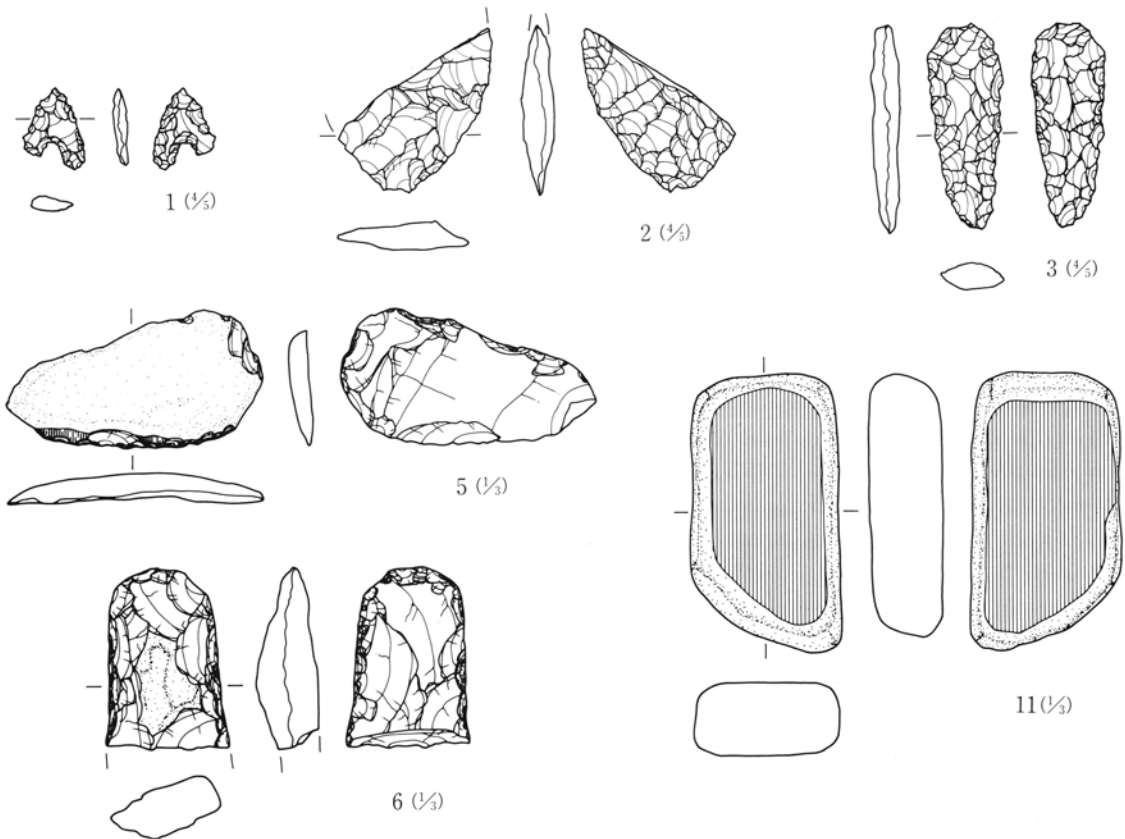
第724図 C336号住居跡出土石器(3)



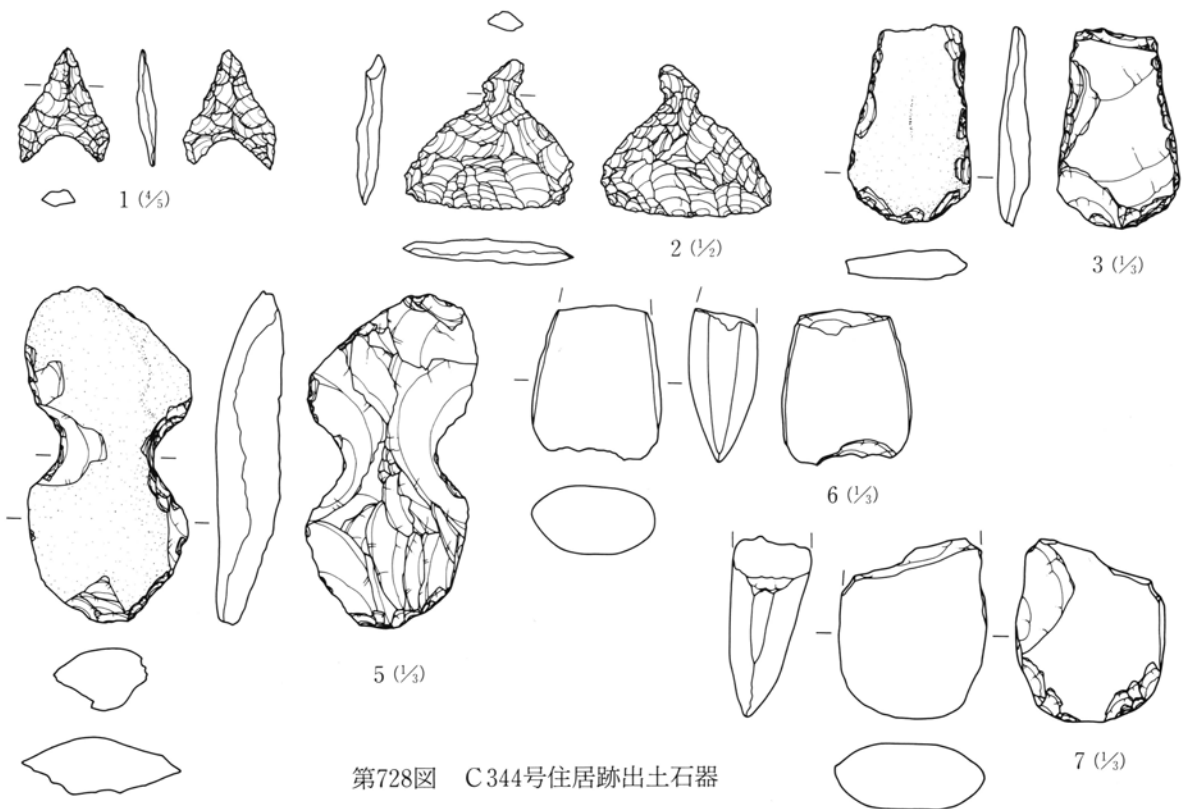
第725図 C338号住居跡出土石器(1)



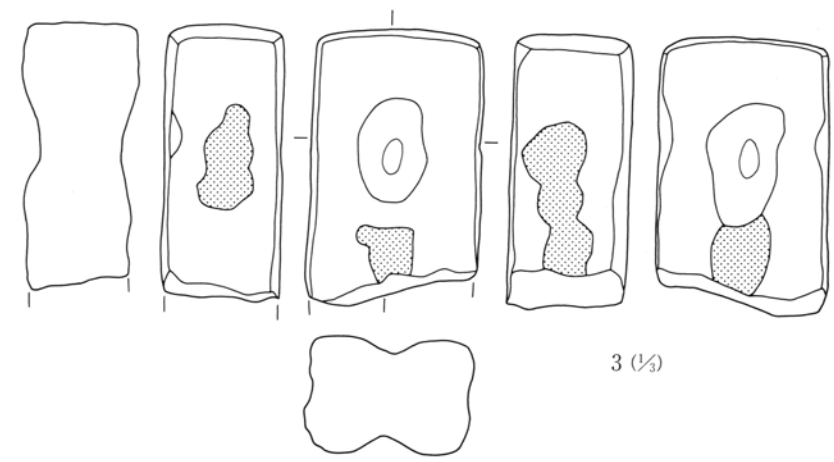
第726图 C338号住居跡出土石器(2)



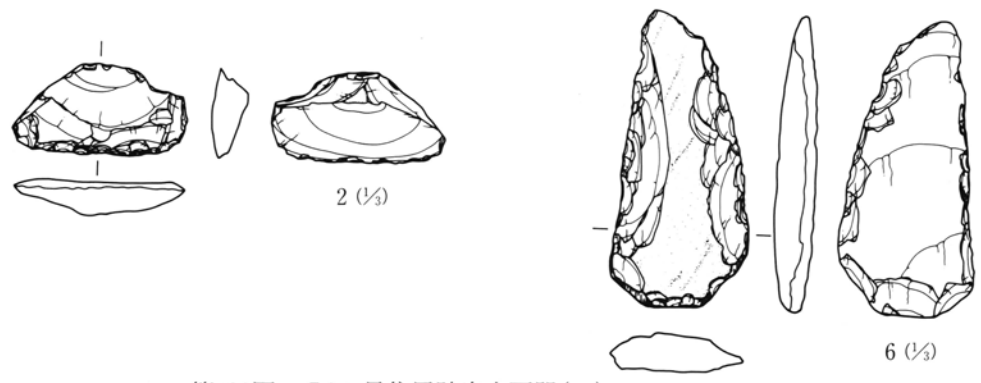
第727图 C339号住居跡出土石器



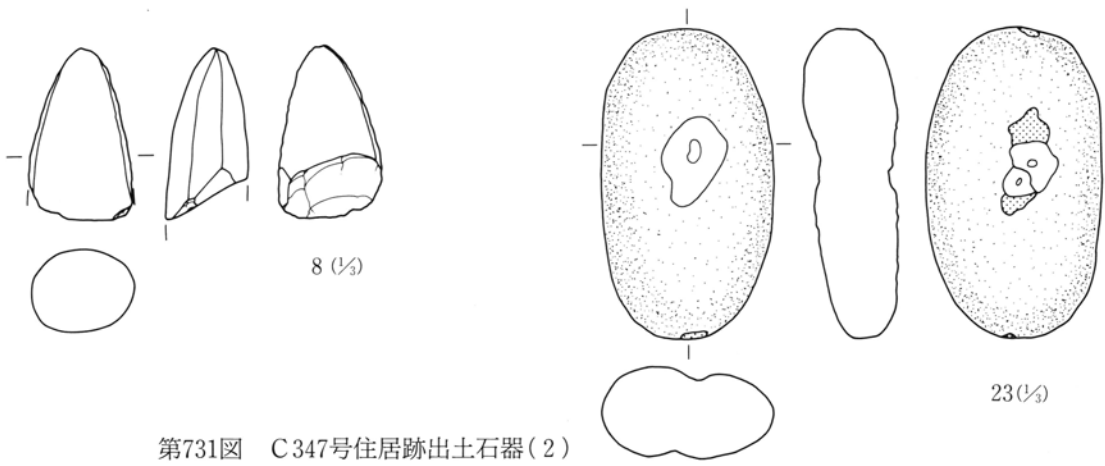
第728图 C344号住居跡出土石器



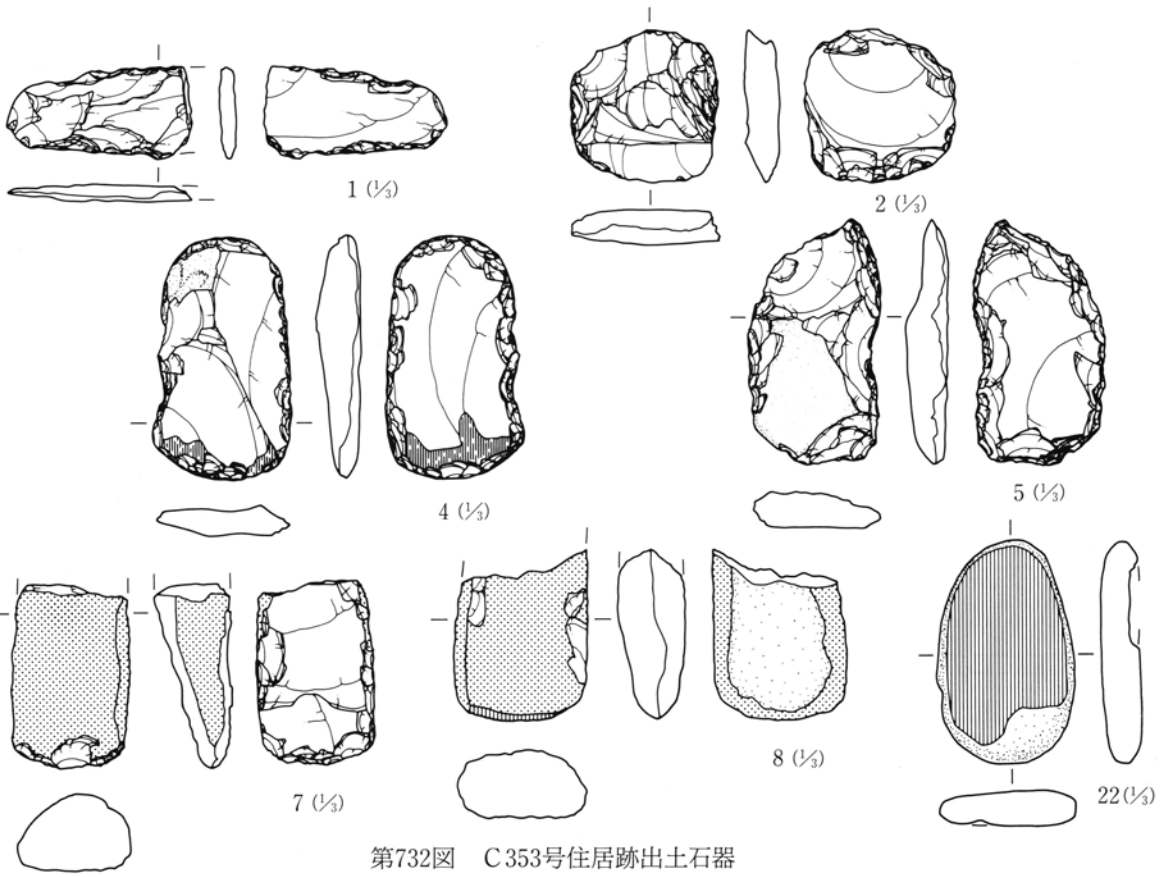
第729图 C345号住居跡出土石器



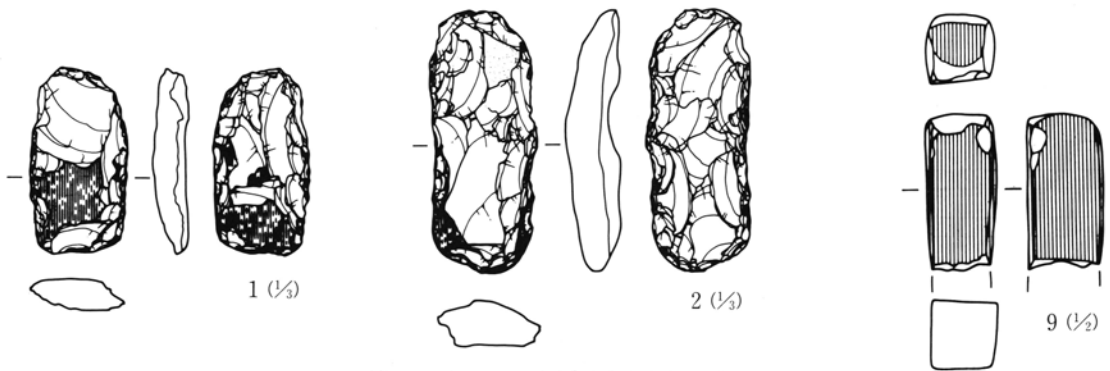
第730图 C347号住居跡出土石器(1)



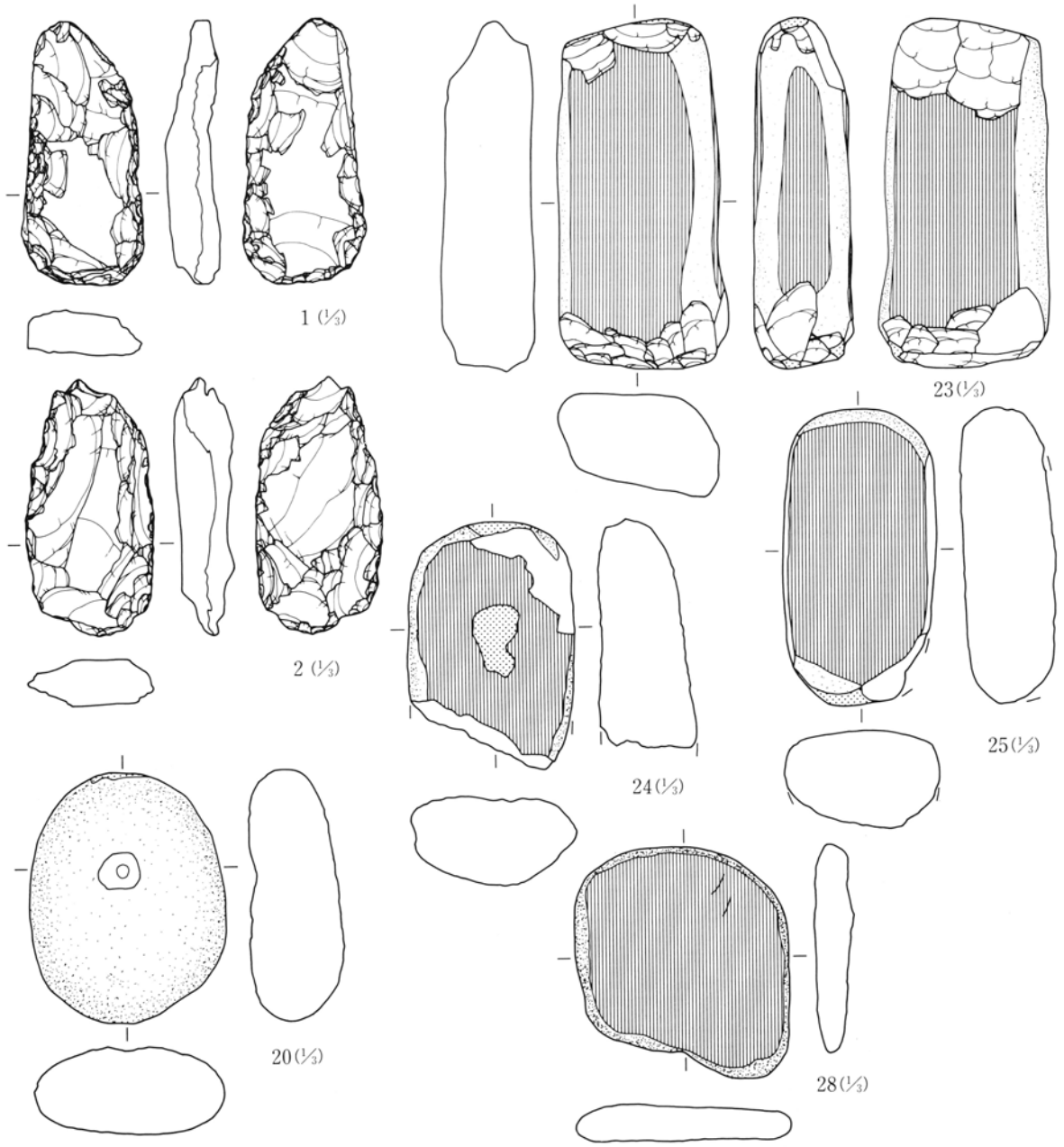
第731图 C347号住居跡出土石器(2)



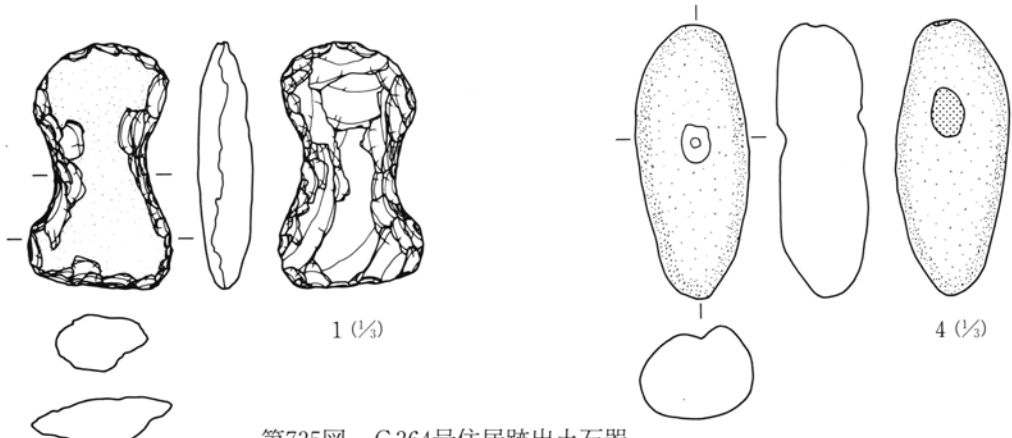
第732图 C353号住居跡出土石器



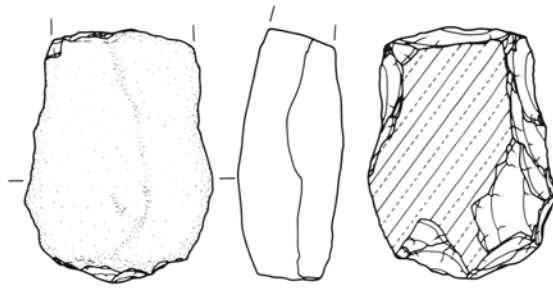
第733图 C354号住居跡出土石器



第734图 C361号住居跡出土石器



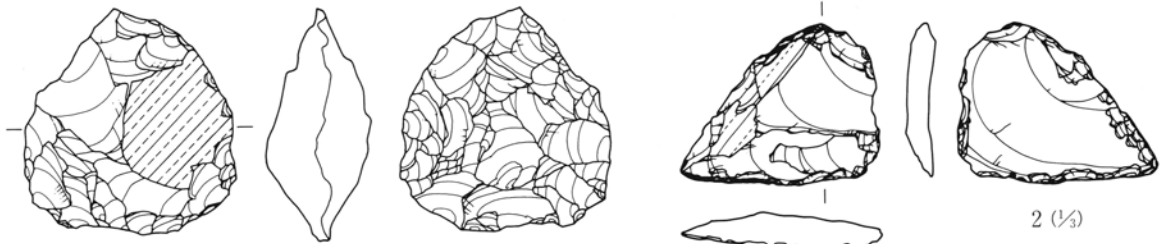
第735图 C364号住居跡出土石器



2 (1/3)

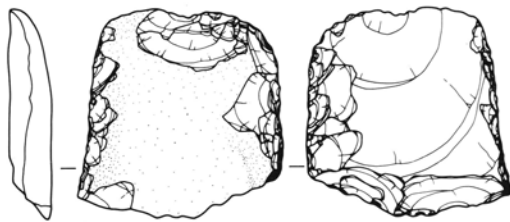
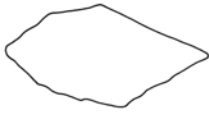


第736图 C365号住居跡出土石器

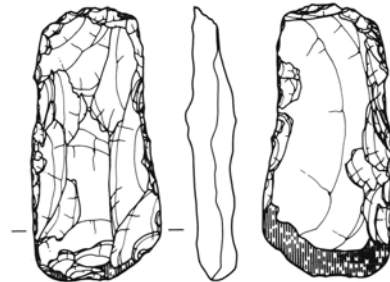


1 (1/3)

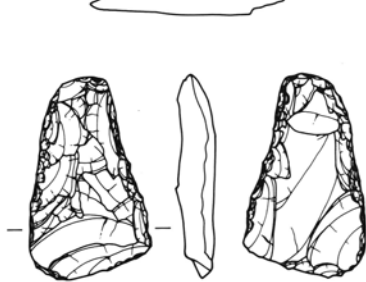
2 (1/3)



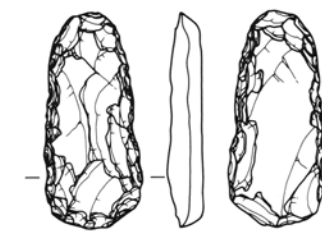
3 (1/3)



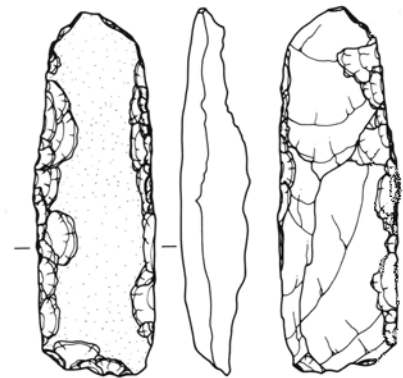
9 (1/3)



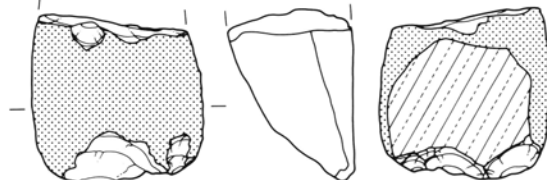
13 (1/3)



15 (1/3)



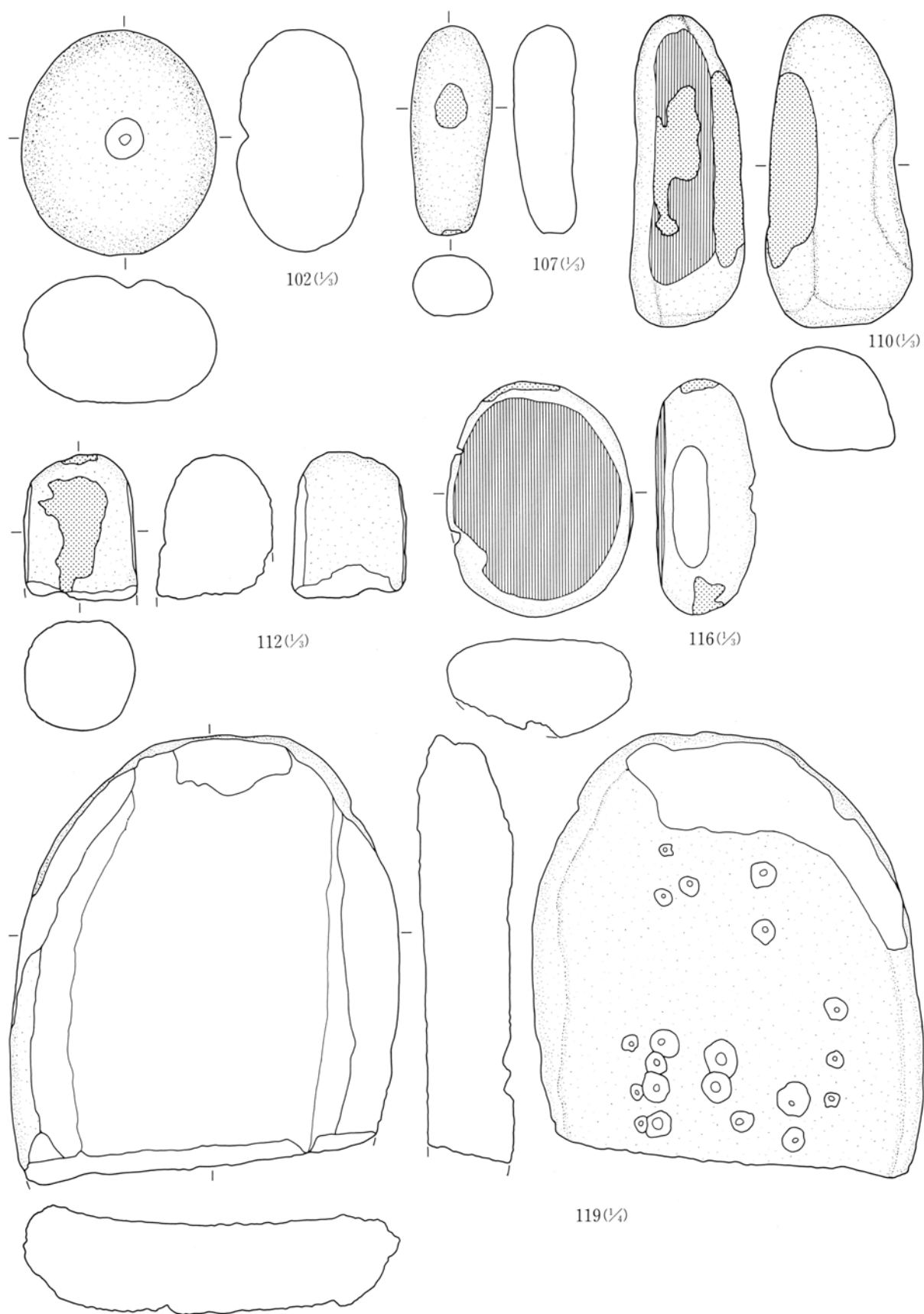
22 (1/3)



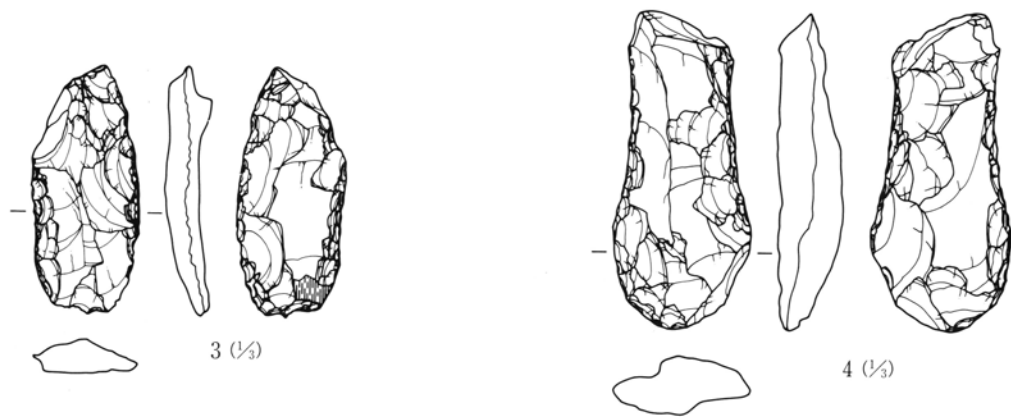
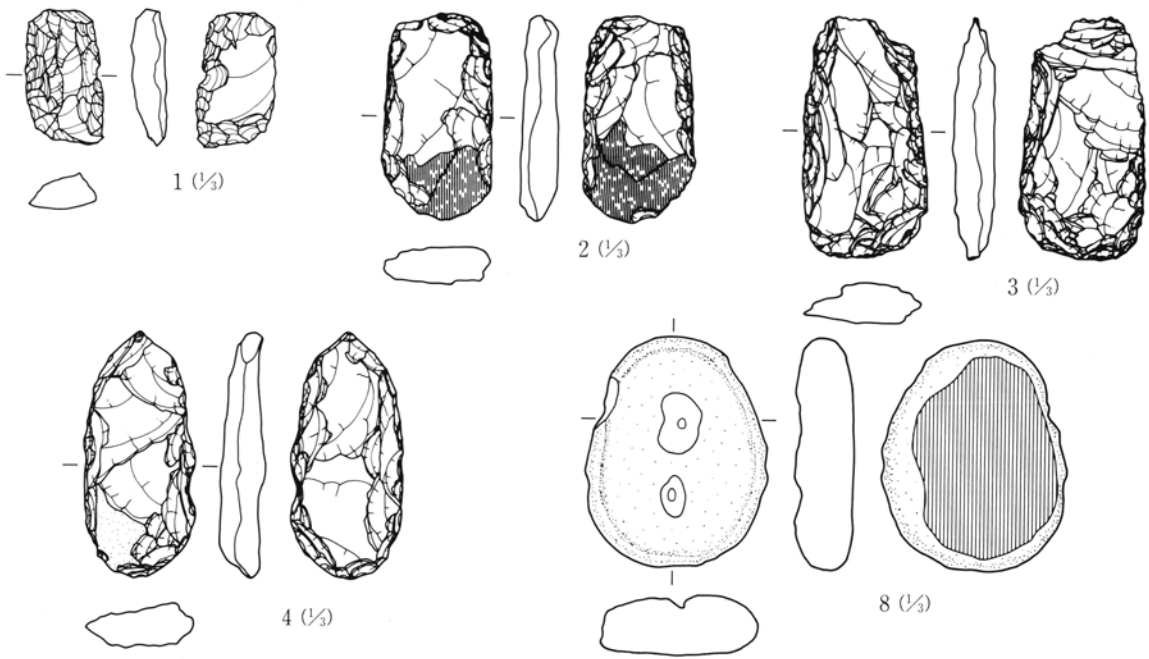
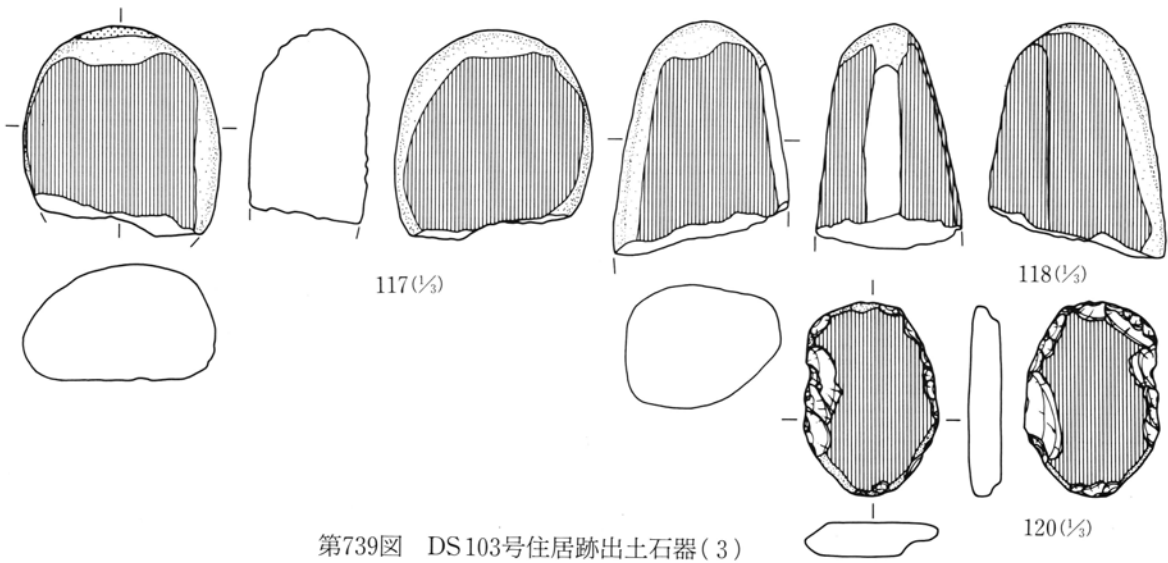
44 (1/3)

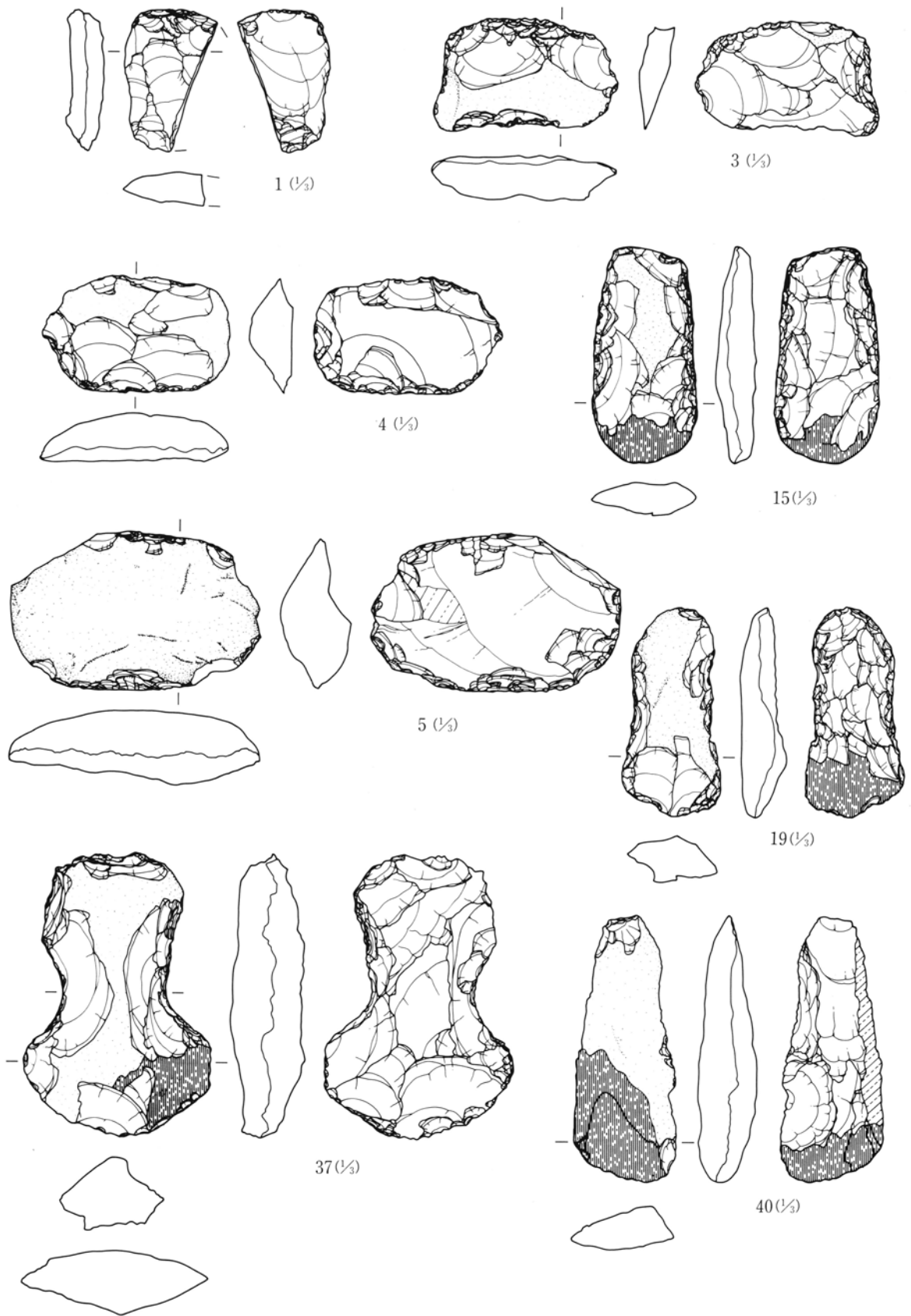


第737图 DS103号住居跡出土石器(1)

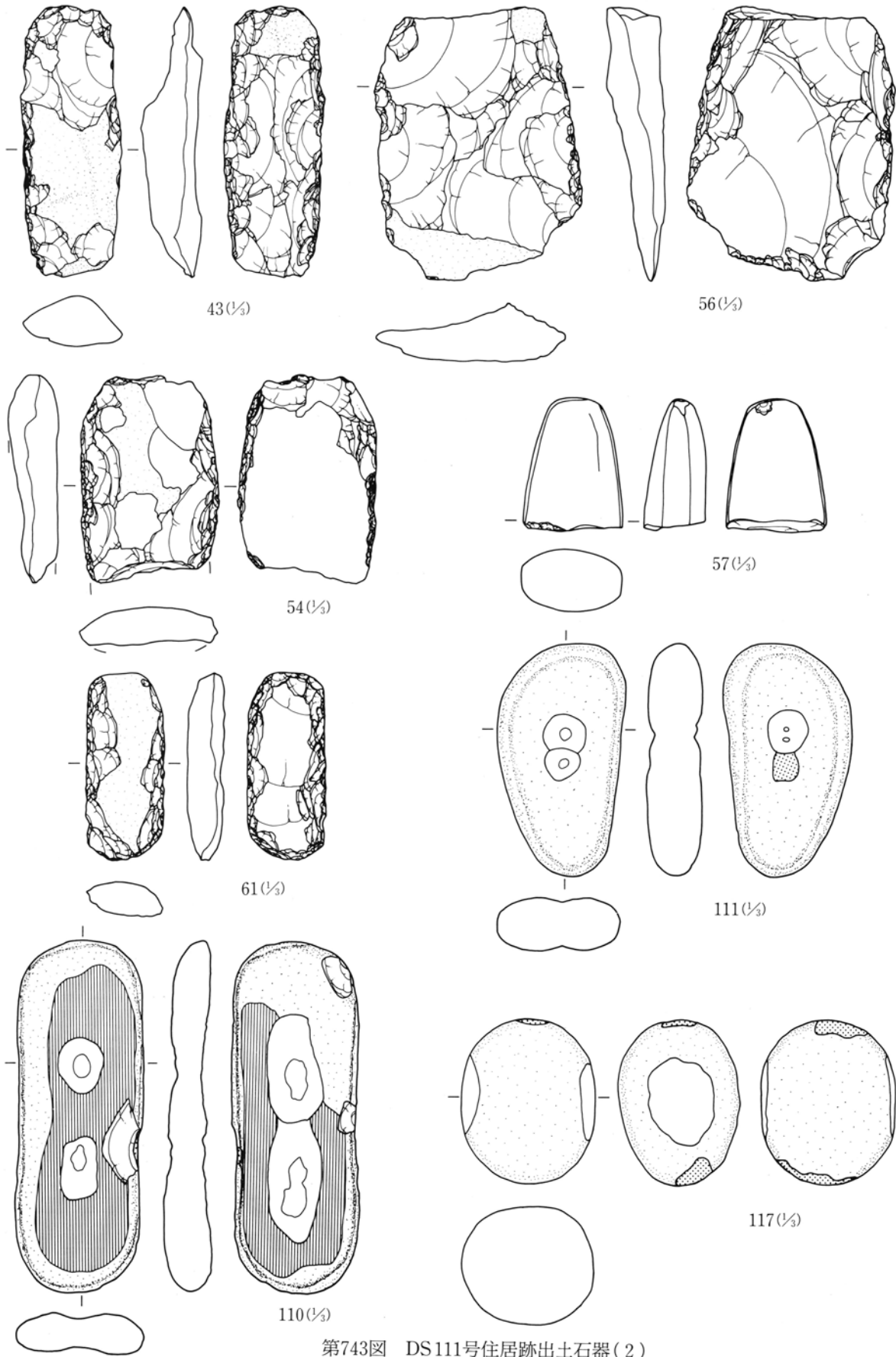


第738图 DS103号住居跡出土石器(2)



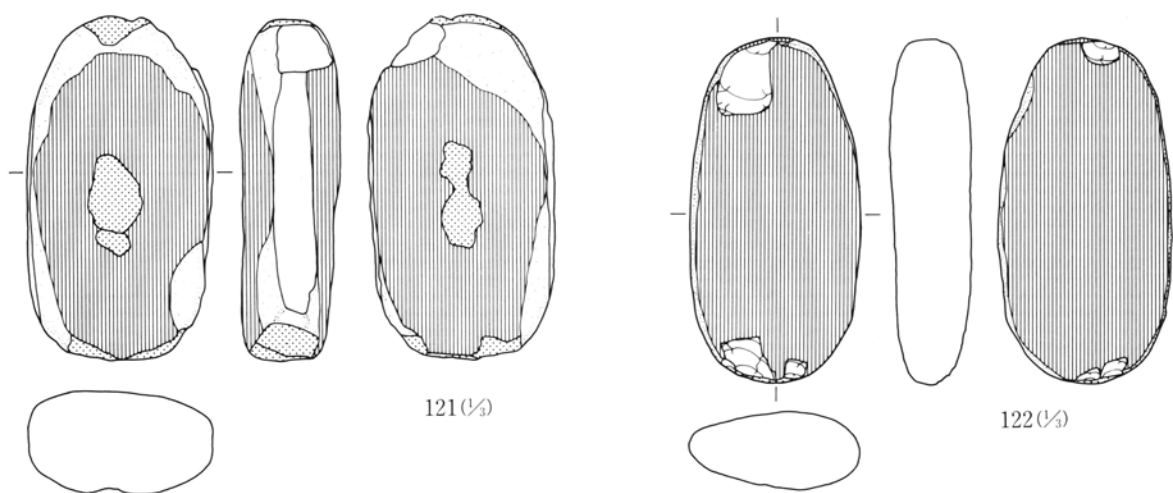


第742図 DS111号住居跡出土石器(1)

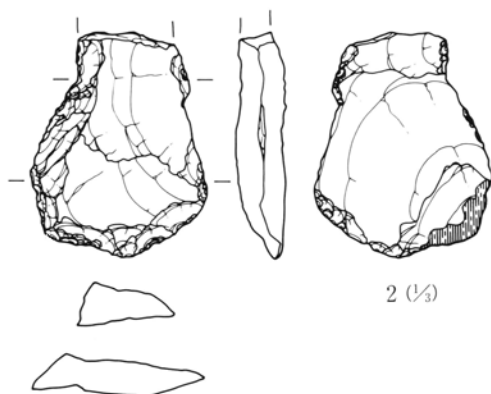


第743图 DS111号住居跡出土石器(2)

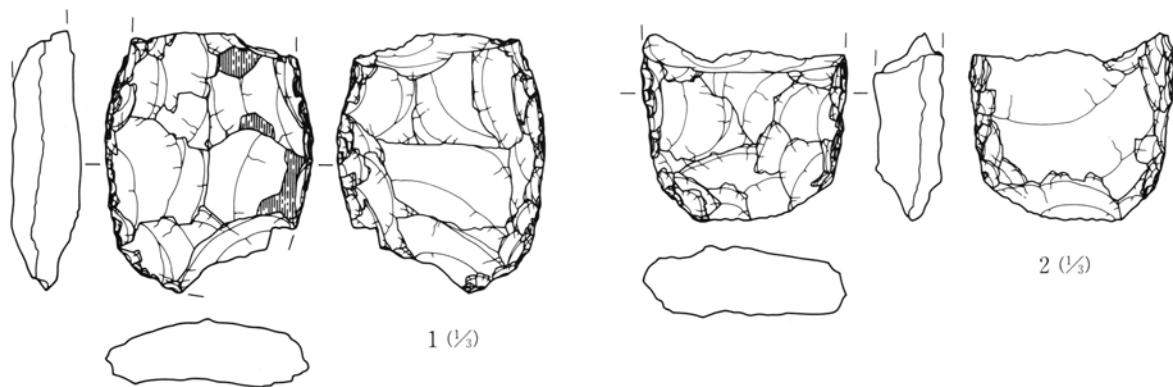
第4章 出土遺物



第744図 DS 111号住居跡出土石器(3)



第745図 DS 112号住居跡出土石器



第746図 C 79号土坑出土石器

3. 遺構外出土の石器

ここでは、C区古墳時代以降の遺構やグリッドから出土した石器のうち、縄文・弥生時代に属すると思われるものを取り扱う。ただし、弥生時代の石製紡錘車と玉類は、第4章第3節で取り上げてあるのでここでは対象としない。ほとんどの器種で、形状・石材ともに縄文・弥生時代遺構出土のものと同様の傾向を示している。以下代表的な器種について記載する。

硬玉製大珠 古墳時代の住居より1点出土している（遺構外—26：748図）。中央よりやや上に表面から穿孔されており、全体に良く研磨され光沢を持つ。両端を面取りし、隅丸の長方形に仕上げている。

石鏃 30点出土。凹基無茎鏃19点、凸基無茎鏃1点、凸基有茎鏃2点、平基無茎鏃4点、破損により形状不明のもの1点、未製品1点である。石材は、黒曜石やチャート、赤色珪質岩など非常に細粒・均質なものである。

楔形石器 38点出土。石材は9割以上が黒曜石で、他に黒色安山岩、赤色珪質岩が各1点含まれる。黒曜石製のものに比べ、その他の石材のものはやや大型である。

スクレイパー 38点出土。石材は硬質泥岩を中心とする細粒の砂・泥岩類が7割以上を占める。黒曜石製のものも4点あるが、他の石材に比べ非常に小型である。

打製石斧 総数で350点出土。形状不明のものを除くとI類28点、II a類21点、II b類139点、III類109点である。類型による大きな差はないが、I類が他に比べてやや幅広く大型の傾向がある。石材は、硬質泥岩を中心とする細粒の砂・泥岩類が全体の7割近くで、次いで粗・細粒の安山岩類が続く。

磨製石斧 45点出土。大きさのばらつきが大きく、重量にして100g程度～2kgを越えるものまである。また、未製品の割合が高く、全体の半数以上にのぼる。完成品についても、丁寧に整形されているのは刃部のみで、他の部分は素材礫の形状を残しているものが多い。石材は変玄武岩が全体の8割近くを占める。

石鏃 21点出土。類型別ではI類が11点、II類7点、不明2点の他、弥生時代の遺構出土石器にはみられなかった両側に抉りを持つタイプ（III類）が1点ある。石材は、硬質泥岩などの細粒の砂・泥岩類が全体の3分の2にのぼり、以下細粒・粗粒の安山岩類、結晶片岩類が続く。結晶片岩類のものは全てI類である。

凹石 42点出土。凹みを片面のみに持つものが22点、両面に持つものが11点、長軸方向の側面を面取りしてあるものが6点、形状不明のものが3点ある。

磨石 総数で73点出土。類型別では、A類9点、B類53点、C類7点、E類1点、形状不明なものが3点である。

敲石 130点出土。類型は、A類39点、B類84点、C類4点、形状不明3点である。

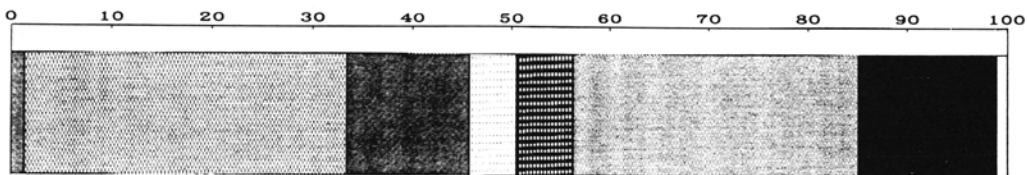
砥石 43点出土している。石鏃の破損品を転用したものが1点あった（遺構外—335：756図）。

この他の器種については第4表のとおりである。

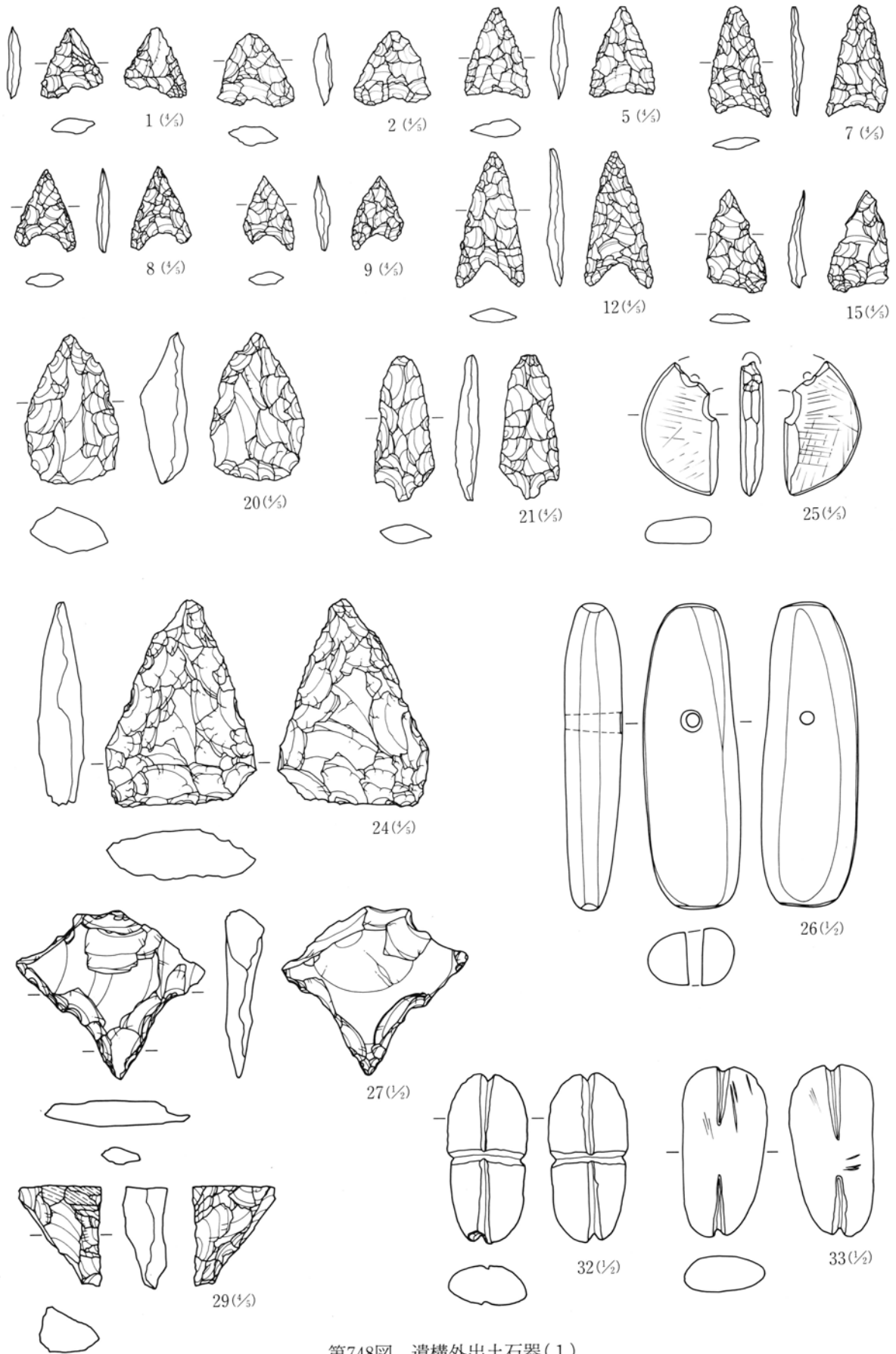
表4 遺構外出土石器器種組成表

器種	石鏃	石錘	楔	石匙	SS	打斧	磨斧	石鏃	剝片	石核	原石	石棒	磨石	凹石	敲石	石皿	多孔	砥石	台石
個数	30	6	38	7	38	350	45	21		337	42	2	73	42	130	9	11	43	6

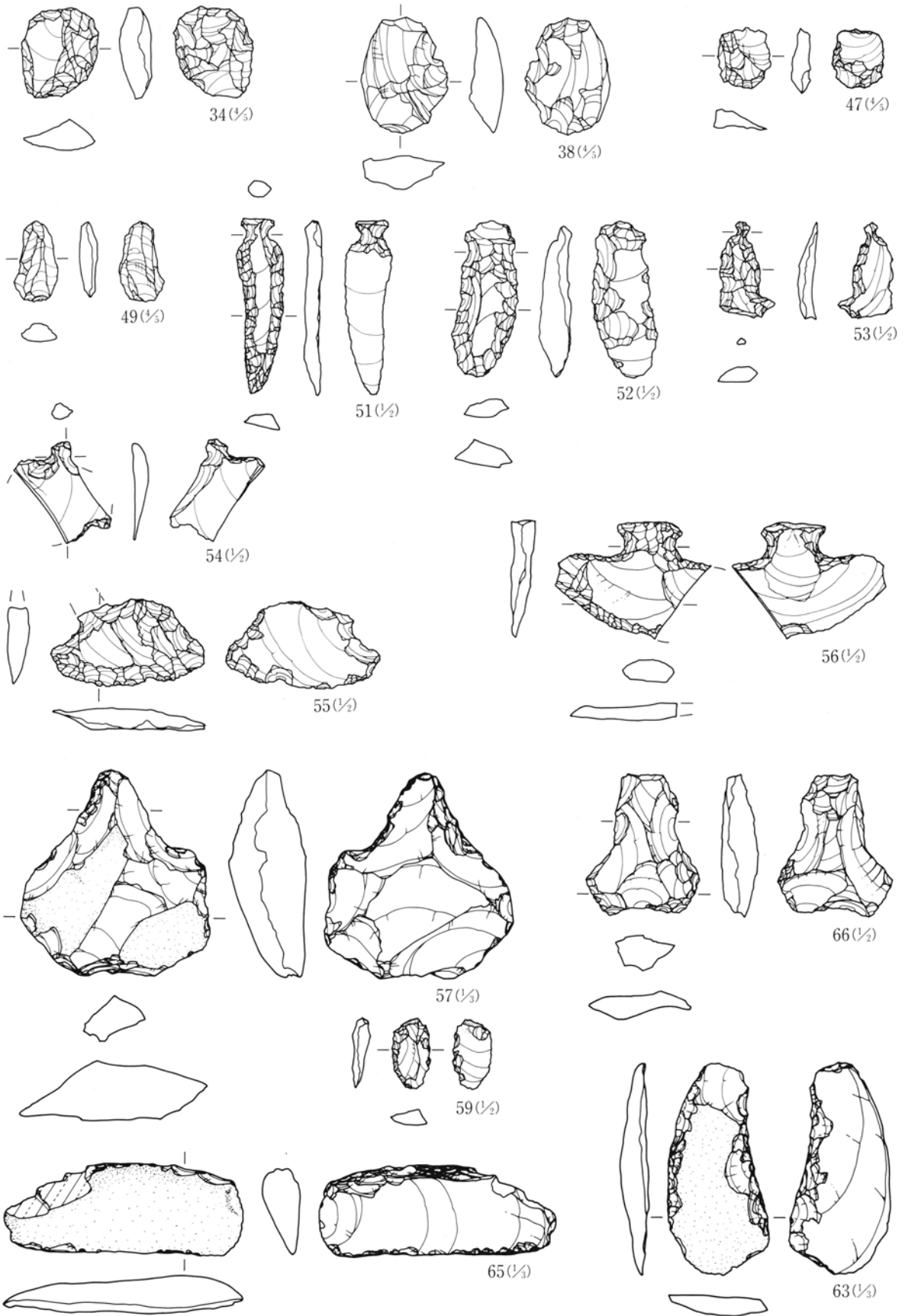
*この他に球状耳飾り、硬玉製大珠、尖頭器各1点、石錘、礫器各2点が出土している。



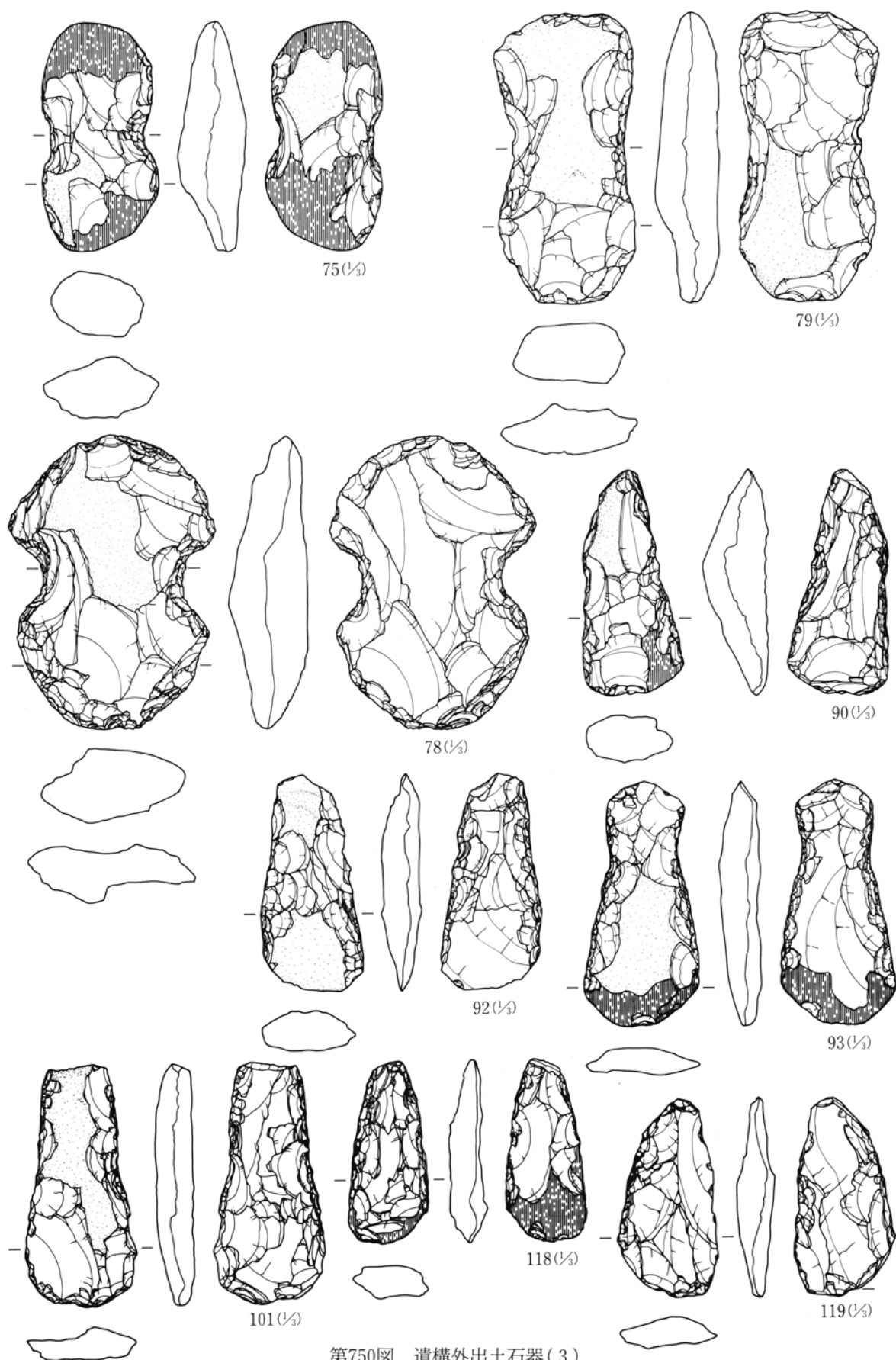
第747図 遺構外出土石器石材組成



第748図 遺構外出土石器(1)



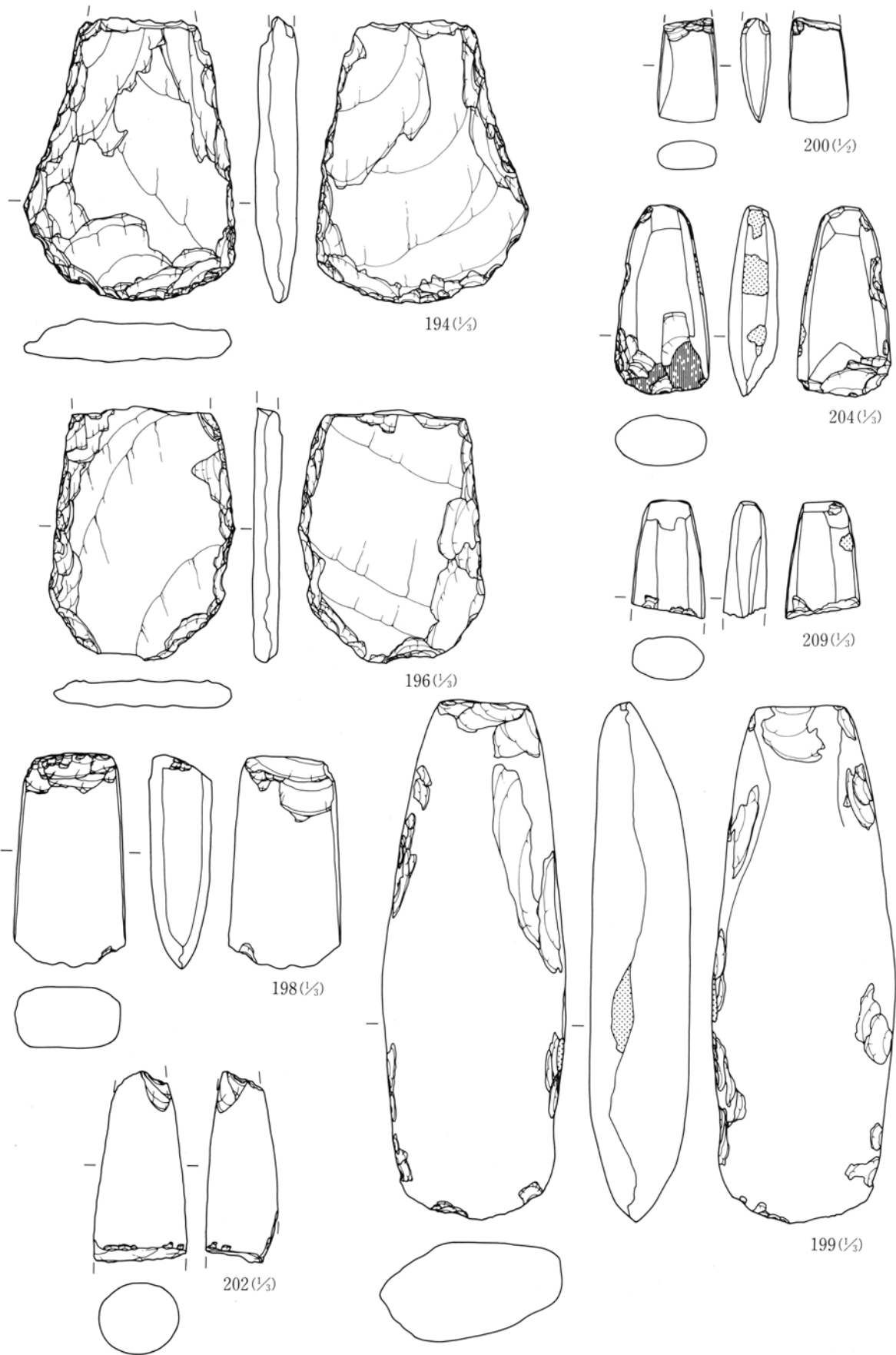
第749図 遺構外出土石器(2)



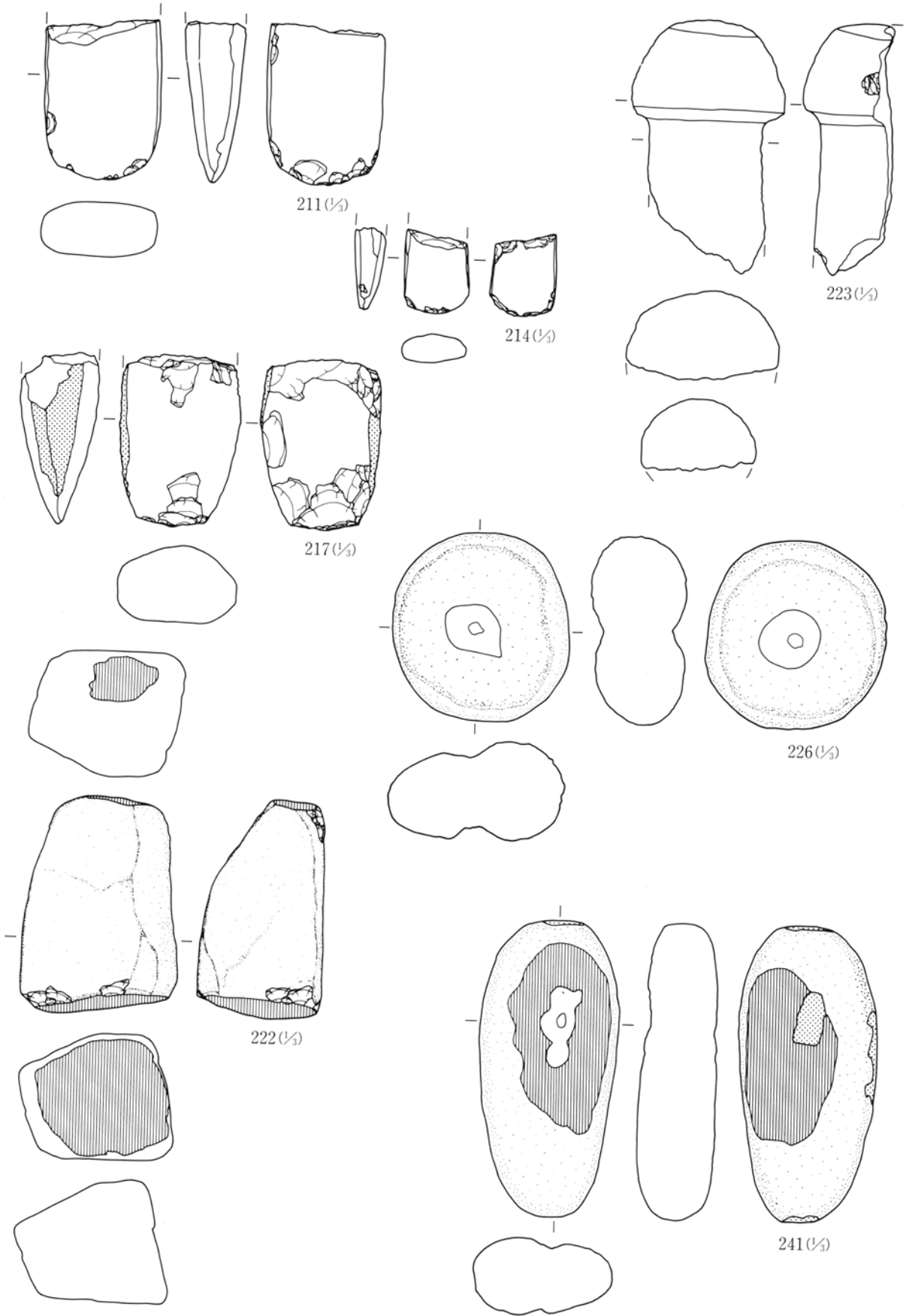
第750図 遺構外出土石器(3)



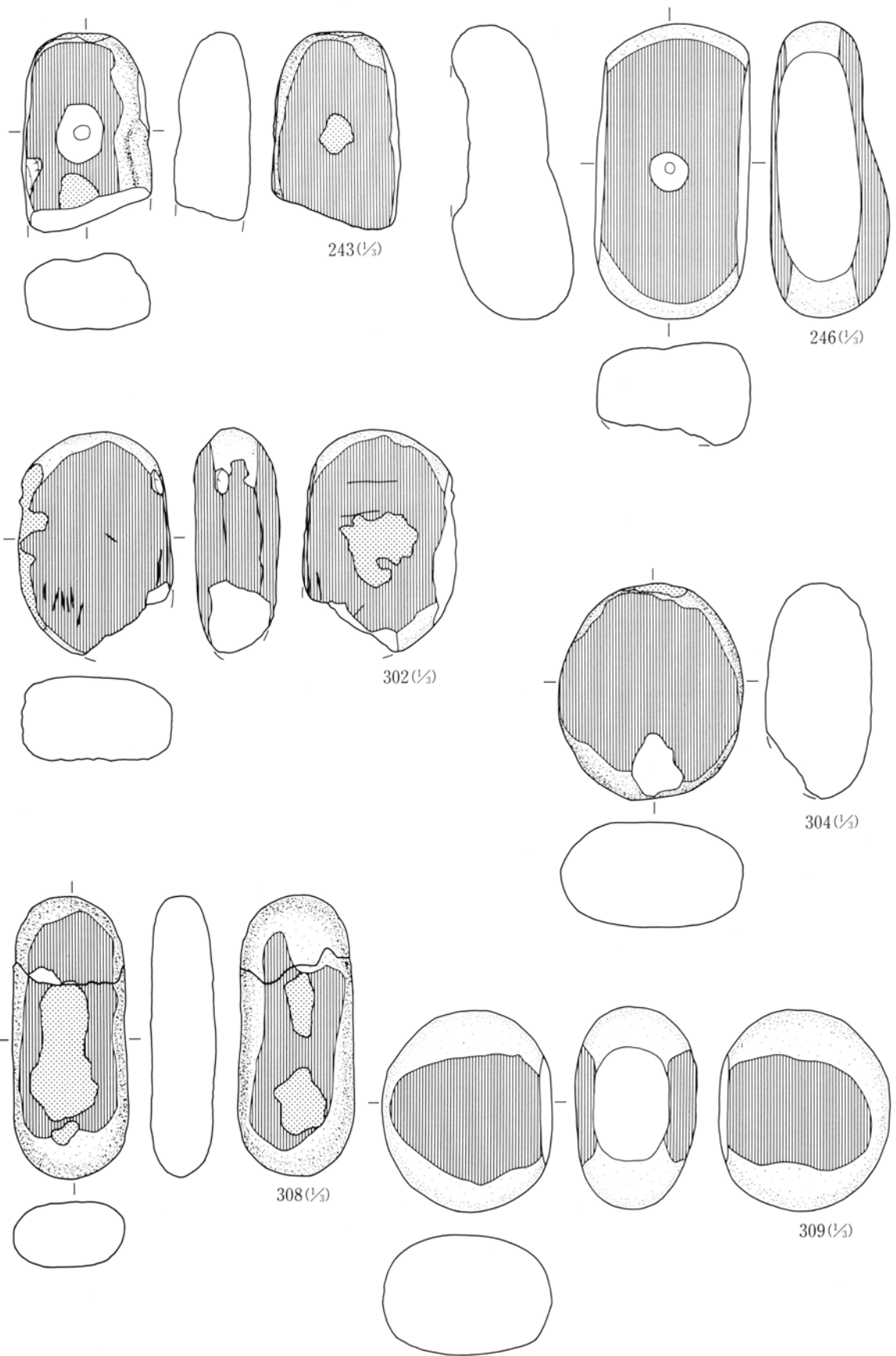
第751図 遺構外出土石器(4)



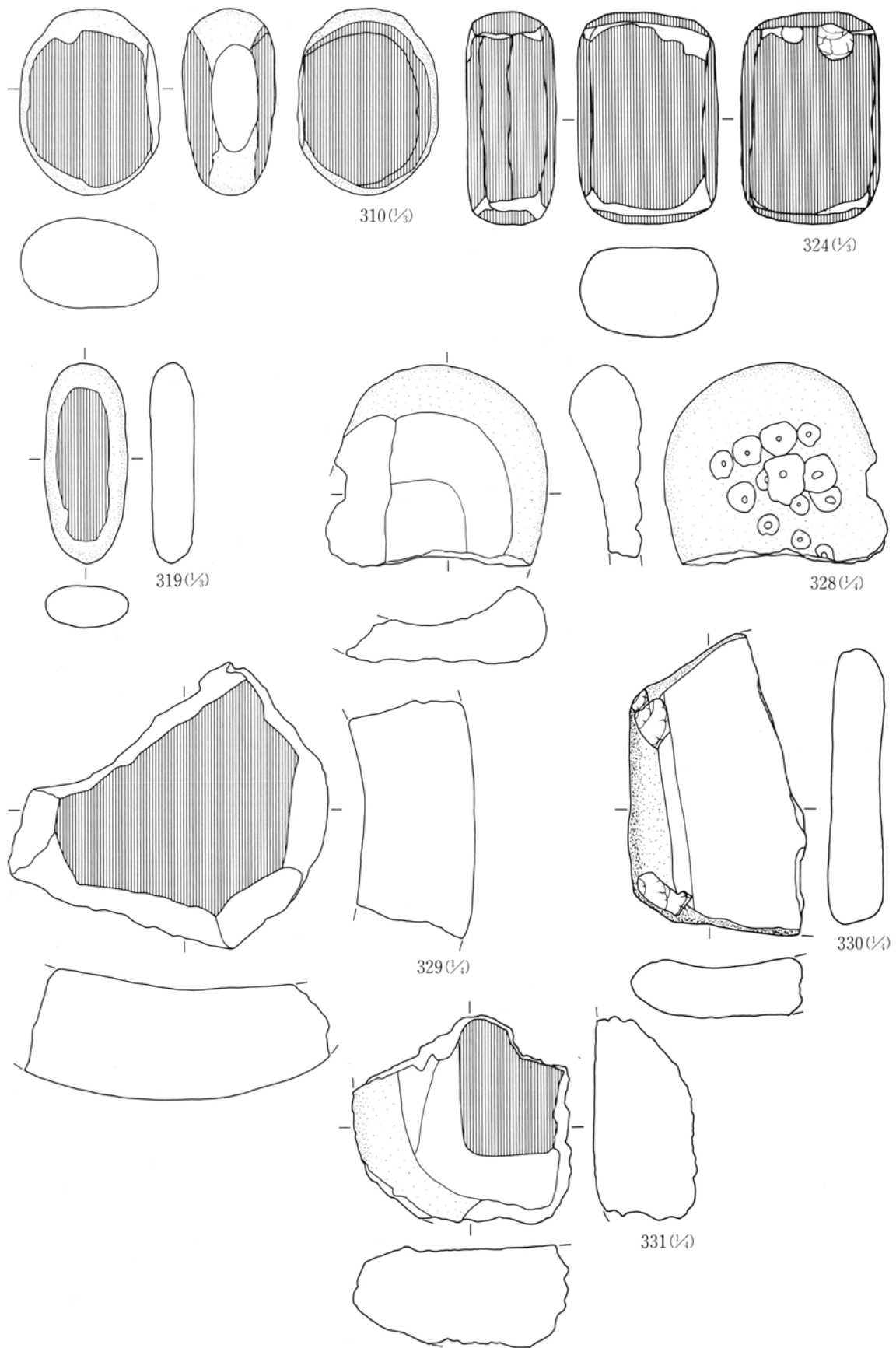
第752図 遺構外出土石器(5)



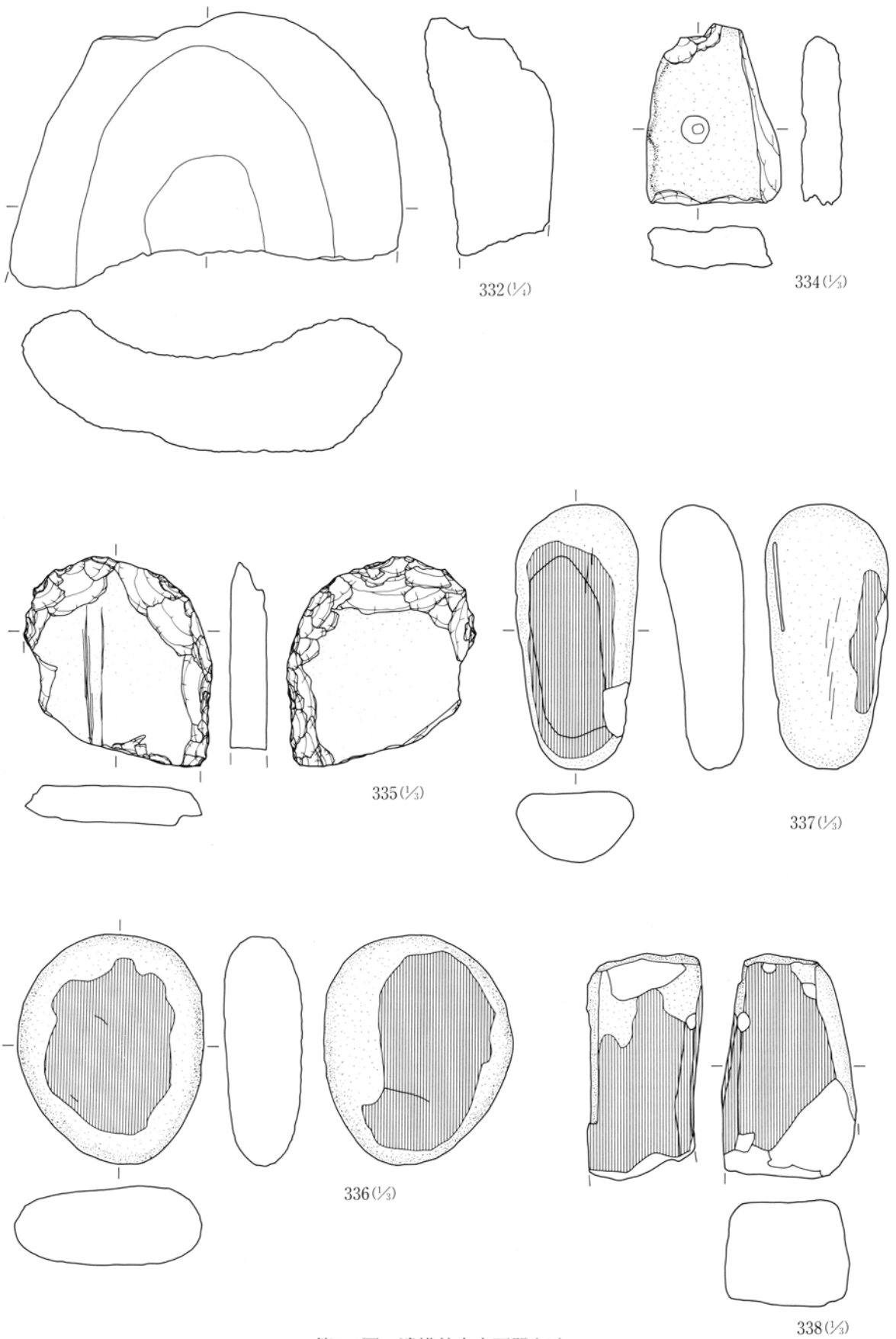
第753図 遺構外出土石器(6)



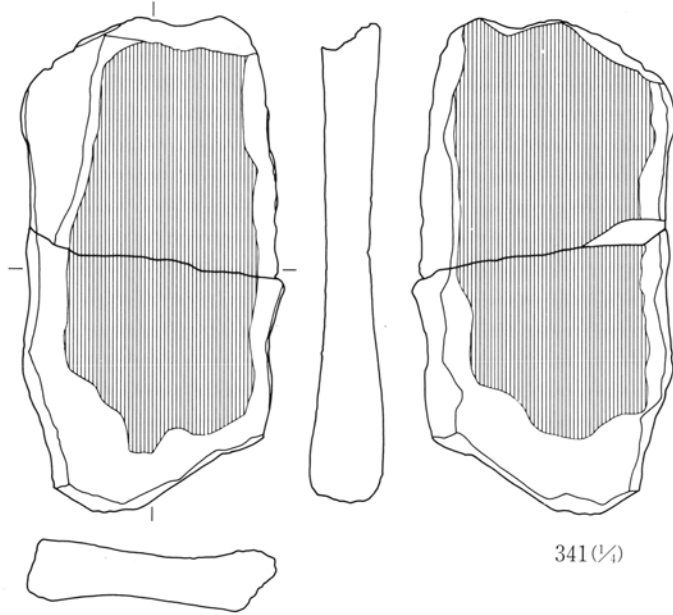
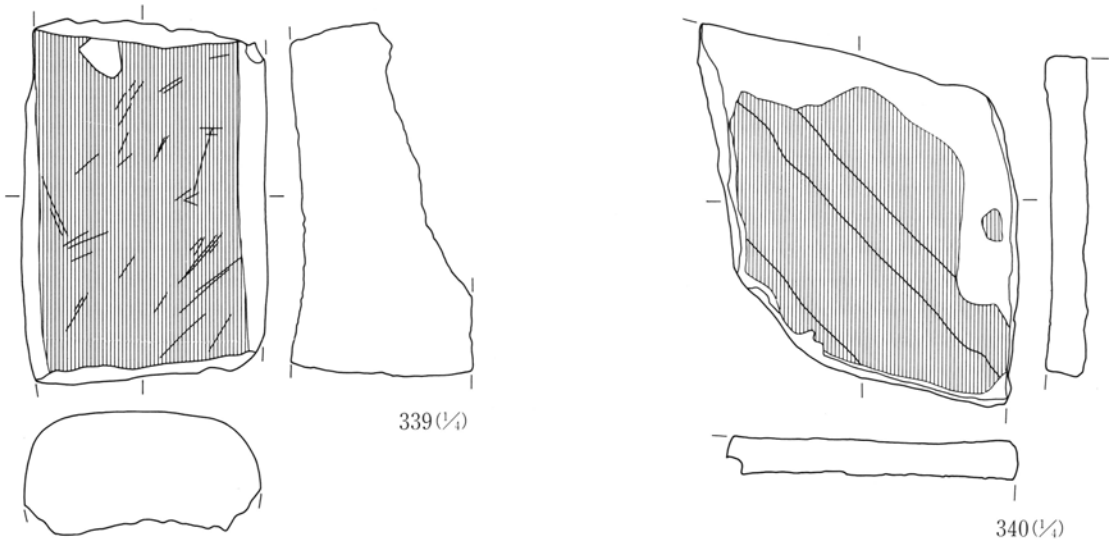
第754図 遺構外出土石器(7)



第755図 遺構外出土石器(8)



第756図 遺構外出土石器(9)



第757図 遺構外出土石器 (10)



獣骨観察表 (PL. 146)

No.	出土遺構	計測値(cm)	備考
1	C57号住居跡	長さ2.6 幅1.2 厚さ0.3	弥生時代の住居内P1覆土中より出土。火を受けた痕跡あり。
2	C119号土坑	長さ2.6 幅1.6 厚さ0.5	板状で側縁がややカーブする。火を受けた痕跡あり。
3	C119号土坑	長さ1.4 幅1.2 厚さ1.0	指骨か。一端を欠く、断面五角形で、火を受けている。
4	C119号土坑	長さ1.5 幅1.7 厚さ0.8	両端を欠損し、形状ははっきりしない、火を受け脆弱である。
5	C119号土坑	長さ3.2 幅1.4 厚さ1.3	指骨。両端の骨頭部分はしっかりと残る。断面は長円形を呈す。火を受けている。

第4章 出土遺物

表5 南蛇井増光寺遺跡住居一覽表 (B~E区)

B区

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
B1	Ba-15・16	長方形	4.00	4.35	0.42	17.03	N-12°-W	1	北	4		古墳	III
B2	Ba-13・14				0.20							奈良か	III
B3	Ba・b-15	長方形	4.41	4.11	0.26	16.05	N-1°-W	1	北			平安	III
B4A	Bb・c-16	正方形	2.58	2.49	0.18	(6.61)						奈良	III
B4B	Bb-16	長方形	4.00	3.60	0.15	(13.74)						奈良	III
B5	Ba・b-16	長方形	6.18	4.70	0.09	27.72	N-12°-E			4		弥生	I
B6	At・Ba-17~19	正方形	9.12	9.39	0.60	(73.46)	N-29°-W	1	北			古墳	III
B7	Ba-19	長方形	3.90	4.50	0.60	(15.49)	N-100°-E	1	東			平安	III
B8	Bb・c-18	長方形	4.44	3.90	0.36	17.02	N-5°-W	1	北			古墳	III
B9	欠番												
B10	Ba・b-20	正方形	4.50	3.93	0.33	16.88	N-29°-W	1	北			古墳	III
B11	Bc-20	正方形	4.74	4.92	0.34	23.30							III
B12	Bc・d-16・17	長方形	3.51	4.92	0.35	17.60	N-82°-E	1	東	4	南東	平安	III
B13	Bd-18	正方形	4.92	4.80	0.30	22.51	N-17°-W	1	北	6	北東	古墳	III
B14	Ba-22・23		6.45	?	0.72		N-26°-W	1	北	5	北東	古墳	III
B15	Ba-23	長方形	3.15	2.79	0.36	8.17	N-21°-W	1	北			古墳	III
B16	At-23・24		4.90	?	0.34		N-14°-W	1	北	2	北東	古墳	III
B17	Ba-24	長方形	3.84	4.17	0.33	14.78	N-21°-W	1	北	5		古墳	III
B18	At-25	長方形	3.00	2.46	0.22	(7.48)	N-10°-W	1	北			奈良	III
B19	Ba-26	正方形	3.65	3.75	0.26	13.40	N-93°-E	1	東			平安	III
B20	At-25・26		2.79	?	0.11		N-15°-W	1	北			平安	III
B21	Ba-26・27	正方形	3.90	?	0.28		N-30°-W	1	北	2	北東	III	
B22	Bc・d-23~25	長方形	8.12	6.24	0.33	49.64	N-47°-W			4		弥生	I
B23	Bc・d-26・27	隅丸長方形	4.20	3.40	0.24	12.88	N-15°-W					弥生	I
B24	Be-26	正方形	3.30	3.21	0.28	10.42	N-101°-E	1	東		南東	平安	III
B25	Be・f-26・27	長方形	4.80	5.55	0.68	27.18	N-7°-W	1	北	6		奈良	III
B26	Bd-23・24	長方形	5.55	4.05	0.60	21.74	N-31°-W	1	北	4		古墳	III
B27	At-20				0.39		N-91°-E	1	東			平安	III
B28	Bd-25	隅丸長方形	(4.34)	4.00	0.25	(16.86)	N-10°-W	1	中北	4		弥生	I
B29	Bd~f-22・23	隅丸長方形	10.08	6.28	0.70	59.00	N-33°-W	1	南西	4		弥生	I
B30	Bf・g-19・20	長方形	3.00	3.78	0.30	10.80	N-79°-E	2	東			平安	III
B31	Bg・h-17・18	長方形	4.40	3.50	0.42	13.75	N-33°-W			4		弥生	I
B32	Bf~h-15・16	隅丸長方形	(9.30)	6.60	0.54	(58.38)	N-19°-W	1	中北	3		弥生	I
B33	Bd・e-16・17	長方形	7.04	6.70	0.05	(46.50)	N-36°-W	1	中北	4?		弥生	I
B34	Bg-16	長方形	3.51	3.15	0.32	9.93	N-64°-E	1	東	5	南東	古墳	III
B35	Bh-17・18	正方形	3.75	3.45	0.32	12.44	N-82°-E	1	東	5			III
B36	Bh・i-15・16	長方形	5.66	5.00	0.12	(26.00)	N-19°-W	1	北	4		弥生	I
B37	Bh-18・19	長方形	4.80	4.35	0.60	19.90	N-11°-W	1	北	4		奈良	III
B38	Bi-19・20	正方形	5.25	5.25	0.42	25.71	N-25°-W	1	北	5		奈良	III
B39	Bh-21	(正方形)	(4.30)	(4.20)		(18.06)						弥生	I
B40	Bb-17	長方形	3.75	4.50	0.32	(16.91)	N-75°-E	1	東			平安	III
B41	At-24・25		3.90	?	0.26							平安	III
B42	Ba・b-27	正方形	3.90	3.96	0.33	14.17	N-60°-E	1	東	6		古墳	III
B43	Bb-26	正方形	3.36	3.21	0.18	(10.37)	N-65°-E	1	東	4			III
B44	Ba・b-25・26	長方形	3.45	3.90	0.24	13.74	N-78°-E	1	東			古墳	III
B45	Ba・b-25	長方形	3.45	3.15	0.21	10.54	N-101°-E	1	東			平安	III
B46	Bb-24	正方形	4.40	4.10	0.32	17.07	N-17°-W	1	北	4		古墳	III
B47	Be・f24	長方形	3.45	4.11	0.45	13.47	N-88°-E	1	東			平安	III
B48	Bs-22・23				0.06								III
B49	Bj-19	正方形	3.30	3.51	0.60	10.95	N-76°-E	1	東			平安	III
B50	Bj-18	正方形	3.15	3.30	0.32	10.25	N-76°-E	1	東			平安	III
B51	欠番												
B52	Bi・j-20	長方形	3.45	3.69	0.39	11.06	N-73°-E	1	東			平安	III
B53	Bi-19・20	長方形	4.86	4.20	0.48	20.40	N-13°-W	1	北	4		奈良	III
B54	Bl-18・19	長方形	3.08	3.78	0.36	11.53	N-62°-E	1	東			平安	III
B55	Bh-21・22	長方形	3.60	4.08	0.21	13.95	N-6°-W	1	北	7		奈良	III
B56	Bd・e-22・23	長方形	5.10	4.00	0.69	20.20	N-28°-W	1	北	4		古墳	III

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
B57	Bi-22・23	長方形	4.86	5.90	0.48	28.61	N-16°-W	1	北	4		奈良	III
B58	Bh-22・23							1	東			平安	III
B59	Bj・k-20・21	長方形	5.32	4.28	0.32	21.44	N-26°-W	1	北西	4		弥生	I
B60	Bp~r-21~23	長方形	10.60	6.32	0.52	63.76	N-21°-W	1	中北	4		弥生	I
B61	Br・s-21・22	長方形	(4.50)	3.10	0.49	(12.91)	N-74°-E			4		弥生	I
B62	Bs-23			6.90	0.32					2		弥生	I
B63	欠番												
B64	Bb・c-15・16	正方形	4.05	3.90	0.32	15.63	N-4°-W	1	北	4		古墳	III
B65	Bc・d-17・18	長方形	?	3.84	0.31	(17.72)			5			奈良	III
B66	Be・f-24	長方形	4.89	4.50	0.21	(21.33)	N-5°-E	1	北			奈良	III
B67	Bl-19	正方形	4.56	4.65	0.54	(20.08)	N-1°-W	1	北	3	北東	古墳	III
B68	Ba・b-16・17				0.24		N-20°-W	1	北			古墳	III
B69	Bg-20・21	正方形	3.36	3.24	0.52	11.33	N-23°-W	1	北	4		古墳	III
B70	Bj-17・18	正方形	4.50	4.80	0.39	19.23	N-28°-W	1	北	4		古墳	III
B71	Bf・g-19・20	長方形	4.90	4.35	0.60	20.21	N-27°-W	1	北	4		奈良	III
B72	Bg・h-25	正方形	4.14	4.41		(17.75)	N-75°-E	1	東			奈良	III
B73	Bc-15				0.28							平安	III
B74	Bi・j-18・19	正方形	5.10	5.10	0.66	26.43	N-25°-W	1	北	4		奈良	III
B75	Bd・e-25・26	長方形	6.20	4.80	0.55	26.77	N-68°-W	1	中西	4		弥生	I
B76	Bh・i-20	正方形	4.50	4.50	0.44	(19.73)	N-19°-W			4		奈良	III
B77	Bd・e-23・24	長方形	4.80	4.20		(20.52)							III
B78	Bl・m-17・18	長方形	4.90	4.10	0.14	19.59	N-34°-W	1	北	3		古墳	III
B79	Bi・j-15			4.20	0.47							弥生	I
B80	Bg・h-25・26	長方形	5.40	3.70	0.48	(23.18)	N-13°-W	1	北		北東	古墳	III
B81	Bm・n-18・19	正方形	7.95	7.95	0.30	65.01	N-9°-W	1	北	7	北	古墳	III
B82	Bo-20	長方形	4.14	3.60	0.36	14.33	N-17°-W	1	北	5	北東	奈良	III
B83	As・t-17・18	長方形	7.59	8.58	0.54	(59.30)	N-29°-W	1	北			奈良	III
B84	At・Ba-18・19	正方形	5.19	5.34		(27.48)	N-20°-W	1	北			奈良か	III
B85	欠番												
B86	欠番												
B87	Bm・n-19・20			5.10	0.10					2		弥生	I
B88	Bk-15				0.18					1		古墳	III
B89	Bj・k-15・16				0.22					2		奈良	III
B90	Bl・m-16・17				0.23					2		古墳	III
B91	Bm-17				0.33							古墳	III
B92	Bk-l-16							1	東	3		奈良	III
B93	Bj・k-16・17	正方形	5.40	5.70	0.15	30.06	N-16°-W	1	北	4		古墳	III
B94	Bi・j-18・19	正方形	5.40	5.10	0.15	(28.55)				2			III
B95	Be・f-24	長方形	4.35	3.21	0.44	(14.57)	N-26°-W			4		古墳	III
B96	Be-24・25									3		縄文	I
B97	Bq・r-24・25	隅丸長方形	5.92	4.72	0.32	24.97	N-88°-W	2	北・中西	4		弥生	I
B98	Bp・q-23・24	長方形	7.48	5.68	0.45	40.39	N-15°-W	2	中北・中西	4		弥生	I
B99	Br・s-25・26	長方形	6.66	5.34	0.61	(32.92)	N-5°-E	1	北	4	南東	弥生	I
B100	Bs-24・25		4.00	?	0.30					2		古墳	III
B101	Bp・q-25・26	隅丸方形	4.70	4.66	0.45	18.10	N-14°-W			4		弥生	I
B102	Bp-26・27	正方形	3.45	3.45	0.24	11.49	N-85°-E	1	東		南東	平安	III
B103	Bp-26・27	長方形	3.09	3.60	0.31	11.01	N-87°-E	1	東		南西	平安	III
B104	欠番												
B105	Br・s-27	長方形		4.40	0.31		N-7°-E			2		弥生	I
B106	Bq・r-29・30	長方形		5.78	0.44		N-7°-W	2	中東	2		弥生	I
B107	Bq-30・31	長方形	6.16	4.30	0.40	(27.76)	N-29°-W			2		弥生	I
B108	Bo・p-31・32	長方形	(7.20)	5.08	0.36	(35.12)	N-29°-W	1	北西	4		弥生	I
B109	Bm-29	長方形	3.66	4.44	0.30	16.14	N-76°-E	1	東		南東	奈良	III
B110	Bm-33・34	長方形	4.50	4.05	0.42	18.54	N-4°-W	2	北・東	7		平安	III
B111	Bp・q-26				0.33							縄文	I
B112	Bq-33・34			4.60	0.48							弥生	I
B113	Bq-33・34				0.34							弥生	I
B114	Bq-32・33				0.12							弥生	I
B115	Bo・p-35~37	長方形			0.62			1	南東	2	南西	弥生	I
B116	Bm・n-28・29	隅丸長方形	4.76	4.20	0.73	16.06	N-10°-W	1	中北	4		弥生	I

第4章 出土遺物

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
B117	Bn・o-36	正方形	3.15	3.36	0.12	(10.50)	N-94°-E	1	東		北西	平安	III
B118	Bo-39				0.75							弥生	I
B119	欠番												
B120	Bm・o-29	長方形	(4.60)	3.24	0.26	(16.20)						縄文	I
B121	Bq-32	不正円形			0.44							縄文	I
B122	Bn-30・31	長方形	4.90	3.60	0.15	16.10	N-2°-W					縄文	I
B123	Bm-35							1	北				III
B124	Bn・o-26							1				縄文	I
B125	Bi・j-27	長方形	2.85	3.96	0.26	11.13	N-79°-E	1	東			平安	III
B126	Bk-29	正方形	3.90	3.75	0.20	13.33	N-73°-E	1	東		南東	平安	III
B127	Bi-30・31	長方形	3.06	4.40	0.36	13.04	N-86°-E	1	東			奈良	III
B128	Be-29・30							1	東			平安	III
B129	Bg・h-29・30	長方形	3.45	3.78	0.36	14.07	N-89°-E	1	東		南東	平安	III
B130	Bg-30・31	正方形	4.23	4.50	0.32	18.71	N-13°-W	1	北	5	南東	古墳	III
B131	Bg-31		?	4.00	0.22								III
B132	Be・f-28・29											弥生	I
B133	Bg-29	長方形	?	3.78	0.27		N-7°-W	1	北				III
B134	Bf・g-28・29	正方形	6.30	6.06	0.54	37.22	N-79°-E	2	北・東	4	北東	奈良	III
B135	Bg・h-28	長方形	4.71	5.80	0.36	(25.77)	N-86°-E	1	東			平安	III
B136	Bi・j-25・26	正方形	3.00	3.00	0.30	8.62	N-60°-E	1	東		南東	古墳	III
B137	Bj-25	長方形	3.15	4.20	0.18	12.51	N-78°-E	1	東			平安	III
B138	Bg-29	長方形	5.55	4.30	0.45	(23.90)	N-82°-E	1	東		南東	平安	III
B139	Bj・k-26	長方形	3.90	4.50	0.45	16.38	N-73°-E	1	東		南東	平安	III
B140	Bk・l-29・30	長方形	5.25	5.75	0.48	30.18	N-12°-W	1	北	6	北東	古墳	III
B141	Bk・l-28・29				0.50		N-79°-E	1	東		南東	奈良	III
B142	Bh・i-26・27	長方形	4.50	5.50	0.27	23.89	N-10°-W	1	北	5	北東	奈良	III
B143	Bl~n-20・21	長方形	7.35	6.87	0.30	49.81	N-9°-W	1	北	6		古墳	III
B144	Bk・l-20・21	長方形	4.02	3.36	0.40	12.98	N-11°-W	1	北			古墳	III
B145	Bg・h-26・27	正方形	5.79	5.49	0.45	30.03	N-4°-W	1	北	4	北東	奈良	III
B146	Bl-22	正方形	4.35	4.41	0.17	17.50	N-21°-W	1	北	4		古墳	III
B147	Bj・k-22・23	正方形	4.56	4.80	0.27	21.26	N-14°-W	1	北	5		古墳	III
B148	Bi・j-23~25	長方形	5.85	6.30	0.30	35.71	N-7°-W	1	北	4	南東	古墳	III
B149	Bi・j-27・28	正方形	5.10	4.98	0.33	26.17	N-10°-W	1	北			古墳	III
B150	Bi・j-30	長方形			0.33		N-20°-W	1	東	4		古墳	III
B151	Bd~f-29・30	長方形	6.30	8.70	0.62	(54.35)	N-95°-W	1	西	7		古墳	III
B152	Bk-24	長方形	3.63	4.60	0.17	17.08	N-102°-E	1	東		南東	平安	III
B153	Bn-23	正方形	3.69	3.45	0.25	12.20	N-100°-E	1	東		南東	平安	III
B154	Bm-22・23	正方形	5.43	5.10	0.38	26.68	N-14°-W	1	北	4	北東	古墳	III
B155	Bn-24	長方形	3.72	3.30	0.25	(11.13)	N-82°-W	1	東			平安	III
B156	Bm・n-24	正方形	3.42	3.36	0.30	10.26	N-93°-E	1	東		南東	平安	III
B157	Bn-21・22	長方形	3.51	4.41	0.12	14.96	N-85°-E	1	東		南東	平安	III
B158	Bl・m-26・27	長方形	6.80	6.30	0.24	41.30	N-4°-W	1	北	4	北東	古墳	III
B159	Bh-24	長方形	3.00	3.45	0.21	10.05	N-83°-E	1	東			古墳	III
B160	Bj-25	長方形	4.83	3.51	0.24	(15.86)	N-22°-W	1	北		北東	古墳	III
B161	Bj-23		?	5.19	0.10		N-4°-W						III
B162	Bo-23	正方形	4.70	4.50	0.30	(20.67)	N-19°-W	1	中北	2		弥生	I
B163	Bl-23・24	正方形	4.65	4.80	0.42	22.04	N-24°-W	1	北	4	北東	古墳	III
B164	Bk-23・24	隅丸長方形	4.80	3.96	0.40	17.39	N-17°-W	1	中北	4	南東	弥生	I
B165	Bk-26・27	長方形	3.09	4.20	0.34	12.62	N-78°-E				南東	古墳	III
B166	Bi-30	長方形	3.92	3.04	0.11	11.59	N-39°-W	1	中西	5		縄文	I
B167	Bi-26・27	長方形	4.05	3.20	0.46	12.30	N-17°-W	1	北		北東	古墳	III
B168	Bd~f-29・30	隅丸長方形	8.40	6.00	0.77	42.80	N-12°-W	1	中北	4		弥生	I
B169	Bo・n-21	長方形	4.80	4.35	0.40	19.65	N-9°-W	1	北		北東	奈良	III
B170	Bk-26	長方形	4.35	3.15	0.34	13.45	N-77°-E	1	東			古墳	III
B171	Bn-22・23	長方形	3.51	3.00	0.27	10.03	N-100°-E	1	東			奈良	III
B172	Bn・o-23	長方形	4.00	3.60	0.52	14.25	N-3°-W	1	北		北東	古墳	III
B173	Bm・n-24・25	長方形	5.28	3.96	0.27	20.34	N-96°-E					平安	III
B174	Bl~n-24~26	長方形	10.80	7.48	0.28	78.58	N-66°-W	3	南東・西	6		弥生	I
B175	Bj・k-25	長方形	3.45	3.06	0.26	(9.19)	N-18°-W	1	北			古墳	III
B176	Bk-24・25	長方形	6.15	7.05	0.33	(42.61)	N-15°-W			3	南東	古墳	III

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (m ²)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
B177	Bj-21・22	長方形	4.05	3.12	0.30	(13.28)	N-9°-W	1	北		北東	古墳	III
B178	Bh-i-24~26	長方形	7.92	6.60	0.62	48.36	N-8°-W	2	北・南西	4		弥生	I
B179	Bo-22	楕円形	5.58	5.08	0.34	(22.80)	N-87°-E	1	西			縄文	I
B180	Bg-29・30	正方形	4.02	4.17	0.42	(16.48)	N-27°-W	1	北	4	北東	奈良	III
B181	欠番												
B182	Bn-o-25	長方形	4.20	3.80	0.35	15.73	N-27°-W	1	北		南東	古墳	III
B183	Bn-25・26											縄文	I
B184	Bo-23			0.24				1	北西			縄文	I

C区

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (m ²)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
C1	Cg-35・36	不定方形	2.60	2.60	0.17	6.50	N-77°-E		東			平安	IV
C2	Cg-h-36	隅丸長方形	8.00	4.84	0.43	36.46	N-5°-W	2	北・中西	4		弥生	V
C3	Cg-h-37	隅丸長方形	5.63	4.04	0.23	23.11	N-8°-E	2	北・中西	4		弥生	V
C4	Cc-41	隅丸長方形	3.65	3.03	0.25	11.62	N-72°-E		東			平安	IV
C5	Cb-c40	隅丸方形	5.50	5.00	0	27.50	N-70°-E		東			奈良	IV
C6	Cd-e-40・41	隅丸長方形	5.59	4.39	0.45	(39.86)	N-10°-W	1	北	2		弥生	V
C7	Cd-40・41	隅丸方形	5.50	5.23	0.64	28.37	N-13°-W		北	4	北東	古墳	IV
C8	Cb-40	隅丸方形	5.20	4.88	0.44	24.59	N-9°-W	1	北	3		弥生	V
C9	Bs-t-38・39	隅丸長方形	6.81	4.65	0.35	29.63	N-12°-W	1	北	2		弥生	V
C10	Ce-f-39	隅丸長方形	6.12	4.55	0.45	26.74	N-9°-W	2	北・中西	2		弥生	V
C11	Ce-f-39・40	隅丸方形	5.02	4.62	0.26	22.28	N-9°-E		北	3		古墳	IV
C12	Cf-35	隅丸方形	3.90	3.59	0.48	13.81	N-22°-W		北	1	北東	古墳	IV
C13	Ce-f-36	隅丸長方形	4.87	3.37	0.30	16.28	N-20°-W	2	北・南東	3		弥生	V
C14	Bs-t-36・37	隅丸長方形	8.53	5.50	0.80	46.73	N-20°-W	1	北	3		弥生	V
C15	Bs-t-36・37	隅丸長方形	9.54	(5.98)	0.63	(54.77)	N-6°-W		北	3		弥生	V
C16	Cf-g-34	隅丸方形	5.60	5.41	0.17	29.26	N-0°		北	4		古墳	IV
C17	Ce-f-34	隅丸方形	5.17	4.86	0.24	24.32	N-11°-E	4	北東	4		古墳	IV
C18	Cg-h-33・34	隅丸長方形	8.62	5.25	0.30	38.64	N-71°-W	3	西・中東・東	3		弥生	V
C19	Ce-f-35・36	隅丸方形	4.72	4.57	0.24	(21.03)	N-4°-W		北			古墳	IV
C20	Ca-b-35	隅丸長方形	6.34	4.67	0.45	(29.95)	N-6°-W	1	北	3		弥生	V
C21	Cd-e-41	隅丸長方形	4.88	3.84	0.48	(17.07)	N-5°-W	3	北・中西2	3		弥生	V
C22	Bt-Ca-40・41	隅丸方形	8.90	7.40	0.60	65.86	N-23°-W	1	北	2		弥生	V
C23	Ca-40	不明					—					弥生	V
C24	Cf-33・34	隅丸方形	3.80	3.52	0.15	13.73	N-80°-E		東			平安	IV
C25	Ca-b-37・38	隅丸長方形	6.40	4.58	0.26	(28.46)	N-75°-E	1	北	2		弥生	V
C26	Cb-c-36・37	隅丸長方形	5.44	4.67	0.58	(24.97)	N-2°-W		北	4	北東	古墳	IV
C27	Cc-d-41	隅丸長方形	7.43	(6.40)	0.51	(45.20)	N-16°-W	1	北			弥生	V
C28	Cc-d-40・41	隅丸長方形	5.51	4.04	0.23	21.47	N-12°-W	2	北・中西	2		弥生	V
C29	Bt-Ca-35・36	隅丸方形	5.07	5.06	0.45	25.74	N-20°-W		北	4	北東	古墳	IV
C30	Cb-c-32	隅丸長方形	(7.50)	(5.00)	0.20	(37.50)	N-21°-W	2	中西			縄文	V
C31	Ce-f-35	隅丸長方形	5.26	(4.10)	0.50	(21.77)	N-10°-W	1	北東	3		弥生	V
C32	Cc-d-37	隅丸方形	4.94	4.88	0.27	22.89	N-8°-E		北	4	北東	古墳	IV
C33	Cb-c-38・39	隅丸長方形	5.70	4.58	0.51	26.46	N-2°-W	2	北・中西	4		弥生	V
C34	Ca-b-41・42	隅丸長方形	6.69	4.96	0.35	32.27	N-62°-W	1	西	4		弥生	V
C35	Cc-d-36	隅丸方形	5.41	5.11	0.41	27.14	N-87°-E		東	4	南東	古墳	IV
C36	Ce-f-41・42	隅丸方形	4.42	4.10	0.54	17.63	N-11°-W		北東	4	北東	奈良	IV
C37	Ce-42	不正円形	3.75	(2.75)	0.30	(10.82)	—					縄文	V
C38	Ce-f-42・43	隅丸長方形	7.84	5.28	0.56	(40.36)	N-18°-W	3	北・中西・北	4		弥生	V
C39	Ca-b-38・39	隅丸長方形	5.34	(4.43)	0.45	(23.07)	N-98°-W	1	南西			弥生	V
C40	Cd-42	隅丸方形	3.83	3.78	0.48	14.31	N-80°-E		東			古墳	IV
C41	Cb-31	隅丸長方形	2.92	2.88	0.23	8.49	N-80°-E		東		南東	平安	IV
C42	Cf-31	隅丸方形	5.00	4.97	0.40	24.41	N-14°-W		北	4	北東	古墳	IV
C43	Cb-c-35・36	隅丸方形	3.95	3.71	0.53	14.77	N-14°-W		北	4	北東	古墳	IV
C44	Cb-c-37	隅丸長方形	5.50	4.63	0.43	(25.85)	N-0°	2	北・中西	2		弥生	V
C45	Bs-35・36	不明	4.86		0.67		N-15°-W		北	(2)	北東	古墳	IV
C46	Cc-28	隅丸長方形	(2.00)	4.84	0.30	(36.58)	N-90°-W	2	中・中西	1		弥生	V
C47	Cc-d-38・39	隅丸長方形	6.72	4.91	0.53	31.67	N-25°-W	1	北	4		弥生	V

第4章 出土遺物

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
C48	Ca・b-30	隅丸方形	4.58	4.41	0.57	19.87	N-4°-W		北	3	北東	古墳	IV
C49	Ca・b-34・35	隅丸方形	4.54	4.10	0.83	18.85	N-30°-W		北	4	北東	古墳	IV
C50	Ca・b-34・35	隅丸長方形	6.48	5.55	0.75	(35.74)	N-2°-E	2	北・中東	4		弥生	V
C51	Cb-28・29	隅丸方形	4.69	4.21	0.50	19.33	N-10°-W		北	4	北東	古墳	IV
C52	Bt・Ca-33・34	隅丸長方形	(5.15)	5.56	0.36	(29.21)	N-1°-E	2	中・中	2		弥生	V
C53	Cd-38	隅丸長方形	5.80	4.75	0.35	(26.02)	N-23°-W	1	北	4		弥生	V
C54	Ca・b-38・39	隅丸長方形	(6.34)	5.23	0.45	(32.45)	N-10°-W	1	北	4		弥生	V
C55	Cc-34・35	隅丸長方形	4.50	3.00	0.55	(13.50)	N-81°-E		東		南東	古墳	IV
C56	Cc~e-35	隅丸長方形	7.15	4.81	0.46	(35.49)	N-22°-W	1	北			弥生	V
C57	Cb・c-31・32	隅丸長方形	6.38	4.87	0.67	30.23	N-17°-W	2	北・北			弥生	V
C58	Ca・b-32	隅丸方形	3.26	2.75	0.23	8.86	N-70°-E		東		南東	古墳	IV
C59	Ci・j-34・35	隅丸長方形	6.68	4.56	0.52	29.28	N-21°-W	2	北・中東			弥生	V
C60	Ci-33	隅丸長方形	4.70	3.29	0.11	15.52	N-83°-W	1	西			弥生	V
C61	Cg・h-31・32	隅丸方形	4.64	4.62		21.24	N-24°-W		北			古墳	IV
C62	Ch~j-31・32	隅丸方形	8.00	7.78	0.26	(45.17)	N-4°-W		北	4	北東	古墳	IV
C63	Cg・h-30・31	隅丸方形	4.79	4.74	0.34	22.61	N-18°-W		北	4	北東	古墳	IV
C64	Cg・h-33	隅丸長方形	6.70	4.55	0.33	(30.92)	N-11°-W	1	北			弥生	V
C65	Ca-31・32	隅丸長方形	(5.60)	4.01	0.38	(21.42)	N-9°-W	2	北・中東			弥生	V
C66	欠番												
C67	Cf・g-32・33	隅丸方形	4.82	4.73	0.36	(22.06)	N-7°-W		北	4	北東	古墳	IV
C68	Cg・h-31・32	隅丸長方形	8.50	5.81	0.37	(48.28)	N-7°-E	2	北・北			弥生	V
C69	Cg・f-32	隅丸方形	3.67	3.44	0.33	12.36	N-77°-E		東		南東	平安	IV
C70	Cf-29・30	隅丸方形	5.37	4.88	1.45	25.75	N-86°-E		東	4	南東	古墳	IV
C71	Ce・f-30	隅丸長方形	6.64	4.23	0.43	(26.29)	N-1°-E	2	中西・北	5		弥生	V
C72	Cj・k-33・34	隅丸長方形	8.00	6.74	0.30	(52.46)	N-28°-W	1	北	2		弥生	V
C73	Ce・f-32・33	隅丸長方形	(8.60)	5.88	0.20	(54.70)	N-3°-W	2	北・中西	3		弥生	V
C74	Ca・b-28	不明	5.78	(1.50)	0.25	(7.96)	N-20°-W		北			古墳	IV
C75	Ca・b-29・30	隅丸長方形	6.89	4.84	0.42	(33.74)	N-90°-W	1	西	5		弥生	V
C76	Bt・Ca-33	隅丸長方形	(3.25)	3.98	0.85	12.44	N-15°-W	1	北	2		弥生	V
C77	Ch・i-34・35	隅丸方形	5.54	(4.78)	0.34	(23.96)	N-11°-E					縄文	V
C78	Cb-29・30	隅丸方形	3.72	3.13	0.53	11.33	N-4°-W		北		北東	古墳	IV
C79	Ca・b-30	隅丸長方形	(7.11)	5.11	0.52	(45.28)	N-33°-W	2	北			縄文	V
C80	Cb~d-29・30	隅丸長方形	11.00	8.50	0.61	93.50	N-4°-W	3	北・中・南東	5		弥生	V
C81	Cb-27・28	不明	(2.85)	5.30	0.97	13.54	N-14°-W	1	北			弥生	V
C82	Bt-31・32	不明	(1.13)	4.85	0.85	4.34	N-80°-E					弥生	V
C83	Bt-32	不明	(2.43)	(2.40)	0.31	(5.98)	N-2°-E	1	中東			弥生	V
C84	Cb・c-33	隅丸方形	4.44	(4.41)	0.49	19.34	N-16°-W		北	4	北東	古墳	IV
C85	Cb・c-33	隅丸方形	4.70	4.42	2.90	20.61	N-4°-W		北	4	北東	古墳	IV
C86	Ca・b-32・33	隅丸長方形	7.52	5.72	0.51	42.75	N-45°-W	3	中・北・中東	4		弥生	V
C87	Cb-28	不明	(2.45)	(2.45)	0.21	(5.52)	—					弥生	V
C88	Cb・c-35・36	隅丸長方形	(6.70)	(5.12)		(35.28)	N-13°-W	1	中			縄文	V
C89	Cb-38	不明			0.45		—					縄文	V
C90	Cg・h-40・41	隅丸方形	4.82	4.42		21.32	N-66°-E		東			平安	IV
C91	Cc・d-33	隅丸長方形	4.42	3.80	0.42	16.00	N-104°-W	1	中西	3		弥生	V
C92	Cc・d-32	隅丸方形	5.08	5.00	0.57	24.49	N-13°-W		北	4	北東	古墳	IV
C93	Cb・c-27・28	隅丸長方形	4.47	3.62	0.31	(15.89)	N-65°-W	1	中	2		弥生	V
C94	Cd・e-28・29	隅丸方形	6.30	5.74	0.57	(36.69)	N-81°-E	2	中西・中東	4		弥生	V
C95	Cg-30	隅丸長方形	(6.45)	5.32	0.37	(43.56)	N-13°-W	1	北	2		弥生	V
C96	Ca-31	円形	(2.80)		0.13	(5.03)	—					縄文	V
C97	Cd-31	隅丸長方形	(4.31)	3.09	0.23	(13.54)	N-89°-W	1	西	4		弥生	V
C98	Ce・f-28・29	隅丸方形	4.34	4.24	0.42	17.68	N-23°-W		北	4	北東	古墳	IV
C99	Cg-31	隅丸長方形		2.70	0.10		N-78°-E			3		古墳	IV
C100	Ca-32~34	不明				—	—					縄文	V
C101	Cb-28	不明				—	—					縄文	V
C102	Bt・Ca-41・42	不明	5.13	(4.40)	0.61	(25.46)	N-66°-E		東			平安	IV
C103	Ca・b-42	不明	(4.15)	(3.50)	0.20	(13.06)	—					平安	IV
C104	Br・S-40	隅丸長方形	7.30	5.19	0.72	35.99	N-17°-W	2	北・南東			弥生	V
C105	Cd-34・35	隅丸長方形	4.56	3.25	0.36	14.78	N-0°		北		北東	古墳	IV
C106	Cd-34・35	隅丸方形	5.98	5.46	0.45	32.03	N-9°-W		北	4	北東	古墳	IV
C107	Ca・b-42	不明	2.83			2.86	N-68°-E		東			平安	IV

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
C108	Cd・e-31・32	隅丸方形	6.28	6.11	0.45	(38.18)	N-13°-E	2	北	4		弥生	V
C109	Cc-43	不明	2.68			(4.52)	N-56°-E		東			奈良	IV
C110	Cb-42・43	不明	3.11	0.30			N-73°-E		東			平安	IV
C111	Bt-41	不明	3.46	0.58			N-57°-E		東			古墳	IV
C112	Cd-39・40	隅丸方形	2.78	2.56	0.07	6.72	N-93°-E		東			平安	IV
C113	Ca-42	不明			0.17					1		平安	IV
C114	Ce-34・35	不明	(3.40)	4.93	0.31	(22.63)	N-6°-E	1	北	2		弥生	V
C115	Ce-32	不明					—					縄文	V
C116	Cd・e-44	隅丸長方形	8.51	0.63			N-12°-W	1	北・東	1		弥生	V
C117	欠番												
C118	Cc・d-30・31	隅丸長方形	5.18	0.35			N-8°-W					縄文	V
C119	Cb・c-42・43	隅丸長方形	5.12	3.56	0.35	17.72	N-31°-W					平安	IV
C120	Cr-50・51	隅丸長方形	5.20	3.51	0.33	17.98	N-0°		北			奈良	IV
C121	Co・p-50	隅丸方形	4.84	4.55	0.32	21.03	N-88°-E		東		南東	平安	IV
C122	Co・p-49	隅丸方形	4.53	3.63	0.48	16.22	N-90°-E		東			平安	IV
C123	Cm-48・49	隅丸方形	4.43	4.11	0.25	18.34	N-91°-E		東			平安	IV
C124	Ci-45	隅丸方形	4.75	4.50	0.20	20.36	N-25°-W		北		北東	古墳	IV
C125	Cn・o-49・50	隅丸方形	5.31	4.64	0.20	24.17	N-78°-E		東			平安	IV
C126	Ch-46	不明	3.29	0.30			N-6°-W		北			奈良	IV
C127	Cl・m-46・47	隅丸方形	5.75	5.44	0.36	31.28	N-79°-E		東	3	南東	古墳	IV
C128	Ck-48	不明	4.12	0.46			N-18°-W		北	2	北東	古墳	IV
C129	Co-48	隅丸長方形	5.83	5.00		29.11	N-3°-E		北	4	北東	古墳	IV
C130	Cp・q-51	隅丸方形	4.97	0.39			N-19°-W		北西	3	北	奈良	IV
C131	Cp-51	不明	4.86	0.51			N-25°-W				北	古墳	IV
C132	Ci・j-47	隅丸方形	4.08	0.14			N-7°-W		北	1	北	古墳	IV
C133	Cj・k-46	隅丸方形	4.20	3.27	0.36	13.93	N-91°-E		東			平安	IV
C134	Co-48	隅丸方形	3.37	2.71	0.28	8.84	N-29°-W		北西			平安	IV
C135	欠番												
C136	Ch・i-45・46	隅丸方形	3.61	2.76	0.27	10.35	N-8°-W		北			奈良	IV
C137	Cl・m-47・48	隅丸方形	5.20	4.80	0.30	(25.37)	N-17°-W		北西	4	北東	古墳	IV
C138	Cm・n-48・49	隅丸方形	3.80	3.90	0.22	(14.43)	N-8°-W		北			古墳	IV
C139	Co-49	不明	3.20	0.25			N-94°-E		東			不明	IV
C140	Cj-45・46	不明					N-91°-E		東			不明	IV
C141	Ci・J-46	140と同一	6.80	6.35	0.27	(30.37)	N-0°					古墳	IV
C142	Cm・n-48・49	不明			0.27		N-75°-E		東			平安	IV
C143	Cp-49	不明	(3.70)	(3.00)	0.08	(12.63)	N-75°-E		東			不明	IV
C144	Ch-46	不明							北			不明	IV
C145	Cq・r-51	隅丸方形	4.69	4.20	0.23	(20.17)	N-16°-W		北	4	北東	古墳	IV
C146	Ct-52・53	不明	4.73	0.19			N-85°-E		東	2	南東	古墳	IV
C147	Cp・q-49・50	不明	5.92	4.55	0.28	(26.61)	N-15°-W		北			奈良	IV
C148	Cm・n-49	隅丸長方形	(5.00)	(3.50)	0.40	(26.55)	N-32°-W					弥生	V
C149	Ct・Da-51・52	隅丸長方形	(4.50)	3.95	0.23	17.75	N-30°-W	1	北	3		弥生	V
C150	Cn-34	不明	(0.41)	0.45								弥生	V
C151	Ck・l-47・48	不明	(6.00)	(6.00)		36.00						平安	IV
C152	Cr-50・51	円形	4.53	4.20	0.39	15.40	—	2	中・中			縄文	V
C153	Cq-49	隅丸長方形	4.34	3.33	0.26	(14.75)	N-16°-W		北	4	北東	奈良	IV
C154	Cp-49・50	隅丸方形	5.54	5.41	0.38	29.45	N-8°-W		北			古墳	IV
C155	Ct-41・42	隅丸長方形	4.18	3.06	0.25	12.16	N-12°-W		北	4		奈良	IV
C156	Ct-39・40	隅丸方形	4.77	4.45	0.41	21.06	N-10°-W		北	4		奈良	IV
C157	Cr・s-40・41	隅丸方形	4.48	4.20	0.46	18.54	N-11°-W		北	4	北東	奈良	IV
C158	Cr・s-43	隅丸長方形	4.75	3.74	0.41	18.58	N-85°-E		東	4	南東	奈良	IV
C159	Cs・t-42	隅丸方形	5.43	4.73	0.52	(24.83)	N-8°-W		北	4	西東	古墳	IV
C160	Ce-44・45	不明	5.32	0.82			N-12°-W		北	4	北東	古墳	IV
C161	Cb-43	不明	3.62				N-42°-W				北東	平安	IV
C162	Cd・e-36・37	不明	5.96	(3.50)	0.24	(20.86)	N-1°-W		北・北	(2)		古墳	IV
C163	Ce-36・37	隅丸長方形	5.82	4.43	0.40	25.40	N-3°-W	1	北	4		弥生	V
C164	Cf・g-33・34	隅丸長方形	(8.52)	(5.35)	0.20	(43.71)	N-6°-E	1	北	4		弥生	V
C165	Cc・d-32・33	隅丸長方形	(4.80)	3.85	0.10	(19.36)	N-30°-W					縄文	V
C166	Cd-32・33	隅丸長方形		(2.83)	0.10		N-7°-E			2		弥生	V
C167	Ch-45	隅丸方形	3.08	2.89	0.20	8.71	N-161°-E		南			平安	IV

第4章 出土遺物

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
C168	Cg・h-45	隅丸長方形	3.73	2.99	0.40	10.97	N-6°-W		北			奈良	IV
C169	Cg-32	不明			0.20	—	—					縄文	V
C170	Cf-44・45	柄鏡形	(3.50)	3.65		(8.85)	N-20°-W					縄文	V
C171	Cf-43・44	隅丸方形	4.15	4.03	0.51	16.42	N-5°-W		北		北東	奈良	IV
C172	Cc・d-43	円形	4.20	(3.00)	0.32	(12.60)	—					縄文	V
C173	Cf-44・45	隅丸長方形	(5.20)	(3.95)	0.30	(22.71)	N-12°-W	1	北	3		弥生	V
C174	Cf-31	不明				—	—					縄文	V
C175	Cg-41・42	隅丸方形	3.61	3.12	0.21	11.06	N-83°-E		東			平安	IV
C176	Cg-44	円形				—	—					縄文	V
C177	Cg・h-44	隅丸方形	4.86	4.36	0.46	20.96	N-8°-W		北	3	北東	奈良	IV
C178	Cd・e-33	不明				—	N-8°-W					縄文	V
C179	Cf-28	不明			0.81							古墳	IV
C180	Cd・e-27・28	隅丸長方形	8.86	(6.40)	0.39	56.70	N-15°-W	3	南東・北・中	4		弥生	V
C181	Cc-27	不明			0.60		—					不明	IV
C182	Cf-28・29	隅丸長方形	(3.70)	3.46	0.25	(12.80)	N-81°-E					奈良	IV
C183	Cg・h-30	隅丸方形	4.17	3.77	0.23	15.64	N-72°-E	2	東		南東	平安	IV
C184	Ce・f-29・30	不明	4.57				N-95°-E		東			平安	IV
C185	Cd-27	隅丸長方形	6.18	5.05	0.47	(30.40)	N-13°-W	3	北・中西・北			弥生	V
C186	Cj・k-32	隅丸長方形	(3.50)	3.82	0.41	13.37	N-14°-W			2		弥生	V
C187	Cf-28・29	不明			0.05	—	—					弥生	V
C188	Cg・h-41・42	隅丸方形	5.19		0.25		N-81°-E	2	北東			平安	IV
C189	Cf・g-41	隅丸方形	(3.50)	(3.10)		(10.85)	N-93°-E		東			古墳	IV
C190	Cf・g-42・43	隅丸長方形	4.80	4.21	0.32	20.11	N-79°-E			1		平安	IV
C191	Ch-40	隅丸方形	3.72	3.14	0.18	11.73	N-17°-W		北		北東	奈良	IV
C192	Cf-41・42	隅丸方形	5.09	4.64	0.23	(22.46)	N-91°-E	1	東			弥生	V
C193	Cg・h-42	隅丸方形	4.05	4.30	0.26	(19.19)	N-6°-E		北			平安	IV
C194	Cd-26・27	不明				—	—	1	北			弥生	V
C195	Cg-43・44	隅丸方形	5.53	5.25	0.48	28.32	N-28°-W		北	3	北東	古墳	IV
C196	Ci・j-39・40	隅丸方形	4.77	4.75	0.18	22.03	N-17°-W		北	3	北東	奈良	IV
C197	Ch・i-31	隅丸長方形	(5.20)	(3.65)	0.25	(18.88)	N-4°-W					弥生	V
C198	Cf-29	隅丸長方形		3.63	0.20		N-88°-E					弥生	V
C199	Ci-30	不明				—	—					弥生	V
C200	Ck-32・33	隅丸長方形	6.39	(4.00)	0.41	(18.03)	N-0°	1	中西	2		弥生	V
C201	Cg-29	不明	4.00			(9.69)	N-16°-W	1	中			弥生	V
C202	Ch-30	不明			0.19	—	—					縄文	V
C203	Cf-29	不明		(3.82)	0.18	—	—					縄文	V
C204	Cj-31・32	不明			0.22	—	—					弥生	V
C205	Ci-31・32	隅丸長方形	5.47	4.80	0.21	29.81	N-8°-W	1	北	4		弥生	V
C206	Cj・k-32・33	隅丸長方形	(6.96)		0.12		N-13°-W					縄文	V
C207	Cf-28	不明			0.31	—	N-90°-W	1	北			弥生	V
C208	Ce-28・29	隅丸長方形	(3.37)	2.82	0.33	(9.21)	N-0°	1	北	2		弥生	V
C209	Cl-34・35	隅丸方形	2.80	2.90		8.37	N-78°-E		東	1	南東	奈良	IV
C210	Ck-35・36	隅丸方形	3.33	3.15		10.45	N-70°-E		東		南東	平安	IV
C211	Ck-37	隅丸方形	4.28	4.16	0.35	17.76	N-16°-W			1	北東	古墳	IV
C212	Ci-44・45	隅丸方形	3.42	3.38	0.18	11.35	N-5°-W		北			平安	IV
C213	Ch-44	不明			0.15	—	—					弥生	V
C214	Ci・j-41	隅丸方形	3.60	3.10	0.34	11.12	N-71°-E		東	4		平安	IV
C215	Ch-40	隅丸方形	4.92	4.27	0.18	(21.08)	N-4°-W		北			古墳	IV
C216	Cl-34	隅丸長方形	3.30	2.67	0.20	8.50	N-20°-W		北		北東	平安	IV
C217	Ck・l-35	隅丸長方形	3.40	2.40		(8.16)	N-9°-W					平安	IV
C218	Ck・l-35	不明		2.61	0.11		N-12°-W					弥生	V
C219	Cm・n-35	隅丸長方形	3.20	3.01	0.43	9.82	N-20°-W		北		北東	平安	IV
C220	Cm-37	隅丸方形	4.83	4.23	0.32	19.65	N-12°-W		北			平安	IV
C221	Cm・n-37	隅丸方形	3.30	3.25	0.23	10.58	N-15°-W		北			平安	IV
C222	Cg・h-43	隅丸方形	5.18	4.53	0.50	(23.28)	N-9°-W		北		北東	古墳	IV
C223	Cg-42・43	隅丸方形	2.54	(1.30)	0.19	(6.64)	N-21°-W		北			奈良	IV
C224	Ci-39・40	隅丸長方形	(5.63)	4.28	0.09	(23.72)	N-8°-W	1	北	3		弥生	V
C225	Ck・l-43・45	隅丸方形	5.60	5.41	0.22	30.41	N-16°-W	2	北・中西	4		弥生	V
C226	Cm・n-38	隅丸方形	4.26	4.16	0.11	17.09	N-18°-W					平安	IV
C227	Cn-40・41	隅丸長方形	(4.85)	4.18	0.39	(19.57)	N-1°-W	1	北	4		弥生	V

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (m ²)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
C228	Ci-j-41	隅丸長方形	4.13	3.20	0.17	(14.74)	N-70°-E	東		(3)		奈良	IV
C229	Ch-i-41・42	隅丸方形	4.88	4.48	0.14	21.73	N-15°-W	北		4		古墳	IV
C230	Ci-43・44	隅丸方形	4.69	4.31	0.50	20.00	N-28°-W	北		4	北東	古墳	IV
C231	Cl-m-35・36	隅丸長方形	5.88	5.20	0.42	29.00	N-4°-W	1 北		4		弥生	V
C232	Cl-34	隅丸長方形	4.38	3.83	0.23	16.00	N-85°-E	1 東		4		弥生	V
C233	Cm-n-34・35	隅丸方形	3.67	3.54	0.32	13.00	N-24°-W	北		4		古墳	IV
C234	Co-p-35・36	隅丸長方形	5.65	(4.00)	0.40	(25.00)	N-0°	1 北		6		弥生	V
C235	Cn-37・38	隅丸長方形	4.61	3.70	0.32	17.00	N-71°-E	東			南東	奈良	IV
C236	Ck-l-38	隅丸方形	4.12	3.89	0.15	16.00	N-75°-E	東			南東	平安	IV
C237	Ck-39・40	隅丸方形	3.72	3.46	0.10	12.00	N-113°-E	東				平安	IV
C238	Cn-o-35	不明	4.98	(4.50)	0.65	11.00	N-3°-E			(2)		平安	IV
C239	Ck-41	隅丸方形	3.03	2.88	0.35	8.00	N-78°-E	東			南東	古墳	IV
C240	Cl-41	隅丸方形	3.29	3.10	0.43	9.00	N-99°-W	1 西				弥生	V
C241	Cm-40・41	隅丸長方形	3.55	3.40	0.25	11.00	N-20°-W	北		2	北東	古墳	IV
C242	Cl-m-42	隅丸方形	5.11	4.52	0.21	22.87	N-28°-W	北		4	北東	古墳	IV
C243	Cl-m-43・44	隅丸方形	5.52	5.48	0.16	29.56	N-17°-W	北		4	北東	古墳	IV
C244	Ck-36	不明	4.14	(2.70)		(15.19)	N-90°-E	東				平安	IV
C245	Cn-34	不明			0.65		N-21°-W					古墳	IV
C246	Cj-k-37・38	隅丸長方形	6.43	(5.41)	0.16	(35.08)	N-18°-E					弥生	V
C247	Cj-41・42	隅丸長方形	5.12	3.78	0.24	(19.62)	N-23°-W	北			北東	平安	IV
C248	Ck-l-37・38	不明	4.82	(3.80)		(19.15)	N-63°-E	東				平安	IV
C249	Ck-41・42	隅丸方形	5.69	5.50	0.22	(31.04)	N-23°-W					古墳	IV
C250	Ck-l-38・39	隅丸方形	4.47	4.45	0.41	21.89	N-14°-W	北		4	北東	平安	IV
C251	Cl-40	隅丸方形	3.57	3.26	0.29	11.52	N-64°-E	東				平安	IV
C252	Cl-m-37・38	隅丸長方形	4.61	3.54	0.23	16.15	N-83°-E	東				平安	IV
C253	Cn-o-38・39	隅丸長方形	5.13	4.23	0.21	21.43	N-74°-E	東			南東	平安	IV
C254	Cn-39	隅丸正方形	3.42	3.34	0.25	11.52	N-2°-E	北			北東	古墳	IV
C255	Cn-40	隅丸方形	2.81	2.63	0.18	7.75	N-1°-W	北			北東	古墳	IV
C256	Cn-41・42	隅丸方形	5.18	4.95	0.40	25.12	N-10°-W	北		6	北東	古墳	IV
C257	Ck-40	隅丸長方形	4.23	3.17	0.56	13.89	N-21°-W	北		3	北東	古墳	IV
C258	Ck-42	隅丸方形	4.28	4.03	0.30	16.46	N-18°-W	北		4	北東	古墳	IV
C259	Cm-44・45	隅丸方形	2.98	2.96	0.30	8.85	N-71°-E	東				古墳	IV
C260	Cj-k-37・38	隅丸方形	5.26	(4.95)	0.23	(24.85)	N-35°-W	北		4	北東	古墳	IV
C261	Ch-42・43	隅丸長方形	8.39	(4.00)	0.34	(54.68)	N-13°-W	1 北		2		弥生	V
C262	Cj-43・44	隅丸方形	(5.58)	5.30	0.32	(28.92)	N-5°-W	1 北		3		弥生	V
C263	Cn-39	隅丸方形	(3.40)	3.20	0.15	(10.71)	N-5°-W					弥生	V
C264	Ck-l-40・41	不明	(2.61)	(1.20)		(7.06)	N-37°-W	北				古墳	IV
C265	Cp-q-39	隅丸長方形	5.30	3.81	0.20	21.26	N-11°-W	北			北東	奈良	IV
C266	Cq-36・37	不明	(3.50)	(2.50)		(6.00)						古墳	IV
C267	Cp-q-37	隅丸長方形	7.48	5.43	0.70	35.39	N-0°	4 北・中西2・東		4		弥生	V
C268	Cj-k-44	隅丸方形	3.93	3.71	0.06	14.32	N-72°-E	東			南東	平安	IV
C269	Ck-44・45	隅丸方形	4.26	4.18	0.28	16.89	N-11°-W	北		4	北東	古墳	IV
C270	Ck-l-39・40	隅丸長方形	6.82	5.84	0.36	(38.35)	N-3°-W	1 北		3		弥生	V
C271	Cj-45	不明	(4.60)	(4.50)	0.13	(20.33)	N-90°-E	東				奈良	IV
C272	Cj-k-45	不明					N-88°-E	東				平安	IV
C273	Ci-j-43	隅丸方形	2.45	(2.10)	0.17	(7.76)	N-3°-W	北				古墳	IV
C274	Cr-39	隅丸長方形	4.53	3.60	0.27	16.66	N-82°-E	2 北・東			南東	奈良	IV
C275	Co-p-41	隅丸方形	5.14	4.91	0.37	24.51	N-0°	1 北		4		弥生	V
C276	Cj-k-45	不明			0.30		N-78°-E	東				平安	IV
C277	Cm-n-42	隅丸長方形	5.77	(2.70)	0.37	(21.79)	N-5°-E			2		弥生	V
C278	Cl-42	隅丸長方形	(3.30)	(2.00)		(11.58)	N-58°-E	東				平安	IV
C279	Cn-37	不明					N-17°-W	北			北東	不明	IV
C280	Cm-n-37・38	不明	5.68	5.03	0.45	(30.38)	N-19°-W	北		4	北東	奈良	IV
C281	Cm-n-44	隅丸方形	3.90	3.53	0.14	13.21	N-15°-W	北				古墳	IV
C282	Cl-36・37	隅丸方形	4.70	4.27	0.33	20.80	N-15°-W	北				奈良	IV
C283	Cg-h-42	隅丸方形	5.66	5.28		29.33	N-12°-W	北				平安	IV
C284	Cr-38	隅丸長方形	3.90	3.18	0.37	12.04	N-76°-E	東			北東	古墳	IV
C285	Cl-38・39	不明					N-21°-W	北				古墳	IV
C286	Cm-n-44	不明					N-24°-W	北				平安	IV
C287	Cq-39・40	隅丸方形	5.42	4.75	0.39	26.00	N-3°-E	北		4	北東	古墳	IV

第4章 出土遺物

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (m ²)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
C288	Cj-k-45	隅丸長方形	6.22	4.67	0.23	(32.74)	N-13°-W	北		(2)	北東	古墳	IV
C289	Cq-39-40	隅丸方形	4.24	3.71	0.54	15.45	N-21°-W	北			北東	古墳	IV
C290	Cn-o-37-38	隅丸方形	3.65	3.25	0.40	12.03	N-23°-W	北			北東	古墳	IV
C291	Cm-38	隅丸方形	4.02	4.00	0.60	15.85	N-18°-W	北			北東	不明	IV
C292	Cj-45	不明	(3.44)	(2.00)	0.08	(14.42)	N-5°-W	北		(1)		古墳	IV
C293	Ck-45-46	不明					N-10°-W	北				不明	IV
C294	Cq-r-38	隅丸方形	4.86	4.75	0.45	22.14	N-22°-W	北		4	北東	古墳	IV
C295	Cr-s-38-39	隅丸長方形	4.66	3.33	0.53	15.53	N-10°-W	北		2	北東	古墳	IV
C296	Cm-37	不明	(4.00)	(3.42)	(0.10)	(14.36)	N-33°-W					奈良	IV
C297	Co-37-38	隅丸方形	4.00	3.72	0.23	(14.63)	N-98°-W	1	中西	3		弥生	V
C298	Ck-l-37	隅丸方形	4.20	(2.30)	0.40	(15.94)	N-16°-W	北				古墳	IV
C299	Cm-n-43-44	隅丸長方形	5.85	5.30	0.30	28.73	N-76°-E	東			南東	古墳	IV
C300	Co-p-39-40	隅丸長方形	8.48	6.32	0.73	52.38	N-0°	3	北・中西・北	4		弥生	V
C301	Cm-n-37	隅丸方形	3.38	3.04	0.30	9.95	N-34°-W	北				古墳	IV
C302	Cl-m-46	隅丸方形	4.57	4.52	0.12	20.17	N-86°-E	東			南東	平安	IV
C303	Cq-40-41	隅丸長方形	5.27	4.62	0.63	23.58	N-11°-W	2	北・西	4		弥生	V
C304	Cm-n-43	不明	5.24	(1.50)	0.10	(18.94)	N-0°				北東	古墳	IV
C305	Cp-q-42-43	隅丸方形	4.71	4.35	0.29	21.01	N-21°-W	北		4	北東	古墳	IV
C306	Cm-45-46	不明	4.55	4.15	0.17	(22.61)	N-5°-E	北			北東	奈良	IV
C307	Cm-47	隅丸方形	2.55	2.36	0.44	5.85	N-18°-W					古墳	IV
C308	Cr-s-42	隅丸方形	3.38	3.24	0.13	10.97	N-77°-E	東			南東	平安	IV
C309	Cp-47-48	隅丸方形	3.42	3.35	0.15	11.48	N-89°-E	東			南東	平安	IV
C310	Cr-s-48	隅丸方形	5.65	5.53	0.43	31.55	N-25°-W	北		4	北東	古墳	IV
C311	Cn-44-45	隅丸長方形	5.32	(4.76)	0.19	(24.67)	N-86°-E	東			南東	平安	IV
C312	Cl-37	隅丸方形	6.46	6.14	0.34	(39.52)	N-15°-W	北		4		奈良	IV
C313	Cp-43-44	隅丸長方形	4.34	3.67	0.07	(15.27)	N-79°-E	東			南東	平安	IV
C314	Cp-45-46	隅丸長方形	3.33	2.27		7.36	N-87°-E					平安	IV
C315	Cr-46	隅丸長方形	2.96	2.09	0.18	6.05	N-13°-W	北				平安	IV
C316	Co-p-43	隅丸長方形	4.90	4.63	0.50	22.67	N-4°-W	北		4	北東	古墳	IV
C317	Cm-n-45	隅丸方形	3.57	3.22	0.10	(10.85)	N-2°-W	北			北東	古墳	IV
C318	Cq-r-42	隅丸方形	4.87	4.70	0.53	22.18	N-5°-W	北		4	北東	古墳	IV
C319	Cp-44-45	隅丸方形	4.10	3.88	0.39	15.87	N-26°-W	北		4	北東	古墳	IV
C320	Cq-48	隅丸長方形	3.89	2.74	0.31	10.60	N-85°-E	東		4	南東	奈良	IV
C321	Cs-46-47	隅丸長方形	3.73	2.68	0.12	9.64	N-77°-E	東		4		平安	IV
C322	Cn-47-48	隅丸長方形	4.14	3.23	0.42	12.86	N-7°-W				北東	平安	IV
C323	Cs-39-40	隅丸方形	4.32	4.05	0.40	17.81	N-8°-W	北		4	北東	古墳	IV
C324	Ck-l-45-46	隅丸長方形	9.62	7.43	0.77	71.73	N-17°-W	3	北・中東・中西	4		弥生	V
C325	Cq-44	隅丸長方形	5.72	4.03	0.29	23.38	N-19°-W	北		4		奈良	IV
C326	Cr-41-42	隅丸方形	5.21	4.70	0.38	(25.52)	N-9°-W	北		(2)	北東	古墳	IV
C327	Cp-q-48-49	隅丸方形	3.38	3.14	0.28	10.42	N-9°-W	北		4	北東	古墳	IV
C328	Cp-44	隅丸方形か	3.10	(1.50)	0.12	(9.56)	N-11°-W	北				古墳	IV
C329	Cm-n-47	隅丸方形	4.80	4.55	0.25	22.13	N-9°-W	北		4	北東	古墳	IV
C330	Cq-r-44-45	隅丸方形	3.42	2.45	0.18	(11.69)	N-15°-W	北				平安	IV
C331	Cr-s-45-46	隅丸方形	4.07	3.90	0.47	15.69	N-19°-W	北		4	北東	古墳	IV
C332	Ct-39	隅丸長方形	(5.20)	4.44	0.46	(23.24)	N-21°-W					弥生	V
C333	Cs-t-43	隅丸方形	5.61	4.83	0.54	27.05	N-15°-W	北		4	北東	奈良	IV
C334	Co-46	隅丸方形	3.10	2.72	0.64	8.72	N-5°-E	北				古墳	IV
C335	Cr-44	隅丸方形	3.91	(3.00)	0.33	(15.07)	N-20°-W	北		1		平安	IV
C336	Cr-s-44-45	隅丸長方形	7.40	5.25	0.43	37.04	N-25°-E	2	北・中西	4		弥生	V
C337	Cs-t-45-46	隅丸方形	6.35	6.07	0.76	37.57	N-7°-W	北		4	北東	古墳	IV
C338	Cs-t-49	隅丸長方形	6.16	4.98	0.38	29.48	N-31°-W	1	北	4		弥生	V
C339	Cs-t-49	隅丸長方形	5.56	4.98	0.40	26.81	N-36°-W	1	北	4		弥生	V
C340	Cq-47	隅丸長方形	3.44	2.82	0.23	(9.36)	N-1°-W	北			北東	古墳	IV
C341	Co-45	隅丸方形	3.85	3.38	0.54	12.58	N-65°-E	東		4	南東	平安	IV
C342	Cq-44	隅丸方形	3.26	3.23	(0.10)	10.71	N-72°-E	東			南東	平安	IV
C343	Co-47	隅丸方形	4.37	4.28	0.55	19.01	N-1°-E	北		4	北東	古墳	IV
C344	Co-p-43-44	隅丸長方形	6.65	4.88	0.64	(32.29)	N-38°-W					弥生	V
C345	Cr-45-46	隅丸長方形	5.03	4.53	0.26	20.08	N-0°			4		弥生	V
C346	Cq-41-42	隅丸方形	4.69	4.59	0.45	21.24	N-13°-W	北		4	北東	古墳	IV
C347	Cs-t-40-41	隅丸長方形	7.03	4.92	0.54	(33.98)	N-8°-W	1	北	4		弥生	V

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
C348	Co-45・46	隅丸長方形	2.80	2.55	0.18	(7.71)	N-0°					古墳	IV
C349	Cn・o-46	隅丸方形	4.30	4.16	0.29	(17.33)	N-6°-W				北東	古墳	IV
C350	Cq-43	隅丸方形	3.26	(2.86)	0.11	(9.22)	N-17°-W					平安	IV
C351	Cq・r-47・48	隅丸方形	5.96	5.57	0.42	(32.86)	N-6°-E		北	4	北東	古墳	IV
C352	Cq・r-45・46	隅丸方形	6.76	6.20	0.52	38.37	N-0°		北	4	北東	古墳	IV
C353	Cp・q-45	隅丸長方形	6.36	4.95	0.53	30.64	N-0°	1	北	4		弥生	V
C354	Cp・q-47	隅丸長方形	(6.58)	(5.59)	0.53	(36.46)	N-17°-W	1	北	4		弥生	V
C355	Cr-43	隅丸方形	(3.47)	2.85	0.28	(10.02)	N-75°-E					古墳	IV
C356	Cn-46	隅丸長方形	4.60	3.05	0.36	13.84	N-5°-W		北	4	北東	奈良	IV
C357	Cq・r-42・43	隅丸方形	4.81	4.22	0.39	(20.40)	N-6°-W		北	4	北東	古墳	IV
C358	Cp・q-47・48	隅丸長方形	3.92	2.88	0.40	11.16	N-4°-W		北			古墳	IV
C359	Cr・s-42	不明	(3.00)	(2.00)	0.29	(6.00)	N-8°-E					古墳	IV
C360	Cq・r-45	隅丸長方形	3.77	(3.00)	0.20	(11.90)	N-10°-W		北			奈良	IV
C361	Cq-42・43	隅丸長方形	(6.02)	(4.50)	0.53	(32.52)	N-30°-W	1	北	4		弥生	V
C362	Cq・r-48・49	隅丸方形	4.03	3.84	0.50	14.00	N-11°-W		中央	4		縄文	V
C363	Ct・Da-48	柄鏡形	(6.70)	(2.40)		(23.18)	N-23°-W		中央			縄文	V
C364	Cn・o-46	隅丸方形	(5.40)	(5.30)	0.45	(28.04)	N-8°-W	1	北	6		弥生	V
C365	Ct-46	不明			0.22	—	—					弥生	V
C366	Cs・t-45・46	隅丸長方形				—	N-17°-W					弥生	V
C367	欠番												
C368	Ct-48	柄鏡形	(6.80)	(2.00)		(23.80)	N-15°-W		中央			縄文	V

DS区

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
DS1	Db-52・53	隅丸方形	3.35	3.40	0.26	11.40	N-0°			4	北東	古墳	VI
DS2	Dd・e-53~55	長方形	8.40	7.20	0.30	36.45	N-11°-W		北	4		弥生	VI
DS3	Dd・e-49・50	不正長方形	4.15	3.25	0.28	13.10	N-90°-E		東			平安	VI
DS4	De・f-54	円形	6.35	5.80	0.38	28.50			中央	5		縄文	VI
DS5	Db・c-50・51	方形	4.90	4.75	0.20	23.00	N-12°-W		北	4		古墳	VI
DS6	Da・b-54	隅丸長方形	4.00	3.40	0.12	13.60	N-0°		北			弥生	VI
DS7	Dd・e-50・51	正方形	(5.65)	5.50	0.17	30.40	N-6°-W		北	4	北東	古墳	VI
DS8	Dc-48・49	隅丸方形	4.70	(3.65)	0.24	17.60	N-80°-E		東			平安	VI
DS9	De-55・56	正方形	4.00	3.90	0.44	15.90	N-10°-E		北	4	北東	古墳	VI
DS10	Dd・e-54	正方形	5.20	5.12	0.40	12.00	N-8°-E		北	4		弥生	VI
DS11	Dg-55	不正長方形	3.75	3.00	0.40	10.50	N-0°		北			奈良	VI
DS12	Dh-55・56	隅丸長方形	4.10	(3.30)	0.48	13.20	N-80°-E		東			奈良	VI
DS13	Dh・i-53・54	隅丸長方形	5.82	4.70	0.44	19.63	N-46°-E		北			弥生	VI
DS14	Dh・i-52・53	隅丸長方形	3.75	2.85	0.28	10.80	N-5°-W		北		北東	古墳	VI
DS15	Dh-52	方形	2.55	2.20	0.16	5.80	N-20°-W		北			古墳	VI
DS16	Di-52	(小判型)	3.88	(3.52)	0.14	(16.20)			中央			縄文	VI
DS17	Dh・i-49・50	隅丸方形	3.30	3.20	0.22	9.90	N-90°-E		東		南東	奈良	VI
DS18	Df-51・52	隅丸長方形	4.95	(3.90)	0.18	19.70	N-4°-W		北			古墳	VI
DS19	Df・g-51・52	隅丸方形	(6.30)	(5.50)	0.11	(25.37)	N-7°-W		北			弥生	VI
DS20	Dg・h-49	隅丸方形	2.90	3.05	0.22	8.60	N-90°-E		東		西?	古墳	VI
DS21	Dc・d-55	(小判型)	6.75	(4.70)	0.40	(26.20)						縄文	VI
DS22	Dd・e-53	(小判型)	4.30	(3.62)	0.39	(12.80)						縄文	VI
DS23	Df-49・50	隅丸方形	3.30	3.10	0.30	10.80	N-0°		北			古墳	VI
DS24	Dh・i-48	隅丸方形	(4.25)	(4.10)	0.50	(17.50)	N-10°-W		北	3	北東	古墳	VI
DS25	Dh・i-47・48	長方形	7.00	4.80	0.45	(32.00)	N-0°		北	3	南西	弥生	VI
DS26	Dh-56・57	隅丸方形	4.45	(3.25)	0.36	14.10	N-5°-W		北	4	北東	古墳	VI
DS27	Di-52	方形										弥生	VI
DS28	Di-49・50	隅丸長方形	3.35	2.90	0.25	9.40	N-6°-W		北		北東	古墳	VI
DS29	Dh・i-49	隅丸長方形	5.30	4.50	0.50	12.40	N-13°-E		北	6		弥生	VI
DS30	欠番												
DS31	Dg-45	隅丸方形	3.80	3.70	0.34	13.20	N-91°-E	1	東			平安	VI
DS32	Dg・h-51	円形	4.03	3.60	0.20	11.70		1	中央			縄文	VI
DS33	Dg・h-51・52	小判形	8.00	6.52	0.20	(40.50)		1	北	8		縄文	VI
DS34	Dg・h-54・55	長方形	6.40	4.90	0.62	28.46	N-35°-W	1	北	4		弥生	VI

第4章 出土遺物

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (m ²)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
DS35	Df・g-55・56	小判形	6.40	(5.18)	0.30	(25.60)		1	北	8		縄文	VI
DS36	De・f-49・50	正方形	6.30	5.80	0.38	(35.80)	N-4°-?	1	北	4	北東	古墳	VI
DS37	Dg・h-46・47	長円形	6.05	4.95	0.18	23.10						縄文	VI
DS38	Dh・i-45・46	長方形	7.20	5.32	0.58	35.64	N-0°	1	北	4		弥生	VI
DS39	Dh・i-44・45	正方形	4.80	4.55	0.45	19.90	N-8°-W	1	北	4	北東	古墳	VI
DS40	Dg・h-45	隅丸方形	5.10	(4.90)	0.29	(24.70)	N-0°	1	北	4	北東	古墳	VI
DS41	Df・g-45・46	正方形	(3.80)	3.55	0.10	13.70	N-23°-W	1	北	3	北東	奈良	VI
DS42	欠番												
DS43	Df・g-44	隅丸長方形	4.40	4.05	0.30	17.80	N-89°-E	1	東	4		平安	VI
DS44	De・f-43・44	正方形	4.50	4.00	0.30	17.70	N-6°-W	1	北			奈良	VI
DS45	Da・b-53・54		(4.10)	(3.62)	0.14	(12.20)				1		縄文	VI
DS46	Di・j-44	隅丸方形	3.50	(1.00)	0.16							古墳	VI
DS47	Df・g-46・47	正方形	6.80	6.70	0.30	44.37	N-6°-W	1	北		北東	古墳	VI
DS48	Dg・h-56・57	(円形)	(5.80)	(5.50)	0.22	(25.20)		1	中央	3		縄文	VI
DS49	Dc-54	(長方形)						1	南西			縄文	VI
DS50	Dg・h-50・51		7.43	(6.76)		(39.50)		1	中央			縄文	VI
DS51	Dh-55・56	隅丸方形	5.30	5.00	0.58	(22.03)	N-28°-W	1	北	4	北東	古墳	VI
DS52	Dh-52	(長円形)	4.38	3.68	0.16	13.20		1	中央	3		縄文	VI
DS53	De・f-48	正方形	2.80	2.70	0.26	7.80	N-0°	1	北			古墳	VI
DS54	Dd-46	隅丸長方形	4.00	3.00	0.14	(9.95)	N-90°-E	1	東		北西	平安	VI
DS55	Dd・e-44・45	隅丸方形	3.80	2.90	0.33	11.02						奈良	VI
DS56	Dd・e-45	隅丸正方形	4.20	4.20	0.12	(17.70)	N-19°-W	1	北	6	北東	古墳	VI
DS57	Dd・e-44	方形	(4.00)	(2.50)	0.16	(10.00)	N-0°	1	北			平安	VI
DS58	Dd・e-44		(2.40)	2.10		(4.95)						古墳	VI
DS59	Dd-46・47	隅丸正方形	3.00	2.50	0.22	6.30	N-90°-E	1	東			奈良	VI
DS60	Dd・e-47	正方形	8.20	7.30	0.20	59.86	N-10°-E	1	北	4	南西	弥生	VI
DS61	欠番												
DS62	Dd-48・49	隅丸正方形	3.80	3.60	0.20	13.30	N-90°-E	1	東			平安	VI
DS63	Dc・d-49・50	隅丸長方形	5.20	4.80	0.34	16.63	N-14°-W	1	北	4		古墳	VI
DS64	De・f-47・48	台形	(3.20)	2.50	0.14	8.00	N-112°-E	1	東		東南	平安	VI
DS65	Dd・e-51・52	円形	(6.76)	(6.50)		(34.40)		1	北			縄文	VI
DS66	Dc-49・50	隅丸方形		(5.00)	0.22		N-12°-W			2		弥生	VI
DS67	De-48	正方形	3.90	3.50	0.44	16.17	N-0°	1	北	4	東南	古墳	VI
DS68	Df・g-49	円形	6.43	5.70	0.16	27.80		1	中央			縄文	VI
DS69	Dc・d-48	隅丸正方形	5.80	5.20	0.22	(18.27)	N-17°-W	1	北	4	北東	奈良	VI
DS70	De・f-50・51		8.05	8.02		48.90		1	中央			縄文	VI
DS71	Dh-43	隅丸方形	(2.70)		0.22							奈良	VI
DS72	Dh-44・45	隅丸方形	3.60	(3.30)	0.16	(11.21)						古墳	VI
DS73	Dh-44・45		6.00	6.00		28.89		1	中央			縄文	VI
DS74	欠番												
DS75	Df-44・45	正方形	3.40	3.20	0.13	9.77	N-90°-E	1	東			古墳	VI
DS76	Dd・e-49	隅丸方形	(7.40)		0.23		N-0°	1	北	4		弥生	VI
DS77	Df・g-46	隅丸方形	(4.00)	(3.40)		(13.60)	N-16°-W	1	北			古墳	VI
DS78	Df・g-49~51		7.65	7.42		(44.60)						縄文	VI
DS79	欠番												
DS80	Dd-43	隅丸方形	5.70		0.60		N-7°-W	1	北	2	北東	古墳	VI
DS81	De・f-44	隅丸方形	(3.70)		0.28							古墳	VI
DS82	Df・g-43	隅丸正方形	3.90	3.20	0.30	11.00	N-8°-W	1	北			古墳	VI
DS83	Dc・d-51	(円形)	5.10	5.00	0.50	(14.49)		1	中央	7		縄文	VI
DS84	Dc-48・49	長方形	4.30	3.00		12.90	N-10°-W					弥生	VI
DS85	欠番												
DS86	Df-42・43	隅丸長方形	5.10	5.00	0.50	(14.49)				2		奈良	VI
DS87	Dg・h-43	隅丸方形	(4.40)		0.18					2		平安	VI
DS88	Df-42・43	方形	(2.70)									平安	VI
DS89	Dc-48	隅丸方形	3.50	3.30		11.55	N-17°-W			1	北東	奈良	VI
DS90	Dg-43	隅丸長方形	7.25		0.50		N-2°-E	1	北	4	南西	弥生	VI
DS91	Dd-43	(隅丸方形)								2	北東	古墳	VI
DS92	De-44		5.19	(5.00)	0.08	(20.40)		1	中央			縄文	VI
DS93	De-43		6.22	(6.14)	0.14	(30.30)		1	中央			縄文	VI
DS94	Da・b-39・40	隅丸方形	4.90	(4.30)	0.30	(21.07)	N-0°	1	北	3		古墳	IV

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
DS95	Db-39・40	不明			0.43		N-4°-W			2		古墳	IV
DS96	Db-40・41	不明	4.45	(1.40)	0.40	(6.23)	N-66°-E			1	南東	古墳	IV
DS97	Db・c-42	隅丸方形	5.09	4.49	0.20	22.08	N-12°-W	1	北	4	北東	古墳	IV
DS98	Dc-45	不明	2.21	(0.75)	0.10	(1.65)	N-11°-W	1	東		南東	平安	IV
DS99	Db・c-44・45	隅丸長方形	5.38	(1.80)	0.12	10.13	N-90°-E			2		古墳	IV
DS100	Da-42・43	隅丸方形	4.72	4.57	0.20	21.05	N-79°-E	1	東	4	北東	古墳	IV
DS101	Da・b-44・45	隅丸方形	3.19	3.04	0.28	9.50	N-20°-W	1	北	4	北東	古墳	IV
DS102	Da-40・41	隅丸方形	3.37	2.29		9.75	N-73°-E	1	東			平安	IV
DS103	Ct・Da-47・48	隅丸長方形	7.53	5.34	0.58	40.37	N-12°-W	2	北・中東	4		弥生	V
DS104	Da・b-48	隅丸長方形	4.03	(2.60)	0.26	(9.62)	N-15°-W					古墳	IV
DS105	Db-42・43	隅丸長方形	3.97	2.57	0.18	(9.70)	N-78°-E					古墳	IV
DS106	Da・b-41	隅丸方形	4.53	4.27	0.42	19.39	N-16°-W	1	北	4	北東	古墳	IV
DS107	Ct・Da-46	隅丸方形	3.44	2.73	0.22	9.78	N-21°-W	1	北			古墳	IV
DS108	Da-50・51	不明	4.41	(2.00)	(0.20)	4.21						奈良	IV
DS109	Ct・Da-50	隅丸長方形	(3.00)	3.74	0.14	(11.70)	N-35°-W			2		弥生	V
DS110	Da-49・50	不明	(1.90)	(1.14)	0.26	(3.74)	—					弥生	V
DS111	Da・b-45・46	隅丸長方形	(9.72)	7.12	0.23	(64.29)	N-0°	2	北・中西	4		弥生	V
DS112	Da・b-41	隅丸長方形	5.80	4.82	0.45	27.12	N-12°-W			4		弥生	V

DN 区

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
DN1	Dm-57	隅丸長方形	3.00	2.90	0.35	8.70	N-84°-E	1	東			古墳	II
DN2	Do-57	隅丸正方形	4.00		0.20		N-6°-E	1	北	4	北東	奈良	II
DN3	Dr-58	隅丸長方形	3.60	3.34	0.30	12.02	N-78°-E	1	東			古墳	II
DN4	Dm-58	隅丸正方形?	6.20		0.45		N-76°-E	1	東	2	南東	古墳	II
DN5	Do-59	隅丸正方形?	4.34	4.04	0.35	17.05	N-9°-W	1	北		北東	奈良	II
DN6	Dp-59	隅丸正方形?	5.20		0.30		N-80°-E	2	北	4	南東	古墳	II
DN7	Dn-58		4.60		0.15		N-70°-E			4		古墳	II
DN8	Dq-58	隅丸正方形	3.86	3.80	0.30	14.67	N-11°-W	1	北	4?	北東	古墳	II
DN9	Dq-59	隅丸正方形	3.95		0.25		N-8°-E	1	北		北辺	古墳	II
DN10	Dp-57	隅丸正方形	4.00	3.54	0.25	14.16	N-11°-E	1	北		北東	奈良	II
DN11	Dp-57		2.88		0.05		N-90°-E	1	東		南東	奈良	II
DN12	DI-57		3.90		0.25		N-19°-W	1	北		北東	古墳	II
DN13	Dm-56	隅丸長方形	5.70	4.14	0.30	23.60	N-8°-W	1	北	4	北西	古墳	II
DN14	Dn-55	隅丸長方形	4.26	3.65	0.28	15.55	N-87°-W	1	東	3?	南東	奈良	II
DN15	Dn-55	隅丸長方形	4.62	3.66	0.30	16.91	N-68°-W	1	中西			古墳	II
DN16	Ds-59	隅丸長方形	(3.90)	3.30	0.20	(12.87)	N-13°-W	1	北		北東	古墳	II
DN17	欠番												
DN18	Dt-63		3.00		0.25		N-13°-W	1	北			古墳	II
DN19	Dr-62		3.00		0.30		N-24°-W	1	北			古墳	II
DN20	Dp-61		3.60		0.25		N-24°-W					平安	II
DN21	Do-61		5.60		0.50		N-24°-W					古墳	II
DN22	Dn-60		4.50		0.25		N-14°-W			2?		古墳	II
DN23	Dq-60		3.90		0.15		N-74°-E	1	東	1	南東	古墳	II
DN24	Dt-52	隅丸正方形	2.42	2.26	0.10	5.47	N-118°-E	1	東			平安	II
DN25	Dt-51	隅丸長方形	2.84	2.50	0.20	7.10	N-118°-E	1	東			平安	II
DN26	Ds-51	隅丸長方形	3.74	2.56	0.15	9.57	N-102°-E	1	東		南東	平安	II
DN27	Ds-49	隅丸正方形	2.70		0.20		N-90°-E	1	東			平安	II
DN28	Ds-49	隅丸長方形	4.88	3.60	0.25	17.57	N-9°-E					平安	II
DN29	Dt-50	隅丸長方形	4.80	3.30	0.45	15.84	N-81°-E	1	東		南東	平安	II
DN30	Dm-50		3.46		0.20		N-75°-W					平安	II
DN31	Ds-49				0.15		N-20°-E					平安	II
DN32	Dq-48				0.50		N-10°-E					平安	II
DN33	Ds-57	隅丸長方形	4.04	2.80	0.45	11.31	N-7°-W	1	北		北東	奈良	II
DN34	Dt-49				0.20		N-24°-E					平安	II
DN35	Do-58	隅丸正方形	3.48	3.36	0.50	11.69	N-14°-W	1	北		北西	古墳	II
DN36	Dm-53	隅丸長方形	5.70	4.20	0.35	23.94	N-26°-E	1	中北	4		古墳	II
DN37	Dn-50	隅丸長方形	3.30	2.60	0.08	8.58	N-117°-E	1	東		南東	平安	II

第4章 出土遺物

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
DN38	Dl-55		5.30	0.40			N-3°-W	1	北	2	北東	古墳	II

E区

住居番号	グリッド位置	形状	規模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位置				
E1	Ec-64	隅丸長方形	3.80	2.48	0.25	9.42	N-90°-E	1	東		竈右	平安	II
E2	Ec-64	隅丸長方形	4.84	3.66	0.60	17.71	N-38°-W	1	北		南東	古墳	II
E3	Ed-65	隅丸長方形	4.34	3.80	0.70	16.49	N-7°-W	1	北	2	北東	奈良	II
E4	Ed-64	隅丸正方形	2.48		0.50		N-27°-W	1	北			古墳	II
E5	Ea-63	隅丸長方形	4.76	3.80	0.60	18.09	N-28°-W	1	北		北東	奈良	II
E6	En-70	隅丸正方形	5.40	5.16	0.25	27.86	N-14°-E	1	北	4	北東	古墳	II
E7	Eo-67	隅丸長方形	4.10	3.30	0.35	13.53	N-11°-E	1	北		北東	古墳	II
E8	Ea-50	隅丸長方形?	7.14		0.40		N-8°-W			2		奈良	II
E9	Eo-69	隅丸長方形	4.30	3.55	0.35	15.27	N-18°-E	1	北	4?		古墳	II
E10	En-64	隅丸正方形	4.35	4.30	0.30	18.71	N-4°-E	1	北	4		古墳	II
E11	Em-62	隅丸長方形	6.85	5.80	0.25	39.73	N-90°-E			3	北東	古墳	II
E12	En-60	隅丸長方形	4.65	3.60	0.35	16.74	N-70°-E	1	東			平安	II
E13	En-59	隅丸長方形	4.20	2.55	0.05	10.71	N-85°-E	1	東			平安	II
E14	Eq-62	隅丸長方形	6.06	3.98	0.55	24.12	N-22°-W	1	北		北東	古墳	II
E15	Ek-63	隅丸正方形	5.20	5.14	0.40	26.73	N-13°-E	1	北	4		古墳	II
E16	Ej-63	隅丸長方形	(5.60)	4.36	0.20	(24.42)	N-92°-E	1	東		南東	平安	II
E17	Em-63	隅丸長方形	4.80	3.80	0.40	18.24	N-88°-E	2	北・東		南東	平安	II
E18	Eg-65	隅丸長方形	4.00	3.50	0.45	14.00	N-59°-E	1	東		南東	古墳	II
E19	Eo-61	隅丸長方形	3.70	3.20	0.25	11.84	N-110°-E	1	東			平安	II
E20	Ek-63	隅丸長方形	3.08	2.30	0.35	7.08	N-6°-E	1	北			奈良	II
E21	Eo-60	隅丸長方形	4.74	3.46	0.25	16.40	N-90°-E	1	東		南東	平安	II
E22	Em-56	柄鏡形	4.50		0.00		N-26°-W	1	中央			縄文	II
E23	En-58	隅丸長方形	4.30	3.58	0.20	15.39	N-4°-W	1	北	4	北東	奈良	II
E24	El-59	隅丸長方形	4.00	3.56	0.35	14.24	N-90°-E	1	東			平安	II
E25	Ek-60	菱形	3.30	3.20	0.20	10.56	N-96°-E	1	東		竈左	平安	II
E26	Ek-59	隅丸正方形	3.66	3.60	0.30	13.18	N-8°-E	1	北	4	北東	古墳	II
E27	Ek-61	隅丸正方形	6.30	6.20	0.10	39.06	N-60°-E				南東	平安	II
E28	Ej-61	隅丸長方形	6.32	4.46	0.15	28.19	N-80°-E	1	東	4		平安	II
E29	Em-59	隅丸長方形	3.06	2.54	0.35	7.77	N-90°-E	1	東		北東	古墳	II
E30	Em-59	隅丸長方形	3.76	3.24	0.30	12.18	N-95°-W	1	東		南東	奈良	II
E31	Em-59	隅丸長方形	4.82	4.10	0.45	19.76	N-56°-E	1	東	4	北東	古墳	II
E32	El-59	隅丸長方形	3.44	2.80	0.15	9.63	N-0°	1	東1・南西		北東	平安	II
E33	En-59	隅丸方形?	(2.30)		0.10		N-89°-E	1	東			平安	II
E34	Ec-51	隅丸方形	8.00		0.45		N-7°-E			2		古墳	II
E35	Ed-53	隅丸正方形	6.30	5.80	0.45	36.54	N-15°-E	1	北	4	北東	古墳	II
E36	Ec-52	隅丸方形			0.15		N-70°-E	1	東			平安	II
E37	Ed-50	隅丸方形?	3.80		0.40		N-7°-W					平安	II
E38A	Ec-53	隅丸正方形	3.42	(3.24)	0.30	(11.08)	N-93°-E	1	東			奈良	II
E38B	Ec-53		3.48		0.30		N-0°					奈良	II
E39	Eb-52	隅丸長方形	5.60	3.62	0.40	20.27	N-0°	2	北		南西	平安	II
E40	En-61	隅丸長方形	3.46	2.70	0.35	9.34	N-13°-W	1	北	4?		奈良	II
E41	Ee-53	隅丸方形?	2.70		0.05		N-5°-W						II
E42	Ed-52	隅丸正方形?	(3.50)		0.10		N-29°-E			4			II
E43	Ee-52				0.05		N-7°-W					平安	II
E44	Ec-54	隅丸正方形	3.28	3.22	0.15	10.56	N-84°-E	1	東			平安	II
E45	Ec-52	隅丸長方形	4.10	2.74	0.25	11.23	N-22°-W	1	北		北東	平安	II
E46	Em-56	円形	3.70		0.00			1	中央			縄文	II
E47	Ed-57	隅丸長方形?	5.70	(5.30)	0.00	(20.00)		1	中央	8		縄文	II
E48	Ea-50				0.20		N-104°-E			1?			II
E49	Eb-51	隅丸方形?	3.40		0.30		N-8°-W					古墳	II
E50	Ea-55	長円	4.35	3.50	0.15	12.20		1	中央			縄文	II
E51	Ec-55	隅丸長方形	4.14	3.34	0.25	13.83	N-13°-W	1	北	4	北東	古墳	II
E52A	Ea-51	隅丸正方形	(5.55)	5.32	0.40	(29.42)	N-74°-E			4	北東	古墳	II
E52B	Ea-52	隅丸正方形	(6.50)	(6.30)	0.40	(40.95)	N-70°-E			4	北東	古墳	II

第4節 石 器

住居番号	グリッド位置	形 状	規 模 (m)			面積 (㎡)	主軸方位	竈 (炉)		柱穴	貯蔵穴	時代	報告書
			長辺	短辺	壁高			数	位 置				
E53	Ef-55	長円形	6.46	5.00	0.08	25.36	N-37°-E	1	中東			縄文	II
E54	Ec-54	長円形	6.30	(5.00)	0.10	(14.73)		1	中央	3		縄文	II
E55	Eh-53	隅丸正方形	3.34	3.10	0.20	10.35	N-85°-E	1	東		南東	平安	II
E56	Eb-52	隅丸正方形	6.00	5.80	0.45	34.80	N-81°-E	1	東	4	北東	奈良	II
E57	Eg-53	楕円形	4.80	3.60	0.10	13.56		1	中東	4		縄文	II
E58	Eg-55	円形	4.85	4.65	0.10	17.71		1	中央	8		縄文	II
E59	Ef-55	不正円形	4.75	3.90	0.05	14.69		1	中北			縄文	II
E60	Ei-58	隅丸長方形	5.30	4.40	0.30	23.32	N-87°-E	1	東			平安	II
E61	Ee-62	隅丸正方形	3.80	3.46	0.30	13.15	N-11°-W	1	北		北東	奈良	II
E62	Ef-61	隅丸正方形	2.40	2.26	0.15	5.42	N-81°-E	1	東		北東		II
E63	Eg-62	隅丸長方形	4.70	4.08	0.35	19.18	N-3°-W	1	北	4	右袖	奈良	II
E64	Eb-51	隅丸正方形	3.32	3.04	0.10	10.10	N-89°-E	1	東			平安	II
E65	欠番												
E66	Eg-53				0.00			1	中央			縄文	II
E67	Ee-53	楕円形	7.64	6.00	0.10	35.98	N-77°-E	2	中央・中西			縄文	II
E68	Ef-54	円形	(5.84)	(5.52)	0.10	(25.31)		1	中央	(10)		縄文	II
E69	Eg-56	楕円形	2.90	2.10	0.15	4.78	N-18°-E	1	中央			縄文	II
E70	Ed-60	隅丸正方形	4.00	3.80	0.25	15.20	N-5°-W	1	北		北東	奈良	II
E71	Ef-58	隅丸長方形	4.40	3.20	0.35	14.08	N-3°-E	1	北	4	北東	奈良	II
E72	Eg-55	円形	4.50	4.10	0.25	14.48				8		縄文	II
E73	Eh-55	円形	4.70	(4.50)	0.10	(16.60)		1	中央	(11)		縄文	II
E74	Ef-56	不整円	2.65	2.60	0.15	5.39						縄文	II
E75	Ej-54				0.00			1	西			縄文	II
E76	Eh-56	楕円	3.60	3.00	0.30	8.48						縄文	II
E77	Eg-55	円形?			0.10							縄文	II
E78	Ef-52				0.00			1	北西			縄文	II

補遺編

本遺跡の古墳時代以降の遺構、遺物について報告を行った「南蛇井増光寺遺跡IV」古墳・奈良・平安時代編（1996年刊行）において記載すべき遺物のうち、不手際により記載できなかったものを補遺としてここに報告する。遺物は古墳時代以降に帰属するものであるが、弥生時代の遺構中より出土しているものもある。

「南蛇井増光寺遺跡IV」で各遺物の出土点数を報告してあるが、下記のとおり追加変更とする。（）内は追加後の数である。

- ・砥石26(28)点
- ・紡錘車4(15)点（土製6、鉄製1を含む）
- ・土錘4(60)点
- ・白玉4(32)点
- ・滑石片3(10)点である。

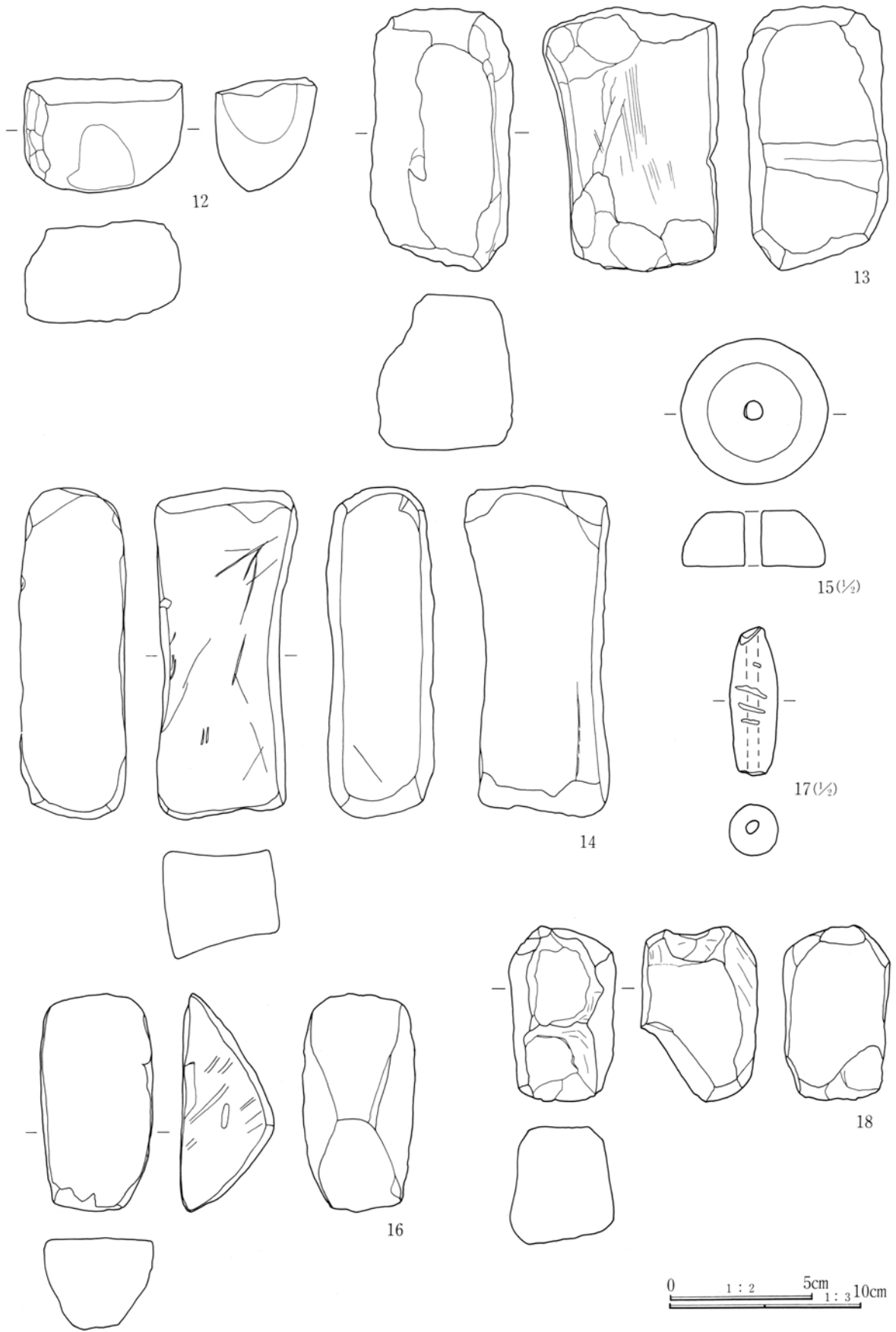
以下実測図、観察表、写真を記載し報告する。なお出土遺構等については「南蛇井増光寺遺跡IV」を併読していただきたい。

追加遺物観察表（第759～762図・PL. 329・330）

No	遺構	種類	計測値				石材
			長さ	幅	厚さ	重さ	
1	C50住	砥石	長さ 5.6cm	幅 3.7cm	厚さ 1.3cm	重さ 442g	砥沢石
2	C84住	白玉	長さ 2.0cm	幅 23cm	厚さ 0.9cm	重さ 5.3g	滑石
3	C158住	砥石	長さ 12.9cm	幅 8.8cm	厚さ 4.1cm	重さ 701g	砥沢石
4	C173住	砥石	長さ 6.2cm	幅 7.6cm	厚さ 3.3cm	重さ 233.6g	砥沢石
5	C175住	砥石	長さ 14.5cm	幅 5.7cm	厚さ 3.6cm	重さ 508.6g	砥沢石
6	C177住	砥石	長さ 8.5cm	幅 4.8cm	厚さ 5.2cm	重さ 252g	砥沢石
7	C183住	砥石	長さ 5.4cm	幅 5.0cm	厚さ 3.3cm	重さ 150g	砥沢石
8	C238住	砥石	長さ 7.3cm	幅 8.0cm	厚さ 3.2cm	重さ 266g	砥沢石
9	C241住	紡錘車	長さ 4.3cm	幅 4.3cm	厚さ 2.5cm	孔径 0.7cm 重さ 64.5g	蛇紋岩
10	C242住	滑石片	長さ 5.8cm	幅 4.0cm	厚さ 1.2cm	重さ 40.9g	滑石
11	C242住	滑石片	長さ 7.6cm	幅 6.0cm	厚さ 2.3cm	重さ 107.3g	滑石
12	C242住	砥石	長さ 5.8cm	幅 8.3cm	厚さ 5.3cm	重さ 347.5g	砥沢石
13	C249住	砥石	長さ 13.1cm	幅 9.1cm	厚さ 8.0cm	重さ 1310g	砥沢石
14	C257住	砥石	長さ 17.1cm	幅 6.7cm	厚さ 5.5cm	重さ 1000g	砥沢石
15	C257住	紡錘車	径 5.0cm	厚さ 1.9cm	孔径 0.6cm	重さ 68.2g	砥沢石
16	C260住	砥石	長さ 11.2cm	幅 5.8cm	厚さ 4.6cm	重さ 367.7g	砥沢石
17	C261住	土錘	長さ 5.2cm	幅 16.5cm	厚さ 1.75cm	重さ 12.5g	
18	C281住	砥石	長さ 9.1cm	幅 5.5cm	厚さ 5.8cm	重さ 400g	砥沢石
19	C284住	砥石	長さ 14.7cm	幅 8.9cm	厚さ 3.8cm	重さ 873.4g	砥沢石
20	C291住	紡錘車	径 3.7cm	厚さ 2.3cm	孔径 0.4cm	重さ 45.3g	砥沢石
21	C294住	白玉	長さ 1.3cm	幅 1.4cm	厚さ 1.1cm	重さ 3g	滑石
22	C307住	砥石	長さ 7.3cm	幅 11cm	厚さ 3.1cm	重さ 248.2g	砥沢石
23	C310住	紡錘車	長さ 3.9cm	幅 3.9cm	厚さ 1.4cm	孔径 0.6cm 重さ 28g	蛇紋岩
24	C318住	滑石片	長さ 10cm	幅 6.0cm	厚さ 1.4cm	重さ 97.2g	滑石
25	C318住	砥石	長さ 7.2cm	幅 3.8cm	厚さ 1.7cm	重さ 64.9g	砥沢石
26	C325住	砥石	長さ 8.5cm	幅 8.6cm	厚さ 3.2cm	重さ 337.8g	砥沢石
27	C329住	砥石	長さ 15.6cm	幅 5.9cm	厚さ 3.9cm	重さ 730g	砥沢石
28	C331住	砥石	長さ 8.9cm	幅 5.45cm	厚さ 3.9cm	重さ 326.9g	砥沢石
29	C338住	砥石	長さ 7.8cm	幅 6.1cm	厚さ 3.0cm	重さ 209g	砥沢石
30	C346住	砥石	長さ 10.4cm	幅 8.6cm	厚さ 4.0cm	重さ 364.6g	砥沢石
31	C357住	白玉	径 1.2cm	孔径 0.4cm	厚さ 0.9cm		滑石
32	C359住	白玉	径 1.3cm	孔径 0.25cm	厚さ 0.7cm		滑石
33	C103土	砥石	長さ 15.8cm	幅 7.2cm	厚さ 3.0cm	重さ 60.2g	砥沢石
34	C103土	砥石	長さ 18.7cm	幅 9.2cm	厚さ 3.5cm	重さ 943g	凝灰質砂岩
35	Cm-49G	土錘	長さ 5.4cm	幅 2.3cm	厚さ 2.1cm	孔径 0.45cm 重さ 19.3g	
36	Cm-49G	土錘	長さ 4.9cm	幅 1.9cm	厚さ 1.8cm	孔径 0.5cm 重さ 12.2g	
37	Cm-49G	土錘	長さ 4.2cm	幅 1.5cm	厚さ 1.5cm	孔径 0.3cm 重さ 9.6g	
38	表採	砥石	長さ 12.5cm	幅 6.7cm	厚さ 6.2cm	重さ 508.7g	砥沢石
39	試掘	砥石	長さ 7.7cm	幅 5.5cm	厚さ 2.8cm	重さ 157.5g	砥沢石



第759図 補遺(1)

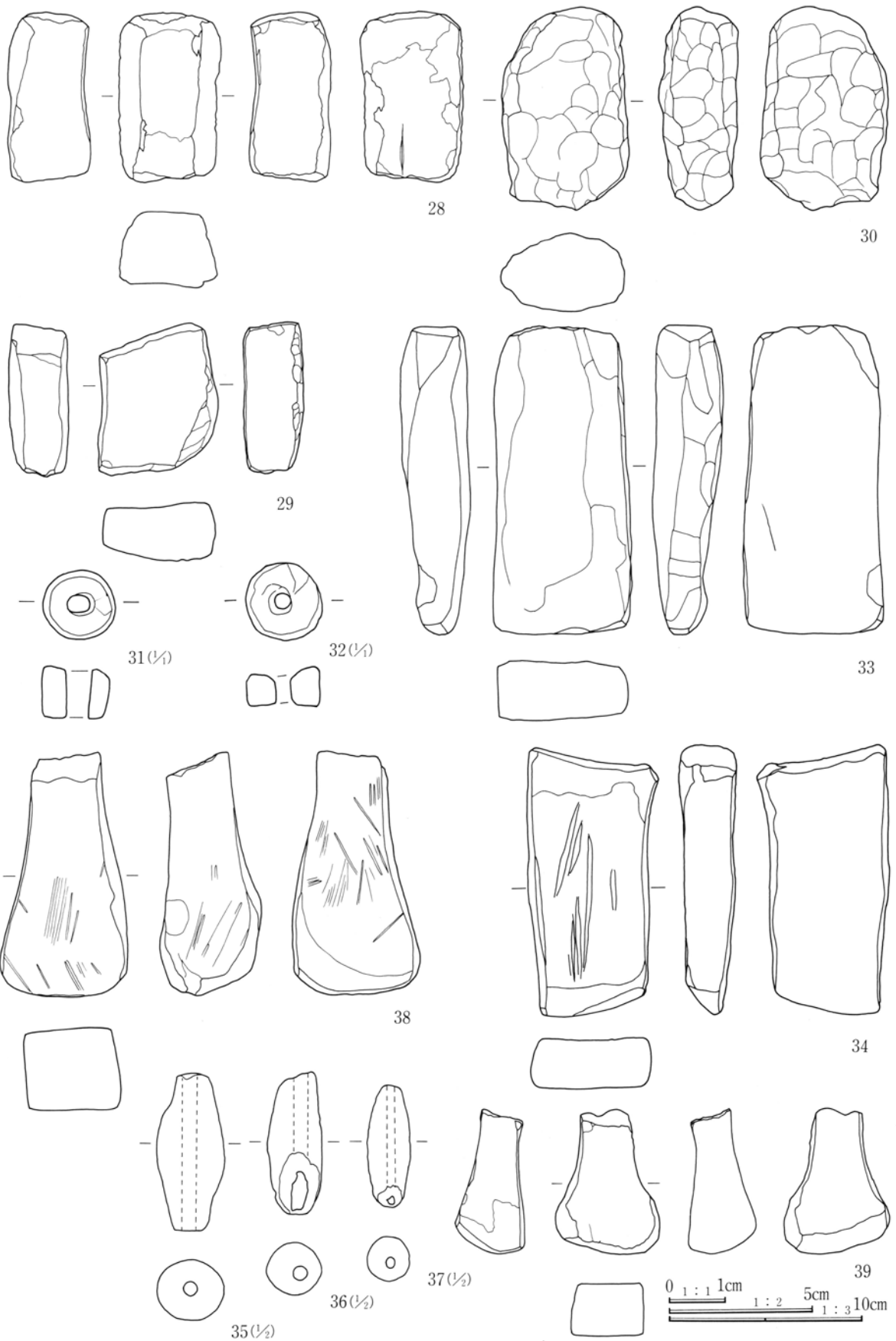


第760図 補遺(2)



第761図 補遺(3)

第4章 出土遺物



第762図 補遺(4)

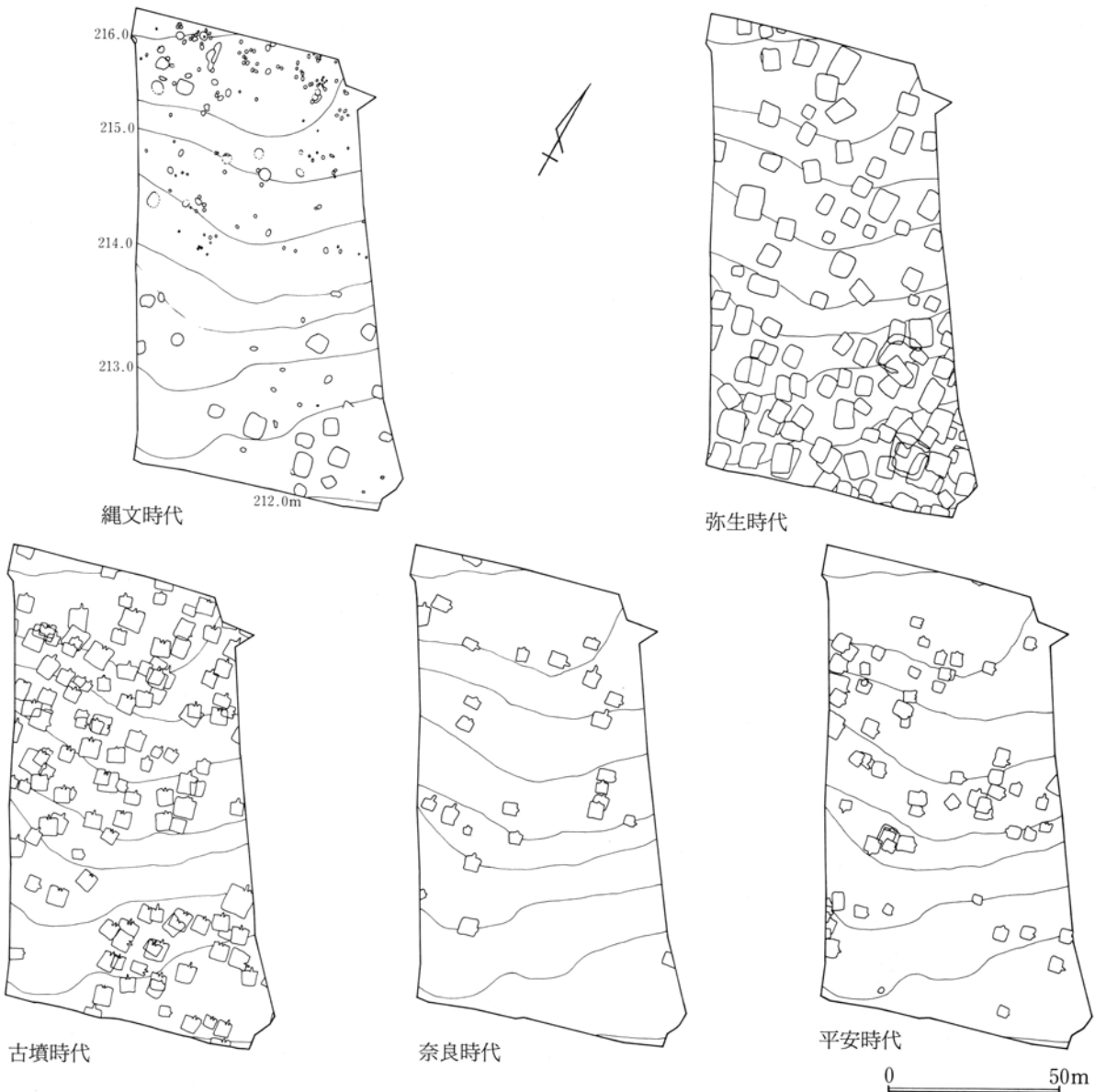
第5章 ま と め

第1節 縄文時代

1. C区の遺構変遷（縄文～平安時代）

C区（DS区の一部を含む）において検出した遺構は住居跡363軒、土坑263基、方形周溝墓2基、掘立柱建物跡6基、井戸1基、集石2基、配石5基、埋甕1基、古墓1基、溝9条にのぼり、縄文～近世にかけての遺構が多数、重複した状況で検出されている。

縄文時代の変遷については、後節で詳しく述べることとし、本項では、C区における縄文時代以降、平安時代までの遺構も含めて、各時代毎の遺構変遷（主に住居跡）の概観を述べることとする。なお、古墳時代以降の遺構・遺物についての詳細は「南蛇井増光寺遺跡Ⅳ」1996年を参照されたい。



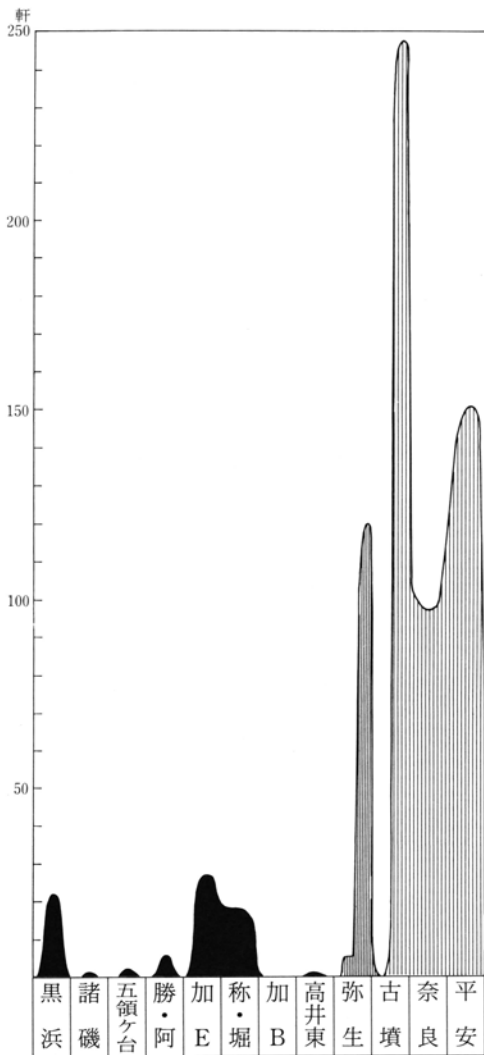
第763図 C区遺構変遷図（縄文～平安時代）

第5章 ま と め

第763図に見られるように、縄文時代のC区においては、前期中葉に南側部分において居住が開始され、以後断絶を持って、前期末以降1～3軒のわずかな住居が作られるのみで、後期に敷石住居等の出現を見て居住が行われなくなる。これに対して土坑は、前期においては住居の周辺に若干見られる程度であったものが、中期に入ると急増するが、逆に住居の数は減ってくる。さらに、後期に入り住居は見られなくなり、他の場所へその中心を移してしまう(第764図)。

弥生時代に入ると、前半から中期の遺構はほとんど見られないが、後期に入って多くの住居が作られるようになる。調査区内における分布を見ると、調査区南側に多く見られ、北側はやや少なくなっている。特に南側は住居どうしの切り合いも多く見られ、国道を挟んでB区に続いており、居住域の中心であったことが窺われる。また、遺構の最も濃密な部分において、弥生時代最終末の方形周溝墓2基を検出している。

古墳時代については、前半期の遺構は全く見られない。この状況は南蛇井増光寺遺跡全体を通して言え、周辺遺跡に目を向けると、中期の住居跡は中沢川を挟んだ北に位置する『中沢平賀界戸遺跡1996』で5軒、さらに北側の『前畑遺跡1992』において18軒が検出されている。C区においては古墳時代後半になり、再び多くの住居が作られ、同時期の住居は南のB区、北に続くDS・DN・E区においてもかなりの数が検出されて



第764図 住居数変遷グラフ

南蛇井古墳群『富岡市史1987』は、何段かの小段丘上に数10基の小円墳が分布している。発掘調査された何基かの古墳の時期は7世紀前後と推定されており、時期的に見ても南蛇井増光寺遺跡が同古墳群を作った人々の居住域であったものと思われる。奈良時代になると住居軒数は減少し、検出された住居は中央部分に環状に配列されているように見える。若干の重複もあり、同時存在していた住居の数は10軒程度と、かなり少なかったものと思われる。住居の規模を見ると、前代に見られた1辺6mを越えるような大形のものは見られなくなり、やや小型、平均化してくる。また、竈の作られる方向を見ると、東側に作られたものがかなり目立つように思われる。

さらに平安時代に入り、住居の軒数が再び増加するが、その分布を見ると、数軒が一つの単位を持って集まっていた状況が窺える。住居の規模は小型のものが多く、中にやや大形のものが見られる。竈の方向について見ると、北と東がほぼ半数見られるようである。

古墳時代から奈良時代、平安時代にかけての分別に関しては基本的に重複関係、出土土器から判断したが、3軒以上の重複もあり、明確には分けられなかったものもあった。このため今後の検討によっては若干の変動もあり得る。

中世以降の遺構として本区の北、DS・DN・E区において上幅約4m、深さ1.5m以上の大溝が「L」字形に検出されており、何らかの施設と考えられるが、性格は不明で、本区において検出した土坑、古墓などとの関連も明らかでない。

第5章 ま と め

本項では南蛇井増光寺遺跡（A～E区）における縄文時代の変遷を、検出した遺構を元に見て行くこととしたい。

南蛇井増光寺遺跡は第1章で述べた様に、南は鑄川の急崖で、北側は中沢川に挟まれた河岸段丘上に位置する遺跡である。調査区は幅約60mでやや右にカーブした長さ約400mの範囲である。標高は最も低い鑄川寄り約210m、最も高い北側のE区で219mとなり、全体的には徐々に北に高くなる地形で、北を区切る中沢川近くでやや下がる状況を示すが、見た目には比較的平坦な場所として映る。また、中沢川を隔てた北側に位置する中沢平賀界戸遺跡においては、中期加曾利E式期の住居跡1軒が検出されている（第765図）。

以下、縄文時代における南蛇井増光寺遺跡の遺構変遷を各時期毎に見て行きたい（第766図）。

時期区分については、次のようにVI期に分けて考えて行くこととしたい。ただし、時間的に各遺構の詳細な時期判別を行い得なかったこと、また出土土器等が見られず時期の判断ができなかった土坑等も多く、遺構数については若干の変動もあり得ることをあらかじめ含んでおいていただきたい。

- I期 前期前半～中葉（花積下層式期～黒浜式期）
- II期 前期後半～末（諸磯a式期～十三菩提式期）
- III期 中期中頭（五領ケ台式期）
- IV期 中期中葉（阿玉台・勝坂式期）
- V期 中期後半～末（加曾利E I式期～加曾利E IV式期）
- VI期 後期（称名寺式期～曾谷（高井東）式期）

南蛇井増光寺遺跡において人々の居住が開始されたのは、I期、縄文時代前期中葉（黒浜期）以降のことと、遺物は若干見られるものの、それ以前の遺構は検出されていない（第765図）。黒浜期の住居は国道を挟んだB区において10軒、C区において13軒が検出されており、遺跡を横切る国道254号線部分、東側末調査区部分を考えると30軒程度が存在していたものと思われ、おそらく10軒前後が同時存在していたのではないかと考えられる。

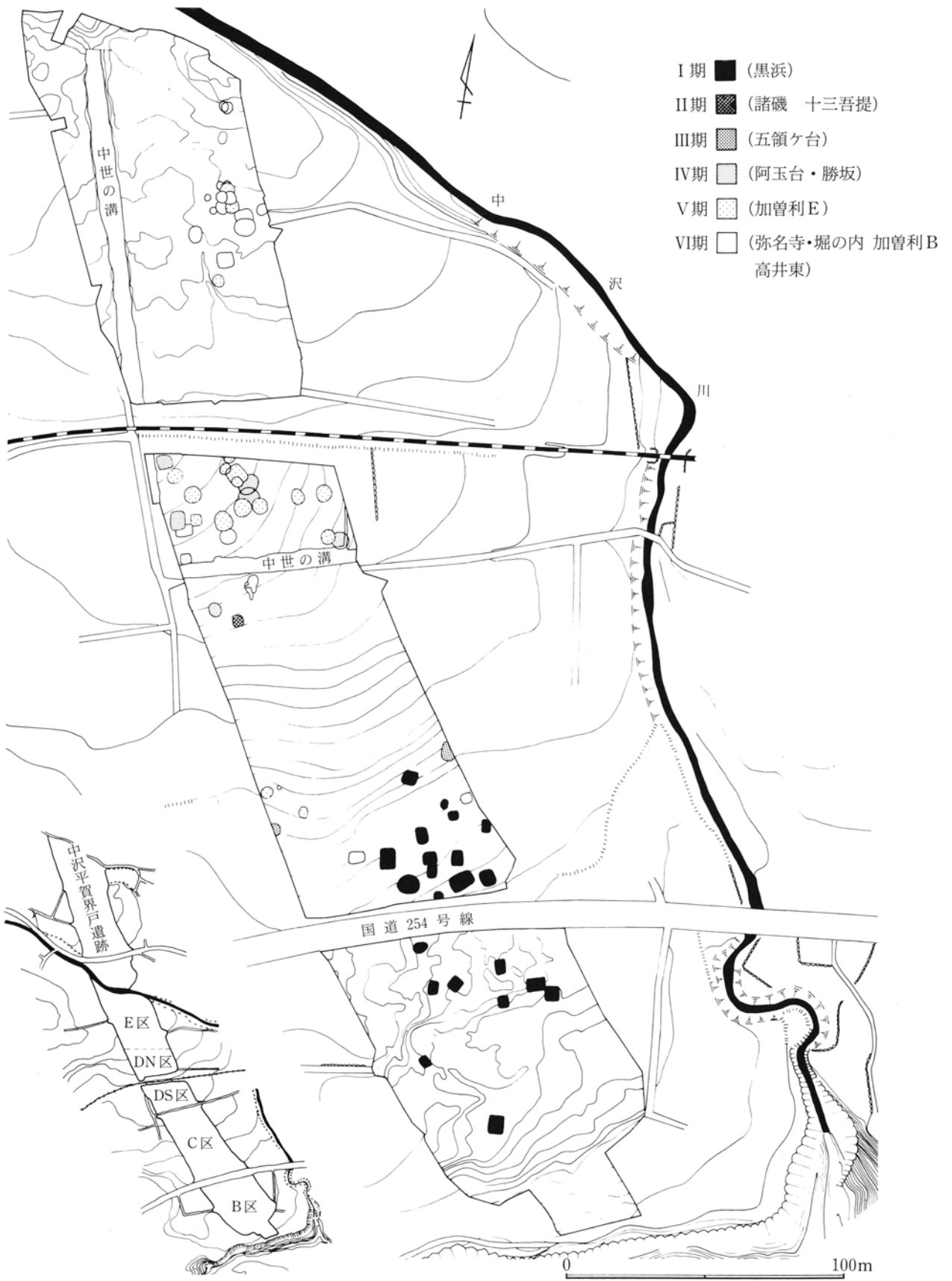
II期前半の諸磯a・b式期の遺構は調査区のほぼ中央、C区からDS区にかけての範囲に見られるが、住居は検出されておらず、土坑がわずかに見られるのみである。前期末、諸磯c期の住居はわずかに1軒がC区の北寄りにおいて検出され、ほぼ同時期の土坑が周辺部でわずかに見られる。前期末の十三菩提期の土坑も諸磯期とほぼ同様な分布域において、数基が検出されているのみである。

III期中期中頭に入り、五領ケ台式期の住居がわずかに1軒、C区の東端において検出されている。これに対して土坑の数は急増しており、C区の北寄りから北に続くDS区において500基以上が検出されている。土坑の分布を見ると、ほぼ円形のまとまりを呈している。その他の区ではこの時期の土坑は全く検出されておらず、かなり特徴的な在り方を示している。

IV期（第766図）に入ってもこの傾向は続き、住居の軒数は少なく、土坑の数は比較的多く検出されている。該期の住居はC区北からDS区にかけて6軒、北に離れたE区において1軒が確認されているがこのE区の1軒については、掘り込み、柱穴等は認められず、単独の屋外炉の可能性もある。土坑はDS区を中心に約90基が検出されている。

V期前半になると、住居はC区の南西に2軒、DS区に10軒、E区に3軒を検出しているが、時期を詳細に見てみると、DS区のは加曾利E II期を中心とし、C区、E区のはIII～IV期であり、時間差を持って分布域を異にしていたことが窺える。土坑は前代に比較すると数が大幅に減少しており、住居の周辺において散見される程度である。

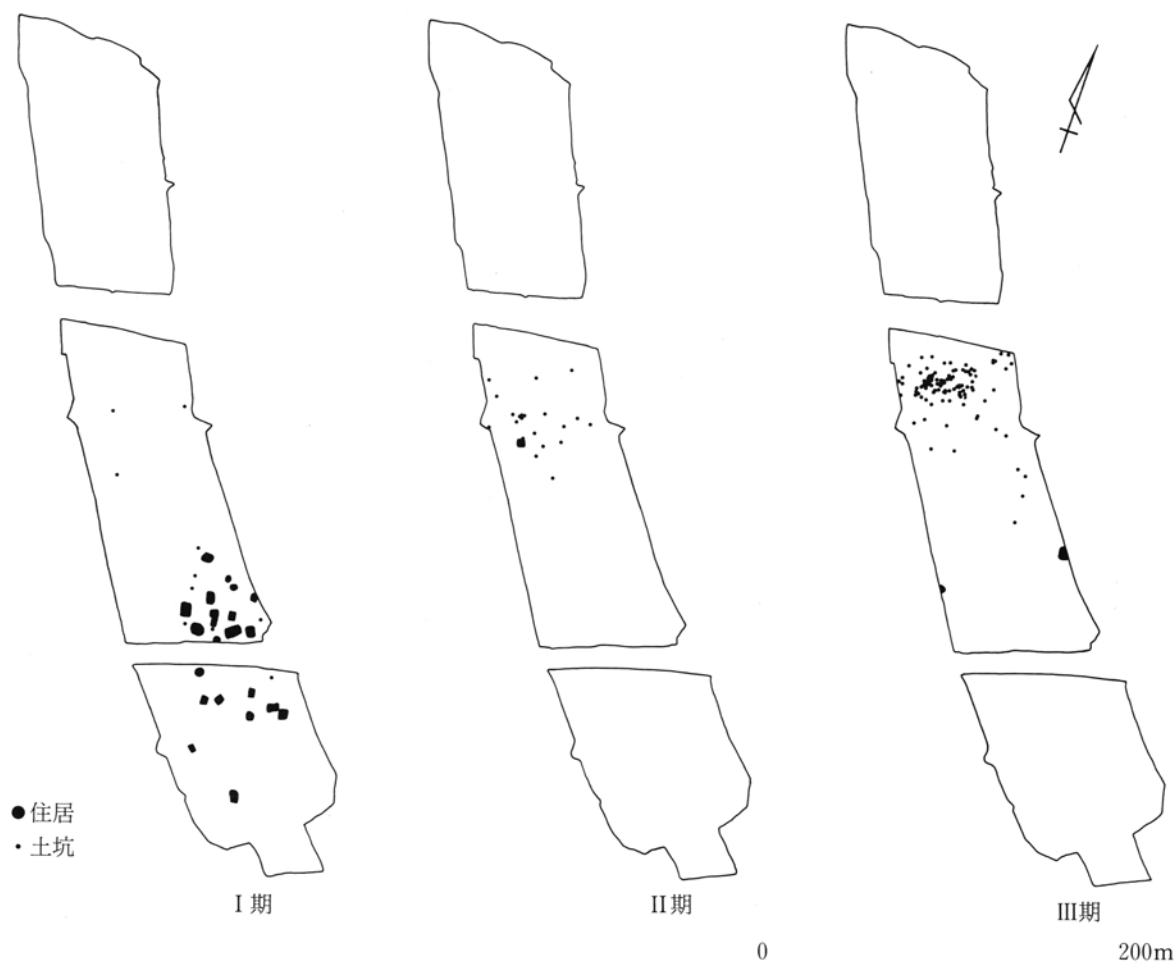
第1節 縄文時代



第766図 住居変遷図



第767図 土坑分布図 (I~IV期)



第768図 遺構変遷図(1)

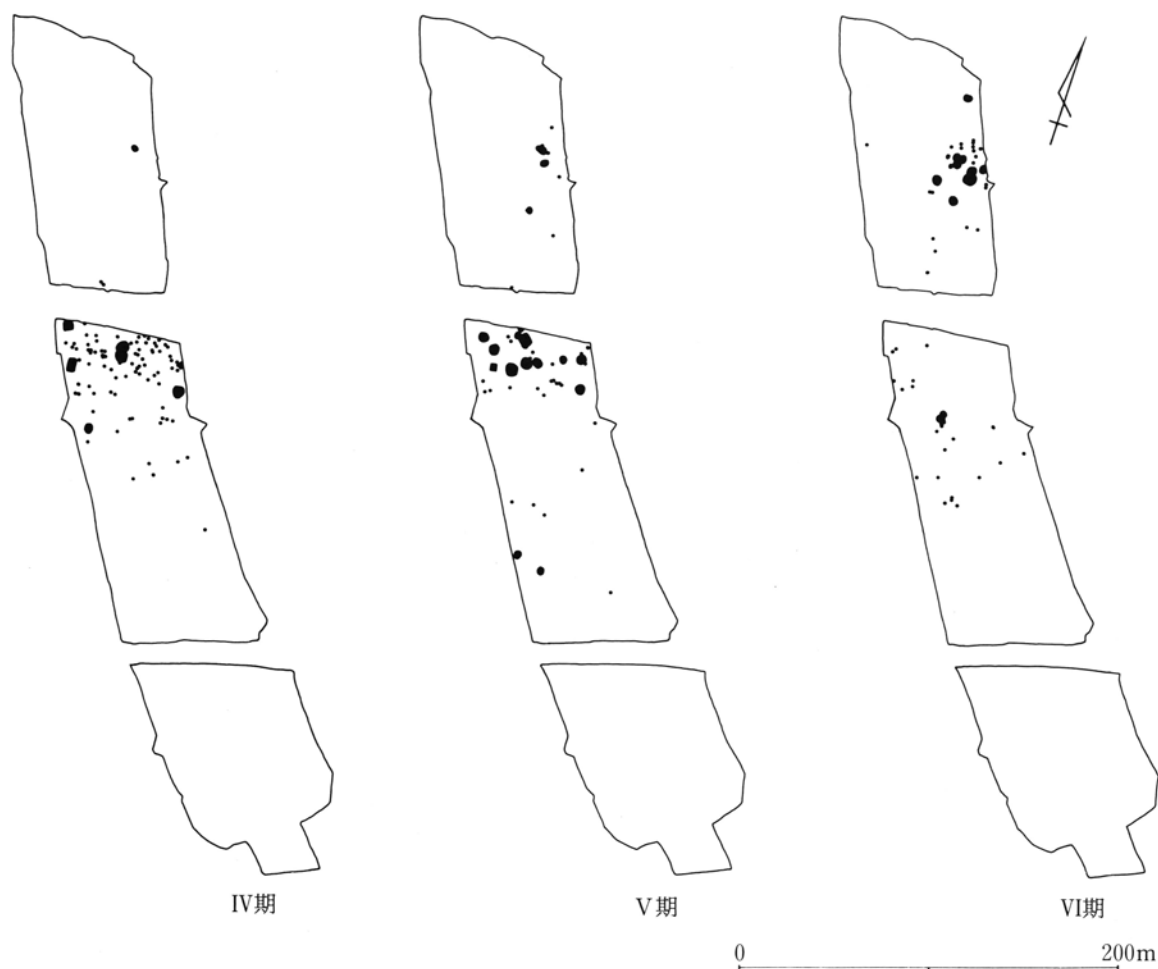
VI期(称名寺、堀之内期)になると住居分布の中心はE区に移り、調査区の東寄りに集中して、10軒が検出されている。C区の北端において検出された2軒は重複しており、いずれも柄鏡形の敷石住居である。E区においても住居の縁辺に部分的に石が敷かれた敷石住居が3軒程検出されているが、C区のものより後出のものである。土坑はE区では住居の周りに約20基が、C区、DS区においてはやや広い範囲に約20基が分布する状況であった。

以上、南蛇井増光寺遺跡における縄文時代の遺構変遷を見て来たが、大きな変遷の流れとして次のようなことが言えよう。

本遺跡において居住が開始されたのは、I期、前期中葉のことで、鑄川に近い段丘上に、比較的短期の間住居等が作られ生活が行われ、前期末までの空白期があり、II期の後半に単独住居的な諸磯C期の住居がわずかに1軒遺跡の中央付近に作られる。

III期中期初頭に入り、検出された住居は1軒のみであるが、調査区の東端に在ることから、何軒か調査区外に存在する可能性もある。この時期の土坑はDS区において急増し、まとまって検出されている。住居域とは明らかに離れた場所であり、墓域的な状況を呈している。IV期になると、前代の土坑が集中している場所に住居が作られ、土坑もかなりの数が作られている。ただし、土坑については、中葉の時期のものが見られるものの、後半の時期のものについてはかなり減少していることが判る。

ここでIV期、阿玉台・勝坂期として図示した土坑については、住居群よりも先行することが考えられ、住



第769図 遺構変遷図(2)

居と伴う時期の土坑は少なかったものと思われる。また、V期の中期後半になると、北および南に離れた場所に住居が作られるが、やや後出のものであることから、居住の場が移って行ったことが判る。そして、南については短期のうちに居住の場とはされなくなった様である。V期の終わりからVI期にかけて、DS区部分においては、わずかに2軒の敷石住居と、若干の土坑しか見られないことから、この場所が居住域としてはほとんど顧みられなくなっていたことが想定される。居住域の中心は100m以上北に移るが、軒数の割に住居および土坑の重複がかなり見られる。住居の時期はおよそ3期に分けられることから、継続性は認められるものの、同時存在の軒数は少なかったものと考えられる。

住居はVI期、E区において堀之内2式期を最後に見られなくなるが、後続する若干の土坑、配石等が中央部分において検出されているが数は少ない。また晩期末から弥生時代中期初頭と思われる土坑、および遺物もわずかながら検出されている。

調査を行った範囲は遺跡地のわずかな部分であるために、遺跡地全体で実際どのような居住地移動が行われていたのかは断定できないが、少なくとも地形的な面から見て、遺跡のほぼ中央部分を南北のベルト状に調査した結果を見る限りでは、縄文時代前期から後期にかけて、居住の場が南から北に約300m程移って行ったことが判る。この要因が何であったかは、現段階でははっきりとは言えないが、この遺跡の立地する場所の自然地形、周辺部の詳細分布調査や近接する遺跡（特に竊川を挟んだ対岸の下鎌田遺跡は注目される場所である）の検討を行うことで明らかになって来るものと思われる。

2. C区遺構外出土土器の分布

南蛇井増光寺遺跡C区において検出された遺構外出土土器の総点数は、約8,000点である。ここでは、遺構外出土の縄文土器を、時期別に各グリッド毎の数量変化として捉え、遺構の分布と比較して考えることとする。なお土器の時期分類は第4章の分類に準拠する。

第I群 前期の繊維を含む一群（花積下層、関山、黒浜（有尾）式に比定される）

第II群 前期後半から末（諸磯a・b・c、十三菩提式に比定される）

第III群 中期初頭から前半の一群（五領ケ台、阿玉台、勝坂式に比定される）

第IV群 中期後半の土器群（加曾利E式に比定される）

第V群 後期初頭から中葉の一群（称名寺、堀之内、加曾利B式に比定される）

第VI群 後期後半の一群（曾谷（高井東）式に比定される）

グリッドは5m方眼を基準に、弥生時代以降の遺構から出土したのも総て遺構外出土としてカウントした。カウントの方法は破片の大小、部位に関係なく1点として数えた。また、縄文時代遺構出土のものはカウントしていない。このため、図には遺構があるにも係らず出土点数がほとんど見られないグリッドがあるが、各遺構からは相当数の出土が見られる。これらの出土点数については、各遺構の土器説明の項を参照されたい。また方眼グリッドで点数をカウントしているためにやや偏った部分も見られるが、その点についても了解を頂いた上で一読を願いたい。また、時期の区分については、任意による部分があるために、時間的な長さが必ずしも同じとは言えない。

第I群土器

全出土量の約45%を占めており、調査区南東部分に多く出土している（第770図）。当然のことながら住居分布もほぼこの部分に重なっている。住居は後世の遺構によって壊されている部分も多く、このためグリッド出土とした土器の多くは弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の住居覆土中に混入した状態で出土しているものが多い。また、その量も極めて多く、多いグリッドでは300点以上出土している場所も見られる。

調査区他の部分ではほとんど分布が見られないが、Ca42グリッド、Da48グリッドにおいてやや突出的に100点以上がカウントされている。Da48については隣接するDa49グリッドにおいて当該期の土坑が1基検出されている。このDa48グリッドについては、北側のDS区においてほとんどこの時期の遺物、遺構が見られないことから、小範囲の単独的な在り方を示す。また調査区西端のCa42グリッドは南接するBt41グリッドにおいても比較的出土が見られることから、西側調査区外に該期の遺構が存在する可能性がある。

さらに詳細に時期的な検討を加えれば、数量的には極めて少なく、遺構も見られなかった花積下層、関山式土器（第394図1～11）は、かなり散発的に出土している。こうした分布状況を見ると、明らかに第I群（黒浜式期）の時期は、国道を挟んだ部分にその中心があったことが認識される。

第II群土器

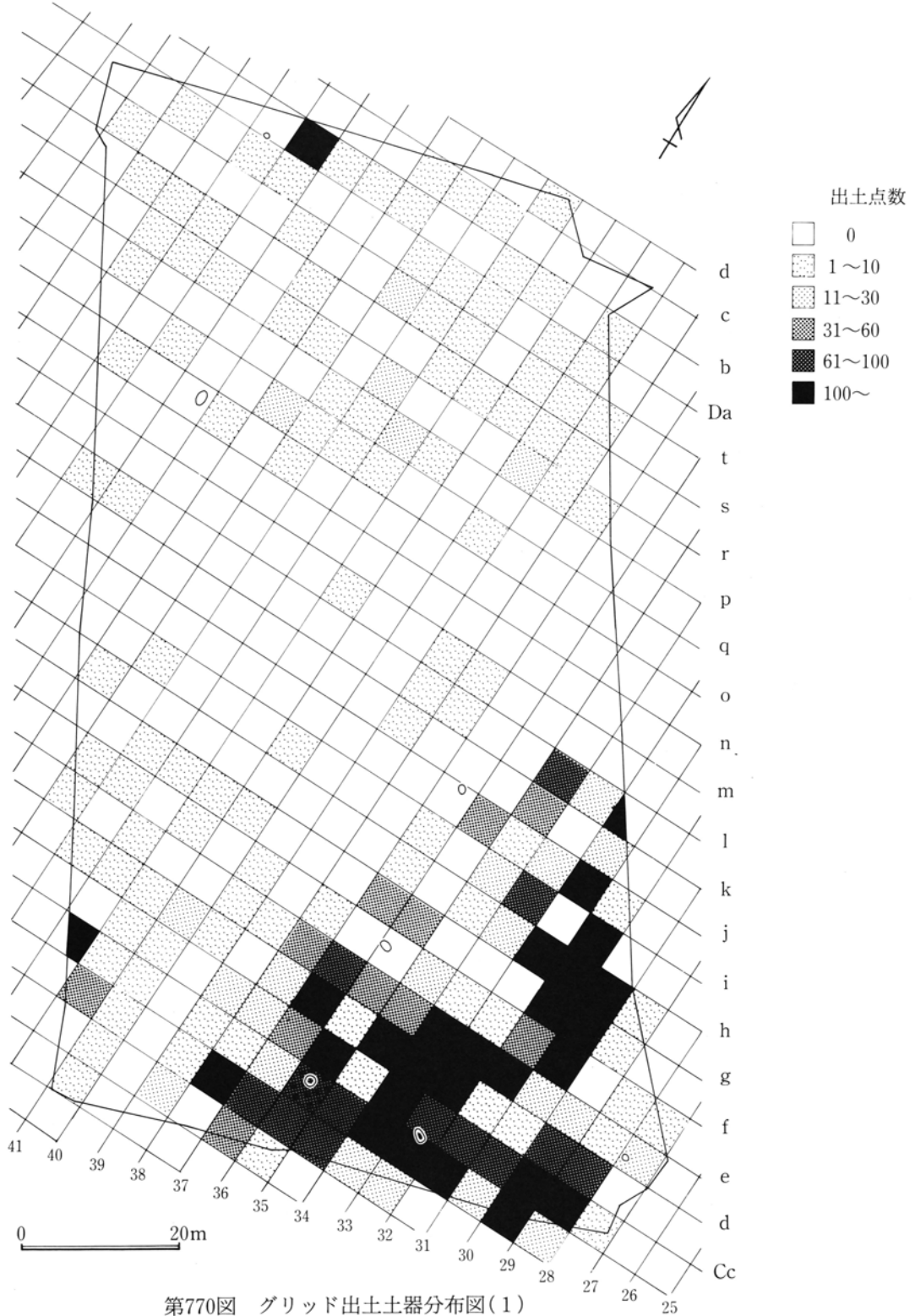
全体の約4%と量的には極めて少ない。その分布（第771図）を見ると、調査区内においてほぼまんべんなく分布が見られるが、そのグリッド毎の出土点数は1～数点と極めて少ない。

前代と比較すると明らかに分布状況は逆転しており、調査区の北側において量的な増加が見られ、該期の遺構（土坑が中心）も北側に集中している。北側のDS区においても若干の土坑が確認されており、遺構の中心はC区の北側から、DS区にかけてである。諸磯a式期のもはわずかに1点のみで遺構も検出されていない。諸磯b式期の土器も少ないが、C区中央部分において土坑がわずかに検出されている。c式期になると住居1軒がCj・K-32・33グリッドにおいて検出されており、周辺部分において土坑も数基が検出されてい

る。グリッド出土土器の分布もこうした遺構分布との相関関係が認められる。

第III群土器

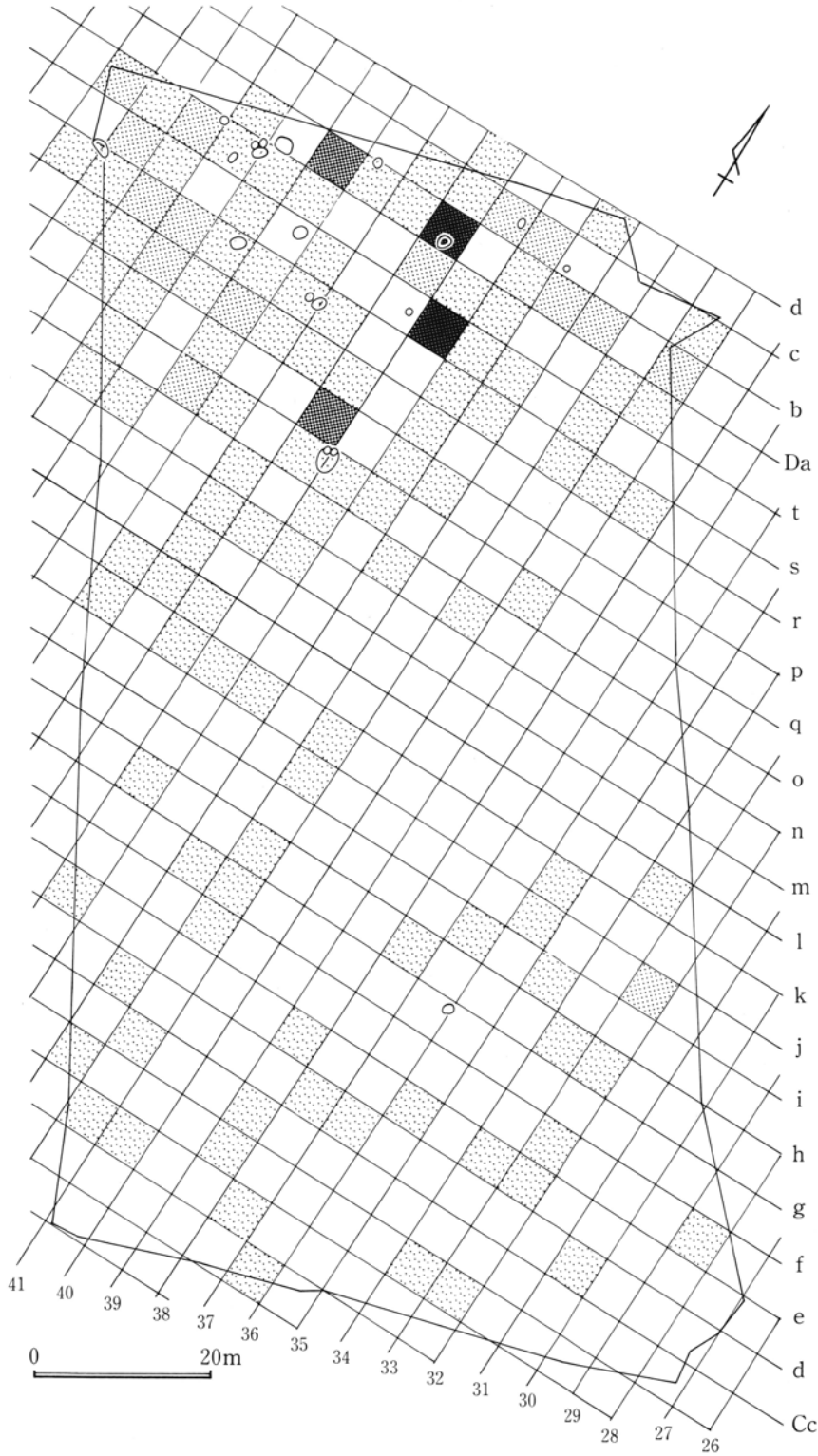
調査区の北側にその分布の中心が見られ（第772図）、さらには調査区中央東寄り、Cj34・Ck33グリッドにおいてかなりの点数が認められる。全出土点数の約11%を占める。分布量の傾向は前代と近似するが、各グリッド毎における出土点数は倍増している。これら土器分布の濃密な部分には当然のことながら、当該期の



第770図 グリッド出土土器分布図(1)

住居、土坑等が検出されている。

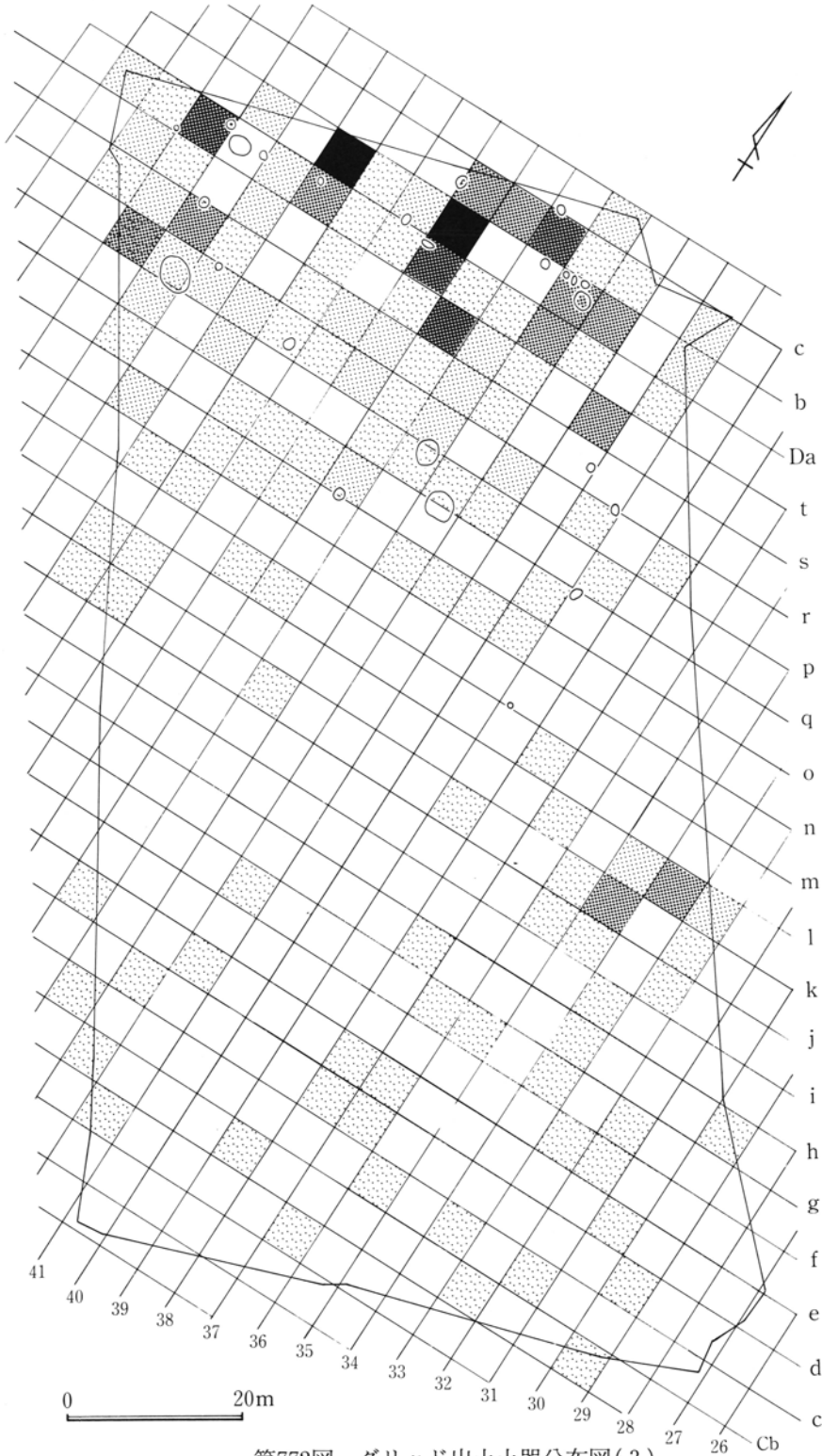
遺構の在り方は、住居に関しては五領ケ台式期のものが中央東寄りの集中部分に1軒が検出されている。北側部分については土坑のみであるが、その数は急増しており、北側のDS区にその状況は続いている。特に五領ケ台式期の土坑はC区からDS区にかけて異常な程に集中している。



第771図 グリッド出土土器分布図(2)

第IV群土器

出土量は全体の約15%で、第773図に見られるように、分布の状況は南北に2分化している。濃密な分布を示すグリッドには住居ないしは土坑が重なるようである。このため集中するグリッドは飛び飛びに認められる。また、中央部分については全く遺物の見られないグリッドが多く認められる。調査区北側については前述したように、遺構が認められるが、II群・III群で見られたような、DS区との関連はあまり認められない。

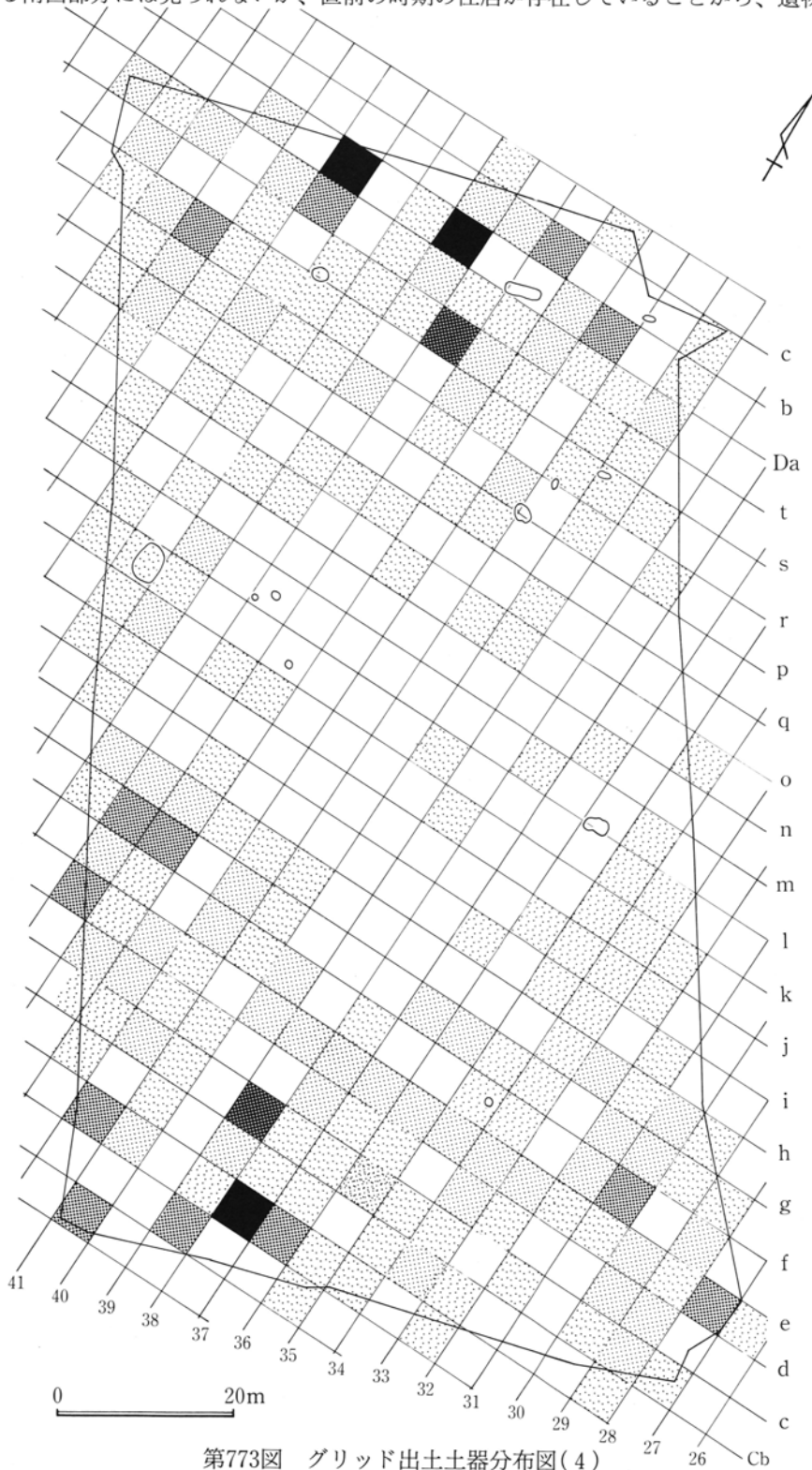


第772図 グリッド出土土器分布図(3)

特に住居跡については、DS区において検出されているものは一段階古くなる。

第V群

後期の土器は全体量の約25%と比較的多かった。その分布状況は前代と同様に南北に2分化した状況であるが、やや西側に寄るほど出土量が増加している状況が窺える(第774図)。当該期の遺構については遺物の集中が見られる南西部分には見られないが、直前の時期の住居が存在していることから、遺物の混在がある

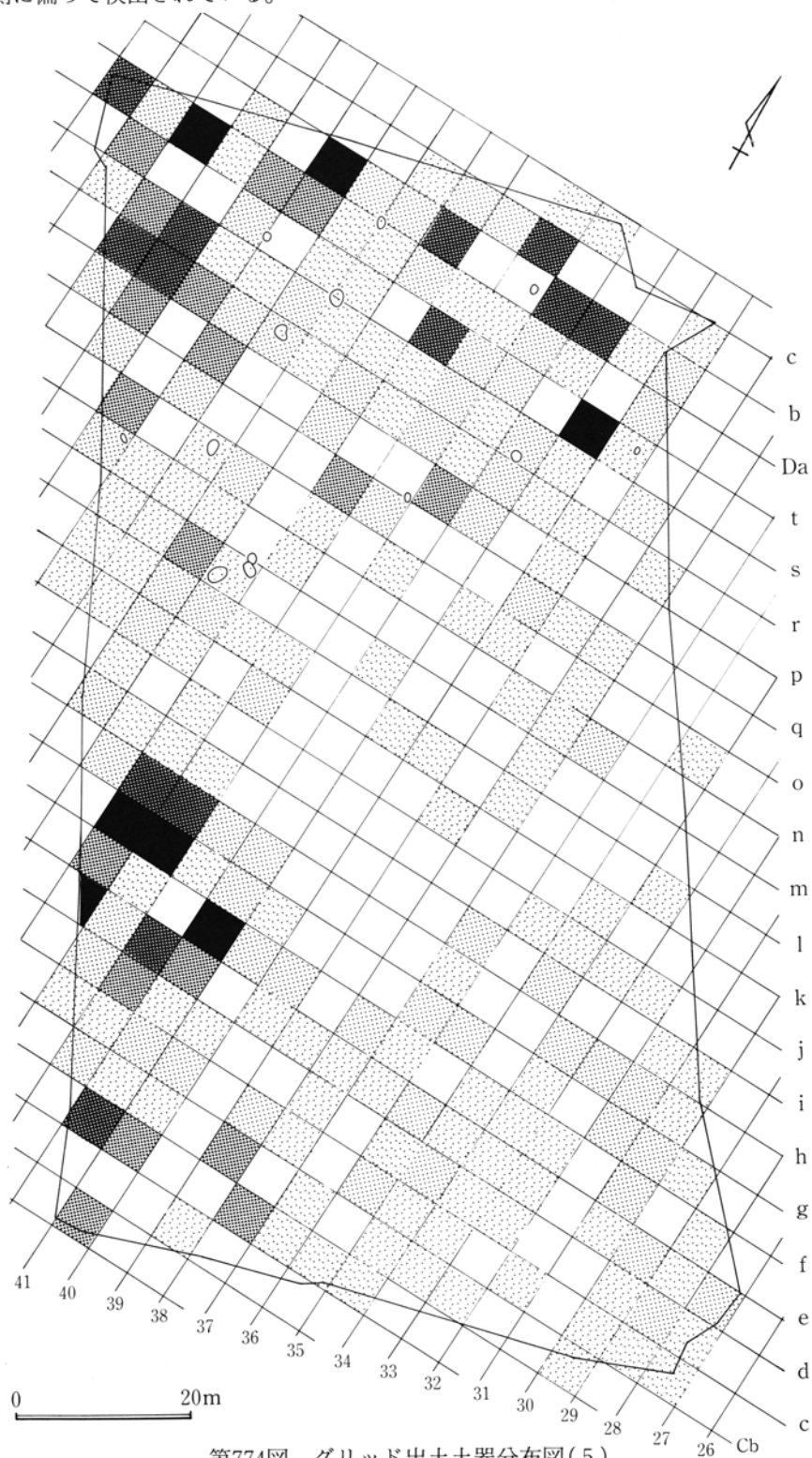


第773図 グリッド出土土器分布図(4)

第5章 ま と め

ものと思われる。また、北側部分については、住居、土坑、配石等が見られ、時間的にも若干の長さが認められる。

住居はV群初頭段階で敷石住居である。土坑についてはほぼ同時期のものが見られるようであるが、配石についてはやや後出のものである。なお、北側DS区においては当該期の遺構は若干の土坑が見られるのみで、やはり西側に偏って検出されている。



第774図 グリッド出土土器分布図(5)

3. 敷石住居跡について

南蛇井増光寺遺跡において検出された敷石住居は、重複などにより壊された部分が多く、規模、形状等明確さに欠けるものも含めて7軒を確認している（第775図）。検出した遺構の各区における内訳はC区5軒、E区2軒である。C区で検出されたものはC1号配石（遺存状態は悪いが住居と判断される、時期は加曾利EⅢ末～Ⅳ）、C170号住居跡（加曾利EⅢ末～Ⅳ）、C363号住居跡（称名寺Ⅰ）、C368号住居跡（堀之内1）である。E区においては調査区北側で、重複した2軒E22号住居跡（堀之内2）、C46号住居跡（堀之内1）が検出されている。

以下、各敷石住居について若干の説明を加えることとする（第776・777図）。

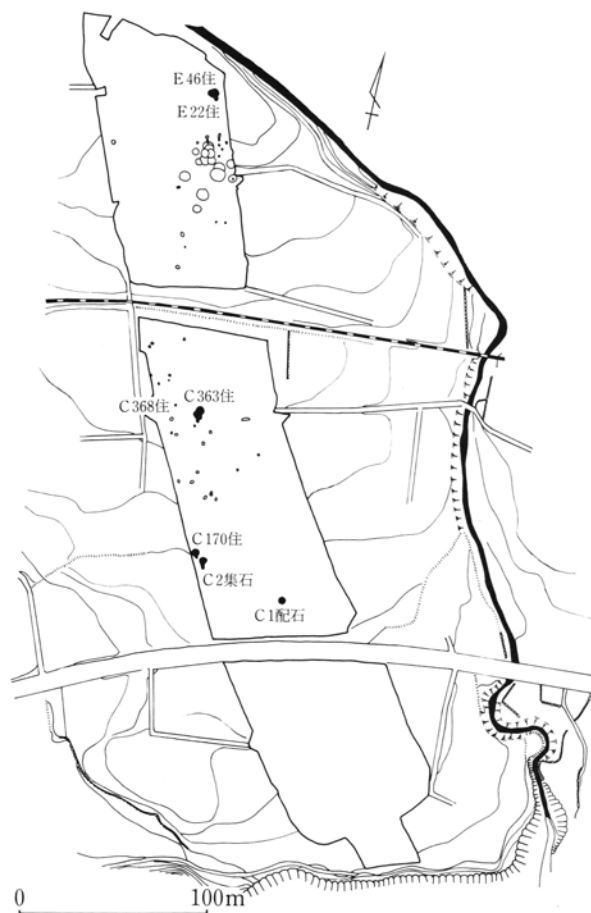
C1号配石はCc34グリッドに位置し、北側をC56号住居跡（弥生時代）に切られる。大部分を失っており遺存状態は悪い、住居形状は不明である。埋甕を伴う部分的な敷石が検出されている。埋甕からN-20°-W方向に扁平な砂岩、河原石が敷かれる。埋甕の中には土器の口縁部片、礫が入り込んだ状況であった。

C2号集石は敷石住居の残骸である。形状、大きさ等に関しては不明であるが、検出した2基の炉の規模から想定するとかなり大形の敷石住居であると思われる。また、炉の南側には小振りの石が敷かれた状況でわずかながら検出されており、その南端には深鉢が埋設された状態で出土している。このことから、柄鏡形を呈す住居であった可能性が高い。南北に検出された2基の炉について見ると、北側の炉の周辺部分にはやや乱れた状態ではあったが敷石が残った状態で検出された。炉はともにやや細長い河原石を四角に組んだ石囲い炉であるが、かなり大きな石が使われている。北側の炉は東側が壊されており、規模については確かでは

はないと思われるが、長さ1.2m、幅0.9mの規模を持つものと思われる。また、南側の炉は内法で長さ、幅共に0.6mのほぼ方形を呈す。使用されている石は長さ50～60cm、高さも30cmを測る。炉の中には礫と共に土器片が出土している。焼土は比較的下層に層を成した状態で認められている。この2基の炉は同一遺構に伴うものと思われる。

C170号住居跡は調査区の西端、C173号住居跡（弥生時代）の直下において検出されている。柄鏡形を呈すと思われるが、南の張り出し部分はC160号住居跡（古墳時代）に切られてしまったものと考えられる。主体部形状はほぼ円形を呈し、径約3.5mで、壁高は約10cmである。

敷石は扁平な砂岩を用いており、かなり大きなものも使われている。この砂岩はかなり脆いもので、検出直後は比較的しっかりとしていたが、雨に晒された後は極めて脆くなり、簡単に崩れてしまう状態であった。中央に石で四角く囲った1辺60cm程の炉が作られている。砂岩が敷かれた間隙部分、および壁に沿って周囲には小振りな河原石が配置されている。主体部については敷石は部分的に失われた部分



第775図 敷石住居分布図

第5章 ま と め

も見られたが、ほぼ全面に残っており、約150個の石が敷かれていた。この内扁平な砂岩は大小併せて約50個が敷かれていた。

遺物は床面、炉部分においても土器、石器類の出土はほとんど見られなかった。南端の敷石下から深鉢の底部が埋められた状態で検出されている。

C363号住居跡はC区の北端部分において検出されている。主軸をほぼ北にとり、東側をDS103号住居跡（弥生時代）に大きく切られた状態であったが、遺存部分については良好な状態であった。主体部形状は径約4mの円形で、周囲には径20cmの小ピットが廻る。南側には長方形の張り出し部分が付く。敷石はC170号住居跡とは異なり、かなり硬質な河原石が用いられている。主体部、張り出し部を合わせ大小約480個の石が使われている。

張り出し部は比較的平らな面を持つ石を敷き、周囲に河原石を内側のラインを揃えて並べ立てている。内法の長さ2.5m、幅2.0mで、深さは約20～30cmである。敷石は主体部、張り出し部ともにほぼ全面に敷かれた状態で、大きな石と石の隙間には小振りな河原石が埋めるように配されている。また、主体部の周縁部には小さい礫が取り囲む様に配されている。

炉は中央に作られており、北側には細長い1石が、東側には元々1つであったものが3つに割れた状況の礫が、南側と西側にはやや扁平な礫で四角に作られている。内部は若干の焼土、土器片を含む砂礫土で埋まり、周囲の石には火を受けた痕跡が認められる。

この敷石住居の構造的な特徴として、張り出し部との連結部より延びた腕状の列石が挙げられる。大きさ30～50cmの比較的大きな河原石7個が南西方向に約3m程の長さに、わずかに弧を描くように並べられている。おそらく壊されてしまった東側にも同様なものがあつたと思われる。

C368号住居跡はC363号住居跡に大きく主体部東側を壊された状態で検出されている。主軸方向をほぼ同じにとり、規模も近似している。平面形状は柄鏡形を呈し、規模は全長約6.5m、主体部の径約4.0m、張り出し部の長さ2.5m、幅約1mである。敷石はほとんど見られず、柄との連結部分にわずかに敷かれた状況を示す程度であった。検出面は凹凸が著しく、床面は掘り方の状況を呈す。炉はほぼ中央に一辺50cmの方形の掘り込みとして検出されている、深さは50cm程で壁面は焼土化している。深鉢型土器の底部が検出されている。炉を構築していたと思われるような石は全く見られなかった。本住居跡については、敷かれていた石が意識的に抜き取られた可能性が高く、重複するC363号住居跡との関連と併せて考える必要があると思われる。

E22号住居跡はE区の北東寄りに検出された敷石住居である。柄鏡形を呈すと思われるが、削平が著しく確定はできない。炉の周辺部、縁辺部に敷石の残欠が認められる。石は扁平な砂岩や結晶片岩類がわずかながら認められる。炉は残存状況が悪く南側と東西の石が見られるのみである。炉の内部より2個体分の埋設土器が出土している。土器はかなり火を受けており脆弱である。

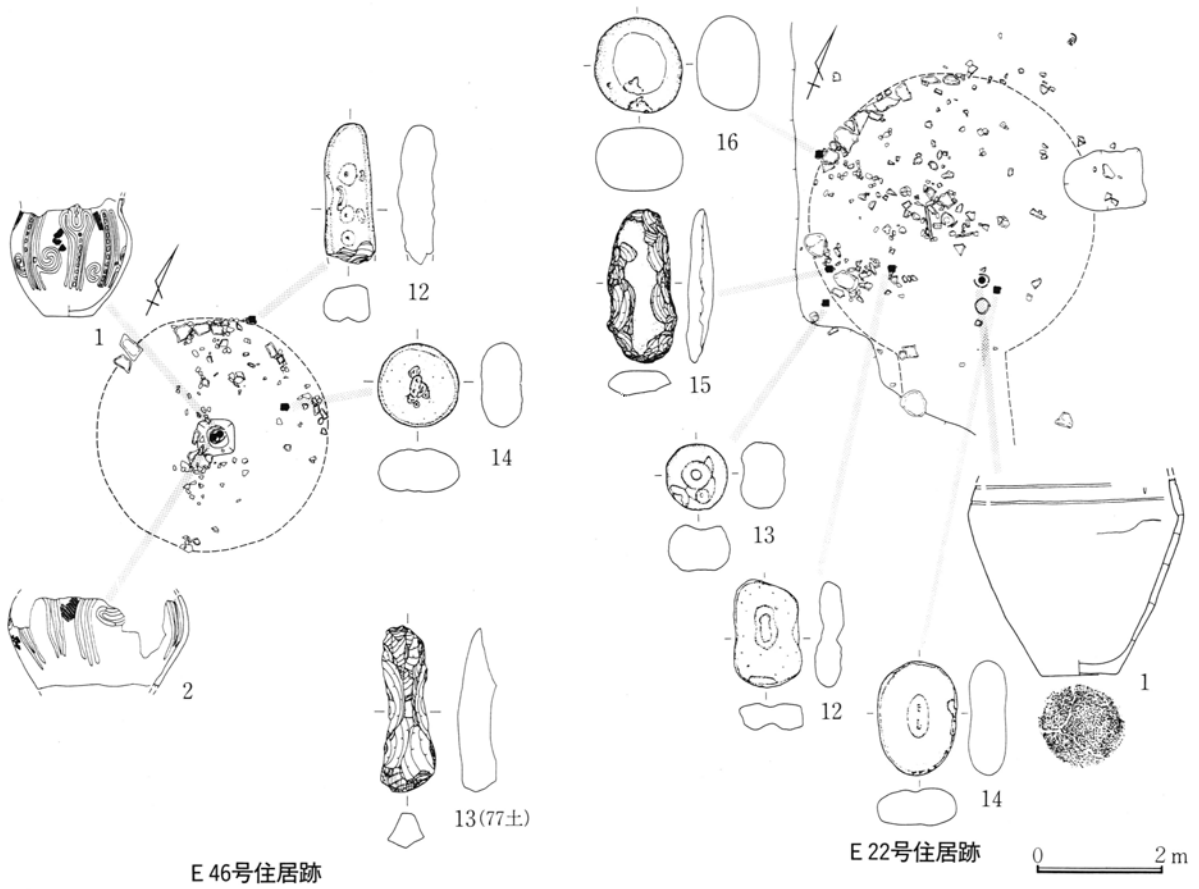
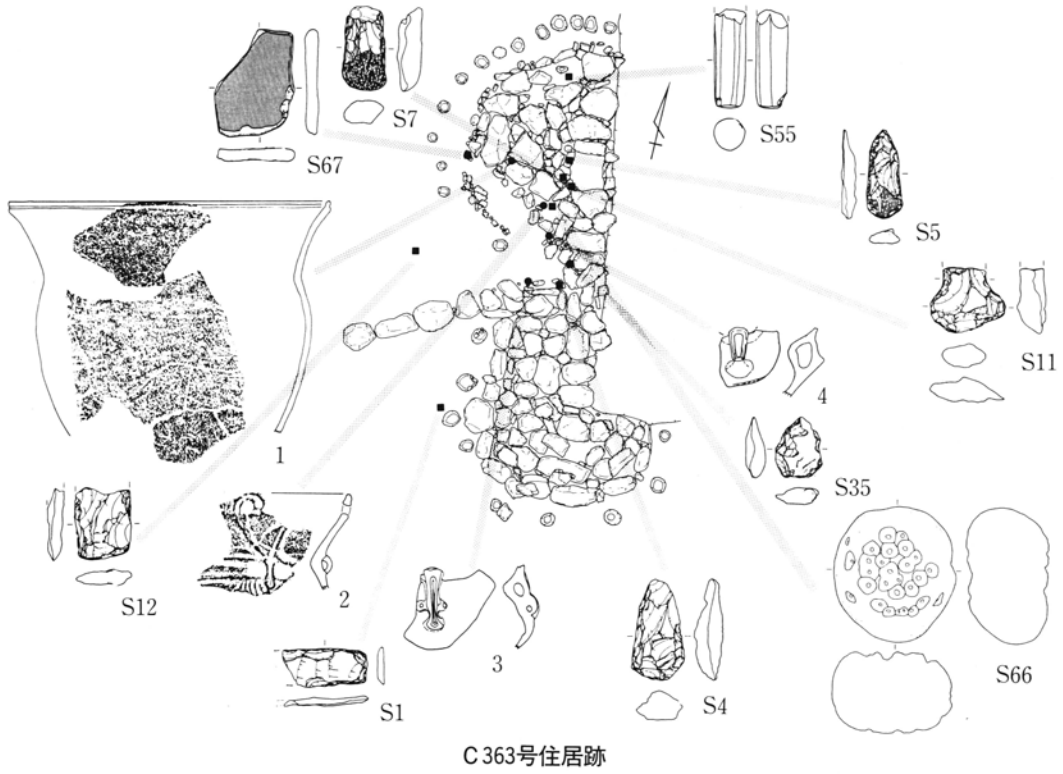
E46号住居跡はE22号住居跡のほぼ直下に検出されている。円形を呈すと思われるが削平が著しい。安山岩もしくは板状の砂岩を敷き床面としているが、残存部分が少ないために詳細は不明である。炉はほぼ中央に作られている。径約50cmの掘り込み内から、焼土塊と共に重ね合わせた2個の土器が出土している。

以上、本遺跡において検出された敷石住居について個々説明を加えてきたが、これらがどのような時間的な流れの中で、構築されていったものか考えておきたい。

最も古い段階の敷石住居としてはC区の170号住居跡、1号配石、2号集石が挙げられる。C170号住居跡は全面に隙間なく敷石を施した住居である。出土土器が少なく時期判断がはっきりとは下せないが、加曽利



第776図 敷石住居跡(1)



第777図 敷石住居跡(2)

E III～IVとして間違いないであろう。C 1号配石、C 2号集石は共にあまり遺存状態は良くなく形状、規模ともにはっきりしていないが、出土した土器から加曽利E IIIないしはIVの初め頃と考えられ、これら3軒は敷石住居としては比較的古段階に位置づけられる。

次期のものとしてはC 368号住居跡が挙げられる。時期は出土土器から称名寺2式と思われるが前後する時期の破片も若干混入している。C 363号住居跡はこのC 368号住居跡を切って作られている。時期は出土土器から堀之内1式と判断される。出土土器は破片類が主で、3～4点の注口土器の破片が見られる。石器は70点程が出土している。

E区の22・46号住居跡は46(古)→22(新)の重複関係にあるが、時期は堀之内1から2式である。C区の363・368号住居跡よりは明らかに後出するもので、ほぼ同時期の竪穴住居が作られているが、南側にやや離れて位置している。

C区においては比較的古段階とされる加曽利E III～IV期の敷石住居と同時期の竪穴住居は3軒(C 37・115・176号住)検出されているが、いずれも規模は小さく炉の検出もなく、本文中でも述べたように住居とするには疑問もある。この時期の敷石住居としてC 170号住居跡、1号配石、2号集石が見られるが、前者よりはやや後出するものと判断される。

後期初頭から前半期のC 363・368号住居跡については、同時に存在していたと思われる時期の竪穴住居は付近においては検出されておらず、単独的な在り方を示す。当該期の竪穴住居は北に100m以上離れたE区において数軒が確認されている。

以上の検討結果をまとめると南蛇井増光寺遺跡における敷石住居については次のような変遷過程が窺える。

C 1号配石→C 2号集石→C 170号住居跡→C 368号住居跡→C 363号住居跡→E 46号住居跡→E 22号住居跡

敷石住居の出現については様々な意見が言われて久しいが、近年多くの資料の検討を行う中で、関東西部地域(鐮川流域も濃厚な候補地)において出現した可能性が高いということが言われている。

本遺跡の周辺部における敷石住居は、今後さらに検出例が増えることが想定されるが、本地域が出現期における重要な資料を提供する場であることから、さらなる検討、分析がなされなければならないと考える。時間の限られた中で本遺跡の敷石住居について羅列的に書いてしまった。結論的な言葉もなく終わることになってしまったが、今後、より多角的な検討を行う中で再考を行いたいと考える。

4. 出土土器について

南蛇井増光寺遺跡出土の縄文土器、個々については本文中で説明を加えたが、本稿ではこれらの分類と該期における位置づけを確認する意味で、住居および土坑出土の土器を中心に分類を行っておきたい。

取り上げた土器については、本書に掲載したもの他、「南蛇井増光寺遺跡 I (1992)・II (1993)・VI (1997)」において報告したB～E区出土の総ての土器を対象とした。なお、ここで用いた分類基準は基本的に本文のものに準拠している。土器の配列については基本的には古→新の順に並べてはいるが、施文分類を主としてあるために個々の先後関係については正しくない部分もあることを付記しておく。

第I群土器について(第778図～779図31)。前項で述べたように本群については、B区およびC区南部分においてその出土分布の中心があり、他区においてはほとんど土器片も検出されていない。

1・2は本遺跡内において出土した最も古い時期に比定される花積下層式の一群である。この時期の土器は他の区においては1片も出土していない。1は口縁部折り返されて肥厚し、口唇部分が尖る。羽状縄文が施文され、おそらく尖底を呈すものと思われる。同一個体と思われる破片が約50m離れて出土している。2・3は撚糸文の側面圧痕文が見られる。

4は関山I式である。深鉢形土器の口縁部片で、沈線による蕨手文が見られ貼付文を持つ。5～7は関山II式である。6・7は組み紐が施文されており同一個体片である。以上の花積下層式、関山式は調査区の南と北に分布域が2分され、北側部分については比較的集中していることから土坑等が存在していた可能性がある。

8～37は黒浜(有尾系)式土器である。住居跡、土坑等の遺構が存在していることから土器の出土数量は多い。器形は4単位の波状口縁を呈し、口縁部文様帯を持ち、頸部で括れて胴部には羽状縄文が施文されるもの。平縁で口縁部文様を持ち、括れが見られないか、あっても弱いもの。縄文が全面に施文されるものは比較的円筒状のものと、4単位の波状を呈すものが見られる。9は横位平行沈線で文様帯を画し平行沈線による鋸歯状文を描き、地文には異条縄文が施文されている。口縁部文様には連続爪形文で菱形文を描くもの10～16・18～23。16・18は爪形文がまばらに見られる。平行線文を主とするもの17。並行する2本の連続結節沈線を施文する26は極めて稀な例である。23は4単位の波状口縁、連続爪形文で菱形文を描出するが、横位区画線を持たない。

21は口縁部に横位連続爪形文で文様帯を画し、隆帯と連続爪形文を組み合わせた菱形文を描き、瘤状の貼付文を持つ。22・20も同様の文様構成を持つ。

25は口縁部に篋状の工具による細沈線で斜格子文を描くものであるが、このような格子目文をもつものは他には見られない。

30・31は縄文施文の土器である。極めて類似する2点であるが、胴中位で強く「く」の字に折れる器形を呈すやや特異な器形である、古く位置付けられようか。施文原体は無節RおよびLで羽状縄文を構成。

28は円筒状を呈す縄文施文された土器である。C118号住居跡出土の土器については、爪形文が見られず、平行線文のみで、他は縄文施文のみである。また、32・33はいずれも縄文のみ施文されるが、胎土中に繊維を含まないことや、器肉の薄さ、砂粒(特に金雲母)が目立つこと、器面に明瞭に指頭痕が見られることなどから、明らかに系統の異なる一群である。

櫛歯状工具による刺突文を持つものがC77住・79住・178住において少数ながら出土している。口縁部に縦位に施文する8の例の他、口唇端部に沿って施文するもの、菱形文構成をなすものが見られる。有尾式に特徴的な施文要素であり、比較的古段階とされる一群である。

また、C169号住居跡の土器の施文を見ると、いわゆる爪形文は見られず、連続の刺突文状を呈す。特に26については並行する2本の沈線内にわずかに結節が観察されるもので、一見撚糸文の側面圧痕文のようにも見られる。土器の胎土も繊維の混入が少なくやや異質の感がある。

第II群としたものは諸磯式、十三菩提式に比定される一群である(第779図38~45)。

本群に比定される土器群はC区の北部分からDS区にかけて遺構の分布が見られる。

このうち諸磯a式に比定されるものはわずかに破片1点が認められるに過ぎない。諸磯b式に比定される土器を出土している若干の土坑が検出されている。縄文地文に沈線文を持つものと矢羽状に刺突文を配し、浮線文の効果を描出しているものが1点見られる。b式後半に位置付けられよう。38~41は諸磯c式に比定されるものである。集合沈線を横位、縦位に施文後棒状、ボタン状の貼付文を持つ一群、38~40とやや後出すると思われる41は横位、矢羽状の集合沈線文施文後縦位の結節を持つ棒状貼付文が付されるものである。42は口縁部、胴部に貼付文が付されるが、地文の集合沈線は横位矢羽状、「の」の字状を描く。

43はC123号土坑より出土したもので、浮島II式である。横位沈線で区画帯を作り貝殻復縁文が施文されている。諸磯b式土器の破片が共伴している。44・45は十三菩提式に比定されるもので、前者は全面に弧状文を含む平行沈線文が乱雑に施文されている。集合沈線文を持つ土器片のみを伴っている。後者は胴下半部で強く括れたカップ状を呈し、縄文RLが横位全面施文される。砂粒、金雲母を含んでいる。共伴土器は縄文施文のみである。当該期については群馬県内においては単発的に遺構、遺物が確認されている状況であり、本遺跡についても同様で、遺構としてはわずかに土坑が検出されているのみである。

第III群(780~785図)とした一群は五領ケ台・阿玉台・勝坂式に比定される一群である。今回の調査において量的にも質的にも良好な資料が得られている。この中でも、中期初頭の五領ケ台式に相当する一群については、これまで県内においては断片的な資料しか得られていなかったものである。

C区の北側に続くDS区においては、検出された800基を越える土坑群に伴い、該期の良好な資料が数多く出土している(南蛇井増光寺遺跡VII1997)。ここでは、本遺跡の特色の1つとも言えるこの時期の土器について、DS区出土のものも含めて集成しておきたい。

本遺跡において検出された五領ケ台式期の土器は、その文様構成から大きく4分類できる。

第1分類は主として集合沈線により文様が描かれるもので、口縁部から胴部にかけて、横位の区画帯を構成し、区画帯内を沈線文で充填しているもの。いわゆる、集合沈線文土器と称されるものである。

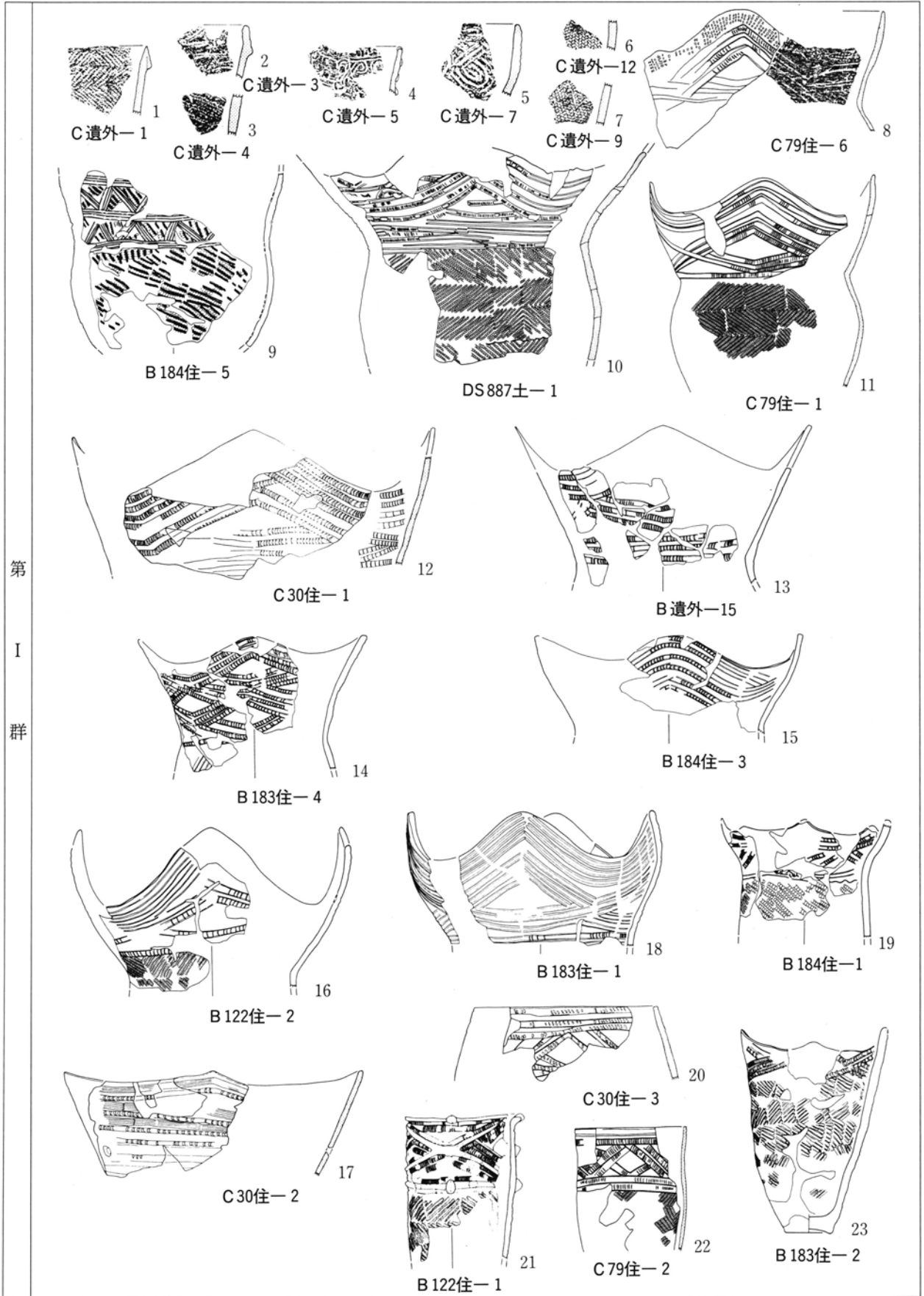
第2分類は口縁部に細線文や三角印刻文等による文様を基調とした文様帯を持ち、胴部には縦方向に施文された縄文帯を持つもの。いわゆる、縄文細線文土器と称されるものである。

第3分類として器面全面に縄文のみ施文されたもの。

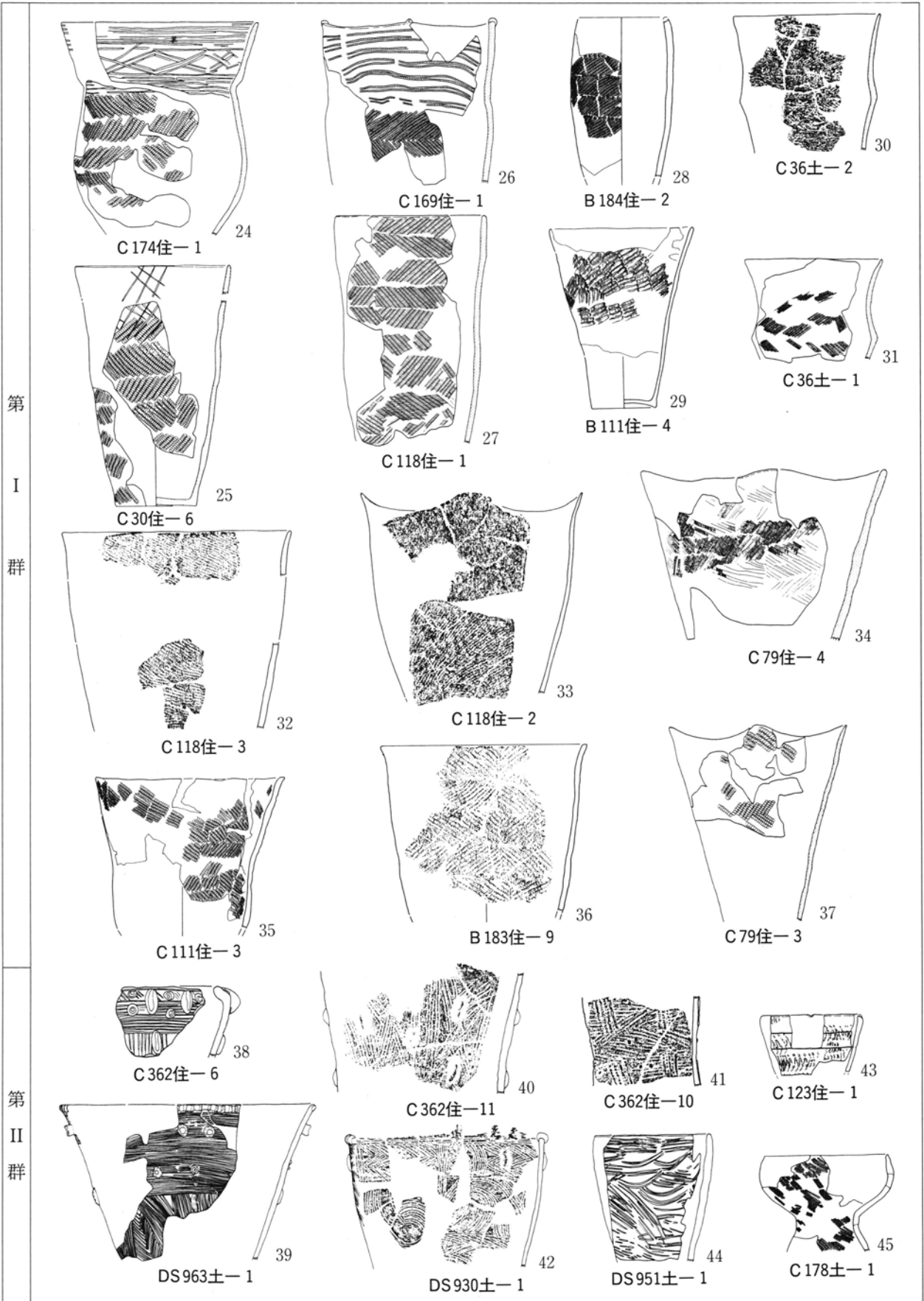
第4分類として無文のもの。

第1分類としたものは比較的出土点数が多い(46~67)。46は頸部が括れ、口縁部が開いた器形を呈し、口縁部2カ所に耳状の突起文を有す。口縁部は横位区画の集合沈線で埋められ、胴部は縦位区画となる。65も同様のモチーフが見られ、胴部文様は縦区画が意識されている。47も球胴で頸部が括れ、似た文様構成を示すが、連続結節文が用いられている。48・49は集合沈線による三角、菱形文と渦巻文が組み合わされたやや古いモチーフである。48は底部が外に張り出した鼓形を呈す。

50・51・52・53・54は集合沈線文系土器群である。胴部は円筒状を呈し、口縁部は緩く「く」の字または内湾気味となり、口唇部は直立、またはわずかに外反する。横位の沈線で画された口縁部文様帯を持つ。文様帯の中は斜格子文、縦位、斜位の平行沈線で充填されているものが多い。52・53・57・58のように口縁部

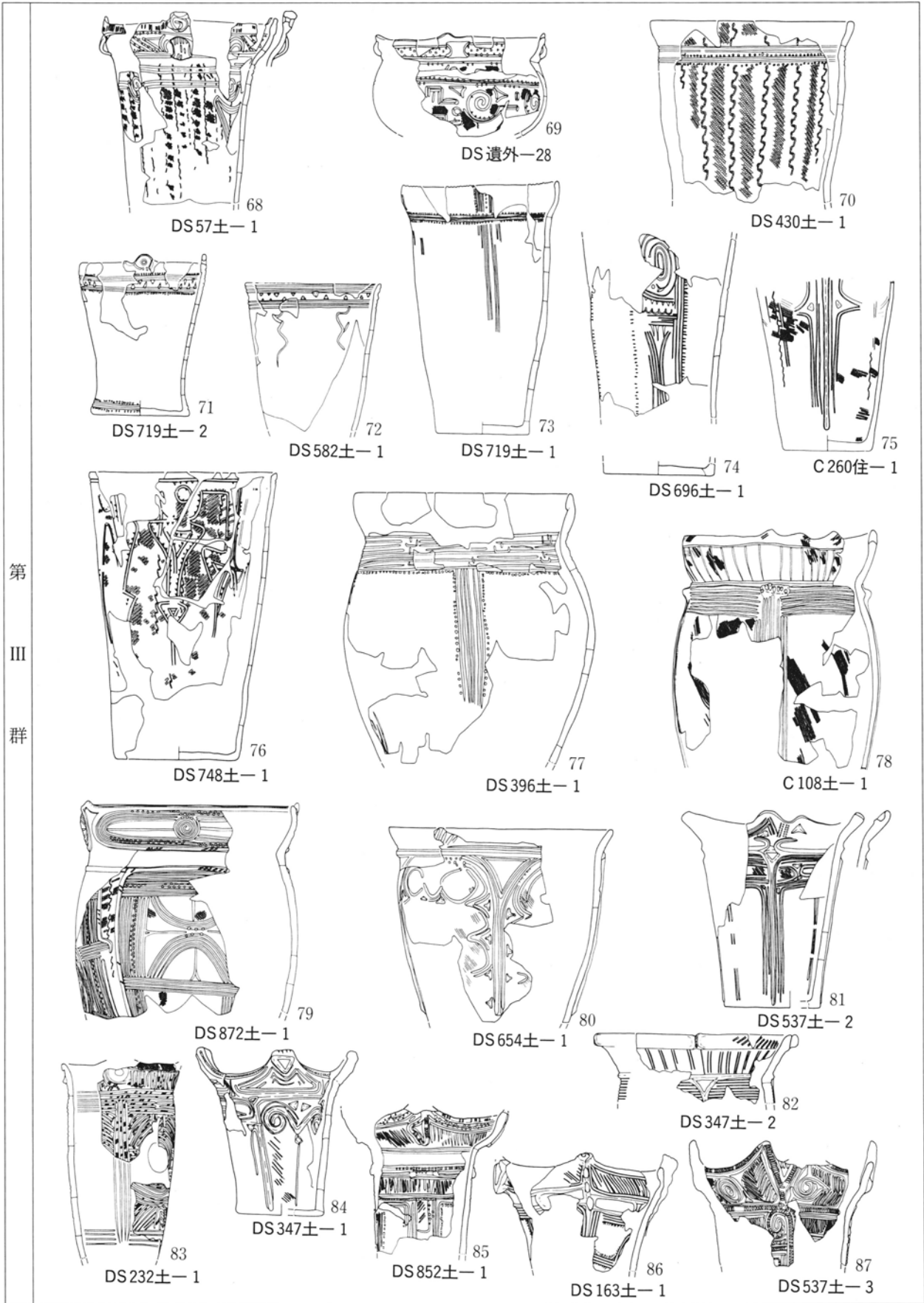


第778図 土器分類図(1)

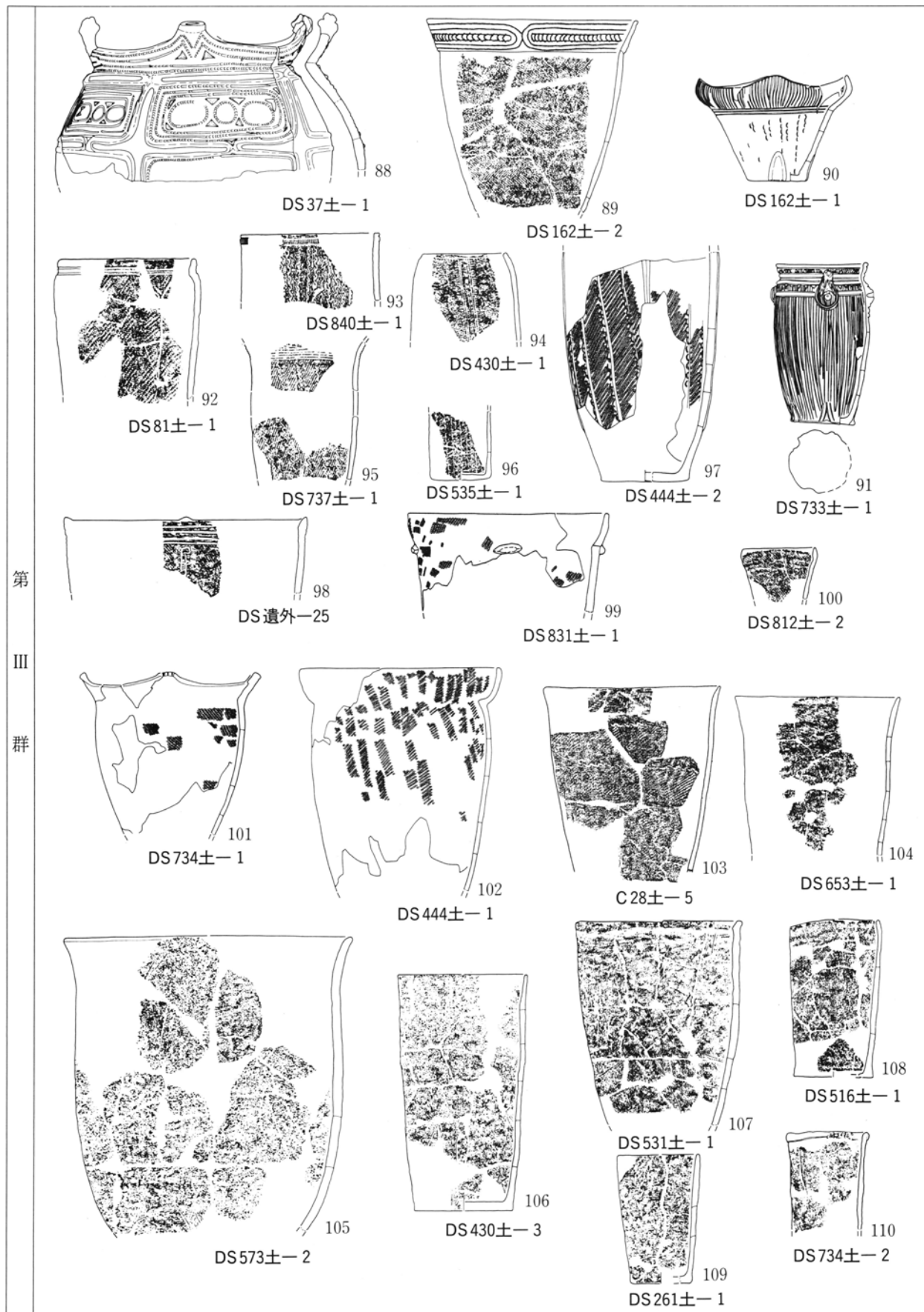


第779図 土器分類図(2)

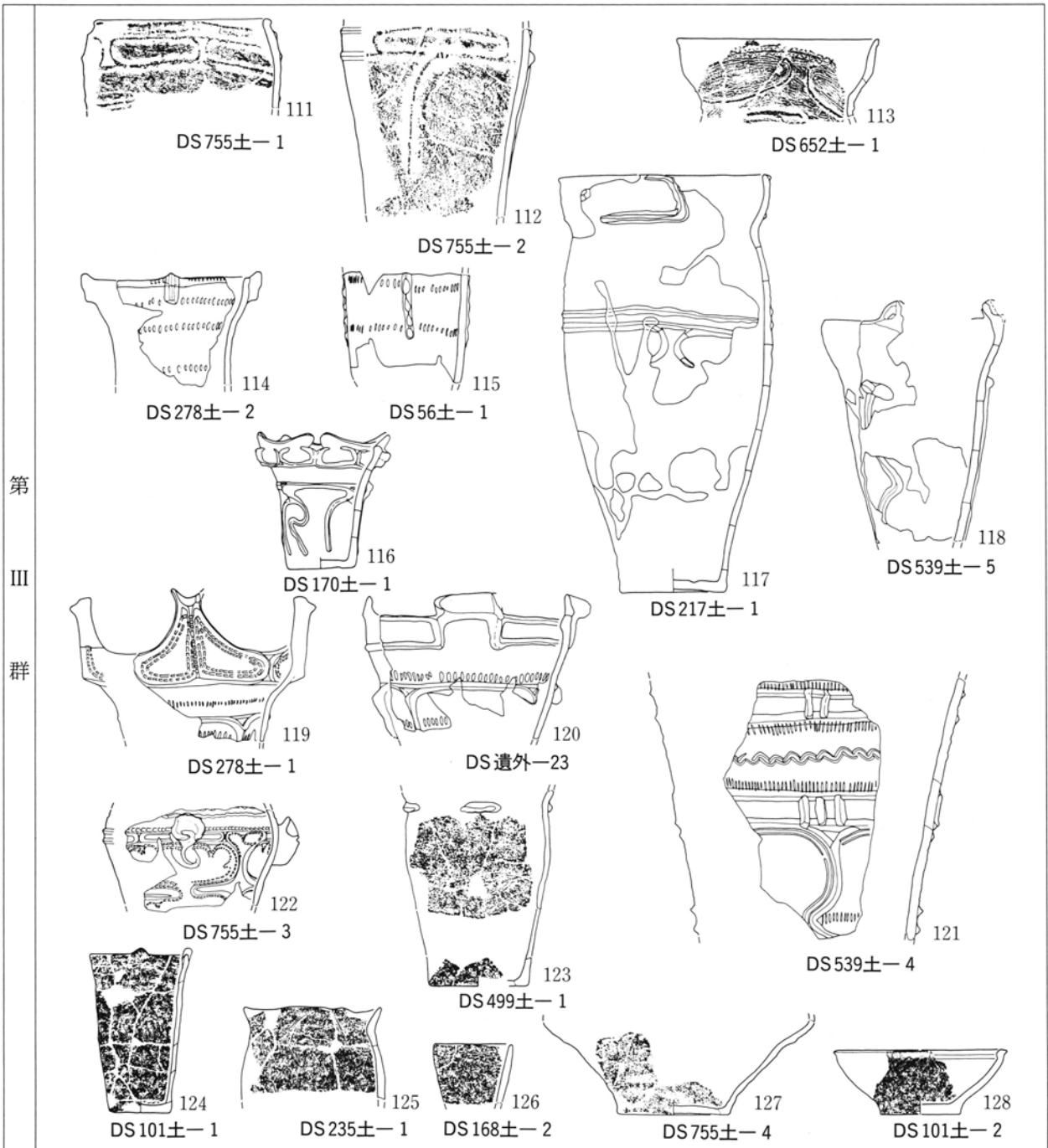
第
III
群



第781図 土器分類図(4)



第782図 土器分類図(5)



第783図 土器分類図(6)

に突起を持つものも見られる。53・58・67は口縁部に付された突起部分からつながる垂下隆帯が見られる。57は中央に円孔を持つ円形文。また、51・61は口縁屈曲部に4単位の横位棒状貼付文が見られる。51～53・56・61・63は口縁部に縦方向の細沈線による刻み、または捺糸圧痕文が付される。これらの土器は基本的に胴部下半に縄文が縦位充填施文される。さらに、胴部に縄文を持つものは、口縁部文様帯下(第2文様帯)の縦位沈線文様部分にも、地文に縄文を持つ。50・53・56・58・59・61・64などである。58・64は縦位の沈線が施文されず、縄文のみが見られる。67は無文帯となる。また50・54・55・62は胴部に「Y」字状文が見られる。51・65・66・67は胴部文様帯部分に平行沈線により渦巻文、鋸歯文、「Y」字状文等が描かれる。58は口縁部文様帯に縦位の捺糸文Lが見られるが、縦位沈線文の置換とも見られる。

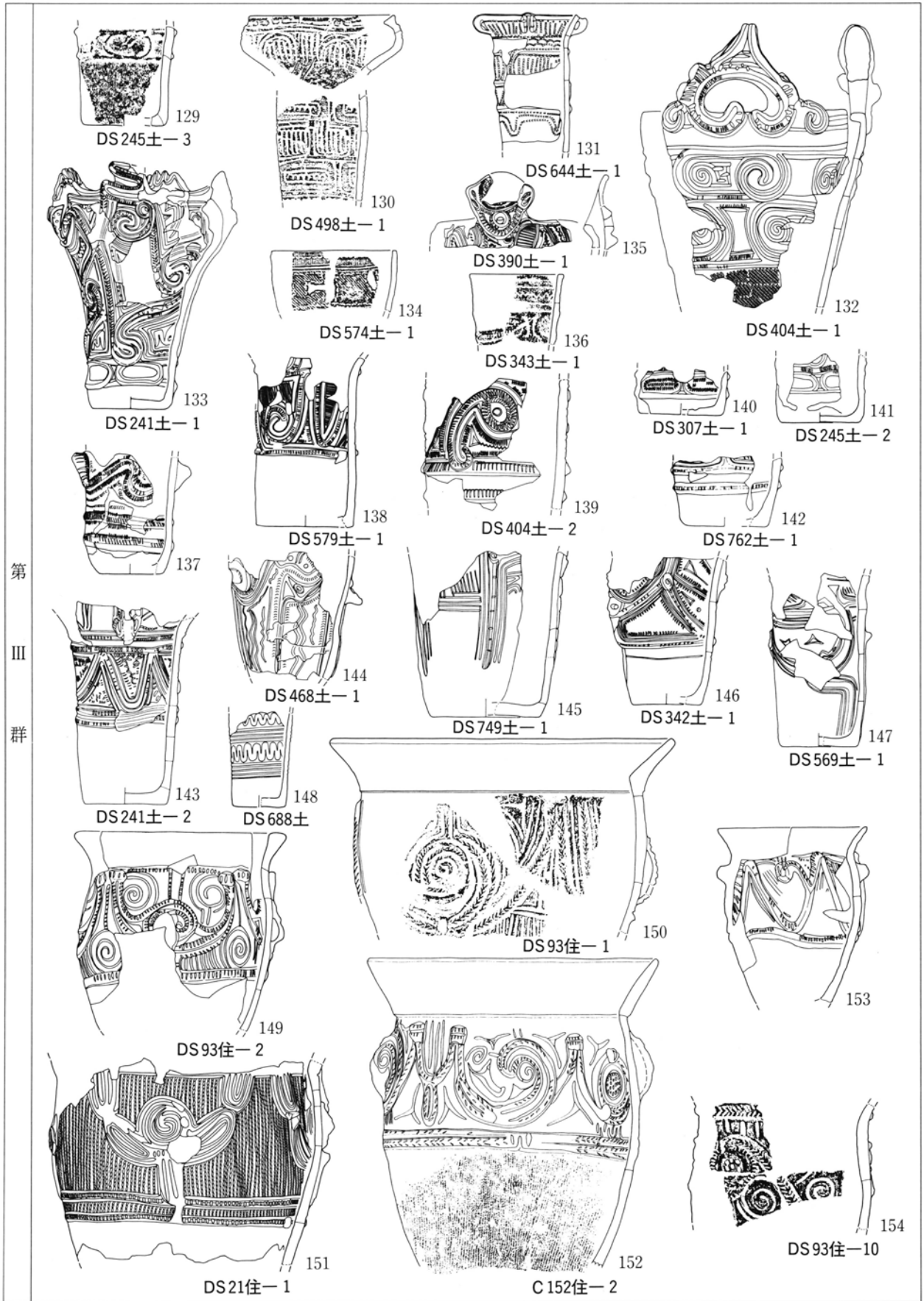
第781図には縄文系の一群を示した。いわゆる関東系の五領ケ台式とされるものである。68・69は前者は円筒形の胴部に口縁部が内湾する器形を呈し、後者は球胴形の胴部に頸部が「く」の字に折れてわずかに外反する口縁部が付く対称的な器形を呈す。共に4単位の突起を有し、口縁部文様帯部分に4単位の橋状把手が付く。68は口縁部に縦位の沈線、口縁部文様帯には刺突文を伴う沈線で平行線、三角形、孤線文が描かれる。以下横位の2段の平行沈線が施されるが、下段には渦巻文を伴い、渦巻文下位には重三角形が描かれている。胴部には結節を伴う縦位の縄文が施文されている。69は口縁部文様帯部分には刺突文が横位に3列配され、横位の沈線で画された胴部には三角、コの字状、円形、渦巻等の幾何学文様が部分的に刺突文を伴う沈線で描かれ、地文には縄文が施文されている。いずれも古段階に置かれるものである。70は円筒状の胴部にやや外傾する口縁部が付く、口縁部文様帯を持たず、頸部に2段の平行沈線が廻り、下段の沈線外側に沿って刺突文が付される。口縁部から胴部にかけては結節を伴う縦位の縄文が施文されている。71・72・73も円筒状を呈し、頸部に横位沈線が廻されることで、同種とされるものである。横位沈線に刺突文(71・72は沈線間に三角形の交互印刻文)を持ち、胴部に縄文は施文されない。71は口縁部に円孔を持つ円形突起を持ち、外側に張りだした胴下部にも刺突文を伴う平行沈線が廻る。72は沈線から波状沈線文が垂下、73は口縁部から胴部にかけて縦位の沈線文、おそらく4単位と思われる。また口縁部は細かな小波状を呈す。77・78は胴部が樽状を呈す器形で頸部から胴部にかけて「T」字状の集合沈線文が描かれている。77は沈線外側に刺突文を伴い、横位沈線は部分的に途切れ、その部分には「山」字状の沈線文様が描かれる。78は口縁部に縦位の並行沈線、頸部交点部分に刺突文を持った突起文が付され、口縁部から胴部にかけて縄文が施文されている。74・75・76はいずれも円筒状を呈し、胴部には縦区画の文様が描かれているものである。74は平行沈線により渦巻文、直線文、連弧状文を組み合わせたモチーフを描く。両側には刺突文が配され、文様中にも三角形を意図した刺突文が所々に付される。75は垂下隆線の両側に沈線による左右対称となる「ト」字状のモチーフを描く。隆線をはさみ一对の三角文が見られる。他にも縦位の沈線、曲線文が見られるが器面の摩滅が進んでおりはっきりとしない。地文の結節を伴う縄文が観察できる。この土器はC206号住居跡の埋設土器であり、検出例の少ない中期初頭の住居として、時期の特定ができる本址は特記されるものである。79は口縁部に楕円文、渦巻き文を組み合わせた区画文を有し、胴部には集合沈線により区画された中に上下からの弧状文が描かれている。この文様モチーフについては長野県内にその類例を見ることができる。80・81・82は頸部から垂下する隆帯による「Y」字状文が見られる点で、ともに後半代に位置づけられるが、口縁部の形状、文様に違いが見られる。83は胴部にあまり膨らみを持たない円筒状の土器である。口縁部は円形文の上やや盛り上がった小波状を呈す。口縁部に地文帯、胴部には沈線で画された区画内に同心円文が描かれている。84・85・86・87は同様の器形を呈し、4単位の波状口縁で波頂部分には刻みが付され、三角文Y字文などが見られる。84は沈線による三角文、渦巻き文様が描かれ三角印刻文も見られる。85・86・87は隆帯で区

画された区画文内に集合沈線文が見られる。いずれも終末段階に位置づけられる一群と考えられる。88は4単位の肥厚した波状口縁を持ち、胴部は球胴を呈す。口縁に沿って2条の結節沈線が廻り、突起下は山形となる。胴上位部分には隆線と結節沈線とで長方形の区画がなされ、中には円形文、三角印刻文が配されている。東関東系の過渡的な様相を持つもので、本地域においては希な土器である。また89・90・91についても異系統の土器として図示した。92・93・94・95・96・97・98はともに縄文主体の文様を持つものである。92・93は口縁に沿って沈線、刻みを持つ隆帯が巡らされる。94については口縁部がすぼまるやや変わった器形である。95は頸部横線が見られ、口縁部に文様帯を持つものと思われる。97は縦位の隆線、沈線が見られる。98は4単位の小波状を呈し、横位沈線と蕨手状の沈線文が垂下する。99は受け口状の器形を呈す、頸部に4単位の棒状突起が付され、縄文がまばらに施文される。101・102・103は縄文のみ施文された一群である。104・105・106・107・108・109・110は器形、口縁部形状、胎土に違いが見られるが本群の無文土器として図示した。

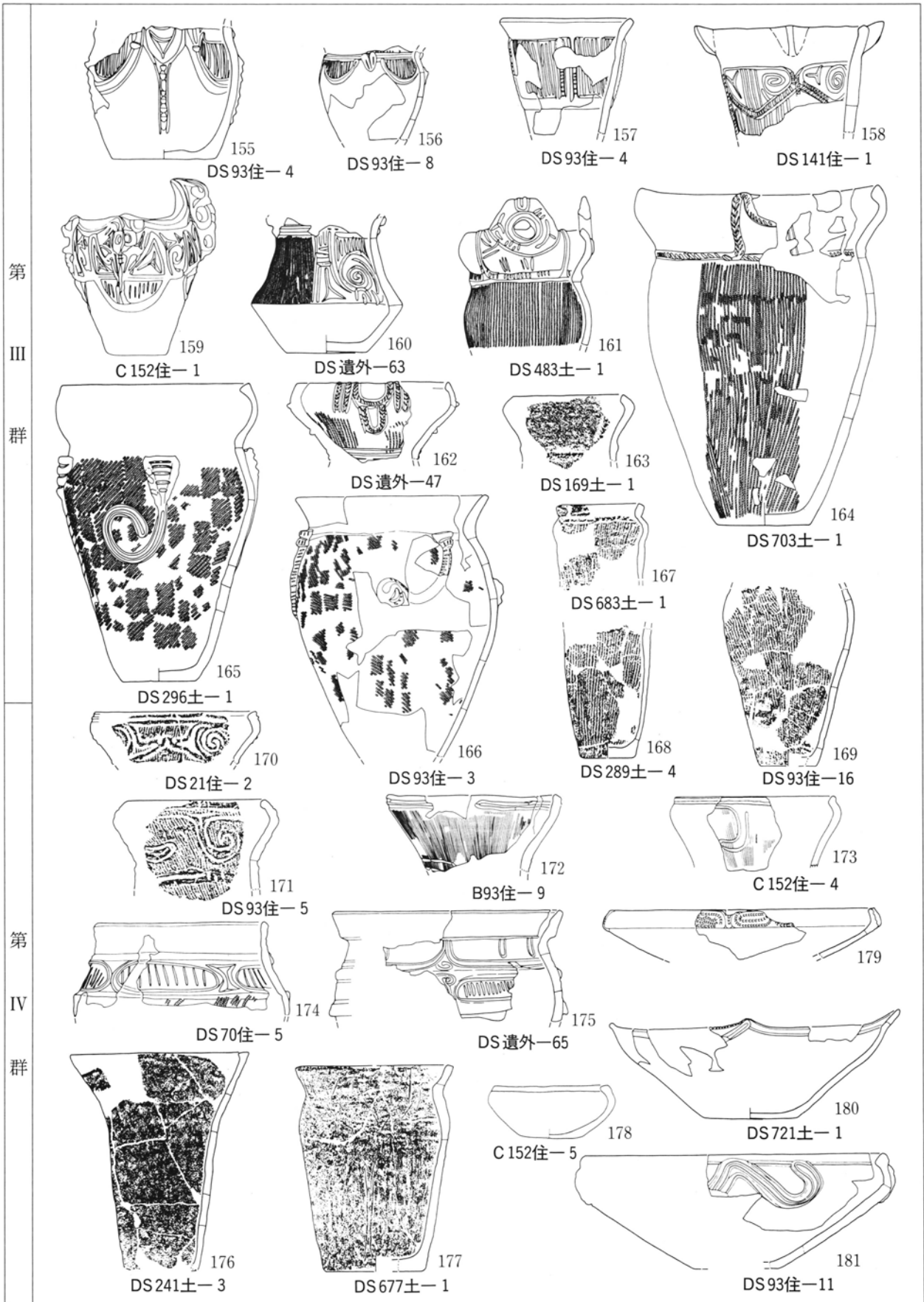
第III群は阿玉台式である。本類に属する土器は点数的には多くはないが、五領ケ台式期に後続する部分として、土坑がわずかに検出されている。以下、施文による分類を行い出土土器を図示しておく。111・112は隆帯による楕円文が横位に区画され、隆線が垂下し、隆線の接点部分が瘤状となる。113は口縁部に交互刺突文を伴う沈線が廻り、口縁部には隆線による楕円文が配され、内側に複数の沈線が見られる。頸部には横位隆線。117・118は無文の体部に横位、垂下隆帯文が付される。117は口縁部にコ字状文、胴部には2本の横位隆帯文が廻る。118は口縁部に円孔を持つ突起が付され、胴部には隆線による垂下文。116は4単位の扇状把手を持ち口縁部には隆帯による上向きC字状文、無文帯を持ち横位隆帯により画された胴部には隆帯による曲線文が垂下する。114は肥厚し刻みを持つ口縁部に4単位の突起文が付され、胴部には爪形文が横位に付される。115は押圧を持つ4単位の垂下隆帯、横位爪形文が付される。119・120・122は4単位の扇状把手を持ち、口縁部、胴部文様帯を画す。隆帯による曲線文を配し、連続結節文、爪形文を伴う。121はやや外傾しながら直線的に立ち上がる。124・125・126・127・128は無文土器である。124は円筒状を呈し口縁部に三角形の突起を持つ。125は頸部で括れ口縁部は外反する。126は小型土器である。127・128は浅鉢である。

第784図は勝坂式土器である。該期の遺構はDS区において住居跡および土坑が、C区において住居跡が検出されている。出土土器は隆帯による横位区画文を持つ、129・130・131・132などの他に胴部下位に楕円区画文を有す133・140・141などが見られる。また隆帯による曲線文を持つものは、隆帯上または両側に連続爪形文を伴っているものが多い。133は胴部から口縁部分にかけて隆帯による立体的な文様が見られるもので、県内においてあまり類例を見ないものである。149～154はやや丸みを持った胴部で、頸部「く」の字に折れて口縁部分は外反する器形呈す。胴上半部の文様帯には隆帯による渦巻き文、「Y」字状文を主体とした曲線文が描かれる。胴下半部分は無文ないしは縦位の撚糸文が見られる。151は文様帯部の地文として撚糸文が施文されている。これらの土器は勝坂期終末における特徴的なモチーフを持った一群として、県内においてその類例を見ることができる。155～158についても前述した土器群に伴う一群としてとらえることができる。159は隆帯による抽象文が見られる、160は胴部が算盤玉状を呈すものである。161～166は文様要素が少なく隆帯により口縁部または胴部にわずかに付されるものである。地文には縄文、撚糸文が施文される。167～169は縦位に全面撚糸文が施文される。170～173は口縁部に沈線による渦巻き文、鈎状文様を持つものである、地文には撚糸文、条線文が施される。174・175は隆帯による楕円文を持つ、楕円文内は縦沈線が充填される。176・177は無文土器、178～181は浅鉢形土器である。

第786～788図は加曽利E式土器である。182～193は口縁部文様が隆帯で描かれ、文様の地文に縄文が見られる。194～199は口縁部楕円文の中が縦沈線文が充填され、胴部には縦の沈線文の他、渦巻き文様、弧状文

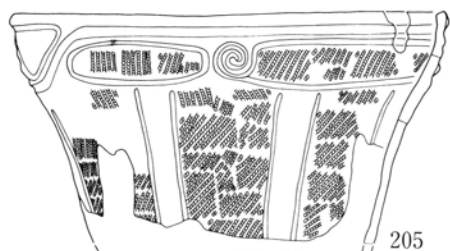


第784図 土器分類図(7)

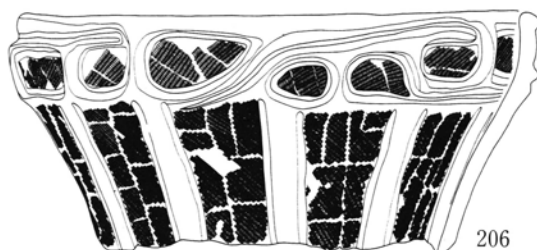


第785図 土器分類図(8)

第
IV
群



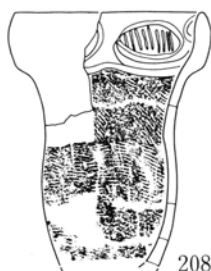
205
DS70住-1



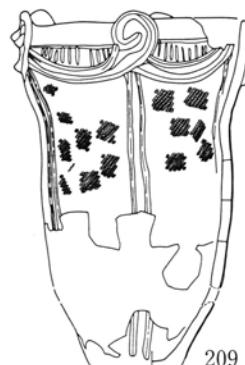
206
C 1埋ガメ



207
DS37住-2



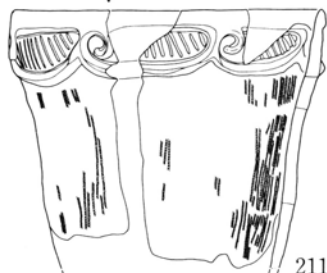
208
DS37住-5



209
DS33住-2



210
DS93住-6



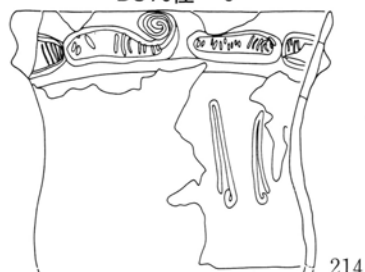
211
DS70住-6



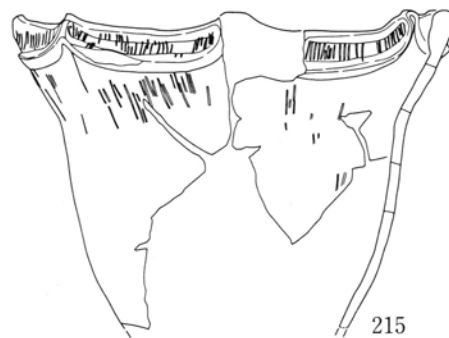
212
DS70住-2



213
DS70住-3



214
DS33住-4



215
DS52住-1



216
DS33住-1

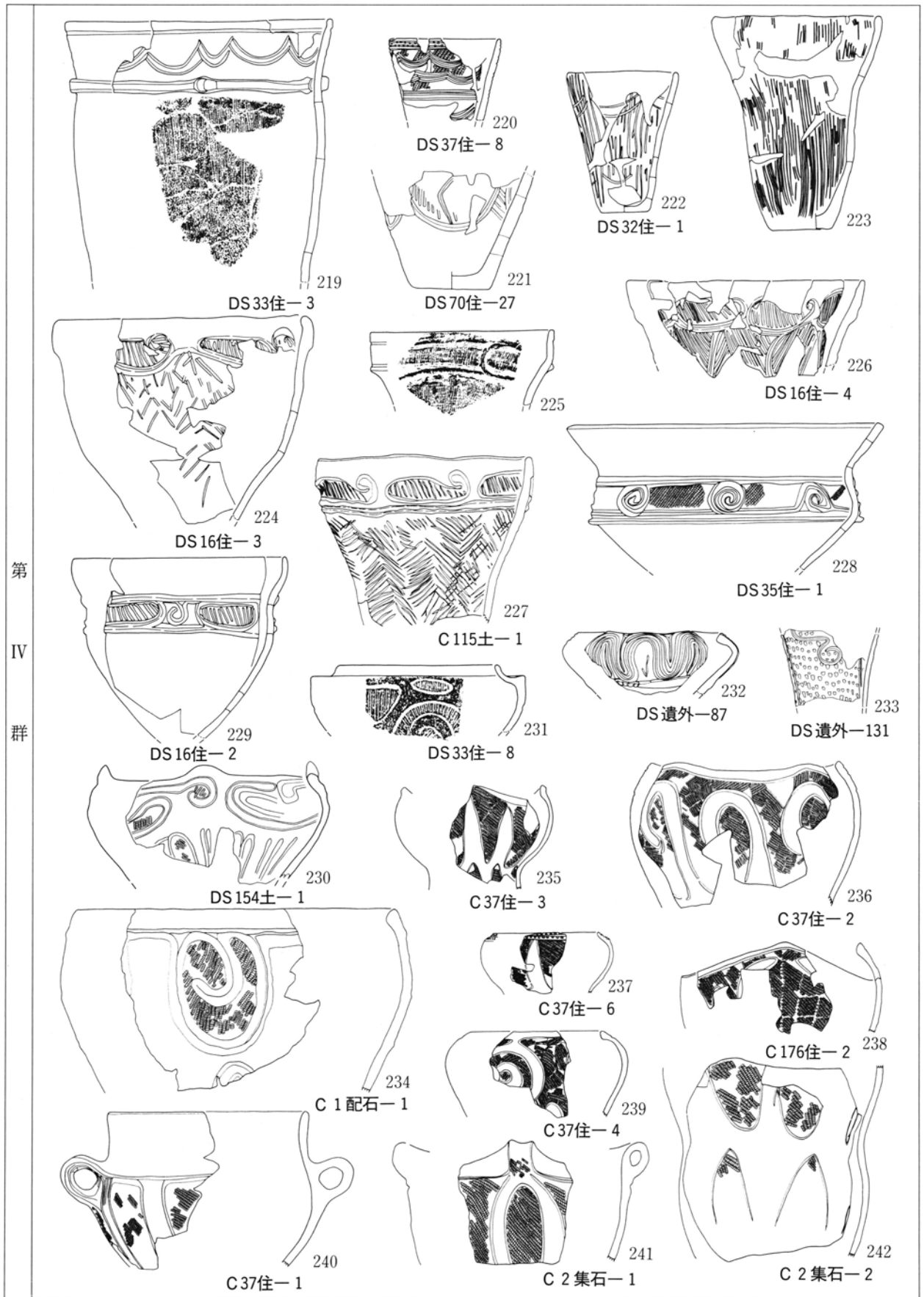


217
DS33住-5

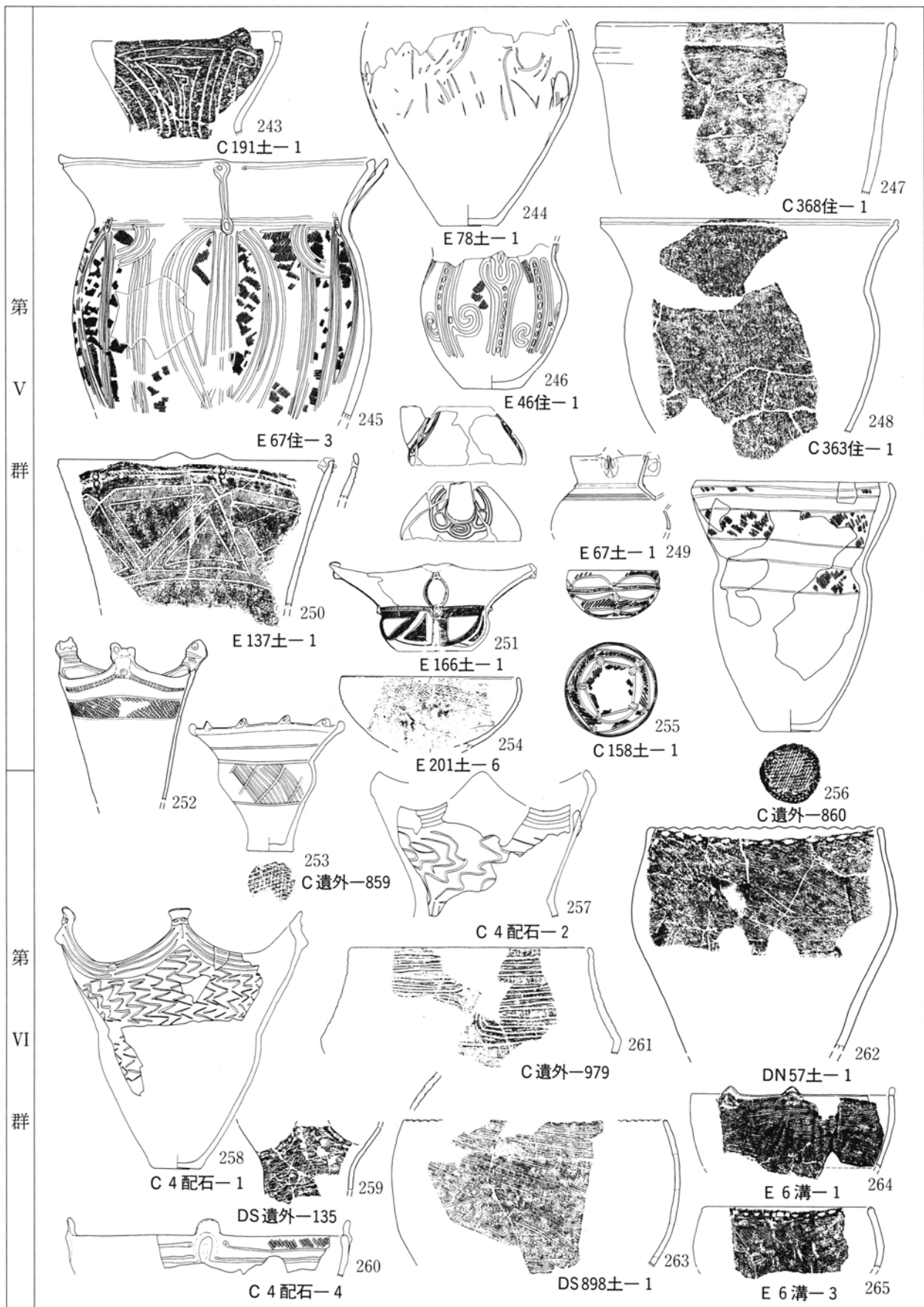


218
DS33住-6

第787図 土器分類図(10)



第788図 土器分類図(11)



第789図 土器分類図(12)

第5章 まとめ

が描かれている。211～213・215は胴部に粗い撚糸文、沈線も文が見られる。216・217は胴部文様に隆帯による渦巻き、蕨状の垂下文様が描かれる。219～222は連弧文が見られる。224・226・227は胴部に沈線による綾杉文が見られる。230～242は加曾利EIV式土器である。243・244は称名寺式土器である。243は弥生時代の住居下で検出された土坑から出土している。沈線文間に縄文が充填されている。244は沈線文様が崩れ、列点文がまばらに付される。245・246は堀之内1式である。口縁部に横位沈線、頸部と口縁部を結ぶ連結隆帯、胴部には並行沈線による直線文、弧状文。246は渦巻き文様が見られる。247・248は口縁部に横位の隆帯、沈線が見られるが以下無文である。249は注口土器。250はS堀之内2式土器、口縁部に刻みを持つ隆帯、8字状文が見られ磨り消し縄文で連続三角文が描かれる。251は口縁部が大きく開いた浅鉢形土器。252～255は加曾利B式土器。257～260は高井東式である。口縁部4単位の波状を呈しやや肥厚し浅い沈線が付される。胴部には羽状の沈線文が見られるが、257は崩れている。262～265は口縁部がやや内屈する器形を呈し、口唇部分には押圧文が見られる。胴部には全面に条痕文。縄文晩期から弥生時代に位置づけられようか。

参考文献

- 赤山容造他 1990 「三原田遺跡 第2巻」群馬県企業局
秋池 武 1965 「群馬県における有尾式土器」栃木県考古学研究9
秋池 武・新井順二 1983 「群馬県における神之木・有尾式土器について」信濃35-4
新井和之 1979 「黒浜式土器研究の問題点」土曜考古創刊号
// 1979 「黒浜式土器小考」日本考古学研究所集報II
// 1981 「黒浜式土器小考追録(その1)」奈和 19
// 1982 「黒浜式土器」縄文文化の研究3
// 1983 「黒浜式土器小考追録(その2)」土曜考古7
// 1985 「黒浜式土器研究の現状と今後の課題」土曜考古 10
新井 仁他 1992 「野上塩之入遺跡・塩之入城遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
// 1993 「内匠上之宿遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
石塚 茂 1988 「勝保沢中ノ山遺跡I」群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団
市川 修他 1975 「高井東遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査報告 第5集 埼玉県教育委員会
今村啓爾 1982 「諸磯式土器」縄文文化の研究3
// 1985 「五領ヶ台土器の編年」東京大学文学部考古学研究室研究紀要第4号
鶴飼幸雄 1977 「平出三類A土器の編年的位置づけとその社会的背景」信濃29-4
大塚昌彦 1987 「行幸田山遺跡」渋川市教育委員会
奥野麦生 1992 「黒浜式における格子目文土器成立についての覚書」埼玉考古 第29号
// 1989 「黒浜式土器の系統性とその返遷」土曜考古 13
小野正文他 1986 「釈迦堂I」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17冊
柿沼恵介・右島和夫他 1986 「分郷八崎遺跡」北橋村教育委員会
金井正三 1982 「縄文前期有尾式土器の再検討」信濃 34-4
金子直行 1986 「中矢下・夕日ノ沢・上前原沢・芝口ヲネ・後山北谷・滝尾塚」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第57集
// 1989 「縄文前期中葉における大形変形文系土器群の成立と展開」埼玉考古25
// 1990 「シンポジウム 大木、有尾、そして黒浜」埼玉考古別冊3
金子浩昌・和田 哲他 1958 「館山鉦切洞窟の考古学的調査」早稲田大学考古学研究室報告 第6冊
菊池 実 1986 「三後沢遺跡・十二原II遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
木村 收他 1992 「内匠諏訪前遺跡・内匠日影周地遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
木村 收他 1994 「白倉下原・天引向原遺跡」群馬県埋蔵文化財調査事業団
黒坂慎二 1985 「宮ヶ谷塔遺跡群発掘調査報告」大宮市文化財調査報告第18集 大宮市教育委員会
// 1989 「羽状縄文系土器の文様構成(点描)一1」埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要6
// 1989 「羽状縄文系土器様式」縄文土器大観 1
小林謙一 1993 「群馬県における前期終末の様相」縄文前期終末の諸様相 縄文セミナーの会
// 1995 「南関東地方の五領ヶ台式土器群」中期初頭の諸様相 縄文セミナーの会
鈴木徳雄 1995 「称名寺式における充填列点紋の成立」群馬考古学手帳 5
関根慎二・谷藤保彦 1987 「糸井宮前遺跡II」群馬県埋蔵文化財調査事業団
千田茂男 1990 「榎木畑遺跡」安中市教育委員会
大工原豊他 1994 「野谷地区遺跡群」安中市教育委員会
田川幸生 1995 「山ノ内町伊勢宮遺跡の柄鏡形敷石住居址」研究紀要 第1号 長野県立歴史館
竹島国基 1981 「千葉県柏市布施山ノ田台遺跡発掘調査報告書」柏市教育委員会
// 1988 「宮田貝塚」福島県相馬郡小高町教育委員会

- 谷藤保彦・関根慎二 1993 「前期終末の諸様相」 縄文セミナーの会
 // 1995 「中期初頭の諸様相」 縄文セミナーの会
- 寺崎祐助 1993 「鍋屋町式土器について」「前期終末の諸様相」 縄文セミナーの会
- 寺村光晴 1960 「鍋屋町遺跡」 柏崎町教育委員会
- 徳江秀夫他 1985 「荒砥二之堰遺跡」 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 戸田哲也 1988 「横浜市三枚町遺跡発掘調査報告書」 玉川文化財研究所
- 戸田哲也・渋谷昌彦 1977 「神ノ木・有尾式土器の研究（前）—茅野市神ノ木遺跡採集の資料を中心として」 長野県考古学会誌34
- 鳥羽政之 1985 「見立溜井・見立大久保遺跡」 赤城村教育委員会
 // 1987 「黒浜式土器研究の問題点」 縄文セミナー発表要旨
- 富沢敏弘 1985 「中棚遺跡・長井坂城跡」 昭和村教育委員会
- 中村富夫 1986 「善上・三峰神社裏・大友館址」 月夜野町教育委員会
- 西村正衛 1961 「千葉県市川市国文旧東練兵場貝塚」「早稲田大学教育学部学術研究」第10号
 // 1966 「茨城県稲敷郡浮島貝ヶ窪貝塚」「早稲田大学教育学部学術研究」第15号
 // 「茨城県北相馬郡取手町向山貝塚—東部関東における縄文前期後半の文化研究—その2」
 // 1967 「早稲田大学教育学部学術研究」第16号
 // 1968 「茨城県稲敷郡興津貝塚」「早稲田大学教育学部学術研究」第17号
 // 1984 「石器時代における利根川下流域の研究」 早稲田大学出版部
- 芳賀英一 1984 「青宮西遺跡」 会津高田町文化財調査報告書5 会津高田町教育委員会
- 福島邦男 1989 「平石遺跡」「望月町文化財調査報告書 第17集」 望月町教育委員会
- 藤巻幸男・石坂 茂 1996 「群馬県出土の土偶」 研究紀要13 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 堀越正行他 1992 「堀之内貝塚資料図譜」 市立市川考古博物館研究調査報告 第5冊 市立市川考古博物館
- 三上徹也 1986 「梨久保遺跡」 郷土の文化財15 長野県岡谷市教育委員会
 // 1987 「梨久保式土器再考」「長野県埋蔵文化財センター紀要」1
- 宮下健司 1995 「長野県における縄文時代後期の土偶」「研究紀要」第1号 長野県立歴史館
- 向坂綱二 1961 「長野県中之沢出土の土器と土製耳飾り」「第四紀研究2-1」
- 茂木允視他 1985 「見立溜井遺跡・見立大久保遺跡」 赤城村教育委員会
- 百瀬新治 1982 「阿久遺跡」 長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書1
- 山下歳信 1986 「上大屋・樋越地区遺跡群」 大胡町教育委員会
- 山口 明 1978 「縄文中期初頭土器群の分類と編年—関東・中部地方を中心にして」 駿台史学43号
- 山内清男 1929 「関東北に於ける織維土器」 史前学雑誌1-2
 // 1929 「関東北に於ける織維土器追加第一」 史前学雑誌1-3
 // 1930 「関東北に於ける織維土器追加第二」 史前学雑誌2-1
 // 1930 「関東北に於ける織維土器追加第三」 史前学雑誌2-3
 // 1939 「日本先史土器図譜」 先史考古学会

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1. 弥生土器について

本遺跡出土の弥生土器は中期と後期にわたり、その数量は報告書に掲載したもので2,450個体を越える。そのうち主体を占めるのは180棟を越える竪穴住居跡から出土した後期所産の土器である。南蛇井増光寺遺跡は南から調査区を4区分し、それぞれをB区・C区・DS区・DN区と呼称して調査が行われた。報告書もこの区分に準じて刊行され、そのうちB区では約350個体(伊藤1992)、DS区では約200個体(飯塚ほか1997)、C区を扱った本報告書では約1,900個体の弥生土器を掲載してある。すでにB区の土器については地域色の問題を取り上げ、また客体的な縄文施文土器群の存在にも注目している。ここでは、これらの問題点を視野に入れながら、主に後期の土器を対象として器種分類と用途に関する考察、時間軸に位置付けるための編年的考察、および地域色抽出のための型式学的分析を試みる。対象は本遺跡出土の土器とするが、北方に隣接し同時期の集落が検出された中沢平賀界戸遺跡(桜井1996)についても必要に応じて取り上げる。

なお、ここで取り上げるC区以外の土器については、既刊の各区の報告書に掲載されている。

(1) 器種の分類

主に形態的特徴から壺、短頸壺、甕、台付甕、高杯、台付壺、鉢、有孔鉢、片口・注口鉢、蓋、小壺・小甕、ミニチュア土器に大別される(第790図)。

壺 口縁が朝顔形に外反して開き、頸部で「く」字状にくびれて中位～下位が張り出すか球形を呈する胴部をもつ器形を基本とし、その大きさによって器高30cm以上、底径10cm以上を大型、器高20～30cmを中型、器高20cm以下を小型と細別する。大～中型品で器高の判明する例は少なく、実際分類作業では副次的基準として口径による大小を用いた。ただし口径が大きくても器高の低いものも少ないながら見られることから、大型品と中型品の峻別が困難な場合が多い。従って、後述する型式分類や器種組成の数量把握には大～中型品として一括した。器高50cm前後の大型壺と25～30cmの中型壺が数量的に主体をしめる。小型壺は器形のバラエティーが多く、食卓用や少量保存用などそれぞれの用途に即した形態を示すと思われる。

短頸壺 壺に比べて頸部直径が広く、口縁が弓なりに外反し肩の張る倒卵形を基本形態とする。「鉢」とも呼べる器形(小山1987)であるが、口縁に蓋をつなぎ留める孔がしばしば見られ、全体に赤彩を施すのを基本としており、また胴下半部に被熱痕が全く見られないことから、貯蔵容器として用いられたのは明らかである。このことから壺類の一形式として扱うのが妥当と思われる。大きさによって大中小に三分され、最大のは容量が15ℓに達し、最小では500ccに満たない。

甕 口縁が直線的に開き、頸部で「く」字状にくびれて、上位～中位が張り出すか球形を呈する胴部を経てやや突き出た安定した平底をもつ形態を基本とする。大きさによって口径15cm、器高20cmを境に大型と中型に分けられ、更に器高15cm以下の小型も含めてほぼ三細分される。容量でみると、大型品は最大で12ℓに達するのも見られるが、おおむね3.5～9ℓ前後に幅広く分布し、中型品は1.5～3ℓ、小型品は500cc～1ℓに集中する傾向がある。

台付甕 短く外反する口縁から頸部は「く」字状にくびれ、肩の張る扁球形の胴部と截頭円錐形の脚部をもつ形態を基本とする。甕と同様に大中小と大きさから三分できるが、その違いは甕ほど明確ではない。最大のは容量3.2ℓを測るが数量は少ない。主体は1.2ℓ前後の中型品と500～900ccの小型品が占めている。また、200～400ccの極小型品は同じ形態ながら赤彩品や被熱痕のないものが見られ、食卓用や祭祀用など別

の用途も想定される。

扁平壺 短頸壺を扁平で小型化した形態で、口縁に孔は見られない。

高杯 杯部が内湾して開き、背の高い截頭円錐形の脚部を付す形態を基本とし、口縁形態と杯部湾曲の度合にバリエーションが見られる。杯部の深いものは「脚付き鉢」として分ける方法もあるが、深さの程度は漸移的でありその境界が明瞭でないことから、これらを一括して高杯とした。大きさから口径30cm前後の大型品と、20cm前後の中型品、15cm以下の小型品に三分される。容量は大型品が1.8～2.6ℓ、中型品は0.6～1.3ℓ、小型品は100～500ccに集中する。

台付壺 口縁や頸部がすぼまり、扁球形の胴部に截頭円錐形の脚部がつく形態で、器面は赤彩を施し丁寧に研磨される。台付甕に近似する形態だが、被熱痕は認められない。高杯と同様に飲食物等を盛る容器だろう。深く頸部がすぼまることから主に液体用と考えておきたい。なお、ここでは容量約1.5ℓのものを扱ったが、この小型品としては、台付甕の極小型品としたものが相当するだろう。

鉢 逆截頭円錐形の形態を基本とし、器高の高低と湾曲の程度にバリエーションが見られるが、他の器種に比べてきわめて画一的である。大きさから、口径20cmを越える大型品、15～18cmの中型品、15cm以下の小型品におおむね三分できるが、中小型品には明瞭な規格差はみられず、中間的な大きさも存在する。これは大型品が共用、中小型品は銘々の器としての容量の大小差があったものだろう。容量は、大型品が1.5～3.5ℓ、中小型品が100～900ccに分布する。200cc以下のものはいかにも小さく同一形態ながら500ccを越える中型品と同じ用途とは考えにくい、現在われわれが使用している「丼」「ご飯茶碗」「手塩皿（小皿）」のような使い分けに相当するものかもしれない。

有孔鉢 截頭円錐形か円錐形を逆にした形状で、底部に一孔を穿つ形態を基本とする。鉢に比べて器高が高いものが多く、器高の低い浅鉢形は見られない。大きさは口径20cm前後、器高12cm前後に集中しており、甕に見る大中小の差はない。容量はほぼ1.2ℓ前後（7／13個体）と2ℓ前後（5／13個体）に二分される傾向が認められるが、見た目では大差はない。底部の孔径は8～24mmの間に分布しており、そのうち14～18mmに全体の55%（21／38個体）が含まれ、10mm以下が24%（9／38個体）、20mm以上が11%（4／38個体）となる。孔径の大小は口径、底径とは全く無関係である。この範囲の中であれば機能に問題はなかったと想定される。

片口・注口鉢 口縁が内湾する鉢の形状で口縁の一箇所をくぼませて小さな注ぎ口を設けた形態を基本とする。なお、皿状の浅鉢形で注ぎ口のついたものは鉢に含めた。容量は0.2～1.6ℓと幅があり、有孔鉢よりはやや小さく、小型甕とほぼ同量の大きさといえる。

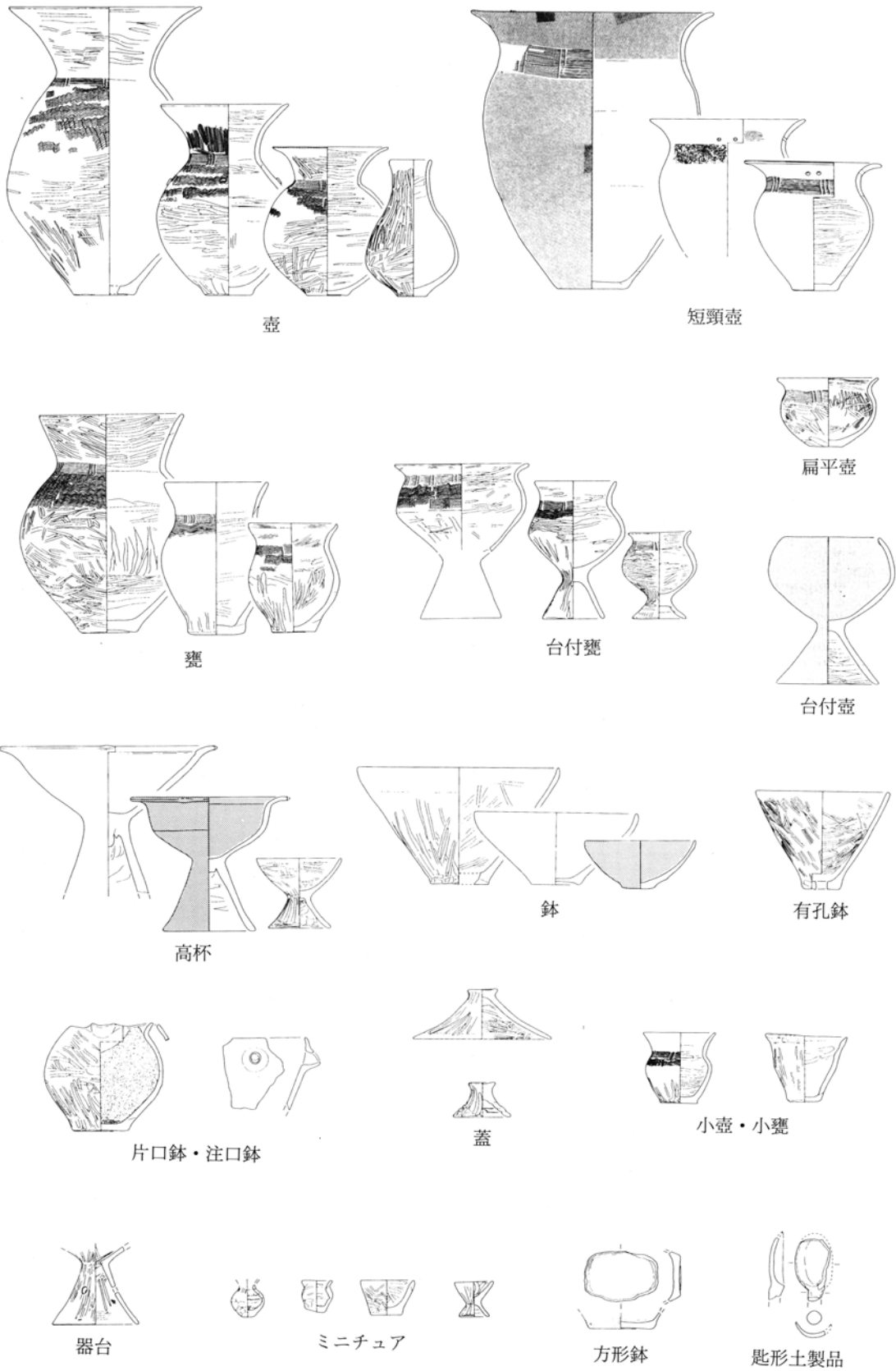
蓋 裾の開く円錐形を基本形態とし、甕用と思われる大型品（口径20cm前後）、小型壺用と思われる小型品（口径10cm前後）がある。鈕の形態にいくつかの変化が見られる。

小壺・小甕 甕の形状をそのまま縮小した形態を呈する一群である。「小壺」としたのは、赤彩品や短頸壺・無頸壺形があり、また被熱痕が全く見られないことからコップのような食卓用や少量貯蔵の機能を想定したためであり、「小甕」は形態や文様が甕と共通するものとした。容量は100～350ccの範囲で、200cc前後が多い。

器台 器受け部が小さく直線的に開き、脚部が円錐形に開く小型品。

ミニチュア土器 実用品ではない小型品を一括する。基本的に実用器種の形態を模倣しており、壺、甕、鉢、高杯、有孔鉢、器台（蓋か）が揃う。

方形鉢 扁平な隅丸長方形の平面形を呈する鉢で、特殊例といえる。木製鉢や槽をモデルとしたものであろうか。



第790図 器種の種類

匙形土製品 完形品はないが、楕円形の浅い椀状部に断面円形の棒状把手をつける。

(2) 各器種の用途について

器高1mで容量が50ℓにも達するような据え置き用と思われる極大型壺は、絶対量は少ないものの各竪穴住居からの出土土器組成から、1棟に1～2個体を保有していたと思われる。28号住では実際に直立して据え置かれた状態のまま検出されており（第120図）、竪穴での使用法を示す例として注目される。

器高50cm前後の大型壺と25～30cmの中型壺が最も数量的に主体をしめるが、これらは底面が磨滅していることが多く、前者は移動可能な据え置き用、後者はこれに加えて運搬用にも用いられたと想定される。なお、編み包みの痕跡を残すものは認められなかったが、住居の梁などから吊り下げて使用するものも当然考え得る⁽¹⁾。

短頸壺は頸部径が広く出し入れが容易な形状をもつことから、内容物は液体よりも固形物がふさわしいと考えられる。ただし、大型品～小型品の大きさによる使い分けは当然考えられるし、内容物もこれに対応したと考えられる。相対する蓋綴じ孔を穿つ例が見られることから蓋を使用したのは明らかで、孔がなくても水平近く開く口縁形態から蓋の使用は十分考えられる。

甕の形態で貯水用のごとく据え置いて使用するような極大型品は見られず、いずれも胴下半に被熱による赤変部分が見られ、しばしば口縁から肩の外面に煤が付着し、さらに底面には灰がこびりついている例も多く見られることから、炉に直接据えて煮炊きに用いたのは明らかである⁽²⁾。なお米を調理する場合、弥生時代には蒸すのではなく煮る方法が一般的との見解（佐原1987）を証明する例として、内面に米粒の形をそのまま残して焦げ付いたものも見られる。台付甕は脚部から胴下面にかけて甕同様の被熱痕が認められることから煮炊き用として間違いない。ただし器種分類の項で触れたように、極小型品についてはこの限りではないものもある。かつて外山和夫氏が指摘したように（外山1987）、小型品は高杯に類する用途も想定されるが、小さくても被熱痕を有する例が見られることから、大きさのみで用途を判断することはできない。なお台付甕を煮炊き用に使用した場合、小型甕よりも比較的容量が少ないことから、少量の内容物を煮炊きするための専用の器と考えたい。脚部を付して被熱部分を高くするのは熱効率を上げるためと理解されるが⁽³⁾、本地域において主要煮炊器である他の甕を台付にしなかったのは、煮炊き作業全般における効率化を図るのが目的だったからではなく、少量を煮炊きする小型品だからこそ、器高の高い他の平底甕と一緒に炉に置いて同じように火熱を受けられるように高さを調節するための工夫であったと理解したい。台付甕と平底甕の被熱赤変箇所及び煤付着位置が脚底からほぼ同じ高さに見られることから、両者一緒に使用されたことを裏付けている。ただし器高15cm以下の小型平底甕を高さを上げることなく炉内においた場合、頸部～口縁が最も火熱を受ける位置になってしまい、他の甕類と同様の被熱効果は得られないと憶測する。このことから、内容物の種類や必要な煮沸の時間、用いる器の種類などによって、火加減や炉内での置場所などに様々な工夫や組み合わせがあったと思われ、煮炊きの方法はけっして一様ではなかったと考えられる。なお14号住一30では内面にどろどろの灰汁状だったと思われる物質がこびりついており、同質と思われる物質が付着した有孔鉢と片口鉢との組み合わせ使用を示唆している。

高杯と鉢は盛り器として多用されているが、高杯には蓋綴じ孔が見られず蓋の使用は否定的である。一方鉢の中には口縁の1か所に小さな2孔を穿つ例が見られる。数量的には少数に属しているが、群馬県から長野県に分布する中部高地型櫛描文系土器の中には必ず見られる普遍的なものである。これは鉢が盛り器としての基本的な機能を果しつつ、具体的な使用場面においては他と異なる専用あるいは独自の用法があったこ

第5章 ま と め

とを示す点で注目される。鉢に見られる口縁孔が短頸壺などの壺類に見られる蓋綴じ孔と異なるのは、穿孔が片側1か所であることと、孔径が2～3mmときわめて小さいことである⁽⁴⁾。携帯用や保管のために吊り下げる機能としての紐孔にしては華奢に過ぎ、通す紐の太さから想定しても土器重量を支えられるとは考えにくい。また蓋綴じ孔とすれば、当地域の土製蓋は対面する2孔1対が一般的だから、木製蓋を想定せざるをえない。ただしこれはまだ実例を知らない。蓋を想定したとしても片側にのみ綴じる意味については納得できる解釈が見付からない。内容物を冷まさない工夫であろうか。本遺跡例を見る限り孔の縁辺にはきわだった磨滅痕は認められないことから、頻繁な紐との摩擦はなかったらしい。以上のように具体的な使用法の復元を行うには有力な手掛かりに欠け、またその準備もしていないが、この鉢口縁の孔が中部高地～東北地方の縄文晩期にまで溯って見られることから、これ以降弥生時代全般を通して維持されてきた伝統的な鉢の特殊な用法にかかわるのは間違いない⁽⁵⁾。今後の検討課題として注目しておきたい。なお高杯の中で、脚部に10数個の鳴子（土製か石製かは不明）をいれて蓋で閉じた特殊例（第433図—45）があるが、これは振って音を出す目的と考えられ、日用品ではなく祭祀などの儀式用と考えたい⁽⁶⁾。

有孔鉢の用途については「甕」⁽⁷⁾とも「漏斗」や「濾過器」⁽⁸⁾とも推定されているがいずれも実証するだけの根拠に乏しいのが現状である。本遺跡出土例についても用途推定のための手掛かりを得るべく総数53点について観察を行った。その結果、被熱痕や煤付着は口縁～底部のどこにも認められないことが判明した。わずかに1点のみ体部上半に煤の付着する例が存在する（第494図—5）が、付着状態が部分的であることから蒸器使用の結果として付着したとは限らない。このように「甕」として推定できる有力な根拠が認められない一方で、「漏斗」や「濾過器」のような使用方法については、その可能性を示す希少例が認められたのでここに特記しておく。それは、有孔鉢の孔部内面から底面にかけてどろどろの液状だったと思われる灰状物質がこびりついた例である（第499図—57）。またこれとともに注目されるのは、同質らしき物質が片口鉢や小型台付甕の内面にも厚く付着していたことである。この灰状物質が同じものであれば、有孔鉢と片口鉢ないし小型台付甕は一連の作業工程の中で組み合わせてあるいは連続して用いられたと考えてもよいだろう。その作業とは、有孔鉢で濾過した液体を片口鉢や小型台付甕のような小容量の器で受けたのではないか。もちろん、この3例は異なる住居跡から出土したもので、かならずしもこの組み合わせで使用されたとは言いきれないが、少なくとも、穀物を蒸したためにできた付着痕とは考えにくい。もちろん本遺跡出土の有孔鉢のうちこのような痕跡が確認できたのはわずかに一例のみであることから、これをもって「甕」としての用途を全面否定するものではない。しかし、「濾過器」として使用された可能性については従来よりも強調されてしかるべきだろう。ここで想起されるのは、古墳時代前期によく見られる小型有孔土器が小型甕の上に重ねられた状態で発見される例である。これは従来「甕」としての使用を示す実例と解釈されることが多かったが⁽⁹⁾、炉内やその付近で検出されるより住居の脇にあることが多く、また有孔土器を載せる下の器が一般的な煮沸器と理解される甕や台付甕ではなく、小容量の小型甕や壺のような器を用いている。この使用状況からは「濾過器」とも「蒸器」とも断定はできない。ここでは、これら有孔土器使用例のひとつひとつについて検証する用意はないが、被熱痕や付着物質の有無や部位、使用された状況での出土位置等について再検討を行う必要があるのではないだろうか。

片口・注口鉢は液体を注ぐ機能をもっているが、具体的にどのような場面で用いられたかは明らかでない。壺、甕、高杯、鉢に比べて出土量が非常に少ないことから、必需品とは言えないかもしれない。ところでこの器種はその内面に灰に似た物質がこびりつく例をしばしば見ることがある⁽¹⁰⁾。本遺跡では、厚さ1～2mmにも達する厚さで、胴中位から片口部分へ、更に口からこぼれたものが外面を伝って底面まで流れ落ちてい

る例が確認された(第539図—25)。この観察による限り、内容物はどろどろした粘性の高い液体で乾燥してもなお器面に固形物あるいは「あく(灰汁)」のような物質が厚く残るようなものだったと思われる。この物質については現在分析が進められている状況であるが、上記したように肉眼では有孔鉢底部の付着物と同質であり、両者の使用法を推定する重要な決め手になるものと考えている。

蓋は甕用と壺用が見られ、甕用の口径は20cm前後と大部分の甕よりも大きいことから、落とし蓋ではなく口縁を覆うように伏せたと考えられる。ただし、本遺跡では蓋縁辺部に煤の付着した例は確認できなかった。また鈕の中央に「蒸気孔」を穿った例も見られるが、その具体的な使い分けについては不明である。蓋の数量は甕に比べて著しく少なく、これに代わる木製蓋の存在も十分に考え得る。ただしその場合は、落とし蓋であったろう。同じ甕用蓋であっても使用する場面で使い分けがなされたのだろうか。

小壺・小甕は100～350ccの容量で、器高の低い小型高杯や小型鉢とともに、最も小さな日用器を構成する。形状は現代の「湯飲み茶碗」や「蕎麦猪口」に類するもので、頸部が弱くしまる器形から飲用器のような役割を担ったものだろうか。被熱痕の認められるものないしその疑いのあるものは、全体の約20%を占めており、炉内で加熱する場合もあったと想定される。小型高杯や鉢とともに個人用食器として用いられたと考えられるが、全体の1%と数量が少ないことから一般的な器種であったとは考えにくい。このことから特別な行事や儀式に用いた儀器だった可能性がある。ただし、複数出土例が4棟の住居跡から確認されており、限られた人物や世帯の個人用との考え方も否定できない。また同じような様相を示す器種に小型台付甕の極小型品があげられる⁽¹¹⁾。これも被熱痕のあるものや赤彩品が存在することから、日用品と儀器の両方の可能性を示している。

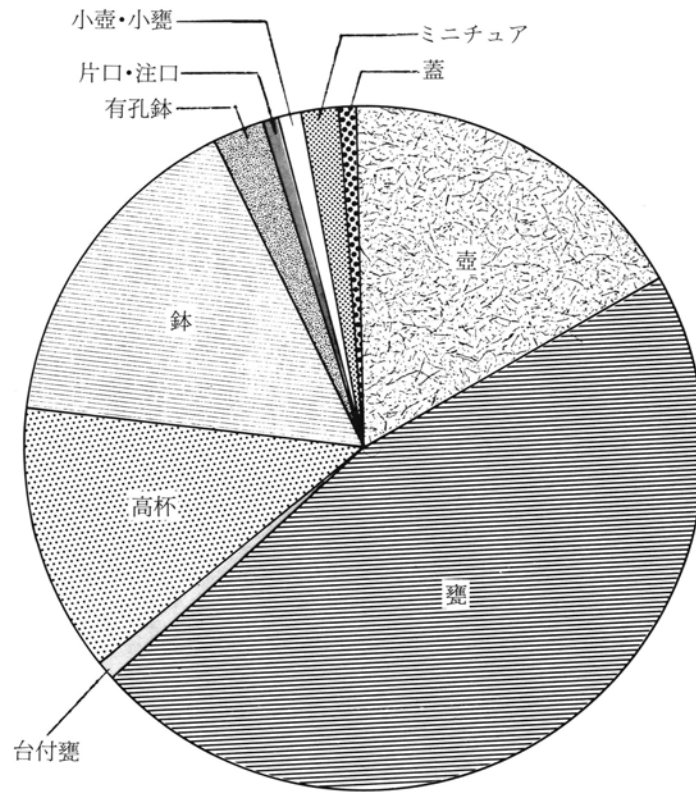
ところで住居内における土器の使われ方を考えるうえで参考になるのが、出土位置である。この場合、火災などの不慮の事故や天災により、生活していた状況のまま土器類が置き去られるといった状態の遺構が望ましいのは言うまでもないが、本遺跡ではこのような住居跡は検出されていない。出土遺物の大部分は住居跡廃絶後の投棄や流れ込みと考えられ、当時の使用状況を示す例は非常に少ない。そのなかで大型壺の出土位置が注目に値する。本遺跡で検出された竪穴住居跡は長方形プランを呈し、短辺側の一方に出入り口、その対面側に偏って炉が位置する後期住居跡の一般的な形態であるが、大型壺はその住居隅に据え置かれた状態で出土する傾向がみられた。そして想定される出入り口(支柱穴1～2基が検出されることが多い)から見て竪穴内の左隅から出土する例が目立ち、C区34・59・149・163住、DS90住例がそれに相当する。また中高瀬観音山遺跡070号遺構例では右隅から出土している(坂井ほか1995)。これらに共通するのは、いずれも大型壺の上半部を欠失し下半部だけになった鉢形品だということで、いわば壺としての貯蔵機能を失った転用品といえる。したがって「炊事の間」として想定される炉側の壁際ではなく、出入り口側に置かれることで炊事とは関連の少ない用途に供されることとなったと理解してよさそうである。また全周を残した壺や甕の口頸部が炉周辺ないし壁際に置かれている例も多く見られる。これは被熱例や炉内設置例が見られないことから、煮炊き時の支脚に用いられた可能性は少なく、大部分は不安定な形状の器を載せる器台として転用されたのは間違いなからう。土器の用途や住居内での使用法については、本来の機能でのみ語られたり、また破損品はすでに実用品ではないと判断しがちだが、実態としてはこのような転用品が不足する他の器や調度を補うものとしておおいに活用されていたと思われる。

(3) 器種組成について

ここでは、C区とDS区から出土した後期の土器群を一括して各器種毎の数量把握を行った。挿図に掲載し

表6 器種別分類表 (実測したもの)

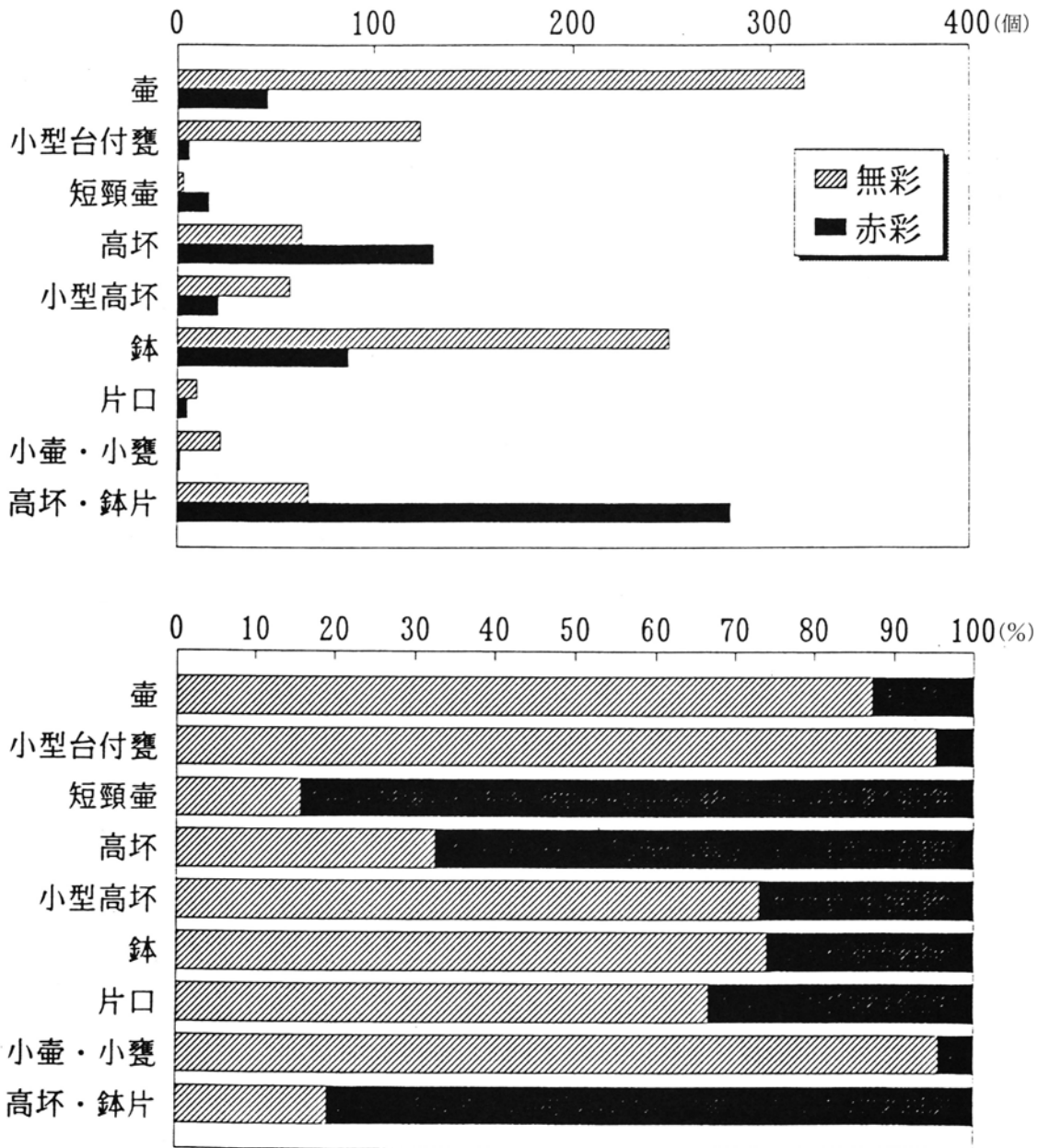
器 種 分 類		数 量			
大 別	細 別	無 彩	赤 彩	小 計	合 計
壺 類	大 型 壺	121	6	127	363
	中 型 壺	161	26	187	
	小 型 壺	35	14	49	
甕 類	甕	565	1	566	982
	小 型 甕	287	—	287	
	台 付 甕(鉢)	79	2	81	
	小型台付甕(鉢)	44	4	48	
短頸壺類	短 頸 壺(大型含む)	2	7	9	19
	小型短頸壺	1	9	10	
高 杯 類	高 杯(大型含む)	63	130	193	271
	小型高杯	57	21	78	
鉢 類	大 型 鉢	3	1	4	335
	中 型・小 型 杯	245	86	331	
有 孔 杯		53	—	53	53
片口・注口鉢		10	5	15	15
小壺・小甕類		22	1	23	23
ミニアチュア		35	3	38	38
蓋		16	1	17	17
総 計		1,799	317	2,166	2,166



第791図 器種組成グラフ

たもの2,116点を対象として、器種別個体数を集計、グラフ化したものが第791図である。壺類は大～小、甕類は大～小と台付甕を含む。なお、高杯と鉢について口縁のみで分類するのは困難だが、遺存部形状から推定していずれかに含めた。このため、両者の個体数比は若干変化する可能性がある。また有孔鉢と片口・注口鉢については、その特徴である底部孔や注ぎ口部のあるものだけを取り上げており、部分的な破片でもそれと分かる壺や甕に比べて少なく見積もっているはずである。以上のような前提のもとに土器組成グラフを理解していただきたい。組成比は甕類が46.4%と最も多く、次いで壺類17.2%、鉢15.8%、高杯12.8%と続き、以上の合計で92%を越え、これらが主要器種を構成しているのは明らかである。壺類と甕類で60%を越えるのは一般的として、特徴的なのは高杯と鉢からなる盛り器の比率が30%近い高率を示すことだろう。これは、当地域の中期や同時期の南関東の集落遺跡に比べても高い数値を示している。なお、掲載した土器は遺存状況が良好か器形がある程度判明するものを基準として選択したため、その他の破片資料をも含めた総量を対象とした場合に組成比が変わる恐れがある。これを確認するため破片資料10,800点についても器種別集計を行った。ただし、ここでは壺や甕といった大型器種と鉢・高杯などの小型器種の破片数が大きく異なるため、個体数にできるだけ近付ける方法として口縁破片を対象とした。更に壺・甕類と高杯・鉢類は識別不可能なものが多いためにそれぞれをまとめて集計した。これによれば、壺・甕類（短頸壺を含む）で68%弱、高杯・鉢類で32%となり、掲載土器とほぼ変わらない比率であることが判明した。すでに報告された本遺跡B区（伊藤1992）においても、壺類15.2%、甕類54.4%、高杯9.7%、鉢11.2%とC・DS区とほぼ同じ比率を示している。また同時期に属する県内の代表的集落遺跡10箇所についても、報告された土器について集計を行った結果、壺が38.5～18.5%、甕52～40%、高杯16～6%、鉢9～3%と本遺跡に比べて鉢の率が落ちるものの、全体の器種組成比に大差はない。高杯と鉢をあわせた盛り器の割合は平均値で17%を占める。遺跡によってばらつきは見られるものの、概ねこの器種組成比が群馬県の集落遺跡における後期弥生土器の一般的な在り方を示すと考えてよかろう。盛り器の比率が高くなるのは後期に入ってからと捉えられるが、同型同大の小型品が一住居から複数出土する例が主体を占めることから推測できるように、その背景に土器における個人別食器の定着⁽¹²⁾があったためと理解することもできよう。もちろん住居跡から出土する土器は、一定の期間に投棄されあるいは流れ込んだものの集積と考えられるから、複数の出土をもって直ちにこれらが一時期に用いられていたと断定するものではない。しかし、C14住・C16住・C59住などに見られるように、図示しただけでも高杯と鉢の個体数が10点を越える場合には、具体的な個体数は明らかにし得ないものの甕や壺と同様に複数の同時使用は否定できないように思われる。このような小型盛り器の増加現象は、少なくとも本遺跡の主体を占める後期の後半段階には確認されている。この点では近畿地方の在り方と大差がなかったと言えよう⁽¹³⁾。

以上は本遺跡の出土土器全体を対象とした器種組成の特徴であるが、各住居跡単位での器種組成はどうか。検出された住居跡の出土遺物は、大部分が住居廃絶以後の投棄や流れ込みと考えられ、生活時のまま持ち去られる事なく遺棄された例は見られない。したがって1棟の竪穴住居跡で使用された土器の組み合わせの実態については不明とせざるを得なかった。消費された土器の比率ということであれば、良好な一括遺物20棟分の器種構成比の平均値から、甕6に対して小型甕・大型～中型壺3、高杯・小型鉢2、台付甕1、小型壺・有孔鉢0.5、その他0.3以下となる。もちろんこれは単純に割り出した平均モデルであって、実際には個別の竪穴住居毎に器種の偏りがあったと思われる。14号住や104号住のように少数器種に属する有孔鉢や小壺・小甕が複数出土しているのは、このことを示す例として考えられよう。



第792図 赤彩土器比率グラフ

(4) 赤彩品について

本遺跡において赤彩品は、図示資料2,116個体のうち約15%を占めている。赤彩する器種は甕と有孔鉢を除く全てで、器種毎の内訳は壺13%、短頸壺85%、高杯67%、小型高杯27%、鉢26%、片口鉢33%、小壺・小甕4%となる(第792図)。図示しなかった破片資料では、全器種を含む10,800点のうち約36%を占めており、高杯と鉢に限れば80%を越える高率を示す。短頸壺と高杯が極めて高い赤彩率をしめすのが特徴で、短頸壺は大きさの大小を問わず、また高杯は大型～中型品は赤彩される率が高いとの傾向が伺える。破片資料では、大型～中型高杯が比較的識別しやすいため、高杯・鉢の分類では多数を占める結果となり、全体の赤彩率が高くなる。なお、片口鉢と小壺・小甕は分母となる総数がそれぞれ15個体、23個体と少ないため、資料の追

加があった場合に数値が大きく変動する可能性がある。ミニチュア土器や蓋についてもこれと同様である。これらの器種に関してはその比率の高低はともかく、赤彩品の存在を示すだけで十分だろう。

ここで本遺跡の赤彩品の在り方を検討するために、他地域及び他時期の資料と比べてみたい。

樽式土器と極めて近い関係にある箱清水式は、甕と有孔鉢を除いて全ての器種が赤彩の対象になり、“赤い土器”と形容されるほど赤彩率の高いことが知られている。千曲川上流域にあたる佐久市北西の久保遺跡では、報告書掲載資料によれば壺50%強、高杯90%、鉢70%前後が赤彩されている⁽¹⁵⁾。また千曲川を下った北信の中野市七瀬遺跡でも壺52%、高杯80%、鉢60%とほぼ同様の数値を示している⁽¹⁶⁾。具体的な数値の比較を行うには、更に多くの資料を対象として統一基準に基づいた分類と統計処理を必要とするが、ここではその準備もないためこの2遺跡によって大まかな傾向を捉えるにとどめておく。これによれば、高杯に次いで鉢、壺の順に赤彩が多いという様相は本遺跡と同様だが、各器種における赤彩の比率が相対的に高く、特に壺が過半数を越えている点が目を引く。一方同じ樽式を出土する他の遺跡ではどうか。高崎市新保遺跡の後期住居跡出土土器では壺6%、高杯65%、鉢33%、渋川市有馬遺跡では壺12%、高杯56%、鉢18%を占める。また利根川最上流域にあたる月夜野町三後沢・大原・十二原遺跡の合計では壺5%、高杯70%、鉢25%である。これを見る限り、樽式土器文化圏では赤彩土器の比率に顕著な地域差は認められない。本遺跡は地理的に佐久地方と樽式土器文化圏の中心たる榛名山東南麓の中間に位置しながらも、他遺跡に比べて赤彩土器が特に多いという特徴が見られないことから、赤彩土器の様相に関しては、箱清水式に対する樽式としてのまとまりがあったことを示している。ほぼ同時期の後期集落遺跡同士の比較では、赤彩土器の比率がほぼ同じであることが明らかになったが、その前段階である中期との違いはどうか。群馬県内における代表的な中期後半の集落遺跡である清里庚申塚遺跡では、壺10%弱、高杯50%強、鉢85%前後を占めている。なお高杯に分類した中には無彩の台付甕の脚部も含まれている可能性があり、実際には高杯に占める赤彩品の比率は高くなるはずである。壺と高杯については、後期と大差ない比率を示しているが、鉢が際立って高い率を占めるのが特徴である。中期後半に見られる鉢は、数少なく大型～中型が主体であることから共用器(佐原1983)として捉えられるが、同時に非日常的性格も強く帯びていたとも解釈できようか。後期の鉢における赤彩率がこれに比べて低いのは、無彩小型鉢の激増が大きく影響しているからであるが、大型～中型鉢自体も無彩が主体となり、日常的用途に比重が移った感がある。高杯は、共用器としての大型～中型品は高比率を示すが、後期に出現した小型品はむしろ無彩品が主である。このような赤彩率の変遷から、後期に至って銘々の盛り器が定着するのとほぼ同時に、同一器種における「ハレ」と「ケ」の使い分けがうまれた可能性も考えられよう。

ところで、赤彩された土器の胎土には共通点が見られる。いずれも他の土器胎土に比べて白っぽく、比較的精緻なもの(胎土分類F類)が多い(第804図)。これは同一器種を比較した場合にもいえることで、けっして特定器種の胎土の特徴が反映されたものではない。これと同様の特徴は、東海地方西部のパレススタイル壺にも見られるという(浅井1987)。赤彩は土器製作工程からすれば施文後の器面調整の段階で行われるものだが、土器製作者はすでに粘土選択および素地調整の段階において赤色塗彩を想定していたと考えられよう。つまり、土器への彩色は、製作の途中で文様装飾の強調や水漏れを防止するといった効果をねらったというよりも、最初から赤い土器を作ることを目的としていたといえる。出土した土器を観察すると、焼成むらや地中での変質によって胎土の色調が褐色～灰褐色に変色した部分が往々にして見られるが、この部分は白っぽい胎土部分に比べて赤色顔料の発色が極めて悪い。このことから白っぽい胎土を選んだのは鮮やかな赤の発色を目途としたためと考えられる。

第5章 ま と め

さてこの赤彩土器はいかなる役割を担っていたのか。弥生時代には祭儀用の供献器種に多いことや墓や祭祀的遺構との関連から祭祀や呪術とむすびつけて考えられる場合が多い(鎌木1966、森1981)。ただしこれは、赤彩土器が“祭祀”や“まじない”に使用することを目的として製作、使用されたということではないだろう。箱清水式のように赤彩品が主体を占める場合、これら全てが日常容器以外の用途に供されたと考えることはできない。高杯では赤彩品が8～9割を占めており、数量的には無彩品が例外的で特殊というべきである。また赤彩品と祭祀・まじないを必要以上に強く結び付けて解釈することは、箱清水式土器文化自体の評価を歪める結果にもなりかねない。箱清水式の赤彩の意味について壺が装飾、高杯や鉢などの盛り器には呪術的意味をもたせるとの解釈(塩入1981)もあるが、本来は器種を問わず両方の意味を兼ねていたと考えたい。本遺跡の住居跡出土土器を比較する限り、赤彩土器はある程度の比率でもってまんべんなく組成に含まれており、その出土率に極端な偏りは見られない。また限られた器種のみが集中して出土するという事もない。すなわち赤彩土器は、内容物の守護といったようなまじないの意味合いが込められていたとしても、使用される場面では、消費単位である各住居毎に常備し日常的な扱いを受けていたと考えたい。ただし、墓から出土する土器のうち赤彩品の占める率が住居跡のそれよりも相対的に高いことは確か⁽¹⁷⁾で、赤彩品が葬送に伴う祭祀や副葬品として特別な性格を与えられる傾向にあったことは否定できない。これらは祭祀などに臨んで新たに製作されたものではなく、日常的に用いていた器の中からまじないの意味合いの強いことを理由に赤彩品が選択されたと解釈しておきたい。また、住居と墓を問わず赤彩品のなかで大型～中型高杯が多いのは、赤彩器種のなかで、これが最も祭儀用供献器としての役割を担うにふさわしかったからと考えられよう。

(5) 型式の分類

型式分類にあたっては、既知の型式と文様の特徴にしたがって、I群—櫛描文土器群、II群—縄文施文土器群、III群—I～II群以外の外来系土器群にあらかじめ3大別し、それぞれについて器種毎に細分する方法をとった。

[I群の土器]

櫛描文を施文する土器で、「樽式」を主体とするが外来系の「箱清水式」も含める。また無文であってもこの両型式に属することが判明している器種については本群に含めた。

壺A 外反して開く単口縁で、頸部の屈曲は「く」字状を呈する。口縁は直線的なものから弓なりに湾曲するものまでの外反度に、また胴部の張り具合ではやや下位が強く張る卵形から球形までのバラエティーが見られる。口縁は無文が主体で、頸部以下の文様の種類によって5細分される。

A 1 頸部に櫛描簾状文(以下「簾状文」と略す)、肩部に櫛描波状文(以下「波状文」と略す)を施す。

A 2 肩部に簾状文、肩部に横位の櫛描羽状文(以下「羽状文」と略す)を施す。

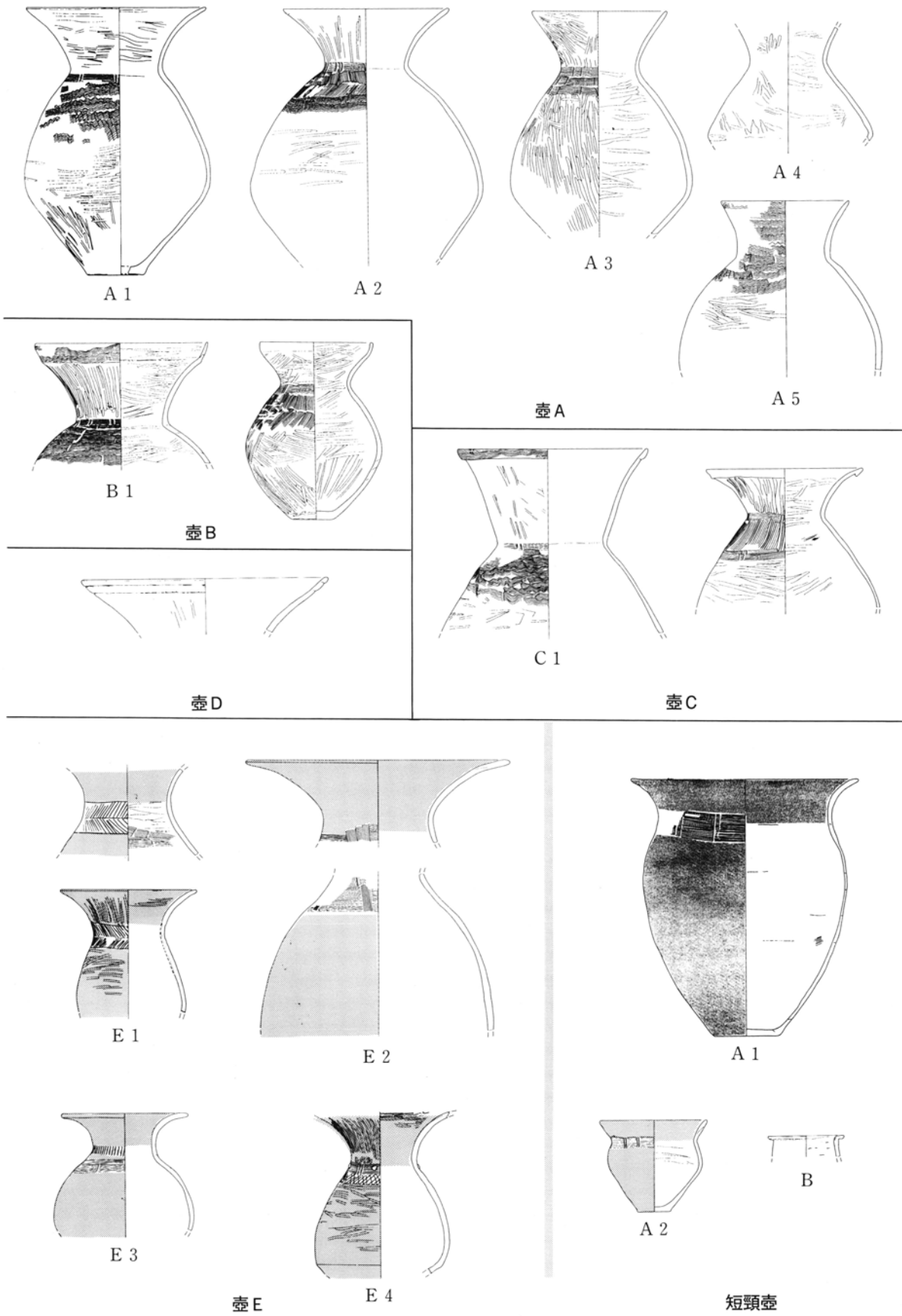
A 3 頸部～肩部に簾状文のみを施す。

A 4 無文。

A 5 口縁～肩部に波状文を施す。

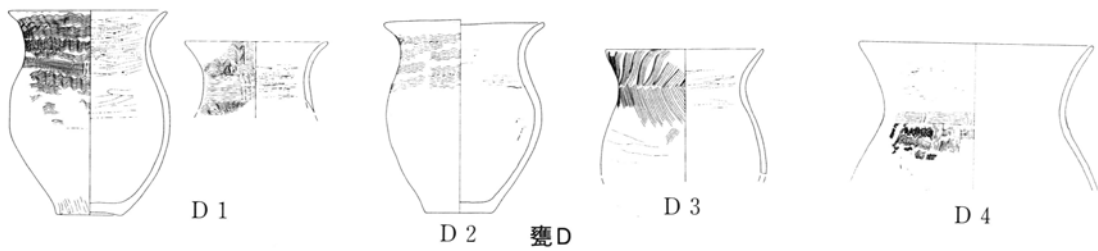
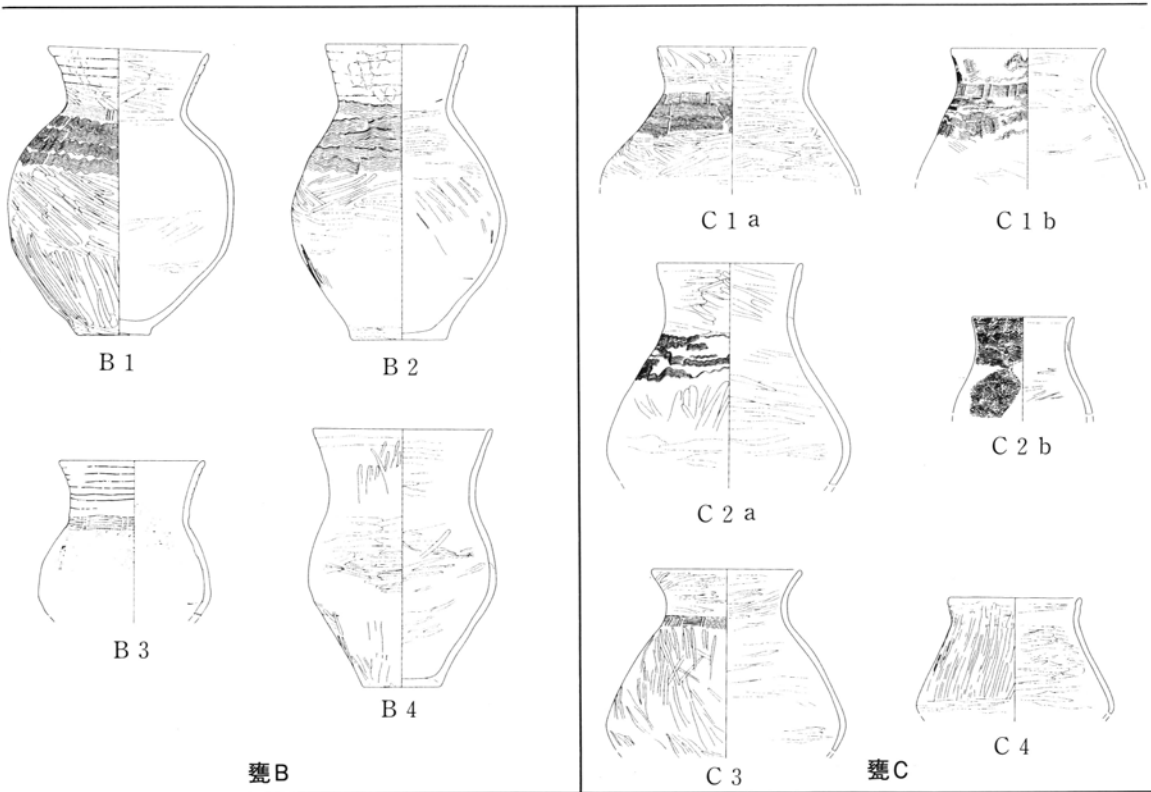
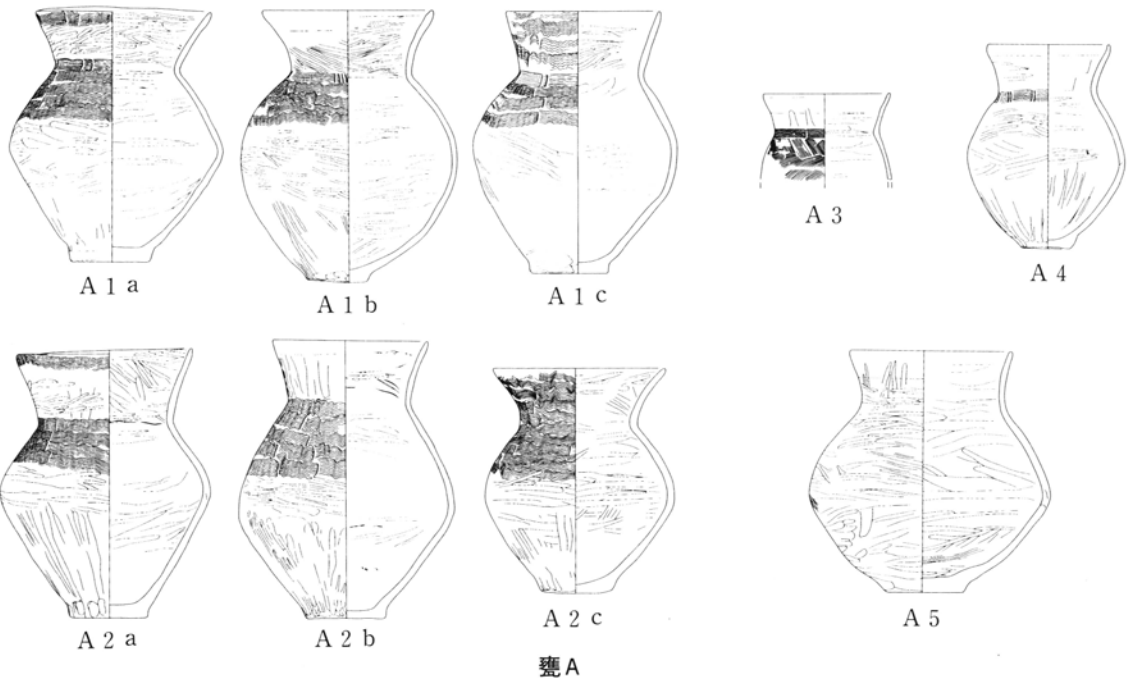
壺A 1とA 2が主体を占め、A 3とA 4は少なく、A 5は例外的存在である。A 1～A 4にはそれぞれ大・中型と小型品が見られる。

壺B 受け口ないし内湾口縁で、頸部以下の形状は壺Aに同じ。口縁に波状文や棒状貼付文、刻みなどの加



第793図 I群土器の分類(1)

第5章 ま と め



第794図 I群土器の分類(2)

飾を施すものが多い。器形の相違と頸部以下の文様で2分される。

B 1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施す。小さく口縁が内折するものが少数見られる。

B 2 頸部に簾状文、肩部に羽状文を施す。

壺B 1が主体でB 2は少ない。両者とも大・中型と小型品が見られる。

壺C 口縁端の外側に粘土帯をめぐらすもの(ここでは「折り返し口縁」と呼称する)。胴部形状の判明するものが少ないが、基本的には壺Aと同じと思われる。口縁への加飾は少ない。

C 1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施す。

C 2 頸部に簾状文、肩部に羽状文を施す。

壺D 口縁に複数段の粘土帯をめぐらす。口縁には指頭を規則的に押圧して加飾する機会が多い。頸部以下の施文は不明であり、II群の可能性もある。

壺E 口縁～頸部が大きく弓なりにくびれ、赤彩を施す。千曲川流域の後期土器との類似性が強い。

E 1 頸部に細沈線による横位の羽状文(「矢羽根状文」ともいわれる)を施す。

E 2 頸部～肩部に楯描によるT字文を施す。

E 3 頸部に簾状文、肩部に直線文を施す。

E 4 肩部に細沈線による斜格子文を施す。

壺E 1はいわゆる「吉田式」、E 2は「箱清水式」の典型的な壺を含むが、E 3・4では頸部に簾状文を巡らし、箱清水式と樽式土器との折衷的な型式といえよう。

短頸壺A 外反する単口縁に、肩の張る倒卵形の胴部を呈する。頸部に簾状文、施文部を除いた外面全体と口縁内面に赤彩を施す。

A 1 頸部が弓なりにくびれる。

A 2 頸部が「く」字状に屈曲する。小型品のみ判明している。

短頸壺B 口縁が小さく外折する。全形は不明だが、無文の小型品が判明している。

短頸壺ではA 1が主体を占め、容量差による大～小型品が見られる。短頸壺Bは例外的存在である。

甕A 直線的に大きく開く単口縁で、頸部が「く」字状にくびれる。口縁形状は上端がやや内湾するものから外反するもの、また胴部形状はやや上位から中位が強く張り出す「算盤玉」形から球形とバラエティーが見られる。文様の相違で5細分される。

A 1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施し、更に口縁上端に波状文を施すものA 1a、口縁無文A 1b、口縁全体に波状文A 1cに3分される。

A 2 頸部～肩部に波状文のみを施し、更に口縁上端に波状文A 2a、口縁無文A 2b、口縁全体に波状文A 2cに3分される。

A 3 肩部に横位の羽状文を施文するものを一括する。

A 4 頸部に簾状文のみを施す。

A 5 無文。

甕B 口縁全体に粘土帯積み上げ痕を装飾として残す。頸部以下の形状は甕Aに類似するが球形胴が主流を占める。文様の相違から4細分される。

B 1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施す。

B 2 頸部～肩部に波状文を施す。

B 3 肩部に横位羽状文を施す。

第5章 ま と め

B 4 無文。

甕C 口縁が小さく開き、頸部は弓なりにくびれる。胴部は撫で肩で最大径は胴下位にある。文様の相違から4細分される。なおこの形態から壺とも呼称できるが、胴部に被熱痕の認められるものが多いことから甕に分類した。

C 1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施し、さらに口縁無文C1aと口縁波状文C1bに2分される。

C 2 頸部～肩部に波状文を施し、さらに口縁無文C2aと口縁波状文C2bに2分される。

C 3 頸部に簾状文のみを施す。

C 4 無文。

甕D 単口縁で、口縁～頸部が弓なりに湾曲し、張りの弱い胴部をもつ形態を一括する。文様の相違から4分される。

D 1 頸部に簾状文、口縁全体と肩部に波状文を施す。

D 2 口縁～肩部に波状文を施す。

D 3 口縁～肩部に横位羽状文を施す。

D 4 頸部に簾状文、肩部に波状文と直線垂下文を施す。

甕A・甕B・甕Cは共通する文様構成をもっており、大きさについてもB3類を除いていずれも大～小型品がそろっている。この3者が甕の主流を占めているのは明らかで、とりわけA1bとA2bが数量的に他を大きく凌駕している。一方甕D1～3は器形の共通性をはじめとして、幅広い簾状文や横位羽状文は長野県千曲川流域に分布する箱清水式に極めて近似しており、胎土も本遺跡の一般的なものとは異なるものが見られることから、搬入品と判断されるものもある。D3はA3・B3と同様に横位羽状文を施文するが、後者が肩部に限られているのに対して口縁～肩部全体に施文する点で異なり、佐久地方の箱清水式甕との近似性を指摘できる。また、搬入品と推定されるものはいずれも小型品に限られており、移動用の煮炊き具としての可能性もあろうか。

台付甕A 短く外反する単口縁で、頸部は「く」字状に屈曲し、やや肩の張る扁球形の胴部を呈する。甕に準じて文様の相違により5分する。

A 1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施す。これはさらに口縁上端に波状文を施すA1a、口縁が無文のA1b、口縁全体に波状文のA1cに3分される。

A 2 口縁～肩部に波状文を施す。

A 3 肩部に羽状文を施す。

A 4 頸部に簾状文のみ施す。小型赤彩品あり。

A 5 無文。小型赤彩品あり。

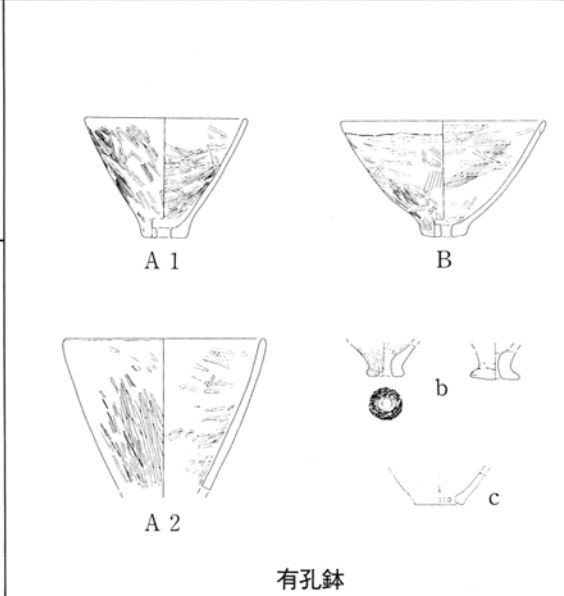
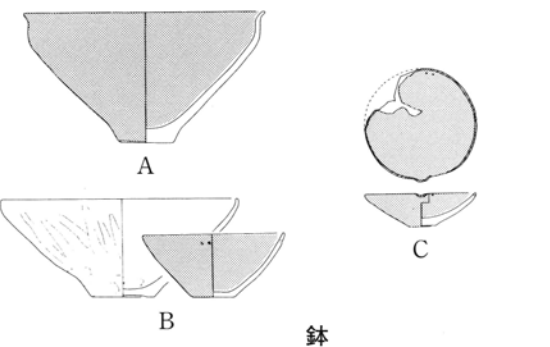
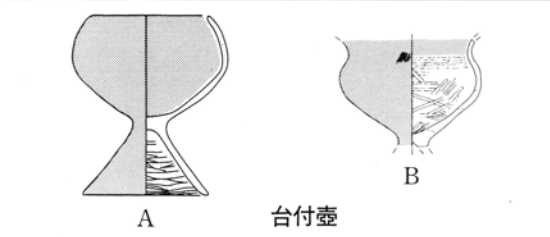
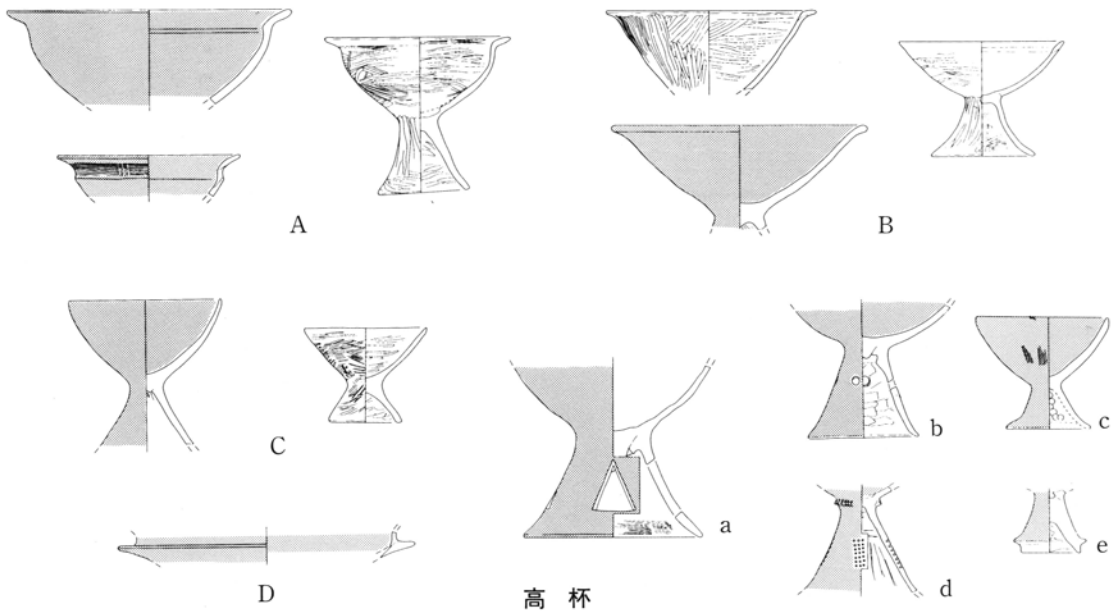
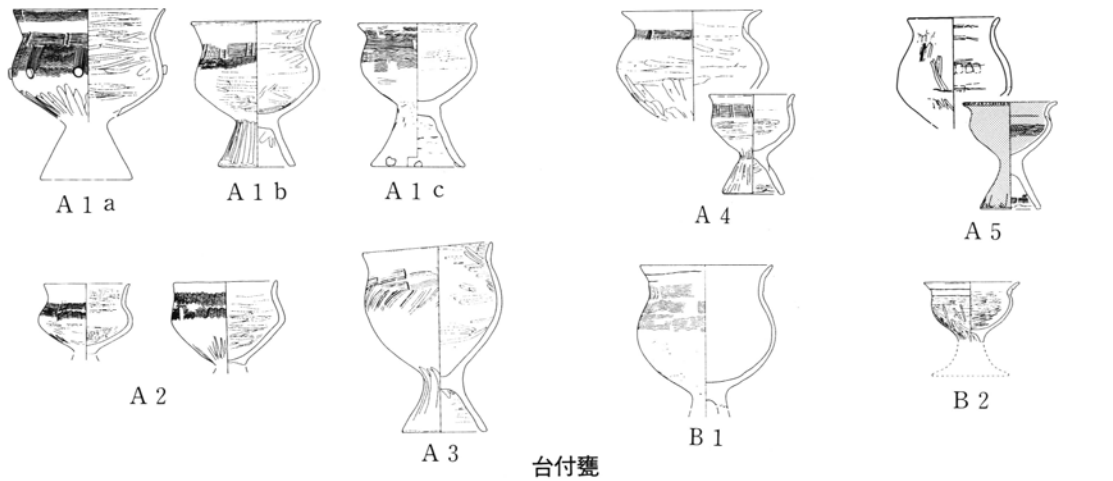
台付甕B 口縁に粘土帯積み上げ痕を装飾として残す。文様による細分も可能だが、数量が少ないためここでは一括した。これには、簾状文と波状文を施すB1と無文B2がある。

台付甕Aが大部分を占めるが、特にA1は器形のバラエティーや数量が豊富で他を凌駕する。なお、赤彩品がA4とA5に見られるのは、同じように簾状文のみを施すか無文の壺A3・A4や短頸壺と共通する。

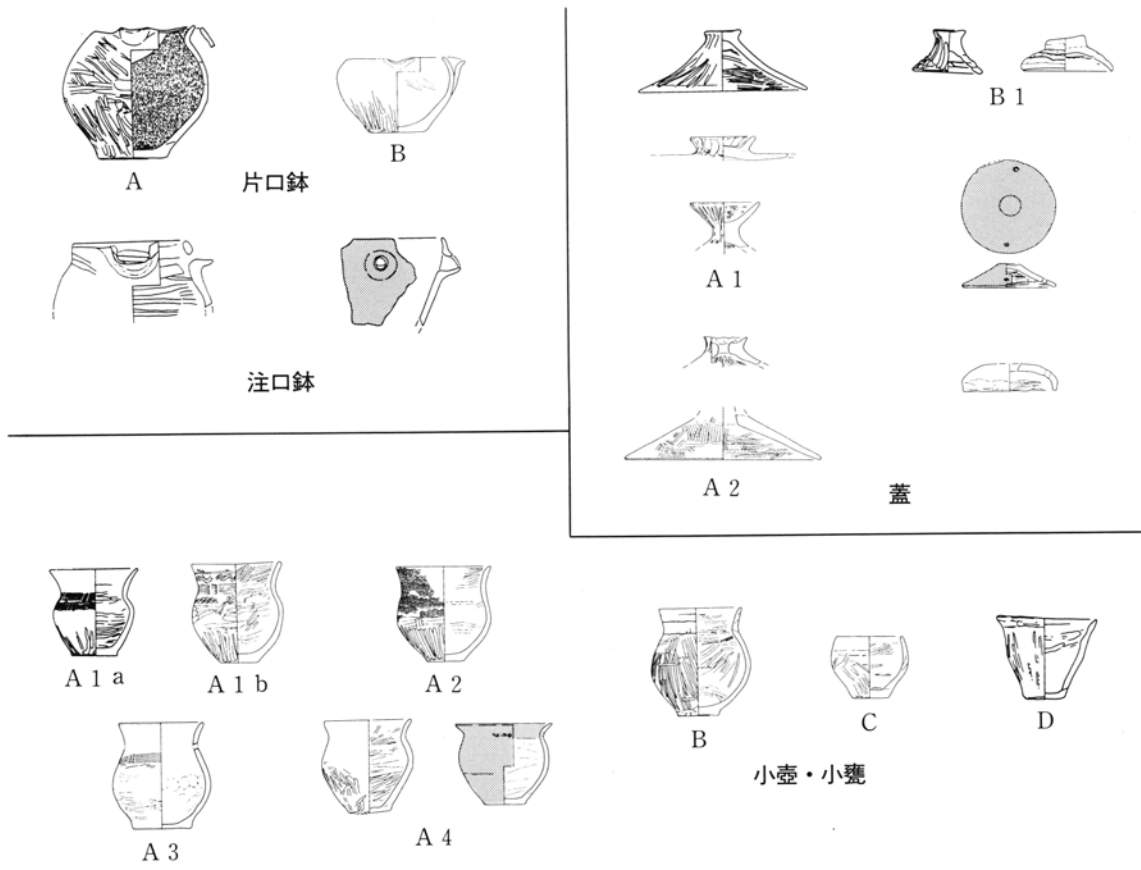
高杯A 杯体部が大きく膨らんで、口縁が強く屈曲して外反する。体部膨らみの形状と口縁外反度にバラエティーが見られる。脚部は高い円錐形と思われる。大型で赤彩品が主。体部上位に簾状文を施す場合がある。

高杯B 体部は直線的に開き、口縁は緩く外反する。

高杯C 口縁～体部の全体が「椀」状に開く。小型品が主。



第795図 I群土器の分類(3)



第796図 I群土器の分類(4)

高杯D 口縁下位が鐔状に張り出す大型品。

主に口縁～体部の特徴から以上のように4分類されるが、AとBには中間的な形状も見られる。主体はA・B類とC類に大きく二分され、Dは1点のみの例外的存在である。なお、脚部は円錐形が基本で開き方の程度にバラエティーが見られる。また透かし孔は三角形4カ所(a)が多く、まれに円孔(b)がある。特殊例では脚内部に鳴子を収めたもの(c)、刺突列点文(d)、端部が段状にくびれるもの(e)が見られる。

台付壺A 無頸で、体部は扁球形を呈する。赤彩。

台付壺B 口縁外反し、体部以下の形状はA類に同じ。赤彩。

鉢A 口縁が屈曲して外反する大型品。赤彩。

鉢B 単口縁で逆截頭円錐形を呈する。形状で、体部の開きが直線的で器高が高いもの、内湾きみで器高が低いものに2分することも可能だが、その変化は漸移的である。

鉢の主体はB類で、いずれも大～小型品がある。なおB類には小さな片口を付す例が見られ、機能的には後述する注口・片口鉢に類似すると思われる。

有孔鉢A 底部の穿孔が中央1カ所。

A 1 単口縁で逆截頭円錐形。

A 2 器高の高い深鉢形。

有孔鉢B 折り返し口縁で、体部は内湾きみに開く。

有孔鉢Aが主流で、底部形状には安定した平底、小さめの不安定な平底、突出底(b)などの変化がある。

また、全形は不明だが複数孔(c)をもつのも例外的に存在する。

片口鉢A 球胴の「無頸壺」形の1カ所に片口を付す。

片口鉢B 半球胴で片口を付す。

注口鉢A 球胴の1カ所に扁平な注口を設ける。

注口鉢B 半球胴に正面が円形の注口を設ける。

数量的には片口鉢が主体を占めており、注口鉢はその範疇にふくまれる例外的存在とみてよい。

蓋A 大～中型の壺や甕に対応すると思われる大型品を一括する。

A1 天井孔のないもの。鈕の有無や形状にバラエティーがみられ、画一性を欠く。

A2 天井孔を穿ち、短く突出する鈕を付す。

蓋B 小型の壺や短頸壺に対応すると思われる小型品を一括する。

B1 鈕を付し、裾部が外反きみに開くものと内湾する2者が見られる。

B2 鈕が無く、B1同様に2者がある。

小壺・小甕A 外反する単口縁にやや肩のはる球胴を呈する。

A1 頸部に簾状文、肩部に波状文を施す。これには口縁無文のA1aと口縁波状文のA1bがある。

A2 口縁～肩部に波状文を施す。

A3 頸部に簾状文のみを施す。

A4 無文

小壺・小甕B 口縁に粘土帯積み上げ痕を装飾的に残す。

小壺・小甕C 「無頸壺」形。口縁に蓋綴じ孔もみられる。

小壺・小甕D 長胴で無文。甕ミニチュアの可能性がある。

小壺・小甕は甕と共通する文様構成のA類が主流で、C～D類は少数例である。ていねいなナデや磨きによって、ミニチュア品と区別される。

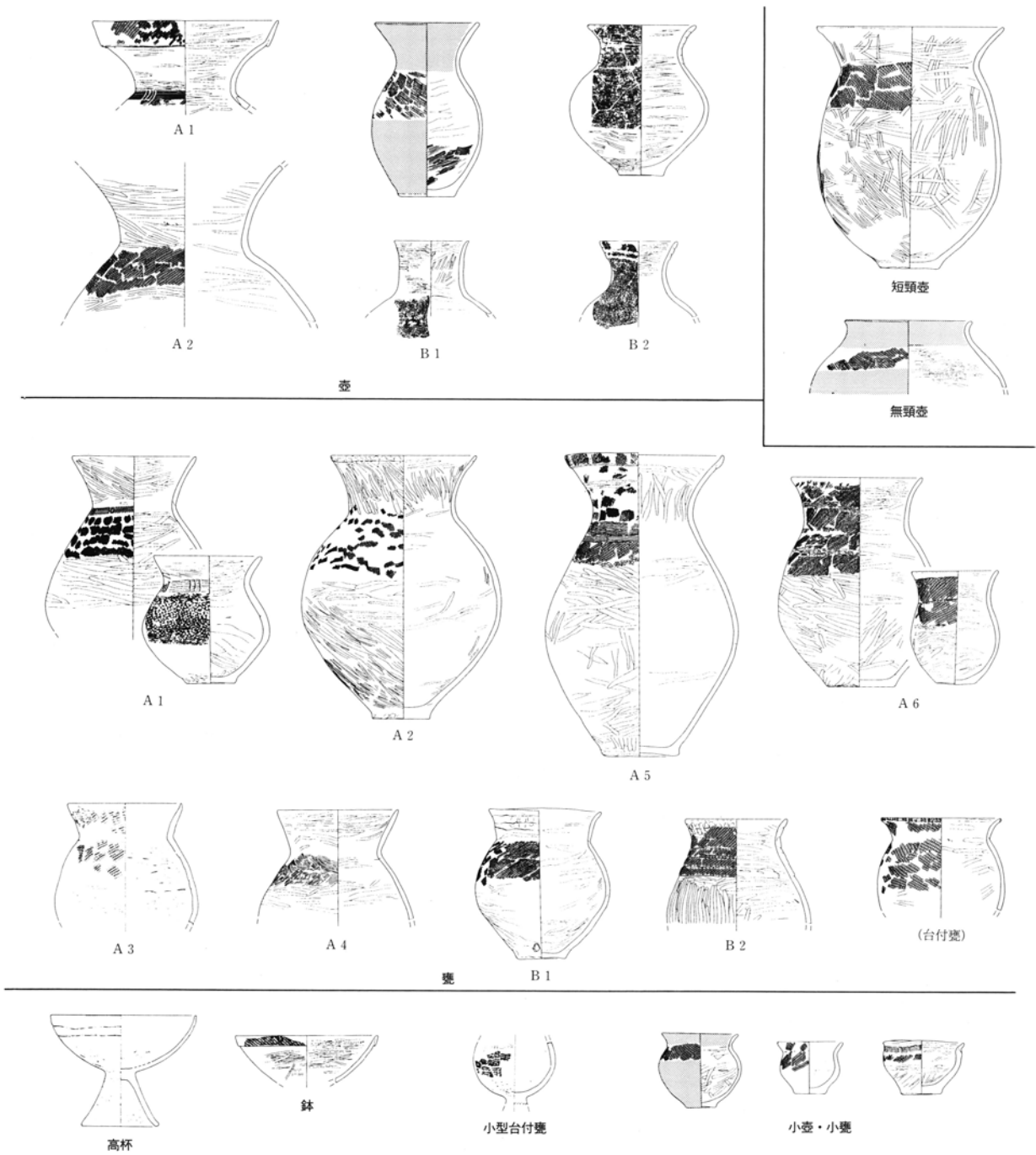
I群土器の特徴は次の諸点に要約できる。

- ①壺A類、甕A類に見られるように単口縁が主体を占め、受け口と折り返し口縁は客体的である。
- ②壺と甕に共通して、口縁が直線的に開き、頸部が「く」字状に屈曲する形状が主体である。
- ③壺の肩部文様は、波状文が主体を占めるが、羽状文も少なからず存在する。
- ④甕は主体となるA類のほかに、口縁に粘土帯積み上げ痕を残すB類が少なからず存在する。
- ⑤甕の文様構成のうち、頸部～肩部にのみ施文し、口縁を無文とするA1b・A2b・B1・B2・B3・C1a・C2a類が主体となる。
- ⑥高杯は基本的に口縁が外反するA・B類と内湾するC類に二分される。
- ⑦少数ながら壺と甕に佐久地方を含む千曲川流域の搬入品ないしその模倣品と思われるものが存在する。

[II群の土器]

縄文を施文する土器群を一括する。この中には櫛描文と縄文を組み合わせる類も含む。埼玉県北～中央部に分布する吉ヶ谷式、あるいは群馬県の赤城山南麓を主分布域とする赤井戸式と共通、あるいはその影響を受けた土器群と考えられる。

壺A1 大型品で受け口状の有段口縁。口縁下半が無文で、頸部に簾状文、肩部に縄文を施文。



第797図 II群土器の分類

壺A2 頸部に縄文のみを施す。口縁形状は不明。

壺B1 小型品で肩部にのみ縄文を施す。赤彩品も見られる。

壺B2 口縁に粘土帯積み上げ痕を装飾として残し、口縁～肩部に縄文を施文。頸部くびれは弓なり。

短頸壺 I群の短頸壺A1類と同一形状で頸部に縄文を施す。口縁内面と施文部を除く外面全体に赤彩するものと無彩品あり。

無頸壺 口縁はわずかに湾曲外反し、胴は球形に近いと思われる。肩部に縄文を施す。口縁内面と外面の施文部を除く全体に赤彩。

甕A 単口縁を一括し、文様と形状の相違から6分される。

- A1 口縁は直線状に開き、頸部は「く」字状に屈曲、胴は球形を呈する。頸部に簾状文、肩部に縄文を施す。
- A2 頸部は弓なりか弱い「く」字状にわずかにくびれ、胴は球形を呈する。肩部にのみ縄文を施す。
- A3 口縁は短く外反し、頸部は「く」字状に屈曲。胴は球形に近い。口縁～肩部に縄文を施す。
- A4 口縁は直線的に開き、頸部は「く」字状に屈曲。胴は球形に近い。頸部に横位羽状の縄文を施す。
- A5 折り返し口縁で、頸部は弓なりにくびれ、中位に最大径をもつ長胴形。口縁～肩部に縄文を施文し、そのうえに波状文を加える。
- A6 頸部のくびれと胴の張りが弱く、口縁～肩部に横位縄文を施文する。

甕B 口縁に粘土帯積み上げ痕を装飾的に残す。

- B1 頸部は「く」字状に屈曲し、中位の張る球形胴。口縁無文で肩部にのみ縄文を施す。
- B2 口縁短く頸部は弓なりにくびれる。胴はやや下膨れの球形。口縁～肩部に縄文を施す。

台付甕 器形の判明する例はないが、短く外折する口縁形状と下位がすぼまる胴部形状から台付甕と推定できるものがある。

高杯 縄文施文は見られないが、杯部が浅い椀状に開き、口縁に粘土帯積み上げ痕を残す。

鉢 折り返し口縁で、体部は椀状、口縁外面に縄文を施す。底部形状は不明で、有孔鉢の可能性あり。

小型台付甕 球形胴で、頸部に簾状文を加える例が知られる。

小壺・小甕 口縁短く外反し、胴はやや肩の張る球形を呈する。縄文施文部は肩部のみと口縁～肩部の2者がある。赤彩品あり。

II群の器種組成については、台付甕の存在が不明確であることを除けばI群とほぼ変わらないが、主たる器種は甕類で、壺や高杯・鉢はI群に比べて極端に少ないのが特徴である。縄文施文の特徴から、「赤井戸・吉ヶ谷式」そのもの、ないしその影響を受けたと考えられるが、櫛描文を加えた壺A1、甕A1・A5はもちろんのこと、壺B1や短頸壺、甕A2・A4・B1は、形状や施文手法が先に分類したI群土器と共通することから、「樽式」と「赤井戸・吉ヶ谷式」の折衷型式として地域限定的に誕生したと理解される。

[III群の土器]

I～II群の関東地方北西部在地系と異なる無文の外來系土器群を一括した。

壺 口縁は短く弓なりに外反し、頸部で強くくびれて球形胴部に続く。口唇外面には弱い面取りがなされる。内外面とも刷毛目整形。

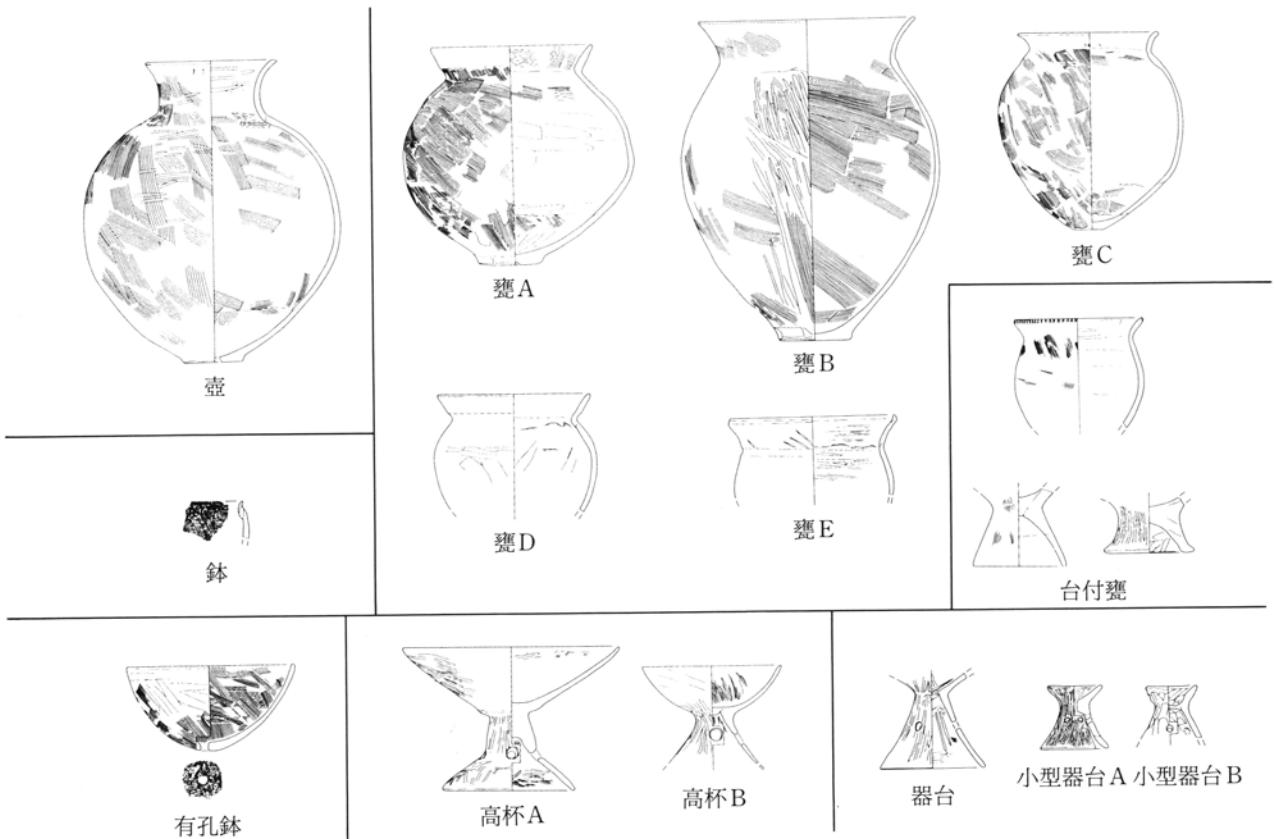
甕A 短い単口縁で、頸部は「く」字状に屈曲し、胴は扁球形で平底。口唇部は丸い。内外面に刷毛目のち内面になで整形。

甕B 頸部が強い弓なりにくびれる単口縁で、胴部はやや肩が張り、小さい平底。口唇部は丸い。外面は刷毛目整形で、内面は刷毛目となでの両者が見られる。口縁の類品で口唇刻みの例あり。

甕C 口縁が小さく弓なりに外反し、口唇部外面に弱い面取りを施す。胴部は肩が張るか球形に近く、小さく不安定な平底。外面は刷毛目、内面はなで。

甕D 口縁断面が「5」字状に近似する弱い有段口縁で、頸部は「く」字状に屈曲しやや肩の張る球形に近い胴部をもつ。内外面ともなで整形。

甕E 口唇部がつまみ上げにより上方に立ち、頸部は「く」字状に屈曲する。内外面とも磨き整形。



第798図 III群土器の分類

台付甕 全形の判明するものはない。脚部はやや器高が高く直線的に開くものと、器高低く裾部がわずかに外反あるいは内湾するものが見られる。いずれも刷毛目整形。

高杯A 杯部が大きく直線的に開き、杯部下位に僅かに稜をもつ。口唇部は丸い。脚部は中位で折れてやや内湾ぎみに開く。脚部に円孔を穿つ。内外面とも磨き整形。

高杯B 杯部は内湾し、口唇部は丸い。脚部は円錐形に開き円孔を穿つ。裾部が大きく外反して開く脚部は本類に含まれよう。内外面とも磨き整形。

器台 器受け部と脚部の中央が貫通し、器受け部は短く直線的に開く。脚部は円錐形でやや外反ぎみに開く。

小型器台A 中央が貫通し、器受け部は短く直線的に開く。

小型器台B 中央が貫通しない。形状はA類と同一。

鉢 口縁のみ知られる。口縁は小さく内折して上方につまみ上げられる。体部は直立ぎみに立つ形状と思われる。刷毛目整形。

有孔鉢 半球形の形状で底部中央に一孔を穿つ。内外面に刷毛目整形。

III群土器は、甕C・D類や有孔鉢の特徴から、北陸地方北東部との関連性が指摘できるが、高杯や器台、低い台付甕の脚部など東海地方西部方面からの影響も無視できない。ただしここではパレススタイル壺やS字状口縁台付甕など東海地方西部特有の土器が見られないのは注目される。

(6) 型式組列

前節で分類された各型式の組列を考えてみたい。対象となる型式として、本遺跡の主要器種であり変化の豊富なI群の壺A1、甕A1、高杯A・B類を代表させた。

壺A1は、中期後半の形態的特徴を残すものを古く、古墳時代初頭の高杯や小型器台に伴うものを最も新しい段階と捉え、中間的な形態を序列に組み込むことで、以下の4段階の変遷を想定した。

- 1段階 口縁が直線状かやや外反して開き、頸部が弓なりに細くしまった撫で肩の器形で、胴部は下膨れと思われる。口縁上端に波状文を残すものと無文がある。頸部簾状文は「等間隔止め」か間隔の狭い「2連止め」に限られる。
- 2段階 口縁は直線状かやや外反して開き、頸部は「く」字状に屈曲。肩部は直線的な撫で肩、胴部は中位から下位が強く張る。頸部簾状文は「2連止め」主体。
- 3段階 口縁が湾曲して外反し、頸部は「く」字状に屈曲。肩部は膨らみをもつ撫で肩となり、胴部のやや下位が弱く張る。頸部簾状文は間隔の空いた「2連止め」か「3連止め」。
- 4段階 口縁が大きく湾曲して外反し、中折れぎみに屈曲するものも現れる。頸部の屈曲は強く、胴部は球形。頸部簾状文は「3連止め」を主に間隔の空いた「2連止め」と4連以上の「多連止め」。

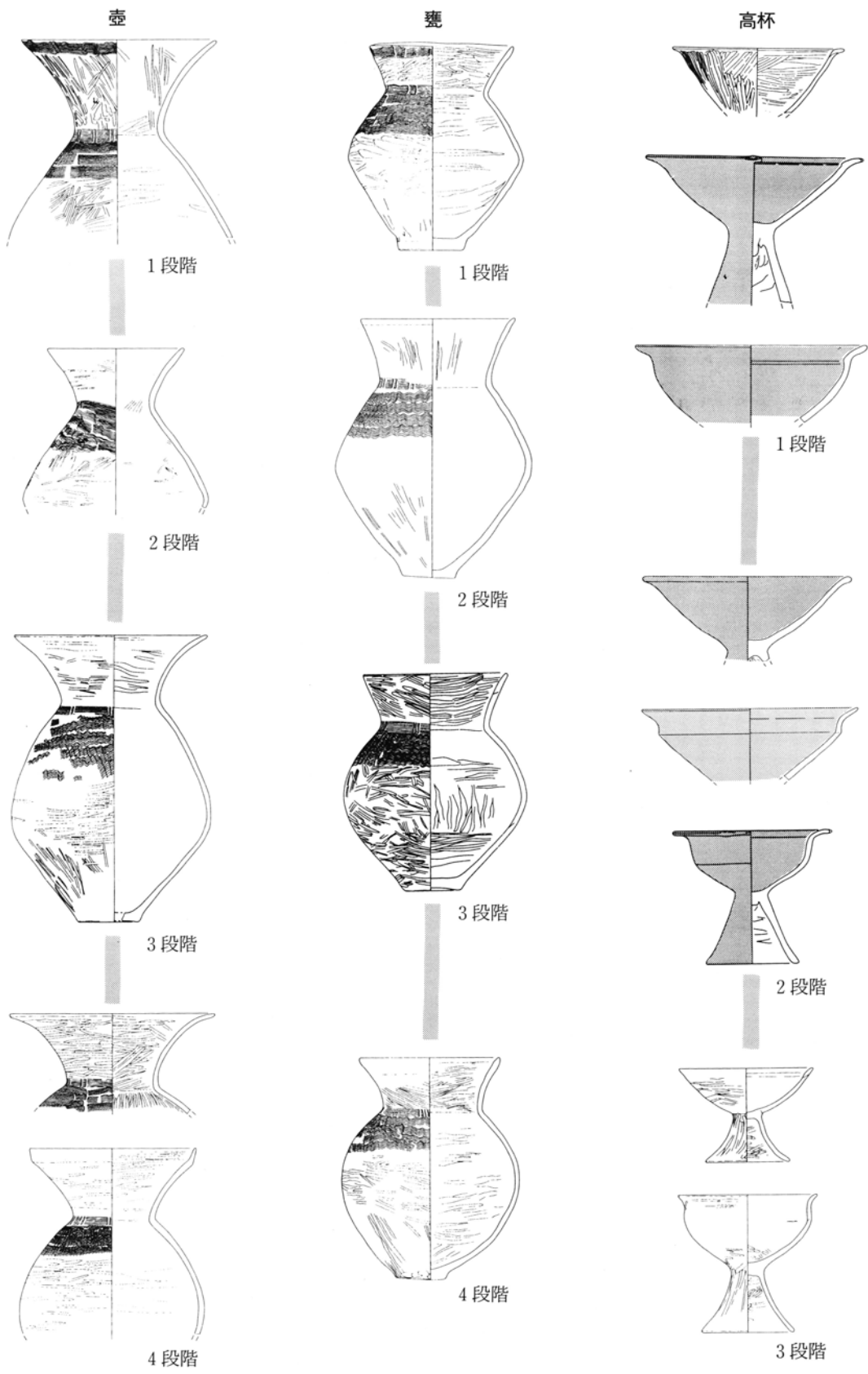
この組列を与える根拠として、器高全体の短縮と球胴化、頸部簾状文に見られる簡素化と止め箇所が多連化の傾向を想定した。ここに見られる段階的変遷は継起的に連続すると理解されることから、時間的な連続性も示すと考えてよかろう。なお、受け口口縁の壺B類はA1類と同様の変遷をたどるが、1・2段階に相当するものは不明である。口縁は段状に屈曲して立ち上がる形状を基本に、新たに3段階から幅広い粘土帯を口縁端部の外側に付加して下端がやや突出する形状が加わる⁽¹⁸⁾。また折り返し口縁の壺C類は、1段階相当から存在し、付加する口縁粘土帯の断面形状が厚い三角形や「蒲鉾」形から薄いものへ変化する傾向が伺える⁽¹⁹⁾。

甕A1は壺A1と同様の変化傾向から、以下の4段階の組列を想定した。

- 1段階 口縁上端がやや内湾し、頸部は「く」字状に屈曲。胴部はやや上位か中位が強く張る。口縁上端に波状文、頸部の簾状文は「等間隔止め」か間隔の狭い「2連止め」。
- 2段階 口縁は直線状で、胴部中位が強く張る。口縁無文が主で頸部簾状文は間隔の広い「2連止め」が現れる。
- 3段階 口縁は弱く外反、胴部はやや中位の張る球形。頸部簾状文は「2連止め」と「3連止め」。
- 4段階 口縁は外反が強まり、胴は球形。頸部簾状文は「3連止め」を主体とし、新たに4連以上の「多連止め」が現れる。

甕A2は頸部簾状文を欠くが、器形は1～4段階の変化を遂げている。口縁全体に波状文を施す甕A1cは、器形と文様の共通性から2段階には出現しており、4段階まで継続することがわかっている。また甕Bは2～4段階に相当する変化が見られ、甕Cについては2・3段階相当のものが知られる。なお、筆者はかつてA1c類をA1a・b類に後出する直系と想定したが⁽²⁰⁾、器形や頸部簾状文の手法の変遷を重視した組列と、本遺跡における共伴事例の分析を行った結果、両者は地域差と捉えるべきで同時に併存する可能性が高いと考えを改めるに至った。ここに記してお断りしておきたい。

高杯の組列にかかわる基本的な考え方は、箱清水式を対象に分析を行った青木和明の案(青木1984)に従う。ただし、ここでは青木が第4段階に含めた高杯C2類(本稿では高杯A類の古い部分にあたる)のうち、口縁が稜をもって外折するものと曲線的に外反するものを古新に分離した。また前節で分類した高杯A類と



第799図 主要器種の型式組列

B類は、口縁形状の変化の類似性から並存すると考えた。なお、高杯C類は杯部が深く小振りの脚部をもつ形態から杯部が浅く「X」字状に脚部が開くものへ変化すると考えられるが、漸移的に変遷するため段階的に特徴を捉えることはできない。ここでは器形変化の捉えやすいA・B類を取り上げた。

1段階 口縁が外折して水平かやや傾斜して開き、内面に稜を残す。体部は直線的に開くものと内湾するものの2者がある。脚部は背の高い円錐形と思われる。

2段階 口縁が弓なりに湾曲して外反する。体部は直線的と内屈する形状が見られ、さらに後者には外面に稜をもつものと内湾するものがある。これは時間差と考えられるが、漸移的な変化のためここでは一括した。脚部は1段階とほぼ同じ。

3段階 口縁は僅かに外反し、脚部は中位から外反する。

2段階に始まる口縁の湾曲外反傾向は、壺や甕の2→3段階における変化と対応するものと考えられる。また3段階で脚部が外反して開くのは、壺と甕の胴が4段階において球形となり、器高全体が短くなる現象と同様に考えることもできよう。

以上の型式組列を検証するため、床面からの良好な一括遺物を出土した住居跡50棟を抽出し、壺・甕・高杯の共伴関係を調べた。この結果、組列の逆転は見られないこと、壺と甕は同一段階で共伴する傾向の強いことが判明した(第799図)。なお、高杯は壺と甕の各段階に並行しながらも、古段階のものは壺・甕の新しい段階にも伴っており、必ずしも時期的に限定できるものではない。これにより、壺と甕の型式組列は編年上の時間軸として設定することが可能であり、高杯については補足的に用いることとした。

ところで、器種組成の重要な一角を占める鉢・有孔鉢・小型壺・短頸壺については、器形変化が乏しいことや器形の判明するものが少ないなどの理由から組列作業を行わなかったが、鉢についてはB1→B2、有孔鉢はA1→A2、小型壺はG1→G2の変遷を、また短頸壺は主体となるA1のなかで肩の張るものからの球胴化を時間的変化と想定している。

(7) 土器編年

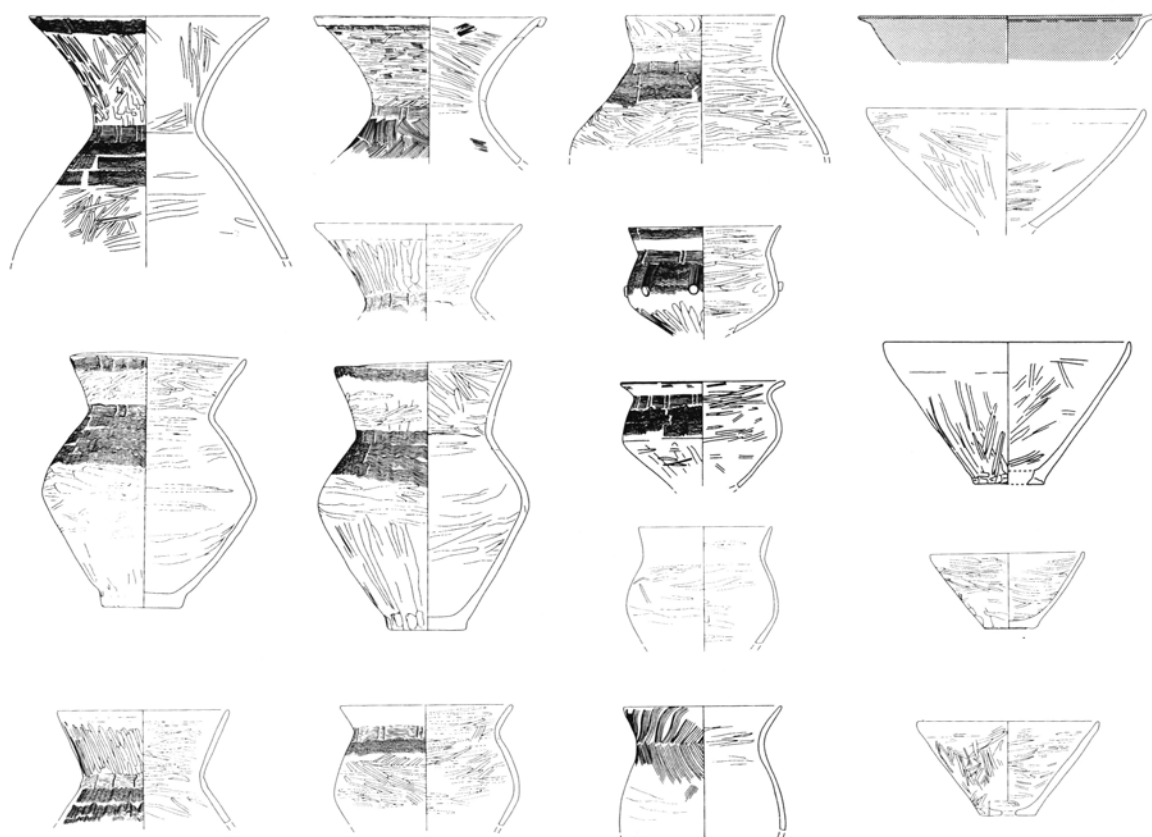
上記で検討した壺と甕の型式組列を基軸にすえ、住居での共伴関係のパターンと他器種の形態的特徴を参考にして4時期区分を試みた。各時期の器種組成モデルを第800～803図に掲げる。

1期 1段階の壺・甕を主体とし、2段階が少数含まれる。高杯は1段階のものに限られる。鉢はB1、有孔鉢はA1が見られる。壺・甕の器形はいずれも胴部が強く張り出し、口縁・肩部・胴下半部の断面形状は直線を基調とする。この傾向は高杯や鉢にも共通し、湾曲する形状は見られない。器種組成は壺・甕・高杯・鉢・台付甕・短頸壺・有孔鉢・蓋からなる。片口・注口鉢については不明。C80住では佐久地方の「箱清水式」系甕⁽²¹⁾E3類が伴っており注目される。

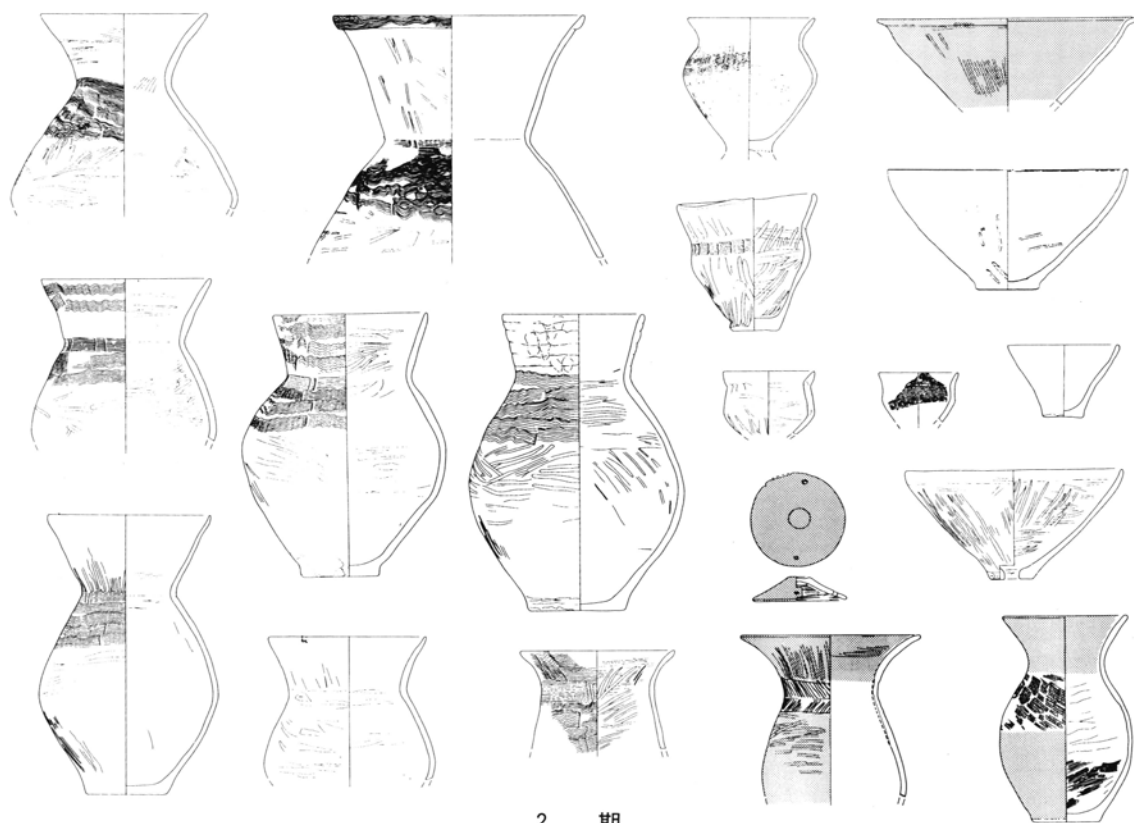
2期 2段階の壺・甕を主体とし、高杯は1段階が主で2段階のものが少数出現する。口縁上半に波状文を施す甕も残るが、口縁形状は直線状かやや外反する2段階に移行している。壺・甕の胴部は1期に比べてやや膨らみ曲線的になる。器種組成には甕A1c類・B類・小壺・小型鉢が新たに加わる。外来系では壺D1類、甕E1類が共伴している。またC10住ではII群の壺B1類が伴っており、縄文施文系土器の出現を示す。

3期 壺・甕は3段階、高杯は2段階を主体とする。器形全体が曲線的となり、口縁も湾曲するものが主流となる。器種組成では2段階に比べて小型高杯・小型鉢・小型台付甕・小壺等の小型器種が目立つ。前時期に続いて甕のほかにT字文をもつ箱清水式系の壺が伴う。II群土器とIII群土器が増加し土器組成の一面を占める。新たにIII群土器が出現し、C57住の甕B類(南関東系の台付甕か)やC324住の小型器台B類の存在が

第5章 ま と め

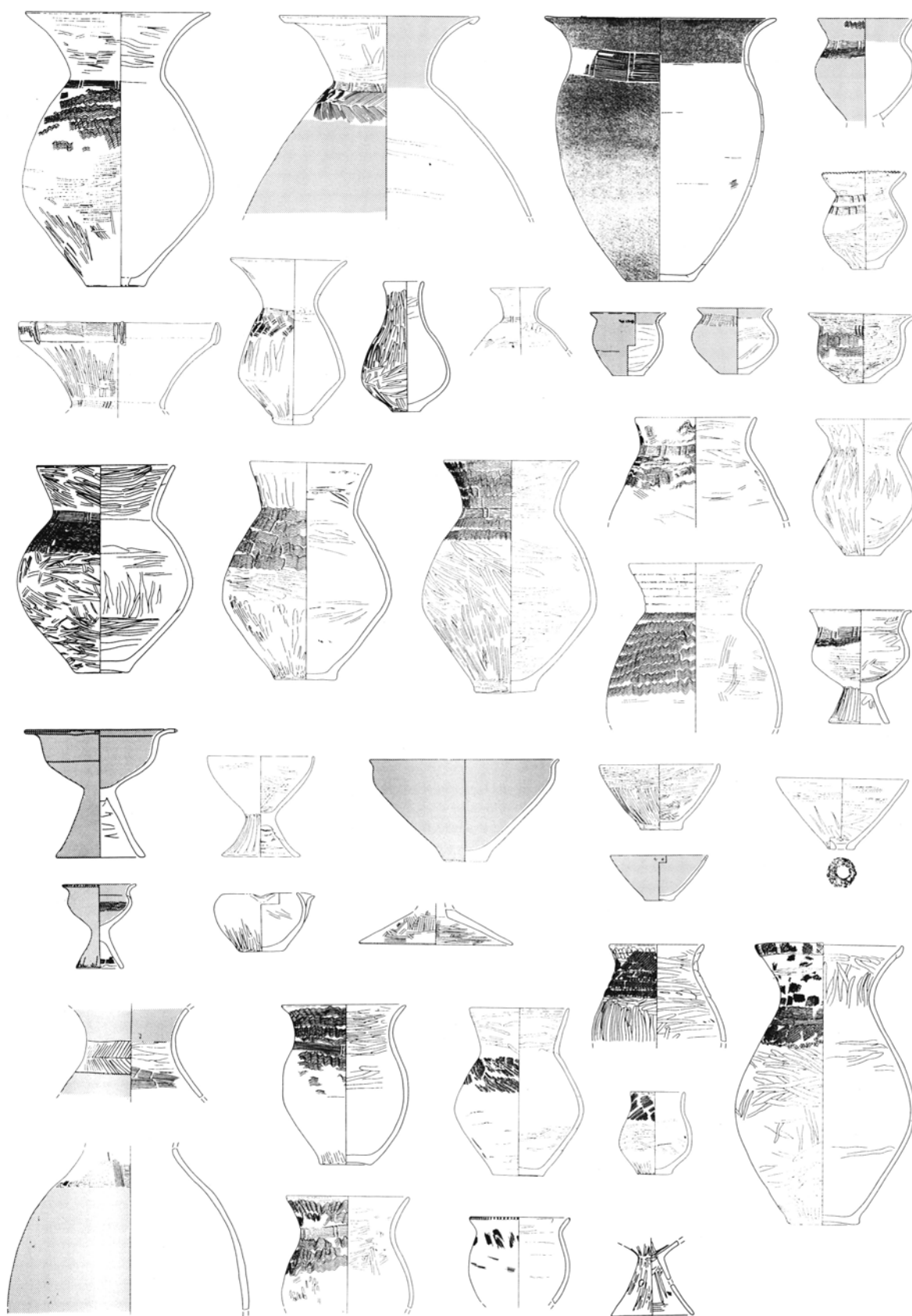


1 期

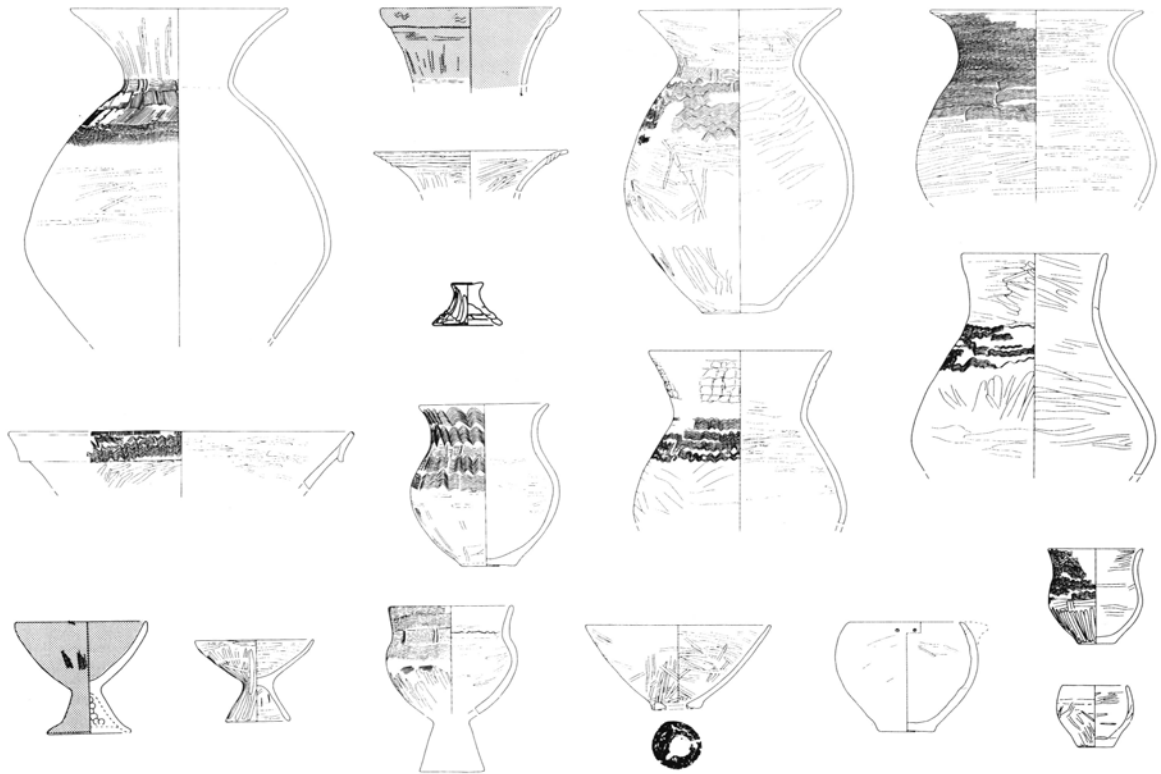


2 期

第800図 1・2期の土器



第801図 3期(古)の土器



第802図 3期(新)の土器

注目される。なお、本時期は更に新旧2時期に細分される可能性がある。壺では新たに出現した外側に口縁を付加するB 1類や多段口縁のC 3類、甕では球胴化の進んだもの、脚裾部の外反する高杯や小型の高杯が新段階に位置付けられよう(第802図)。ただし、住居一括遺物の共伴関係では両者が混在しており、どちらかが主体をなす例も判明しなかったため、ここでは時期細分を保留した。

4期 壺・甕は4段階を主とする。高杯は3段階が主体だが、2段階も少なからず伴う。器形は全器種を通じて曲線的な形状となり、壺・甕では張り出しのない球形が主流を占める。高杯のなかで、III群の高杯や器台の影響と思われる円孔を脚部に穿つ例が見られる。鉢はB 2類に限られ、3期に比べてより浅いものが主流となっている。有孔鉢はA 1類からA 2類主体となる。器種組成に前時期からの大きな変化は見られないが、III群土器の共伴例が目立ち、その中でも北陸系土器の存在が注目される。またIII群の高杯はこの時期から確実に伴っており、土器における全国的な斉一化が始まった段階であることを伺わせる。

以上の編年観によれば、甕A1b・A2b類は1期に出現して以来、2～4期を通して主体を占めており、口縁全体に波状文を描くA1c・A2c類や口縁に粘土帯を残すB類はこれと共存する客体的存在といえる。また甕A 5・B 4・C 4類とした無文の甕類は少数ながら1期から存在しており、4期において増加傾向を見せる。この現象を当該時期におけるIV群の外来系無文土器の影響と捉えることもできようが、その場合外来系無文土器の模倣ではなく、徐々に進行していた施文形骸化の現れと考えるべきで、その背景には文様に表徴される地域の伝統あるいはシンボルが重要でなくなり意味を失っていく地域社会内部の変化を見て取ることも可能だろう。「銘々器」(佐原1983)あるいは「個人用食器」(都出1982)といわれる小型鉢と小型高杯及び本報告で「小壺・小甕」として扱った小型容器は2期から出現し、3・4期に急増する。この現象は中高瀬観音山遺跡においても同様に見られた(大木1995)。また高杯や鉢を中心とした赤色塗彩については1～4期